空港南部工業団地
埋蔵文化財調査報告書1

－ 山武郡芝山町古宿・上谷遺跡 －

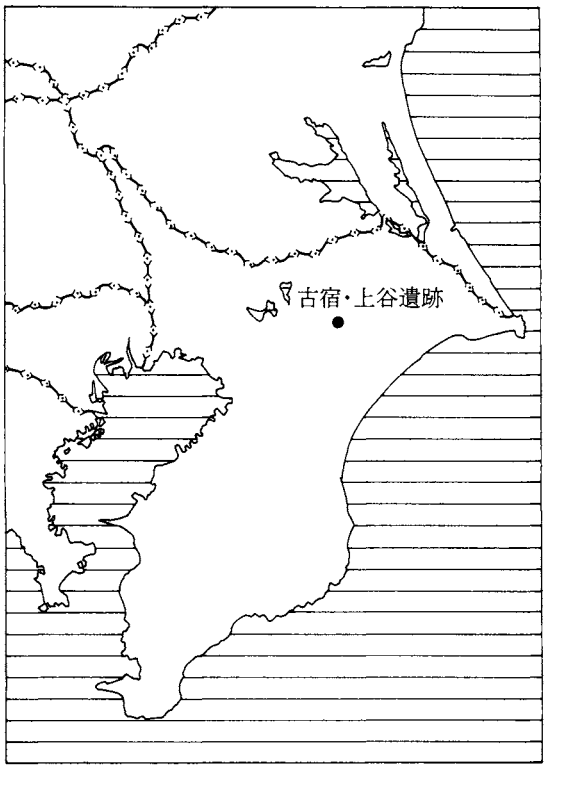
平成10年3月

千葉県企業庁

財団法人　千葉県文化財センター

空港南部工業団地
埋蔵文化財調査報告書1

－山武郡芝山町古宿・上谷遺跡－



序　文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第320集として、千葉県企業庁の空港南部工業団地造成事業に伴って実施した山武郡芝山町古宿・上谷遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文時代や古墳時代の集落及び中世の墓地など、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また文化財の保護、普及のための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係者の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成10年３月31日

財団法人千葉県文化財センター
理事長　　中村　好成

凡　例

1　本書は、千葉県企業庁による空港南部工業団地造成に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は以下のとおりである。

古宿・上谷遺跡（遺跡コード409-017）　　千葉県山武郡芝山町岩山字古宿

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県企業庁の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。

4　発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。

5　本書の執筆は、成田調査事務所（現東部調査事務所）主任技師岡田光広と成田調査室長鳴田浩司が担当し、編集は鳴田が行った。

6　中近世陶器については瀬戸市埋蔵文化財センター藤澤良祐氏に、また、近世陶磁器については豊島区遺跡調査会鈴木裕子氏に御教示いただいた。

7　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県企業庁東総建設事務所、芝山町教育委員会の御指導、御助言を得た。

8　本書に使用した地形図は、下記のとおりである。

第１図　　芝山町発行　１/2,500都市計画図（№５、９、10、13、14）

第２図ほか　千葉県企業庁作成　1/500

第４図　　国土地理院発行　１/50,000「成田」(NI-54-19-10)

9　周辺航空写真は、京葉測量株式会社による昭和58年撮影のものを使用した。

10　本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

また、特に図面上に方位の記載がない場合は、図の上が北となる。

11　本書で使用しているスクリーントーンは以下の通りである。

〔遺構〕

炉火床部

カマド袖

カマド火床部

焼土塊

砂塊

地下式坑
ローム天井崩落土

〔遺物〕

繊維土器

石器擦痕

石器敲打痕

土師器黒色処理

本　文　目　次

第１章　はじめに……1
　第１節　調査の概要……1
　　1　調査の経緯と経過……1
　　2　調査の方法……2
　　3　層序……6
　第２節　遺跡の位置と環境……7
第２章　古宿・上谷遺跡の調査……17
　第１節　旧石器時代……17
　　1　第１文化層と出土遺物……17
　　2　第２文化層と出土遺物……17
　　3　第３文化層と出土遺物……34
　　4　その他の出土遺物……46
　第２節　縄文時代……48
　　1　竪穴住居跡と出土遺物……48
　　2　炉跡……70
　　3　陥穴……71
　　4　土坑と出土遺物……75
　　5　グリッド出土遺物……115
　第３節　古墳時代……138
　　1　竪穴住居跡と出土遺物……138
　　2　グリッド出土遺物……173
　第４節　中近世……174
　　1　遺構……174
　　2　遺物……218
第３章　まとめ……248
　　1　縄文時代……248
　　2　古墳時代……250
　　3　中近世……251
抄録……巻末

挿　図　目　次

第１図　空港南部工業団地内遺跡位置図およびグリッド配置図……３～４
第２図　古宿・上谷遺跡年度別調査地点……５
第３図　土層柱状図……６
第４図　遺跡位置図……８
第５図　Ａ地区縄文時代～中近世遺構配置図……11
第６図　Ｃ地区、Ｄ地区縄文時代～中近世遺構配置図……12
第７図　Ｂ地区古墳時代～中近世遺構配置図13～14
第８図　Ａ地区旧石器時代ブロック配置図……15
第９図　Ｂ地区旧石器時代ブロック配置図……16
第10図　第１ブロック遺物分布図……18
第11図　第１ブロック出土遺物（１）……19
第12図　背面構成の類型……19
第13図　第１ブロック出土遺物（２）……20
第14図　第２ブロック遺物分布図……22
第15図　第２ブロック出土遺物……22
第16図　第３ブロック遺物分布図……24
第17図　第３ブロック出土遺物……25
第18図　第４ブロック器種別遺物分布図……26
第19図　第４ブロック母岩別遺物分布図……27
第20図　第４ブロック出土遺物（１）……28
第21図　第４ブロック出土遺物（２）……29
第22図　第４ブロック出土遺物（３）……30
第23図　第５ブロック遺物分布図……31
第24図　第５ブロック出土遺物……32
第25図　第６ブロック器種別遺物分布図……35
第26図　第６ブロック母岩別遺物分布図……36
第27図　第６ブロック出土遺物（１）……37
第28図　第６ブロック出土遺物（２）……39
第29図　第６ブロック出土遺物（３）……40
第30図　第６ブロック出土遺物（４）……41
第31図　単独出土遺物分布図、実測図……44
第32図　上層遺構出土遺物……45
第33図　Ａ地区縄文時代遺構配置図……47
第34図　D-001住居・出土遺物（１）……49
第35図　D-001住居出土遺物（２）……50
第36図　D-002住居・出土遺物（１）……51
第37図　D-002住居出土遺物（２）……52
第38図　D-002住居出土遺物（３）……53
第39図　D-004住居・出土遺物（１）……55
第40図　D-004住居出土遺物（２）……56
第41図　D-004住居出土遺物（３）……57
第42図　D-005住居・出土遺物……58
第43図　D-006住居……59
第44図　D-007住居・出土遺物（１）……60
第45図　D-007住居出土遺物（２）……61
第46図　D-008住居……62
第47図　D-012住居・出土遺物……62
第48図　D-026住居・出土遺物……64
第49図　D-027住居・出土遺物……64
第50図　D-028住居・D-029住居……65
第51図　D-029住居出土遺物……65
第52図　D-030住居・出土遺物（１）……66
第53図　D-030住居出土遺物（２）……67
第54図　D-031住居……68
第55図　D-032住居……68
第56図　D-033住居・出土遺物……69
第57図　D-009・D-010……70
第58図　陥穴（１）……72
第59図　陥穴（２）……74
第60図　陥穴（３）……75
第61図　縄文時代土坑（１）……76
第62図　縄文時代土坑（２）……78
第63図　縄文時代土坑（３）……80
第64図　縄文時代土坑（４）……82
第65図　縄文時代土坑（５）……84
第66図　縄文時代土坑（６）……88
第67図　縄文時代土坑（７）……90

第68図　縄文時代土坑(８)……92
第69図　縄文時代土坑(９)……94
第70図　縄文時代土坑(10)……96
第71図　土坑出土土器(１)……98
第72図　土坑出土土器(２)……99
第73図　土坑出土土器(３)……100
第74図　土坑出土土器(４)……102
第75図　土坑出土土器(５)……104
第76図　土坑出土土器(６)……106
第77図　土坑出土土器(７)……108
第78図　土坑出土土器(８)……110
第79図　土坑出土土製品……110
第80図　土坑出土石器(１)……111
第81図　土坑出土石器(２)……112
第82図　グリッド出土縄文土器(１)……113
第83図　グリッド出土縄文土器(２)……114
第84図　グリッド出土縄文土器(３)……116
第85図　グリッド出土縄文土器(４)……117
第86図　グリッド出土縄文土器(５)……118
第87図　グリッド出土縄文土器(６)……119
第88図　グリッド出土縄文土器(７)……121
第89図　グリッド出土縄文土器(８)……122
第90図　グリッド出土土製品……124
第91図　グリッド出土縄文時代石器(１)……126
第92図　グリッド出土縄文時代石器(２)……127
第93図　グリッド出土縄文時代石器(３)……128
第94図　グリッド出土縄文時代石器(４)……129
第95図　グリッド出土縄文時代石器(５)……130
第96図　グリッド出土縄文時代石器(６)……131
第97図　グリッド出土縄文時代石器(７)……132
第98図　Ｂ地区古墳時代遺構配置図……135～136
第99図　Ｃ地区、Ｄ地区古墳時代遺構配置図…137
第100図　D-011住居・出土遺物……139
第101図　D-013住居・出土遺物……141
第102図　D-014住居・出土遺物……142
第103図　D-015住居・出土遺物……143
第104図　D-016住居……145
第105図　D-016住居出土遺物(１)……146
第106図　D-016住居出土遺物(２)……148
第107図　D-017住居……149
第108図　D-017住居出土遺物……150
第109図　D-018住居・出土遺物……152
第110図　D-019住居……154
第111図　D-019住居出土遺物(１)……156
第112図　D-019住居出土遺物(２)……157
第113図　D-020住居……159
第114図　D-020住居出土遺物……161
第115図　D-021住居・出土遺物(１)……163
第116図　D-021住居出土遺物(２)……164
第117図　D-022住居……165
第118図　D-022住居出土遺物……166
第119図　D-023住居・出土遺物……167
第120図　D-024住居・出土遺物(１)……168
第121図　D-024住居出土遺物(２)……169
第122図　D-025住居・出土遺物(１)……171
第123図　D-025住居出土遺物(２)……172
第124図　表面採集遺物……173
第125図　Ａ地区中近世遺構配置図……176
第126図　Ｂ地区中近世遺構配置図……177～178
第127図　Ｃ地区、Ｄ地区中近世遺構配置図……179
第128図　掘立柱建物跡(H-01,02)……180
第129図　掘立柱建物跡(H-03,04)……181
第130図　掘立柱建物跡(H-05,06,07)……183～184
第131図　掘立柱建物跡(H-06,07)……185
第132図　掘立柱建物跡(H-08)……187
第133図　掘立柱建物跡(H-09)……188
第134図　掘立柱建物跡(H-10,11)……189
第135図　掘立柱建物跡(H-11)……190
第136図　掘立柱建物跡(H-12,13)……191
第137図　地下式坑(１)……193
第138図　地下式坑(２)……195
第139図　地下式坑(３)……197
第140図　地下式坑(４)……198
第141図　地下式坑(５)……200

第142図　地下式坑(６)……201
第143図　粘土貼土坑……203
第144図　井戸……206
第145図　中近世土坑(１)……208
第146図　中近世土坑(２)……209
第147図　中近世土坑(３)……210
第148図　廃棄土坑……211
第149図　中近世土坑(４)……213
第150図　中近世土坑(５)……214
第151図　中近世土坑(６)……215
第152図　中近世土坑(７)……216
第153図　中近世土坑(８)……217
第154図　中近世土師質土器(カワラケ・火鉢)…219
第155図　中世陶磁器(古瀬戸・青磁)……222
第156図　中世陶器・土師質土器……223
第157図　近世陶器……224
第158図　近世陶器・磁器・土師質土器・土製品
……225
第159図　中近世砥石(１)(遺構内出土)……227
第160図　中近世砥石(２)(遺構内・表採・グリッド一括)……228
第161図　中近世砥石(３)(グリッド一括)……229
第162図　中近世砥石(４)(グリッド一括)……230
第163図　中近世砥石(５)(グリッド一括)……231
第164図　中近世石製品(遺構内出土)……232
第165図　銭貨拓影図(１)……233
第166図　銭貨拓影図(２)……234
第167図　銭貨拓影図(３)……235
第168図　銭貨拓影図(４)……236
第169図　縄文時代遺構出土土器……249
第170図　Ｂ地区南土坑墓群……258
第171図　Ｂ地区南土坑墓群エレベーション……259
第172図　Ｃ地区(中近世遺構配置図)図……260
第173図　Ｂ地区北中近世遺構配置図(部分)… 265～266

表　目　次

第１表　古宿・上谷遺跡発掘調査面積一覧……１
第２表　空港南部工業団地内埋蔵文化財調査組織表 … ２
第３表　第１ブロック出土石器属性表……21
第４表　第１文化層組成表……21
第５表　第２ブロック出土石器属性表……23
第６表　第３ブロック出土石器属性表……25
第７表　第４ブロック出土石器属性表……30
第８表　第５ブロック出土石器属性表……33
第９表　第２文化層全体ブロック別石材組成表…33
第10表　第２文化層全体ブロック別器種組成表…34
第11表　第２文化層全体石材別器種組成表……34
第12表　第６ブロック出土石器属性表(１)……42
第13表　第６ブロック出土石器属性表(２)……43
第14表　第３文化層全体石材別器種組成表……43
第15表　単独出土石器属性表……45
第16表　上層遺構出土石器属性表……45
第17表　縄文時代石器計測表(１)……133
第18表　縄文時代石器計測表(２)……134
第19表　中近世遺構数……175
第20表　主要中近世土坑一覧……238
第21表　中近世陶磁器・土器一覧表……241
第22表　砥石一覧……244
第23表　銭貨一覧……245
第24表　鉄滓計測表……247
第25表　地点別土器・陶磁器出土量……252
第26表　Ｂ地区南瀬戸製品分類表……253

図　版　目　次

図版１　遺跡周辺航空写真

図版２　１　調査前近景　　２　調査前近景
　　３　確認調査近景

図版３　１、２　第１ブロック遺物出土状況
　　３　第１ブロック土層断面

図版４　１　Ａ地区縄文時代遺構
　　２　D-001　　３　D-001炉跡

図版５　１　D-002　　２～４　D-002炉跡
　　５　床面出土遺物

図版６　１　D-004　　２　D-004炉跡
　　３　D-005遺物出土状況

図版７　１　D-005　　２　D-005炉跡
　　３　D-006

図版８　１　D-007遺物出土状況
　　２　D-007　　３　D-008

図版９　１　D-012　　２　D-026土層断面
　　３　D-026

図版10　１　D-028　　２　D-029
　　３　D-030

図版11　１　K17グリッド付近土坑群
　　２　Ａ地区土坑群

図版12　１　P-003　　２　P-011　　３　P-012
　　４　P-017　　５　P-019　　６　P-023
　　７　P-024　　８　P-025

図版13　１　P-027　　２　P-032　　３　P-034
　　４　P-040　　５　P-048　　６　P-050
　　７　P-052　　８　P-053

図版14　１　P-055　　２　P-118　　３　P-119
　　４　P-120　　５　P-121　　６　P-123
　　７　P-124　　８　P-130

図版15　１　P-188　　２　P-331　　３　P-332
　　４　P-335　　５　P-336　　６　P-342･343
　　７　P-345　　８　P-353

図版16　１　P-356　　２　P-363　　３　P-364･369
　　４　P-365　　５　P-375　　６　P-379
　　７　P-380　　８　P-382

図版17　１　P-567　　２　P-498　　３　P-568
　　４　P-567　　５　P-568　　６　P-568
　　７　P-733

図版18　１　P-033　　２　P-058　　３　P-071
　　４　P-073　　５　P-116　　６　P-223
　　７　P-226　　８　P-373

図版19　１　D-011　　２　D-011カマド
　　３　D-013

図版20　１　D-014　　２　D-015
　　３　D-015遺物出土状況

図版21　１　D-016　　２　D-017
　　３　D-018

図版22　１　D-019　　２　D-020
　　３　D-021炭化材出土状況

図版23　１　D-021カマド　２　D-021
　　３　D-022

図版24　１　D-023　　２　D-024
　　３　D-025

図版25　１　P-047　　２　Ａ地区南端
　　３　H-10・11

図版26　１　廃棄土坑五輪塔出土状況
　　２　P-173･174　　３　P-178，M-19

図版27　１　H-05･06･07　２　H-03･04
　　３　H-06

図版28　１　Ｂ地区南墓坑群　２　Ｂ地区南墓坑群
　　３　Ｃ地区墓域

図版29　１　H-01　　２　H-09　　３　H-12

図版30　１　P-061　　２　P-062　　３　P-063

図版31　１　P-067　　２　P-070
　　３　P-072馬骨出土状況　　４　P-072

図版32　１　P-091　　２　P-091石造物出土状況
　　３　P-097　　４　P-163

図版33　1　P-175　2　P-177　3　P-178
図版34　1　P-182遺物出土状況
2　P-182・183　3　P-191
図版35　1　P-057　2　P-059　3　P-075
4　P-077　5　P-078　6　P-086
7　P-093　8　P-095・096
図版36　1　P-098　2　P-099　3　P-107
4　P-109　5　P-112　6　P-114
7　P-129　8　P-131
図版37　1　P-139　2　P-146　3　P-189
4　P-192　5　P-193　6　P-222
7　P-221　8　P-313
図版38　1　P-257・258・259　2　P-592
3　M-013　4　M-014　5　火葬施設
6　火葬施設
図版39　第１ブロック出土石器（１）
図版40　第１ブロック出土石器（２）、第２ブロック出土石器、第３ブロック出土石器
図版41　第４ブロック出土石器（１）
図版42　第４ブロック出土石器（２）
図版43　第４ブロック出土石器（３）、第５ブロック出土石器
図版44　第６ブロック出土石器（１）
図版45　第６ブロック出土石器（２）
図版46　第６ブロック出土石器（３）
図版47　単独出土石器、上層遺構出土石器
図版48　D-001・002住居出土遺物
図版49　D-002住居出土遺物
図版50　D-004住居出土遺物
図版51　D-004・005住居出土遺物
図版52　D-007・026住居出土遺物
図版53　D-012・027・030住居出土遺物
図版54　D-033住居出土遺物，土坑群出土土器（１）
図版55　土坑群出土土器（２）
図版56　土坑群出土土器（３）
図版57　土坑群出土土器（４）
図版58　土坑群出土土器（５）
図版59　土坑群出土土器（６）
図版60　土坑群出土土器（７）
図版61　土坑群出土土器（８）
グリッド出土縄文土器（３）
図版62　グリッド出土縄文土器（１）
図版63　グリッド出土縄文土器（２）
図版64　グリッド出土縄文土器（４）
図版65　グリッド出土縄文土器（５）
図版66　グリッド出土縄文土器（６）
図版67　グリッド出土縄文土器（７）
図版68　グリッド出土縄文土器（８）
図版69　住居出土土製品、
土坑・グリッド出土土製品
図版70　D-011・013・014・015住居出土遺物
図版71　D-015・016住居出土遺物
図版72　D-016・017住居出土遺物
図版73　D-017・018住居出土遺物
図版74　D-018・019住居出土遺物
図版75　D-019住居出土遺物
図版76　D-019・020住居出土遺物
図版77　D-020・021住居出土遺物
図版78　D-021住居出土遺物
図版79　D-020～024住居出土遺物
図版80　D-024・025住居出土遺物
図版81　D-025住居出土遺物，表面採集遺物
図版82　中近世土師質土器（カワラケ，火鉢）
図版83　土師質・瓦質土器，平碗，縁釉小皿
図版84　直縁皿・卸皿・鉢類，折縁皿・鉢・青磁
図版85　天目茶碗・端反碗，皿・鉢類
図版86　擂鉢，擂鉢・煙硝擂
図版87　壷，甕，茶碗・徳利・香炉
図版88　碗・小杯・徳利，灯明皿
図版89　仏供・合子・平碗・皿・花瓶・碗・土鈴
図版90　石製品
図版91　中近世砥石（１）
図版92　中近世砥石（２）
図版93　銭貨（１）
図版94　銭貨（２）
図版95　銭貨（３）
図版96　銭貨（４）

第１章　はじめに

第１節　調査の概要

１　調査の経緯と経過

千葉県企業庁は、先端技術産業を中心に導入を図る目的指向型の工業団地の造成を、山武郡芝山町岩山に計画した。これを空港南部工業団地といい、千葉新産業三角構想の一プロジェクトとして策定された臨空工業団地の核となるものである。当地は、新東京国際空港の南約１kmで、東京都心からは約60km、千葉市中心部から約30kmに位置する。団地全体面積は、約41.1haで、工業用地面積は、そのうち約31.0haを占める。

まず、事業に先立って昭和58年に千葉県企業庁長から事業地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会文書を千葉県教育委員会あてに提出した。同年千葉県教育委員会教育長名で「縄文土器散布地６か所」がある旨の回答があった。そこで、関係諸機関と協議した結果、現状保存が困難なため記録保存の措置を講ずることとなり、調査は財団法人千葉県文化財センターが担当することとなった。なお、昭和61年には、古宿・上谷遺跡内で新たに追加照会があり、千葉県教育委員会から「古墳時代集落跡１か所」がある旨の回答があった。

事業地は新東京国際空港のすぐ南側に位置するため、開港に当たって大半の民家が移転した跡地となっていた。事業地内には、南より順に古宿・上谷遺跡、大堀切遺跡、上宿遺跡、井森戸遺跡の合計４遺跡が所在する。調査面積および調査組織は、以下の一覧表の通りである。古宿・上谷遺跡及び大堀切遺跡は、調査を完了しているが、上宿遺跡には、若干の未調査地があり、また、井森戸遺跡には全く調査の手が入っていない。ただし、大堀切遺跡、上宿遺跡、井森戸遺跡は事業地内を通過する主要地方道成田松尾線および国道296号線建設に伴って、（財）千葉県文化財センターによって発掘調査が行われており、一部は成果が報告されている[1)]。

第１表　古宿・上谷遺跡発掘調査面積一覧(単位：㎡)

調査年度	対象面積	確認調査		本調査		備考
		上層	下層	上層	下層	
昭和58	3,000	300	120			確認調査のみ
59	3,000			3,000	0	昭和58年度の確認調査結果に基づく本調査
60	35,900	3,590	1,436	10,800	0	昭和60年度の確認調査結果に基づく本調査
61	16,650			14,825	0	昭和60年度の確認調査結果に基づく本調査
63	6,700	390	226	6,700	0	昭和63年度の確認調査結果に基づく本調査
平成２	2,755	275	110	1,200	136	平成２年度の確認調査結果に基づく本調査
合計	48,355	4,555	1,892	36,525	136	発掘面積総計　43,108
		計　6,447		計　36,661		

第２表　空港南部工業団地内埋蔵文化財調査組織表

年度	遺跡名	業務内容	調査部長	部長補佐 (平成５年度より調査課長)	班　長 (平成５年度より所長)	担当職員
昭和58	上宿遺跡 大堀切遺跡 古宿・上谷遺跡	発掘	白石竹雄	岡川宏道 根本　弘	斎木　勝	鈴木定明 鈴木文雄
昭和59	上宿遺跡 大堀切遺跡 古宿・上谷遺跡	発掘	鈴木道之助	岡川宏道 根本　弘	斎木　勝(～9月) 石田廣美(10月～)	鳴田浩司 鈴木文雄
昭和60	古宿・上谷遺跡	発掘	鈴木道之助	岡川宏道 古内　茂	高橋賢一	小久貫隆史 鈴木文雄 小畑　巌
昭和61	古宿・上谷遺跡	発掘	鈴木道之助	岡川宏道 古内　茂	高橋賢一	橋本勝雄 鳴田浩司 新田浩三
昭和62	上宿遺跡	発掘	堀部昭夫	岡川宏道 古内　茂	矢戸三男	永沼律朗 鈴木文雄
昭和63	古宿・上谷遺跡	発掘 整理	堀部昭夫	岡川宏道 古内　茂	矢戸三男	岡田誠造 太田文雄 麻生正信
平成２	古宿・上谷遺跡	発掘	堀部昭夫	阪田正一 佐久間　豊	藤崎芳樹	麻生正信
平成３	上宿遺跡	発掘	天野　努	阪田正一 佐久間　豊	宮　重行	豊田秀治
平成７	古宿・上谷遺跡	整理	西山太郎	沼澤　豊	石田廣美	岡田光広
平成８	古宿・上谷遺跡 大堀切遺跡	整理	西山太郎	古内　茂	石田廣美	鳴田浩司

２　調査の方法

まず、公共座標（第Ⅸ座標系）に従い調査区域に対してグリッドを設定した。方眼の設定に当たっては座標Ｘ＝－29.150、Ｙ＝51.400を起点として、両軸をそれぞれ50m間隔で区切り大グリッドとした。更にグリッドの中を５×５ｍの100個の小グリッドに分割した。大グリッドはＹ軸が北から南に向かって１，２，３，４... 20、Ｘ軸が西から東に向かってＡ，Ｂ，Ｃ，Ｄ,... Ｏという順序で呼称している。すなわち北西隅の大グリッドはＡ１グリッド、逆に南東隅の大グリッドはＯ20グリッドになる。そしてそれらの大グリッド中の小グリッドは北西隅小グリッドを始点にして、Ｙ軸が北から南に向かって00，10，20，...90、Ｘ軸が西から南に向かって00，01，02，03，...09という順序で呼称する。つまり北西隅の小グリッドから南東へと対角線上で見ると00，11，22，...99というように進んでいくことになる。すべてのグリッドは北西隅に打たれた杭にそのグリッドの呼称を付帯させている。つまり先の方眼設定の起点となった座標Ｘ＝－29.150、Ｙ＝51.400はA1－00グリッド北西隅の点となる（第１図）。

なお、このグリッドの設定は事業地内に所在する未調査の井森戸遺跡を除き、上宿遺跡、大堀切遺跡、

第１図　空港南部工業団地内遺跡位置図およびグリッド配置図（1／5,000）

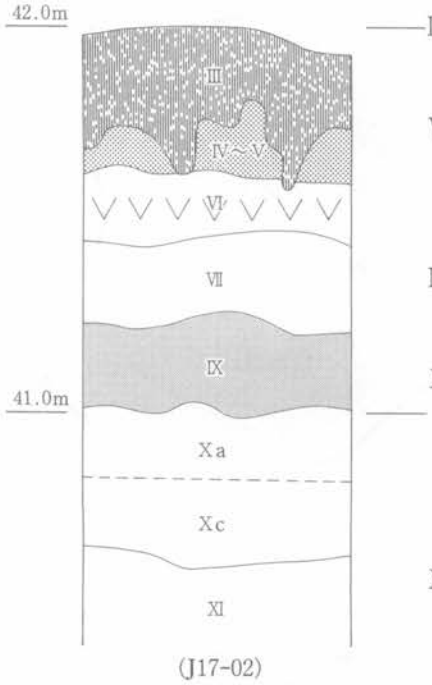
第２図　古宿・上谷遺跡年度別調査地点（1／2,000）

古宿・上谷遺跡の計３遺跡を包含するものであり、従って３遺跡間でグリッド番号が重複することはない。また、先に述べたとおり大堀切遺跡、上宿遺跡、井森戸遺跡はすでに一部が調査されているが、そのとき設定されたグリッドは任意のグリッドであり、今回のものとは異なっている。

発掘調査の方法は、まず上層については10%の、下層については４%の確認調査を実施した。本調査については山林や草地のようなⅡa層が残存している地点については、表土層のみ重機で除去し、後は手作業で掘り進んだ。Ⅱ層が残存していない地点については、Ⅲ層上面まで重機で除去し、遺構の確認を行った。旧石器時代や縄文早期の遺物を出土する包含層がある地点はグリッドごとに遺物を取り上げた。竪穴住居はカマドを基軸に十字のベルトを残して調査し、土層の観察を行った。他の遺構は任意に土層観察用のベルトを残し、調査した。地下式坑などの特殊な遺構は、天井部が一部残存していても、作業上危険がある場合は、それを除去しながら調査したため、図面や写真には天井部を表現できなかったものが多い。中世の墓坑群は確認時にはそのプランがはっきりと認識できず、調査していくに従って次から次に土坑が増えていく状況にあったため、その切り合い関係は全くというほど判断できない。実際は平面図以上に遺構が複雑に切り合っている。年度別の調査地点は第２図のようである。

3　層序

本遺跡の基本層序は、第３図のとおりである。また、各層の概要は、以下のとおりである。なお、この調査が行われた当時、Ⅵ層に含まれる火山ガラスがⅦ層に下方拡散する現象を明確に認識できなかったため、Ⅵ層とⅦ層の区分がはっきりなされなかった。また、武蔵野台地との対比も十分に行われていなかった。そのため土層セクション図も現在認識されているものとはかなり異なっている[2)]。整理作業を行うにあたっては、現在の基本層序になるべく添う形で報告することとした。



第３図　土層柱状図（S＝1／20）

Ⅲ層　黄褐色軟質ローム層。いわゆるソフトローム層。

Ⅳ～Ⅴ層　黄褐色硬質ローム層。主体はⅤ層で、Ⅳ層まで風化が及ぶ。

Ⅵ、Ⅶ層　明黄褐色硬質ローム層。ＡＴをブロック状に含む。上下の層に比べて明るい。調査時はほとんどの地点で合わせてⅥ層とされていたが、可能な限り境界線を推定した。

Ⅸ層　褐色ローム層。調査時はⅦ層とされていた。赤色スコリアを含み、やや暗い。

Ⅹ層　褐色ローム層。調査時はⅧ層とされていた。やや軟質である。Ｘａ層とＸｃ層の区別がなされていないため、これも推定して境界線を入れた。立川ローム最下層である。

XI層　暗灰褐色ローム層。調査時はⅨ層とされていた。粘性に富むが締まりがなく、水分を多く含む。武蔵野ローム最上層である。

第２節　遺跡の位置と環境

山武郡芝山町は新東京国際空港の南東側に南北に細長く伸びる内陸部の町である。北は成田市、東は多古町、南は横芝町、松尾町、山武町そして西は富里町に接している。下総台地の東部に位置し、北辺部は栗山川水系の高谷川や木戸川の水源となり、両河川は北西から南東に向かって流れ、九十九里海岸平野を経て太平洋に注いでいる。事業地は新東京国際空港のすぐ南側に位置し、空港を境に成田市と接する。事業地内には南より順に古宿・上谷遺跡、大堀切遺跡、上宿遺跡、井森戸遺跡の合計４遺跡が所在する。いずれの遺跡も高谷川支流の河川によって開析された小支谷に面した台地上から緩斜面部に立地する。その内古宿・上谷遺跡では台地上で標高42m前後に達する。

芝山町は千葉県内東部地域における埋蔵文化財の宝庫として知られ、隣接する横芝町殿塚、姫塚古墳などの巨大古墳を中心とした古墳群が密集するところであり、古くより多くの遺跡の発掘調査が行われてきた。また、隣接する成田市域でも空港を中心に広大な面積の調査がなされており、近年その様子が解明されつつある。特に、この周辺は旧石器時代から縄文時代早期にかけての遺跡が多いことで知られる[3)]。

旧石器時代の遺跡ではⅨ～Ｘ層中より台形様石器を出土した岩山中袋遺跡（空港No.２遺跡）や御田台遺跡、香山新田中横堀遺跡（空港No.７遺跡）などがあげられる。ⅦからⅥ層の石器群を出土した遺跡では香山新田中横堀遺跡、山田出口遺跡、香山新田新山遺跡（空港No.10遺跡）、遠野台・長津遺跡などがある。Ⅴ層からⅣ層下部の石器群を出土した遺跡では宝永作遺跡、岩山中袋遺跡、小池木戸脇遺跡、井森戸遺跡、香山新田新山遺跡などがある。角錐状石器、ナイフ形石器を主体とし、礫群を伴うことが特徴である。Ⅳ層上部からⅢ層中部の石器群を出土した遺跡では岩山中袋遺跡、香山新田中横堀遺跡、香山新田新山遺跡などがある。ナイフ形石器、尖頭器、東内野型有樋尖頭器を主体としている。Ⅲ層中部からⅢ層上部の石器群を出土した遺跡では香山新田新山遺跡がある。小型化したナイフ形石器を主体とする。Ⅲ層上部の石器を出土した遺跡には小池木戸脇遺跡、香山新田中横堀遺跡、香山新田新山遺跡などがある。これは尖頭器が主体となる。Ⅲ層上面の石器を出土した遺跡では香山新田新山遺跡などがある。細石刃、細石刃石核を主体としている。

縄文時代の遺跡では、天浪浪丘遺跡（空港No.19遺跡）からは田戸上層式の竪穴住居２軒と井草式の時期の竪穴住居１軒が検出されている。天浪大里遺跡（空港No.18遺跡）からは田戸上層式の時期の竪穴住居１軒、香山新田中横堀遺跡からは井草式と子母口式の竪穴住居が検出されたほかに縄文前期と中期の土器が出土している。さらに、東三里塚吉野台遺跡（空港No.３、51、52遺跡）からは早期の竪穴住居９軒と中期の土器が検出されており、空港周辺には早期の竪穴住居群が多く見られる。また、井森戸遺跡では田戸下層式を伴う礫群と茅山式を伴う土坑を検出しているほか、晩期終末期の遺物の出土が特筆される。上宿遺跡からは早期から晩期に至る包含層が検出されているが、特に早期沈線文から条痕文にかけてと、晩期前半に豊富な資料が出土している。また、石鏃製作跡とみられる石器集中地点が検出されている。また、宝永作遺跡からは花輪台式、子母口式土器が出土した。木の根拓美遺跡（空港No.６遺跡）からは稲荷台式～木の根式が出土し、南三里塚宮園遺跡（空港No.４遺跡）でも早期～中期の土器と加曽利Ｅ式の竪穴住居が１軒検出されている。宝永作遺跡では早期～後期までの土器が、山田出口遺跡では中期～後期の遺物が検出されている。

弥生時代の遺跡では芝山町遠野台・長津遺跡で弥生時代中期宮ノ台期、後期印旛・手賀沼期、久ヶ原

第４図　遺跡位置図（1/50,000）

期、弥生町期の住居跡が検出されている。また、御田台遺跡周辺では中期後半から後期中葉の土器が発見されている。

古墳時代の遺跡では木戸川流域に殿塚・姫塚で有名な芝山古墳群、196基の古墳からなる山田宝馬古墳群、高谷川上流には大里田辺台古墳群、大殿台古墳群、大里古墳群、上吹入古墳群がある。一方で、集落遺跡では香山新田中横堀遺跡からは６世紀後半の竪穴住居が、岩山中袋遺跡では13棟の製鉄工房集落が発見されている。後期の集落遺跡では小原子遺跡群、坂志岡・尼ヶ谷遺跡、井森戸遺跡、上宿遺跡などがあげられるが、いずれも竪穴住居の数は少なく、大規模な集落の検出はない。古墳時代後期の大集落は木戸川をやや下った小池地区に見られるようになる。

奈良・平安時代の集落は坂志岡・尼ヶ谷遺跡で竪穴住居が４軒発見されているのみである。古墳時代から奈良・平安時代にかけて周辺に製鉄関連の遺跡が密集して見られる。沖ノ台遺跡では７世紀の鍛冶工房が検出され、箱形の製練炉の存在も確実視されている。香山新田中横堀遺跡では箱形の製練炉をはじめとして鉄滓集中地点、炭窯、炭置場、粘土採掘坑等製鉄関連遺構が検出された。

中世の遺跡には城館跡が多く見られる[4,5,6]。高谷川は栗山川支流の一つであるが、この栗山川は下総の国と上総国との国境となっていた重要な河川である。この河川流域には大小の城館が連続して見られる。特に高谷川右岸には山室氏の飯櫃城、井田氏の大台城、和田氏の山中北・南城が並ぶ。井田氏は文安年間（15世紀半ば）にこの地に土着した。山室氏の客将であった井田刑部大輔がその祖であると言われている。山室氏は山室城を本拠地として、16世紀半ば以降に飯櫃城に、井田氏は田向城、大台城、坂田城に移ったと言われている。井田氏は当初は千葉氏に仕えていたが、16世紀半ば以降は後北条氏と直接被官関係になり、同氏自身も三谷氏・椎名氏・村山氏などの在地領主を被官化させて領域を経営していた。井田氏系の城の充実した縄張り構造は後北条氏の影響であったと考えられる。田向城跡は高谷川支流の舌状台地の先端部に占地する約250ｍ×500ｍの大規模な城である。『総州山室譜伝記』によれば、天文14年（1545）、井田因幡守友胤によって築造され、同17年には大台城を改築して移ったと伝えられている。以降天正18年まで坂田城主井田氏の番城であったと言われている。発掘調査の結果、構造は主要部分が空堀によって２つの曲輪に分かれ、尾根続きに曲輪を配置し、周囲に多数の腰曲輪を造っていることがわかった。中世遺構には掘立柱建物群、空堀23条、方形竪穴建物跡２軒、地下式坑２基、柵列・ピット群・溝などが見られる。遺物にはカワラケ・青磁・染付・瀬戸・常滑・板碑・五輪塔・宝篋印塔・茶臼・鉄鏃・切羽・鉄砲玉・中国銭などが出土している。山室城は『総州山室譜伝記』によれば天文元年（1532）に山室氏が飯櫃城に移ったとされている。発掘調査により16世紀代の瀬戸・美濃産陶器や常滑大甕などが出土しており、16世紀後半まで使われていたようである。飯櫃城には主要な３つの曲輪があり、山室城同様にⅡ・Ⅲ郭が主郭を取り囲むように配置されており、後北条氏の影響と考えられる明確な折り歪みや出升形がある。周囲の低地に「根古屋」や「宿」地名があることや、確認調査ではこの根古屋地区からも16世紀後半の遺物が出土したことから、山室氏が山室城から飯櫃城へ本城を移動した伝承は大筋合っていることがわかった。古宿・上谷遺跡に隣接する岩山城は尾根の先端よりやや奥まった細尾根上に占地する。直線連郭で主格部は標高42m、東西50m、南北20mの楕円形に近いプランで、西側に高さ1.5mの土塁を伴う。縄張りを見ると城内を小さい面積の曲輪に細かく分けて、別々に配置していることから、発掘調査はされていないものの占地地形と合わせて周辺の大規模な城と比較して古い段階に築かれ、使用されたものと考えられている。『総州山室譜伝記』によれば、岩山城は「岩山柵」と見えており、城主は「斉藤助四郎長

谷部清長」とされる。天正18年（1590）後北条氏が滅亡すると、北条氏方の上総・下総の諸将は滅亡し、房総には徳川家康の家臣団が入る。

近世には岩山地区は幕府や旗本の相給地となった。村内には幕府直営の佐倉七牧の１つ取香牧の捕込が設置され、捕馬の時には幕府役人や牧士が来村して宿泊した[7]。

事業地内遺跡

1　古宿・上谷遺跡
2　大堀切遺跡
3　上宿遺跡
4　井森戸遺跡

周辺遺跡

5　岩山中袋遺跡（空港No.２遺跡）
6　御田台遺跡
7　香山新田中横堀遺跡（空港No.７遺跡）
8　山田出口遺跡
9　香山新田新山遺跡（空港No.10遺跡）
10　遠野台・長津遺跡
11　宝永作遺跡
12　小池木戸脇遺跡
13　天浪浪丘遺跡（空港No.19遺跡）
14　天浪大里遺跡（空港No.18遺跡）
15　東三里塚吉野台遺跡（空港No.３、51、52遺跡）
16　木の根拓美遺跡（空港No.６遺跡）
17　南三里塚宮園遺跡（空港No.４遺跡）
18　芝山古墳群
19　山田宝馬古墳群
20　大里田辺台古墳群
21　大殿台古墳群
22　大里古墳群
23　上吹入古墳群
24　小原子遺跡群
25　坂志岡・尼ヶ谷遺跡
26　沖ノ台遺跡
27　岩山城
28　飯櫃城
29　大台城
30　田向城
31　山中北・南城

注１　高橋賢一ほか『主要地方道成田松尾線Ⅳ』　1986年３月　（財）千葉県文化財センター
2　島立　桂、新田浩三、渡辺修一「下総台地における立川ローム層の層序区分」『研究連絡誌　第35号』1992年８月　（財）千葉県文化財センター
3　『芝山町史　通史編　上』　1995年11月　芝山町
4　『芝山町史　資料集２　中世編』　1994年３月　芝山町
5　井上哲朗「房総の領主と城」『房総考古学ライブラリー８　歴史時代２』　1994年　（財）千葉県文化財センター
6　遠山成一「両総国境に分布する城館跡について－栗山川・高谷川水系を中心に－」『千葉城郭研究第３号』1994年
7　竹内理三編『角川日本地名大辞典12　千葉県』　1984年　角川書店

第５図　Ａ地区縄文時代～中近世遺構配置図

第６図　Ｃ地区、Ｄ地区縄文時代～中近世遺構配置図

第７図　Ｂ地区古墳時代～中近世遺構配置図

第８図　Ａ地区旧石器時代ブロック配置図

第9図　B地区旧石器時代ブロック配置図

第２章　古宿・上谷遺跡の調査

第１節　旧石器時代

古宿・上谷遺跡は、調査区のほぼ中央(グリッド杭番号：Ｌ17)付近から、北東、北西、南のそれぞれの方向に突出する台地上に位置している。本節で述べる旧石器時代の石器集中地点(ブロック)は、ほとんどが調査区西側のＡ地区から検出されている。文化層は３枚に分離され、下から順に第１文化層、第２文化層、第３文化層とした。第１文化層からは１ブロック、第２文化層からは４ブロック、第３文化層からは１ブロックの合計６ブロックが検出されている(第８・９図)。

１　第１文化層と出土遺物

第１ブロック(第10～13図、図版３・39・40)

(出土状況)Ａ地区ほぼ中央部、Ｊ17－06・07・16・17区に位置する。

グリッド杭Ｊ17－17付近を中心として、直径４ｍほどの範囲から全部で59点の遺物が出土した。出土層位はいくつか外れているものもあるが、おおむねⅨ層下部からＸ層にかけて集中している。

(遺　　物)全59点の遺物のうち、１点を除いてすべて単一の石材により構成されている。いわゆるトゥールにあたるものは存在せず、いくつかの石刃と剥片類の他は、ほとんどが細かい砕片類である。このことからこのブロックの性格は、製作跡として理解することができよう。

①黒曜石１(１～12、14)　不純物、気泡の混入が著しい不透明な石材で、極めて硬質である。１～６は小型の石刃である。いずれも折断されており、素材であったと考えられる。１には右側縁に加工痕が観察される。３は中央部が折断されたあと、折断部を中心にさらに加工されている。５は先端部に加工痕が観察される。７は二次加工のある剥片である。先端側を折断したあと、左側縁にやや密な加工が施される。８～11は微細剥離痕のある剥片である。これらの剥片には二次加工痕のようなやや大きな剥離痕が観察されるものがあるが、黒曜石の場合同時割れが起きやすいことや、いわゆる調整加工のような連続性が認められないため、二次加工痕ではないとみなした。９、11は複数回にわたる折断が行われている。12は剥片であるが、やはり複数回にわたる折断が行われている。14は接合資料である。正面側を打面とする剥片剥離が繰り返されたあと、最初に14ｂが剥離されている。次に打面を上面側に転移して剥片剥離が繰り返されたあと、右側に打面が転移されて14ａが剥離される。さらに打面を下側に転移して、失われた剥離面を打面とした剥片剥離が繰り返されて14ｃが剥離される。さらに数回の剥片剥離ののち、14ｄが残存する。

②チャート１(13)　濃青灰色を呈する硬質な石材である。13は微細な剥離痕のある剥片である。右側縁に刃こぼれ状の細かい剥離痕が観察される。

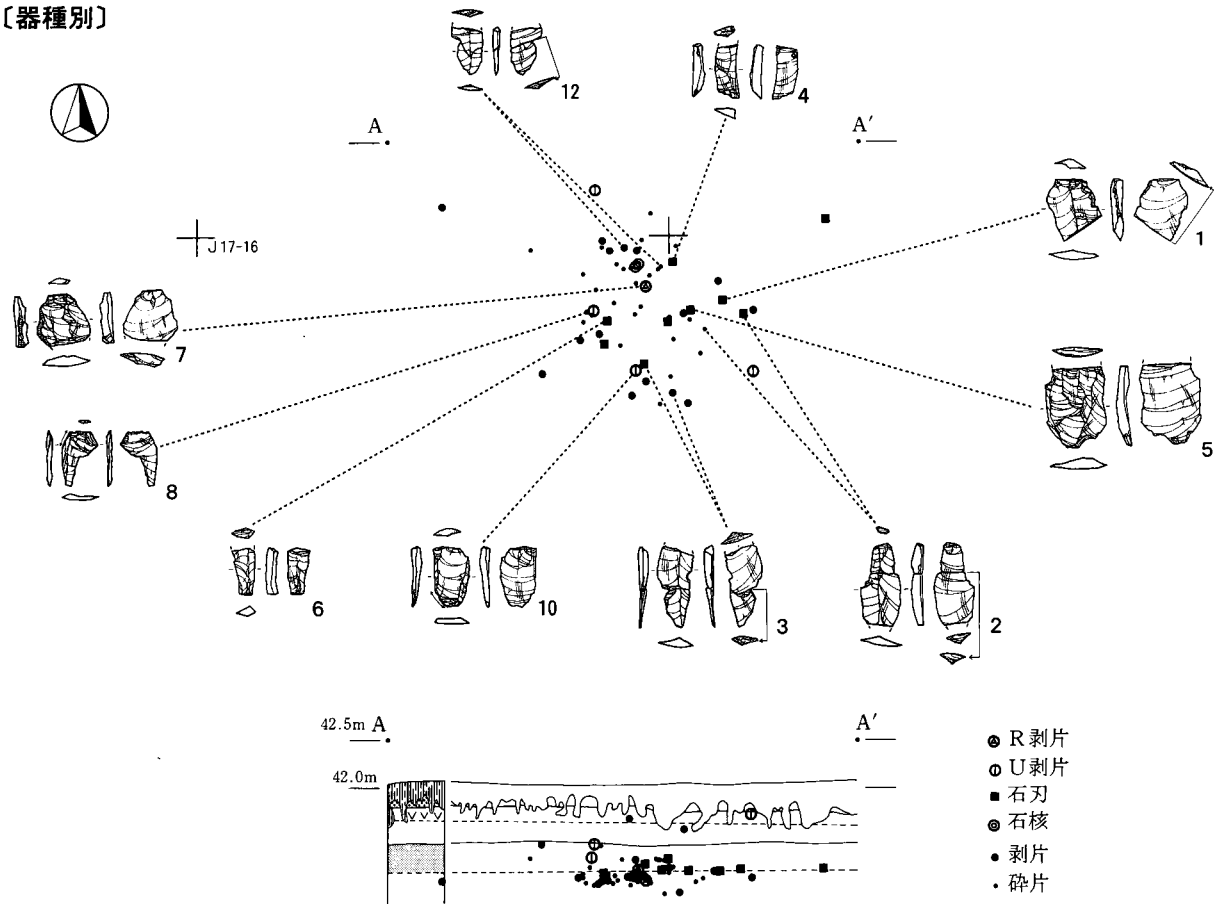
２　第２文化層と出土遺物

第２ブロック(第14・15図、図版40)

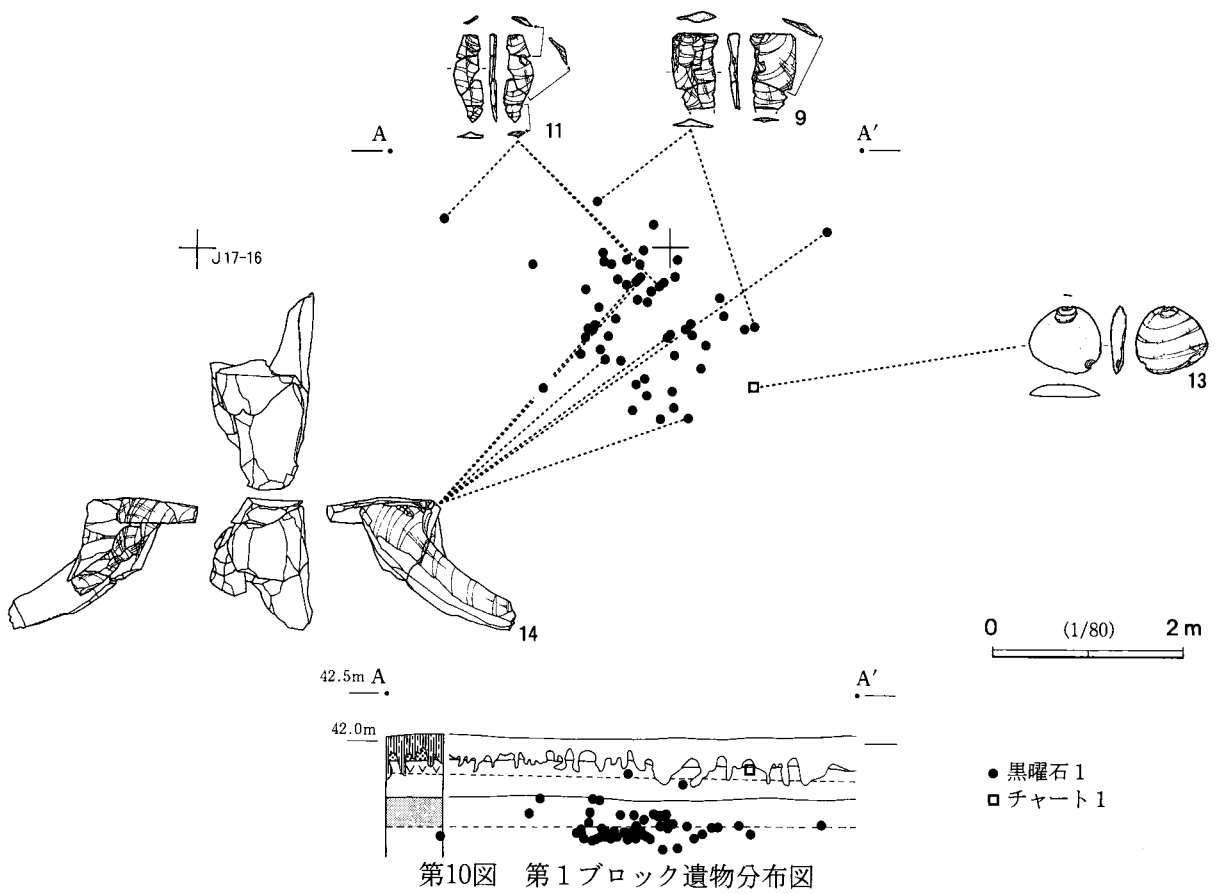
(出土状況)Ａ地区北西部、Ｉ16－69・79区に位置する。

台地縁辺部にあたる。２点のみ出土の散漫なブロックである。やや傾斜しているため分かりにくいが、

〔器種別〕



〔母岩別〕



第10図　第1ブロック遺物分布図

黒曜石１

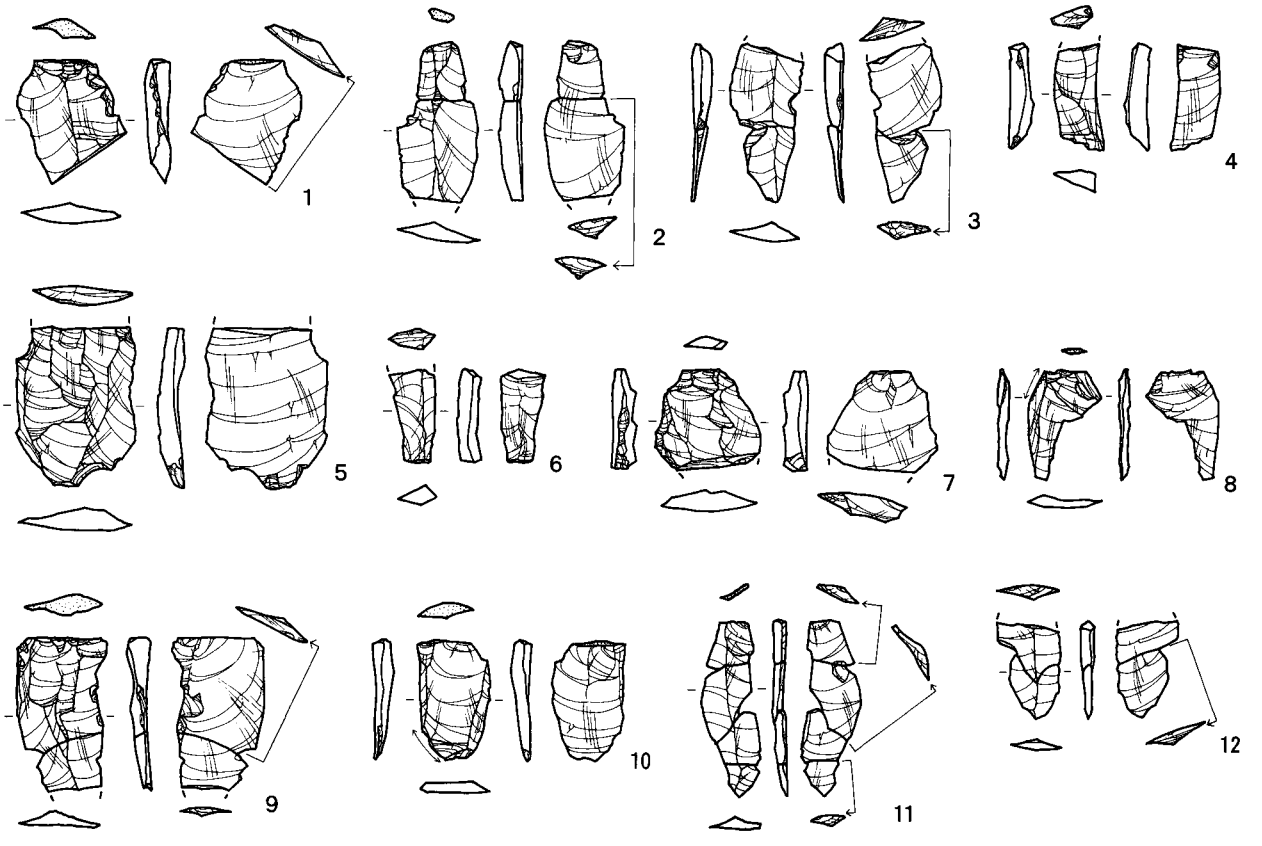
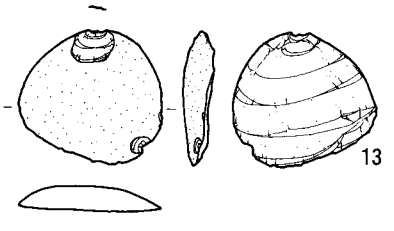
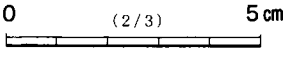
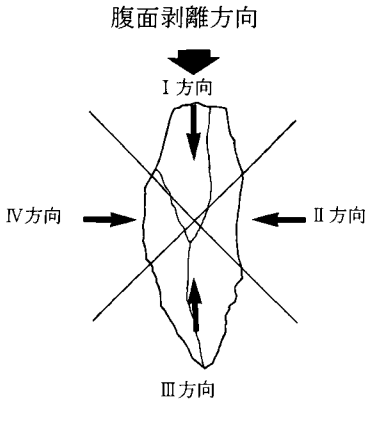


チャート１





第11図　第１ブロック出土遺物（１）



第12図　背面構成の類型

《石器属性表の見方》

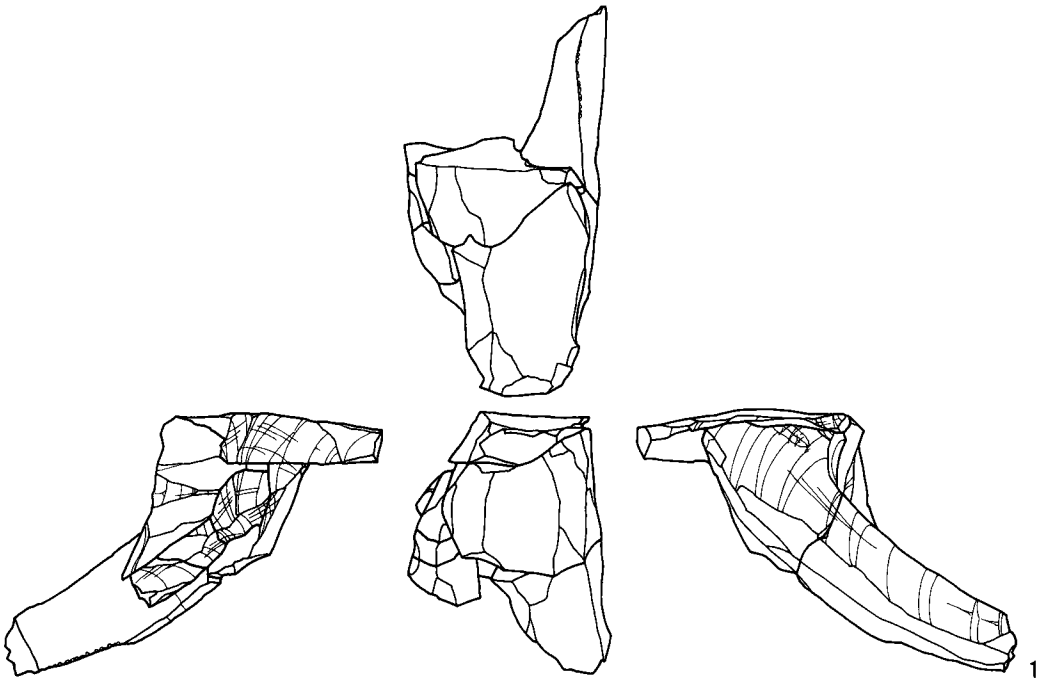
①打面種類　平……平坦剥離面、多……多剥離面、線……線状、
点……点状、C……自然面

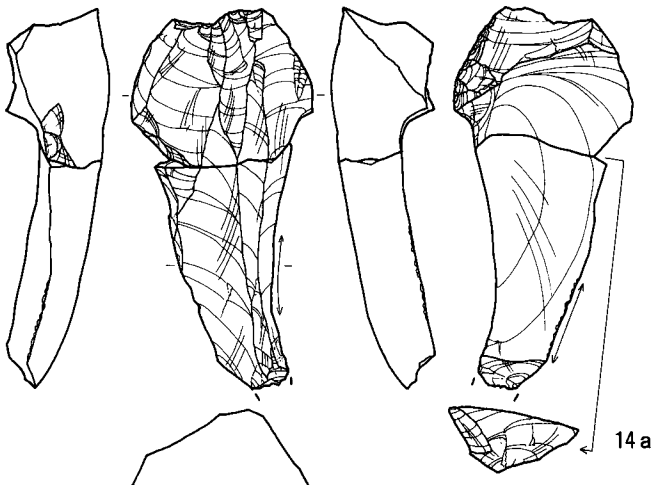
②打面調整・頭部調整　○……行う頻度が高い、×……行わない

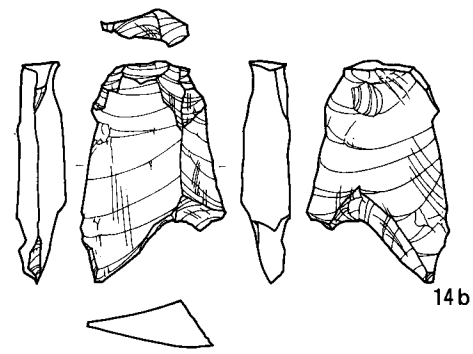
③背面構成は第 12 図参照

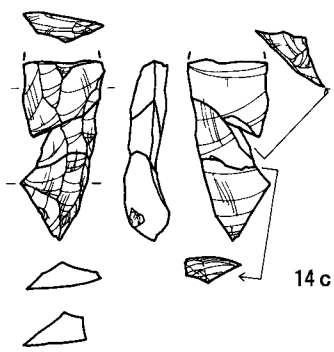
④折面部位　H……打面部、M……中間部、B……末端部、
R……右側、L……左側

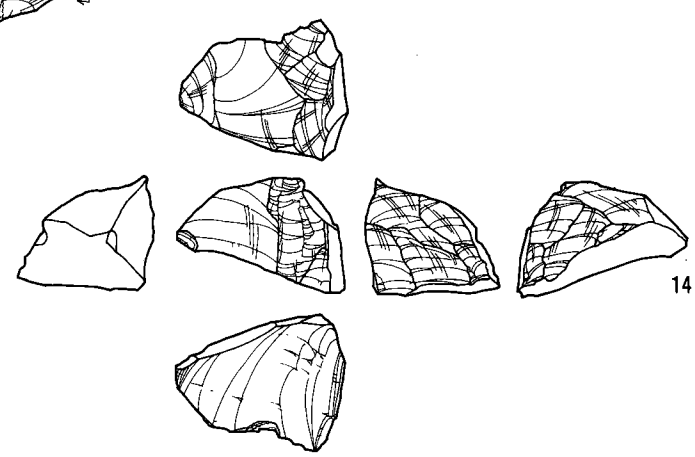
黒曜石１











第13図　第１ブロック出土遺物（２）

0　(2/3)　5cm

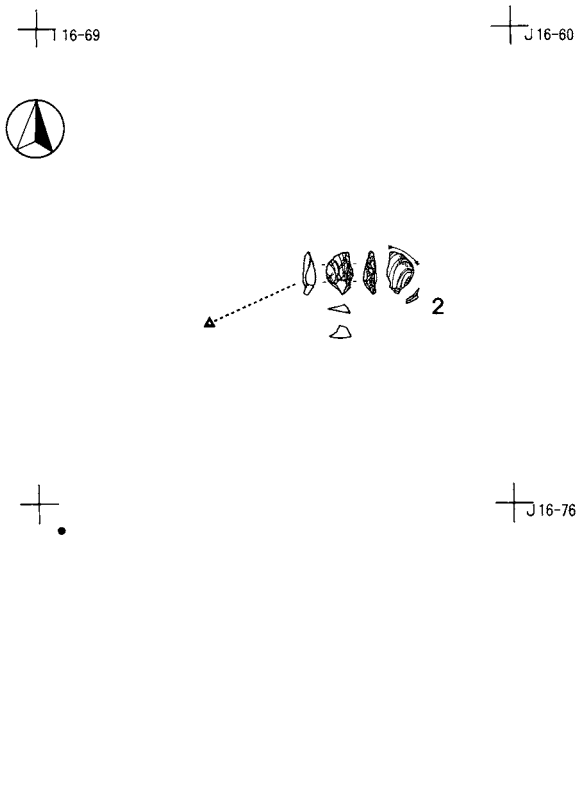
第3表　第1ブロック出土石器属性表

No.	遺物番号	器　種	長さ×幅×厚さ (mm)	重量 (g)	図版番号	打面種類	打面調整	頭部調整	背面構成	打角 (°)	折面部位	母岩番号
1	J17−06−0062	U剥片	22.7×18.5× 4.9	1.3	9	C	×	○	Ⅰ	95	M	黒曜石1
2	0063	剥片	17.0× 8.8× 2.5	0.3	11	−	−	−	Ⅰ		M	黒曜石1
3	J17−07−0053	石刃	14.5×16.0× 7.5	1.3	14c	−	−	−	Ⅰ		H、M	黒曜石1
4	J17−16−0071	剥片	14.0×13.2× 6.8	0.7	14c	−	−	−	Ⅰ		M	黒曜石1
5	0072	剥片	13.6× 9.7× 2.1	0.4		C	×	×	Ⅰ	100	B	黒曜石1
6	0073	U剥片	21.8×14.0× 2.3	0.4	8	C	×	○	Ⅰ、Ⅱ	100		黒曜石1
7	0074	砕片	9.0× 6.1× 0.7	0.1								黒曜石1
8	0075	砕片	13.7×10.0× 1.8	0.2	12	−	−	−	Ⅰ		M	黒曜石1
9	0076	砕片	9.7×11.9× 1.3	0.2								黒曜石1
10	0077	砕片	12.9× 5.7× 1.1	0.1								黒曜石1
11	0078	剥片	16.6×10.2× 2.7	0.4	11	−	−	−	Ⅰ		M	黒曜石1
12	0079	砕片	7.1× 5.3× 1.0	0.1								黒曜石1
13	0080	砕片	9.0× 9.6× 2.5	0.2	11	C	×	○	Ⅰ	100	M	黒曜石1
14	0081	石刃	47.8×46.2×19.0	11.6	14a	−	−	−	Ⅰ、Ⅲ		M	黒曜石1
15	0082	石刃	17.9×14.5× 4.0	0.9	3	−	−	−	Ⅰ		H、M	黒曜石1
16	0083	剥片	27.1×15.1× 5.1	1.0		多	×	○	Ⅰ、Ⅲ	115		黒曜石1
17	0084	石刃	42.8×28.2× 9.9	7.5	14b	多	○	○	Ⅰ、Ⅲ	110		黒曜石1
18	0085	石刃	18.0× 9.0× 5.0	0.7	6	−	−	−	Ⅲ		H	黒曜石1
19	0086	砕片	8.1×11.3× 1.4	0.1								黒曜石1
20	0087	砕片	8.1× 4.1× 0.7	0.1								黒曜石1
21	0088	砕片	8.7× 6.9× 2.1	0.1								黒曜石1
22	0089	石核	30.9×35.6×20.0	16.6	14a	−	−	−	Ⅰ		M	黒曜石1
23	0090	U剥片	23.6×14.1× 4.0	1.1	10	C	×	○	Ⅰ、Ⅲ	110		黒曜石1
24	0091	砕片	7.4× 5.3× 1.5	0.1								黒曜石1
25	0092	剥片	10.0×13.1× 4.1	0.5		線	×	○	Ⅰ		B	黒曜石1
26	0093	剥片	10.4×11.7× 3.2	0.5		C	×	○	Ⅰ	100	B	黒曜石1
27	0094	砕片	5.8× 3.7× 1.1	0.1								黒曜石1
28	0095	砕片	6.0× 8.1× 1.3	0.1								黒曜石1
29	0096	砕片	6.9× 4.6× 1.5	0.1								黒曜石1
30	0097	砕片	8.4× 4.8× 0.8	0.1								黒曜石1
31	0098	砕片	4.4× 4.5× 0.7	0.1								黒曜石1
32	0099	R剥片	20.0×21.2× 5.0	2.0	7	平	×	○	Ⅰ	110	B	黒曜石1
33	0100	石核	22.3×33.4×26.7	12.7	14d							黒曜石1
34	0101	砕片	11.0× 7.4× 2.0	0.1								黒曜石1
35	0102	砕片	2.3× 3.9× 0.7	0.1								黒曜石1
36	0103	砕片	1.5× 8.0× 1.8	0.1								黒曜石1
37	0104	剥片	10.5×12.0× 2.2	0.4		−	−	−	Ⅰ		H、B	黒曜石1
38	0105	剥片	10.0×15.2× 3.1	0.4		C	×	○	Ⅰ	105	B	黒曜石1
39	0108	砕片	9.1× 9.8× 1.5	0.2								黒曜石1
40	0109	砕片	4.4× 4.6× 1.3	0.1								黒曜石1
41	0110	剥片	12.0×12.2× 3.1	0.3	12	−	−	−	Ⅰ		H、M	黒曜石1
42	0111	砕片	6.4× 5.3× 1.2	0.1								黒曜石1
43	J17−17−0063	石刃	21.5×10.0× 5.0	0.9	4	−	−	−	Ⅰ、Ⅳ		H	黒曜石1
44	0064	剥片	17.5×13.8× 8.7	1.4	14c	−	−	−	Ⅰ、Ⅳ		M	黒曜石1
45	0065	砕片	6.2× 9.1× 1.3	0.1								黒曜石1
46	0066	U剥片	26.2×28.1× 6.0	5.1	13	線	×	×	Ⅰ、C			チャート1
47	0067	石刃	21.0×16.0× 4.5	1.3	2	−	−	−	Ⅰ		M、B	黒曜石1
48	0068	石刃	25.0×21.9× 4.9	1.9	1	C	×	○	Ⅰ	100	M	黒曜石1
49	0069	剥片	20.2×12.9× 3.9	0.7		−	−	−	Ⅰ		H	黒曜石1
50	0070	石刃	31.1×23.5× 5.5	3.7	5	−	−	−	Ⅰ、Ⅳ		H	黒曜石1
51	0071	砕片	6.5× 8.7× 1.1	0.1								黒曜石1
52	0072	砕片	11.2×11.4× 3.1	0.3								黒曜石1
53	0073	砕片	5.4× 8.7× 3.5	0.2								黒曜石1
54	0074	剥片	15.5×10.0× 2.8	0.3	3	−	−	−	Ⅰ		M	黒曜石1
55	0075	剥片	11.6×13.5× 3.8	0.3	9	−	−	−	Ⅰ		M、B	黒曜石1
56	0076	砕片	12.0× 9.8× 4.8	0.5	2	C	×	○	Ⅰ	100	M	黒曜石1
57	0077	砕片	5.0× 2.8× 1.7	0.1								黒曜石1
58	0078	砕片	9.0× 6.1× 0.6	0.1								黒曜石1
59	0079	剥片	13.9× 7.4× 2.0	0.2		−	−	−	Ⅰ、Ⅲ		H	黒曜石1

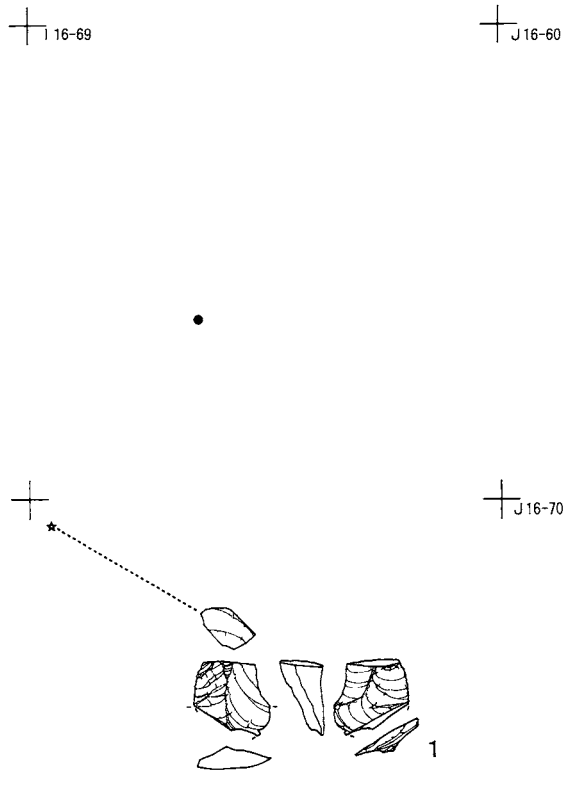
第4表　第1文化層組成表

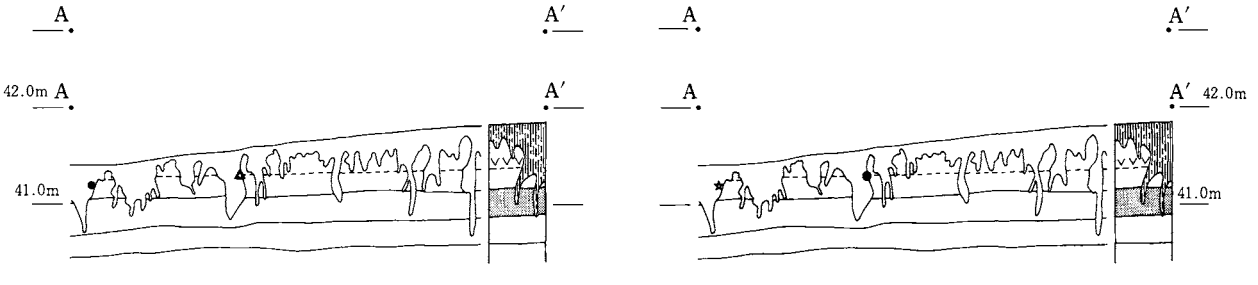
器種 / 石材	石刃	R剥片	U剥片	剥片	砕片	石核	合計	数量比(%)
黒曜石1	9	1	3	15	28	2	58	98.3%
チャート1			1				1	1.7%
合計	9	1	4	15	28	2	59	100.0%
組成比%	15.3%	1.7%	6.8%	25.4%	47.5%	3.4%	100.0%	

〔器種別〕



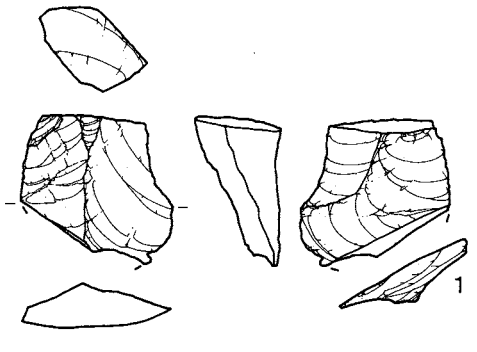
〔母岩別〕



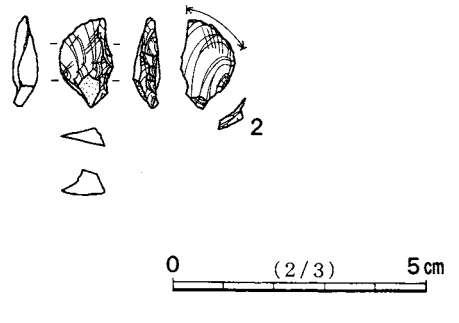


第14図　第２ブロック遺物分布図

安山岩１



黒曜石１



第15図　第２ブロック出土遺物

第５表　第２ブロック出土石器属性表

No.	遺物番号	器種	長さ×幅×厚さ（mm）	重量（g）	図版番号	打面種類	打面調整	頭部調整	背面構成	打角（°）	折面部位	母岩番号
1	I16−69−0007	ナイフ形石器	17.0×10.8× 4.9	0.6	2	平	×	○	I、C	95		黒曜石１
2	I16−79−0018	剥片	28.9×30.1×17.1	9.6	1	平	×	○	I	100	B	安山岩１

おおむねⅥ層下部からⅦ層にかけての出土と考えられる。

（遺　　物）２点出土した遺物はそれぞれ別の石材である。

①黒曜石１（２）　黒色を帯びた半透明なガラス質の石材で、不純物はほとんど混入しない。２はナイフ形石器である。やや小型の横長剥片の先端部を加工して基部とし、右側縁側を刃部としている。

②安山岩１（１）　灰色を帯びた硬質な石材である。表面は細かいが不純物の混入がやや目立つ。１は剥片である。先端部が折断されている。

第３ブロック（第16・17図、図版40）

（出土状況）このブロックのみＢ地区北東側、Ｎ15−05区に位置する。

直径２ｍほどの範囲から４点の石器が出土したほか、隣接するＮ15−14区の表土からもここに帰属するとみられる石刃が出土している。出土層位はⅥ層からⅦ層にかけてである。

（遺　　物）珪質頁岩のみ４種類の石材に分類される。

①珪質頁岩１（３）　淡褐色を呈する硬質な石材である。３は石刃である。先端側が折断されている。右側縁にやや大きな剥離痕が観察されるほかは、特に加工痕は見られない。

②珪質頁岩２（５）　チョコレート色とも言うべき黒色に近い濃褐色を呈する硬質な石材である。５は微細剥離痕のある剥片である。左側縁を中心として細かい剥離痕が観察されるが、連続性は見られず加工痕とは考えにくい。

③珪質頁岩３（１、２）　濃褐色を呈する硬質な石材で、色調は②より薄い。１は石刃である。背面稜線上に、連続した極めて密な加工痕が観察される。２は微細剥離痕のある剥片である。先端から左側縁にかけてやや大きな剥離痕が観察される。

④珪質頁岩４（４）　濃褐色を呈する硬質な石材で、色調は①と③の中間ぐらいである。４は微細剥離痕のある剥片である。左側縁に細かい剥離痕が観察されるほか、背面稜線上にも剥離痕が見られる。

第４ブロック（第18〜22図、図版41〜43）

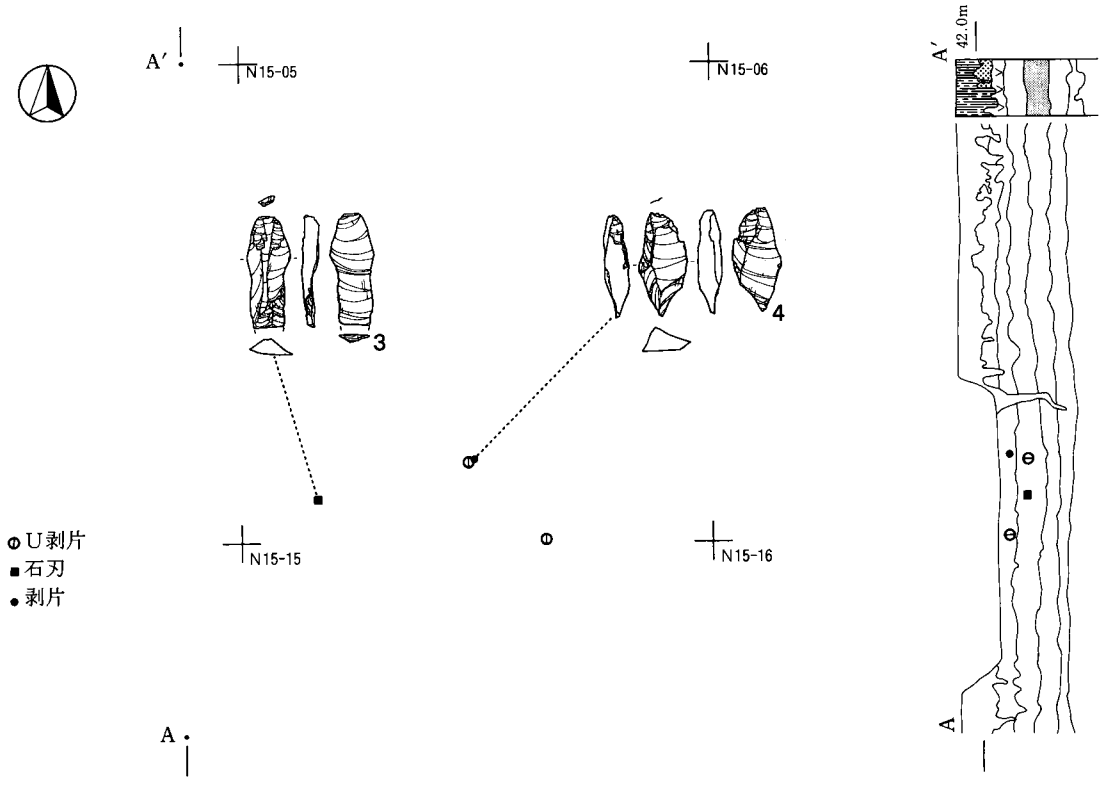
（出土状況）Ａ地区やや北西寄り、Ｊ16−82・83・92・93区に位置し、すぐ東側には第５ブロックが位置している。

直径８ｍほどの範囲に17点の遺物がやや散漫に分布するが、南東部に集中地点が見られる。出土層位はやや上下があるものの、おおむねⅥ層からⅦ層上部にかけてである。

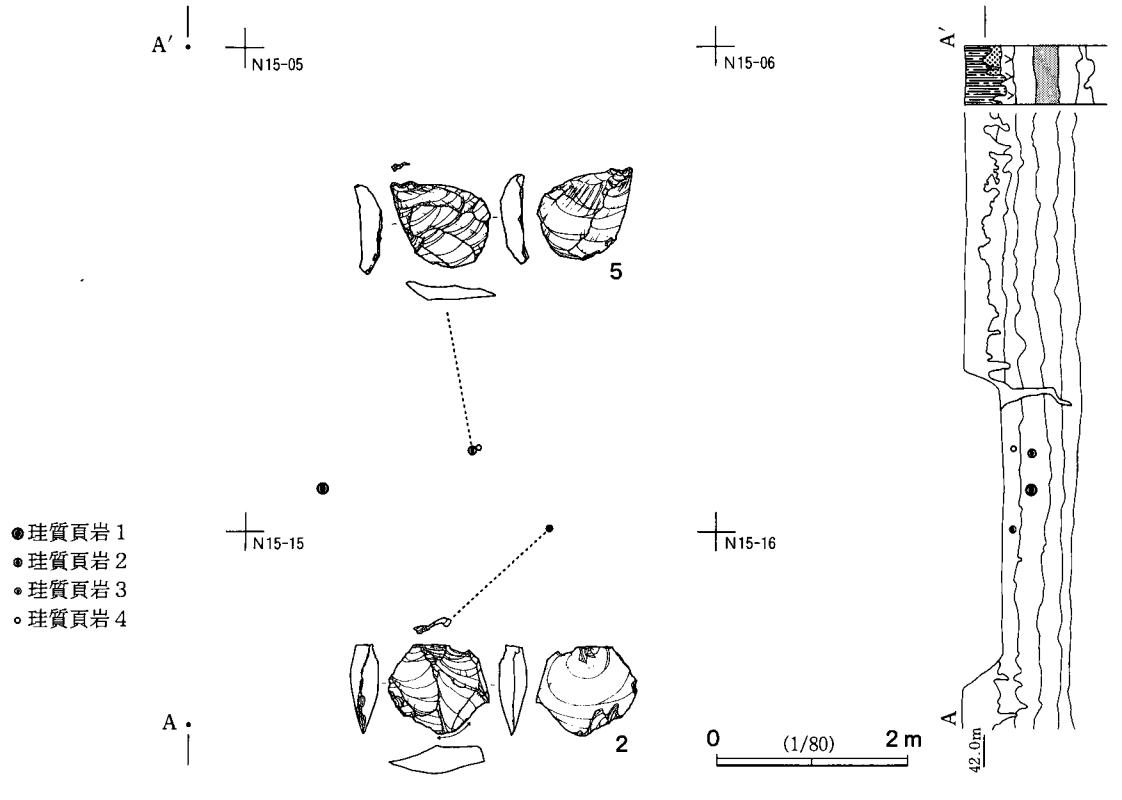
（遺　　物）８種類の石材に分類されるが、中心となるのは珪質頁岩と安山岩である。遺物の説明を行う前に、実測遺物がなかった石材について説明しておく。流紋岩１は乳褐色を呈する硬質な石材で、不純物の混入がやや目立つ。礫が１点出土したのみである。

①珪質頁岩５（１〜４）　若干緑色を帯びた褐色を呈する硬質な石材で、自然面は黄褐色である。１はナイフ形石器である。横長剥片の打面から右側縁にかけて調整加工を施し基部として、先端部を刃部としてい

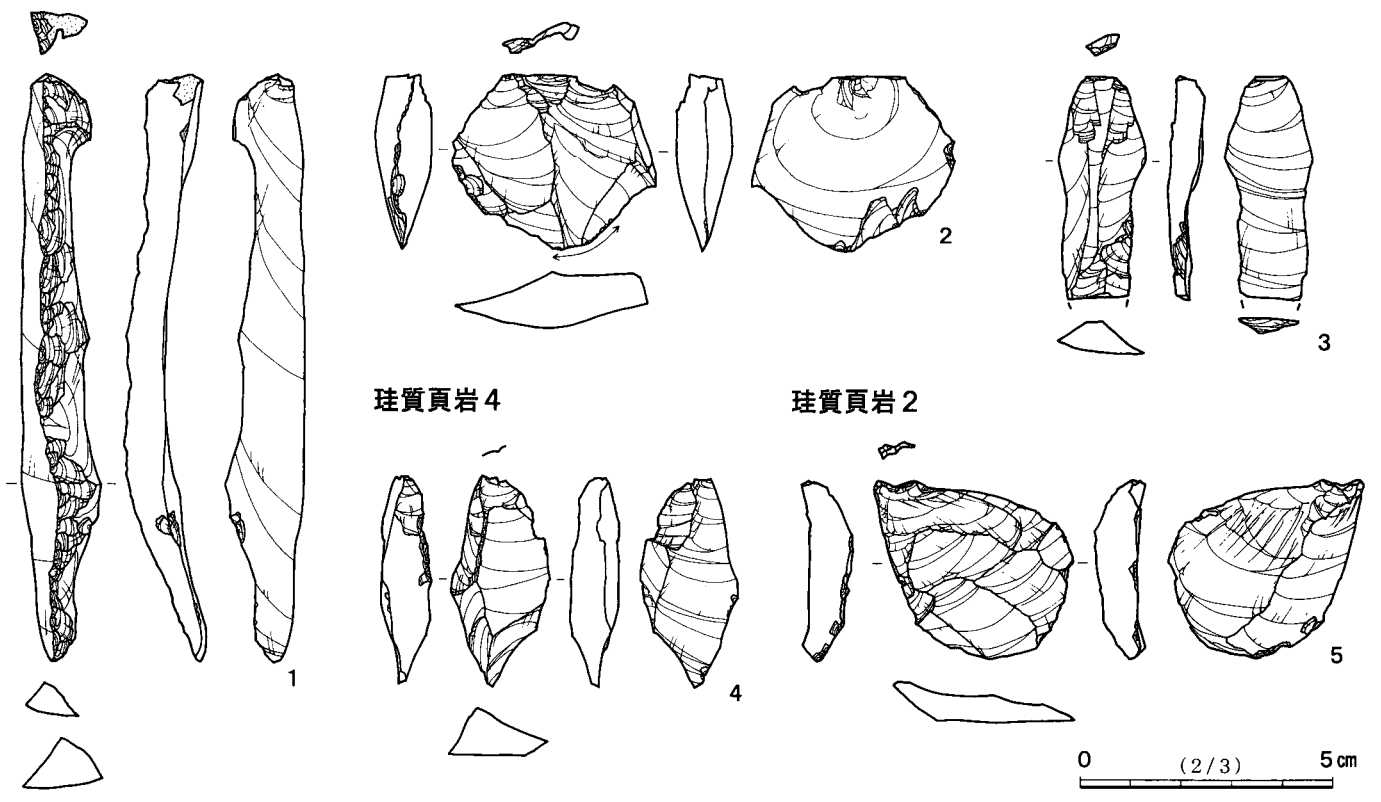
〔器種別〕



〔母岩別〕



第16図　第３ブロック遺物分布図



第17図　第３ブロック出土遺物

第６表　第３ブロック出土石器属性表

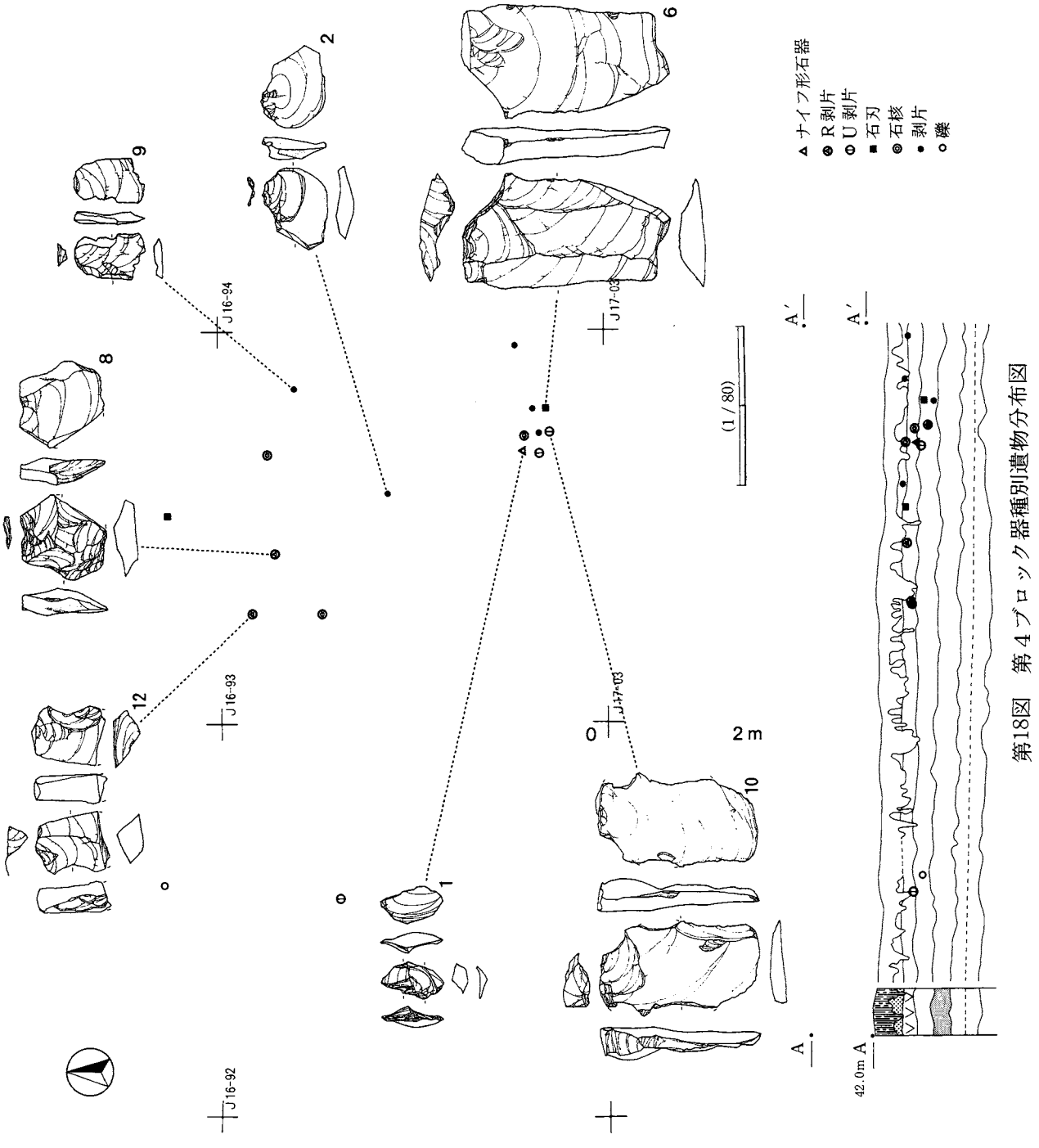
No.	遺物番号	器種	長さ×幅×厚さ (mm)	重量 (g)	図版番号	打面種類	打面調整	頭部調整	背面構成	打角 (°)	折面部位	母岩番号
1	N15−05−0001	石刃	43.9×17.2× 7.4	3.8	3	多	○	○	Ⅰ	115	B	珪質頁岩１
2	0002	U剥片	34.9×39.0×10.1	7.2	5	多	×	○	Ⅰ、Ⅲ	100		珪質頁岩２
3	0003	U剥片	34.8×40.2×11.0	13.2	2	多	×	○	Ⅰ、Ⅲ	110		珪質頁岩３
4	0005	U剥片	40.4×19.7× 9.6	5.2	4	線	×	○	Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ			珪質頁岩４
5	N15−14−0001	石刃	115.0×16.1×16.0	13.2	1	多	○	×	Ⅰ、Ⅳ	115		珪質頁岩３

る。刃こぼれ状の微細な剥離痕が観察される。２、３は微細剥離痕のある剥片である。２は先端部に、３は左側縁にそれぞれ微細な剥離痕が観察される。４は石核である。上面に打面を作出したあと、裏面側から順に剥片剥離が行われて、表面側で終わっている。

②珪質頁岩６(５)　ほとんど黒色といっていい濃褐色を呈する硬質な石材であるが、自然面直下はグラデーションを描くように濃褐色から黄土色に変化している。５は微細剥離痕のある剥片である。先端部にやや連続した微細な剥離痕が観察されるほか、両側縁にも大小の剥離痕が散在する。

③流紋岩２(６)　緑灰色を帯びた硬質な石材で、長石粒や雲母などの不純物の混入が顕著である。６はやや大型の石刃である。断面台形を呈し、両側縁に微細な剥離痕が散在する。

④安山岩２(７～11)　濃褐色を呈する硬質な石材で、表面はややきめが粗い。７、８は二次加工のある剥片である。７は右側縁に加工痕が観察される。８は先端部に加工痕が観察される。どちらか側縁部も加工しようとしたものと思われ、削器の未成品の可能性がある。９は剥片である。10は微細剥離痕のある剥片であるが、左側縁は折断の痕跡が顕著である。石刃制作で生まれた調整剥片の可能性がある。11は石核で



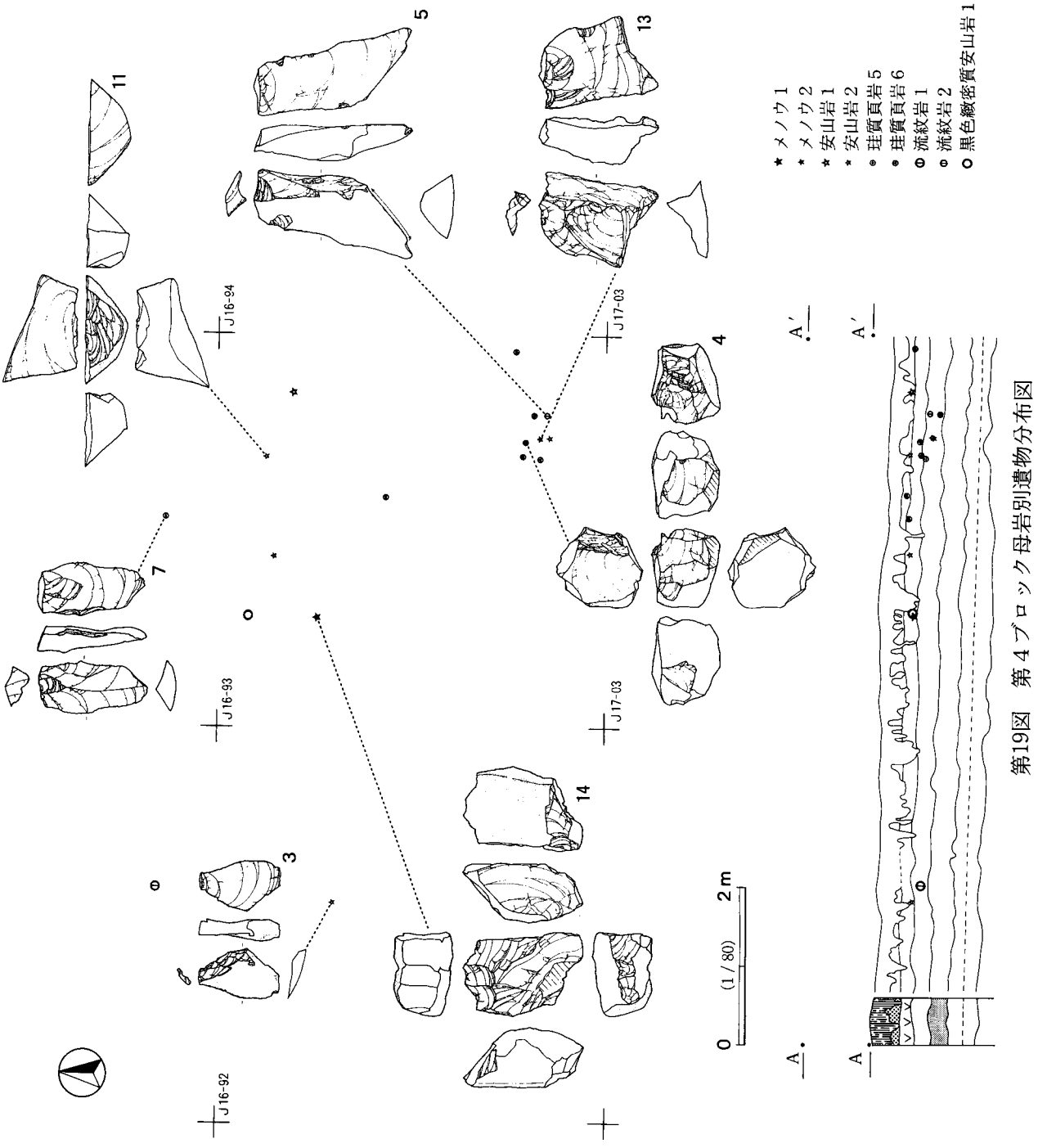
第18図　第４ブロック器種別遺物分布図

ある。大型の剥片を素材として、小型の横長剥片の剥離が行われている。

⑤黒色緻密質安山岩１(12)　淡灰色を呈するやや軟質な石材である。12は二次加工のある剥片である。左側縁腹面側に集中的に加工が施されている。先端部は折断されている。

⑥メノウ２(13)　朱色を帯びた半透明の硬質な石材である。13は剥片である。背面稜線上に大きな剥離痕が観察される。

⑦メノウ１(14)　濃褐色を帯びた半透明の硬質な石材である。14は石核である。正面および右面側を打面とする剥片剥離が数回行われたあと、上面側を打面とする剥片剥離が少なくとも３回行われている。



第19図　第４ブロック母岩別遺物分布図

第５ブロック(第23・24図、図版43)

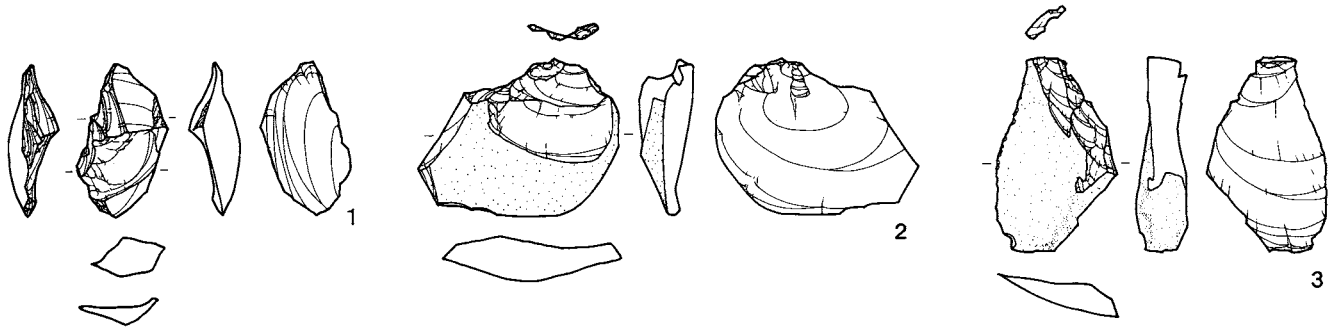
(出土状況)Ａ地区やや北西寄りのＪ16－94区に位置し、すぐ西側には第４ブロックが存在する。

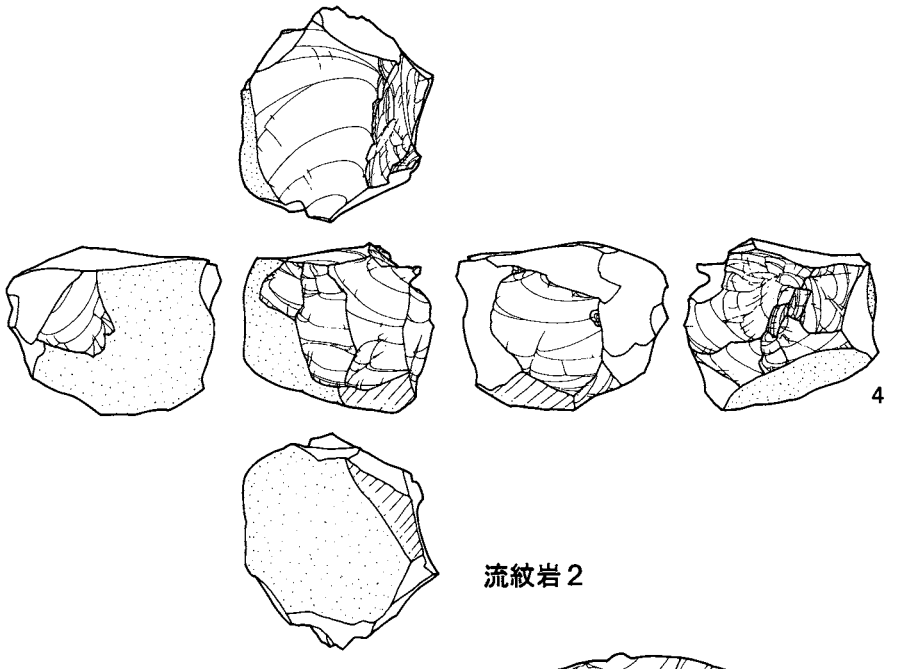
直径３ｍほどの狭い範囲内に43点の遺物が分布する。出土層位はⅥ層からＶ層下部にかけてである。

(遺　　物)石材は５種類に分類され、圧倒的多数を安山岩が占める。遺物の説明を行う前に、実測遺物がなかった石材について説明しておく。流紋岩３はやや緑色を帯びた灰褐色の石材で、不純物の混入が顕著である。礫片のみが出土している。安山岩４は灰褐色を呈する硬質な石材である。小型の剥片が１点のみである。

①安山岩２(１～５)　濃褐色を呈する硬質な石材で、ややキメが粗い。１～５はすべて剥片である。１は

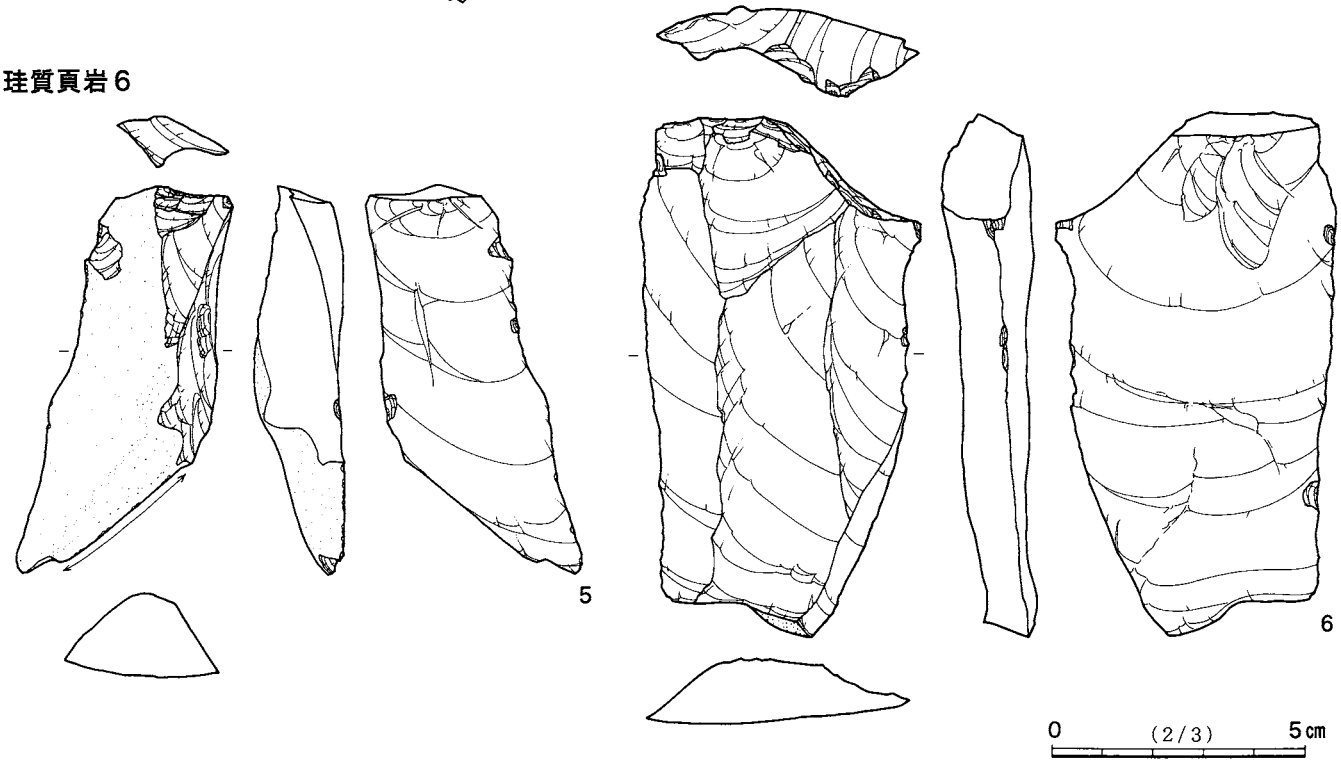
珪質頁岩５





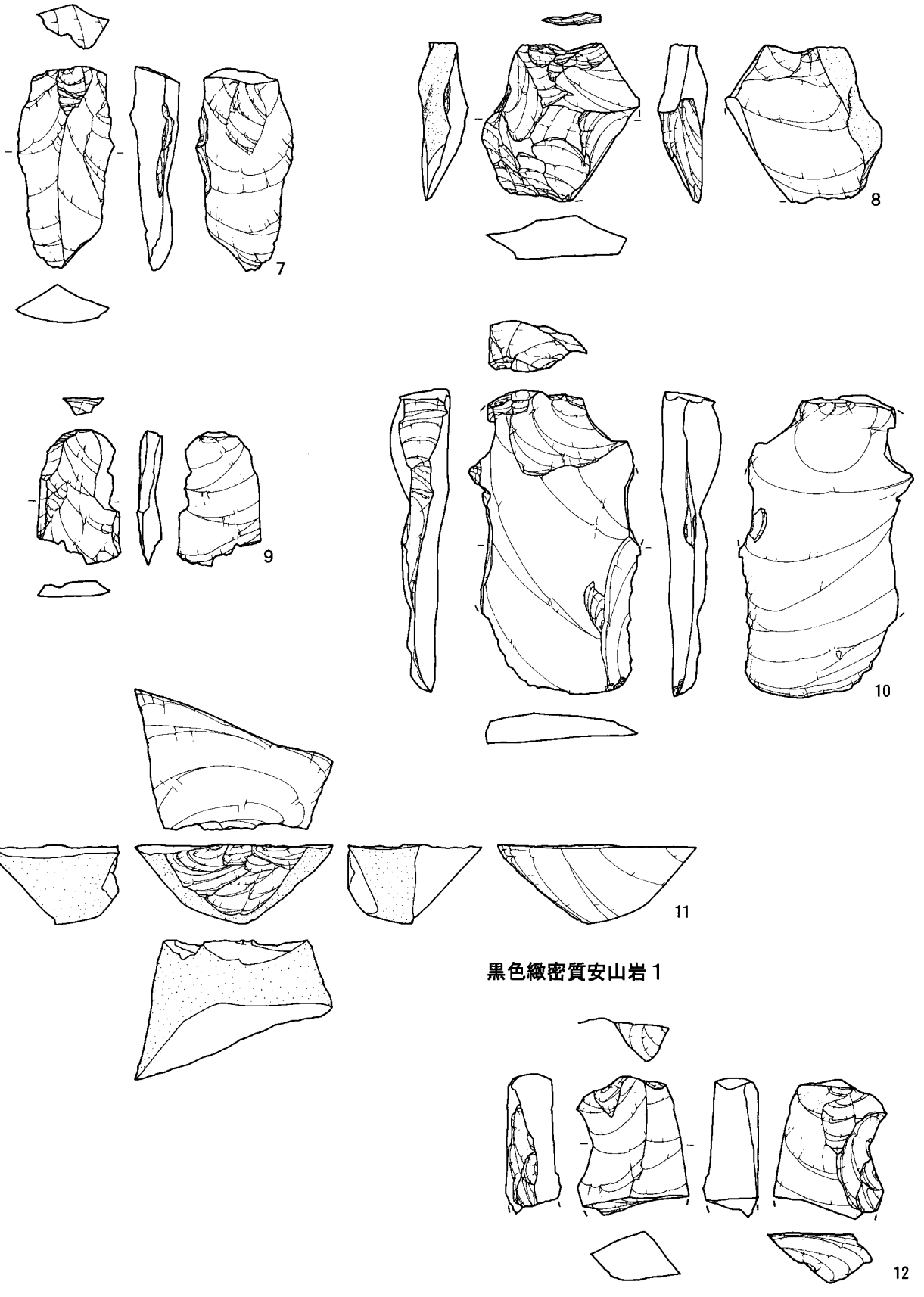
流紋岩２

珪質頁岩６



第20図　第４ブロック出土遺物（１）

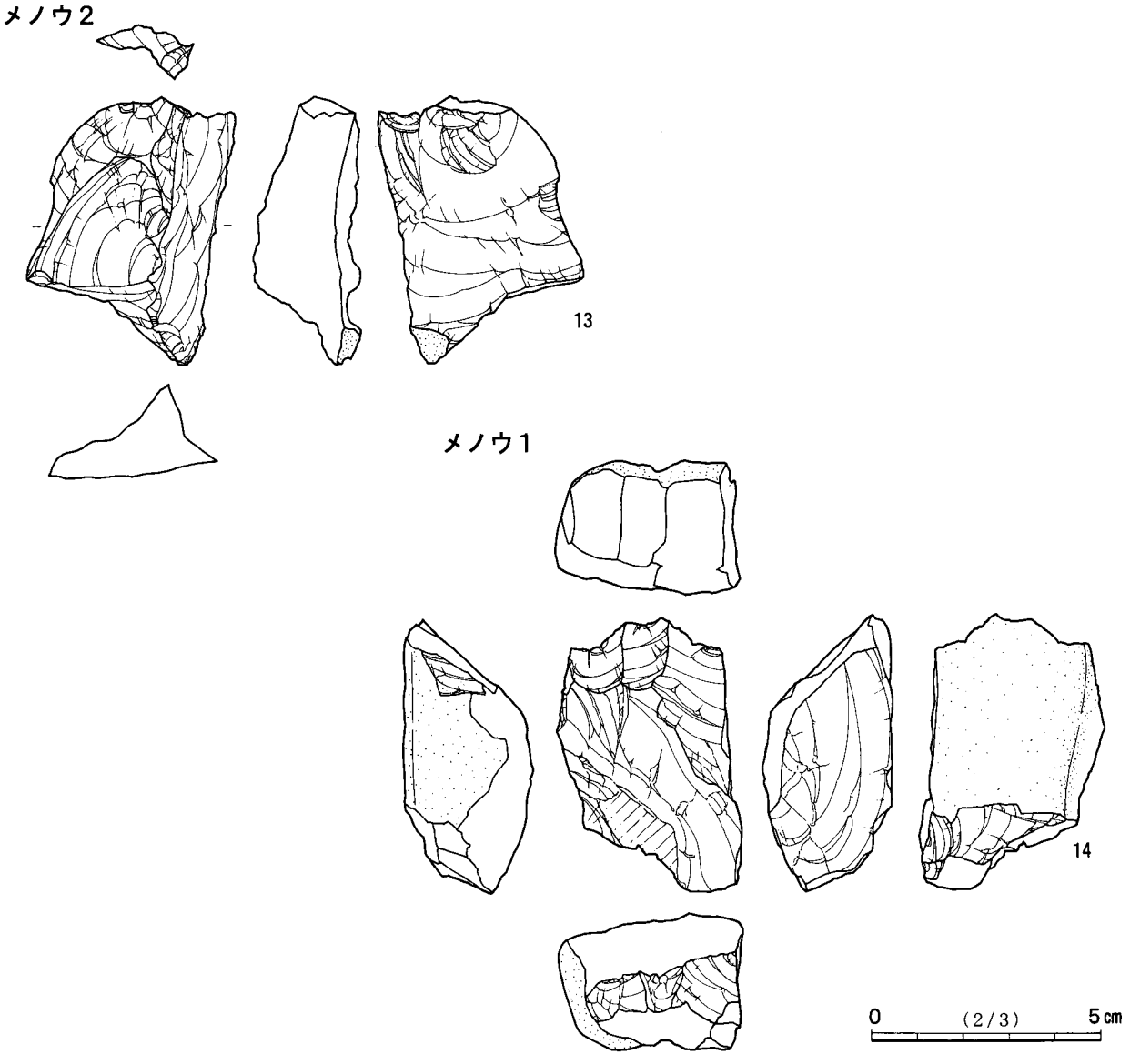
安山岩２



黒色緻密質安山岩１

0　(2/3)　5cm

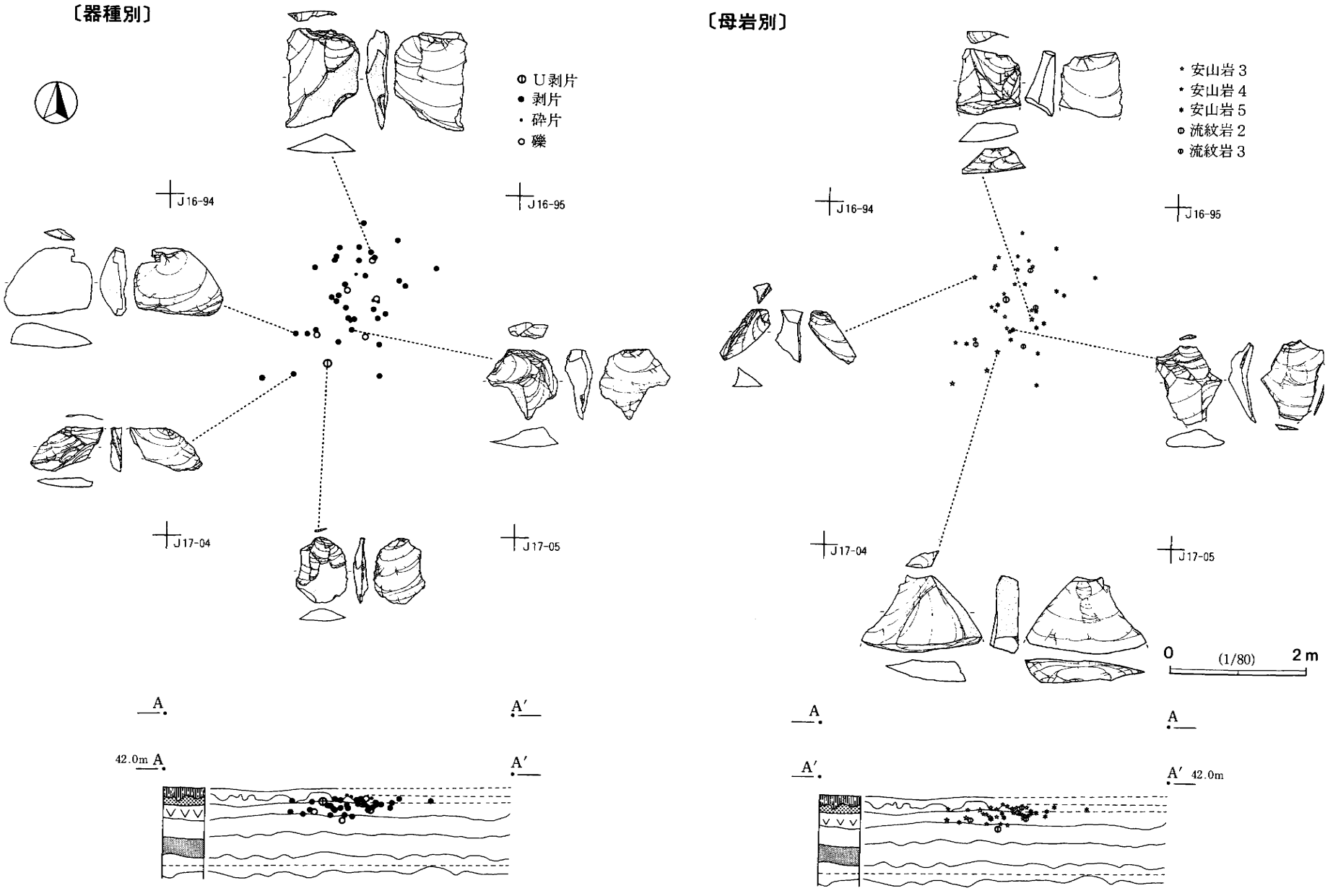
第21図　第４ブロック出土遺物（２）



第22図　第４ブロック出土遺物（３）

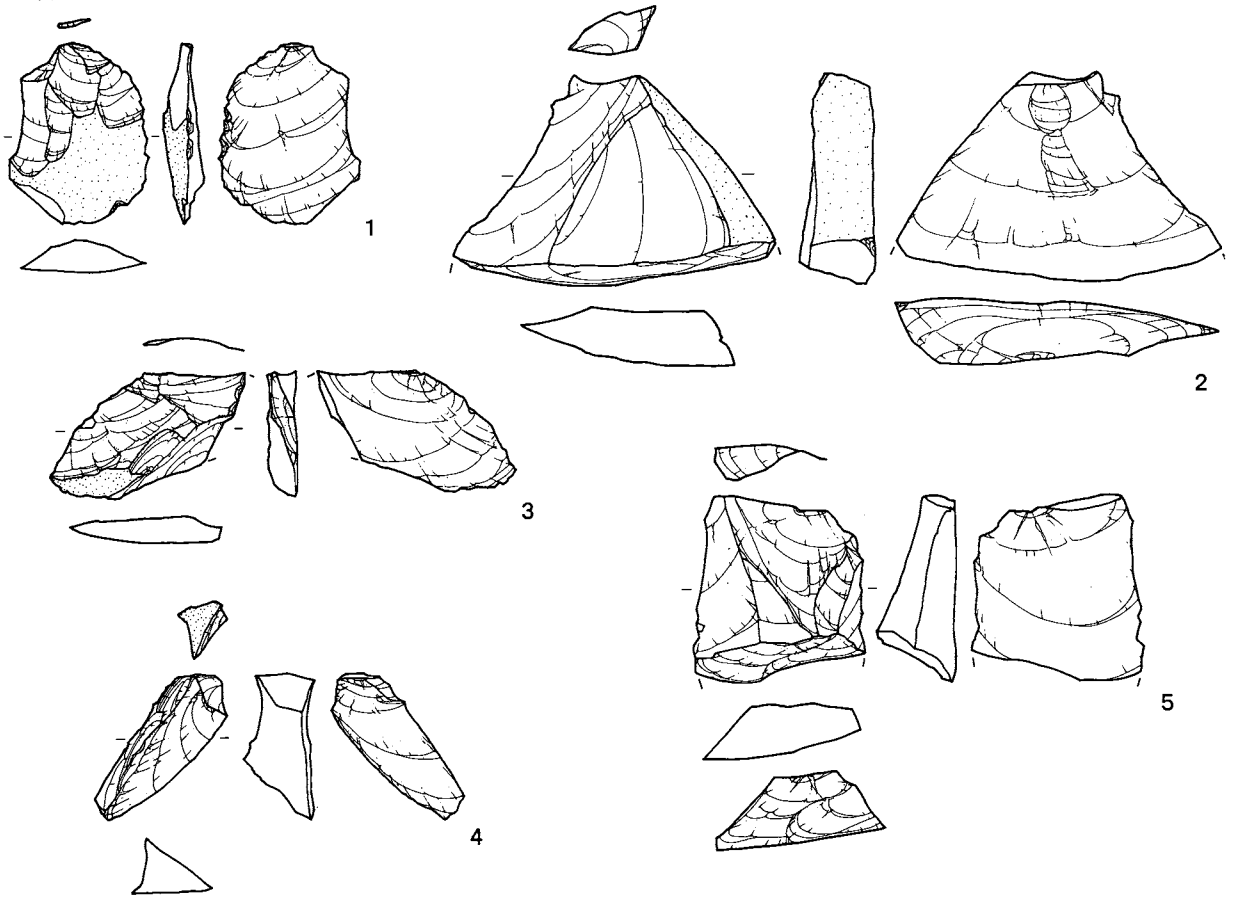
第７表　第４ブロック出土石器属性表

No.	遺物番号	器種	長さ×幅×厚さ (mm)	重量 (g)	図版番号	打面種類	打面調整	頭部調整	背面構成	打角 (°)	折面部位	母岩番号
1	J16−82−0001	礫	20.2× 7.9× 8.1	1.4								流紋岩１
2	J16−83−0001	石刃	52.9×25.3×12.9	13.1	7	平	×	○	Ⅰ	110		安山岩２
3	J16−92−0001	U剥片	39.0×24.1×10.1	5.2	3	平	×	○	Ⅰ、C	100		珪質頁岩５
4	J16−93−0001	R剥片	35.9×29.6×14.4	12.2	12	平	×	○	Ⅰ	120	B	黒色緻密質安山岩１
5	0002	石核	58.3×40.1×27.9	70.7	14							メノウ１
6	0003	R剥片	41.2×41.1×13.0	18.7	8	平	×	○	Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、C	85		安山岩２
7	0004	石核	20.6×51.2×35.1	28.5	11							安山岩２
8	0005	剥片	34.1×22.1× 6.6	4.1	9	平	×	○	Ⅰ	115		安山岩２
9	0006	剥片	31.1×40.0×11.0	9.3	2	多	○	○	Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ、C	125		珪質頁岩５
10	0007	ナイフ形石器	30.2×17.9× 9.9	3.1	1	−	−	−	Ⅰ、Ⅳ			珪質頁岩５
11	0008	石核	33.0×38.0×42.1	58.0	4							珪質頁岩５
12	0009	U剥片	75.9×42.9×17.6	36.9	5	平	×	○	Ⅰ、Ⅱ、C	125		珪質頁岩６
13	0010	石刃	101.2×55.8×18.2	95.2	6	多	○	○	Ⅰ、C	120		流紋岩２
14	0011	剥片	18.1×21.8× 4.1	1.3		平	×	×	Ⅰ、Ⅳ	120	L	珪質頁岩５
15	0012	U剥片	77.9×45.1×15.5	44.2	10	多	○	○	Ⅰ、Ⅱ	120	L	安山岩２
16	0013	剥片	14.3×19.2× 6.6	2.1		−	−	−	C		H	珪質頁岩５
17	0014	剥片	58.0×45.0×23.0	35.7	13	多	×	×	Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ	140		メノウ２

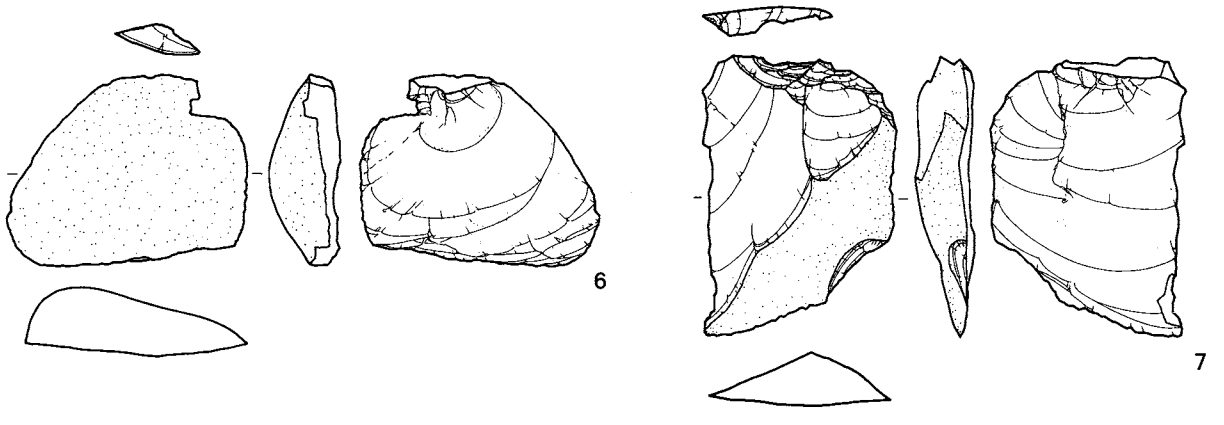


第23図　第５ブロック遺物分布図

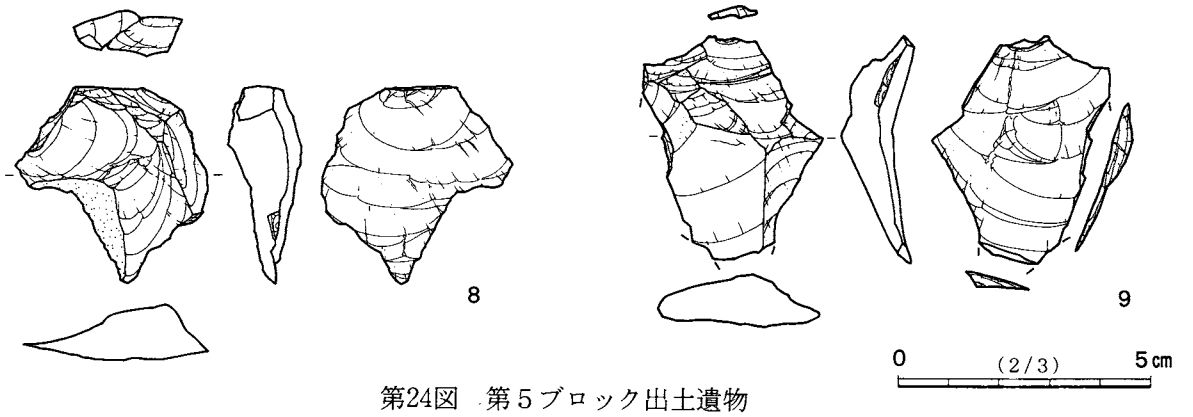
安山岩２



安山岩３



安山岩５



第24図　第５ブロック出土遺物

第８表　第５ブロック出土石器属性表

No.	遺物番号	器種	長さ×幅×厚さ (mm)	重量 (g)	図版番号	打面種類	打面調整	頭部調整	背面構成	打角 (°)	折面部位	母岩番号
1	J16−94−000	剥片	23.5×25.3× 6.8	3.3		平	×	×	Ⅰ、Ⅲ	125	L	玉髄1
2	0002	剥片	12.5×17.6× 4.3	1.1		−	−	−	Ⅰ、C		H	安山岩3
3	0003	剥片	16.9×36.9× 5.4	3.6		−	−	−	C		H	安山岩3
4	0004	礫	30.7×22.9×15.5	8.3								流紋岩3
5	0005	剥片	14.4×13.7× 5.2	0.6		平	×	×	Ⅱ、Ⅲ	70		安山岩3
6	0006	剥片	54.1×38.8×12.0	22.4	7	多	×	○	Ⅰ、Ⅳ、C	120		安山岩3
7	0007	剥片	28.5×26.4×14.0	4.2	4	多	×	×	Ⅱ	95		安山岩2
8	0008	砕片	11.2× 5.6× 2.5	0.2								安山岩3
9	009a	剥片	13.5×18.5× 5.9	1.0		平	×	×	Ⅰ	110		安山岩4
10	009b	砕片	5.3× 8.0× 2.7	0.1								安山岩3
11	0010	剥片	14.2× 6.3× 3.5	0.4		−	−	−	Ⅰ		H	安山岩3
12	0011	剥片	17.1×12.5× 2.6	0.6		線	×	○	Ⅰ			安山岩3
13	0012	剥片	12.3×19.2× 2.4	0.8		線	×	○	Ⅰ、C		B	安山岩3
14	0013	剥片	24.8×21.1× 4.4	3.6		平	×	×	Ⅲ、Ⅳ	85	R、L	安山岩3
15	0014	砕片	12.2×12.1× 4.6	0.4								安山岩3
16	0015	砕片	11.2×12.4× 2.5	0.4								安山岩3
17	0016	剥片	11.4×21.6× 7.1	2.2		−	−	−	Ⅱ		H、R、L	安山岩5
18	0017	剥片	31.9×29.7×12.4	7.3		−	−	−	Ⅰ、C		H	安山岩5
19	0018	剥片	18.9×21.6× 7.8	3.9		−	−	−	Ⅱ		H、R	安山岩5
20	0019	剥片	30.7×27.4× 4.1	2.6		線	×	×	Ⅰ			安山岩5
21	0020	剥片	23.5×23.6× 5.0	2.9		多	×	○	Ⅰ、C	110		安山岩5
22	0021	剥片	12.3×16.2× 2.5	0.4		線	×	○	Ⅰ		B	安山岩5
23	0022	剥片	27.6×39.7× 9.0	8.4		−	−	−	Ⅱ、Ⅳ		H、B	安山岩5
24	0023	礫	21.6×13.6× 6.9	2.0								流紋岩3
25	0024	剥片	36.3×27.6× 8.0	6.8	1	平	×	○	Ⅰ、C	110		安山岩2
26	0025	剥片	37.2×47.8×14.2	25.6	6	平	×	×	C	120		安山岩3
27	0026	剥片	24.6×39.0× 5.9	5.1	3	平	×	×	Ⅰ、Ⅲ、C	125	R	安山岩2
28	0027	剥片	31.6×17.8×12.7	5.9		多	×	×	Ⅳ、C	110		安山岩5
29	0028	礫	20.0×10.3× 7.0	1.6								流紋岩3
30	0029	剥片	42.3×64.5×15.1	35.2	2	平	×	×	Ⅰ、Ⅳ、C	120	B	安山岩2
31	0030	剥片	38.5×38.0×14.3	12.5	8	多	×	○	Ⅰ、Ⅳ、C	125		安山岩5
32	0031	剥片	21.0×12.2× 3.9	1.6		多	×	×	Ⅰ	120	B	安山岩3
33	0032	剥片	21.0×34.6× 9.7	5.9		多	×	×	Ⅱ、Ⅲ、C	120		安山岩5
34	0033	剥片	18.5×35.2×10.5	6.2		−	−	−	C		H	安山岩3
35	0034	剥片	36.1×34.4×15.5	16.7	5	平	×	×	Ⅰ	110	B	安山岩2
36	0035	礫	59.9×29.5×24.1	44.8								流紋岩3
37	0036	剥片	21.0×13.9× 2.8	0.8		C	×	×	Ⅳ	75	L	安山岩5
38	0037	剥片	11.2×26.6× 4.0	1.3		−	−	−	Ⅱ		H	安山岩3
39	0038	砕片	7.4×13.5× 2.3	0.3								安山岩3
40	0039	剥片	43.1×36.0×14.0	11.6	9	平	×	○	Ⅰ、Ⅲ	105	L、B	安山岩5
41	0040	礫	29.6×28.1×10.6	2.7								流紋岩3
42	0041	剥片	25.5×11.7× 3.4	1.2		−	−	−	Ⅰ		H	安山岩3
43	0042	剥片	9.1×16.2× 2.2	0.4		線	×	○	Ⅰ、C			安山岩3
44	0043	剥片	8.5×18.4× 3.8	0.5		平	×	×	Ⅲ	95		安山岩3

第９表　第２文化層全体ブロック別石材組成表

ブロック / 石材	2	3	4	5	合計	組成比
珪質頁岩		5	7		12	17.6%
黒曜石	1				1	1.5%
メノウ			2		2	2.9%
玉髄				1	1	1.5%
安山岩	1		5	38	44	64.7%
流紋岩			2	5	7	10.3%
黒色緻密質安山岩			1		1	1.5%
合計	2	5	17	44	68	100.0%
数量比	2.9%	7.4%	25.0%	64.7%	100.0%	

頭部調整が顕著に見られるもの。２は大型のもので、先端側が折断されている。３は横長のもので右側縁側が折断されている。４は縦長のもので、断面三角形を呈し背面側にも右側からの大きな剥離痕が観察される。おそらくさらに大型の剥片から折断されたものであろう。５はやや大型の縦長剥片で、先端側が折

第10表　第２文化層全体ブロック別器種組成表

ブロック / 石材	2	3	4	5	合計	組成比
ナイフ形石器	1		1		2	2.9%
石刃		2	2		4	5.9%
R剥片			2		2	2.9%
U剥片		3	3		6	8.8%
剥片	1		5	34	40	58.0%
砕片				5	5	7.4
石核			3		3	4.4%
礫			1	5	6	8.8%
合計	2	5	17	44	68	100.0%
数量比	2.9%	7.4%	25.0%	64.7%	100.0%	

第11表　第２文化層全体石材別器種組成表

ブロック / 石材	ナイフ形石器	石刃	R剥片	U剥片	剥片	砕片	石核	礫	合計	数量比
珪質頁岩	1	2		5	3		1		12	17.6%
黒曜石	1								1	1.5%
メノウ					1		1		2	2.9%
玉髄					1				1	1.5%
安山岩		1	1	1	35	5	1		44	64.7%
流紋岩		1						6	7	10.3%
黒色緻密質安山岩			1						1	1.5%
合計	2	4	2	6	40	5	3	6	68	100.0%
組成比	2.9%	5.9%	2.9%	8.8%	58.8%	7.4%	4.4%	8.8%	100.0%	

断されている。

②安山岩３（６、７）　濃褐色を呈する硬質の石材で、節理面にはローム成分の混入が目立つ。６は横長の剥片で、先端側は極端に湾曲しているが折断ではないと考えられる。７は縦長剥片で、頭部調整が顕著である。

③安山岩５（８、９）　黒色に近い濃褐色を呈する硬質な石材である。８は縦長剥片で、背面には左方向からの剥離が観察される。９も縦長剥片で、頭部調整が顕著である。

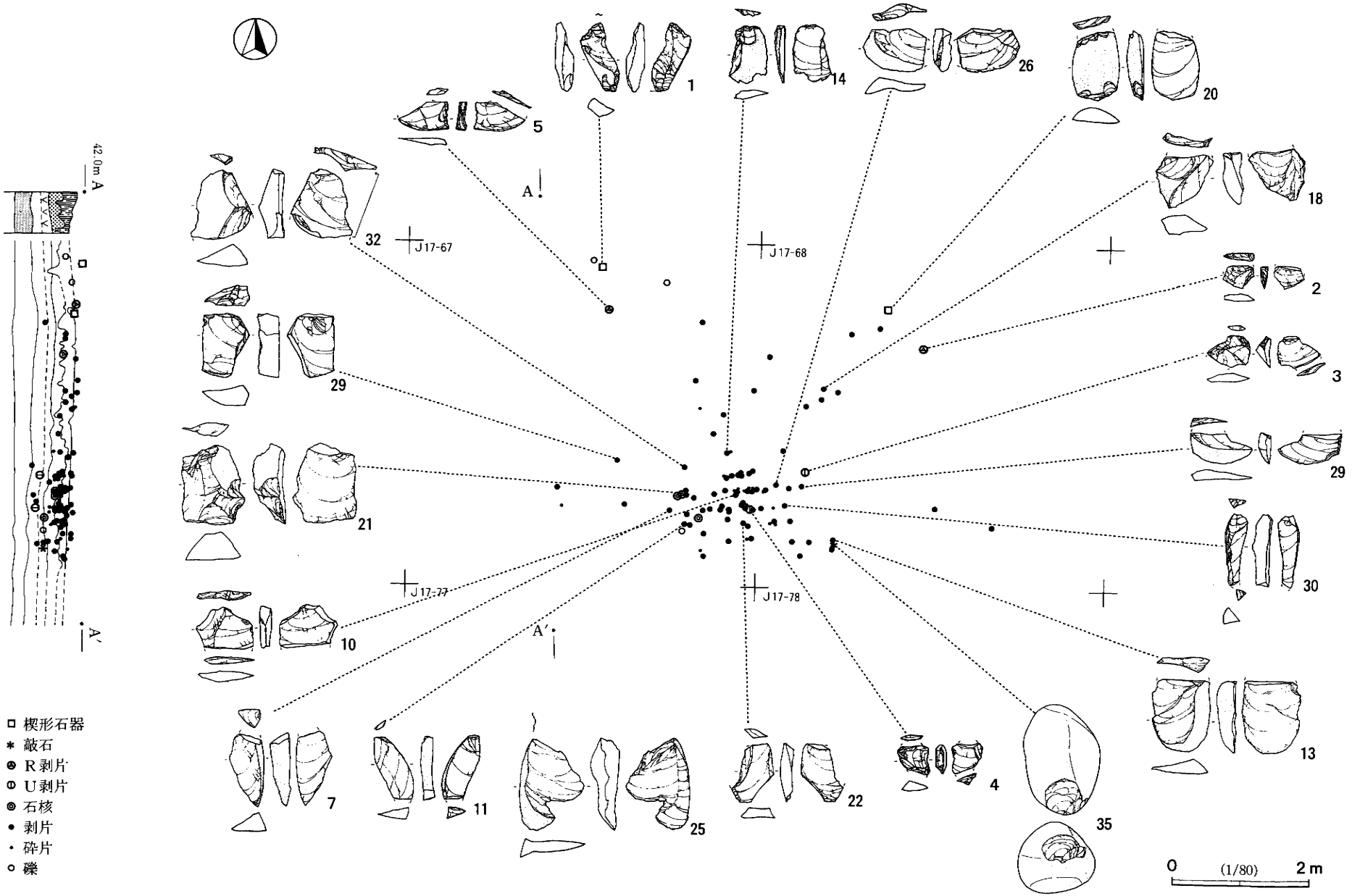
３　第３文化層と出土遺物

第６ブロック（第25～30図、図版44～46）

（出土状況）Ａ地区やや南側のＪ17－67・68区に位置する。

直径約6.5mの範囲内に93点の石器が分布する、本遺跡で最大のブロックである。出土層位はややばらつきがあるものの、おおむねⅣ・Ⅴ層からⅢ層下部にかけて集中している。

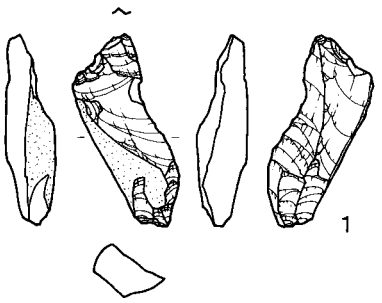
（遺　　物）石材は21種類に分類されるが、数量的には安山岩が大多数を占める。遺物の説明を行う前に、実測遺物がなかった石材について説明しておく。チャート１は青灰色を呈する硬質な石材である。チャート３はやや赤色を帯びた褐色を呈する硬質な石材である。いずれも砕片１点のみの出土である。流紋岩１は緑灰色を呈するやや硬質な石材で、石英粒が混入する。礫片１点のみの出土である。流紋岩２は淡灰褐色を呈するやや硬質な石材で、石英粒、雲母片が混入する。剥片１点のみの出土である。凝灰岩１は緑灰



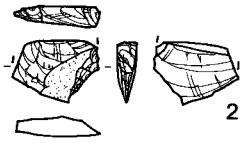
第25図　第６ブロック器種別遺物分布図

第26図　第６ブロック母岩別遺物分布図

ホルンフェルス１



黒曜石１



メノウ１

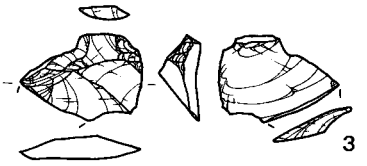
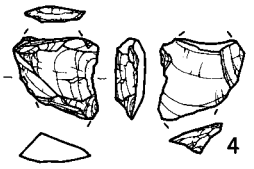
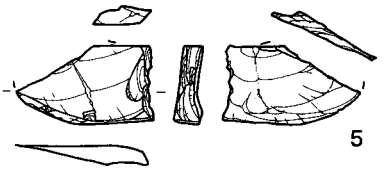
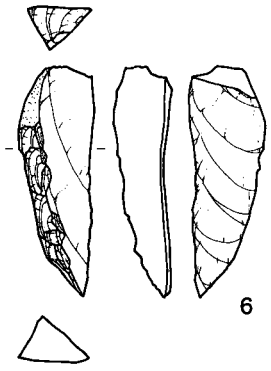


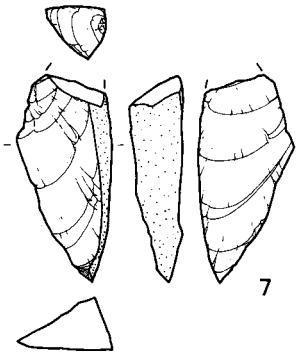
チャート１

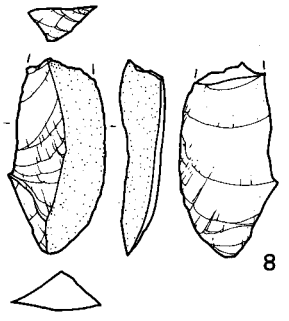


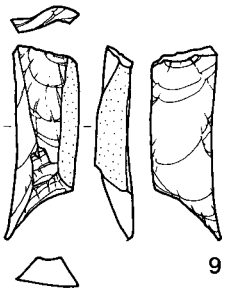


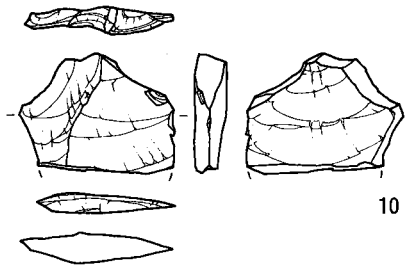
安山岩１

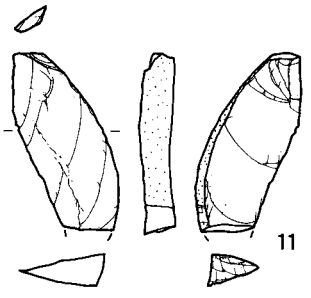


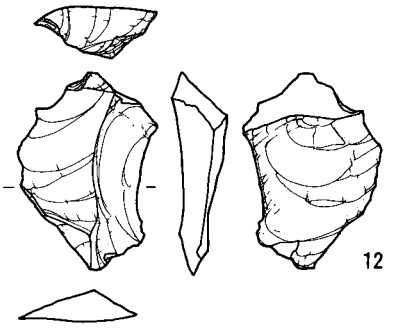


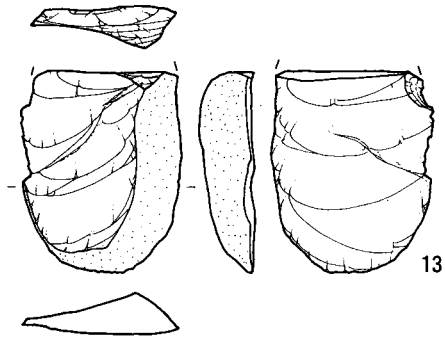


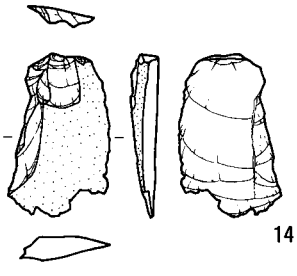


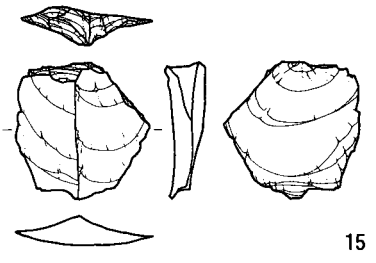












第27図　第６ブロック出土遺物（１）

0　(2/3)　5cm

色を呈する硬質な石材である。礫片１点のみの出土である。凝灰岩２は乳白色を呈する硬質な石材で、クラックが発達している。小型剥片が１点出土している。砂岩１は淡褐色を呈するやや硬質な石材である。礫片１点のみの出土である。珪質頁岩１は褐色を呈する硬質な石材である。小型剥片が１点出土している。安山岩５は濃褐色を呈する硬質な石材で、節理が発達しておりローム成分の混入が極めて顕著である。全部で10点出土しており、砕片が３点のほかは小型の剥片である。安山岩６は灰色に近い濃褐色を呈する硬質な石材で、自然面にはローム成分の吸着が目立つ。小型の剥片が５点出土している。

①ホルンフェルス１（１）　濃灰褐色を呈する硬質な石材である。１は楔形石器である。断面四角形を呈し、先端側には背腹両面に剥離痕が観察される。

②黒曜石１（２）　黒色を呈するガラス質の石材で、不純物を多く含み不透明である。２は二次加工のある剥片である。先端部から右側縁にかけて、連続した剥離痕が観察される。打面側は折断されている。

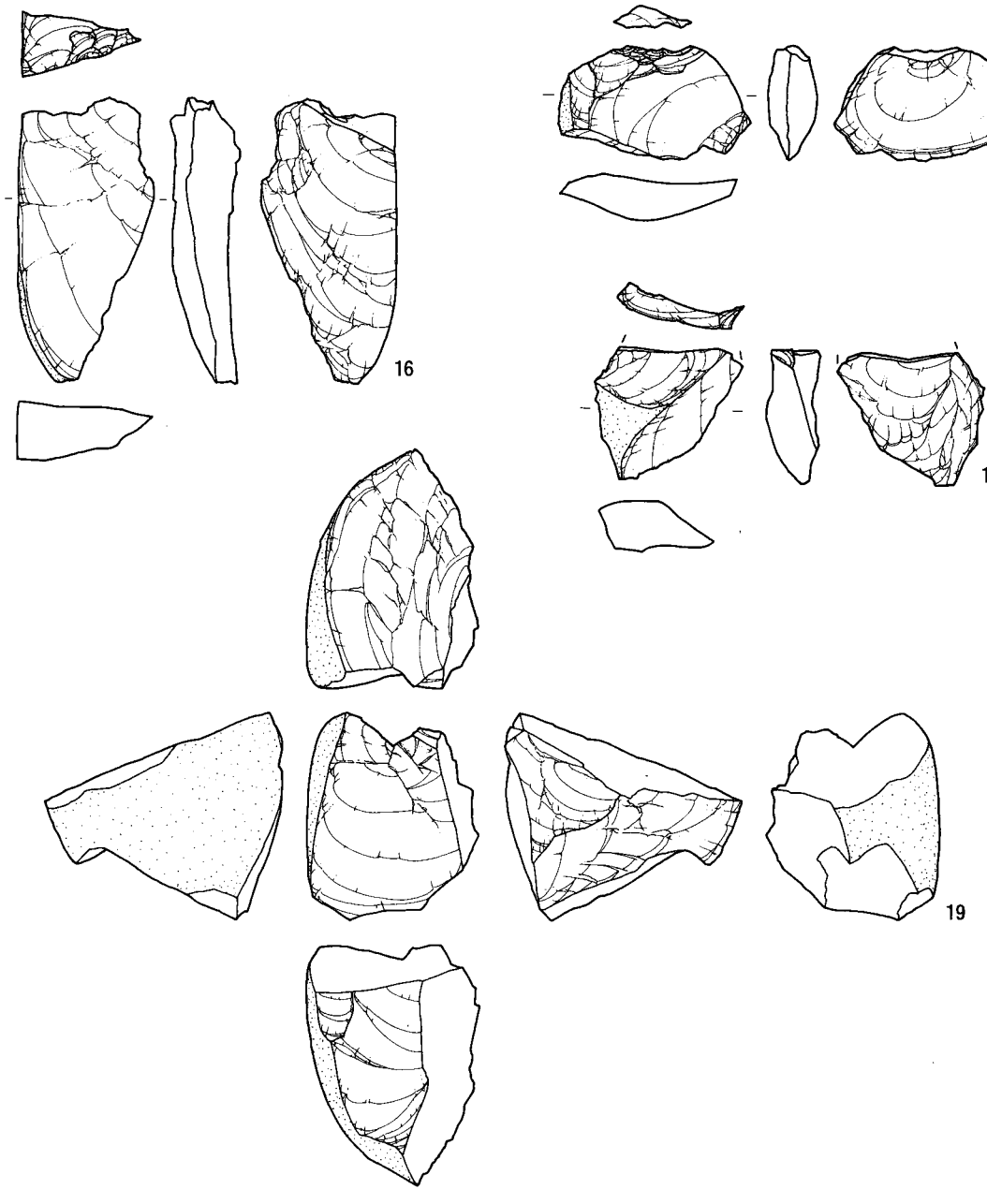
③メノウ１（３）　白色を呈する硬質な石材で、純度が高く半透明である。３は二次加工のある剥片である。打面から右側縁にかけて連続した二次加工痕が観察される。

④チャート２（４、５）　濃青灰色を呈する硬質な石材である。４、５は二次加工のある剥片である。いずれも右側縁に二次加工が施されており、特に４はさらに小型の縦長剥片を剥離した痕跡がうかがえる。

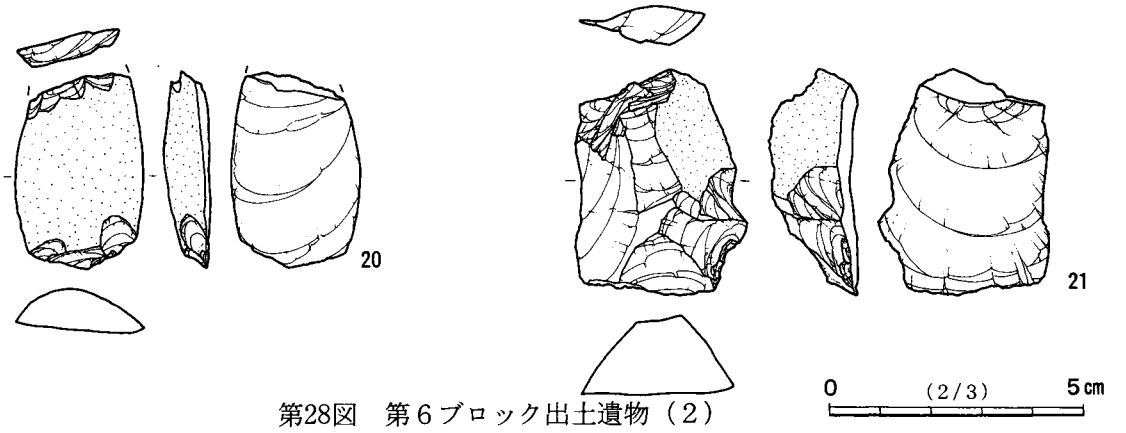
⑤安山岩１（６～19）　濃褐色を呈する硬質な石材で、気泡が多くローム成分の混入が顕著である。６～８は断面三角形を呈する縦長剥片で、背面には稜線を境に片側に自然面が残存する。６は背面から左側縁に向かっての加工痕が顕著である。７、８は打面が折断されている。９は断面台形を呈する縦長剥片で、背面側先端部に加工痕が観察される。10は断面紡錘形を呈する扁平な剥片で、先端側は折断されている。11はやはり断面三角形を呈する縦長剥片で、先端側が折断されている。12は自然面が残存しない剥片で、背面側に観察される右側からの剥離痕が目立つ。13は右側から先端部に欠けて自然面が残存する縦長剥片で、打面側が折断されている。14は断面紡錘形を呈する剥片で、背面は自然面がほとんどである。15はやや寸詰まりな縦長剥片で、打面調整が顕著である。16はこのブロックの中では大振りな剥片で、やはり打面調整が顕著である。17は打面転移された状況がはっきり分かる資料で、右側を打面とする剥片剥離が行われたあと、打面を現在の位置に転移して、頭部調整を行ったうえで横長剥片を剥離している。18はやはり打面転移が行われたものと考えられるもので、左側を打面とする剥片剥離の痕跡が、背面にはっきりと残る。19は石核である。正面側を打面とする剥片剥離が数回行われたあと、打面を上側に転移して剥片剥離が行われている。

⑥安山岩２(20～29)　安山岩１より褐色味が強くなり、気泡の混入も目立たなくなる。20は楔形石器である。断面半円形を呈し、先端部の剥離痕は刃先のような形態を持つ。打面側は折断されている。21は二次加工のある剥片である。右側縁先端側に連続した加工痕が観察される。22は左側縁を折断することによって断面台形にされた縦長剥片である。23は自然面を背面に残す断面三角形の縦長剥片である。打面側、先端側とも折断されている。24は先端部に自然面を残す縦長剥片である。25は打面作出の際に剥離されたとみられる剥片で、自然面に打点が存在する。26は左側縁側から先端側にかけて自然面の残存する横長剥片で、右側縁側は折断されている。27は剥片剥離の初期の段階で剥離されたとみられる縦長剥片で、背面は確認しうる限りでは１回しか剥離の痕跡がない。28は逆に剥片剥離を重ねたあとで、打面が転移されて剥離された横長剥片である。右側縁を打面とする剥片剥離の痕跡が観察される。29はやや小型の横長剥片で、打面は折断されている。

安山岩１

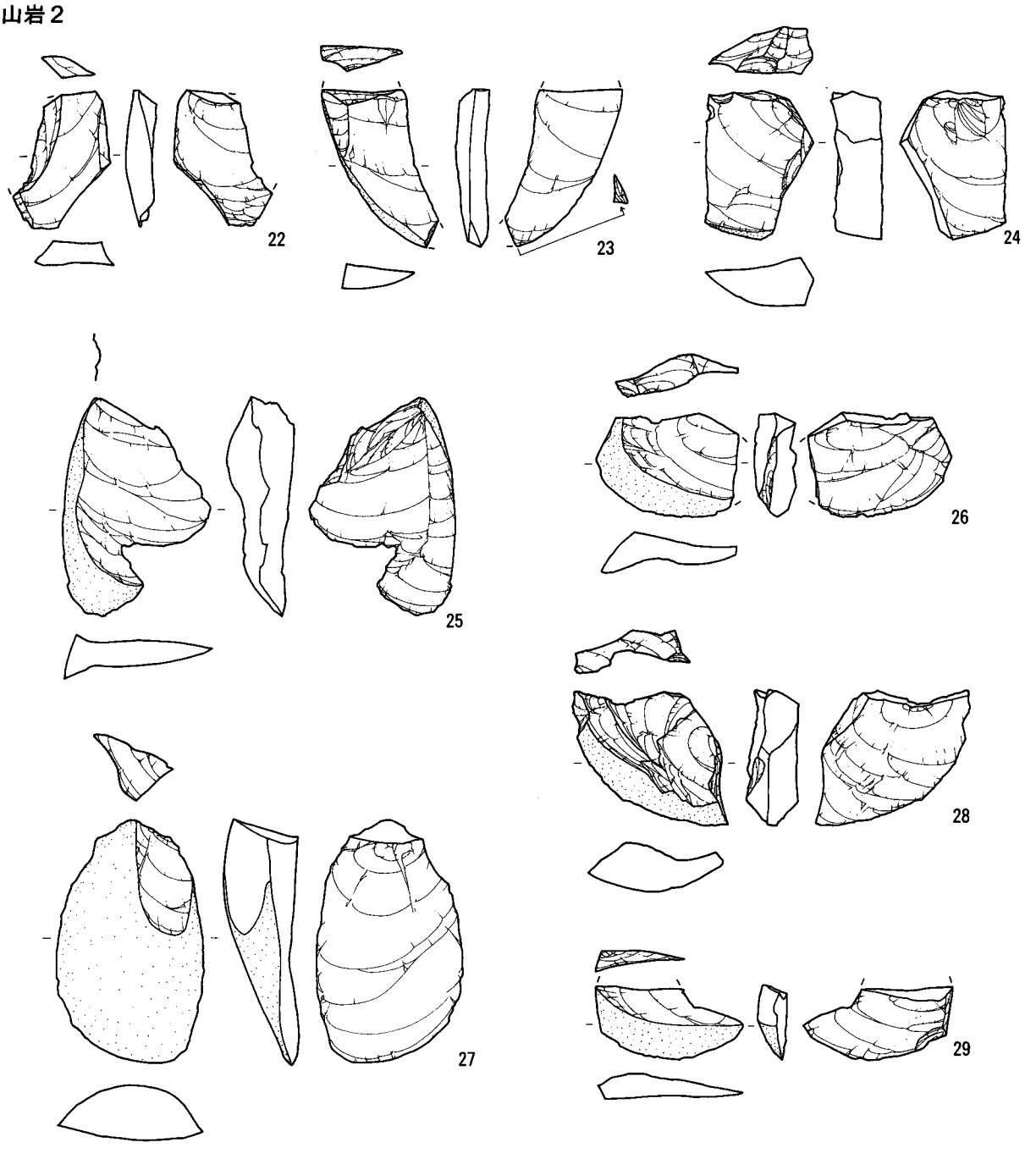


安山岩２

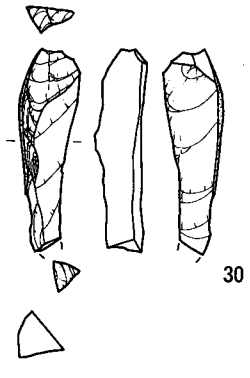


第28図　第６ブロック出土遺物（２）

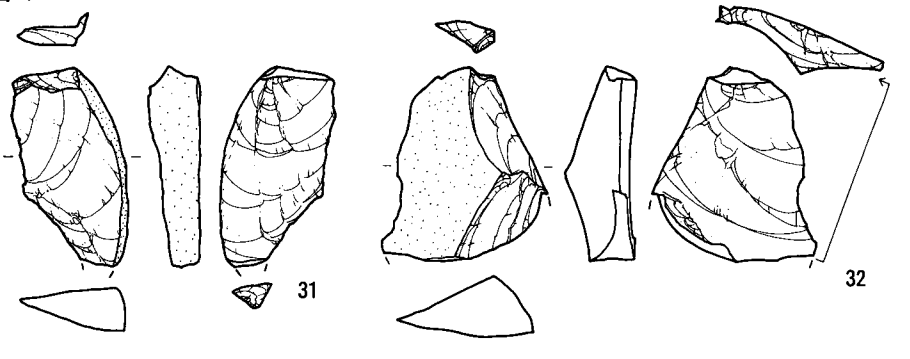
安山岩２



安山岩３



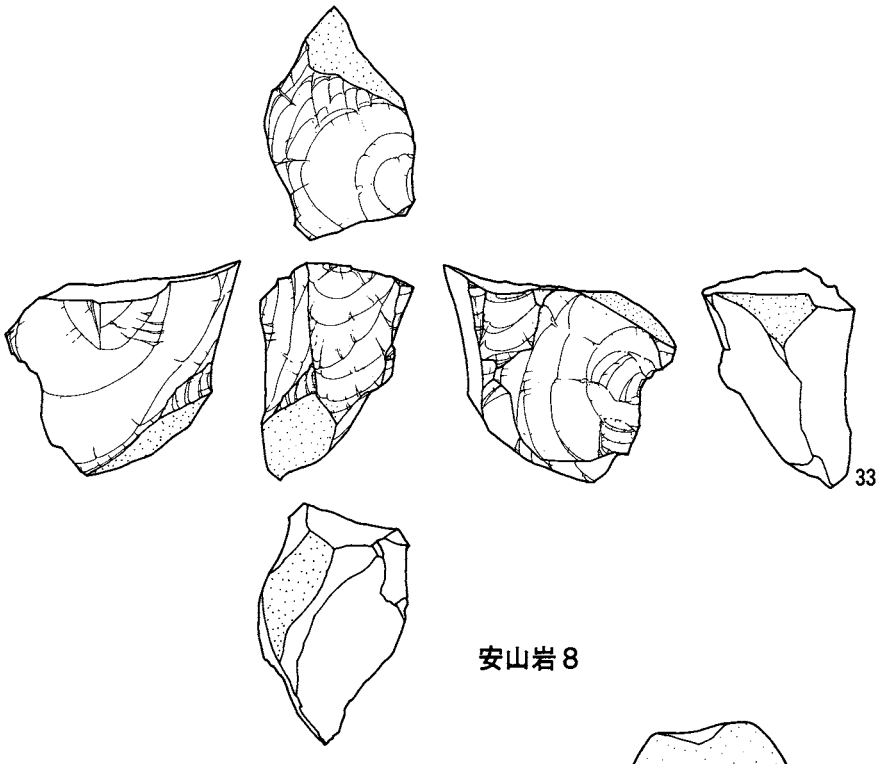
安山岩４



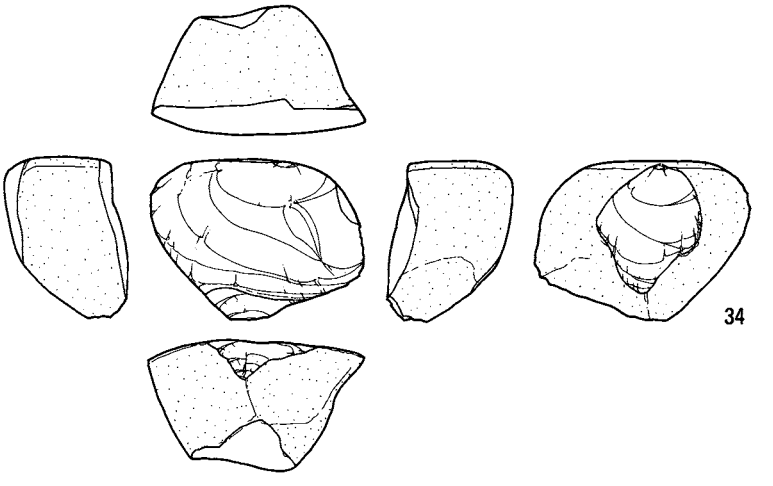
第29図　第６ブロック出土遺物（３）

0　(2/3)　5cm

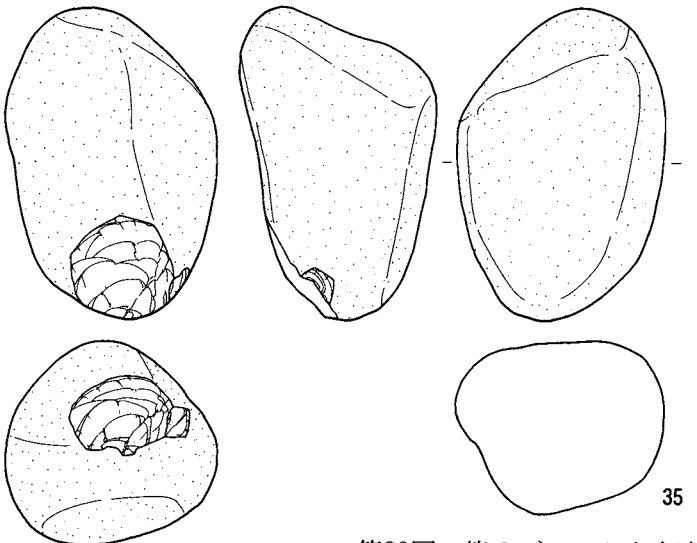
安山岩４



安山岩８



安山岩７



第30図　第６ブロック出土遺物（４）

0　(2/3)　5cm

第12表　第６ブロック出土石器属性表　(1)

No.	遺物番号	器種	長さ×幅×厚さ (mm)	重量 (g)	図版番号	打面種類	打面調整	頭部調整	背面構成	打角 (°)	折面部位	母岩番号
1	J17−67−0001	剥片	37.7×19.2× 9.1	5.4	8	−	−	−	Ⅰ、C		H	安山岩１
2	0002	砕片	11.8×12.6× 2.6	0.3								チャート１
3	0003	剥片	23.2×11.5× 3.4	0.7		平	×	○	Ⅰ、Ⅱ、C	110		安山岩２
4	0004	剥片	16.4× 5.7× 2.6	0.2		点	×	×	Ⅰ			安山岩２
5	0005	剥片	19.0× 8.5× 4.4	0.7		点	×	×	Ⅱ、C			安山岩２
6	0006	剥片	32.5×23.2× 7.9	4.9	22	平	×	×	Ⅰ	115	L	安山岩２
7	0007	剥片	44.8×15.3×11.6	5.6	6	多	×	×	Ⅱ、C	120		安山岩１
8	0008	礫	24.9×14.5× 9.1	2.8								流紋岩１
9	0009	剥片	39.3×21.0× 7.0	4.9	11	平	×	×	Ⅳ、C	125	B	安山岩１
10	0010	剥片	40.0×18.9×11.0	6.3	7	−	−	−	Ⅰ、C		H	安山岩１
11	0011	剥片	11.9×22.5× 5.0	1.3		−	−	−	Ⅰ、Ⅱ		H	安山岩３
12	0012	剥片	18.5× 8.6× 5.8	0.7		−	−	−	Ⅰ、C		H	安山岩３
13	0013	剥片	23.5×16.7× 3.0	0.9		線	×	○	Ⅰ			安山岩２
14	0014	剥片	20.4×15.5× 7.5	2.0		−	−	−	Ⅰ、C		H	安山岩１
15	0015	剥片	30.8×36.5×12.0	11.8	28	多	×	×	Ⅰ、Ⅱ、C	110		安山岩２
16	0016	剥片	38.9×23.0×10.5	8.3	31	平	×	×	Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ、C	120	B	安山岩４
17	0017	砕片	11.4× 8.8× 1.8	0.1								安山岩５
18	0018	剥片	19.7× 8.3× 4.1	0.7		−	−	−	Ⅰ、Ⅳ		H	安山岩２
19	0019	剥片	23.8×40.3×10.3	9.2	17	平	×	○	Ⅰ、Ⅱ、C	130		安山岩１
20	0020	砕片	9.1×10.9× 1.9	0.2								安山岩３
21	0021	剥片	12.7×14.6× 2.9	0.6		平	×	×	Ⅰ、Ⅱ	130		安山岩２
22	0022	剥片	32.0×20.5× 6.0	3.1	14	多	×	○	Ⅰ、C	110		安山岩１
23	0023	剥片	12.0×17.0× 3.9	0.5		平	×	×	Ⅰ、Ⅳ	120		安山岩２
24	0024	剥片	20.7×17.0× 4.6	1.5		多	×	○	Ⅰ、C	140		ホルンフェルス１
25	0025	破片	9.3×13.5× 3.3	0.3								安山岩３
26	0027	剥片	12.0×16.5× 2.6	0.4		多	○	×	Ⅰ	120	B	ホルンフェルス１
27	0028	剥片	12.3×17.7× 2.5	0.6		多	○	○	Ⅰ	140		ホルンフェルス１
28	0030	Ｒ剥片	15.7×27.0× 5.6	2.2	5	平	×	×	Ⅰ、Ⅳ	85	L	チャート２
29	0032	礫	20.5×14.9× 8.9	3.2								凝灰岩１
30	0033	楔形石器	37.0×20.8×10.0	5.2	1	線	×	○	Ⅰ、Ⅲ、C			ホルンフェルス１
31	0035	礫	16.4×12.9× 6.6	1.5								砂岩１
32	0037	砕片	7.4× 9.3× 2.1	0.1								チャート３
33	0038	砕片	9.1× 8.8× 3.0	0.2								安山岩５
34	0039	剥片	18.0×14.8× 5.9	1.1		−	−	−	Ⅳ、C		H	安山岩２
35	0040	剥片	26.7×26.4× 8.0	4.0	15	多	○	×	Ⅰ	100		安山岩１
36	0041	剥片	24.6×12.0× 7.8	2.0		線	×	○	Ⅰ、Ⅳ、C			安山岩５
37	0042	剥片	13.0×10.3× 3.8	0.4		−	−	−	Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ		H	凝灰岩２
38	0043	剥片	12.1×11.3× 2.2	0.4		線	×	○	Ⅰ、C			ホルンフェルス１
39	0044	石核	41.6×30.1×46.0	42.0	33							安山岩４
40	0045	剥片	10.4×17.0× 2.7	0.6		線	×	○	Ⅰ		B	安山岩３
41	0046	砕片	5.5× 8.0× 1.4	0.1								安山岩１
42	0047	剥片	16.5×20.1× 5.4	1.9		−	−	−	Ⅰ、Ⅳ、C		H	安山岩６
43	0048	剥片	20.7×12.7× 5.5	1.2		−	−	−	Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ		H、L	安山岩１
44	0049	剥片	50.0×34.0×16.0	15.8	25	線	×	×	Ⅰ、C			安山岩２
45	0050	剥片	37.0×27.7× 8.1	5.9	23	−	−	−	Ⅰ、C		H、B	安山岩２
46	0051	剥片	23.0×30.5× 6.7	4.7	10	多	○	×	Ⅰ	110	M	安山岩１
47	0052	剥片	16.6× 9.9× 2.3	0.3		平	×	○	Ⅰ	110		安山岩３
48	0053	剥片	19.1×16.6× 3.4	1.0		平	×	○	Ⅰ、Ⅳ	120	B	安山岩３
49	0054	剥片	8.8×14.7× 2.8	0.4		点	×	×	Ⅰ、Ⅱ、C			安山岩５
50	0055	剥片	29.4×17.7× 6.7	3.0		平	×	○	Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ、C	80		安山岩５
51	0056	剥片	21.7×18.5× 7.2	2.4		平	×	×	C	130		安山岩６
52	0057	砕片	6.9× 6.2× 4.3	0.2								安山岩５
53	0058	Ｒ剥片	44.2×34.0×17.6	24.0	21	平	×	○	Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ、C	125		安山岩２
54	0059	剥片	20.1×27.3× 7.3	3.0		線	×	×	Ⅰ、C		B、L	安山岩４
55	0060	剥片	35.4×25.0×12.0	10.9	24	多	○	×	Ⅰ、Ⅱ、C	125		安山岩２
56	0062	剥片	28.0×17.5× 4.6	0.8		線	×	×	Ⅰ、C			安山岩３
57	0064	剥片	13.5×15.9× 4.1	0.6		平	×	○	Ⅰ	75		安山岩３
58	0067	剥片	16.1× 6.0× 3.6	0.3		−	−	−	Ⅰ		H	安山岩２
59	0068	剥片	38.0×14.5× 8.0	3.7	9	平	×	×	Ⅰ、Ⅲ、C	110		安山岩１

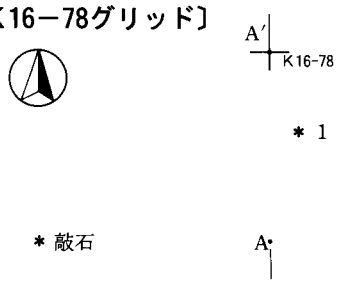
第13表　第６ブロック出土石器属性表　(2)

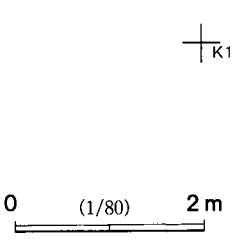
No.	遺物番号	器種	長さ×幅×厚さ (mm)	重量 (g)	図版番号	打面種類	打面調整	頭部調整	背面構成	打角 (°)	折面部位	母岩番号
60	J17−67−0069	石核	43.0×36.6×50.0	68.9	19							安山岩１
61	0070	砕片	6.5×13.8× 2.9	0.3								安山岩６
62	0073	剥片	12.9× 7.0× 3.0	0.8		−	−	−	Ⅰ、C		H	安山岩１
63	0074	R剥片	16.1×17.0× 6.0	1.5	4	−	−	−	Ⅰ		H、B	チャート２
64	0075	剥片	23.3×10.3× 7.1	1.2		線	×	○	Ⅰ、C		B	安山岩６
65	0076	剥片	37.9×32.9×14.0	12.5	32	多	×	×	Ⅱ、C	120	M	安山岩４
66	J17−68−0003	剥片	25.8×14.0× 7.3	2.2		多	○	×	Ⅱ、C	130		安山岩３
67	0004	剥片	16.4×10.7× 6.5	1.1		−	−	−	C		H	安山岩１
68	0005	敲石	60.0×41.7×39.0	121.7	35							安山岩７
69	0006	剥片	38.6×31.5×11.0	12.8	13	−	−	−	Ⅰ、C		H	安山岩１
70	0007	剥片	38.0×27.5×11.0	6.7	12	多	×	×	Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ	125		安山岩１
71	0008	剥片	14.7×14.8× 5.0	0.9		平	×	×	Ⅰ	110	L	安山岩５
72	0009	剥片	29.3×24.0× 3.4	5.6		平	×	×	Ⅰ、Ⅳ、C	80		安山岩２
73	0011	剥片	39.5×12.0×10.0	3.6	30	多	○	×	Ⅰ、Ⅱ、C	120	B	安山岩３
74	0012	剥片	15.3×19.3× 4.5	1.5		多	○	×	Ⅱ、C	110		安山岩５
75	0014	剥片	24.1×33.3×10.0	6.7	26	多	○	×	Ⅱ、C	105	R	安山岩２
76	0015	剥片	17.7×18.9× 4.3	1.2		平	×	○	Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ	110	B	安山岩６
77	0016	剥片	16.6×35.0× 7.0	3.2	29	−	−	−	Ⅱ、C		H	安山岩２
78	0018	剥片	21.6×12.8× 7.0	1.5		線	×	×	Ⅱ、Ⅳ、C			安山岩２
79	0021	剥片	12.0×21.3× 1.6	0.3		多	×	○	Ⅰ、Ⅱ	105		珪質頁岩１
80	0022	剥片	14.8× 9.7× 4.1	0.6		平	×	×	Ⅰ	80	L	石英１
81	0023	剥片	15.8×15.2× 1.7	0.4		−	−	−	Ⅰ		H	安山岩２
82	0024	剥片	27.4×31.5×11.2	7.5	18	−	−	−	Ⅱ、Ⅳ、C		H	安山岩１
83	0026	剥片	19.5×12.4× 4.8	1.1		多	×	○	Ⅰ、C	140		ホルンフェルス１
84	0031	楔形石器	37.9×25.5× 9.0	10.2	20	−	−	−	C		H	安山岩２
85	0032	剥片	56.0×34.1×17.5	4.0		平	×	×	C	85		安山岩６
86	0033	剥片	56.0×34.1×17.5	29.1	27	平	×	×	Ⅰ、C	120		安山岩２
87	0036	R剥片	12.2×17.3× 4.0	0.9	2	−	−	−	Ⅰ、C		H	黒曜石１
88	0044	剥片	30.4×42.2×25.0	36.9	34	C	×	×	Ⅰ、C	105		安山岩８
89	0048	剥片	16.4×22.2× 7.0	2.3		−	−	−	Ⅱ、C		H	流紋岩２
90	0051	剥片	18.3×12.4× 5.7	1.3		−	−	−	Ⅰ、C		H	安山岩５
91	0053	剥片	60.0×29.0×14.2	22.4	16	多	○	×	Ⅱ、C	115		安山岩１
92	0054	剥片	18.5×26.3×10.0	2.9		多	○	×	Ⅱ、C	70		安山岩５
93	0056	U剥片	17.3×24.1× 8.6	2.3	3	平	×	×	Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ	130	B	メノウ１

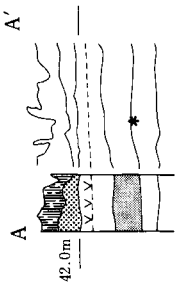
第14表　第３文化層全体石材別器種組成表

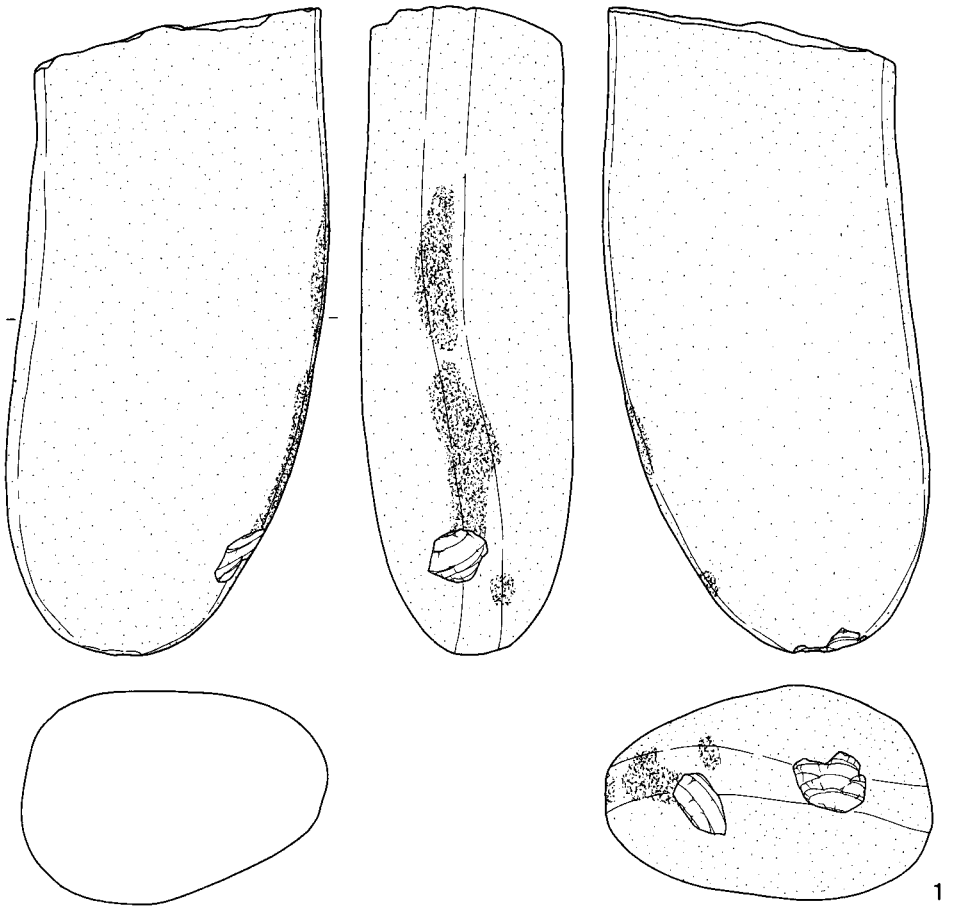
ブロック / 石材	楔形石器	石刃	R剥片	U剥片	剥片	砕片	石核	礫	合計	数量比
珪質頁岩				1					1	1.1%
チャート		2			2				4	4.3%
黒曜石		1							1	1.1%
メノウ			1						1	1.1%
石英				1					1	1.1%
凝灰石				1				1	2	2.2%
砂岩								1	1	1.1%
安山岩	1	1		62	7	2	1		74	79.6%
流紋岩				1				1	2	2.2%
ホルンフェルス	1			5					6	6.5%
合計	2	4	1	71	9	2	1	3	93	100.0%
組成比	2.2%	4.3%	1.1%	76.3%	9.7%	2.2%	1.1%	3.2%	100.0%	

〔K16－78グリッド〕

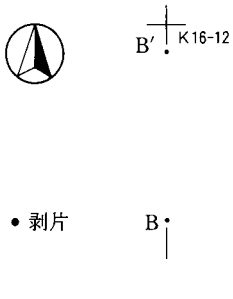


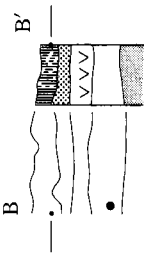


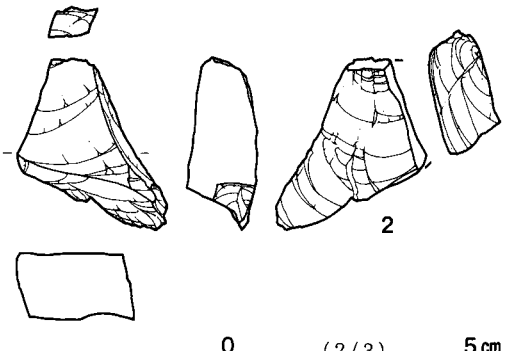




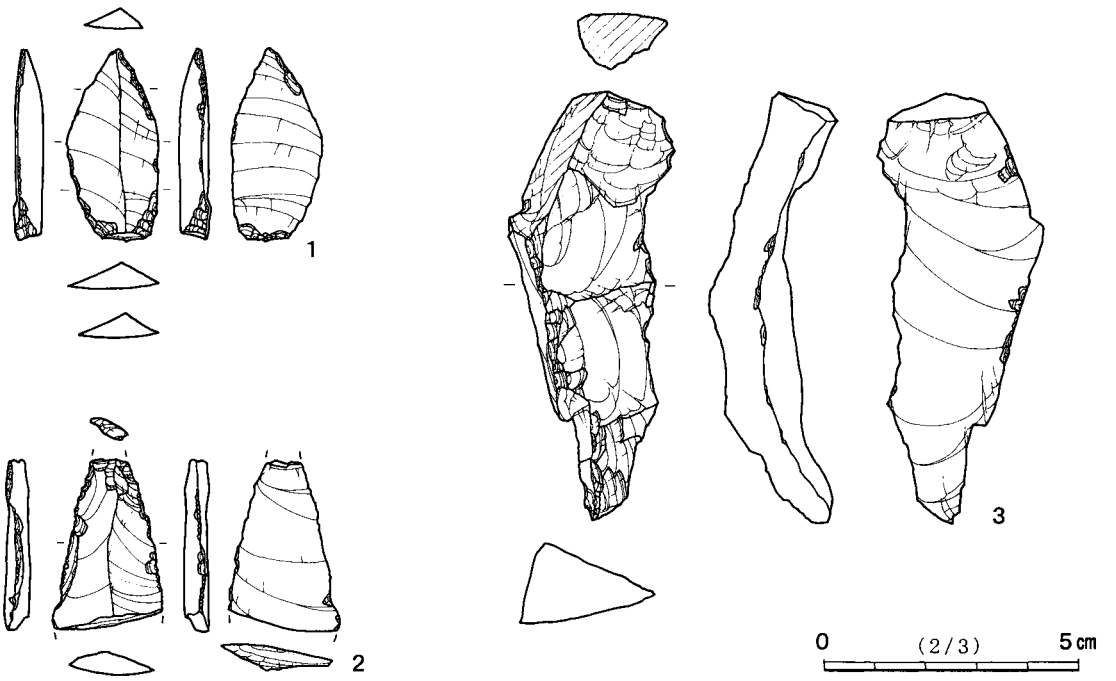
〔K16－12グリッド〕







第31図　単独出土遺物分布図、実測図



第32図　上層遺構出土遺物

第15表　単独出土石器属性表

No.	遺物番号	器種	長さ×幅×厚さ (mm)	重量 (g)	図版番号	打面種類	打面調整	頭部調整	背面構成	打角 (°)	折面部位	母岩番号
1	K16−12−0003	剥片	29.5×32.8×13.7	12.2	2	平	×	×	Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ	115	L	安山岩
2	K16−78−0003	敲石	165.5×85.8×55.6	1,120.0	1							砂岩

第16表　上層遺構出土石器属性表

No.	遺物番号	器種	長さ×幅×厚さ (mm)	重量 (g)	図版番号	打面種類	打面調整	頭部調整	背面構成	打角 (°)	折面部位	母岩番号
1	D−019−000	ナイフ形石器	38.6×18.1× 6.5	3.5	1	−	−	−	Ⅰ		H	珪質頁岩
2	M−019−001b	R剥片	33.2×21.5× 5.0	3.0	2	平	×	○	Ⅰ	120	M	頁岩
3	J16−55−000	U剥片	83.4×33.0×25.1	30.9	3	C	×	×	Ⅰ、Ⅳ、C	95		チャート

⑦安山岩３(30)　安山岩２よりさらに褐色味の強い石材で、気泡は少なく表面はかなり滑らかである。30は断面がほぼ正三角形を呈する縦長剥片で、背面の稜線上の加工痕がやや目立つ。
⑧安山岩４(31～33)　やや灰色みを帯びた濃褐色を呈する硬質な石材である。気泡は多いがローム成分の混入はほとんどない。31は背面片側に自然面を残す縦長剥片で、先端側は折断されている。32は断面三角形を呈する縦長剥片で、背面には右側からの剥離痕が目立つ。先端側は折断されている。33は石核である。ただし剥片剥離が行われた回数はあまり多くなく、上側を打面として数回行われた程度とみられる。
⑨安山岩７(35)　安山岩４に極めて類似しているが、状況から考えて同一であるとは考えられないので、別母岩とした。35はとりあえず敲石としたが、敲打された痕跡がほとんど観察されないため、剥片剥離を行おうとして何らかの理由で放棄した可能性も考えられる。
⑩安山岩８(34)　安山岩１に似るが、内部はかなり不均質で、節理も目立つ。34は一応剥片としたが、原石から石核を作り出すごく初期の過程で、石核を成形するために剥離された、調整剥片のようなものと考えられる。

４　その他の出土遺物

単独出土(第31図、図版47)

K16－18グリッドから敲石が１点出土している。出土層位はX層上部である。灰褐色を呈する硬質な砂岩を素材としている。縁辺部に敲打痕が点在している。破損しているため全体規模は不明であるが、敲石とするにはかなり大型であるため、台石として使われた可能性もある。

K16－12グリッドから剥片が１点出土している。出土層位はⅦ層下部である。灰褐色を呈する硬質な石材で、ローム成分の混入がやや目立つ。断面長方形を呈し、左側縁が折断されている。

上層遺構出土(第32図、図版47)

１はナイフ形石器である。チョコレート色といっていい濃褐色の硬質な珪質頁岩である。断面三角形で、打面側両側縁に基部加工が施されるほか、右側縁先端側に二次加工が施される。刃部には刃こぼれ状の微細な剥離痕が目立つ。２は二次加工のある剥片である。淡褐色を呈する硬質な珪質頁岩である。断面三角形で、両側縁に二次加工が観察される。先端側は折断されている。３は微細剥離痕のある剥片である。背面稜線を打点とする剥片剥離痕および加工痕が顕著である。打面は節理面となっている。両側縁に微細な剥離痕が観察される。

第33図　A地区縄文時代遺構配置図

第２節　縄文時代

縄文時代の遺構のほとんどは、Ａ地区の台地中央部から検出されている。この縄文時代の遺構の集中検出範囲は、約6,000㎡の面積を測り、竪穴住居跡14軒、炉跡２基、陥穴17基、土坑140基以上が検出されている。

１　竪穴住居跡とその出土遺物

Ｄ－００１住居跡(第34・35図、図版４・48)

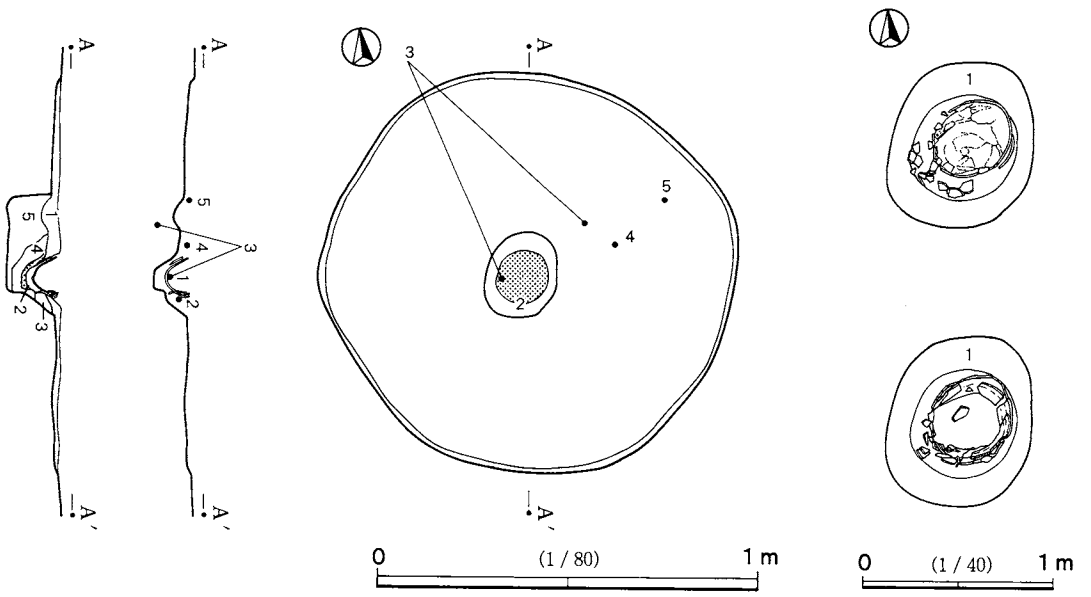
(遺　構)　縄文時代遺構集中範囲区の北西で、J16-90区に位置する。住居中央の炉跡付近はＰ－０４９土坑と重複するが、Ｐ－０４９土坑覆土を掘り込んで地床炉を設けているため、本住居跡の方が新しい。平面形はほぼ円形で、径4.1ｍを測る。ロームへの掘り込みは５㎝と浅く、壁は不明瞭である。炉は平均径85㎝で、床面へは40㎝近くの深さに掘り込まれている。加曽利Ｅ式のキャリパー形を呈する深鉢を埋設した埋甕炉である。埋甕は下半部のみが埋設され、上半の破片を炉壁との間に挟んでいる。

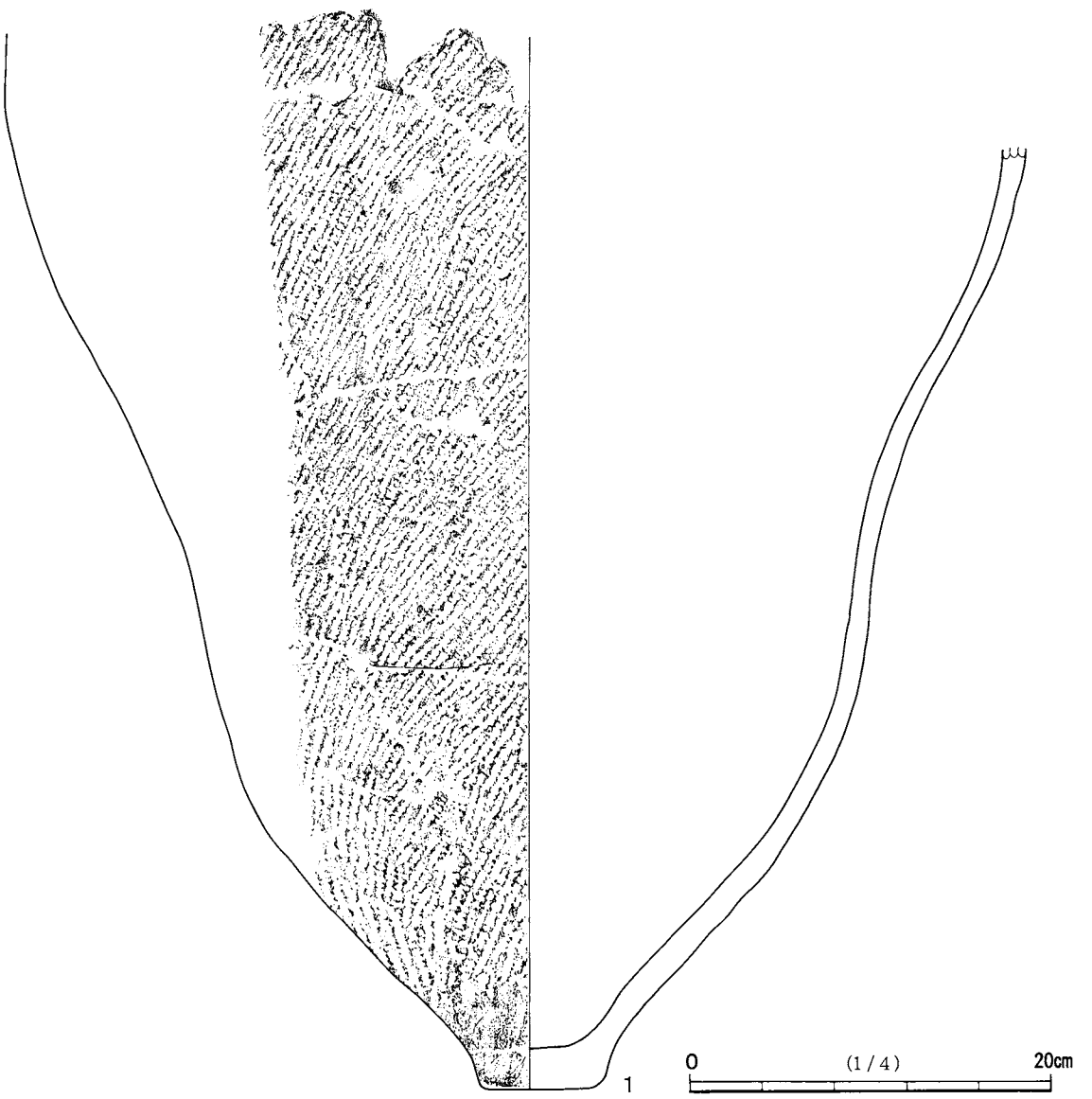
(遺　物)　埋甕として検出された炉体土器の他には、少量しか出土していない。１は底部付近を除く器面全体にＬＲ縄文が施されている。現存高58.0㎝、最大幅57㎝を測る大型の土器である。胎土中には砂粒の他、微量の雲母が混入している。２は口縁部に横位の浅い沈線を巡らせ、口縁部無文帯との区画がなされるものである。３は口縁部に巡る区画線が微隆起状の隆線により施され、微隆起線から浅い沈線により区画された磨消縄文帯が垂下する。４は屈曲する器形から頸部付近の破片と思われる。微隆起線により区画線状の文様が施されている。５は櫛歯状の工具によるものと思われる条線が施された胴部片である。６は径4.8㎝～4.9㎝を測る土製円盤である。周囲は丁寧な研磨調整が施されている。重さは30.1ｇである。

Ｄ－００２住居跡(第36～38図、図版５・48・49)

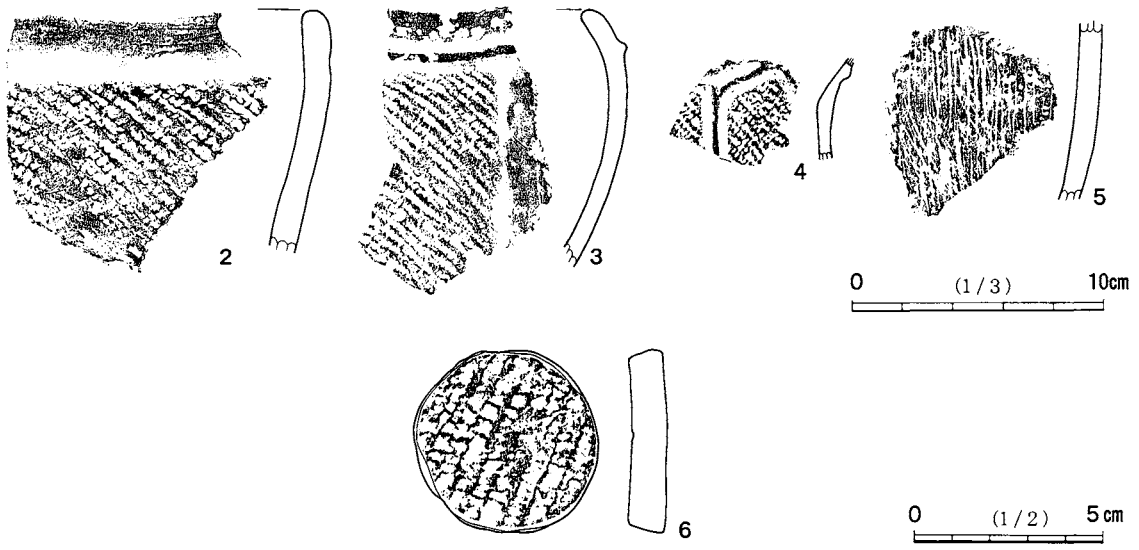
(遺　構)　縄文時代遺構集中範囲の中央に近いJ16-98区に位置する。平面形は楕円形を呈し、6.7ｍ×5.4ｍの規模を測る。ロームへの掘り込みは20㎝を測り、床面は硬く締まっていた。覆土は暗褐色土が主体となり、混入物にロームブロック等が認められないことから自然堆積と思われる。柱穴と思われるピットは４本が検出されている。いずれも深度は80㎝～90㎝の深いものである。４本の柱穴は比較的整った長方形状に配置され、その距離は東西方向約３ｍ、南北方向約1.3ｍである。また、住居の東壁付近に接する位置で径80㎝、深さ10㎝のピットが検出された。炉は住居のほぼ中央に掘られている。形状は楕円形に近く、100㎝×80㎝の規模を有する。北側が深く、40㎝である。南側は浅くテラス状となる。北側の掘り込みは、柱穴の対角線のちょうど交点上に位置する。炉内からは完形の深鉢形土器が倒れた状態で出土した。埋設されたものではなく、煮沸具として使用された土器が遺棄されたものと考えられる。

(遺　物)　加曽利Ｅ末期の土器を中心に比較的まとまって出土している。１は炉内から出土した波状口縁を有する深鉢形土器である。口径27.5㎝、最大径30.8㎝、高さ34.0㎝を測る。波状口縁の波頂部下に楕円形状の沈線区画文を単位文様として、波頂部間にも横に長い楕円形状区画文を配することで口縁部の文様帯を構成している。胴部はやはり沈線により区画された磨消縄文帯がＨ字状の構成をとる。縄文は、全て縦位回転施文の原体ＲＬである。２は推定胴部径30.0㎝を測る。文様の区画線は微隆起線による。その構成は垂下する無文帯を主体に、横位の微隆起線が連続している部分が認められることから、その部分にお



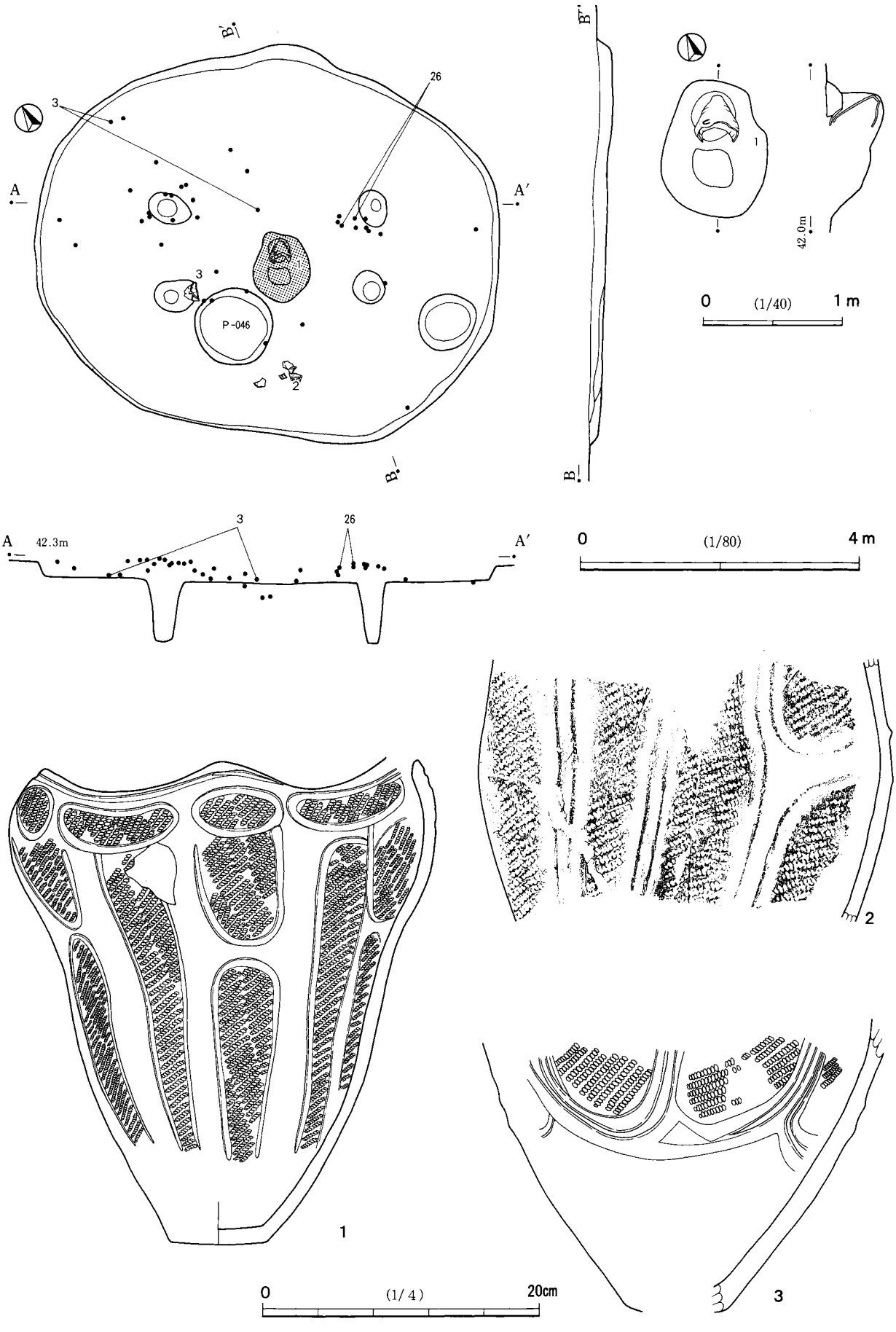


第34図　D-001住居・出土遺物（1）

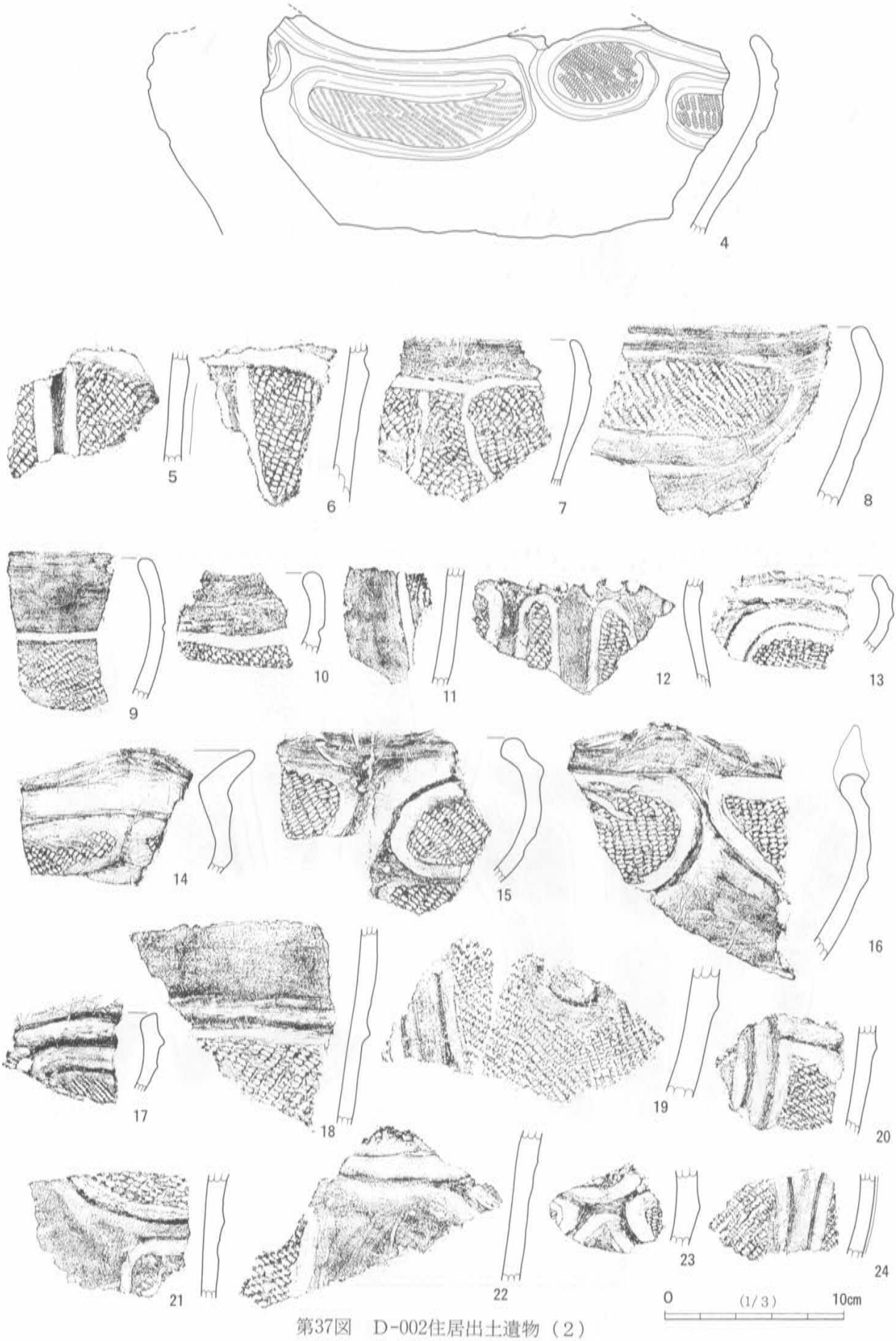


第35図　D-001住居出土遺物（２）

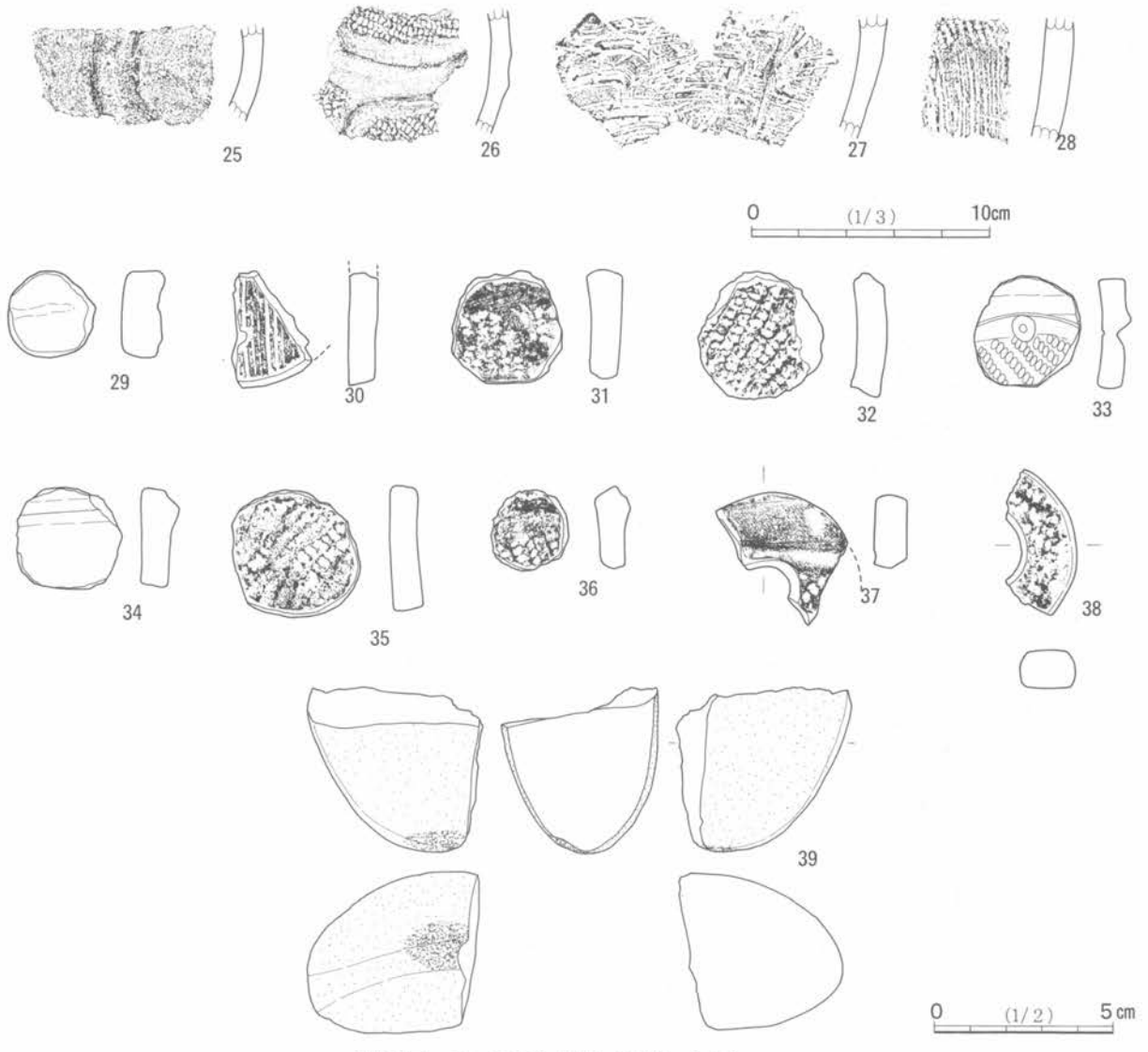
いてはやはりH字状の構成をとるものと考えられる。３は底部の破片である。縄文上に微隆起線による区画線が加えられているが、その構成は明らかでない。底部近くは無文となる。４は推定口径43.0cmを測る波状の口縁部片である。口縁部の文様帯を構成する沈線区画の配置は１と似たものとなるが、区画沈線が隣の区画文に連続し、１の構成が崩れたような印象を受ける。また頸部付近は無文であることが特徴的である。５以下は破片資料である。５・６は縦位に貼り付けられた隆帯が垂下するもので、隆帯に沿って沈線が加えられる。７は口縁部に無文帯を有し、口縁部以下は地文の縄文上に直接沈線文が施される。８は４と同様のタイプで、口縁部に沈線区画の文様帯を有し、頸部が無文帯となるものである。９・10は口縁部に横位１条の沈線を巡らせることにより、口縁部の無文帯を形成しているものである。11・12は沈線区画による磨消縄文帯により、文様が構成されているものである。13～26は区画線が微隆起線によるものである。13・17は緩い波状口縁を呈するもので、波状口縁に沿って微隆起線により区画された無文帯がU字状の単位文様を形成するものであろう。14は波状の口縁部が外反する器形を呈する。微隆起線に区画されるが、無文帯を持つものかどうかは不明である。15・16は口縁部に微隆起線による円形状の区画文が施されているものである。16の口縁部区画文下は無文となる。18は頸部付近の破片と思われる。隆帯を区画線とし、幅広の無文帯を形成する。19・20・23・24・26は隆起線区画により文様が表出されるものだが、全体の構成は不明である。21・22は頸部付近の破片であろう。上位には口縁部文様帯を形成すると思われる隆起線区画を持ち、胴部は沈線区画による磨消縄文帯が垂下する。25は無文地上に微隆起線区画のみが施されるものである。27は櫛歯状工具による条線文を地文風に施す。28は地文に単節縄文と条線文が併用されているものである。29～38は土製品である。29は径2.4cmである。周囲は研磨調整が施される。胎土に石英、雲母等を含むことから中期前半の土器片を利用したものと考えられる。重さは7.0ｇである。30は有孔土製円盤の破片と思われる。外周は研磨調整が施されている。条線文の施された土器片が利用されている。重さは5.7ｇである。31は径約3.0cmである。土器片の周囲は打欠により調整されている。重さは11.6ｇである。32は径3.5cmである。周囲は打欠調整である。重さは11.9ｇである。33は径3.0cmである。土器片の周囲は打欠調整後、一部分だけ研磨を施す。微隆起線区画の土器片が利用され、表面中央に径５㎜、深さ２㎜程の孔が穿たれ、内面中央にも径２㎜程の極めて浅い穿孔痕が残されている。重さは9.7ｇ



第36図　D-002住居・出土遺物（1）



第37図　D-002住居出土遺物（2）



第38図　D-002住居出土遺物（３）

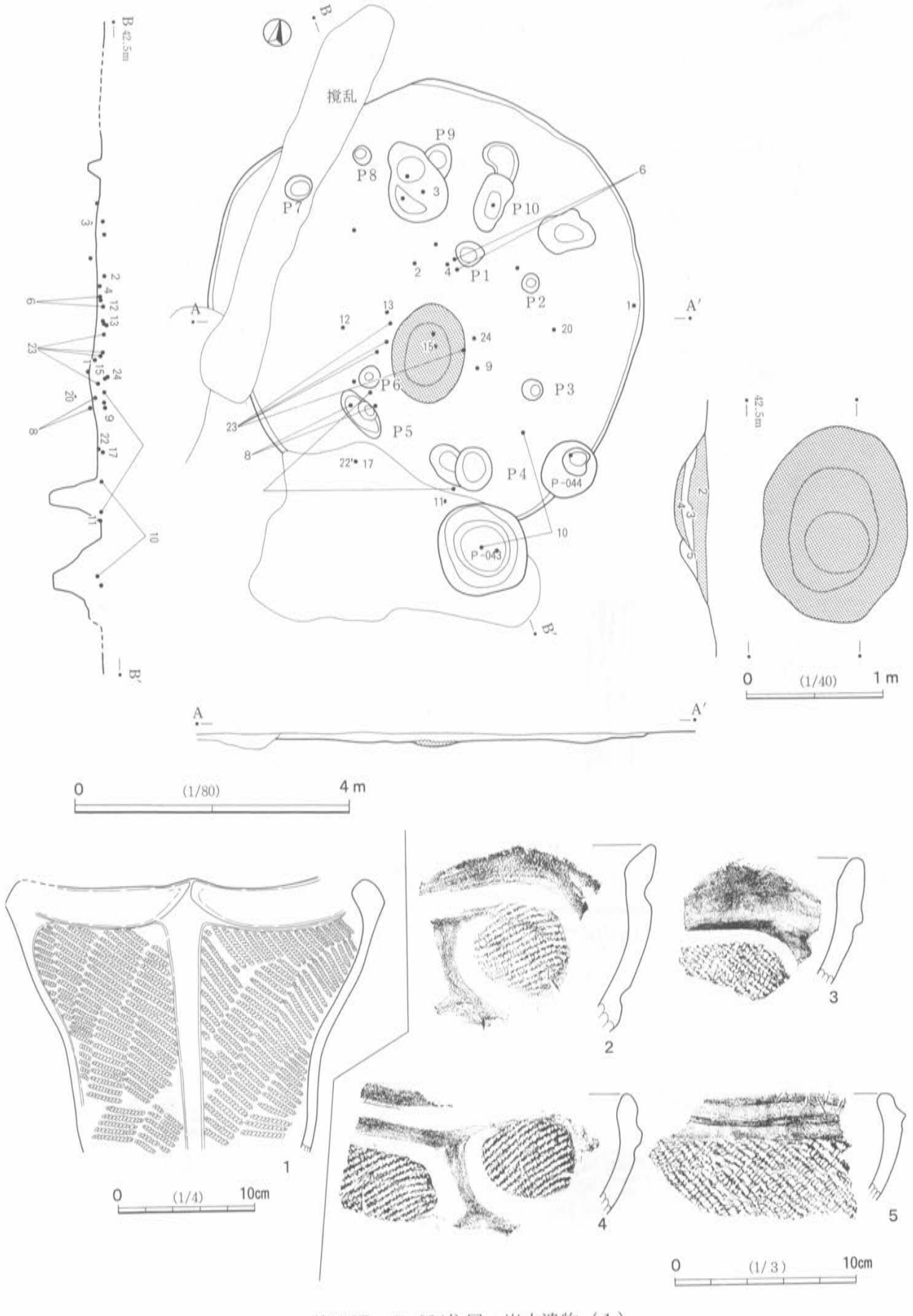
である。34は径2.8cm～3.0cmである。無文だが微隆起線を有する加曽利Ｅ末期の土器片が利用されている。周囲は軽く研磨されている。重さは9.7ｇである。35は径3.5cmであるが、整った円形とはならない。周囲は打欠調整後極めて軽い研磨が施されている。重さは14.5ｇである。36は径2.2cmと小型である。やはり微隆起線を有する土器片が利用されている。周囲は打欠調整である。重さは4.9ｇである。37・38は有孔土製円盤の破片である。37は推定外径5.0cm、推定孔径1.4cmである。沈線区画の磨消縄文帯を有する加曽利Ｅ式土器片が利用されている。重さは9.7ｇである。38は推定外径5.0cm、推定孔径1.8cmである。重さは7.8ｇである。いずれも外周及び内周共に極めて丁寧な研磨調整が施されている。39は硬砂岩の敲石の破片である。表面はかなり滑らかであるが、研磨したかどうかは不明。敲打された痕跡はそれほど顕著ではない。なお、縄文時代の石器の計測値についてはすべて第10表に掲載している。

Ｄ－００４住居跡（第39～41図、図版６・50・51）

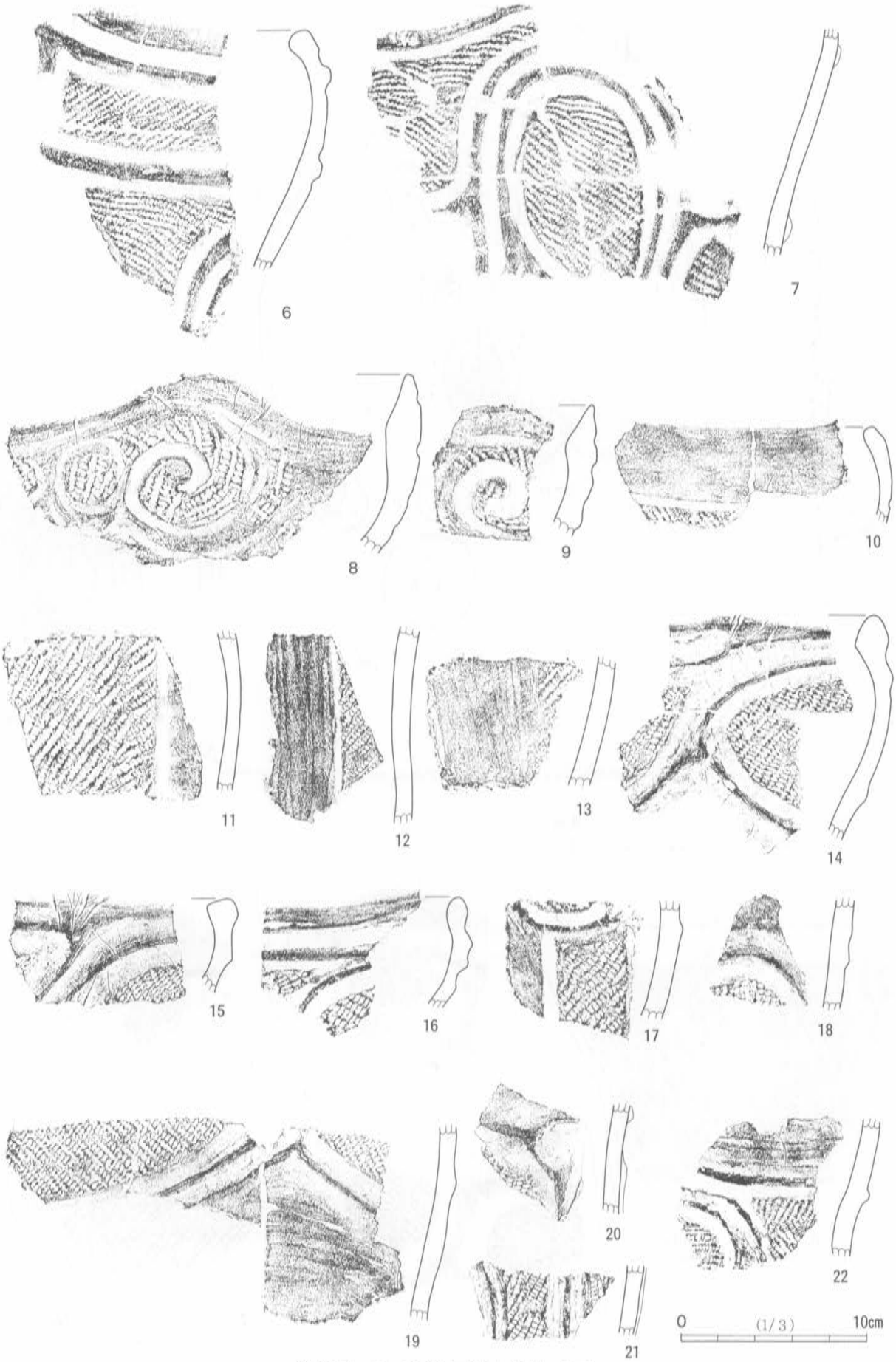
（遺　構） D-002住居跡の北に約12ｍで、J16-59区に位置する。住居跡の西側と南側が撹乱されている他、南壁付近はＰ－０４３・Ｐ－０４４土坑により破壊されている。平面形は円形に近く、径6.4ｍを測

る。残存する壁は10cmと浅く、覆土はロームブロックを混入する黒褐色土の単一層により覆われていた。床面は若干の凹凸があるが、極めて硬く締まった部分が認められる。柱穴は、住居の中央付近で炉を囲むように配置されるＰ１～Ｐ６が想定される。深度はＰ１から順に50cm、15cm、55cm、70cm、75cm、12cmである。また、このほかに北壁付近に位置するピット列の中にも柱穴としての機能を持つものがあるかもしれない。炉は住居中央よりやや南に寄って掘られている。楕円形を呈し、1.4m×1.1mの規模を有する。床面からの深さは約30cmであり、焼土は上下２層に検出されている。下位の焼土面は最初に使用された火床であり、再び古い火床の上に新しい炉が設けられたものと思われる。

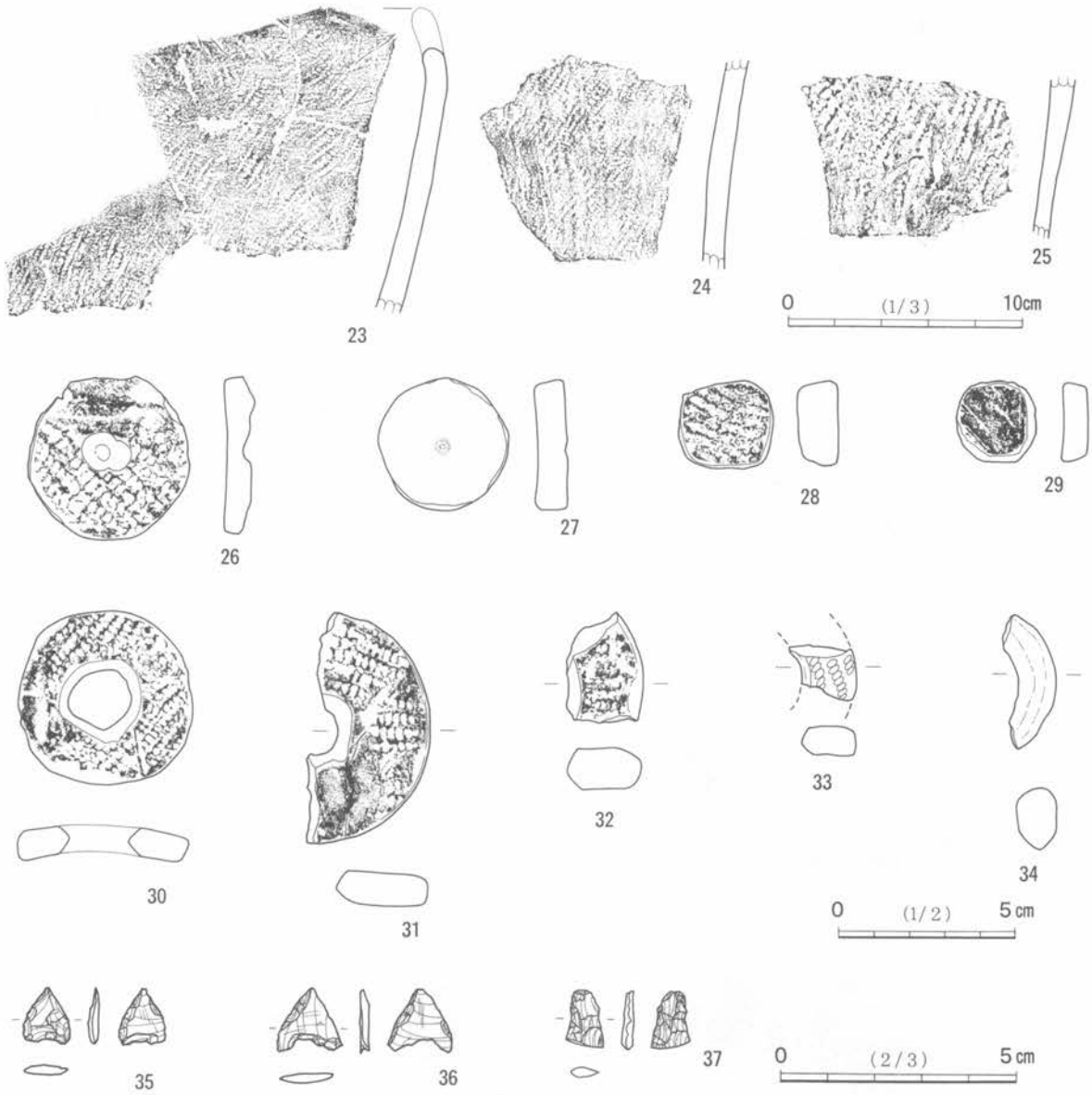
（遺　物） ほとんどが接合関係の少ない破片であるが、遺物は比較的多量に出土した。文様は隆帯で区画されるものが多い。１は推定口径25.5cmを測る深鉢形土器である。小突起状の波状口縁を有し、口縁部は微隆起線により区画された無文帯を形成する。この微隆起線の下位に沿って施されている沈線は、そのまま連続して波頂部下に垂下する磨消縄文帯を区画している。縄文原体は縦位に回転施文される単節ＬＲである。内面の上位は横位にミガキ状の調整が施されている。２・３は波状の口縁部片である。いずれも波頂部下には沈線で縁取られた隆帯による円形状の区画文を有する。４も波頂部を欠損する波状口縁の可能性があり、文様の構成は２・３と同様である。５は口唇下に沈線により縁取られた隆帯がある。６は隆帯により区画された口縁部文様帯を有し、胴部にも区画線と同じ隆帯により文様が表出される。７は波状口縁と思われるが、口縁部は欠損している。波頂部下に、隆帯を二重に施した円形状文を単位文様的に配している。８・９は波頂部下に沈線による渦巻文が施されている。沈線は地文の縄文上に直接描かれる。10は口縁部に横位の沈線を巡らせ、口縁部無文帯との区画をなす。11・12は沈線により区画された磨消縄文帯が垂下する胴部片である。13も磨消縄文帯が垂下するものだが、磨消縄文帯に沈線区画文が施されない。14～22は文様の区画が主として隆線により行われるものである。隆線はやや細身となり、指でつまみ上げるようにして施された沈線もあるが、これらの文様構成から判断すると、加曽利Ｅ末期の微隆起線とは区別されるものと思われる。23～25は縄文のみ施されているものである。23のみ口縁部片で、口唇下から器面全面に節の細かなＲＬ縄文が施される。26～34は土製品である。26は径4.5cmを測り、整った円形を呈する。微隆起線区画を有する土器片が利用されている。中心から少しずれた位置に径10mm、深さ３mmほどの孔が穿たれている。穿孔はやり直しが行われている。周囲は打欠調整後、軽く研磨が加えられている。重さは19.1ｇである。27は径3.6cmである。土器片表面の中央付近に極めて浅い穿孔の痕跡が認められる。周囲は丁寧な研磨調整が施されている。重さは16.5ｇである。28は径2.5cmを測るが、角が取れておらず方形に近い。周囲は軽い研磨調整を施す。重さは9.6ｇである。29は径2.2cm～2.4cmである。周囲は打欠調整後、部分的に研磨される。重さは5.1ｇである。30～34は有孔土製円盤又はその破片である。30は外径4.8cm～5.0cmである。検出時は半折していた。孔径は1.6cm～1.8cmである。内外周共に研磨調整が施されている。重さは22.4ｇである。31は推定外径6.6cm、推定孔径1.5cmである。微隆起線を有する土器片が利用されている。内外周共に研磨調整が施され、孔は両面から穿孔されている。重さは24.2ｇである。32・33は小破片である。やはり内外周は研磨調整が施されている。34は厚さ(高さ)1.7cmを測る。環状になると思われるが、あるいは土器の把手の可能性がある。35～37は小型の石鏃である。35はチャートを素材とし、平面形態は正三角形で抉りがない。36は黒曜石を使用し、基部にわずかに抉りが入る。37は破片資料である。チャートを使用している。一応細い方を先端部とみなしたが、脚部の破片の可能性もある。



第39図　D-004住居・出土遺物（1）



第40図　D-004住居出土遺物（2）

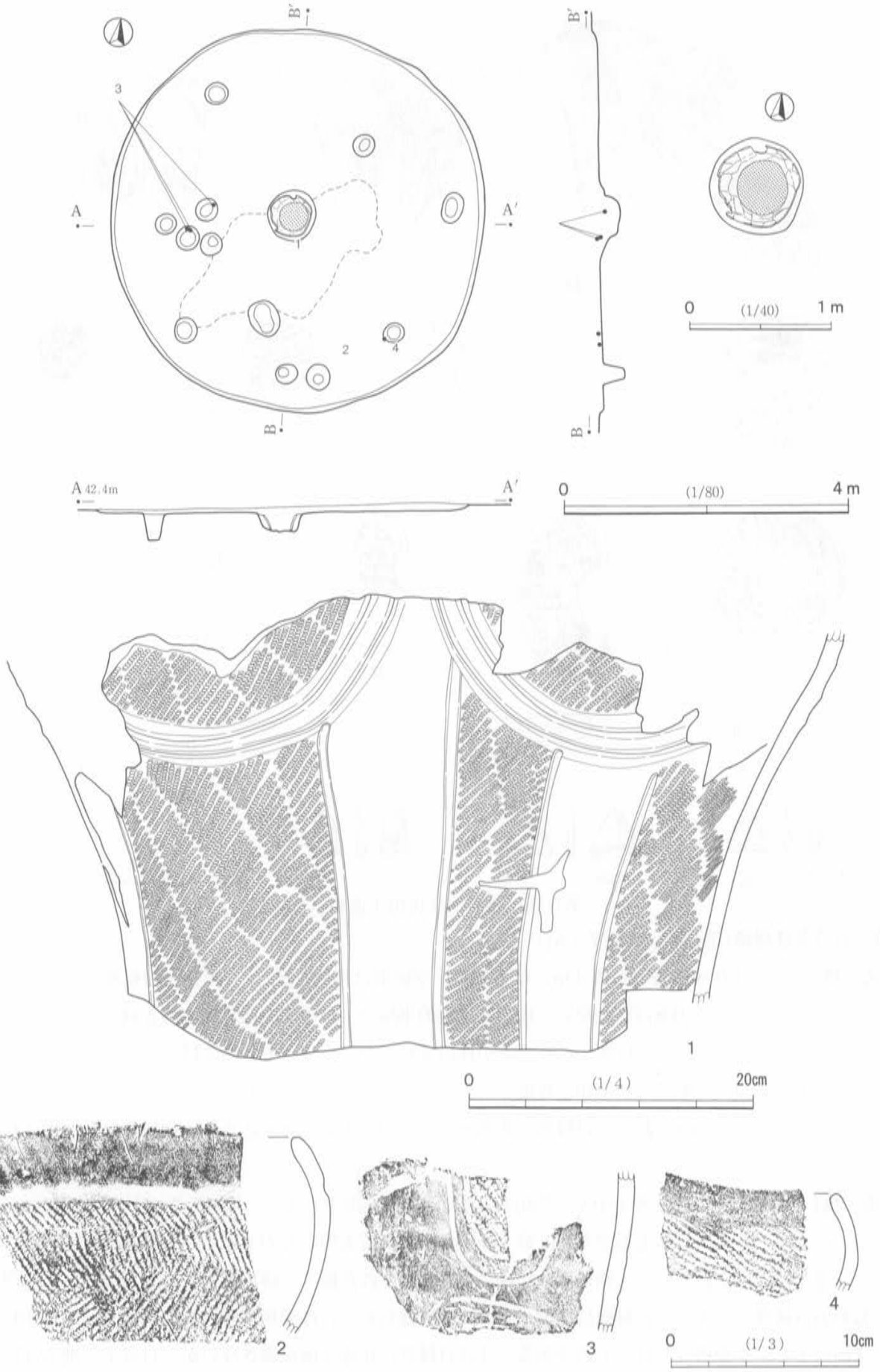


第41図　D-004住居出土遺物（3）

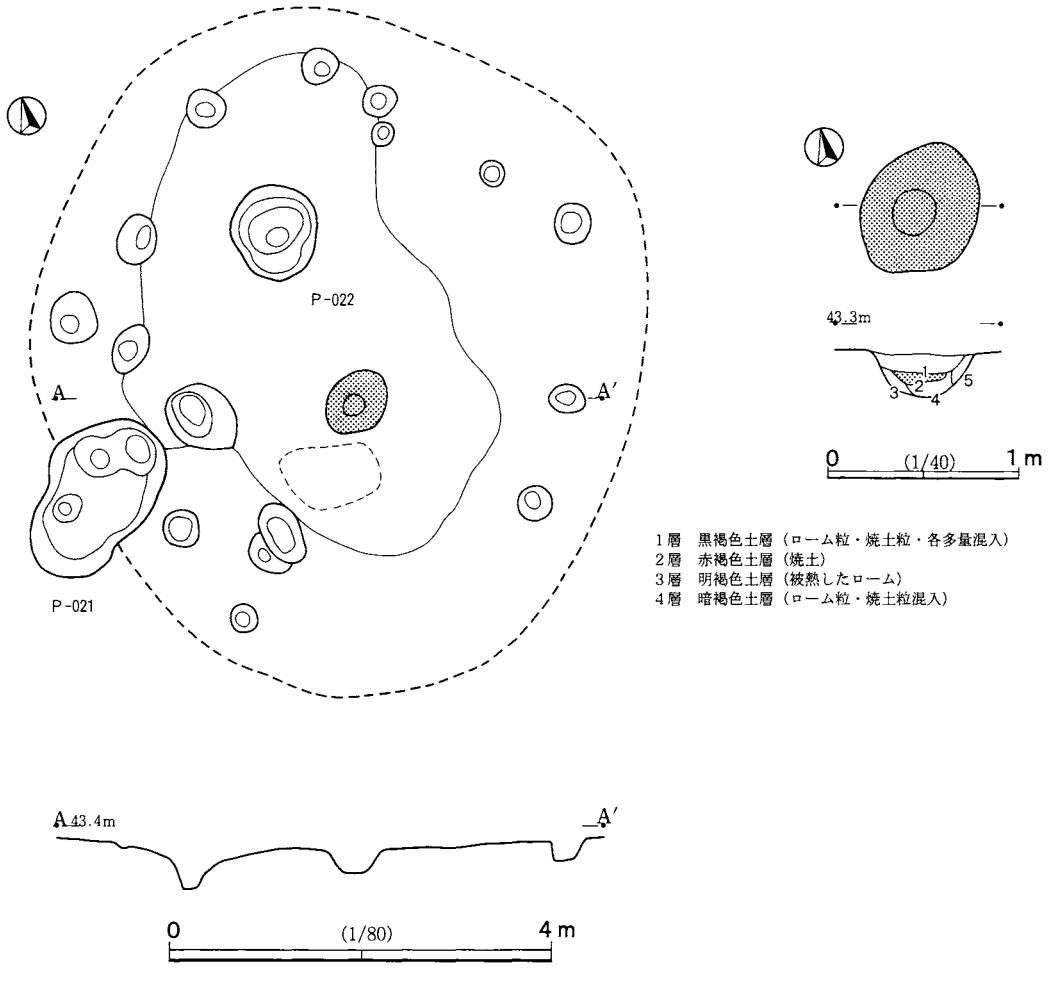
D－００５住居跡（第42図、図版７・51）

（遺　構）　D－００４住居跡の西４mに位置する。平面形は円形を呈し、径5.3mの規模を測る。確認できた掘り込みの深さは10cmに満たない。床面は比較的平坦で、炉の周囲は北側を除き硬く踏み締められていた。床面からは主に壁際に位置してピットが検出されている。ピットの深さは一定ではないが、南側のもので30cm～40cm、北側のもので10cm程度となる。炉は住居中央に位置している。炉の掘り込みは円形を呈し、径70cm、深さ25cmを測る。口縁部と底部を欠く大型の土器が埋め込まれ、炉壁として使用されていた。

（遺　物）　炉体土器の他に覆土中から250点以上の土器片が出土したが、磨耗したものも多く、図示できたものは少ない。１は炉体土器である。最大径58.0cmを測る大型のものである。口縁部の文様帯は、隆線により弧状に区画されている。胴部には沈線により区画された幅広の磨消縄文帯が垂下する。２は内湾する器形の口縁部片である。口縁部に横位１条の沈線を巡らせ、口縁部無文帯を形成する。３はU字状の沈線区画により文様が構成されるものである。４は口縁部に沈線区画を施さないが、口唇下の縄文は磨消さ



第42図　D-005住居・出土遺物



第43図　D-006住居

れ無文帯となる。

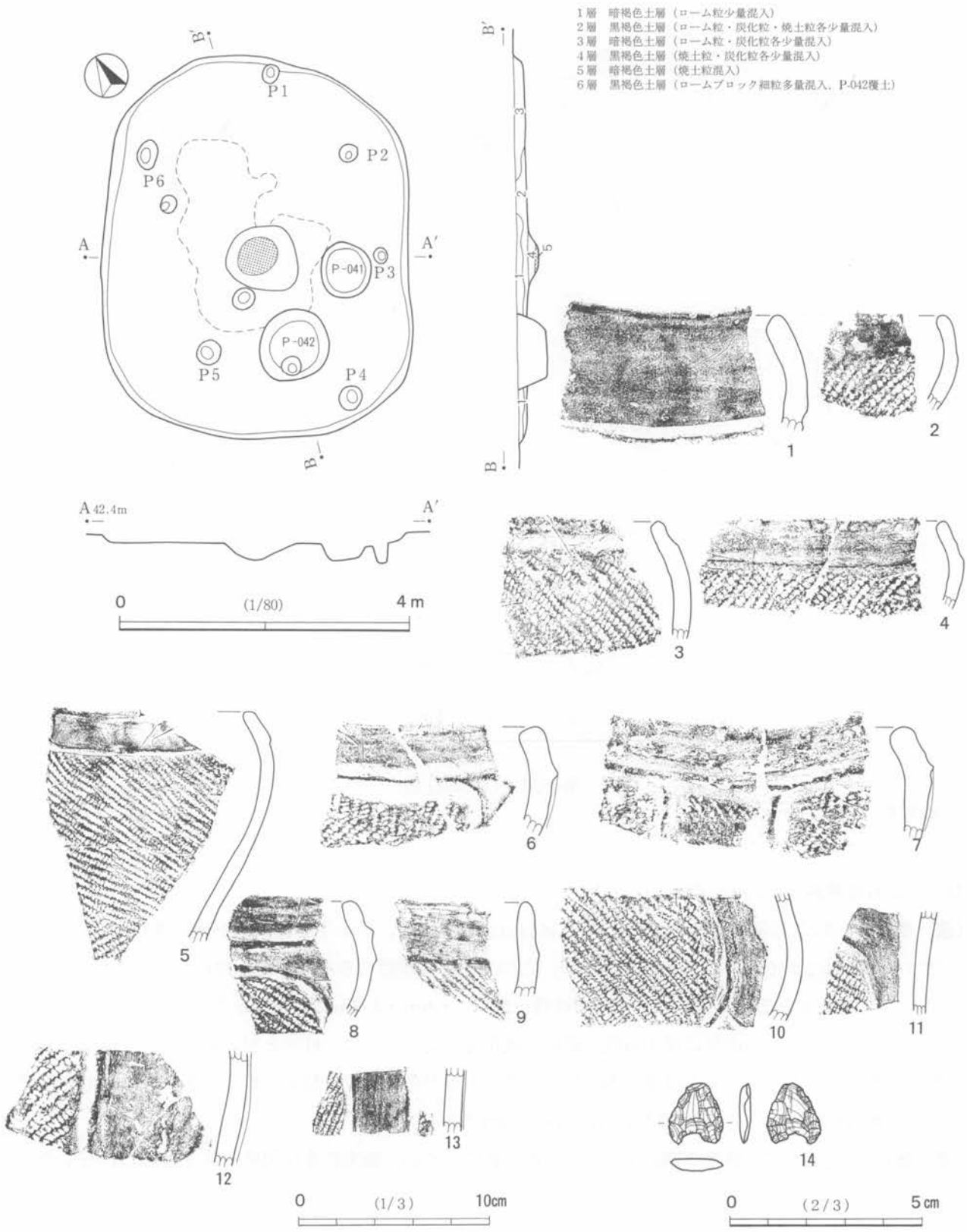
D－００６住居跡(第43図、図版７)

(遺　構) D-002住居跡の東に13mのK17-01区付近に位置する。炉を中心に床面が検出されてはいるが、周囲は削平されており壁等は残存していない。このため、住居跡の形状及び範囲は円形に巡るピット(柱穴)列からの推定である。推定される平面形は楕円形で、3.6m×3.3m位の規模を有するものと思われる。床面は凹凸があり、炉の南側に径１m程の範囲で硬化面が認められた。柱穴と思われるピットは壁のやや内側に巡るようである。ピットは深さ20cm以内の浅いものが多い。炉は想定される住居中央よりもやや南に寄って掘られている。その規模は径70cm、深さ25cmである。

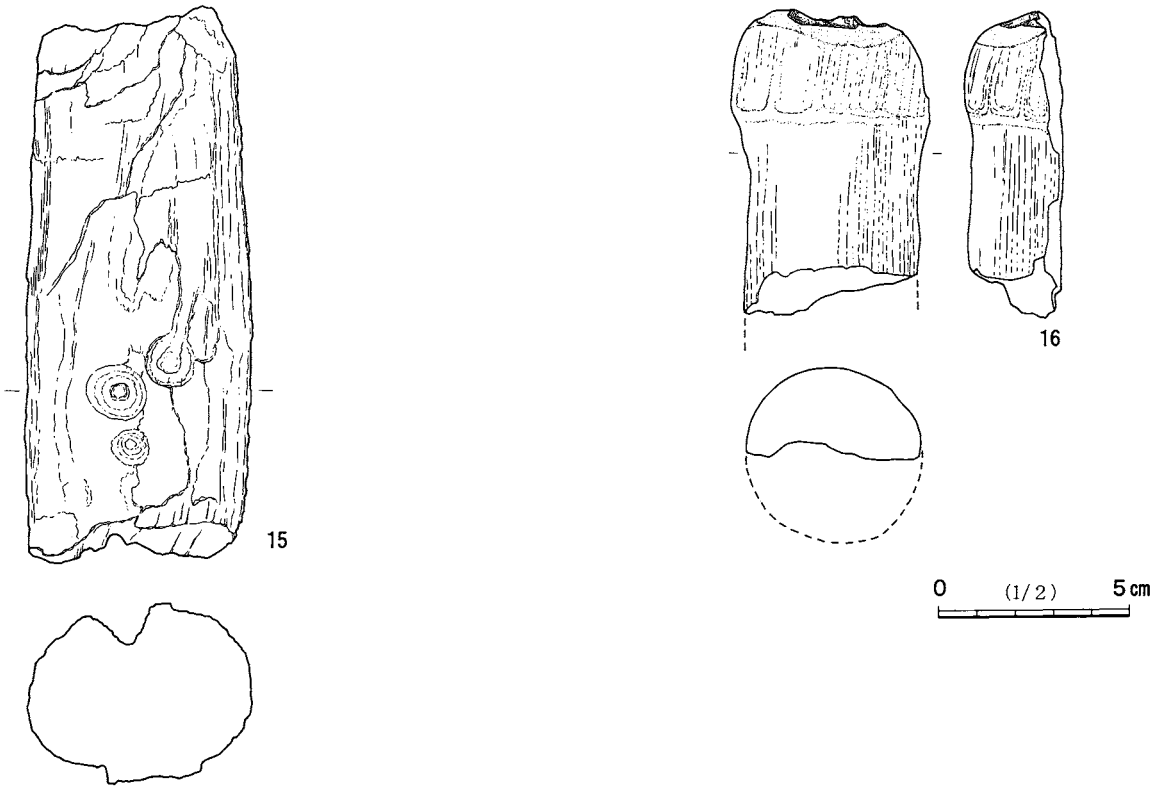
(遺　物) 周辺から縄文時代中期の土器片が検出されているが、確実に本住居跡に伴うと思われるものは少ない。

D－００７住居跡(第44・45図、図版８・52)

(遺　構) Ｄ－００５住居跡の南に５mのJ16-85区付近に位置する。本住居跡の埋没後、Ｐ－０４１・Ｐ－０４２土坑が床面を掘り込んでいる。平面形は楕円形を呈し、5.2m×4.2mの規模を測る。ロームへの掘り込みは約20cmで、覆土は暗色系の土が主体的である。覆土中にロームブロック等の混入は少ない。



第44図　D-007住居・出土遺物（1）



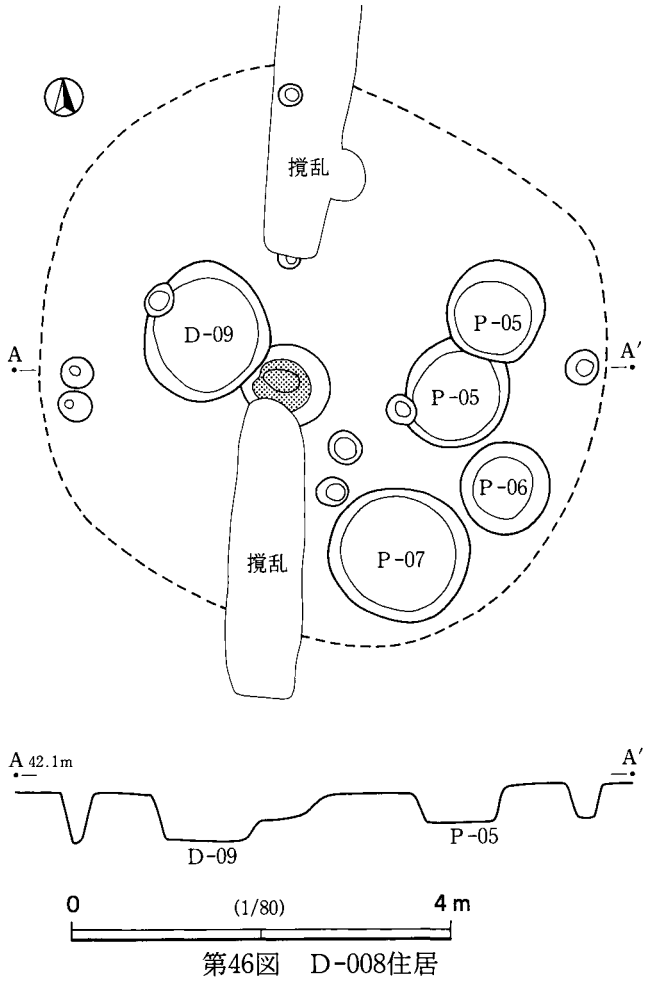
第45図　D-007住居出土遺物（２）

床面は炉の周囲が特に強く踏み締められた様子であった。床面から検出されたピットのうち、配置から柱穴と考えられるものはＰ１～Ｐ６である。深さはＰ１から順に30cm、30cm、27cm、15cm、60cm、35cmである。炉は住居の中央に位置する。円形の掘り込みで、径80cm、深さ20cmを測る。炉内に残存した焼土は比較的少量であったが、火床は強く熱を受け硬化している。

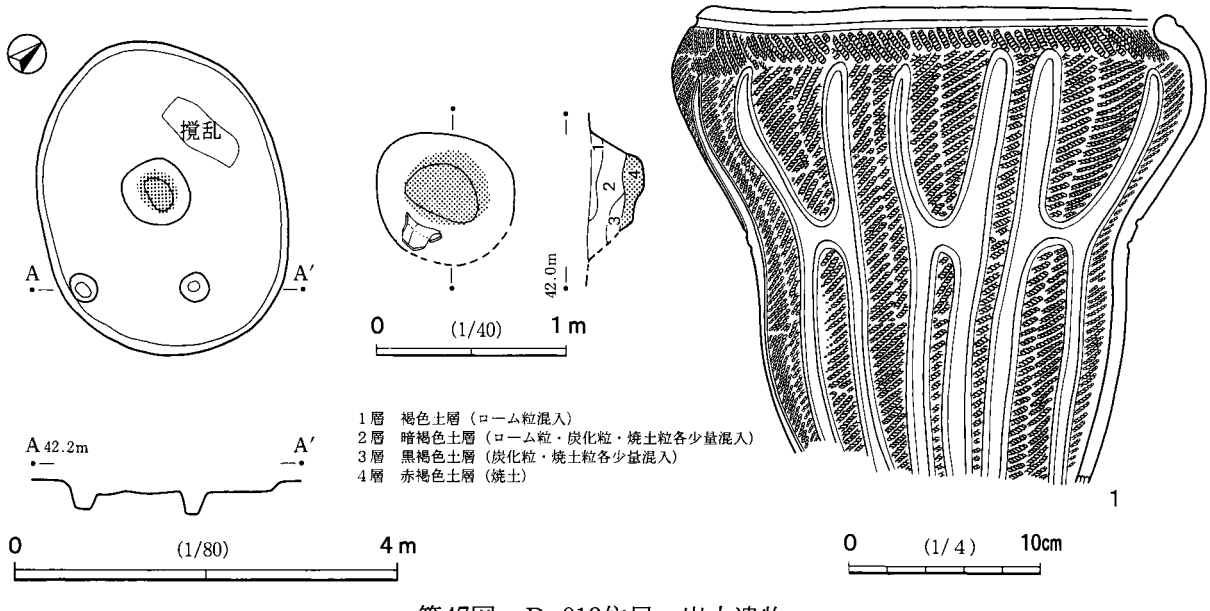
（遺　物） 覆土中から400点以上の土器片が出土したほか、石棒片等が出土している。１は口縁部に横位の沈線区画を施し、幅広の口縁部無文帯を形成するものである。口唇部と口縁部外面の一部に赤彩の痕跡が認められる。２も口縁部に無文帯を有するが、区画線を施さないものである。３の横位沈線はやや幅広となり、施文される縄文は横位回転施文の単節ＲＬである。４は口縁部を区画する横位の沈線が弱く不明瞭なものである。５は口縁部に横位の沈線区画文を施すが、沈線に沿って無文帯側が微隆起線状に少し盛り上がっている。６・７は同一個体の可能性がある。微隆起線により口縁部の文様帯を区画し、縄文施文部と磨消縄文部を分けている。８～13も同様の手法により磨消縄文帯を区画し、文様を構成している。14は黒曜石の石鏃である。先端が破損しており、基部に抉りが入る。15、16は石棒の破片である。15は緑泥片岩で作られており、かなり大型のものであったと推測されるが、両端とも折断されており全体形状はうかがえない。石皿にみられるような円錐形の窪みが３カ所ほど観察される。16は雲母片岩を素材とし、基部が折断されているほか、節理に添って半分に割れている。男根状に成形され、先端部には敲打痕が観察される。

Ｄ－００８住居跡（第46図・図版８）

（遺　構） Ｄ－００１住居跡の東に12mのJ17-04区付近に位置する。住居内も含め付近には土坑群が密集



第46図　D-008住居



第47図　D-012住居・出土遺物

している。掘り込みが極めて浅い上に削平の影響があり、床面及び壁の立ち上がりは検出されなかった。推定される住居平面形は楕円形で、6.0m×5.5m位の規模を有するものと考えられる。本住居跡に伴うと思われるピットは壁際及び炉の南東付近で検出されている。配列に規則性は認められないが、深さは35cm～50cm以上を測り、比較的しっかりとした掘方である。炉は住居のほぼ中央に位置する。100cm×80cmの楕円形で、深さは20cmを測る。炉内には強く熱を受けたと見られる焼土が堆積していた。

（遺　物） 住居内から出土した遺物は極めて少量で、図示できるものはなかった。

D－012住居跡（第47図、図版9・53）

（遺　構） 検出された縄文時代住居跡の中では唯一、縄文時代遺構集中範囲区から遠く離れたL20グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は3.2m×2.5mと比較的小型である。ロームへの掘り込みは10cm前後と浅い。床面は耕作による撹乱が著しく、壁も不明瞭である。床面から2本のピットが検出されている。いずれも深さ30cm前後を測る。炉は住居の中央に位置している。円形の掘方で、径75cm、深さ30cm近くを測る。炉底面は強い熱を受けている。

（遺　物） 炉内と炉の南側に集中して出土した。これらはほとんどが接合し、復元できたものが1の土器である。1は口径23.8cm、現存高24.0cmを測るキャリパー形の深鉢である。口縁部は強く内湾する器形を呈している。文様の施文は口縁部に横位、胴部に縦位の単節RL縄文を施した後、沈線により口唇下部に横位、胴部にH字状の区画文を描出するものである。外面下半部は熱を受け、色調が赤変している。底部のみ欠損しており、炉体土器として使用されていた可能性が考えられる。

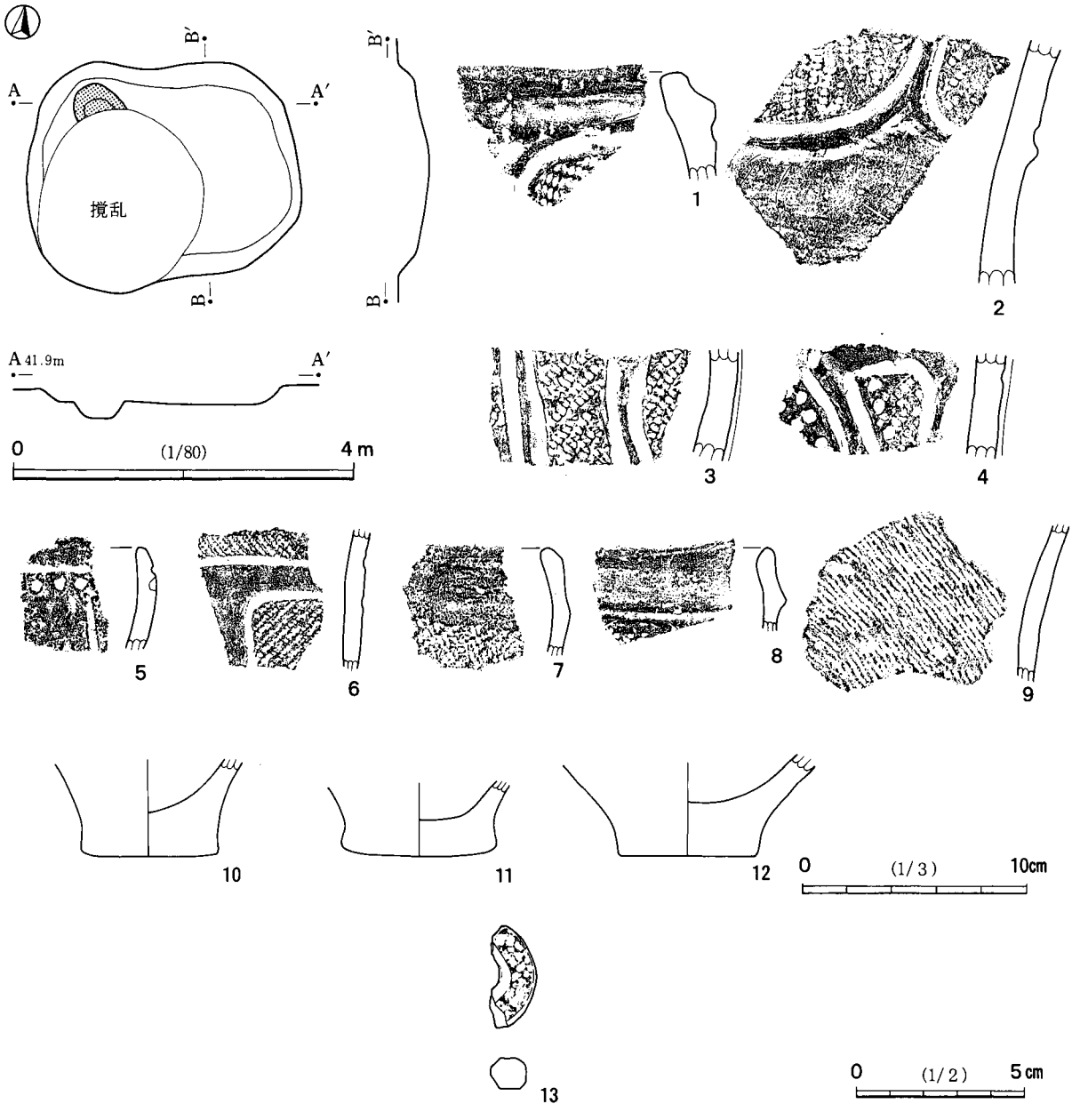
D－026住居跡（第48図、図版9・52）

（遺　構） 縄文時代遺構集中範囲の南西で、J17-65区付近に位置する。住居跡の半分近くに及ぶ大きな撹乱を受けている。平面形は不整楕円形である。3.2m×2.6mの規模を測り、深さは20cm～30cmである。炉は住居の北西付近に位置する。床面からの深さは約20cmである。

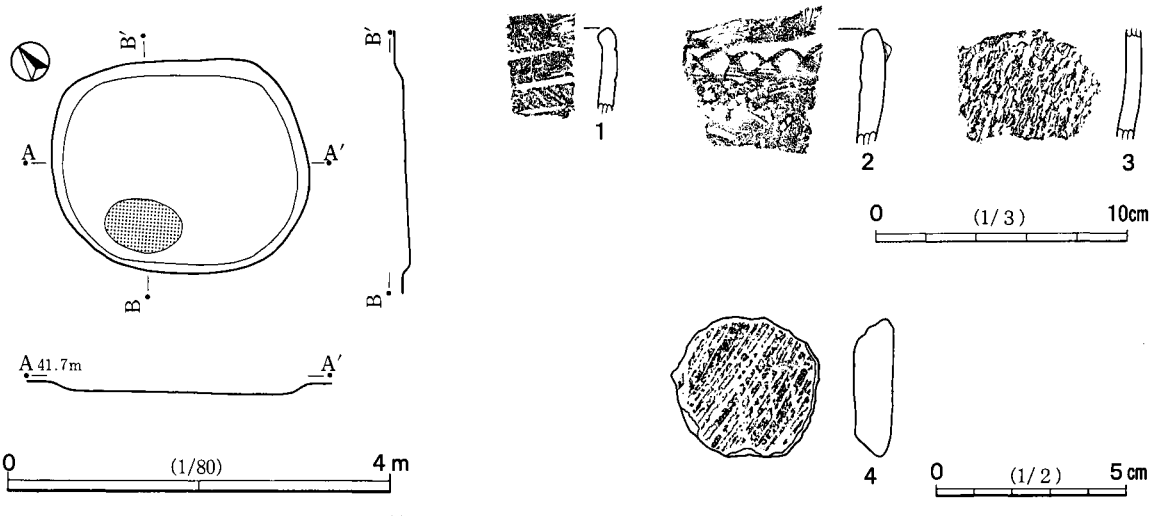
（遺　物） 覆土中から約150点の土器片と、石鏃及び剥片等も多く出土している。1～4は沈線により縁取られた隆帯が文様を区画するものである。どれも全体の構成は明らかではないが、2の隆帯区画は大きな弧状を呈するものであろう。5は口縁部の小破片で、口唇下の沈線に沿って円形の刺突文列が巡る。6は浅い沈線により磨消縄文帯をT字状又はU字状に区画するものである。7は口縁部に沈線等の区画文を持たずに口縁部無文帯を形成するものである。8は緩い波状口縁を呈するもので、口縁部の区画文は微隆起状となる。9は全面に無節R縄文が施される胴部片である。10以下は底部である。10は底径8.0cmを測る。外面は赤褐色を呈し、縦位の細かなミガキ状の調整が施される。11は推定底径8.8cmを測る。底面は若干丸みがある。12は推定底径7.9cmを測る。外面は細かなミガキ状の調整が施されている。13は有孔土製円盤片である。推定外径3.5cm、推定孔径1.1cmである。内外周共に研磨調整がなされる。

D－027住居跡（第49図、図版53）

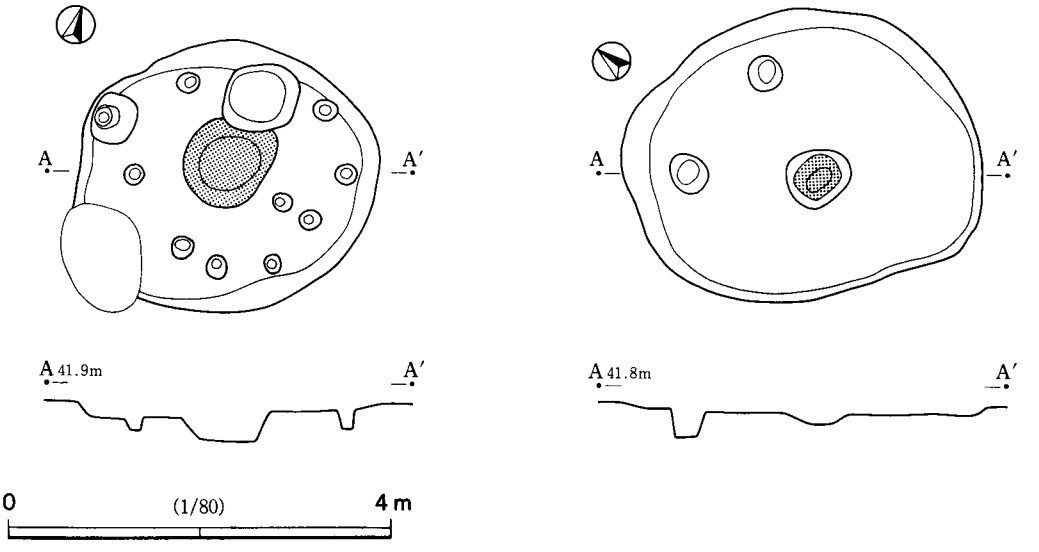
（遺　構） D－026住居跡の南に1.5mで隣接する。平面形は楕円形で、2.7m×2.2mの規模を有する。ロームへの掘り込みは10cmほどで、覆土は暗黄褐色土の単一層である。壁の立ち上がりは緩やかで、炉の周辺に炉の周辺を除き、床面は軟質である。炉の掘り込みはなく、80cm×60cmの楕円形の範囲の中に焼土



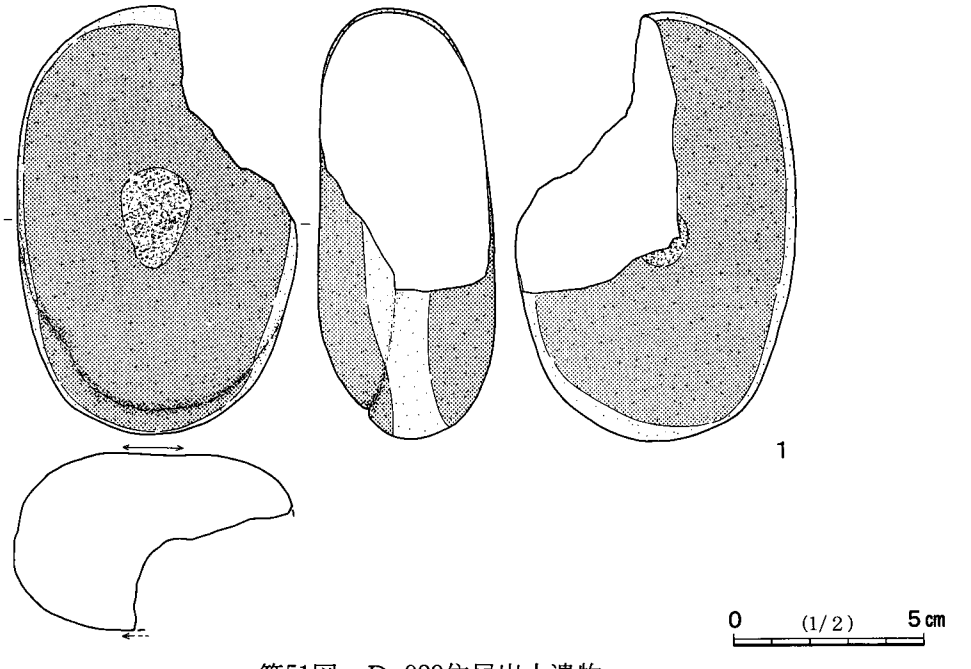
第48図　D-026住居・出土遺物



第49図　D-027住居・出土遺物



第50図　D-028・D-029住居



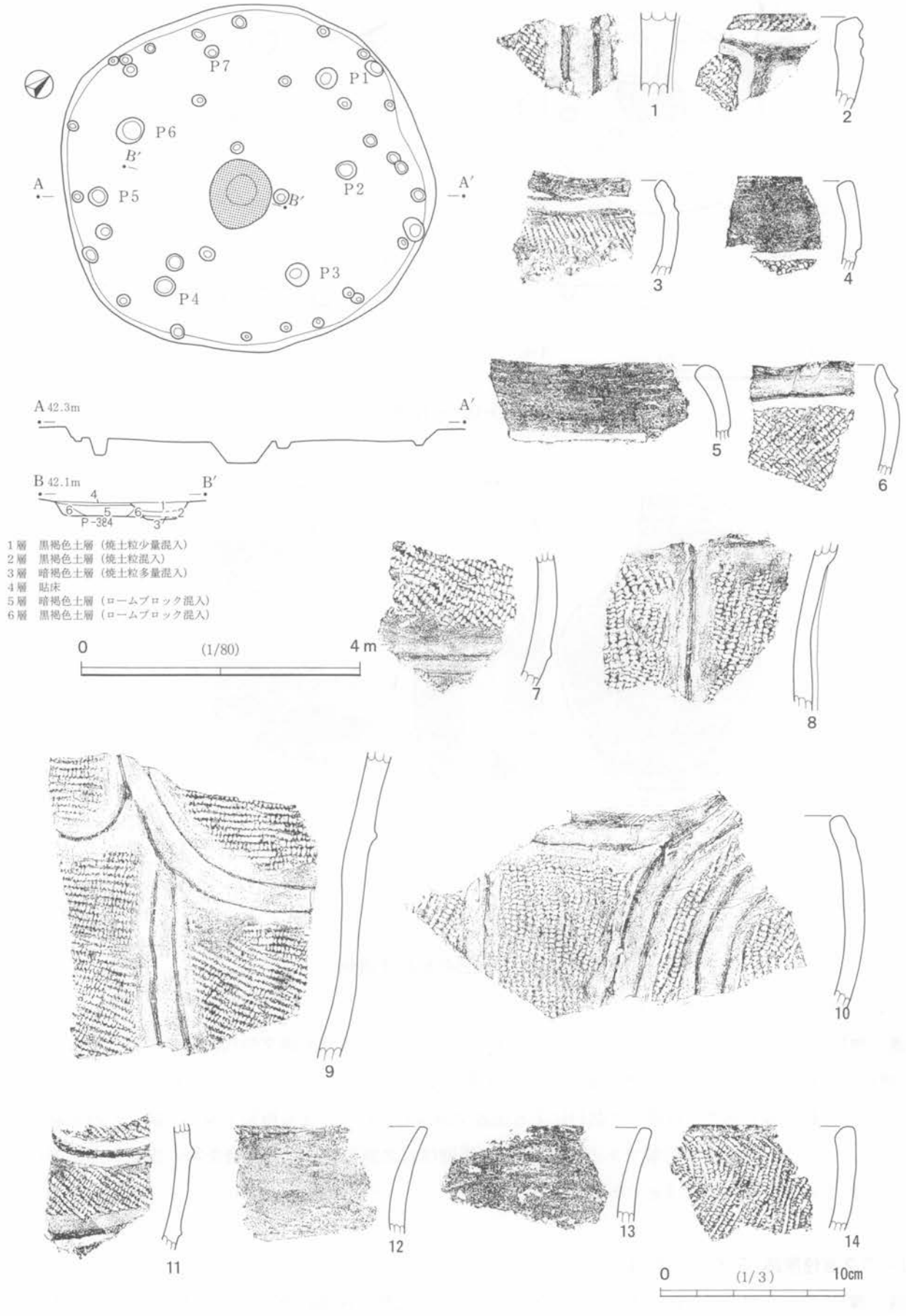
第51図　D-029住居出土遺物

が薄く堆積していた。

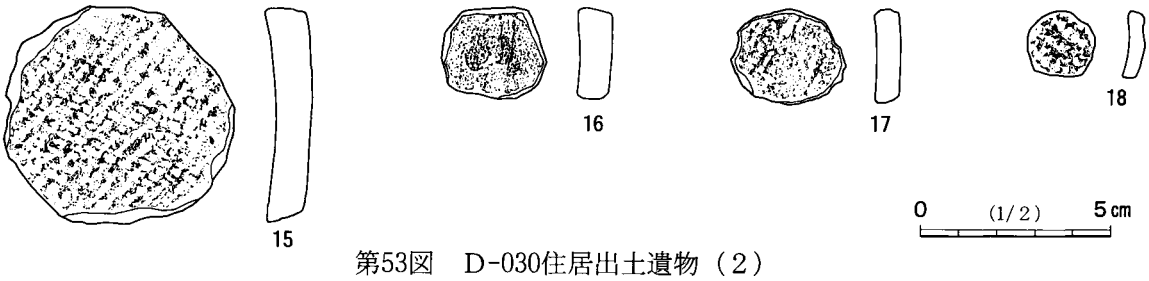
（遺　物） 土器片10点ほどが出土している。図示できたものはいずれも縄文時代後期の土器片である。1は横位の沈線により区画された磨消縄文帯と縄文帯が交互に施されている。加曽利B式の精製土器である。2は粗製土器である。口唇下に貼付による紐線文が巡らされる。3も粗製土器で、縄文のみが施される胴部片である。4は土製円盤である。径3.7cmで周囲は打欠調整である。集合条線の施された土器片が利用されている。重さは17.1gである。

D－028住居跡(第50図、図版10)

（遺　構） D－027住居跡の東4mに位置する。住居の北側と南側はそれぞれP-345土坑、性格不明の



第52図　D-030住居・出土遺物（1）



第53図　D-030住居出土遺物（２）

落ち込みにより一部破壊されている。平面形は楕円形を呈し、3.2m×2.8mの規模を有する。床面はハードローム層を掘り込んでいるが、深さは10cm程度である。炉の周囲は硬く踏み締められている。柱穴と思われるピットはほぼ円形に配列されている。深さは20cm前後のものがほとんどであるが、西側に位置する上場径の大きなものだけ50cmを測る。炉は住居中央に位置し、径1.0m、深さ25cmを測る。比較的小型の住居規模に対し、炉は大型である。炉内には多量の焼土が残存していた。

（遺　物） 極めて少量で、図示できるものはない。

Ｄ－０２９住居跡(第50・51図、図版10)

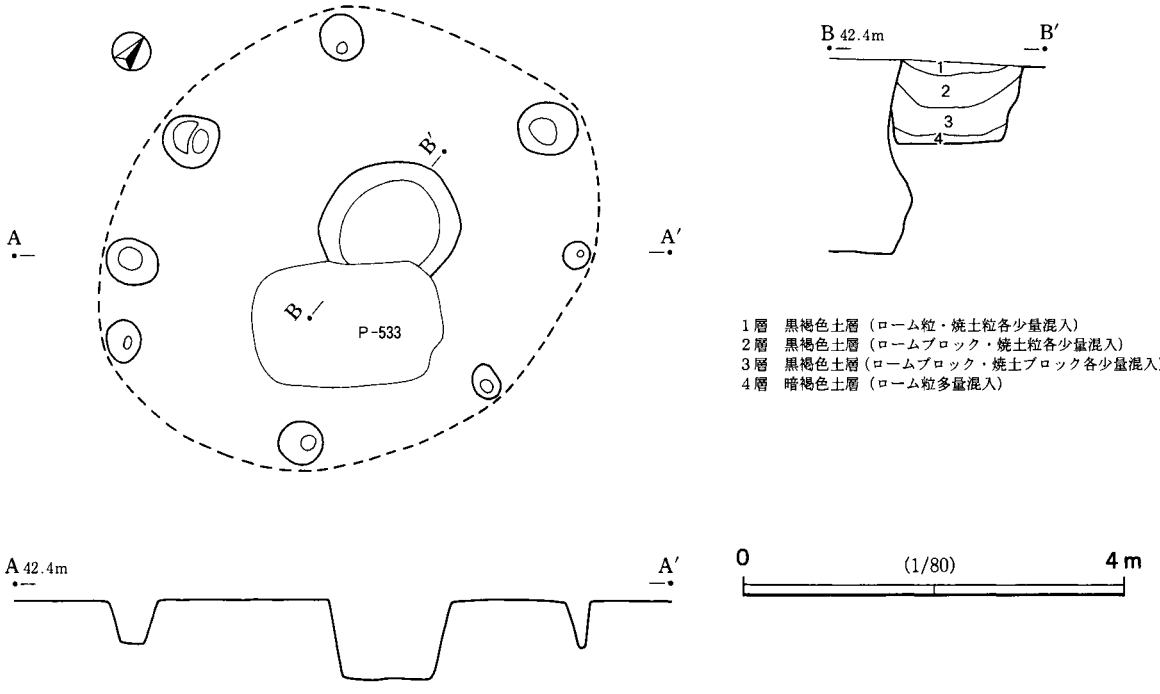
（遺　構） Ｄ－０２８住居跡の南５ｍに位置する。平面形は楕円形で、3.8m×3.1mの規模を有する。ロームへの掘り込みは極めて浅く、５cmほどである。このため壁の立ち上がりは不明瞭である。床面は特に強くとはいえないが、踏み締められている。ピットは住居北側で、深さ20cmのものが２本検出された。炉は住居中央付近に位置し、径65cm、深さ10cmを測る。

（遺　物） 覆土中から50点ほどの土器片が出土したが、小片がほとんどで図示できるものはない。１は花崗岩の磨石である。ほぼ全面に研磨痕が観察されるほか、中央部には敲打された痕跡がみられる。裏面中央部への敲打が原因で割れた可能性が考えられる。

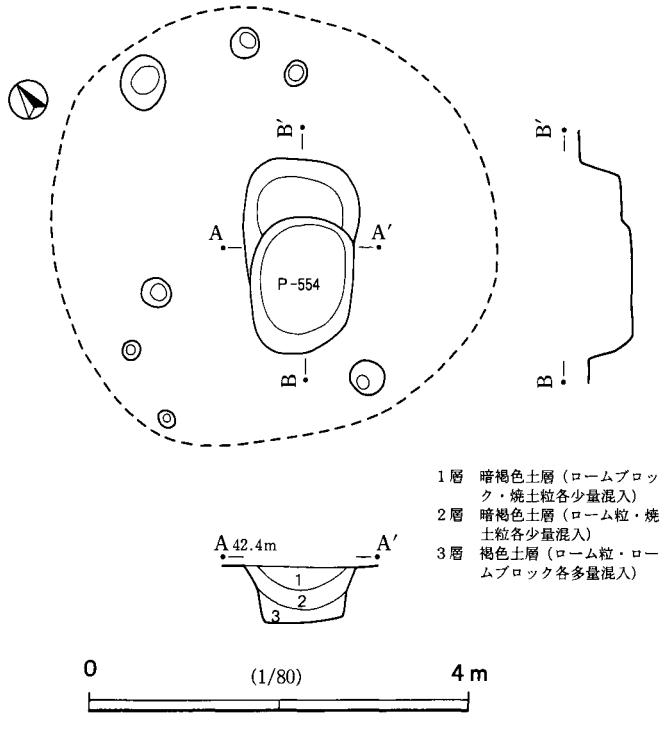
Ｄ－０３０住居跡(第52・53図、図版53)

（遺　構） 縄文時代遺構集中範囲の東端に近いK17-54区付近に位置する。平面形は楕円形で、5.5m×5.0mの規模を有する。ロームへの掘り込みは平均して20cmで、覆土は暗褐色土の単一層である。炉の南西にＰ－３８４土坑があったが、土坑はロームブロックにより貼床されている。床面は炉を中心によく踏み締められているが、壁付近はやや軟弱である。住居内から多数のピットが検出されている。基本的には壁に沿って巡る壁柱穴と、やや内側で巡るＰ１～Ｐ７の主柱穴に分けられる。深さは壁柱穴が10cm～20cm、主柱穴がＰ１から順に33cm、50cm、33cm、50cm、26cm、44cm、25cmである。これら以外の小ピットの深さは、５cm位のものが多い。炉は住居の中央付近に位置する。炉底付近には多量の焼土を混入する暗褐色土が堆積していた。

（遺　物） 覆土中から出土している。１は２条の隆帯が垂下する胴部片である。２は口唇下から施した地文の縄文上に沈線文を施し、磨消縄文帯を作出する。称名寺式土器の可能性がある。３～５は口縁部に横位の沈線を巡らせ、口縁部無文帯を作出する口縁部片である。６は口縁部に横位沈線が巡らされるものだが、沈線の上位は微隆起状につまみ上げられている。７は微隆起線区画の磨消縄文帯を有する胴部片である。８は地文の縄文上に単独で微隆起線が施されている。９は頸部付近の破片と思われる。上位に弧状の微隆起線が施される。10は波状口縁を呈する口縁部片である。微隆起線により区画された磨消縄文帯がU

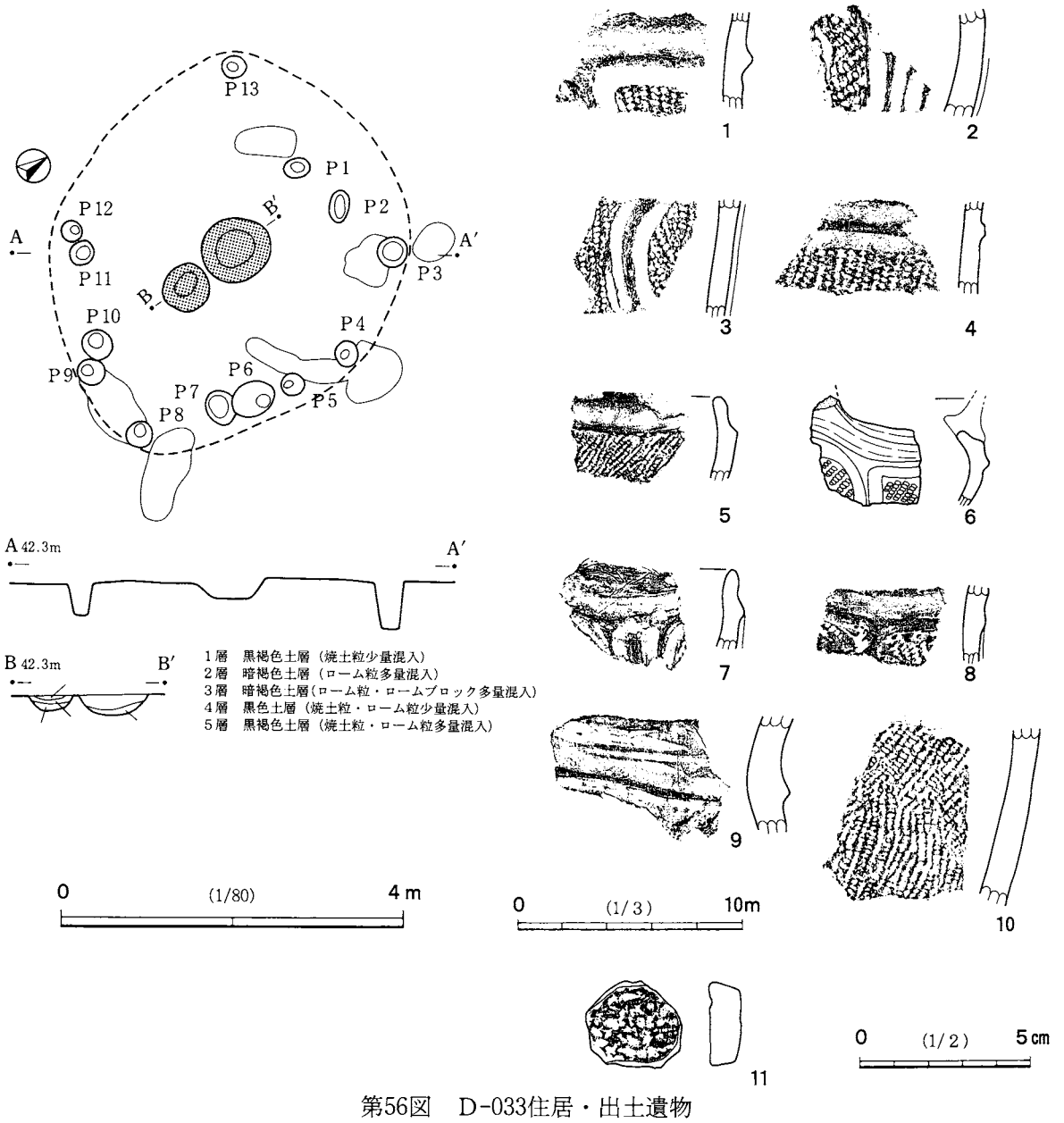


第54図　D-031住居



第55図　D-032住居

字状の文様構成となる。12・13は外反する器形の口縁部片である。いずれも無文であるが、あるいは壷形土器等の可能性が考えられる。14は口唇下から縄文が施される口縁部片である。縄文の回転方向は口唇部付近が横位、以下縦位で羽状を呈する。15～18は土製円盤である。15は径5.8cm～6.0cmである。土器片の周囲は打欠調整である。重さは47.0ｇである。16は径2.5cmである。周囲は打欠調整後、部分的に研磨されている。重さは7.7ｇである。17は3.0cm×2.5cmの楕円形状を呈する。周囲は打欠調整後、軽い研磨が



第56図　D-033住居・出土遺物

加えられる。重さは6.2ｇである。18は径1.8cm～1.9cmである。小型で器厚は薄い。周囲は研磨調整である。重さは1.7ｇである。

Ｄ－０３１住居跡(第54図)

（遺　構）　Ｄ－０３０住居跡の北東に16ｍのK17-21区付近に位置する。壁は認められず、円形に巡るピット列から住居跡と判断した。推定される規模は5.6ｍ×4.5ｍである。本住居跡に伴うと思われる柱穴は８本が検出されている。深さは一定ではないが、Ｐ１から順に51cm、47cm、28cm、44cm、35cm、45cm、45cm、85cmと、40cm～50cmのものが多い。炉は住居のほぼ中央で、径1.3ｍ以上の大きな堀方である。深さも90cm近くを測るが、残存した焼土量は比較的少量である。

（遺　物）　炉内から縄文土器小片が少量出土したに過ぎない。

D－０３２住居跡(第55図)

(遺　構) 縄文時代遺構集中範囲区の北端に近いJ16-35区付近に位置する。本住居跡も壁は認められず、柱穴と思われるピットから住居跡と判断されている。推定される規模は径4.6mである。ピットの深さに規則性は認められないが、20cm以内の浅いものが多い。炉の掘方は大きく深い。２つの掘方が重複しているが、炉を作り替えたものか全く別のピットとの重複なのか明らかにされていない。

(遺　物) ほとんど出土していない。

D－０３３住居跡(第56図、図版54)

(遺　構) Ｄ－０３０住居跡の北東４ｍに位置する。本住居跡も壁は検出されておらず、炉跡と柱穴列から住居跡と判断される。推定される平面形は楕円形で、4.6m×4.0m位の規模である。住居内から検出された柱穴と思われるピットは13本で、ほぼ住居の壁に沿うように配列されている。深さはＰ１＝80cm、Ｐ２＝20cm、Ｐ３＝55cm、Ｐ４＝25cm、Ｐ５＝33cm、Ｐ６＝65cm、Ｐ７＝22cm、Ｐ８＝35cm、Ｐ９＝35cm、Ｐ10＝35cm、Ｐ11＝40cm、Ｐ12＝60cm、Ｐ13＝50cmである。炉は住居のほぼ中央と思われる位置で、大小２か所が検出された。北側の大きな炉内の方が残存した焼土量は多かった。

(遺　物) 炉内及びピット内から縄文土器が少量出土した。１～４は貼付による隆帯が施されたものである。破片が小さいため全体の様相は不明である。５は口縁部片で、口唇下はヨコナデ状に調整される。６も波状口縁で、微隆起状の隆線が曲線的に施されている。７・９は地文が無文の破片である。微隆起線状の区画文が施される。10は縄文のみが施される胴部片である。11は土製円盤である。2.8cm×2.5cmの不整楕円形状であるが、周囲は打欠調整後、一部を残して研磨が加えられている。重さは7.7ｇである。

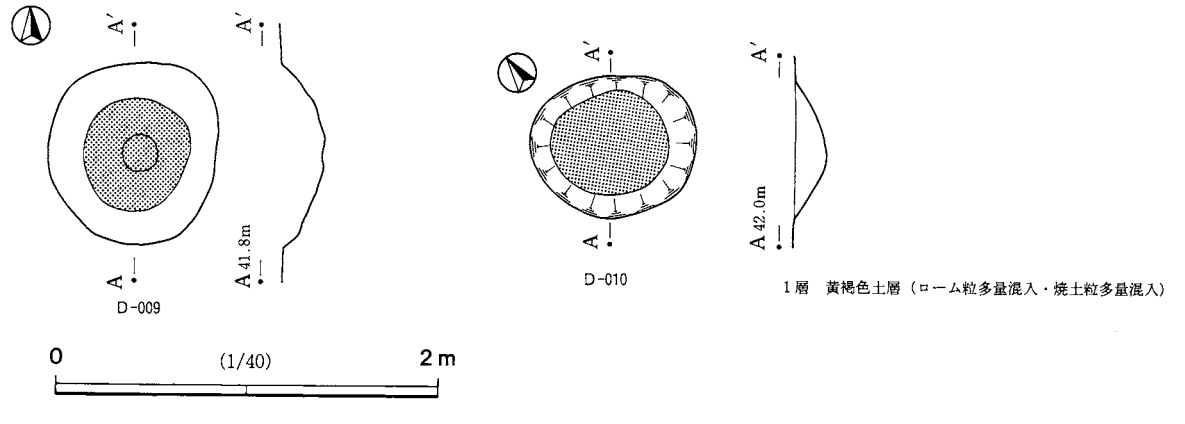
２　炉　　跡

発掘調査時、住居跡の認識コードである「Ｄ－」が付けられているが、住居跡ではなく炉穴として調査されたものがある。ここでは縄文時代早期の炉穴と区別するため「炉跡」と呼称し、その概要を記す。

D－００９(第57図)

Ｄ－００１住居跡の西に９ｍのI16-98区に位置する。平面形は円形で、径90cm、深さ20cmを測る。坑底を中心に赤褐色に焼け締まっている。

遺物は極めて少なく、図示できるものがなかった。



第57図　D-009・010炉跡

D－０１０(第57図)

Ｄ－００１住居跡の北に５ｍのJ16-80区に位置する。掘方は径80cmの円形状で、深さ20cmを測る。覆土内には多量の焼土粒が含まれていたが、それほど強い燃焼があった様子はない。

覆土中から縄文土器小片が２点のみ出土している。

3　陥　　穴

古宿上谷遺跡からは17基の陥穴が検出されている。これらは発掘調査の時に、形状から陥穴として判断されたものである。形状にはバラエティーがあり、方向や分布にもまとまりを見い出すことはできない。あえて言うならば、台地縁付近から検出されたものはなく、全て台地平坦面から検出されている。また、時期は不明であるが、類似例から早期であろうと考えた。したがって当遺跡の中心的な時期である中期の遺構との切り合いがあった場合は、陥穴が古いと判断している。

なお、陥穴から出土した遺物のほとんどは流れ込みによるものと思われるが、拓影図等の掲載可能なものは、土坑出土土器の項に含めてある。

Ｐ－０２５陥穴(第58図、図版12)　K17-03区に位置する。楕円形を呈し、上場規模3.0ｍ×2.0ｍ、深さ2.2ｍを測る。断面形は縦横共に下部が大きく膨らみ袋状を呈する。下場付近の最大長軸は3.4ｍを測る。遺物の出土はなかった。長軸の方向はＮ－31°－Ｅである。

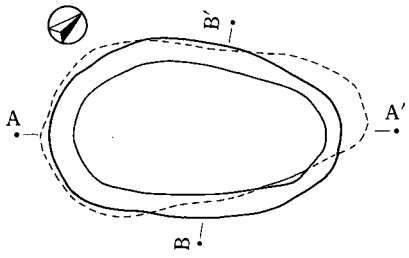
Ｐ－０３３陥穴(第58図、図版18)　J16-76区に位置する。楕円形を呈し、上場で2.4ｍ×1.4ｍ、深さ2.2ｍを測る。断面形は縦横共に中位付近がやや膨らみ袋状となる。長軸の方向はＮ－78°－Ｅである。
覆土中から流れ込みと思われる縄文土器が約30片出土した。

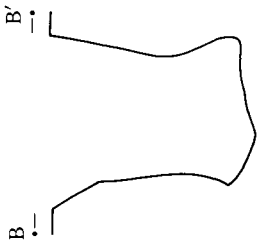
Ｐ－０５８陥穴(第58図、図版18)　K16-46区に位置する。長楕円形を呈し、上場で2.9ｍ×0.7ｍ、深さ1.4ｍを測る。断面形は短軸方向で坑底が狭く、長軸方向では裾が拡がり台形状となる。下場における長軸長は3.9ｍである。長軸の方向はＮ－54°－Ｅである。遺物の出土はなかった。

Ｐ－０７１陥穴(第58図、図版18)　L18-53区に位置する。若干不整の長方形状を呈し、2.4ｍ×1.2ｍ、深さ2.0ｍを測る。坑底には1.4ｍ×0.8ｍほどの平坦面を有しているが、坑底からピット等は検出されていない。壁には凹凸がある。長軸の方向はＮ－17°－Ｅである。わずかな量の後期縄文土器が出土した。

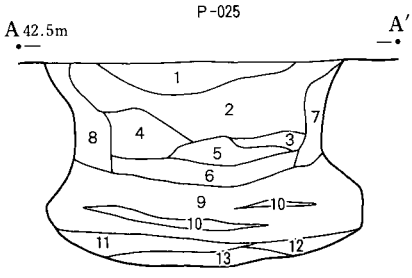
Ｐ－０７３陥穴(第58図、図版18)　L18-72区に位置する。長方形状を呈し、2.5ｍ×1.3ｍ、深さ1.7ｍを測る。縦横断面共に坑底付近で壁が膨れ、若干袋状となる。坑底は2.0ｍ×1.0ｍの長方形状に平坦となる。長軸の方向は、ほぼ東西である。覆土中からは少量の縄文土器、土師器が混在して出土した。

Ｐ－１１６陥穴(第58図、図版18)　L18-59区付近に位置する。長楕円形を呈し、2.1ｍ×0.8ｍ、深さ1.2ｍを測る。断面形は短軸方向で坑底が狭くＶ字状となる。長軸方向は西側の壁が坑底付近で20cmほど膨らむ。長軸の方向はＮ－60°－Ｅである。遺物の出土はなかった。

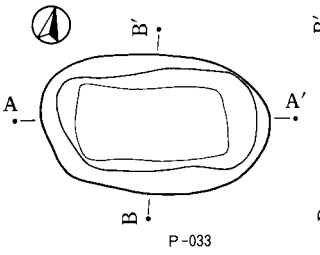


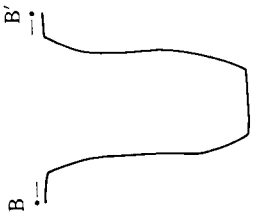


P-025

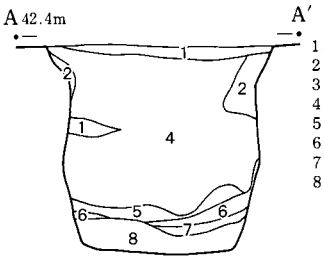


1層　黒褐色土層（ローム粒少混入）
2層　黒褐色土層（ローム粒混入）
3層　暗褐色土層（ローム粒混入）
4層　暗褐色土層（ローム粒混入）
5層　黄褐色土層（ローム粒主体）
6層　暗褐色土層（ローム粒少混入）
7層　黄褐色土層（ローム粒主体）
8層　暗黄褐色土層（ローム粒少混入）
9層　暗黄褐色土層（ローム粒少混入）
10層　黒色土層
11層　褐色土層
12層　黄褐色土層
13層　暗褐色土層

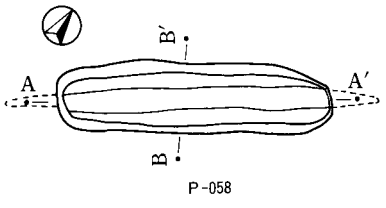


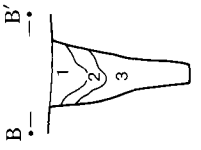


P-033



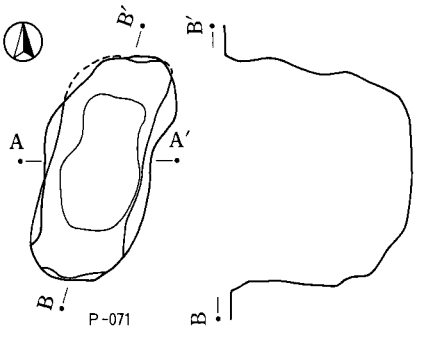
1層　黒色土層（ローム粒少混入）
2層　暗褐色土層（ローム粒少混入）
3層　黄褐色土層（暗褐色土粒混入）
4層　暗黄褐色土層（ローム粒多混入）
5層　黒褐色土層（ローム粒多混入）
6層　黄褐色土層（ロームブロック主体）
7層　黒褐色土層（ローム粒多混入）
8層　暗黄褐色土層（ローム粒多混入）



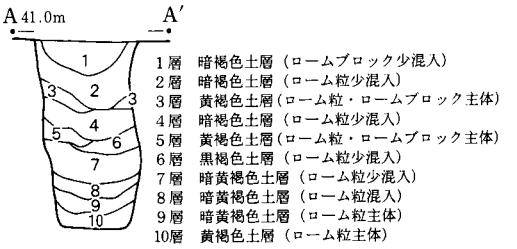


P-058

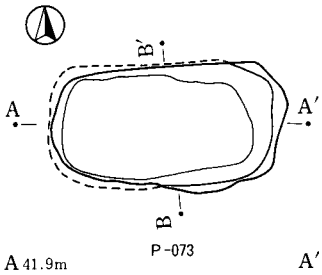
1層　黒褐色土層（ローム粒少混入）
2層　暗褐色土層
3層　褐色土層（ロームブロック少混入）

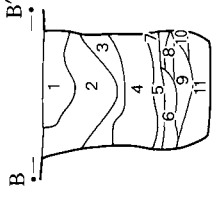


P-071

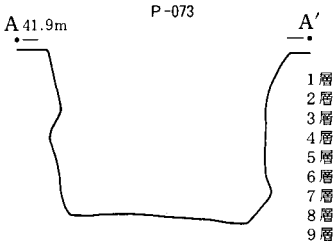


1層　暗褐色土層（ロームブロック少混入）
2層　暗褐色土層（ローム粒少混入）
3層　黄褐色土層（ローム粒・ロームブロック主体）
4層　暗褐色土層（ローム粒少混入）
5層　黄褐色土層（ローム粒・ロームブロック主体）
6層　黒褐色土層（ローム粒少混入）
7層　暗黄褐色土層（ローム粒少混入）
8層　暗黄褐色土層（ローム粒混入）
9層　暗黄褐色土層（ローム粒主体）
10層　黄褐色土層（ローム粒主体）

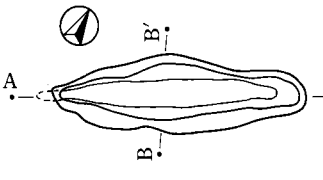


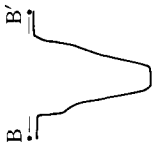


P-073

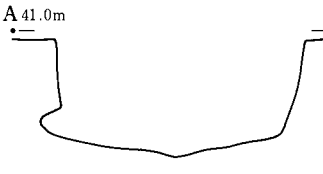


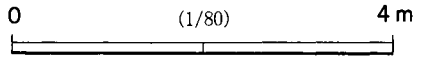
1層　暗褐色土層（ローム粒少混入）
2層　黒褐色土層（ローム粒少混入）
3層　暗褐色土層（ローム粒混入）
4層　暗褐色土層（ローム粒・ロームブロック混入）
5層　暗褐色土層（ローム粒・ロームブロック混入）
6層　暗褐色土層（ローム粒少混入）
7層　黒褐色土層
8層　黄褐色土層（ローム粒主体）
9層　黒褐色土層（ローム粒少混入）
10層　黄褐色土層（ローム粒主体）
11層　暗褐色土層（ローム粒少混入）





P-116





第58図　　陥穴（1）

Ｐ－１２２陥穴(第59図)　K19-46区に位置する。楕円形状を呈し、1.9m×1.2m、深さ1.7mを測る。断面形はコップ状を呈し、坑底は1.5m×0.9mの平坦面を有する。長軸の方向はＮ－60°－Ｗである。

Ｐ－１２３陥穴(第59図、図版14)　K19-55区に位置する。やや不整の楕円形に近く、1.9m×1.3m、深さ2.6mを測る。壁は凹凸が多く、長軸方向の断面ではわずかに袋状となる。坑底は不整形で、やはり凹凸が激しく、平坦面はない。長軸の方向はＮ－７°－Ｗである。覆土上層から石鏃が１点出土した。

Ｐ－２２３陥穴(第59図、図版18)　O15-23区に位置し、古墳時代のＤ－０２２住居跡の床下から検出されている。長楕円形を呈し、2.5m×1.0m、最大の深さ1.2mを測る。坑底は中央部が高いが、両端は壁を約10cmずつ袋状に掘り込むと同時に深くなる。坑底にはそれぞれ深さ15cmほどの小ピットを２本有する。長軸の方向はほぼ東西方向である。

Ｐ－２２６陥穴(第59図、図版18)　O15-20区付近に位置する。楕円形を呈し、1.5m×0.9m、深さ1.2mを測る。壁、坑底共に凹凸がある。坑底中央付近には深さ約30cmのピットが掘られている。長軸の方向はＮ－５°－Ｅである。

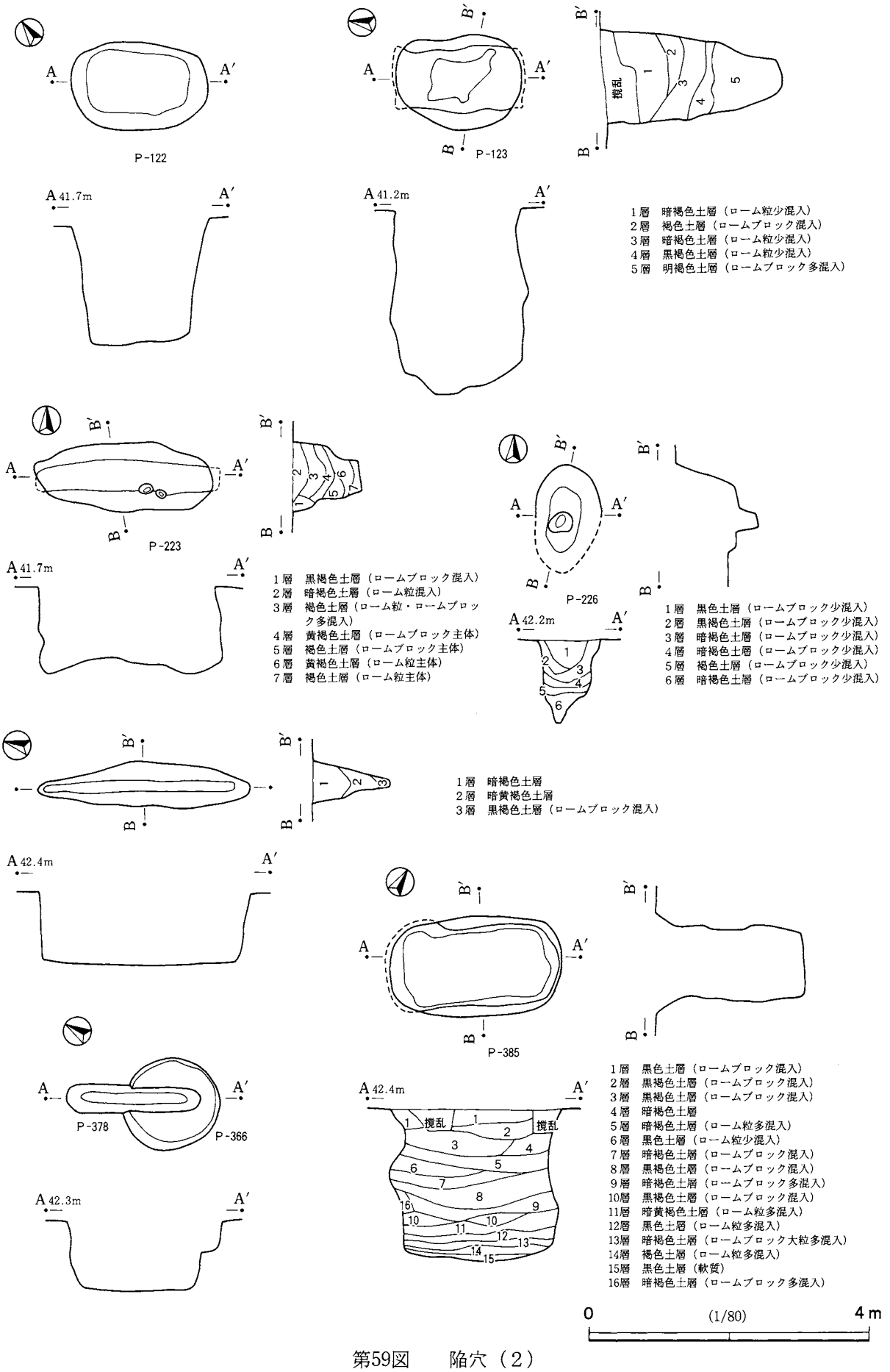
Ｐ－３７３陥穴(第59図、図版18)　K17-62区付近に位置する。長楕円形を呈し、3.0m×0.6m、深さ1.1mを測る。坑底は幅が20cmに満たないほど狭い。長軸の方向はＮ－12°－Ｗである。出土遺物はない。

Ｐ－３７８陥穴(第59図)　Ｐ－３７３陥穴の北３mでK17-42区付近に位置し、Ｐ－３７３陥穴とは縦列に並ぶ。Ｐ－３６６土坑に切られている。長楕円形を呈し、1.9m×0.4m、深さ1.0mを測る。上場から坑底に至るまで極めて狭い掘り方である。長軸の方向はＮ－31°－Ｗである。遺物の出土はない。

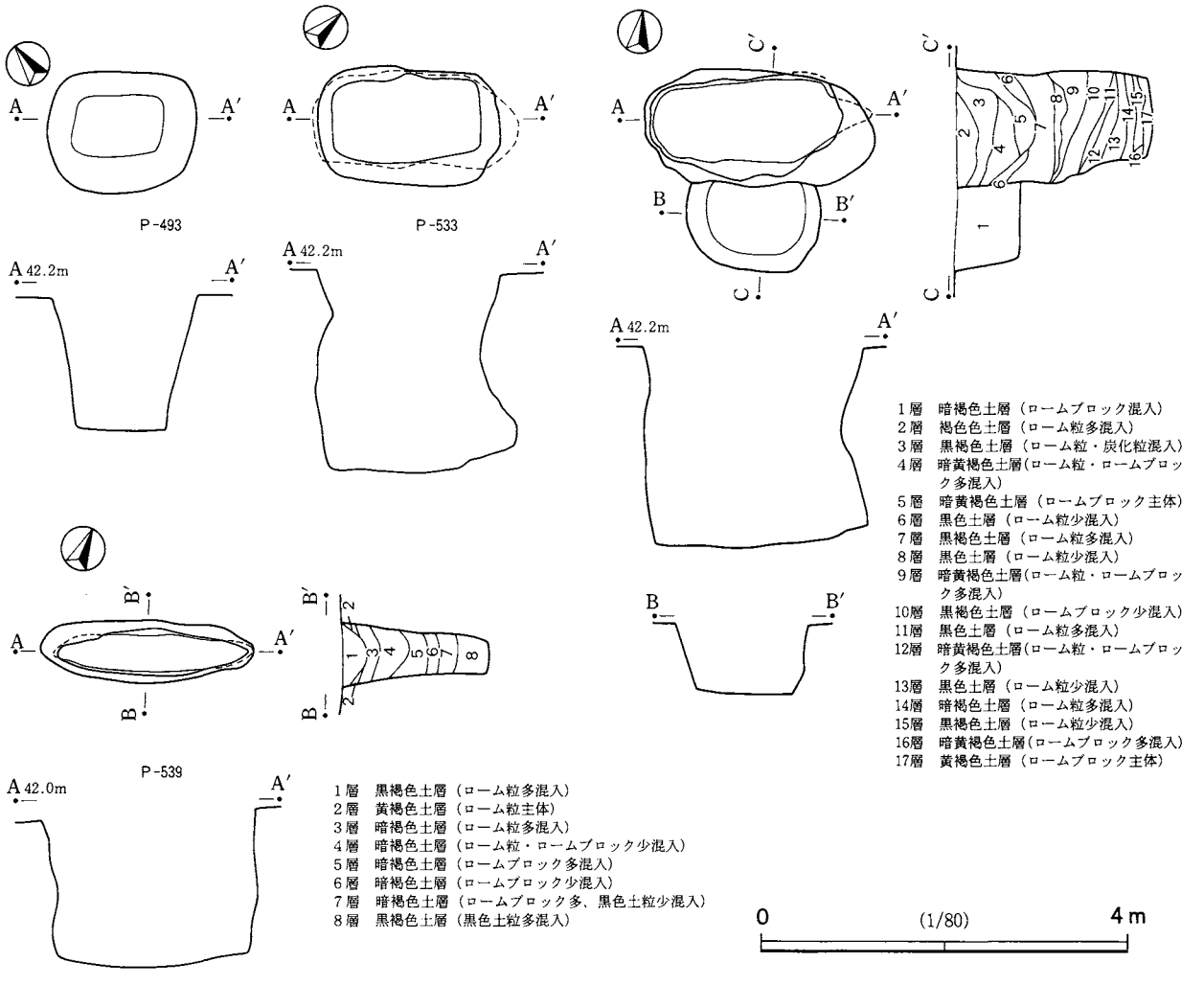
Ｐ－３８５陥穴(第59図)　K17-44区に位置する。隅丸長方形状を呈し、2.5m×1.4m、深さ2.1mを測る。断面形は長軸方向での壁の膨らみが顕著である。坑底は比較的平坦で、2.0m×0.9m程度の広さがあるが、ピット等は検出されていない。長軸の方向はＮ－60°－Ｅである。覆土中から中期縄文土器等が約100片出土している。

Ｐ－４９３陥穴(第60図)　Ｐ－０７３陥穴の南西2.5mのL18-81区に位置する。隅丸方形状に近く、1.6m×1.4m、深さ1.5mを測る。断面形は縦横共にコップ状を呈す。坑底は比較的平坦である。長軸の方向はＮ－59°－Ｗである。出土遺物はない。

Ｐ－５３３陥穴(第60図)　Ｄ－０３１住居跡の床面を掘り込んでK17-21区に位置する。長方形に近い形状を呈し、2.0m×1.3m、深さ2.1mを測る。縦横断面共に壁下部が膨れ、袋状となる。坑底は1.7m×0.9m程度の平坦面である。長軸の方向はＮ－52°－Ｅである。覆土中から比較的多量の縄文土器が出土している。


P-122
P-123
撹乱
1層 暗褐色土層（ローム粒少混入）
2層 褐色土層（ロームブロック混入）
3層 暗褐色土層（ローム粒少混入）
4層 黒褐色土層（ローム粒少混入）
5層 明褐色土層（ロームブロック多混入）
P-223
1層 黒褐色土層（ロームブロック混入）
2層 暗褐色土層（ローム粒混入）
3層 褐色土層（ローム粒・ロームブロック多混入）
4層 黄褐色土層（ロームブロック主体）
5層 褐色土層（ロームブロック主体）
6層 黄褐色土層（ローム粒主体）
7層 褐色土層（ローム粒主体）
P-226
1層 黒色土層（ロームブロック少混入）
2層 黒褐色土層（ロームブロック少混入）
3層 暗褐色土層（ロームブロック少混入）
4層 暗褐色土層（ロームブロック少混入）
5層 褐色土層（ロームブロック少混入）
6層 暗褐色土層（ロームブロック少混入）
1層 暗褐色土層
2層 暗黄褐色土層
3層 黒褐色土層（ロームブロック混入）
P-385
P-378
P-366
撹乱
1層 黒色土層（ロームブロック混入）
2層 黒褐色土層（ロームブロック混入）
3層 黒褐色土層（ロームブロック混入）
4層 暗褐色土層
5層 暗褐色土層（ローム粒多混入）
6層 黒色土層（ローム粒少混入）
7層 暗褐色土層（ロームブロック混入）
8層 黒褐色土層（ロームブロック混入）
9層 暗褐色土層（ロームブロック多混入）
10層 黒褐色土層（ロームブロック混入）
11層 暗黄褐色土層（ローム粒多混入）
12層 黒色土層（ローム粒多混入）
13層 暗褐色土層（ロームブロック大粒多混入）
14層 褐色土層（ローム粒多混入）
15層 黒色土層（軟質）
16層 暗褐色土層（ロームブロック多混入）
0 (1/80) 4m

第59図　陥穴（2）



第60図　陥穴（3）

P－538陥穴(第60図)　P－533陥穴の北西3.5mのK17-21区付近に位置し、P－537土坑を破壊して構築される。楕円形に近く、2.4m×1.3m、深さ2.2mを測る。断面形は長軸方向で東壁が坑底付近で膨らむ。長軸の方向はほぼ東西である。覆土中から中期縄文土器が出土している。

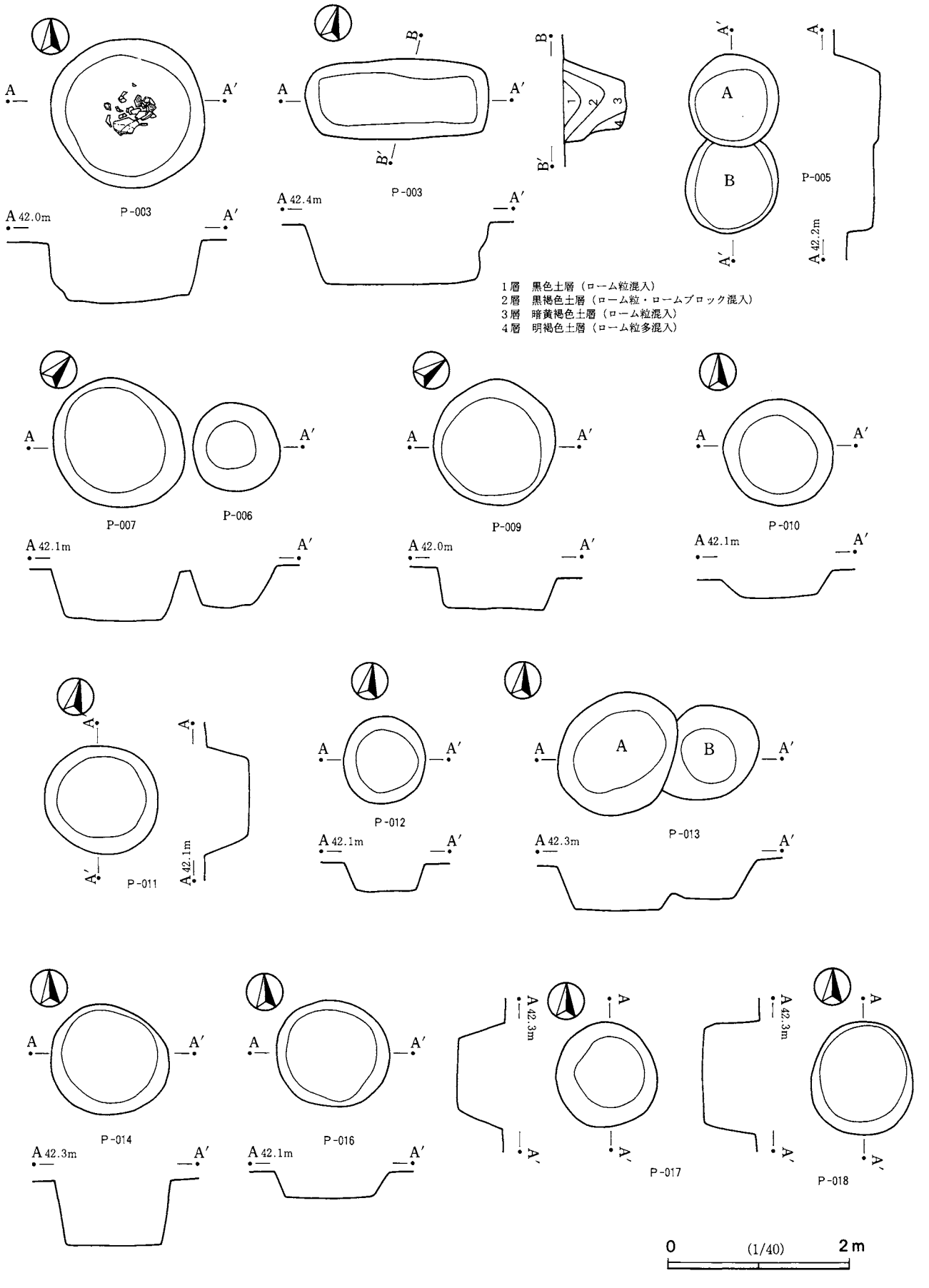
P－539陥穴(第60図)　J17-28区に位置する。長楕円形を呈し、2.2m×0.7m、深さ1.6mを測る。壁は縦横断面共に垂直に近い。幅の狭い掘り方ではあるが、坑底は幅40cmほどの平坦面がある。長軸の方向はN－62°－Eである。遺物はほとんど出土していない。

4　土坑と出土遺物

(1)土　　坑

縄文時代の土坑の多くは、住居跡群と同様にJ16・J17・K16・K17グリッドを中心に検出されている。時期的にも住居跡群と同様の縄文時代中期後半に位置づけられるものが多い。

P－003土坑(第61図、図版12)　J16-70区に位置する。円形を呈し、径1.6m、深さ70cmを測る。覆土は明褐色土が主体となり、ローム粒子やロームブロックが多く混入していた。坑底から15cmほど浮いた状態で縄文時代中期末から後期初頭の土器が集中して出土した。



第61図　縄文時代土坑（1）

Ｐ－００４土坑(第61図)　J16-54区付近に位置する。長方形状を呈し、2.0m×0.9m、深さ70cmを測る。覆土の土質は比較的密で、下部ほど粘性が強い。坑底は平坦である。出土遺物はないが、形状から縄文時代のものと判断した。

Ｐ－００５Ａ・Ｂ土坑(第61図、図版11－２)　J17-04区に位置する。付近は該期の土坑が密集しており、本土坑のようにD-008住居跡を破壊して構築されたものも多い。Ａ・Ｂ共に円形を呈し、径1.0mである。深さはＡの方がわずかに深く、50cmを測る。両者の新旧関係は明確ではない。覆土中から少量の縄文土器片が出土したが、図示し得るものはない。

Ｐ－００６土坑(第61図、図版11－２)　Ｐ－００５土坑の南に隣接する。円形を呈し、径1.0m、深さ40cmを測る。遺物の出土はなかった。

Ｐ－００７土坑(第61図、図版11－２)　Ｐ－００６土坑の西に隣接する。円形を呈し、径1.4m、深さ50cmを測る。覆土中から少量の中期縄文土器が出土した。

Ｐ－００９土坑(第61図、図版11－２)　Ｐ－００７土坑の北西に近接する。円形を呈し、径1.3m、深さ40cmを測る。覆土中から中期縄文土器小片約10片が出土した。

Ｐ－０１０土坑(第61図、図版11－２)　Ｐ－００７土坑の南東に近接する。円形を呈し、径1.2m、深さ30cmを測る。覆土中からわずかな中期縄文土器が出土した。

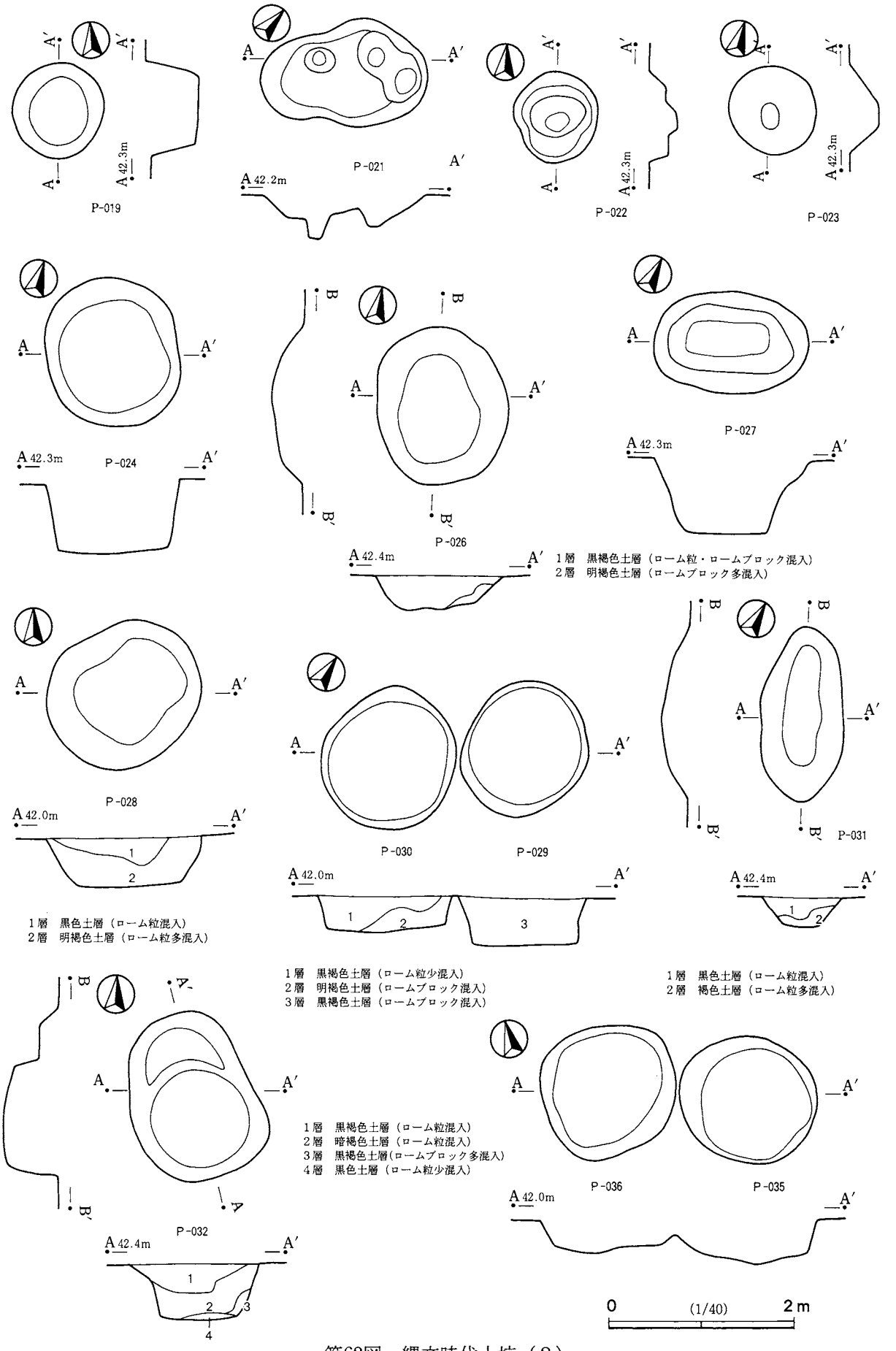
Ｐ－０１１土坑(第61図、図版12)　Ｐ－０１０土坑の北東に近接する。円形を呈し、径1.2m、深さ45cmを測る。覆土中からは30片以上の中期縄文土器片が出土したが、小片が多い。

Ｐ－０１２土坑(第61図、図版12)　Ｐ－０１０土坑の東３mに位置する。円形を呈し、径1.0m、深さ30cmを測る。浮島式土器片が３片出土した。

Ｐ－０１３Ａ・Ｂ土坑(第61図)　J17-17区に位置する。Ａ・Ｂ共に円形を呈し、径はＡが1.2m、Ｂが1.0mを測る。深さはＡの方がやや深く、50cmである。両者の新旧関係は判然としない。遺物は覆土中からＡ・Ｂを合わせて約120片の中期縄文土器が出土した。

Ｐ－０１４土坑(第61図)　Ｐ－０１３土坑の南に隣接する。円形を呈し、径1.2mを測る。ロームへはほぼ垂直に掘り込まれており、深さは70cmと深い。中期縄文土器片が少量出土している。

Ｐ－０１６土坑(第61図)　Ｐ－０１４土坑の南に隣接する。円形を呈し、径1.2m、深さ30cmを測る。遺物の出土はない。



第62図　縄文時代土坑（2）

Ｐ－０１７土坑(第61図、図版12)　J16-96区に位置する。円形を呈し、径1.2ｍを測る。壁の立ち上がりは傾斜しており、断面形は台形状となる。出土遺物は比較的多く、80片以上の中期縄文土器が出土している。

Ｐ－０１８土坑(第61図)　Ｐ－０１７土坑の東に近接する。円形を呈し、径1.2ｍを測る。ロームへの掘り込みは50cmと深く、壁は垂直に近く立ち上がる。覆土中から少量の中期縄文土器片が出土した。

Ｐ－０１９土坑(第62図、図版12)　J16-87区に位置する。円形を呈し、径1.0ｍと比較的小型ではあるが、掘り込みの深さは60cmを測り、覆土中から120片以上の中期縄文土器が出土している。

Ｐ－０２１土坑(第62図)　K17-01区に位置し、Ｄ－００６住居跡の西壁を破壊している。平面形は不整楕円形を呈し、1.8ｍ×1.2ｍの規模を有する。坑底までの深さは25cmで、さらにピットが掘り込まれている。

Ｐ－０２２土坑(第62図)　Ｄ－００６住居跡の床面を破壊して構築される。径1.0ｍ弱の不整円形を呈する。内側にピットを有し、二重の掘り込みとなる。出土遺物はない。

Ｐ－０２３土坑(第62図、図版12)　Ｐ－０１９土坑の西に近接する。径0.9ｍの円形を呈し、深さ30cmを測る。坑底は擂り鉢状に狭くなる。覆土中から縄文土器小片２片が出土した。

Ｐ－０２４土坑(第62図、図版12)　J17-09区に位置する。円形を呈し、径1.5ｍと比較的大型である。掘り込みも深く、70cm以上を測る。覆土中から中期縄文土器が20片以上出土している。

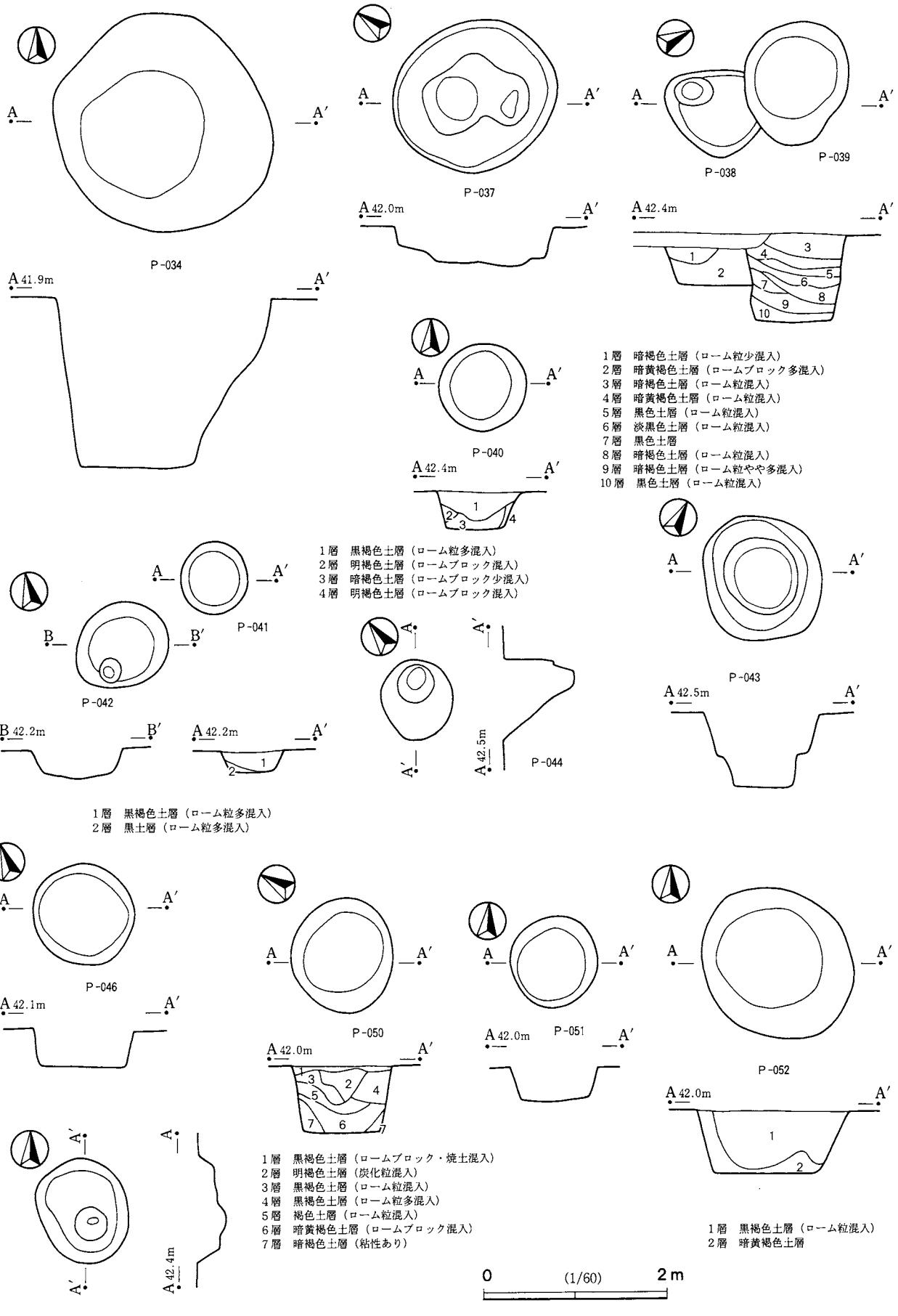
Ｐ－０２６土坑(第62図)　Ｄ－００６住居跡の北１ｍに隣接する。平面形はやや不整な楕円形を呈し、1.7ｍ×1.4ｍの規模を有する。ロームへの掘り込みは35cmで、覆土は黒色土を主体とする。遺物はわずかな縄文土器が出土したに過ぎない。

Ｐ－０２７土坑(第62図、図版13)　Ｄ－００５住居跡の南西でJ16-77区に位置する。楕円形を呈し、1.7ｍ×1.1ｍの規模を有し、深さは約80cmである。形態的に陥穴の可能性が考えられる。出土遺物はない。

Ｐ－０２８土坑(第62図)　Ｐ－０１０土坑の南に隣接するJ17-14区に位置する。径1.5ｍのやや不整な円形を呈し、深さ50cmを測る。覆土中にはロームブロック等が多く混入しており、埋め戻されたものと判断できる。縄文後期と思われる土器小片がわずかに出土したのみである。

Ｐ－０２９土坑(第62図)　Ｐ－０２８土坑の西に隣接する。円形を呈し、径1.4ｍ、深さ50cmを測る。覆土はロームブロックが混入する黒褐色の単一層である。中期縄文土器が少量出土している。

Ｐ－０３０土坑(第62図)　Ｐ－０２９土坑の西に隣接する。円形を呈し、径1.5ｍ、深さ40cmを測る。覆



第63図　縄文時代土坑（3）

土中にはやはりロームブロック等が含まれる。中期縄文土器がわずかに出土した。

Ｐ－０３１土坑(第62図)　Ｄ－００６住居跡の北壁付近、K16-91区に位置する。楕円形を呈し、1.9m×0.9m、深さ30cmの規模を測る。覆土中には多量のローム粒子が混入している。縄文土器小片が出土した。

Ｐ－０３２土坑(第62図、図版13)　Ｄ－００５住居跡の南に隣接するJ16-76区に位置する。平面形はテラス部を有するため、楕円形となる。1.8m×1.4m、深さ60cmの規模を測る。35片の中期縄文土器が出土した。

Ｐ－０３４土坑(第63図、図版13)　J17-26区に位置する。円形を呈し、径2.4m、深さ1.8mを測る。極めて掘り込みの深いものだが、出土遺物は全くない。

Ｐ－０３５土坑(第62図、図版11－２)　Ｐ－０３０土坑の西に隣接する。円形を呈し、径1.4m、深さ50cmを測る。坑底は中央がやや窪んでいる。中期縄文土器がわずかに出土した。

Ｐ－０３６土坑(第62図、図版11－２)　Ｐ－０３５土坑の西に隣接する。円形を呈し、径1.5m、深さ30cmを測る。坑底は凹凸がある。遺物の出土はなかった。

Ｐ－０３７土坑(第63図、図版11－２)　Ｐ－０３６土坑の北３mに位置する。楕円形を呈し、1.8m×1.6mの規模を有する。深さは35cmで、坑底は中央付近が浅く窪む。遺物の出土はなかった。

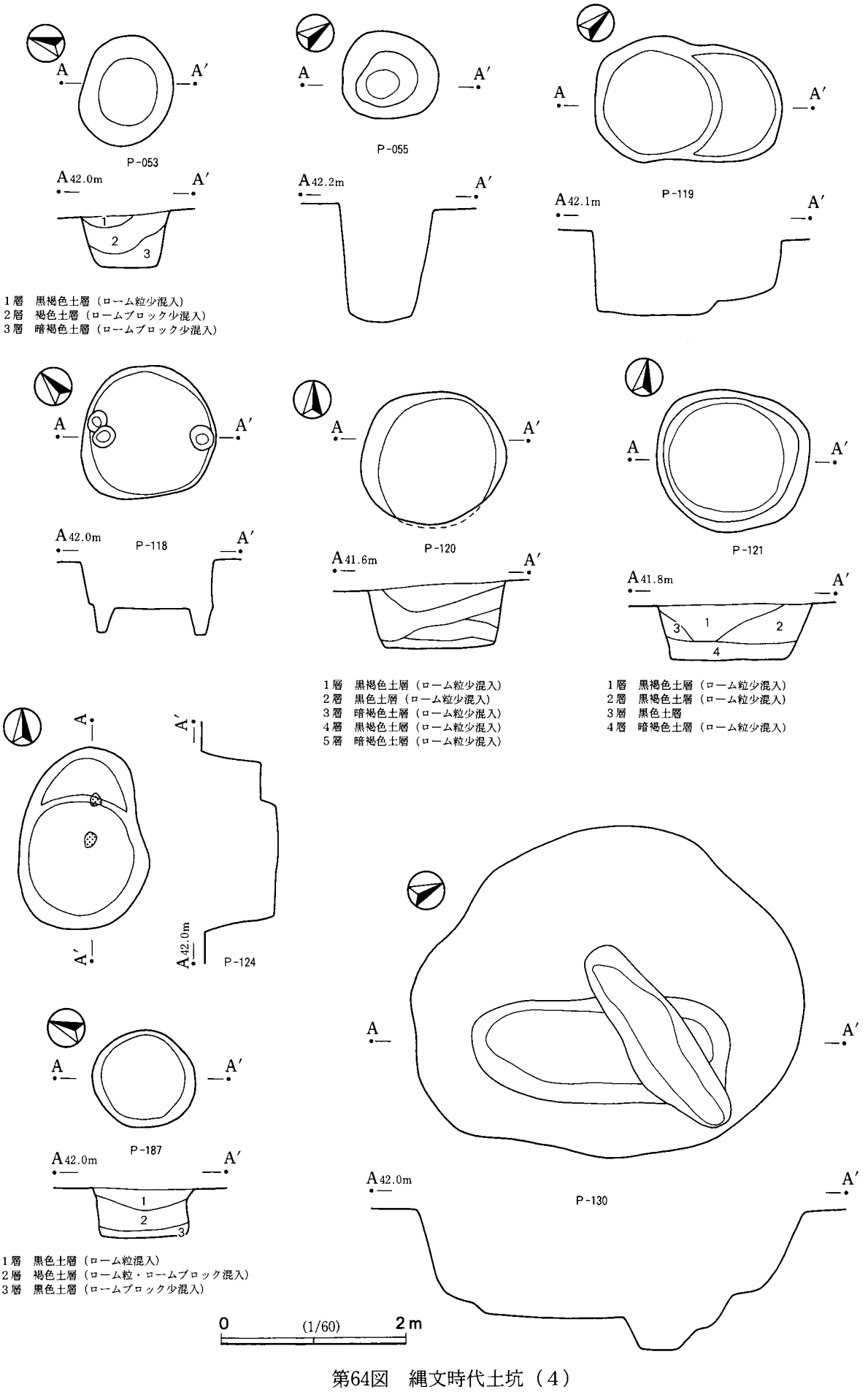
Ｐ－０３８土坑(第63図)　J16-75区に位置する。Ｄ－００７住居跡の下から検出されている。北側はＰ－０３９土坑に切られる。径1.0mの円形状を呈し、深さは55cmである。出土遺物はない。

Ｐ－０３９土坑(第63図)　Ｐ－０３８土坑と重複する。円形に近く、径1.2m、深さ95cmを測る。覆土は８層に分層できたが、暗色系の土層が主体的である。約30片の中期縄文土器が出土した。

Ｐ－０４０土坑(第63図、図版13)　Ｄ－００７住居跡の北２mに位置する。円形を呈し、径1.0m、深さ40cmを測る。覆土中にはロームブロック等の混入が顕著である。縄文土器が40片ほど出土したが、どれも小片である。

Ｐ－０４１土坑(第63図)　Ｄ－００７住居跡を掘り込んで構築される。円形を呈し、径0.8m、深さ20cmの小型のものである。覆土は黒色土が主体である。遺物の出土はない。

Ｐ－０４２土坑(第63図)　やはりＤ－００７住居跡を掘り込んでいる。円形を呈し、径1.0m、深さ35cmを測る。坑底からの深さ60cmのピットを有している。遺物の出土はない。



第64図　縄文時代土坑（4）

Ｐ－０４３土坑(第63図)　Ｄ－００４住居跡の南壁を掘り込んでいる。円形を呈し、径1.3mを測る。掘り方は入り子状に２段となる。深さは坑底までが45cm、坑底からが35cmである。

Ｐ－０４４土坑(第63図)　やはりＤ－００４住居跡を掘り込む。径0.8mの円形を呈し、掘り方は坑底に向かい細くなる。坑底までの深さは75cmである。出土遺物はない。

Ｐ－０４６土坑(第63図)　Ｄ－００２住居跡の床面を掘り込んで構築される。円形を呈し、径1.1m、深さ40cmを測る。坑底は平坦である。わずかな縄文土器が出土したのみである。

Ｐ－０４８土坑(第63図、図版13)　Ｐ－０４７土坑の北西に隣接する。円形を呈し、径1.0m、深さ20cmを測る。坑底には浅いピットが掘られている。覆土中から約20片の中期縄文土器が出土したが、図示できるものはない。

Ｐ－０５０土坑(第63図、図版13)　Ｄ－００１住居跡の北４mのJ16-81区に位置する。円形を呈し、径1.2m、深さ70cmを測る。覆土中には混入物が目立つ。下層にはロームブロックが多く含まれ、埋め戻されたものと思われる。約60片の中期縄文土器が出土している。

Ｐ－０５１土坑(第63図)　J17-27区に位置する。円形を呈し、径1.0m、深さ35cmを測る。覆土中から少量の中期縄文土器が出土している。

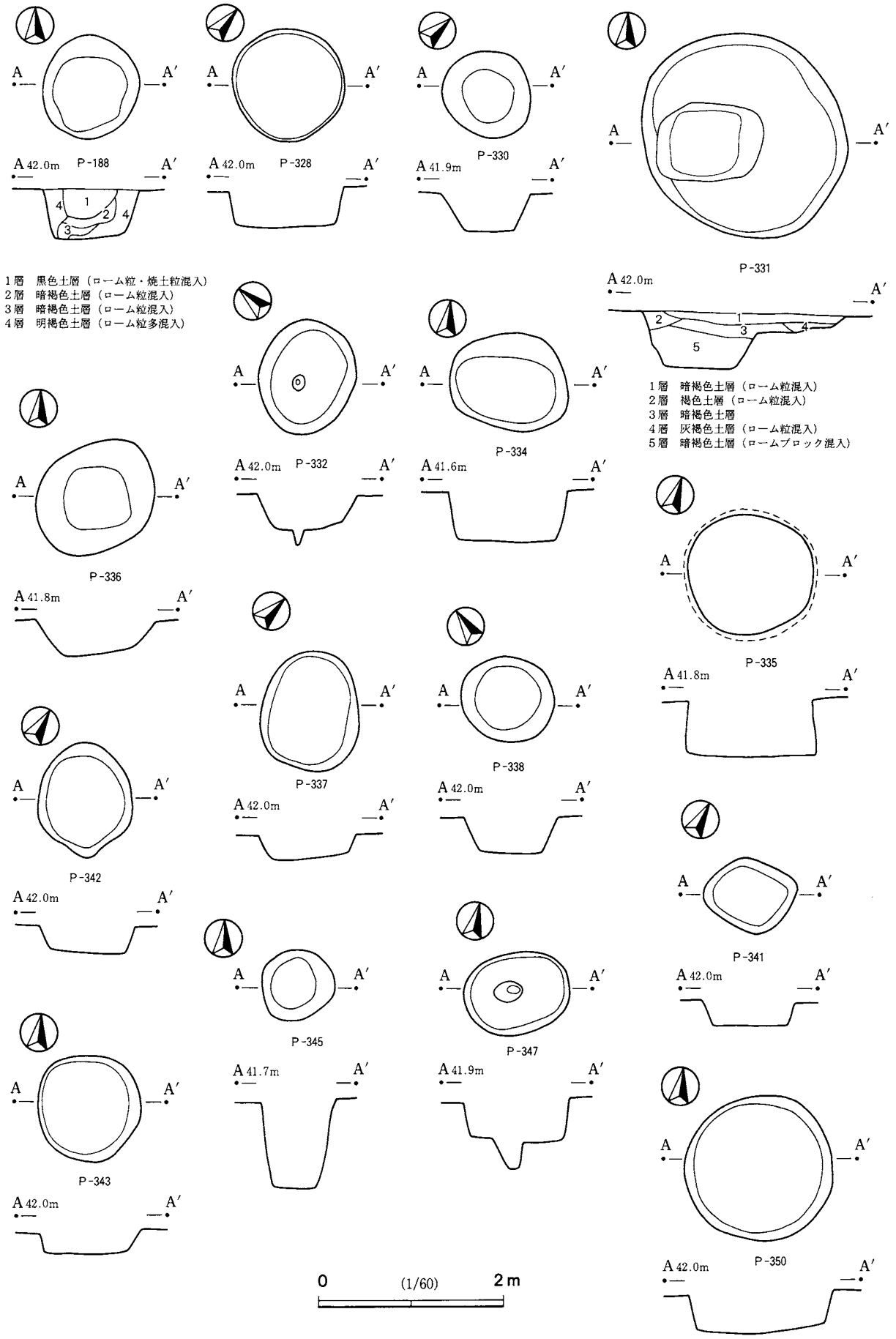
Ｐ－０５２土坑(第63図、図版13)　Ｄ－００８住居跡の北に隣接するJ16-93区に位置する。円形を呈し、径1.6m、深さ70cmを測る。覆土は黒褐色土が主体である。遺物の出土はなかった。

Ｐ－０５３土坑(第64図、図版13)　他の土坑群とは離れ、K16-49区で単独に所在する。円形を呈し、径1.1m、深さ60cmを測る。覆土中にはロームブロックが混入する。縄文土器小片がわずかに出土した。

Ｐ－０５５土坑(第64図、図版14)　やはり他の土坑群から離れ、K16-46区に位置する。円形を呈し、径1.0m、深さ1.2mを測る。遺物の出土はない。

Ｐ－１１８土坑(第64図、図版14)　縄文時代遺構の集中範囲区から離れた南側の調査区で、L19-50区に位置する。円形を呈し、径1.4m、深さ50cmを測る。軸上の壁際に坑底からの深さ25cmのピットを有している。覆土中から少量の縄文土器が出土している。

Ｐ－１１９Ａ・Ｂ土坑(第64図、図版14)　Ｐ－１１８土坑の西３mに位置する。２基の土坑が重複している。いずれも円形を呈し、径はＡが1.3m、Ｂが1.4mである。新旧関係は、覆土の断面観察からＡの方が新しい。深さはＡが60cm、Ｂが90cmを測る。いずれも坑底は平坦である。遺物は土製円盤が出土した。



第65図　縄文時代土坑（5）

Ｐ－１２０土坑(第64図、図版14)　Ｐ－１１９土坑の西24ｍのK19-56区に位置する。円形を呈し、径1.5ｍ、深さ70cmを測る。覆土は５層に分層できたが、いずれもローム粒子を混入する暗色系の土層が主体である。縄文土器が少量出土している。

Ｐ－１２１土坑(第64図、図版14)　Ｐ－１２０土坑の東４ｍに位置する。円形に近く、平均径1.6ｍ、深さ60cmを測る。遺物は覆土の上層から中期縄文土器、石鏃等が出土している。

Ｐ－１２４土坑(第64図、図版14)　Ｐ－１１９土坑の南東に近接する。テラス状の段を有し、1.9ｍ×1.4ｍの規模を有する。深さはテラス部までが70cm、坑底までが85cmである。床面は凹凸がある。床面から浮いた位置で少量の焼土が検出されている。遺物の出土はない。

Ｐ－１３０Ａ・Ｂ土坑(第64図、図版14)　古墳時代のＤ－０１１住居跡の床面下から検出されている。付近に縄文時代の遺構はない。２基の土坑が重複しており、大型のＢを長楕円形状のＡが掘り込んでいる。Ａは2.4ｍ×0.7ｍ、深さ1.5ｍの規模を有し、形状から陥穴と思われる。Ｂは4.3ｍ×3.5ｍ、深さ1.1ｍである。遺物はＢの覆土上層からわずかな縄文土器片が出土した。

Ｐ－１８７土坑(第64図)　縄文時代遺構集中範囲区から北西に離れた調査区で、M14-76区に位置する。円形を呈し、径1.0ｍ、深さ50cmを測る。壁は開口部が若干すぼまり、いわゆる袋状に近い。出土遺物はない。

Ｐ－１８８土坑(第65図、図版15)　Ｐ－１８７土坑の北西17ｍのM14-58区に位置する。円形を呈し、径1.1ｍ、深さ50cmを測る。覆土中から少量の縄文土器が出土した。

Ｐ－３２８土坑(第65図)　縄文時代遺構集中範囲区のJ17-43区付近に位置する。円形を呈し、径1.2ｍ、深さ40cmを測る。坑底は平坦である。遺物の出土はない。

Ｐ－３３０土坑(第65図)　J17-54区に位置する。円形を呈し、径0.9ｍ、深さ40cmを測る。覆土中にはローム粒子をやや多く含むが、ほぼ自然な堆積状況である。覆土中から中期縄文土器片が出土している。

Ｐ－３３１土坑(第65図、図版15)　Ｐ－３３０土坑の北東に近接する。円形を呈し径2.2ｍと大型である。深さは20cmと浅いが、坑底に1.1ｍ×0.8ｍの長方形状のピットが掘り込まれている。ピットは坑底からの深さ35cmを測る。覆土中から少量の縄文土器が出土したが、図示し得るものはない。

Ｐ－３３２土坑(第65図、図版15)　Ｐ－３３１土坑の東２ｍに位置する。楕円形を呈し、1.2×1.0ｍの規模を有する。坑底までの深さは30cmで、坑底には先細りの小ピットを有する。縄文土器がわずかに出土した。

Ｐ－３３４土坑(第65図)　J17-75区に位置する。楕円形を呈し、1.3m×1.0m、深さ50cmを測る。覆土は暗色系の土層が主体で、ロームブロック等が含まれる。縄文土器がわずかに出土した。

Ｐ－３３５土坑(第65図、図版15)　J17-53区に位置する。円形を呈し、上場径1.3m、下場径1.4m、深さ60cmを測る。開口部よりも坑底の方が広く、断面形態は袋状である。出土遺物はない。

Ｐ－３３６土坑(第65図、図版15)　J17-65区に位置する。円形に近く、平均径1.3m、深さ30cmを測る。坑底はやや傾斜がある。中期縄文土器がわずかに出土している。

Ｐ－３３７土坑(第65図)　J17-55区に位置する。楕円形を呈し、1.3m×1.0m、深さ20cmを測る。覆土中から縄文土器が出土しているが、ほとんどは小片である。

Ｐ－３３８土坑(第65図)　Ｐ－３３７土坑の北西に隣接する。円形を呈し、径1.0m、深さ40cmを測る。坑底にはやや凹凸がある。縄文土器小片が少量出土している。

Ｐ－３４１土坑(第65図)　J17-45区に位置する。平面形は菱形状を呈し、対角線の長さで1.0m×0.8mの規模を測る。深さは25cmである。坑底にはやや凹凸がある。中期縄文土器がわずかに出土した。

Ｐ－３４２土坑(第65図、図版15)　Ｐ－３４１土坑の南西に隣接する。楕円形を呈し、1.2m×1.0m、深さ25cmを測る。覆土中から縄文土器小片と土製円盤が出土している。

Ｐ－３４３土坑(第65図、図版15)　Ｐ－３４２土坑の南に隣接する。円形を呈し、径1.1m、深さ20cmを測る。覆土中から縄文土器が少量出土したが、全て小片である。

Ｐ－３４５土坑(第65図、図版15)　Ｄ－０２８住居跡の床面を掘り込んで構築される。円形を呈し、径0.8m、深さ95cmを測る。覆土中からは比較的大破片を含む中期縄文土器が出土した。

Ｐ－３４７土坑(第65図)　Ｄ－０２９住居跡の北東で、J17-77区に位置する。楕円形を呈し、1.2m×0.9m、深さ45cmを測る。中央に坑底からの深さ30cmのピットを有する。出土遺物はない。

Ｐ－３５０土坑(第65図)　K17-84区に位置する。円形を呈し、径1.6m、深さ40cmを測る。壁は垂直に近く立ち上がり、坑底は中央がわずかに窪む。遺物の出土はない。

Ｐ－３５３土坑(第66図、図版15)　J17-69区に位置する。テラス状の段を有し、2.0m×1.2mの規模を有する。掘り込みの深さはテラス部まで40cm、坑底まで70cmである。南西壁付近はオーバーハングする。覆土中から少量の縄文土器が出土したが、図示し得るものはなかった。

Ｐ－３５４土坑(第66図)　Ｐ－３５３土坑の南に隣接する。円形を呈し、径0.7ｍを測る。深さは坑底まで30cm、ピット底まで70cmを測る。縄文土器小片がわずかに出土した。

Ｐ－３５５土坑(第66図)　Ｐ－３５４土坑の東3.5ｍのK17-60区に位置する。楕円形を呈し、2.6ｍ×2.1ｍの規模を有する。掘り込みの深さは10cmと浅い。坑底の３か所にいずれも深さ20cmほどのピットが掘られている。遺物は極めて少ない。

Ｐ－３５６土坑(第66図、図版16)　Ｐ－３５５土坑の南に隣接する。円形を呈し、径1.3m、深さ50cmを測る。覆土は暗色系の土層が主体である。床面は平坦である。中期縄文土器が少量出土した。

Ｐ－３６３土坑(第66図、図版16)　K17-76区に位置する。円形を呈し、径1.2m、深さ60cmを測る。坑底は平坦で、壁の掘り込みもしっかりとしている。遺物の出土はなかった。

Ｐ－３６４土坑(第66図、図版16)　K17-65区に位置する。円形を呈し、径1.4m、深さ50cmを測る。覆土中には少量のローム粒子を混入するが、暗色系の土層が主体である。少量の中期末縄文土器が出土した。

Ｐ－３６５土坑(第66図、図版16)　Ｐ－３６４土坑の西３ｍに位置する。円形を呈し、径1.2m、深さ40cmを測る。覆土は３層に分層でき、暗色系の土層が主体である。遺物の出土はなかった。

Ｐ－３６６土坑(第66図)　K17-52区に位置する。円形を呈し、径1.3m、深さ40cmを測る。Ｐ－３７８陥穴により坑底の一部を破壊されている。覆土中から縄文土器がわずかに出土した。

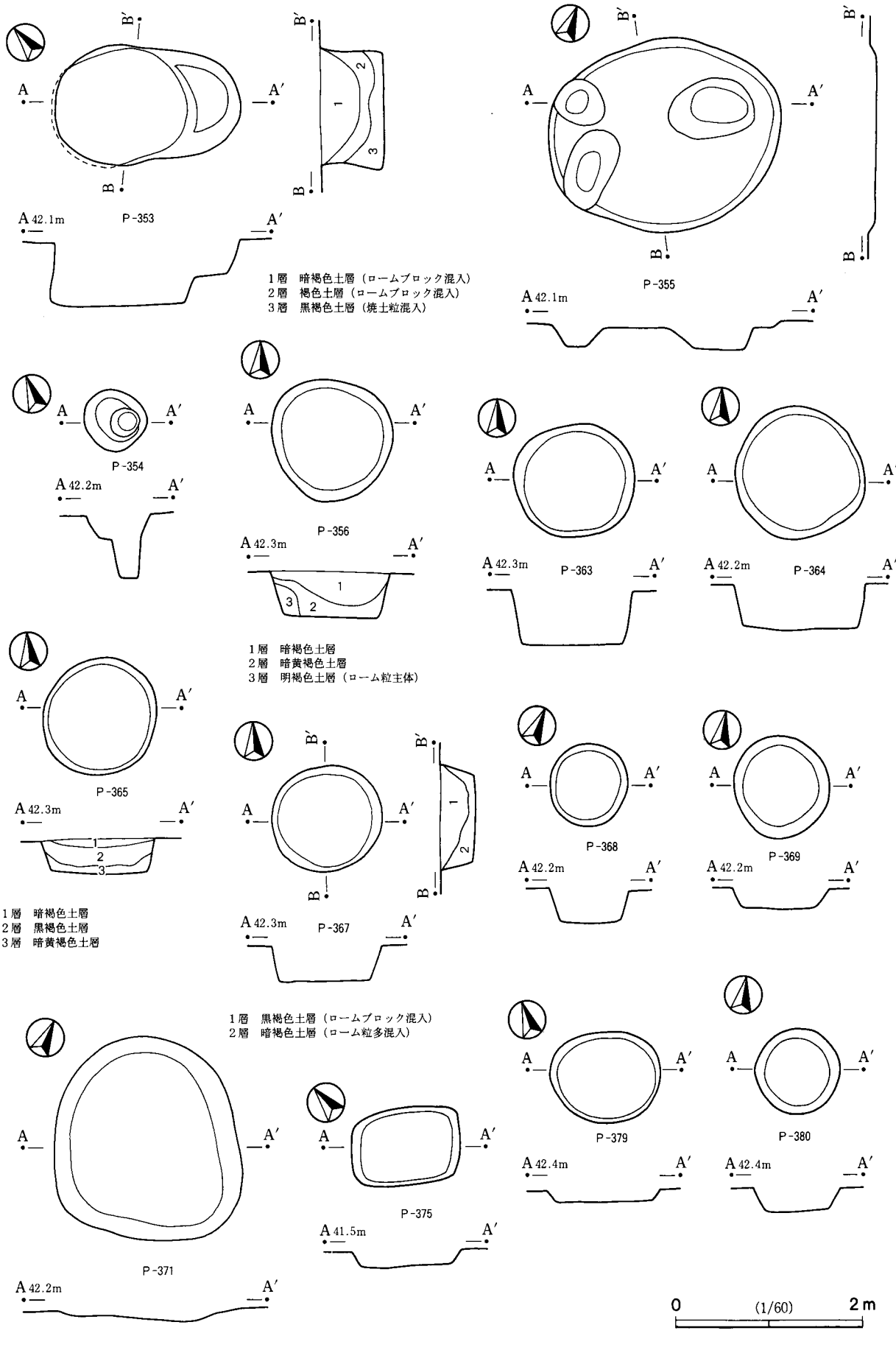
Ｐ－３６７土坑(第66図)　K17-53区に位置する。円形を呈し、径1.2m、深さ40cmを測る。覆土中にはローム粒子やロームブロックが比較的多く含まれる。縄文時代早期の条痕文土器片が５片ほど出土した。

Ｐ－３６８土坑(第66図)　Ｐ－３６４土坑の北西に近接する。円形を呈し、径0.9m、深さ30cmと小型である。遺物はわずかな縄文土器が出土したに過ぎない。

Ｐ－３６９土坑(第66図、図版16)　Ｐ－３６４土坑の北東に隣接する。円形を呈し、径1.1m、深さ20cmを測る。覆土は暗褐色土の単一層であった。遺物の出土はなかった。

Ｐ－３７１土坑(第66図)　Ｐ－３６５土坑の南に近接する。やや不整な楕円形を呈し、2.1ｍ×1.9ｍの規模を有する。掘り込みの深さは10cm以内と極めて浅い。覆土は黒褐色土の単一層である。坑底は凹凸が目立つ。縄文土器小片が少量のほか、小型磨製石斧１点が出土している。

Ｐ－３７５土坑(第66図、図版16)　Ｄ－０２９住居跡の南西４ｍのJ17-85区に位置する。長方形状を呈し、1.1ｍ×0.8ｍの規模を測る。深さは15cmと浅い。縄文土器小片が少量出土している。



第66図　縄文時代土坑（6）

Ｐ－３７９土坑(第66図、図版16)　K17-43区に位置する。楕円形を呈し、1.2m×1.0mの規模を有する。掘り込みの深さは10cmと極めて浅い。遺物の出土はなかった。

Ｐ－３８０土坑(第66図、図版16)　Ｐ－３７９土坑の南東3.5mに位置する。円形を呈し、径0.9m、深さ25cmを測る。覆土中から縄文土器が少量出土した。

Ｐ－３８２土坑(第67図、図版16)　K17-42区に位置する。円形を呈し、径0.9m、深さ10cmを測る。覆土中から縄文土器がわずかに出土した。

Ｐ－３８４土坑(第67図)　Ｄ－０３０住居跡の床面下から検出されている。北東の一部は住居跡炉により切られる。円形を呈し、径1.3m、深さ25cmを測る。坑底は平坦である。遺物は出土していない。

Ｐ－３９４土坑(第67図、図版17)　J17-79区に位置する。円形を呈し、径0.9m、深さ30cmを測る。覆土中から極めてわずかな縄文土器が出土した。

Ｐ－３９５土坑(第67図)　Ｐ－３９４の南西に隣接する。円形を呈し、径0.8m、深さ35cmを測る。覆土中から極めてわずかな縄文土器が出土した。

Ｐ－３９７土坑(第67図)　J17-83区に位置する。楕円形に近く、1.1m×1.0mの規模を有する。掘り込みの深さは80cmと深く、壁は垂直に立ち上がる。坑底は平坦である。覆土は明褐色土と暗褐色土が交互に堆積しており、ロームブロック等の混入が多い。遺物はほとんど出土していない。

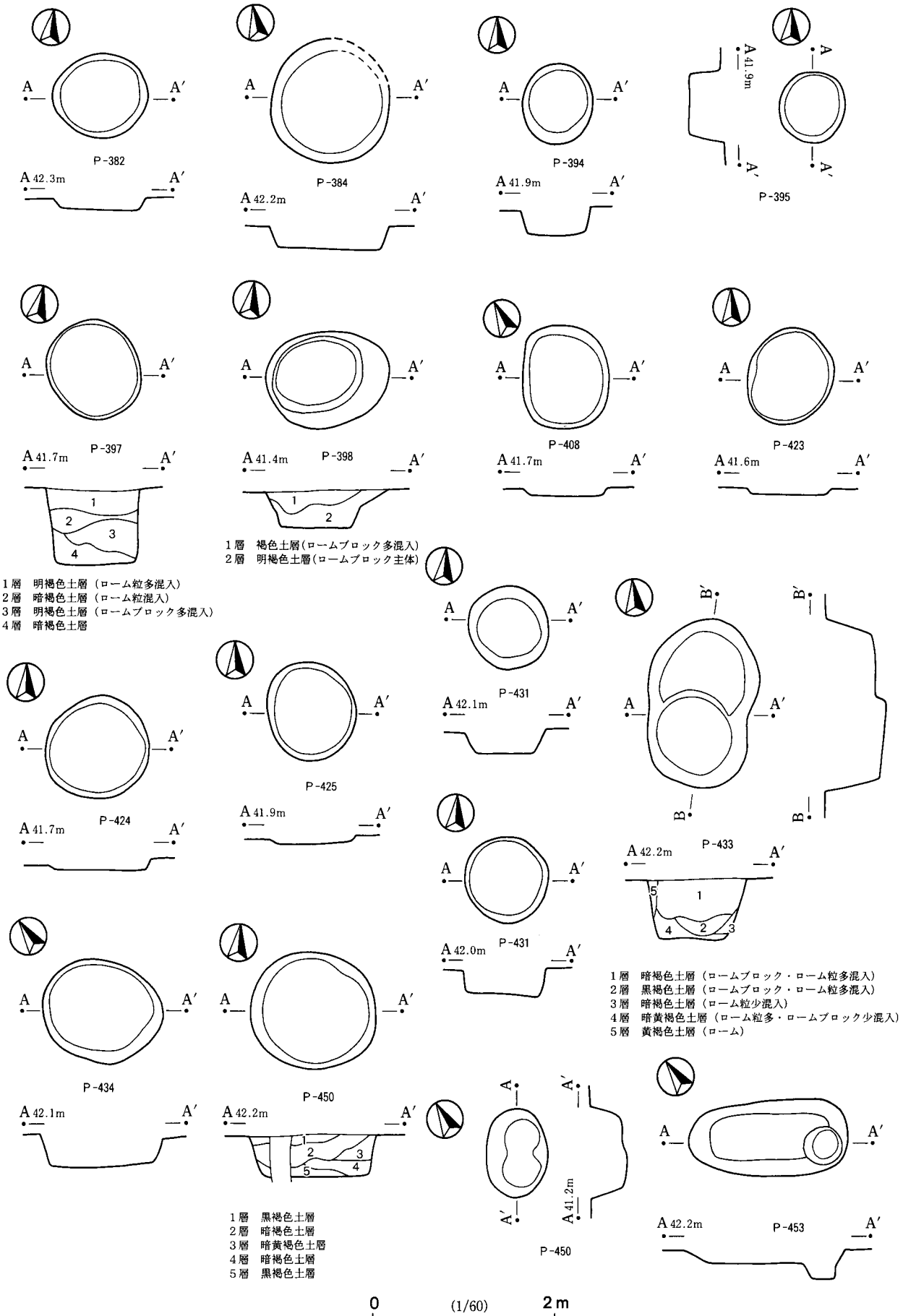
Ｐ－３９８土坑(第67図)　Ｐ－３９７土坑の東に隣接する。楕円形を呈し、1.4m×1.1mの規模を有する。壁は下位が垂直に近く、上位は大きく開口する。覆土中にはロームブロックが多く含まれ、埋め戻されたものと考えられる。坑底は凹凸がある。縄文土器が少量出土した。

Ｐ－４０８土坑(第67図)　J17-88区に位置する。隅丸方形に近く、1.1m×1.0mの規模を有する。掘り込みは10cm以内と極端に浅い。遺物の出土はなかった。

Ｐ－４２３土坑(第67図)　Ｐ－４０８土坑の北西３mに位置する。やや不整な楕円形を呈し、1.0m×0.9mの規模を有する。掘り込みは極めて浅い。遺物の出土はなかった。

Ｐ－４２４土坑(第67図)　Ｐ－４２３土坑の東に近接する。円形を呈し、径1.1m、深さ10cmを測る。遺物の出土はなかった。

Ｐ－４２５土坑(第67図)　J17-89区に位置する。円形を呈し、径1.0mを測る。掘り込みは極端に浅い。遺物はほとんど出土していない。



第67図　縄文時代土坑（7）

Ｐ－４２８土坑(第67図)　Ｐ－４２５土坑の東５ｍのK17-81区に位置する。円形を呈し、径0.9m、深さ25cmを測る。覆土中から縄文土器小片が少量出土した。

Ｐ－４３１土坑(第67図)　Ｐ－４２８土坑の南東３ｍに位置する。円形を呈し、径0.9m、深さ30cmを測る。坑底は中央付近が他よりもやや高い。縄文土器小片と石片等が出土した。

Ｐ－４３３土坑(第67図)　K17-82区に位置する。大きなテラス部を有するものだが、２基の土坑の重複の可能性もある。深さは最深で65cmを測る。覆土中にはロームブロック等の混入が多い。縄文土器が少量出土した。

Ｐ－４３４土坑(第67図)　Ｐ－４３３土坑の南西に近接する。楕円形を呈し、1.3m×1.1m、深さ30cmの規模を有する。覆土中から少量の縄文土器が出土している。

Ｐ－４５０土坑(第67図)　K17-84区に位置する。円形を呈し、径1.3m、深さ50cmを測る。覆土は暗色系の土層が主体である。覆土中から中期縄文土器が少量出土している。

Ｐ－４５２土坑(第67図)　Ｐ－４５０土坑の東２ｍに位置する。楕円形を呈し、1.0m×0.7mの規模を有する。坑底は凹凸があり、最深部で深さ40cmを測る。縄文土器がわずかに出土している。

Ｐ－４５３土坑(第67図)　Ｐ－４５２土坑の北に隣接する。楕円形を呈し、1.7m×0.8m、深さ20cmの規模を有する。坑底の１か所に深さ20cmのピットが掘られている。縄文土器が１片出土したのみである。

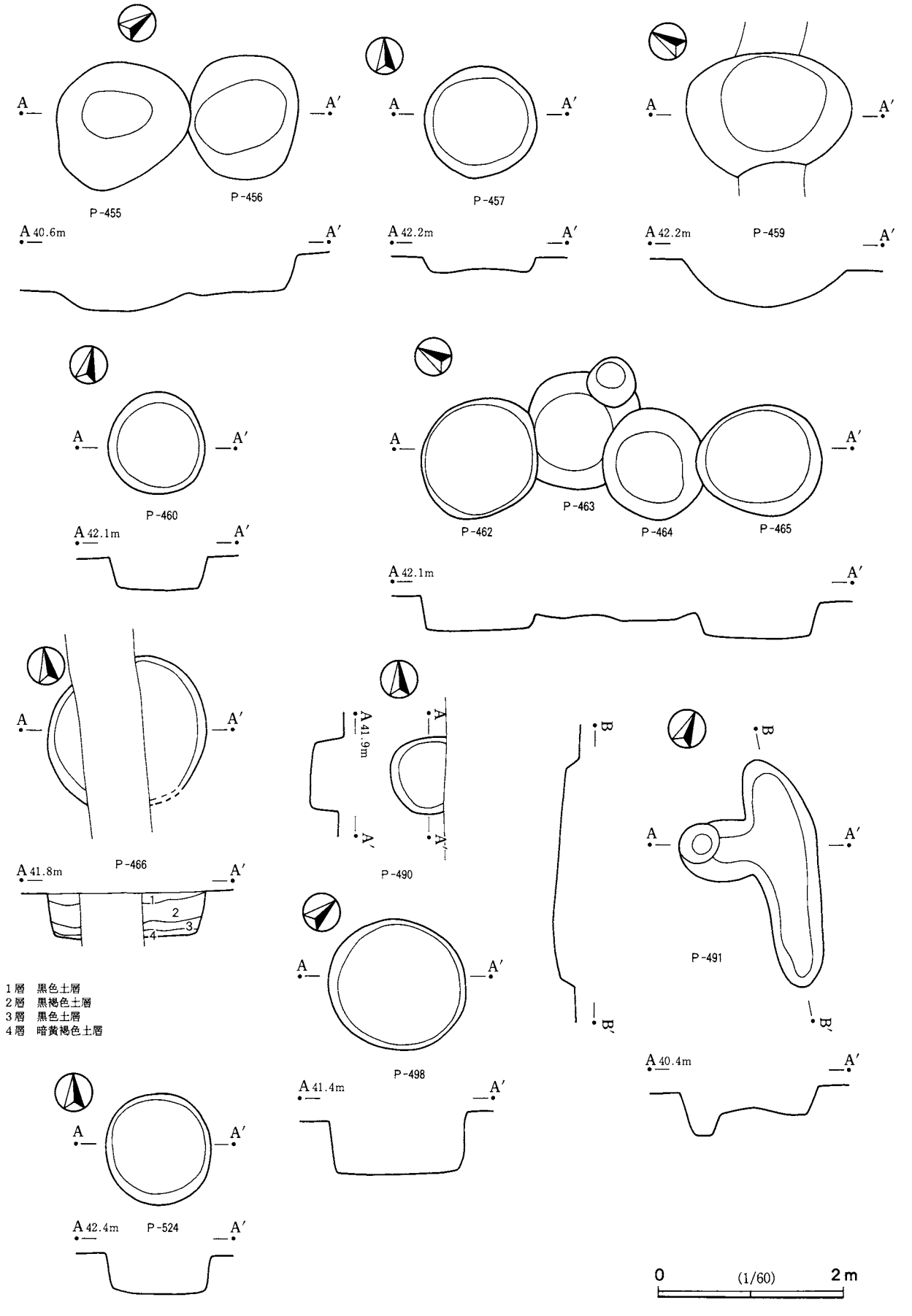
Ｐ－４５５土坑(第68図)　K18-13区に位置する。やや不整な円形を呈し、径1.4mを測る。掘り込みは極めて浅い。少量の縄文土器が出土したのみである。

Ｐ－４５６土坑(第68図)　Ｐ－４５５土坑の北に接する。やはり不整な円形を呈し、径1.3mを測る。深さは35cmである。少量の縄文土器が出土したのみである。

Ｐ－４５７土坑(第68図)　K17-95区に位置する。円形を呈し、径1.2m、深さ15cmを測る。坑底中央は周囲よりもやや高い。覆土中から少量の縄文土器と石鏃が出土している。

Ｐ－４５９土坑(第68図)　K17-82区に位置する。楕円形を呈し、1.8m×1.3mの規模を有する。掘り込みの深さは40cmで、坑底は球状を呈する。覆土中から約20片の縄文土器が出土したが、小片のみである。

Ｐ－４６０土坑(第68図)　Ｐ－４５９土坑の南西に隣接する。円形を呈し、径1.1m、深さ30cmを測る。坑底は平坦で、壁は垂直近くに立ち上がる。縄文土器がわずかに出土した。



第68図　縄文時代土坑（8）

Ｐ－４６２土坑(第68図)　K17-94区に位置する。Ｐ－４６３、Ｐ－４６４、Ｐ－４６５土坑と連続的に重複する。円形を呈し、径1.3m、深さ35cmを測る。覆土は暗褐色土が主体である。わずかな縄文土器が出土した。

Ｐ－４６３土坑(第68図)　円形を呈し、径1.3m、深さ20cmを測る。坑底は凹凸がある。少量の縄文土器が出土している。

Ｐ－４６４土坑(第68図)　円形を呈し、径1.2m、深さ25cmを測る。出土遺物はない。

Ｐ－４６５土坑(第68図)　円形に近く、径1.2～1.3mを測る。掘り込みの深さは40cmである。覆土は若干のローム粒子を混入する暗色系の土層が主体である。中期縄文土器が約20片出土している。

Ｐ－４６６土坑(第68図)　K18-05区に位置する。円形を呈し、径1.7～1.8m、深さ50cmを測る。土坑中央は耕作により撹乱されている。覆土は黒色土が主体である。遺物は出土していない。

Ｐ－４９０土坑(第68図)　K17-80区に位置する。東側は耕作により撹乱されている。円形を呈し、径0.8m、深さ35cmを測る。覆土中から縄文土器小片が少量出土した。

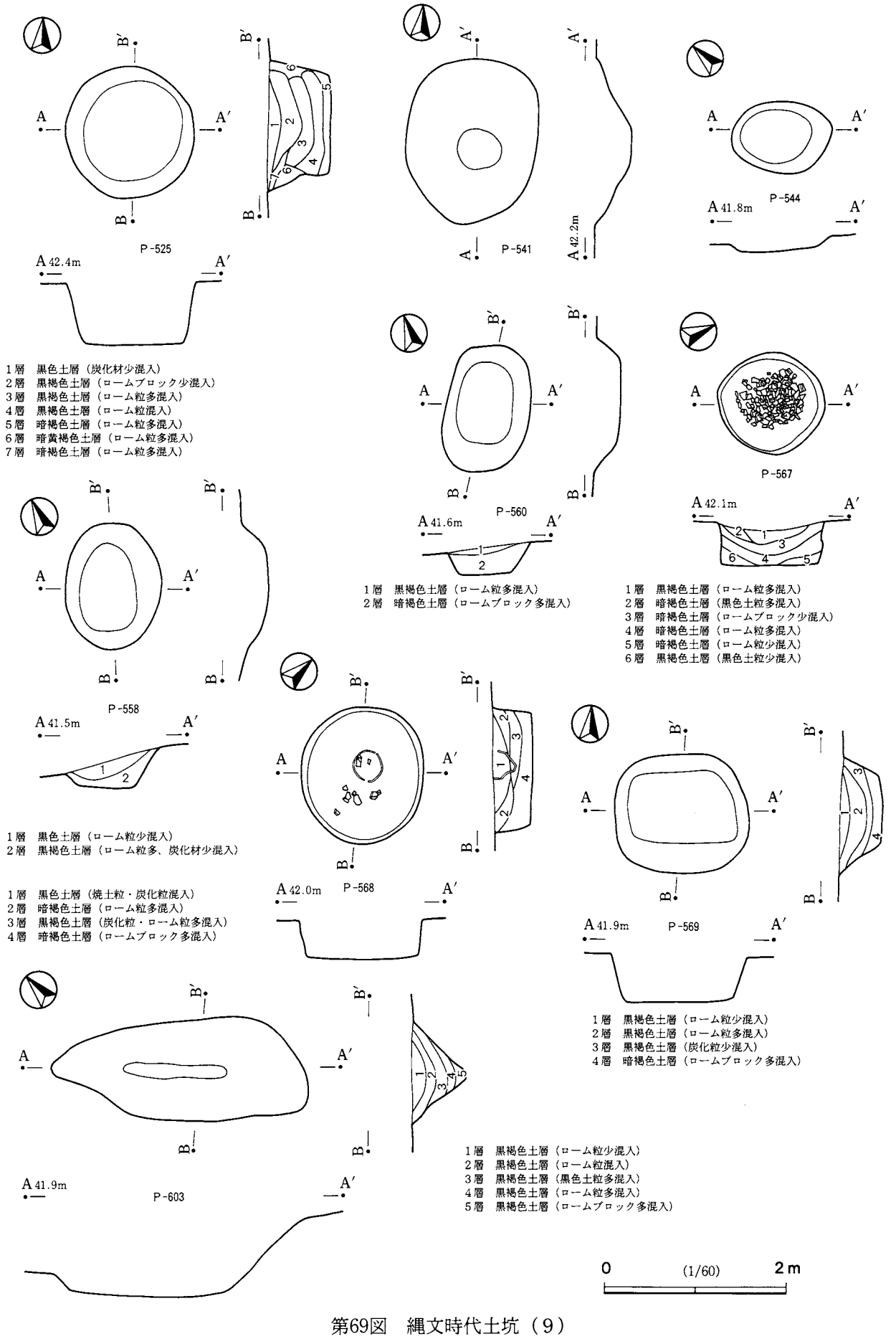
Ｐ－４９１土坑(第68図)　J18-18区に位置する。不整形を呈する。規模は長軸2.5m、短軸0.7mで、南西に70cmほど張り出す。張り出し部の先端には坑底からの深さ25cmのピットを有する。縄文土器が少量出土している。

Ｐ－４９８土坑(第68図、図版17)　他の土坑群とは離れて、K18-65区に単独で位置する。円形を呈し、径1.5m、深さ60cmを測る。壁は垂直に立ち上がる。覆土中から縄文時代早期の条痕文土器がわずかに出土した。

Ｐ－５２４土坑(第68図)　Ｄ－０３１住居跡の東９mのK17-34区に位置する。円形を呈し、径1.2m、深さ40cmを測る。壁は一部オーバーハングしており、袋状を呈する。覆土は黒褐色土が主体である。わずかな縄文土器が出土したのみである。

Ｐ－５２５土坑(第69図)　Ｐ－５２４土坑の西４mに位置する。円形を呈し、径1.4m、深さ65cmを測る。覆土はローム粒子等を混入する黒褐色土が主体である。南壁は一部オーバーハングしている。覆土中から縄文土器がわずかに出土している。

Ｐ－５３７土坑(第60図)　Ｄ－０３１住居跡の北に隣接するK17-21区に位置し、北側はＰ－５３８陥穴により破壊されている。円形に近く、径1.1m、深さ50cmを測る。覆土はロームブロックを混入する暗褐色土の単一層である。覆土中から縄文土器小片が少量出土している。



第69図　縄文時代土坑（9）

Ｐ－５４１土坑(第69図)　J17-37区に位置する。楕円形を呈し、1.8m×1.5m、深さ40cmを測る。壁は傾斜しており、坑底は狭い。縄文土器小片が少量出土している。

Ｐ－５４４土坑(第69図)　J17-32区に位置する。楕円形を呈し、1.1m×0.8m、深さ15cmを測る。遺物は出土しなかった。

Ｐ－５５８土坑(第69図)　J16-13区に位置する。楕円形を呈し、1.4m×1.1m、深さ30cmを測る。覆土の下層には少量の炭化材粒が混入していた。縄文土器がわずかに出土した。

Ｐ－５６０土坑(第69図)　J16-23区に位置する。楕円形を呈し、1.4m×1.0m、深さ30cmを測る。覆土中には多量のロームブロックが混入している。縄文土器がわずかに出土した。

Ｐ－５６７土坑(第69図、図版17)　J16-52区に位置する。円形を呈し、径1.1m、深さ45cmを測る。壁の立ち上がりがややオーバーハングしており、袋状土坑の形態を呈する。覆土は暗褐色土が主体となるが、ローム粒子やロームブロックの混入が顕著である。覆土の中層以上から土器片が集積したような状況で多量に出土している。

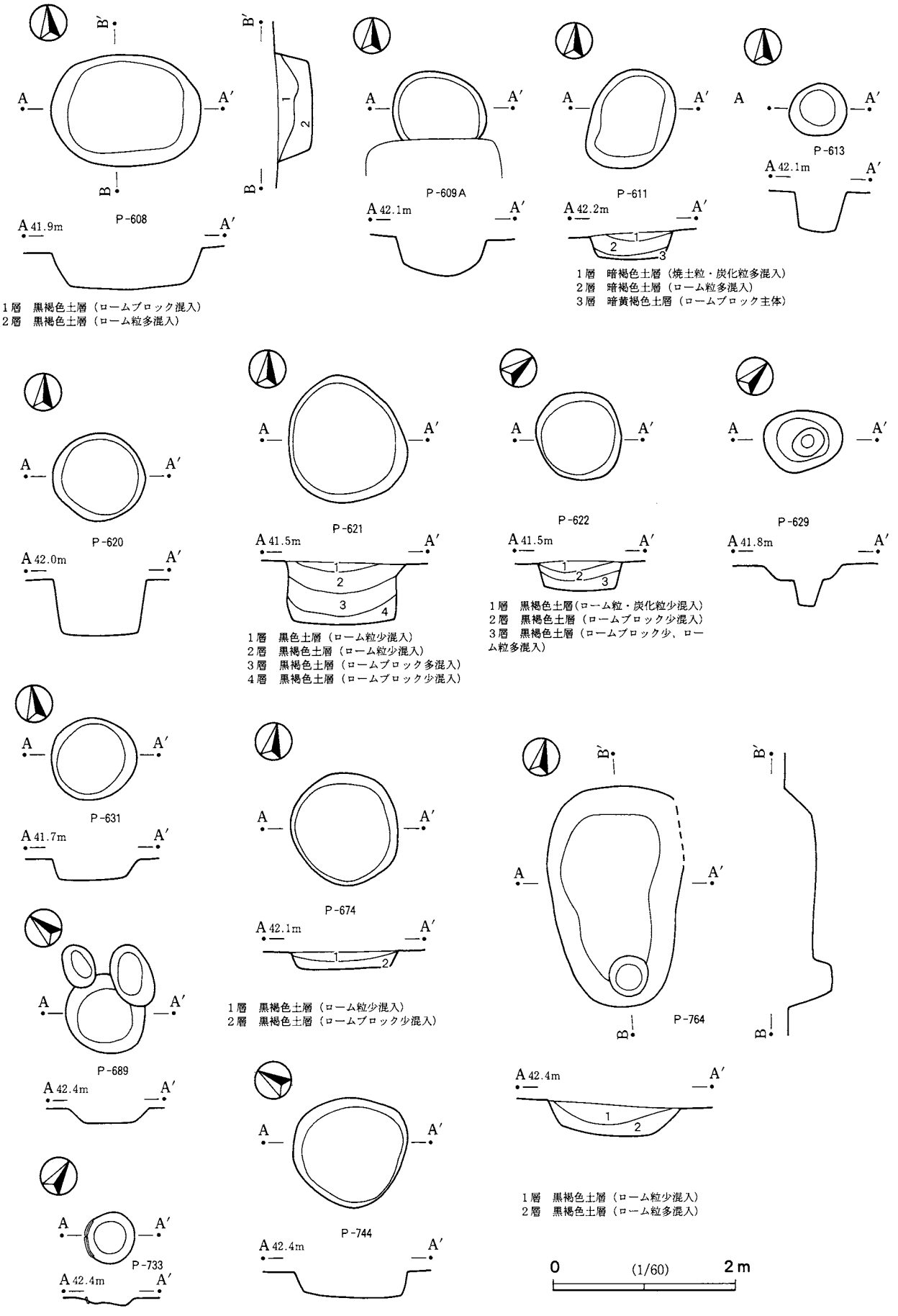
Ｐ－５６８土坑(第69図、図版17)　Ｐ－５６７土坑の西５ｍのJ16-50区に位置する。やや楕円形に近く、長軸1.5m、短軸1.4mの規模を有する。深さは40cmで、壁は垂直に近く掘り込まれる。覆土は暗色系の土層が主体となり、ローム粒子等の混入が多く認められる。覆土の中層付近から土器底部が出土したほか、土器の出土は多い。

Ｐ－５６９土坑(第69図)　Ｐ－５６８土坑の西７ｍのI16-69区に位置する。隅丸方形状を呈し、1.4m×1.3m、深さ50cmの規模を有する。覆土は、黒褐色、暗褐色の土層が主体であり、ローム粒子等の混入が多い。特に下層のロームブロックの混入が顕著である。覆土中から比較的大型土器の底部が出土した。

Ｐ－６０３土坑(第69図)　Ｐ－５６８土坑の北西に近接する。楕円形を呈し、2.8m×1.1mの規模を有する。斜面部に掘り込まれているため、壁高は北と南で異なり、南壁で70cmを測る。坑底は狭く、短軸方向での断面形はＶ字状に近い。覆土は黒褐色土が主体で、ローム粒子等を混入している。覆土中から少量の縄文土器小片が出土している。

Ｐ－６０８土坑(第70図)　J16-62区に位置する。隅丸方形に近く、1.7m×1.2m、深さ40cmを測る。覆土は黒褐色土が主体であり、ロームブロック等が多く混入する。縄文土器小片がわずかに出土している。

Ｐ－６０９土坑(第70図)　J16-52区に位置する。南側は中世の土坑により破壊されている。形状は円形に近く、径1.0mを測る。深さは40cmで、坑底は丸みがある。縄文土器小片が約10片出土した。



第70図　縄文時代土坑（10）

Ｐ－６１１土坑(第70図)　J16-53区に位置する。不整楕円形を呈し、1.1m×0.9m、深さ30cmを測る。覆土は暗褐色土が主体で、上層には焼土粒子・炭化物等が混入している。縄文土器小片が出土した。

Ｐ－６１３土坑(第70図)　J16-63区に位置する。径0.6m、深さ0.4mのピット状を呈する。少量の中期縄文土器が出土している。

Ｐ－６２０土坑(第70図)　J16-81区に位置する。円形を呈し、径1.0m、深さ60cmを測る。覆土中から少量の縄文土器小片が出土している。

Ｐ－６２１土坑(第70図)　J17-30区に位置する。円形を呈し、径1.4m、深さ70cmを測る。覆土は黒褐色土が主体で、中層以下にはロームブロック等が多く混入する。極めてわずかな縄文土器が出土している。

Ｐ－６２２土坑(第70図)　Ｐ－６２１土坑の東に隣接する。円形を呈し、径1.0m、深さ30cmを測る。覆土は黒褐色土が主体で、ロームブロック等を混入する。少量の縄文土器、軽石等が出土した。

Ｐ－６２９土坑(第70図)J17-02区に位置する。楕円形を呈し、0.9m×0.7m、深さ20cmを測る。坑底に深さ30cmのピットが掘られている。遺物の出土はなかった。

Ｐ－６３１土坑(第70図)　Ｐ－６２９土坑の南西２mに位置する。円形を呈し、径0.9m、深さ20cmを測る。覆土中から縄文土器小片がわずかに出土した。

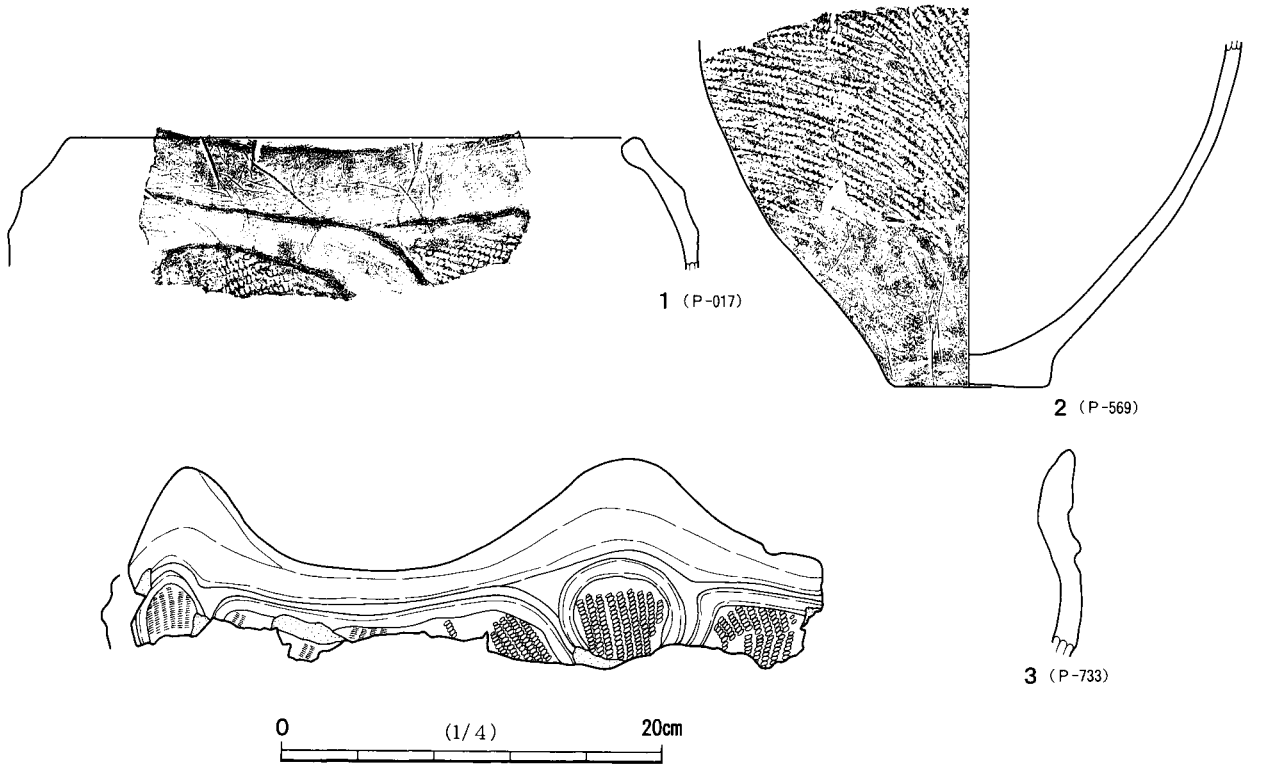
Ｐ－６７４土坑(第70図)　K17-87区に位置する。円形を呈し、径1.2m、深さ20cmを測る。覆土は黒褐色土でローム粒子・ロームブロック等を混入している。遺物の出土はなかった。

Ｐ－６８９土坑(第70図)　Ｄ－０３３住居跡の南でK17-66区に位置する。東側は２基の小ピットにより切られている。円形を呈し、径0.9m、深さ15cmを測る。縄文土器小片が少量出土した。

Ｐ－７３３土坑(第70図、図版17)　Ｄ－０３３住居跡の北西６mのK17-25区に位置する。加曽利Ｅ末期深鉢形土器口縁部のみが埋設された、単独の埋甕と思われる。掘方は円形で、径60cm、深さ10cmを測る。

Ｐ－７４４土坑(第70図)　J16-61区に位置する。やや不整な円形を呈し、径1.2m～1.3m、深さ30cmを測る。覆土中からの遺物は、縄文土器と土師器等が混在する。

Ｐ－７６４土坑(第70図)　K17-15区に位置する。不整楕円形を呈し、2.4m×1.5m、深さ30cmを測る。南壁近くに径40cm、深さ20cmのピットが掘られている。覆土は黒褐色土で、多量のローム粒子が混入する。覆土中からわずかな後期縄文土器が出土した。



第71図　土坑出土土器（１）

（２）土坑出土遺物（第71～81図、図版54～61・69）

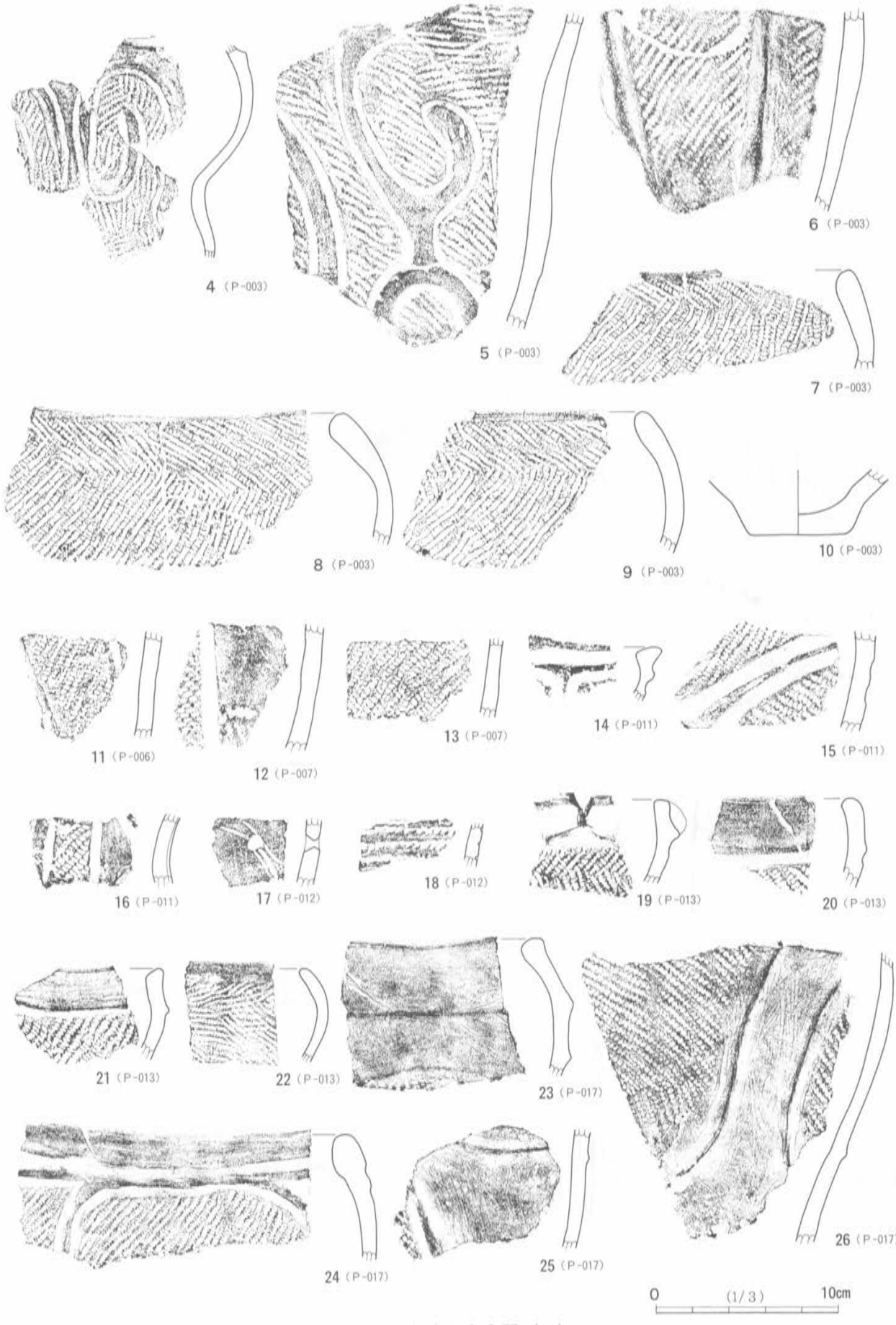
縄文時代遺構集中範囲区で検出された多くの土坑から縄文土器が出土している。これらの出土状態は、ほとんどが覆土中からのもので、底面付近でまとまって出土したものは少ない。覆土中からのものも含め、時期的には住居跡群と同様に縄文時代中期の加曽利Ｅ式後半期に属するものが大半を占めている。また、わずかではあるが、縄文時代早期、あるいは後期に属すると思われるものが検出されている。

Ｐ－００３土坑（４～10）　中期加曽利Ｅ末期から後期初頭にかけての土器が出土している。４は胴部が大きくくびれる器形のもので、沈線区画による曲線的な磨消縄文帯が施されている。口縁部付近には横位に微隆起状の隆線が巡る。５も文様の構成は４と似るが、沈線で区画された無文帯は周囲よりも高さがあり、上面を平坦に調整された隆帯状のものである。４・５は称名寺式の範疇に近いものと思われる。６は縦位に微隆起線が垂下するものである。拓影図の上位に見えるＵ字状の沈線は、破損した土器の接合部分である。７～９は内湾する器形の口縁部片である。いずれも縄文のみが羽状に施されている。同一個体の可能性が高い。10は推定底径5.1cmを測る底部である。外底面と内面はヘラケズリ状の調整が施される。

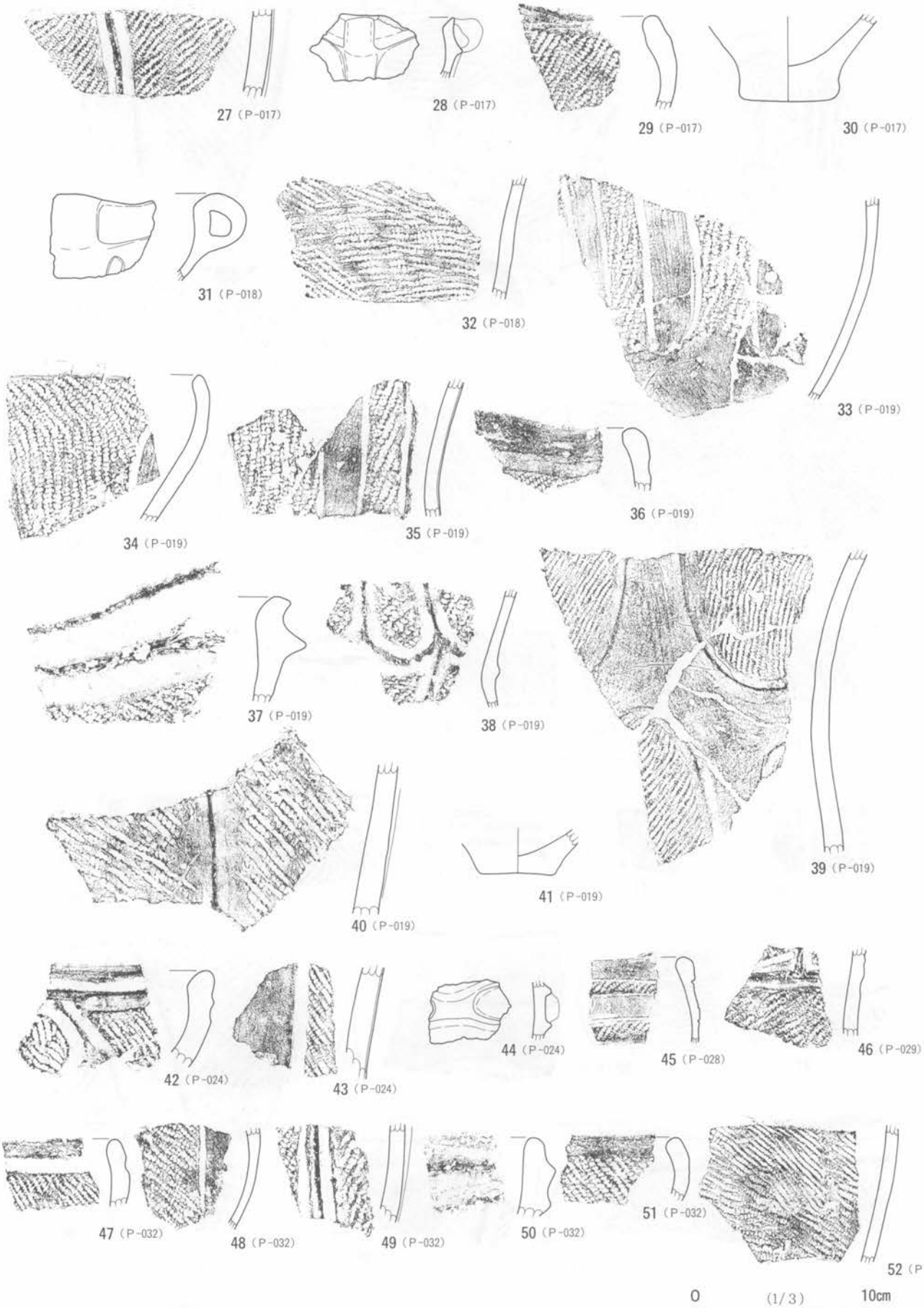
Ｐ－００６土坑（11）　11は磨消縄文帯が垂下する胴部片である。縄文は縦位回転施文のＲＬである。

Ｐ－００７土坑（12・13）　12は磨消縄文帯が懸垂文として用いられるもので、原体は縦位回転施文の複節ＬＲＬである。13はＲＬ縄文のみ認められる破片である。

Ｐ－０１１土坑（14～16）　14は緩い波状口縁を呈するもので、比較的小型の土器と思われる。口縁部に隆



第72図　土坑出土土器（2）



第73図　土坑出土土器（3）

帯による区画文が認められる。15は斜位に幅の広い沈線による区画文が施されている。胎土中には石英粒、雲母粒を多く含んでいる。16は胴のくびれ部付近の破片である。縦位の沈線による区画の幅が狭く、称名寺式と思われる。

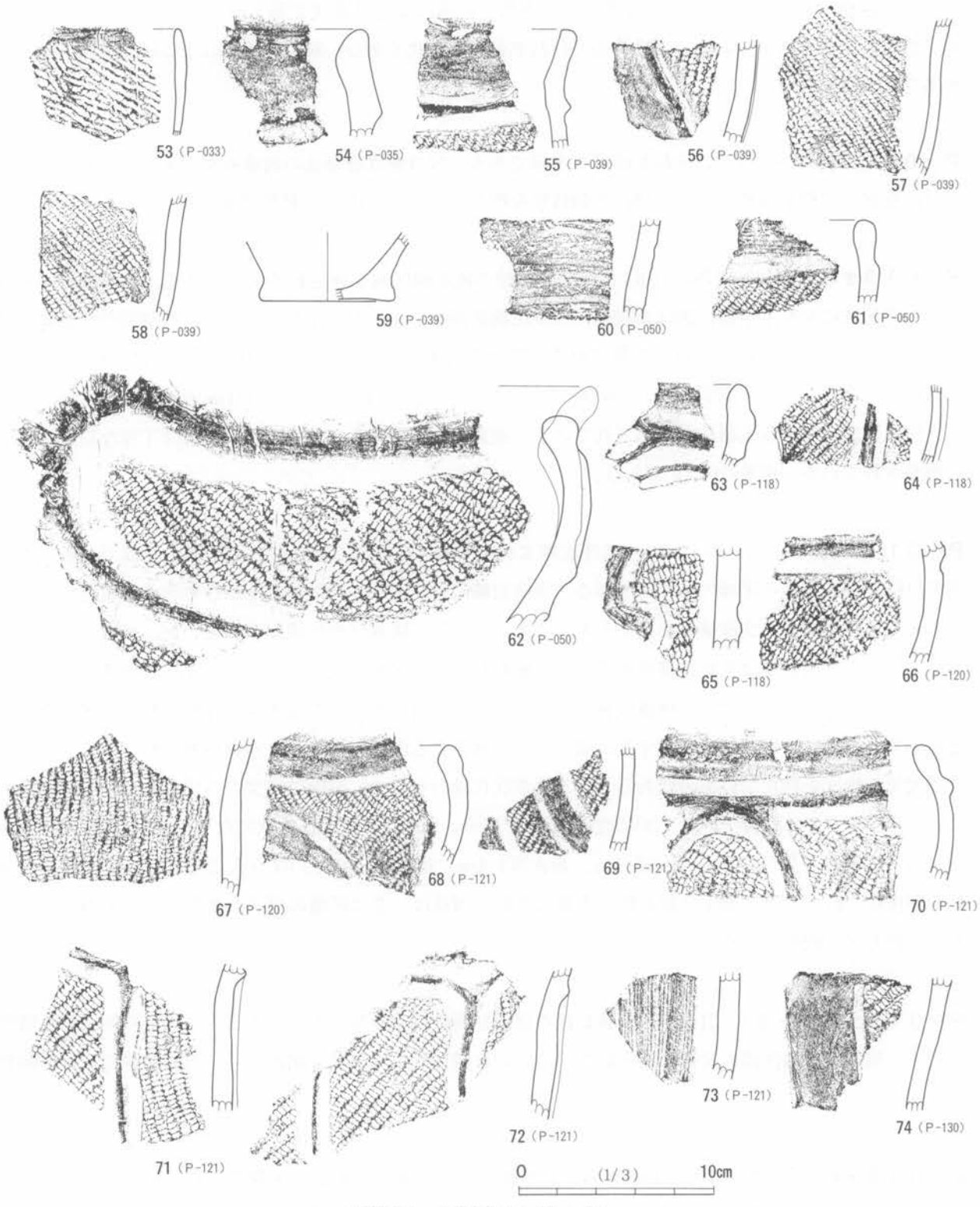
Ｐ－０１２土坑(17・18)　いずれも浮島式土器である。17は焼成後穿孔の補修孔を有する小破片である。平行沈線状の文様が認められる。18は半截竹管を押し引き、いわゆる変形爪形文を施している。

Ｐ－０１３土坑(19～22・178)　19は口縁部に横位の隆起線区画が施されるものである。隆起線は単位部分で小突起状にせり上がる。20は口縁部に横位沈線区画を有するものである。21の口縁部横位区画線は微隆起線で、緩い波状口縁と平行して施される。22は内湾する口縁部で、施される縄文の節は細かい。178は耳飾りである。全体の1/4程度しか残存していないが、径は４cm、最大厚は９mm程度と推定される。沈線と磨消縄文を有する土器片が使用されている。表裏両面から穿孔されている。周縁は丁寧な研磨によって調整されている。重量は6.5ｇである。

Ｐ－０１７土坑(１・23～30・182)　微隆起線文が主体的に施される加曽利Ｅ末期の土器群である。１は推定口径30.0cmを測る平縁の口縁部である。微隆起線により区画された無文帯がＵ字状の構成となる。23もおそらく22と同様の文様構成を呈するものであろう。24の隆線はやや繊細さがないが、口縁部から胴部にかけて大きな円状又は弧状を構成するものと思われる。25・26は胴部破片で、いずれも微隆起線により区画された無文帯がＵ字状の文様構成をとるタイプの一部分である。27は沈線で縁取られた隆線が垂下するものである。28は橋状把手を有する口縁部片で、残存する内外面の全面に赤彩が施されている。おそらく縄文等の地文を持たないものであろう。29は波状口縁のもので、全面に縄文のみ施されている。胎土中には石英粒等を多く含んでいる。30は底径5.2cmを測る。底部はわずかに柱状になる。182は土製円盤である。楕円形を呈し長径7.4cm、短径7.1cm、最大厚1.4cm、重量84.3ｇとかなり大型である。縄文施文の土器片が使用されており、胎土は長石粒を多量に含む。周縁は一部に研磨の痕跡が観察されるものの、ほとんどが打ち欠き調整である。

Ｐ－０１８土坑(31・32)　31は緩い波状口縁の頂部が橋状把手となるものである。口縁部の区画線は微隆起線で、胴部は沈線区画の文様が施されている。32は縄文のみ見られる胴部片で、内面は横位に研磨調整される。

Ｐ－０１９土坑(33～41・179)　33は丸みのある胴下半部の破片である。沈線により区画された磨消縄文帯が懸垂する。34は口唇下から地文に縄文を施し、文様は沈線区画の磨消縄文帯がＵ字状に構成されるものであろう。35は胴のくびれ部付近の破片である。沈線区画文が垂下する。36は口縁部の横位沈線区画が浅く幅広の沈線によって行われている。37は口縁部の横位区画線である隆帯が鍔状に高く迫り出している。38は地文の縄文上に隆線が枠状に施されているものである。39は胴部のくびれ部を境に微隆起線区画がＵ字状と逆Ｕ字状に連繋するものであろう。40の縦位隆線は、縄文施文後粘土紐をなぞり付けるように貼り付けられている。41は底径3.8cmの底部片である。179は土製円盤である。直径3.3cm、最大厚0.6cm、



第74図　土坑出土土器（4）

重量8.5ｇである。微隆起線による区画を有する土器が使用されており、胎土は石英粒を含みキメが細かい。周縁は一部打ち欠き痕が残るが、ほぼ全面研磨調整がなされている。

Ｐ－０２４土坑(42～44・180)　42は地文の縄文上に沈線により曲線状の文様が描出されると思われる口縁部片である。43は磨消縄文帯が垂下する胴部片である。44は隆線が眼鏡状の文様を構成する。180は土

製円盤である。楕円形を呈し長径2.2cm、短径2.0cm、最大厚1.0cm、重量5.1ｇの小型のものである。無文土器が使用され、胎土は砂粒を多量に含むキメの粗いものである。周縁は研磨調整されている。

Ｐ－０２６土坑(204)　204は硬砂岩の磨石である。ほぼ全面が研磨されて滑らかになっている。

Ｐ－０２８土坑(45)　45は口縁部にいわゆる帯縄文が巡るものである。後期の安行１式である。

Ｐ－０２９土坑(46)　46は口縁下部の破片で、沈線により縁取られた低い隆線が枠状に構成されるものと思われる。全体の構成が不明であるが、他のものとはやや様相を異にする。

Ｐ－０３２土坑(47～52)　47は口唇下に横位の沈線が巡る。48は丸みを持つ胴部片で、磨消縄文帯が垂下する。49は沈線で縁取られた隆線が垂下する。50は隆線が横位に巡る口縁部片である。51の口縁部無文帯は沈線区画を持たない。52は節の細かなＬＲ縄文が施されている。

Ｐ－０３３土坑(53・190・196)　53は地文に無節Ｌ縄文が施される口縁部片で、地文上に垂下する細い沈線が認められる。190は安山岩の石鏃未成品である。両側縁からかなり入念な加工が施される一方で、基部はあまり加工されていないことから、あるいは石錐に加工しようとしたものかもしれない。196は安山岩のＲ剥片である。右側縁に連続した加工痕が観察される。

Ｐ－０３５土坑(54)　54は口縁部に断面三角形となるような隆線が施されている。

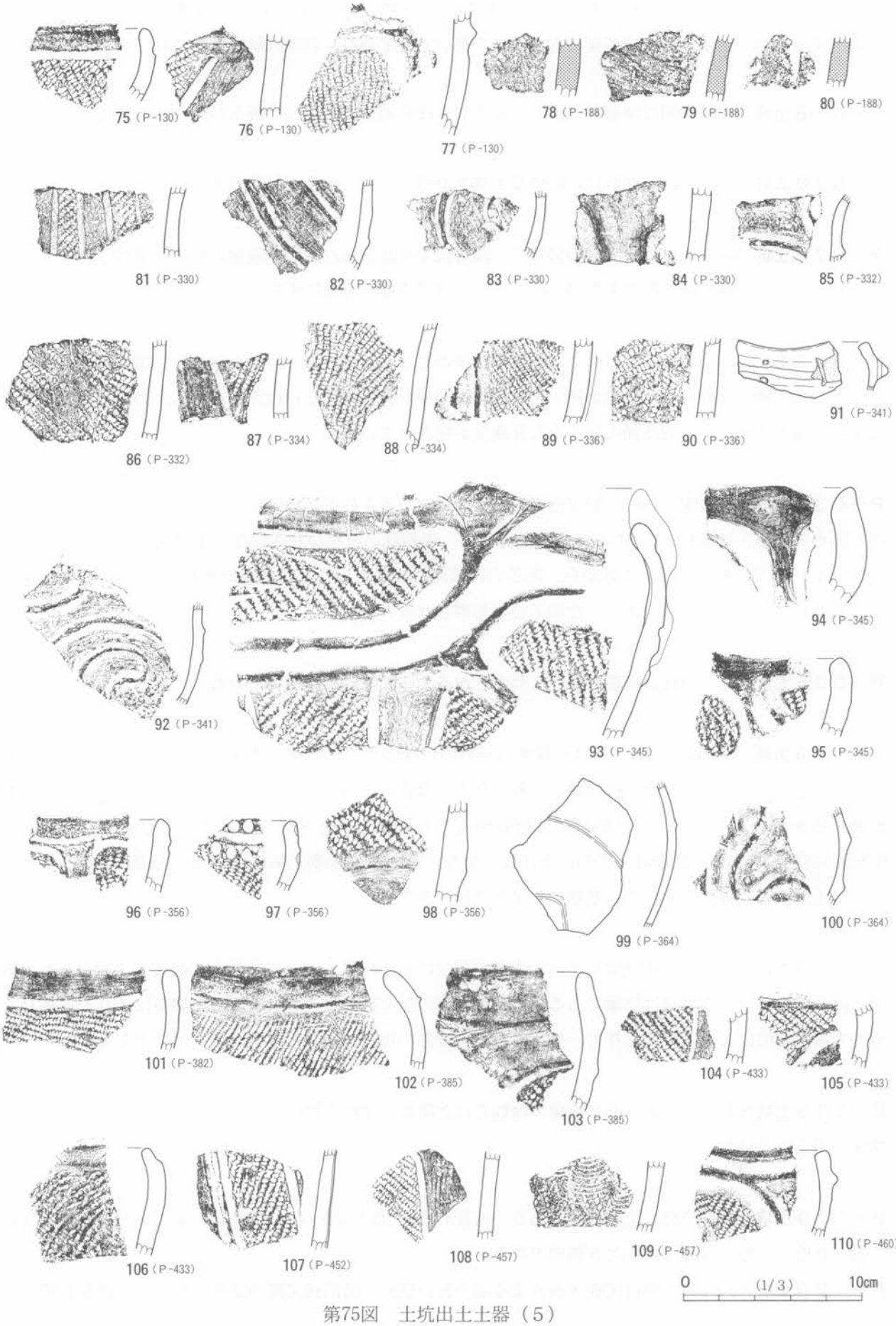
Ｐ－０３９土坑(55～59・189)　55は外傾する器形の口縁部片で、横位に隆線による区画が施される。壷形土器と思われる。外面口縁部は油煙が付着したような感じだが、黒色を呈している。56は隆線により磨消縄文帯を区画している。57・58は縦位回転施文のＬＲ縄文が施される胴部片である。59は推定底径6.8cmの底部片である。底面はわずかに上げ底となる。189は安山岩製の石鏃である。先端部が破損している。平面形態は二等辺三角形で、基部にわずかに抉りが入る。

Ｐ－０５０土坑(60～62)　60は極めて浅い沈線が横位に施されるもので、早期の沈線文系土器である。胎土には石英粒等を含み焼成は堅緻である。61は口縁部の無文帯が強いヨコナデ状の調整により形成されるものである。62は大型の口縁部片で、隆帯による口縁部の楕円区画文が施されるタイプである。

Ｐ－１１８土坑(63～65)　63～65は沈線で縁取られた隆線が文様を描出するものだが、小片のため全体の構成は明らかではない。

Ｐ－１１９土坑(183)　183は土製円盤である。直径3.8cm、最大厚0.6cm、重量12.3ｇである。縄文施文の土器片を使用する。周縁は打ち欠き調整である。

Ｐ－１２０土坑(66・67)　66は沈線区画による幅の狭い横位の磨消縄文帯が認められる。67はＲＬ縄文の



第75図　土坑出土土器（5）

施される胴部片である。

Ｐ－１２１土坑(68～73・188)　68は内湾する器形の口縁部片である。文様は沈線が曲線的な区画文を形成しており、全体的には連続する弧状の文様を有するタイプと思われる。69も68と同タイプのものであろう。70は口縁部以下に隆線による円状の文様が配されるものであろう。71・72は隆線が枠状の文様を構成しているものである。73は条線のみ施される胴部片である。188は黒曜石製の石鏃である。先端部が破損している。平面形態は二等辺三角形で、基部に大きく抉りが入る。

Ｐ－１２３陥穴(186)　186はチャート製の石鏃である。長さ23.0㎜、幅17.8㎜、最大厚4.5㎜、重量1.4ｇである。平面形態は二等辺三角形で、わずかに抉りが入る。

Ｐ－１３０土坑(74～77・184)　74・76は沈線区画の磨消縄文帯が施されている。76は内湾する器形の口縁部片である。77は71・72と同様に隆線が枠状の文様を構成するものと思われる。184は土製円盤である。楕円形を呈し長径4.3cm、短径3.9cm、最大厚0.9cm、重量20.3ｇである。無文土器を使用し、胎土はキメが細かい。周縁は打ち欠き調整のあと、一部研磨されている。

Ｐ－１８８土坑(78～80)　78～80は胎土に繊維を含む無文の土器である。早期の条痕文系土器である。

Ｐ－３２８土坑(193)　193は安山岩の楔形石器である。両側縁からの加工痕が顕著である。

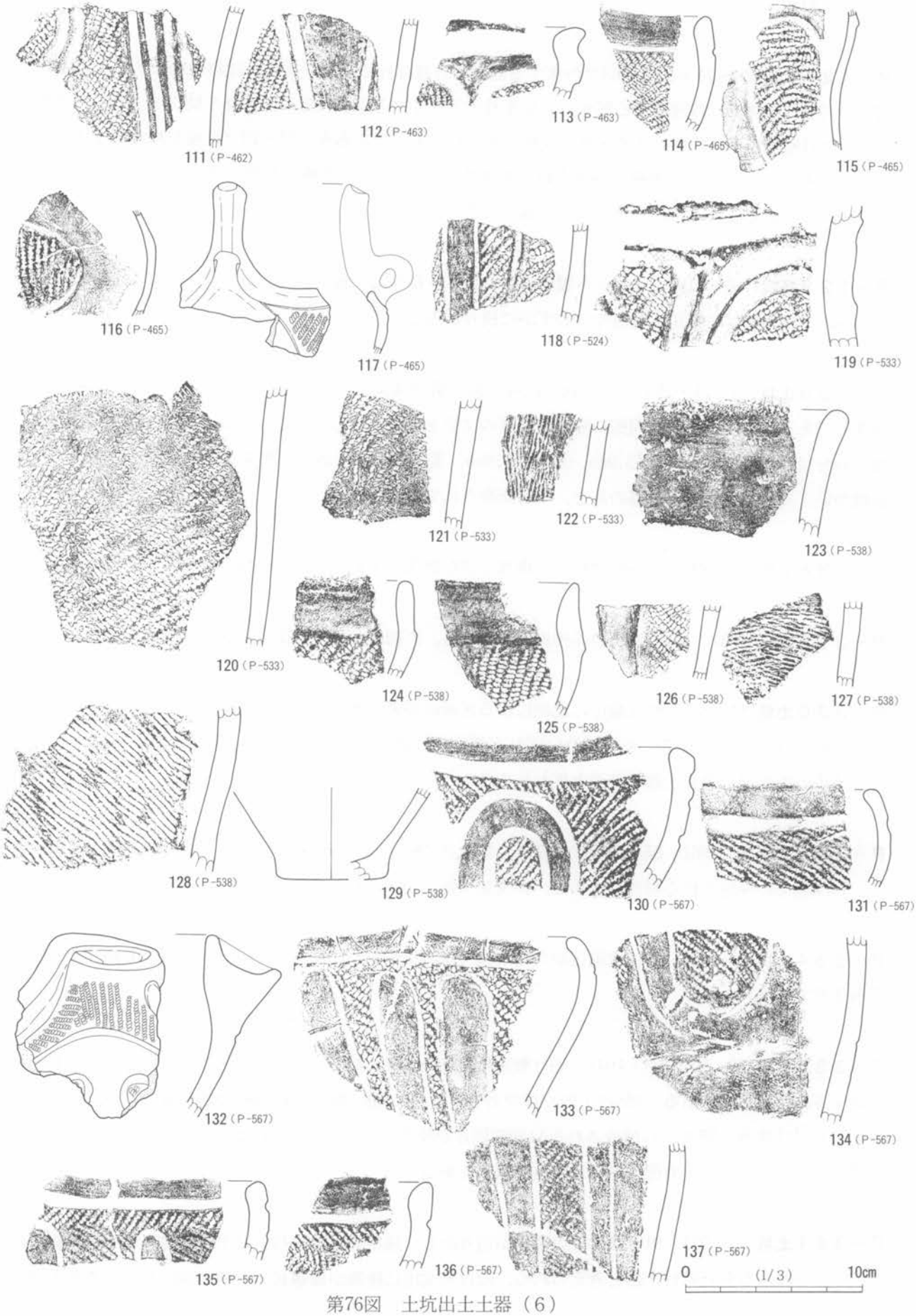
Ｐ－３３０土坑(81～84)　81は縦位に沈線による区画線が施されるもので、区画線の間隔が比較的狭いことから称名寺式と思われる。82・83はいずれも無文地に隆線による曲線状の文様が描出されるものである。薄手の作りで、壷形土器の破片と思われる。

Ｐ－３３２土坑(85・86)　85は曲線状の隆線と器厚共に82・83と類似しており、やはり壷形土器と思われる。86は縄文のみ施される胴部片である。縄文施文後につけられた縦位の擦痕が認められる。

Ｐ－３３４土坑(87・88)　87は沈線区画の磨消縄文帯がやや斜めに施されている。88はＲＬ縄文の施される胴部片である。

Ｐ－３３６土坑(89・90・185・194)　89は微隆起線状の隆線が縦位に無文帯を区画している。90はＲＬ縄文が施される胴部片である。185は土器片錘である。長さ4.1cm、幅5.1cm、最大厚0.9cm、重量22.2ｇである。貼り付け隆帯と縄文から構成される口縁部破片が使用されている。194は安山岩の楔形石器である。左側が折断されている。右側縁側の加工痕が顕著である。

Ｐ－３４１土坑(91・92)　91は口唇下の隆帯が迫り出し、隆帯の付け根付近に上下に貫通する孔が穿たれている。いわゆる有孔鍔付土器と考えられる。92は無文地に隆線が曲線状の文様を描出しているもので、



第76図　土坑出土土器（6）

有孔鍔付あるいは壷形土器と思われる。

Ｐ－３４２土坑(181)　181は土製円盤である。楕円形を呈し長径2.3cm、短径2.1cm、最大厚0.6cm、重量3.9ｇの小型のものである。縄文施文の土器片を使用している。周縁は全面研磨調整されている。

Ｐ－３４５土坑(93～95)　93～95は全て緩い波状口縁の土器である。文様の構成が窺えるのは93のみである。93は口縁部に弧状の隆帯による区画文が施され、以下は沈線区画の磨消縄文帯が垂下する。

Ｐ－３４５土坑(96～98)　96は弧状の沈線が縦位に縄文帯と磨消縄文帯とを区画する口縁部片である。97は口唇下に円形刺突文が連続して巡らされるものである。98は弧状の隆線が文様を区画する。

Ｐ－３５６土坑(197)　197は安山岩の楔形石器である。背面側は打面側からの、腹面側は先端側からの剥離痕が目立つ。

Ｐ－３６４土坑(99・100)　99・100はいずれも丸みのある器形を有し、比較的薄手の作りのものである。無文地に微隆起線による曲線状の文様が描出されており、壷形土器と思われる。99の区画帯内には赤彩が施されている。

Ｐ－３７１土坑(200)　200は緑泥片岩の磨製石斧である。基部側が破損している。平面形態は短冊形を呈し、断面は長方形である。全面が丁寧に研磨されている。

Ｐ－３８２土坑(101)　101は口唇下に横位の沈線が巡るもので、口縁部内の縄文はＬＲである。

Ｐ－３８５土坑(102・103)　102は内湾する器形の平縁の口縁部片で、口唇下の区画は微隆起状の沈線による。103は口唇下の区画隆線にU字状に区画された無文帯が接合する文様構成のものと思われる。

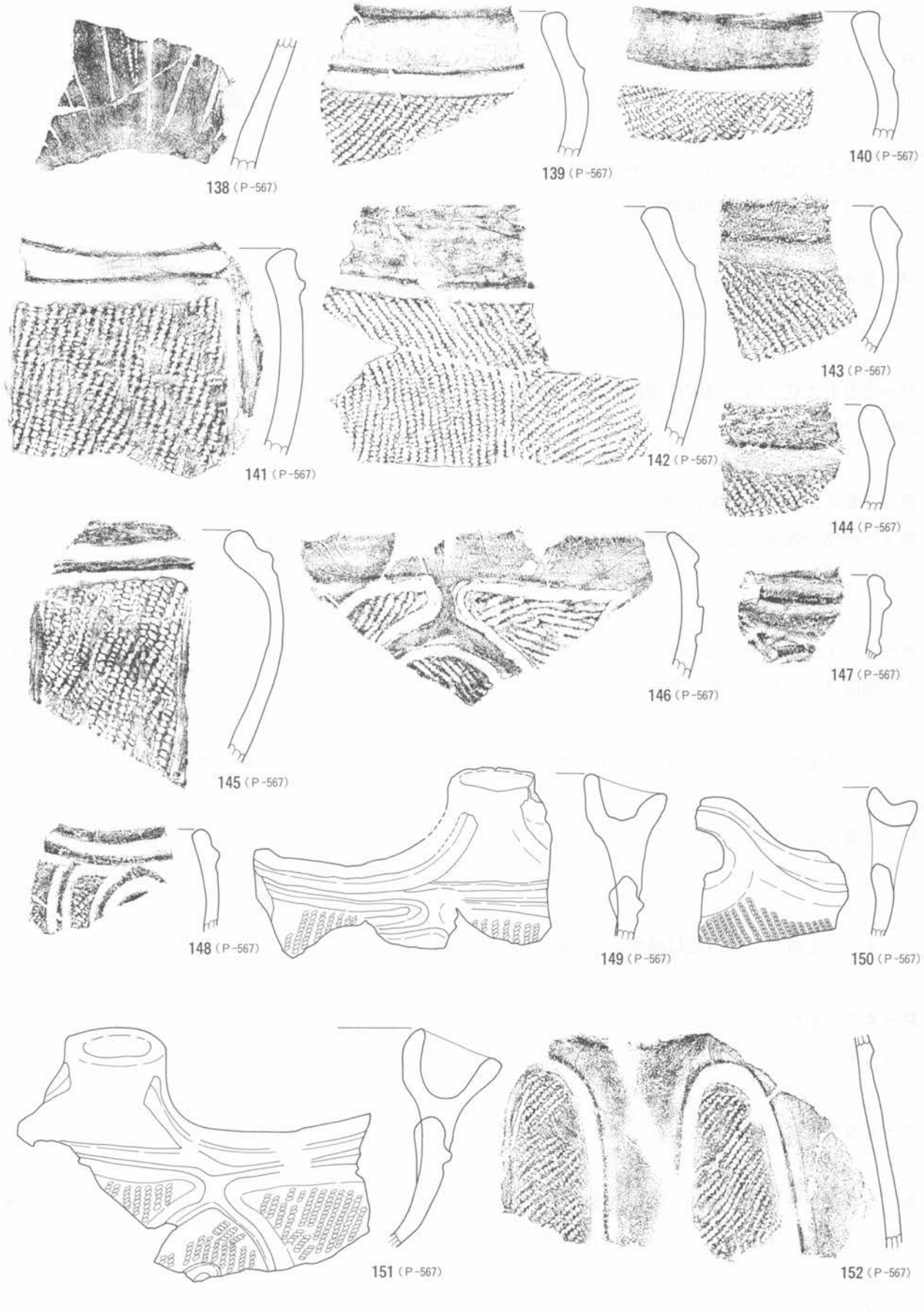
Ｐ－４３１土坑(192)　192は凝灰岩の石鏃未成品である。

Ｐ－４３３土坑(104～106)　105は沈線区画の磨消縄文帯が曲線状の構成となるものであろう。106は内湾する器形の口縁部で、口唇下がヨコナデ状の調整により無文帯となるものである。

Ｐ－４５２土坑(107)　107は縦位に区画沈線が垂下するが、全体の文様構成は不明である。

Ｐ－４５７土坑(108・109・187)　108の沈線区画による磨消縄文帯は上位が若干開いており、口縁部と連繋するタイプのものかもしれない。109は櫛歯状工具による条線が曲線的に施されている。187は黒曜石製の石鏃である。平面形態は二等辺三角形で、基部にわずかに抉りが入る。

Ｐ－４５９土坑(191・198)　191はチャートの石鏃未成品である。198は黒曜石のＲ剥片である。腹面側に



第77図　土坑出土土器（7）

両側縁からの加工痕が目立つ。

Ｐ－４６０土坑(110)　110は口縁部以下の文様が曲線的な隆線により施されている。

Ｐ－４６２土坑(111)　111は４条単位の沈線が文様の区画線となる。本遺跡出土の加曽利Ｅ式土器にはあまり見られないタイプである。

Ｐ－４６３土坑(112・113)　112の区画沈線も２条の複数単位である。113は波状を呈する口縁部片で、波頂部下に隆線による円形状文が施されるものと思われる。

Ｐ－４６５土坑(114～117)　114は内湾する器形を呈する波状口縁の土器である。口縁部の横位沈線は他のものよりも細くやや深い。115～117は全て薄手の作りで、色調、焼成共に類似することから同一個体と思われる。117は波状口縁の頂部が角状に直立し、波状口縁の基部には橋状の把手が付けられる。文様の区画は、片側に沈線が沿っているがほぼ微隆起線状であり、その構成も口縁部以下にU字状に連繋するタイプと思われる。加曽利Ｅ末期の範疇ではあるが、波頂部の装飾は後出的である。

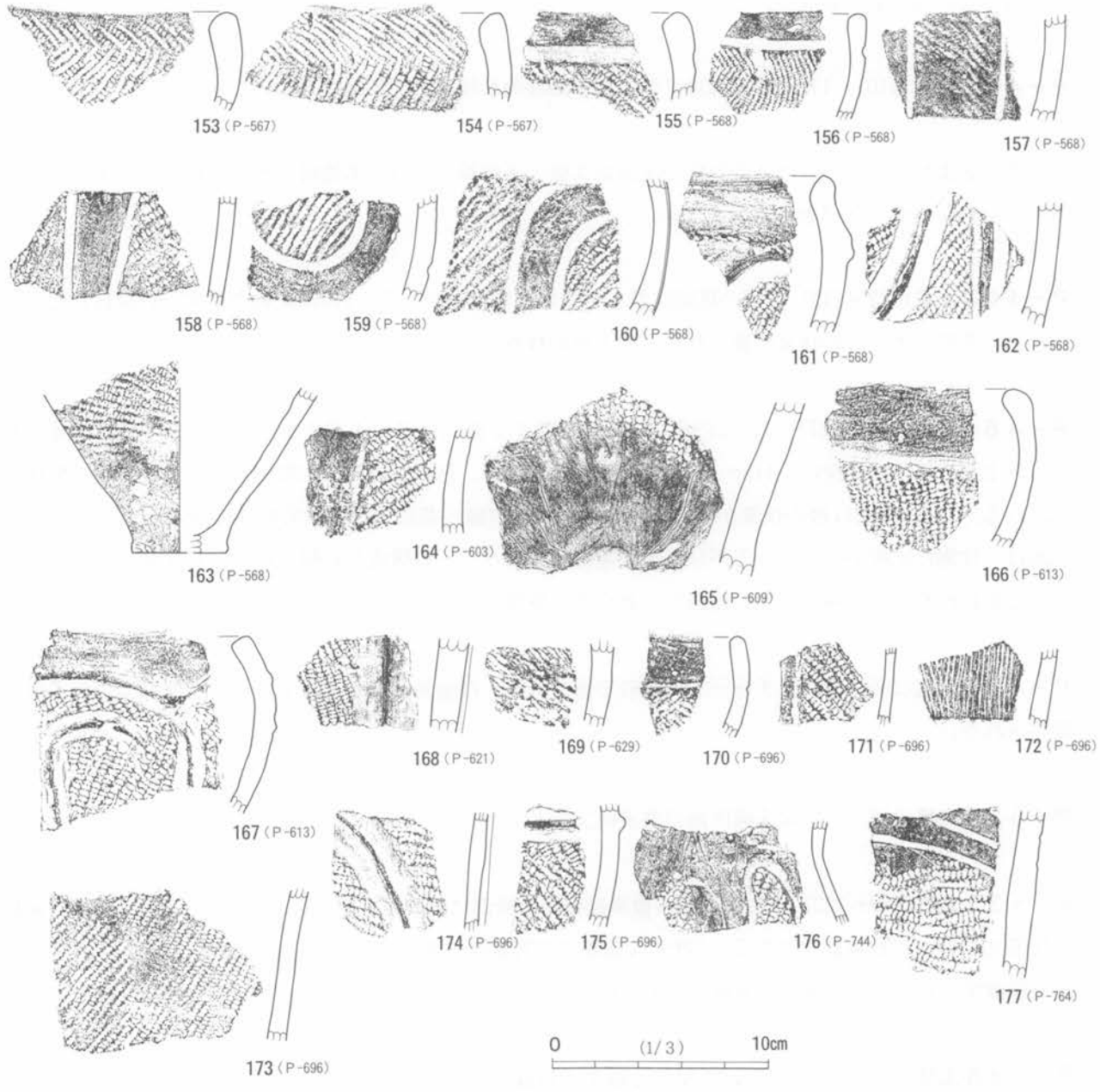
Ｐ－４９１土坑(195)　195はチャートの楔形石器である。打面側が折断されている。右側縁側に加工痕が観察される。

Ｐ－５２４土坑(118)　118は沈線区画の磨消縄文帯と、縄文地に単独沈線が垂下している。

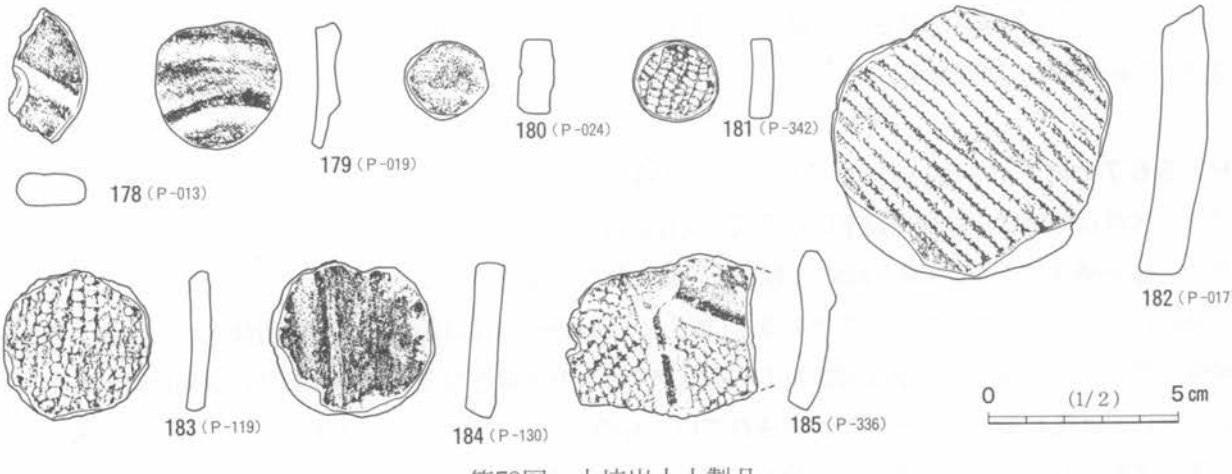
Ｐ－５３３土坑(119～122)　119は弧状の微隆起線が口縁部に連繋して施されるものである。120は複節ＲＬＲ縄文の施される胴部片である。121も複節縄文の可能性があるが施文が浅く判然としない。縄文に加えて櫛歯状工具による曲線的な条線が認められる。122は櫛歯状工具による条線のみが施される。

Ｐ－５３８土坑(123～129)　123は外反する器形の口縁部で、無文部分である。壷形土器等の可能性がある。124・125は口縁部の区画線が微隆起線状となっているものである。126の無文帯内はなぞりが加えられている。127は条線文が施された胴部片である。128は無節Ｌ縄文が施された胴部片である。129は推定底径5.7cmを測る底部である。

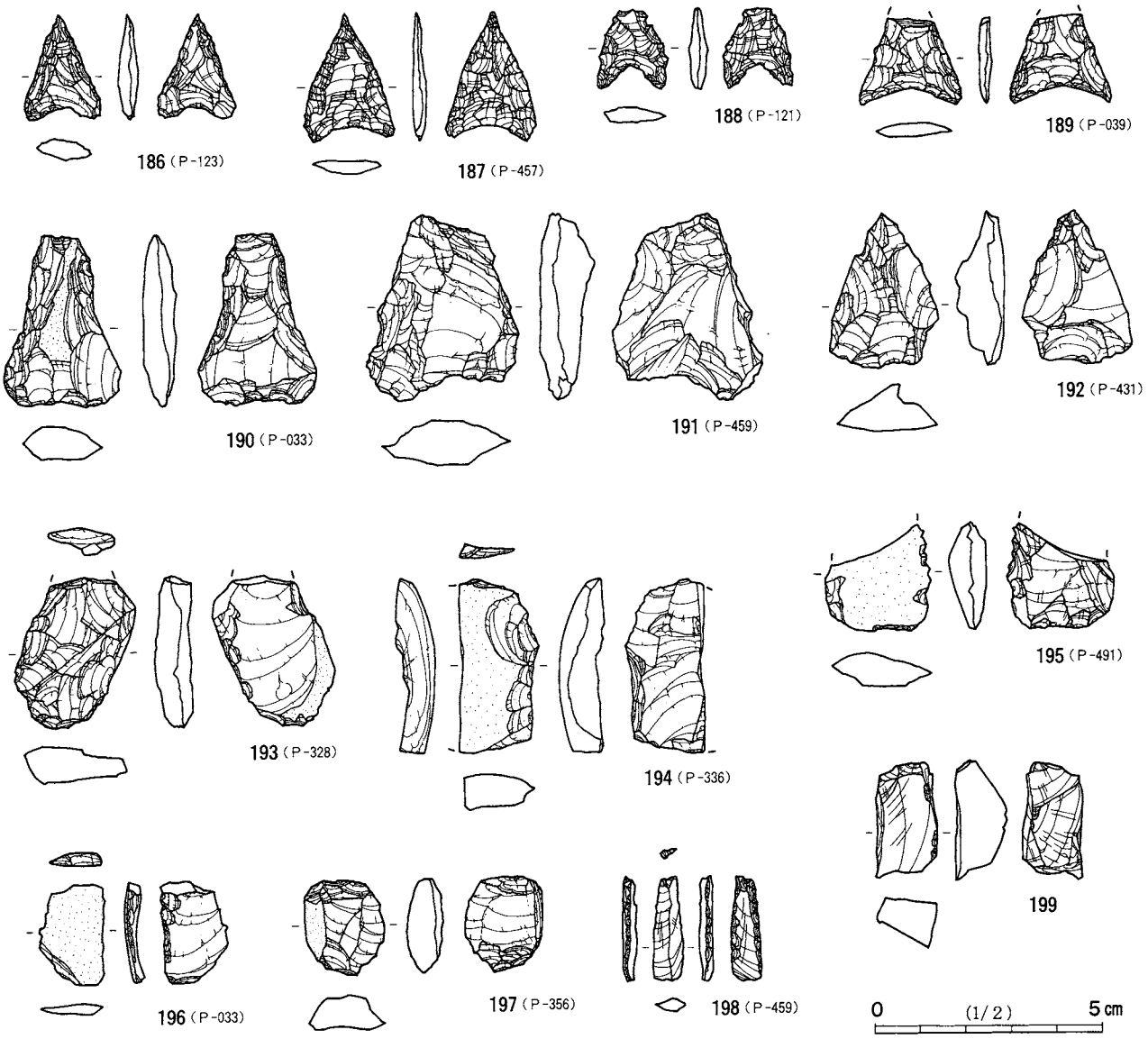
Ｐ－５６７土坑(130～154・203)　130～138は沈線による文様が施されるものである。口唇下に施される横位の沈線以外では、口縁部以下にU字状の文様が描出される。130・132では沈線で区画された磨消縄文帯が文様を構成するが、133・135・136では区画となる沈線そのものがU字状となる。139～152は主として隆線により文様が施されるものである。139・140・142～144は口縁部に横位の微隆起状の隆線を施し口縁部の無文帯と区画する。微隆起線の下位はなぞりにより沈線となる。141・145は口縁部に連繋して口縁部以下にも微隆起線による区画帯が施されているものである。146～149・151も口縁部以下に隆線による文様が連繋されるが、その構成は曲線的で円形状文や渦巻文になると思われる。152はU字状の微隆起線



第78図　土坑出土土器（8）



第79図　土坑出土土製品



第80図　土坑出土石器（1）

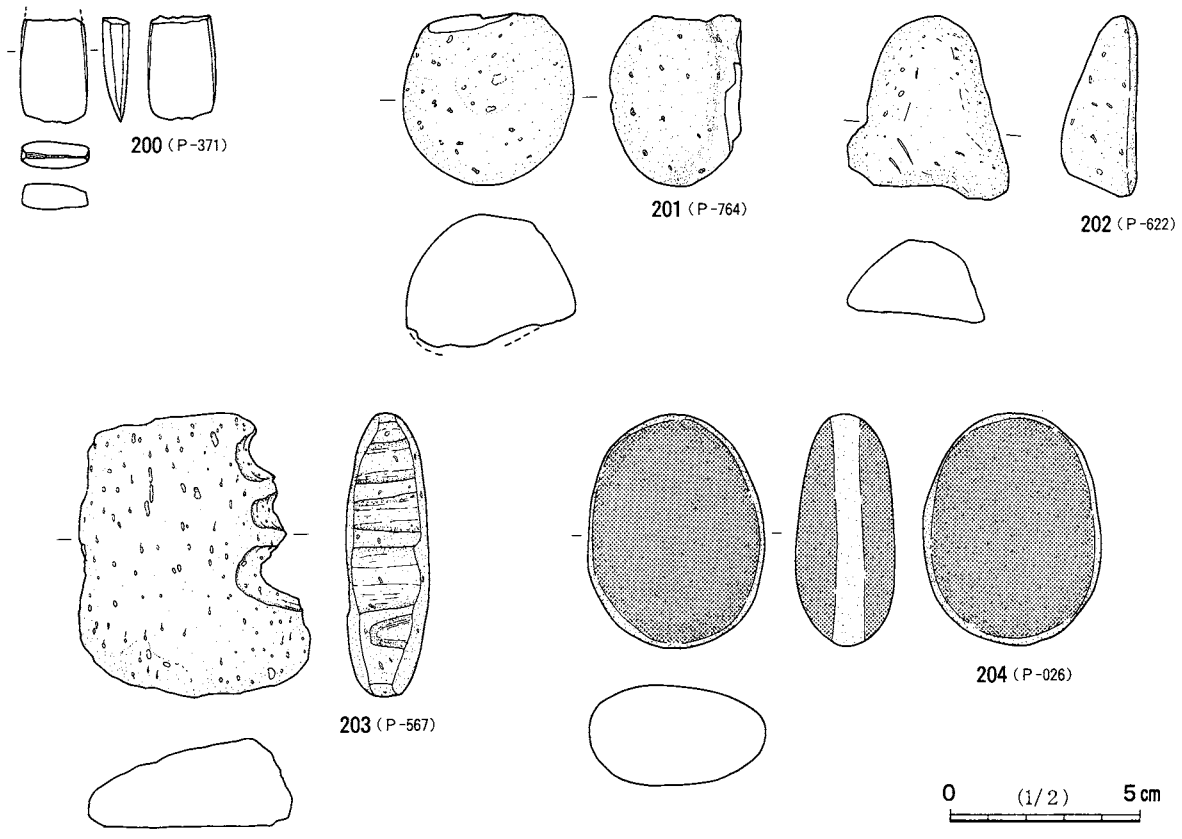
が垂下する胴部片である。153・154は縄文のみ施される口縁部片である。縄文は施文方向を変えることで羽状とする。203は軽石である。全体に研磨痕が観察されるほか、右側には櫛の歯のような窪みがみられる。矢柄のような木の棒を研磨したものと考えられる。

Ｐ－５６８土坑(155～163)　155・156は口唇下に横位沈線が施される口縁部片である。157～160は沈線区画の磨消縄文帯が文様を構成するもので、159・160では曲線的となる。161・162は沈線で縁取られた隆線が曲線的な文様を描出している。163は推定底径4.3cmを測る底部である。ＬＲ縄文が施されている。

Ｐ－５６９土坑(２)　２は底径7.8cm、現存高19.0cmを測る深鉢形土器下半部である。胴部には単節ＲＬ縄文が施されているが、施文の方向は一定ではない。底部付近は縦位のミガキ状の調整が施される。

Ｐ－６０３土坑(164)　164は沈線区画の磨消縄文帯が垂下する胴部片である。

Ｐ－６０９土坑(165)　165は底部付近の破片である。胴部に施される縄文はＲＬで、底部付近は縦位にミ



第81図　土坑出土石器（2）

ガキ状の調整が施されている。

P－６１３土坑(166・167)　166は内湾する器形の口縁部片で、口縁部横位の区画線は極めて浅い沈線による。167も内湾する器形の口縁部片で、沈線で縁取られた隆線が曲線的な文様を描出する。

P－６２１土坑(168)　168は隆線が垂下する胴部の小破片である。

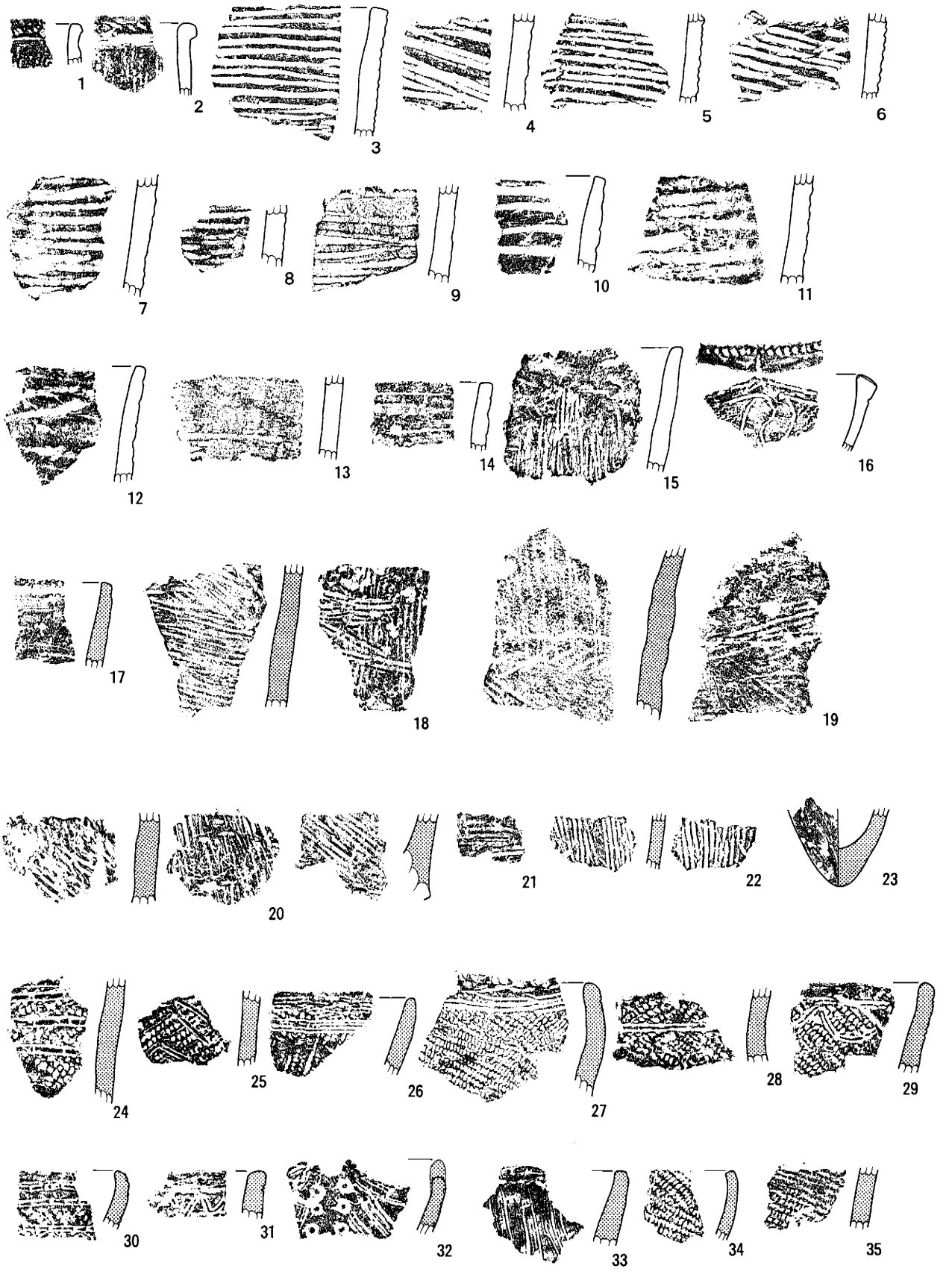
P－６２２土坑(202)　202は軽石である。断面三角形を呈するが、研磨によってこのような形態になったものと考えられる。特に裏面は研磨痕が著しい。

P－６２９土坑(169)　169は無節Ｒ縄文が施されている胴部の小破片である。

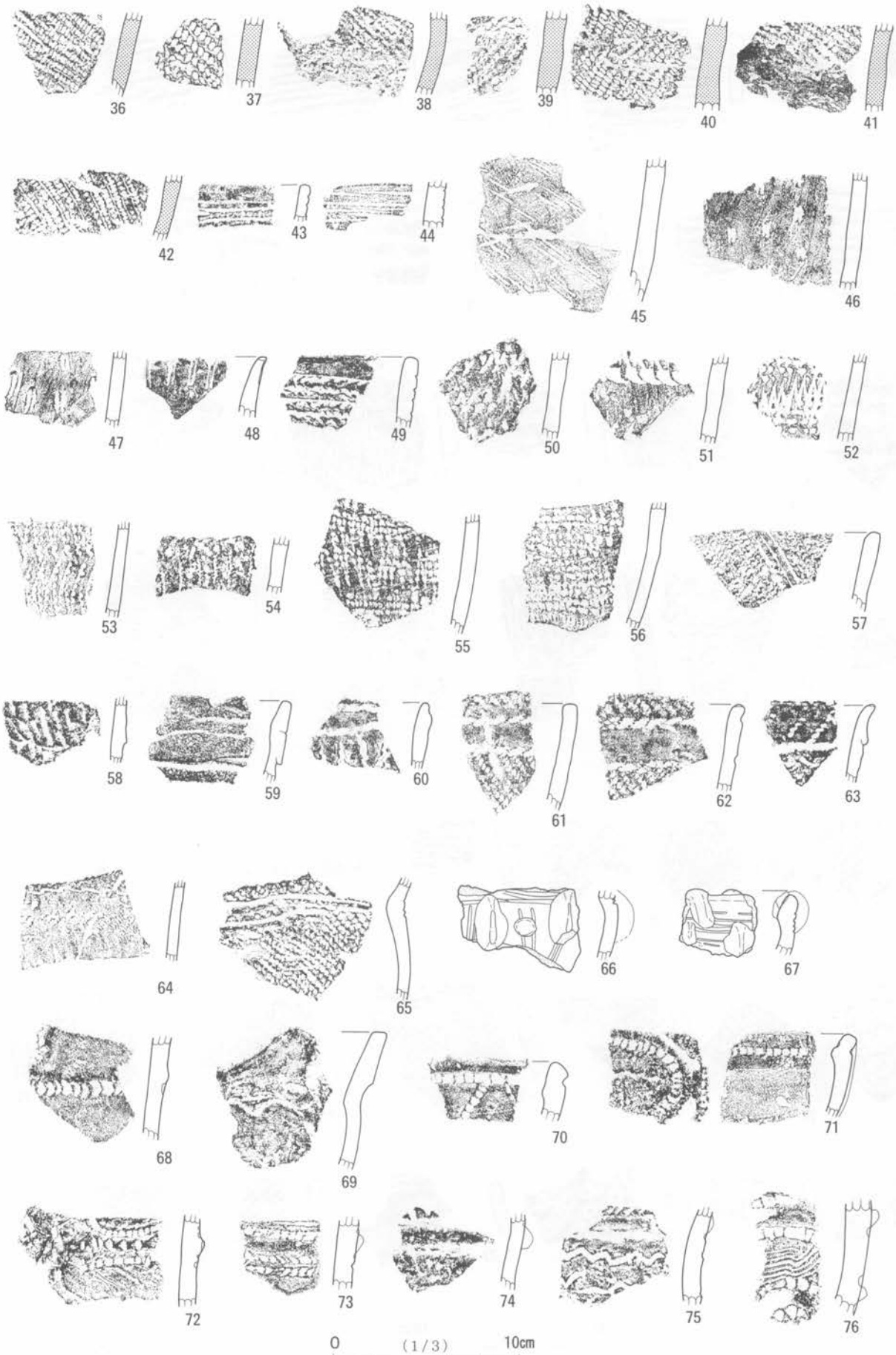
P－６９６土坑(170～175)　170は口縁部に細くやや鋭い沈線が施されている。171の区画沈線も同様に細く、縦位の磨消縄文帯を区画する。172は条線が地文として施される小破片である。173は単節ＲＬ縄文の施された胴部片である。174は隆線が曲線的な文様を描出しているものである。

P－７３３土坑(３)　３は推定口径50.0cm以上を測る極めて大型の土器口縁部である。波状口縁を呈し、波頂部下には沈線による円形状の文様が配される。

P－７４４土坑(176)　176は胴のくびれ部付近の破片で、沈線によりＵ字状の区画文様が施される。



第82図　グリッド出土縄文土器（1）



第83図　グリッド出土縄文土器（2）

Ｐ－７６４土坑(177・201)　177の沈線区画文は緩い弧状を呈し、３本以上の単位となるものである。201は軽石である。表面のほぼ全面に研磨痕が観察される。

５　グリッド出土遺物

(１)土　　器(第82～90図、図版61～68)

第Ⅰ群土器

縄文時代早期の土器群である。数量的にはごく少数である。

第１類(１・２)

撚糸文土器である。口唇部が大きく外反し、口唇上に原体が圧痕される。胴部は縦方向に施文される。井草Ⅰ式である。

第２類(３～15)

沈線文系土器群のうち、田戸下層式と思われるものである。円形の棒状工具によって横方向に沈線が施文される。

第３類(16)

沈線文系土器群のうち、田戸上層式と思われるものである。口唇上にはキザミを持つ。細沈線による区画を貝殻腹縁文で充填する。

第４類(17～23)

いわゆる条痕文系土器であるが、早期末の茅山式だけに限定することはできない。17は口縁部破片である。条痕ではなく擦痕により調整される。18～22は胴部破片である。いずれも表裏の条痕が顕著である。23は尖底である。

第Ⅱ群土器

縄文時代前期の土器群である。型式的には黒浜式、浮島式、諸磯式、興津式等があるが、各型式共に数量的にまとまりはなく、文様要素からの細分は行っていない。

第１類(24～42)

黒浜式土器である。24～30は縄文地紋と半截竹管による沈線によって構成されるもの。24・30は押し引き沈線が平行に配される。31～33は沈線を主体とするもの。32は中空の棒状工具による連続刺突が、縦方向に２列施される。34～41は縄文が施されるもの。42は附加条縄文が施されるもの。

第２類(43～56)

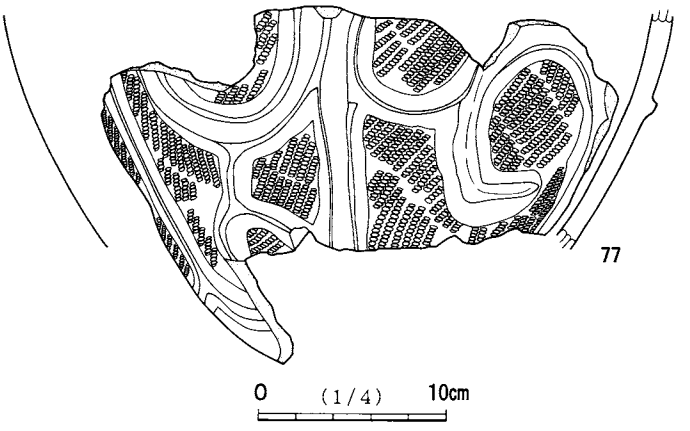
浮島式土器である。43～45は半截竹管による沈線文が施される。48は口縁部で、半截竹管による条線文が施される。49は半截竹管による変形爪形文が施される。50～56は貝殻腹縁による変形爪形文が施されるものである。55・56は貝殻波状文をずらし気味に施すことから興津式の可能性もある。

第３類(57・58)

興津式土器である。斜行する沈線と貝殻腹縁文が施される。

第４類(65～67)

諸磯式土器である。65は頸部と思われる破片で、縄文地紋に半截竹管による沈線が施される。諸磯ｂ式



第84図　グリッド出土縄文土器（3）

である。66・67は半截竹管による条線と、耳たぶ状の貼り付け文から構成される。諸磯ｃ式である。

第Ⅲ群土器

縄文時代中期の土器群である。中でも中期後半の加曽利Ｅ式は当遺跡から出土した縄文土器の圧倒的な主体を占めている。

第１類(59～64)

前期末から中期初頭に位置づけられる土器である。いわゆる下小野式や粟島台式といった地域色の濃い土器が含まれている。59は折り返し口縁を持つ無文土器である。60～62は口縁部資料で、ＲＬ縄文原体を口縁に添って２本平行に圧痕する。64は綾繰文が横方向に施されるもの。

第２類(68～76)

縄文時代中期前半の阿玉台式土器である。68は微隆起状の低い隆帯に連続刺突が伴うもの。69は口縁に突起がつき、口縁部文様帯には波状沈線が配される。70・71は角押文を主体とする口縁部である。72はキザミを持つ隆帯の上下に角押文を施すもの。以上の資料は、阿玉台式の中でも古い段階の特徴を備えている。73～76は隆帯が大柄になり、角押文や波状沈線が伴うもの。

第３類

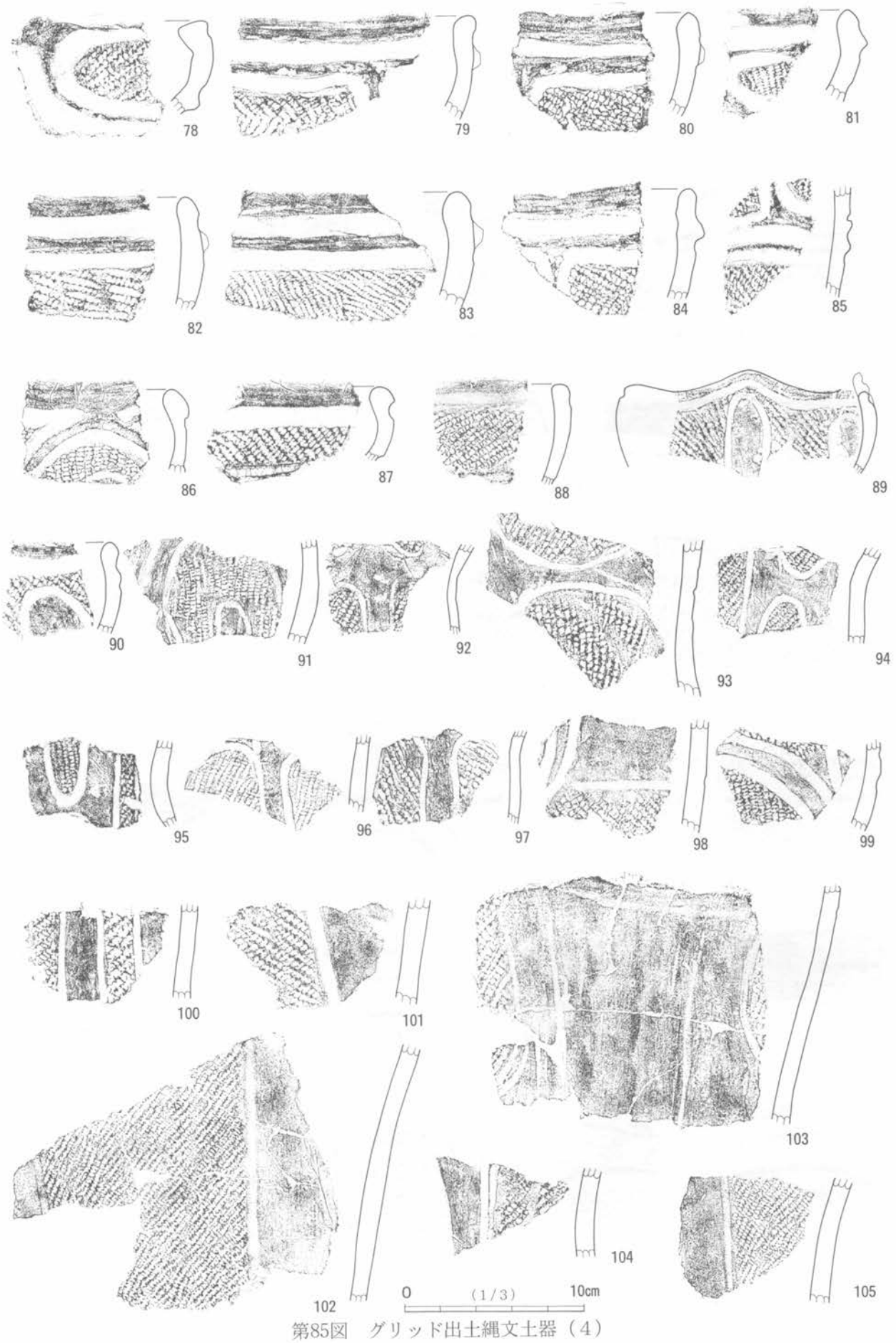
縄文時代中期後半の加曽利Ｅ式土器である。文様要素の違いにより次の種に細分しておく。

１種(78～85・87・88)

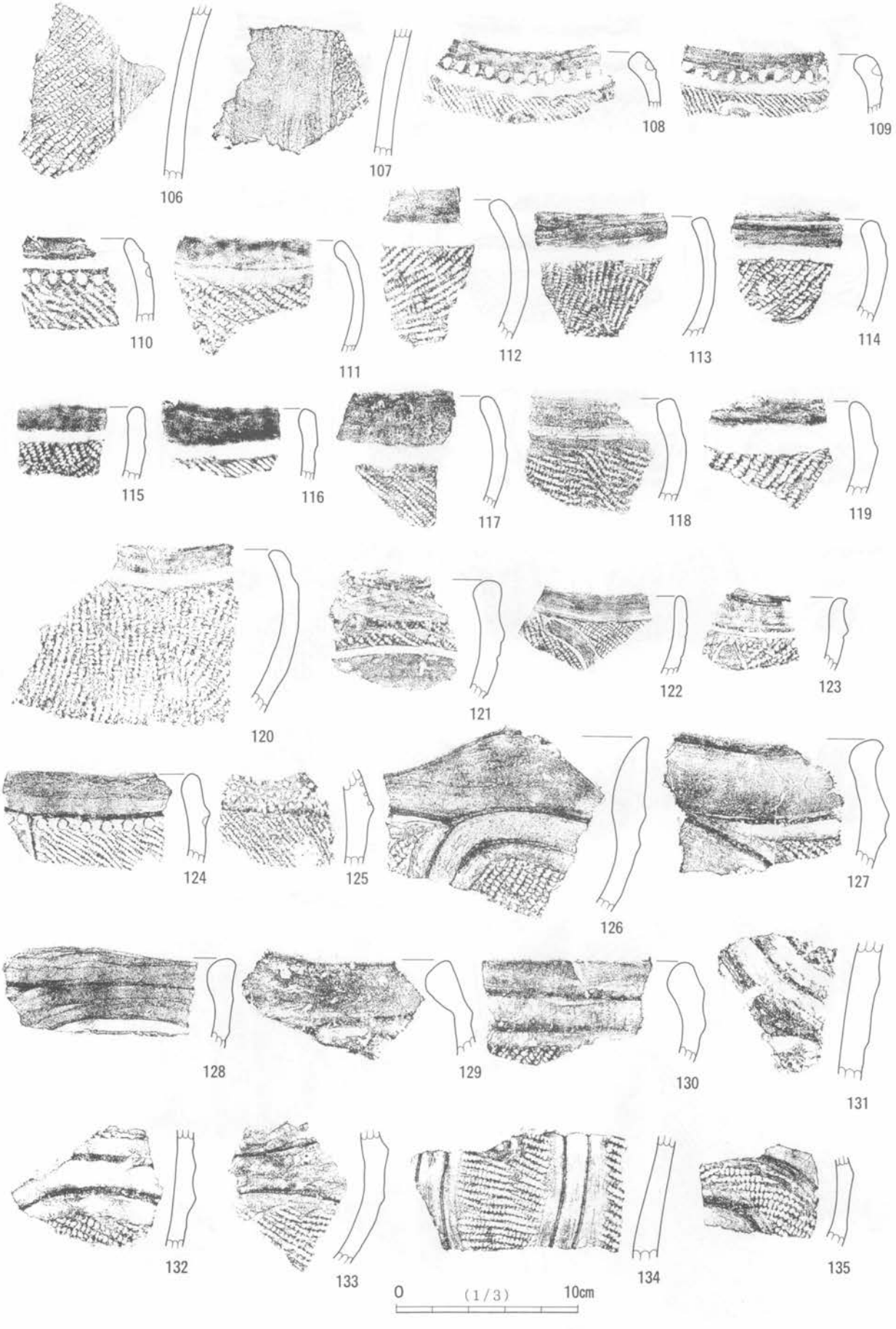
太い隆帯ないしは沈線によって区画された文様帯をもつもの。85以外は口縁部で、おしなべて強く内湾する。加曽利Ｅ式の中でも古い段階の特徴を有している。78は波状口縁で、貼り付け隆帯が波頂部に向かって湾曲する。口縁内側は内削ぎ状に整形されているが、この部分も貼り付けられている。79～84は平口縁で、いずれも貼り付け隆帯と太沈線がセットになる。87・88も平口縁であるが、隆帯を伴わない。88の沈線は他の資料に比べてやや細く浅い。85は頸部の資料で、口縁部文様帯と胴部文様帯の間に、横方向の太沈線と貼り付け隆帯がつけられる。

２種(89～99・121～123)

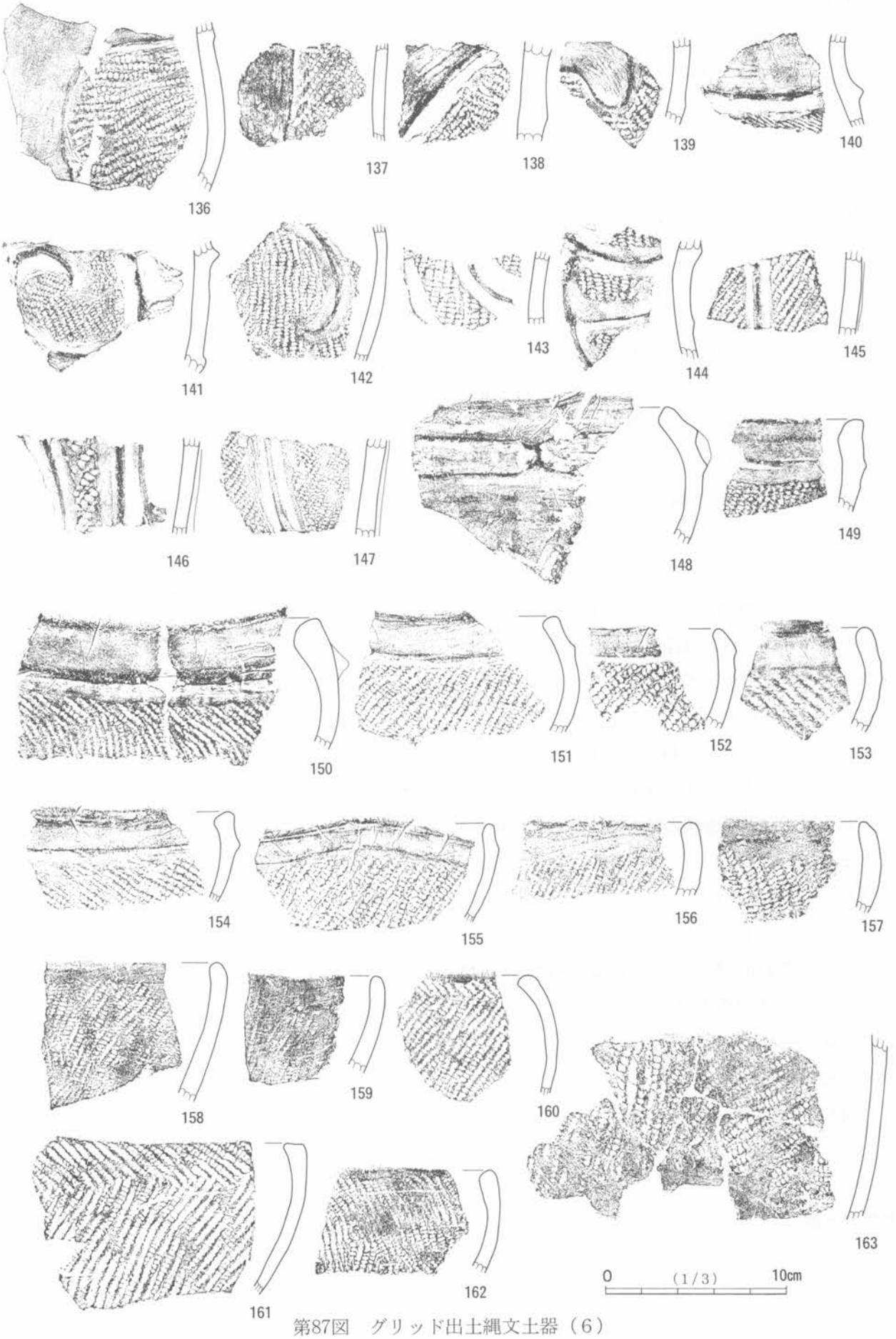
細い沈線に区画された縦位の磨消縄文が施されるもの。沈線は曲線主体で、胴部はＨ状の区画紋を呈するものと考えられる。89は波状口縁の小型深鉢で、波頂部の下側に磨り消された区画が配される。90は口縁に添って太沈線が配される。



第85図　グリッド出土縄文土器（4）



第86図　グリッド出土縄文土器（5）



第87図　グリッド出土縄文土器（6）

3種(100～107)

やはり細い沈線に区画された磨消縄文が施されるもので、文様帯は頸部から底部にかけて直線状に配される。100・101・104は沈線が太く、無文帯は狭い。102・103・106・107は沈線が浅くなり、無文帯はかなり広くなる。

4種(108・109)

口縁に添って先の尖った棒状工具による連続刺突と沈線が施されるもの。108・109は同一個体である。

5種(110～118・120)

口縁に添って浅いナゾリ状の沈線が施されるもの。110は4種と同じ棒状工具による連続刺突が、沈線の下側に施される。口唇と沈線の間の無文帯は1種、2種に比べて広くなる。

6種(119・122・123・153)

5種でみられた口唇直下の無文帯が削り出し状に調整され、縄文帯との間に段差が観察されるもの。微隆起線文につながるものと考えられる。122は曲線状の磨消縄文が観察される。

7種(86・121・124～140)

微隆起線による区画と磨消縄文によって構成されるもの。124は円形の棒状工具による連続刺突が施される。125は先の尖った細い棒状工具による連続刺突が、3列にわたって施される。126は突起を持つもので、胎土は長石粒、雲母片の混入が顕著である。127は波状口縁になるもので、口唇が強く外反する。かなり大型の深鉢になるものと思われる。128～130は2列の微隆起線を持つ口縁部である。128は横方向のミガキがかなり緻密に施される。129・130は長石粒の混入が顕著である。131～140は胴部破片である。131～134は2本一組の微隆起線と磨消縄文によって文様が構成されるものである。135～140は1本の微隆起線によって文様が区画されるもので、やはり磨消縄文を基本とする。

8種(77・141～147)

胴部に隆帯による貼り付け文が施されるもの。77は深鉢下半部で、2本1組の隆帯を縦方向に貼り付け、曲線主体の隆帯を横に渡すように組み合わせるものである。2本の隆帯の間はナゾリ状に磨り消される。141・142は渦巻き状の貼り付け文が施されるもので、特に142の隆帯はかなり太くしっかりしたものである。143・146は2本一組の隆帯によって構成されるもので、7種131～134と同様の文様構成をとるが縄文が磨り消されない。

9種(148～152・154・155)

口唇部に無文帯が配され、それ以下とは微隆起線で区画されるもの。胴部はほとんど縄文のみと考えられる。148は2本の微隆起線を持ち、貼り付け小瘤によって微隆起線を交差させている。150は長石粒が極めて多量に混入する。

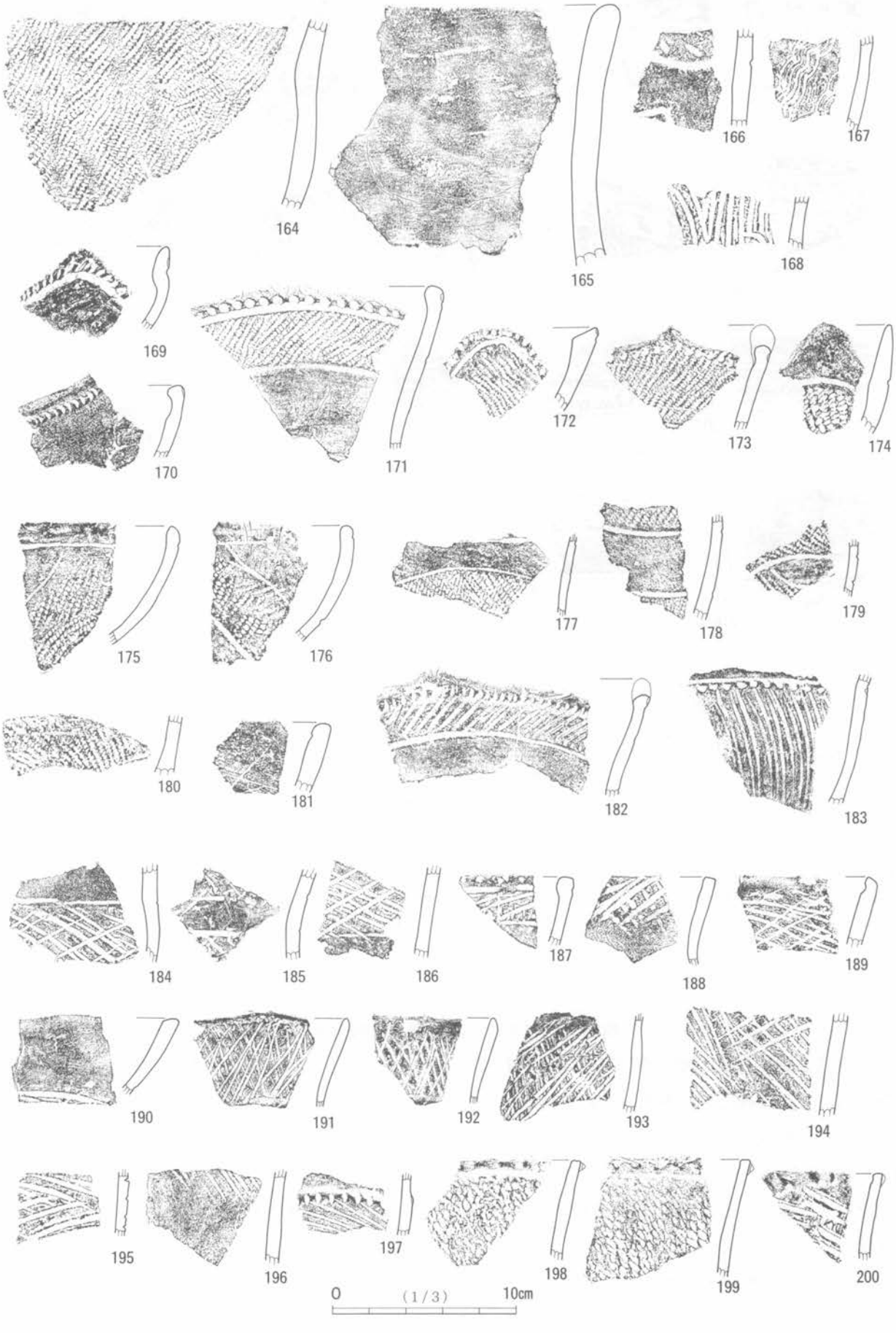
10種(156～164)

縄文のみの資料である。口唇部も若干ナデが観察される程度で、これまでの資料のようなはっきりした無文帯とはならない。160・161は同一個体で、口唇部にＲＬ縄文を施し、下側はＬＲ縄文を施している。

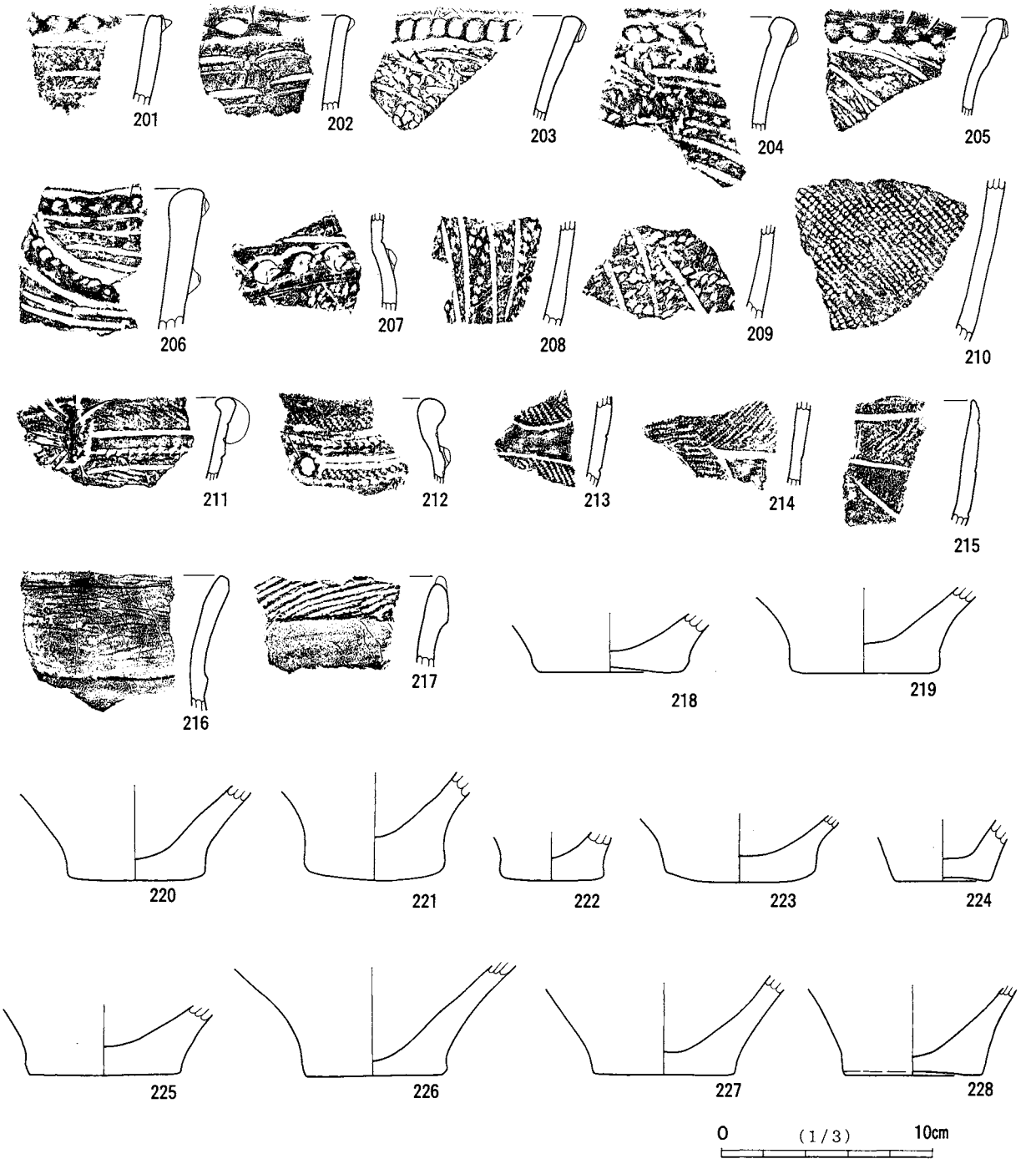
第Ⅳ群土器

縄文時代後期の土器である。量的には中期に次ぐ。

第1類(165～167)



第88図　グリッド出土縄文土器（7）



第89図　グリッド出土縄文土器（８）

称名寺式土器である。165は無文の口縁部資料である。内・外面とも横方向のミガキが観察される。166は胴部破片で、沈線と列点が組み合わされるものである。167も胴部破片で、半截竹管によるコンパス状の集合沈線が配されるものである。

第２類(168)

堀之内式土器である。168は胴部破片で、棒状工具による集合沈線が施されるものである。

第３類(169～197)

加曽利Ｂ式の精製土器である。

１種(169～180)

帯状の磨消縄文を主体とするものである。169・170は口縁部にキザミを持つ波状口縁の資料で、口唇部が肥厚し、内削ぎ状に整形される。口縁部は無文帯となる。171～174は同様の形態ながら口縁部に縄文帯が配され、下側が無文帯になる。171・172は口唇部にキザミが施される。173は縄文が施文されたあと中空の棒状工具によって連続刺突が施される。174は波頂部が突起状に大きくつまみ上げられる。175・176は同一個体で、斜行する縄文帯が配される。177～180は胴部資料で、縄文帯と無文帯の組み合わせによって構成される。

２種(181～197)

集合沈線と無文帯との組み合わせによって構成されるものである。181・184～186・188～194は斜格子状沈線が施されるものである。184・185・190は沈線と無文帯との間に沈線による区画が入るが、186・188は入らない。185は沈線による文様帯と無文帯が重層的に配されているが、無文帯の磨消は十分ではない。188・189は内面にも口唇に添って沈線が施される。188・189・191・192は口縁部が沈線による文様帯となり、胴部が無文帯となるが、190はその逆になる。182・183・187・196・197は斜行沈線が施されるものである。182は波状口縁の資料で、口唇部にキザミを施す。183・197は胴部資料で、無文帯との区画には、183は沈線と棒状工具による連続刺突が施され、197はキザミを持つ隆帯が貼り付けられる。187は平口縁で、内側が肥厚する。195は矢羽状の沈線が施される。

第４類(198～210)

加曽利Ｂ式の粗製土器である。198・199は口縁部に紐線文が配され、胴部は縄文が施される。200～205は縄文地紋に条線が加わるもの。206は紐線が垂下するもの。207は胴部破片で、紐線文が水平にめぐるもの。208～210は縄文が施されるもので、208・209は胴部資料で、縄文地紋に条線が施される。210は縄文のみの資料である。

第５類(211～215)

安行式の精製土器である。211・212は口縁部破片で、口縁に添って帯縄文と沈線による区画と、三角形の棒状工具による連続刺突が配される。211は平口縁で貼り付け瘤がつけられる。安行１式である。212は口唇部の縄文帯がかなり肥厚し、刺突のある貼り付け瘤がつけられる。安行２式である。213～215は胴部破片で、磨消縄文によって構成される。

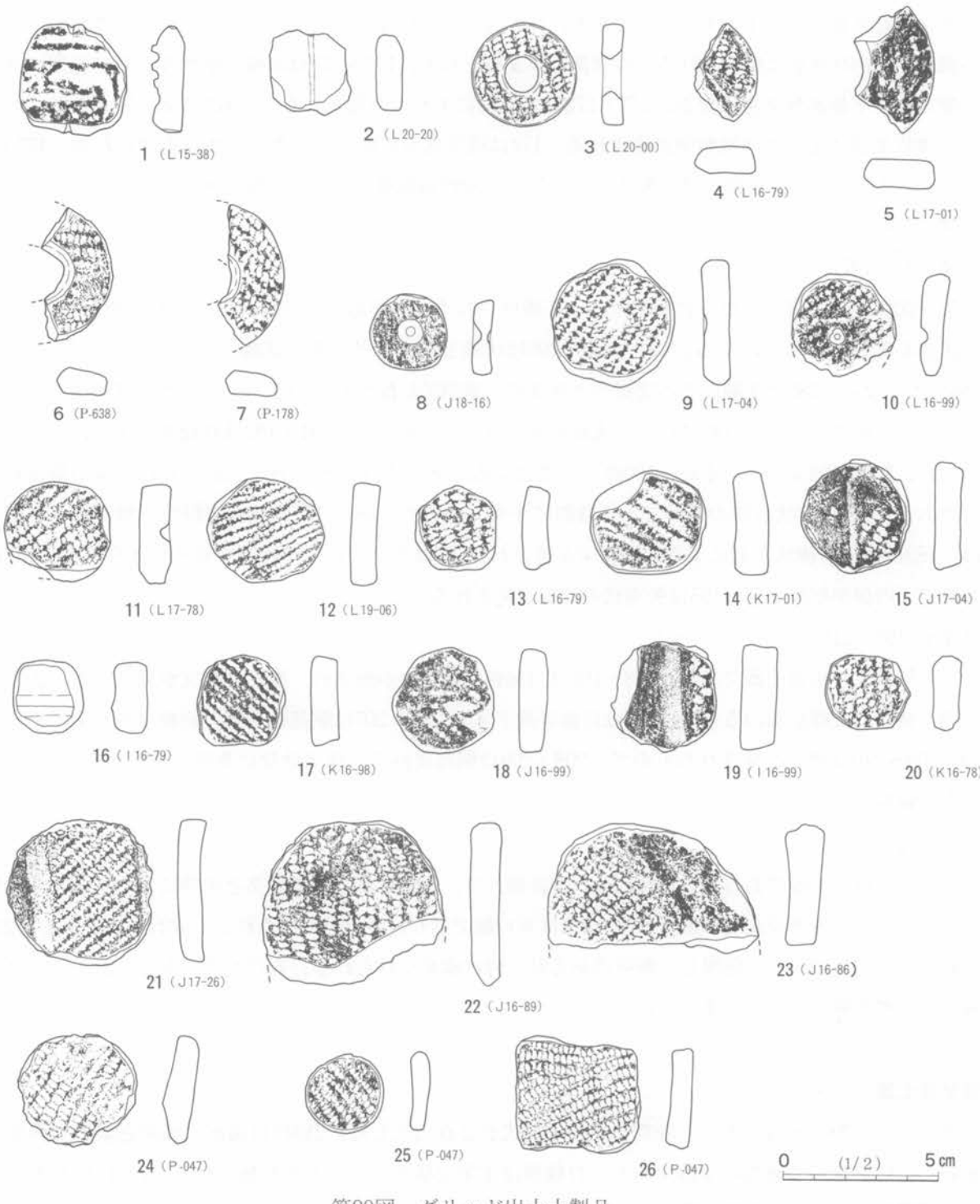
第Ⅴ群土器(216・217)

縄文時代晩期の土器である。晩期後半の千網式が２点出土した。216は口縁部文様帯と胴部文様帯とのあいだに肩部をもつ甕型の土器である。口縁部は丁寧な横方向のミガキが施される。217は折り返し口縁状に肥厚した口縁部文様帯に撚糸文が施される。

第Ⅵ群土器(218～228)

底部を一括した。推定径はそれぞれ218が4.6cm、219が4.8cm、220が4.4cm、221が4.4cm、222が3.4cm、223が4.8cm、224が3.0cm、225が4.8cm、226が4.4cm、227が4.5cm、228が4.4cmである。いずれも調整は、外面はヘラ状工具による横方向のケズリ、内面は縦方向のケズリによって成形され、一部はナデもしくはミガキにより調整される。時期は加曽利Ｂ式を中心に後期全体にわたるものとみられる。

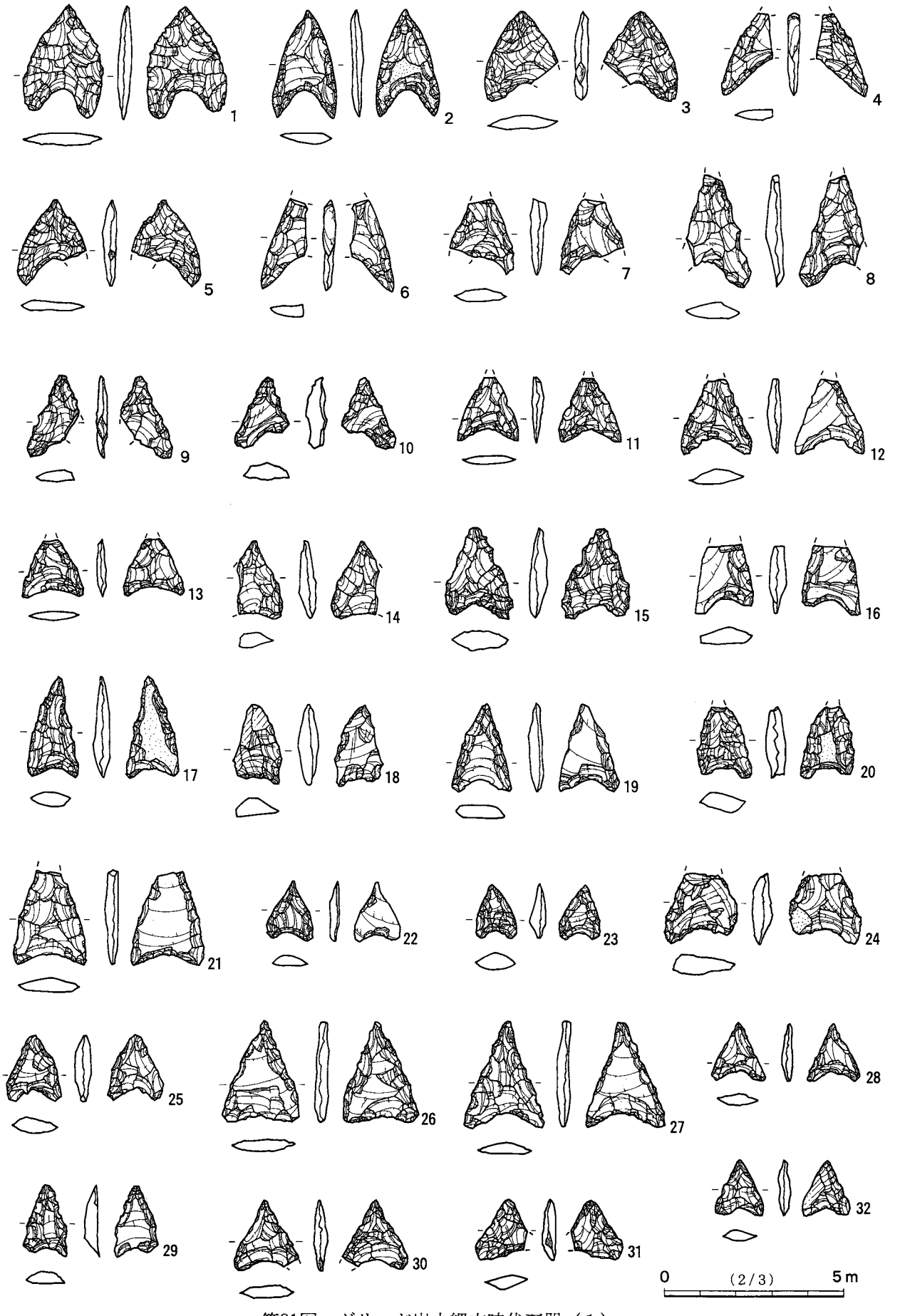
(２)土製品(第90図、図版69)



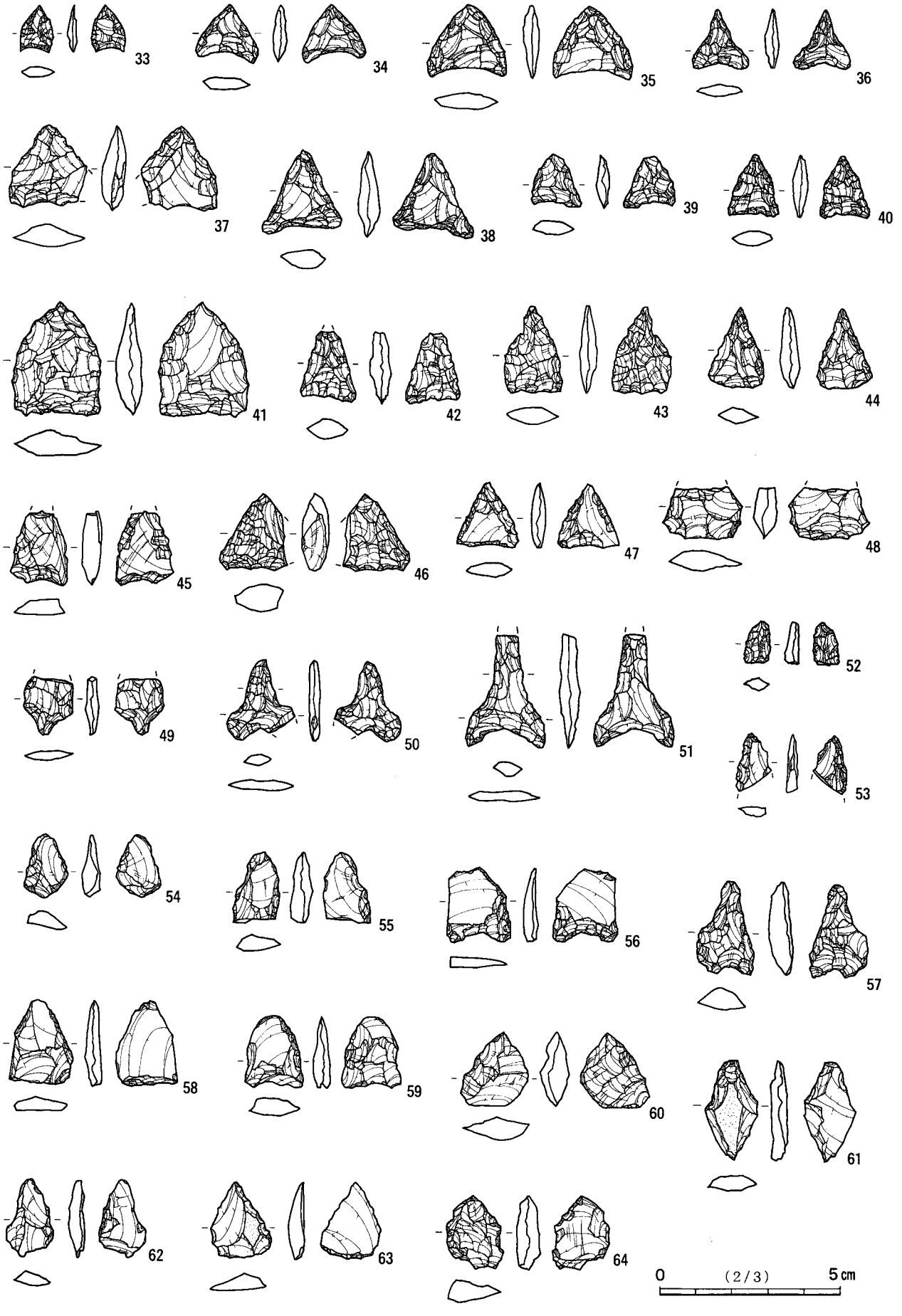
第90図　グリッド出土土製品

1、2、26は土器片錘である。1は不整円形で径は3.4cm～3.6cm、縄文地紋に棒状工具による沈線が施される、堀之内式に属すると考えられる土器片が使用される。重さは13.3ｇで、上下に刻み目がつけられる。2は隅丸正方形で一辺約2.6cm、無文土器が使用される。胎土は粗く雲母片を多量に含んでおり、中期前半の土器と考えられる。重さは7.7ｇである。上下に刻み目がつけられ、器面には縄による摩滅が観察される。26は隅丸長方形で長辺約4.0cm、短辺約3.5cmである。縄文施文の土器片が使用される。重さは16.3ｇである。上下に刻み目がつけられる。3～7は耳飾りである。3は外径3.3cm、内径1.0cmのほぼ正円で、縄文施文の土器片を使用し周縁は研磨調整を行っている。重さは9.1ｇである。4は4分の1ほど

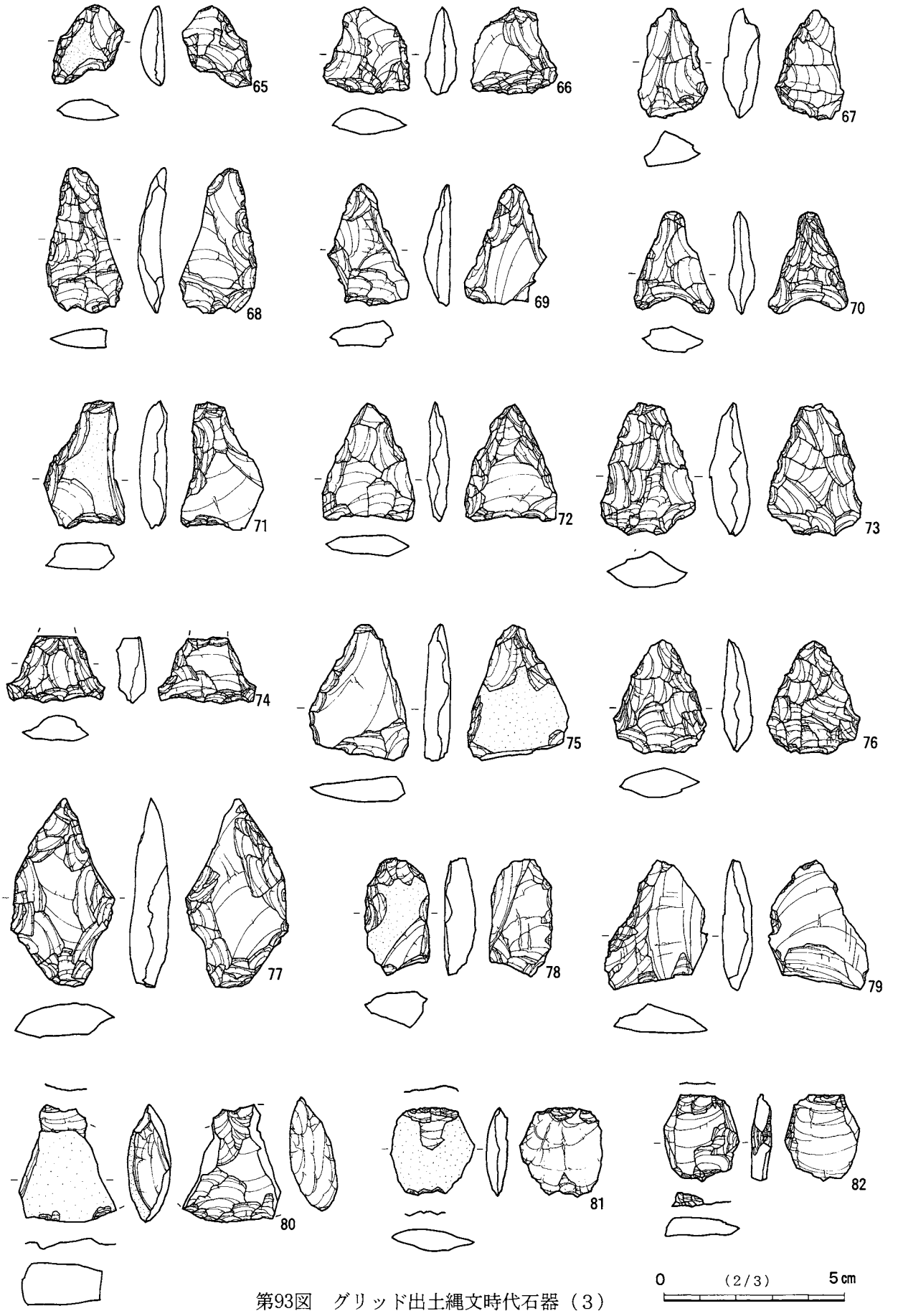
が残存し、推定径は4.5cmと考えられる。縄文地紋に沈線が施される土器片を使用し、周縁は研磨調整を行っている。重さは5.6ｇである。５も４分の１ほどが残存するもので、推定径は5.5cmと考えられる。縄文施文の土器片を使用し、周縁は研磨調整が行われる。重さは10.3ｇである。６は３分の１ほどが残存するもので、推定径は4.5cmである。縄文施文の土器片を使用し、周縁には研磨調整が行われるが、一部打欠痕を残す。重さは7.9ｇである。７も３分の１ほどが残存するもので、推定径は5.0cmである。縄文施文の土器片を使用し、周縁は研磨調整が行われる。重さは6.6ｇである。８～11は有孔円盤の未成品である。８は直径2.5cmのほぼ正円で、縄文施文の土器片を使用する。表裏から穿孔しようとした痕跡がみられるが、中途で放棄している。周縁は研磨調整が行われる。重さは4.8ｇである。９は径3.8cm～4.1cmの不整円形で、縄文施文の土器片を使用する。表側に穿孔の痕跡が観察されるが、ほとんど作業が進まないうちに放棄している。裏面にも加工の痕跡がみられるが、ほとんど傷がついた程度である。周縁は一応研磨が行われているが極めて粗く、打欠痕が顕著に残る。10はもともとは正円に近い形態であったと推測されるものの欠損してしまったもので、残存径は3.2cm～3.4cm、縄文施文の土器片を使用する。表側には穿孔の痕跡が観察されるが、途中で放棄されている。裏側は摩滅が著しく、詳細は不明である。周縁は研磨調整が行われている。重さは10.3ｇである。11も正円に近い形態であったと推測されるものの欠損してしまったもので、残存径は3.1cm～3.4cm、縄文施文の土器片を使用する。裏側に穿孔の痕跡が観察されるが、途中で放棄されている。周縁は研磨調整が行われる。重さは13.1ｇである。12～25は土製円盤である。12は径3.3cm～3.7cmの不整円形で、縄文施文の土器片を使用する。周縁は一部研磨が行われるが、ほとんどに打欠痕が残存する。重さは14.4ｇである。13は径2.6cm～2.7cmの不整円形で、縄文施文の土器片を使用する。周縁は一部研磨が行われるが、ほとんどに打欠痕が残存する。重さは8.2ｇである。14は径3.3cm～3.8cmの不整円形で、縄文施文の土器片を使用する。周縁は研磨調整が行われる。重さは17.9ｇである。15は径3.4cm～3.6cmの不整円形で、加曽利Ｅ式～称名寺式と考えられる磨消縄文の土器片を使用する。周縁は一部研磨が行われるが、ほとんどに打欠痕が残存する。重さは14.1ｇである。16は径2.3cmの不整円形で、加曽利ＥⅣ式に特徴的な微隆起線の土器片を使用する。周縁は一部研磨が行われるが、ほとんどに打欠痕が残存する。重さは7.3ｇである。17は径2.7cm～2.9cmの不整円形で、縄文施文の土器片を使用する。周縁は研磨調整が行われるが、一部に打欠痕が残存する。重さは10.5ｇである。18は径3.2cm～3.4cmの不整円形で、縄文施文の土器片を使用するが、表面の摩滅が著しい。周縁は研磨調整が行われるが、一部に打欠痕が残存する。重さは12.0ｇである。19は径3.4cmの不整円形で、加曽利Ｅ式と考えられるナゾリ状の沈線を伴う磨消縄文の土器片を使用する。周縁はすべて打欠調整である。重さは15.2ｇである。20は径2.4cm～2.7cmの不整円形で、縄文施文の土器片を使用する。周縁はすべて打欠調整である。重さは8.0ｇである。21は径4.5cm～4.7cmの不整円形で、やはりナゾリ状の沈線を伴う磨消縄文の土器片を使用する。周縁はすべて打欠調整である。重さは23.9ｇである。22は一部破損しているもので、残存径約5.8cm、縄文施文の土器片を使用する。周縁はすべて打欠調整である。重さは40.2ｇである。23も一部破損しているもので、残存径約6.7cm、加曽利ＥⅣ式に特徴的な微隆起線による区画文の土器片を使用する。胎土には雲母片を多量に含む。周縁はすべて打欠調整である。重さは37.2ｇである。24は径3.4cm～3.8cmの不整円形で、縄文施文の土器片を使用する。周縁はほとんど打欠調整である。重さは13.8ｇである。25は径2.4cm～2.6cmの楕円形で、縄文施文の土器片を使用する。周縁は研磨調整が行われるが、一部打欠痕が残存する。重さは4.9ｇである。



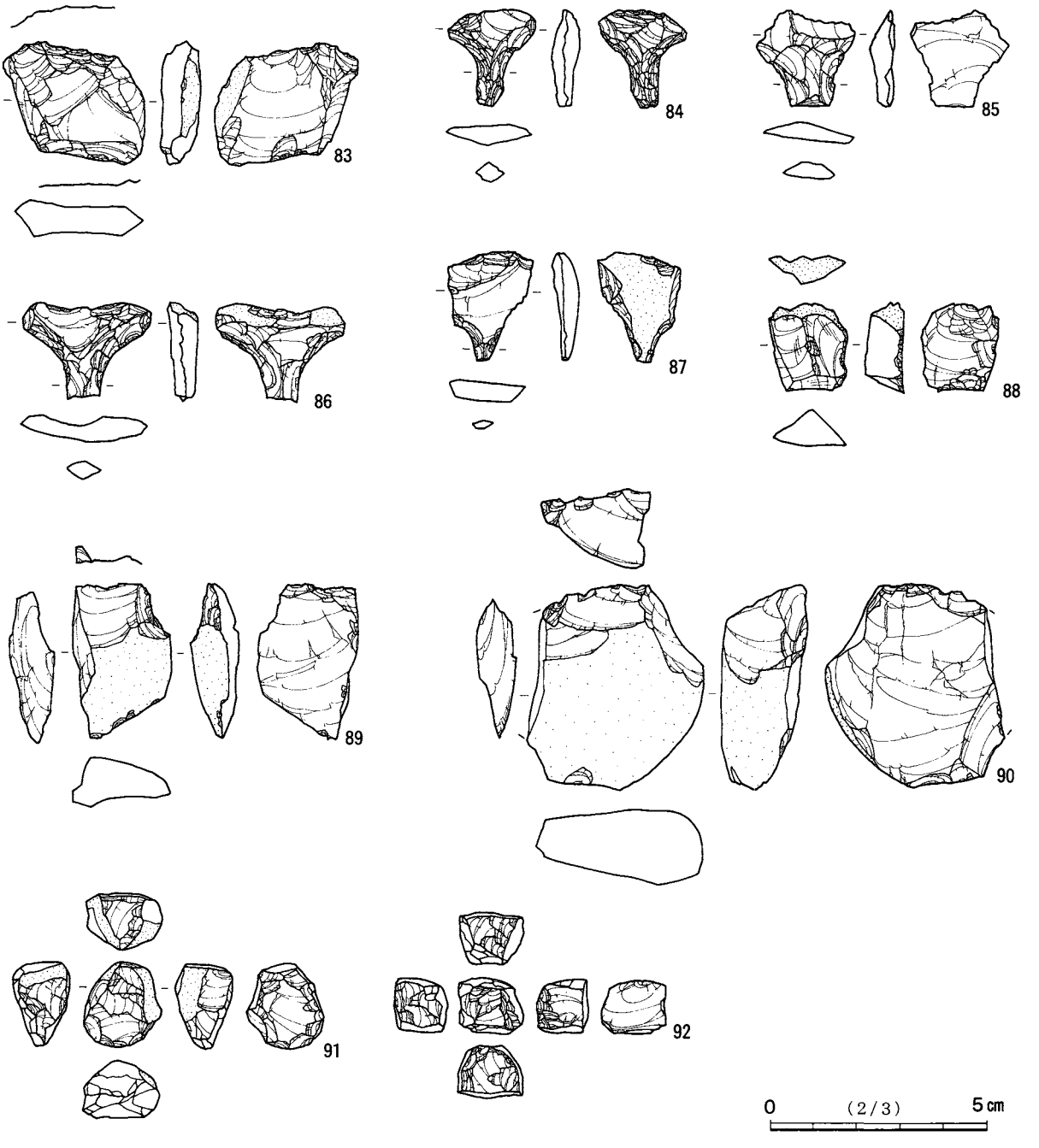
第91図　グリッド出土縄文時代石器（1）



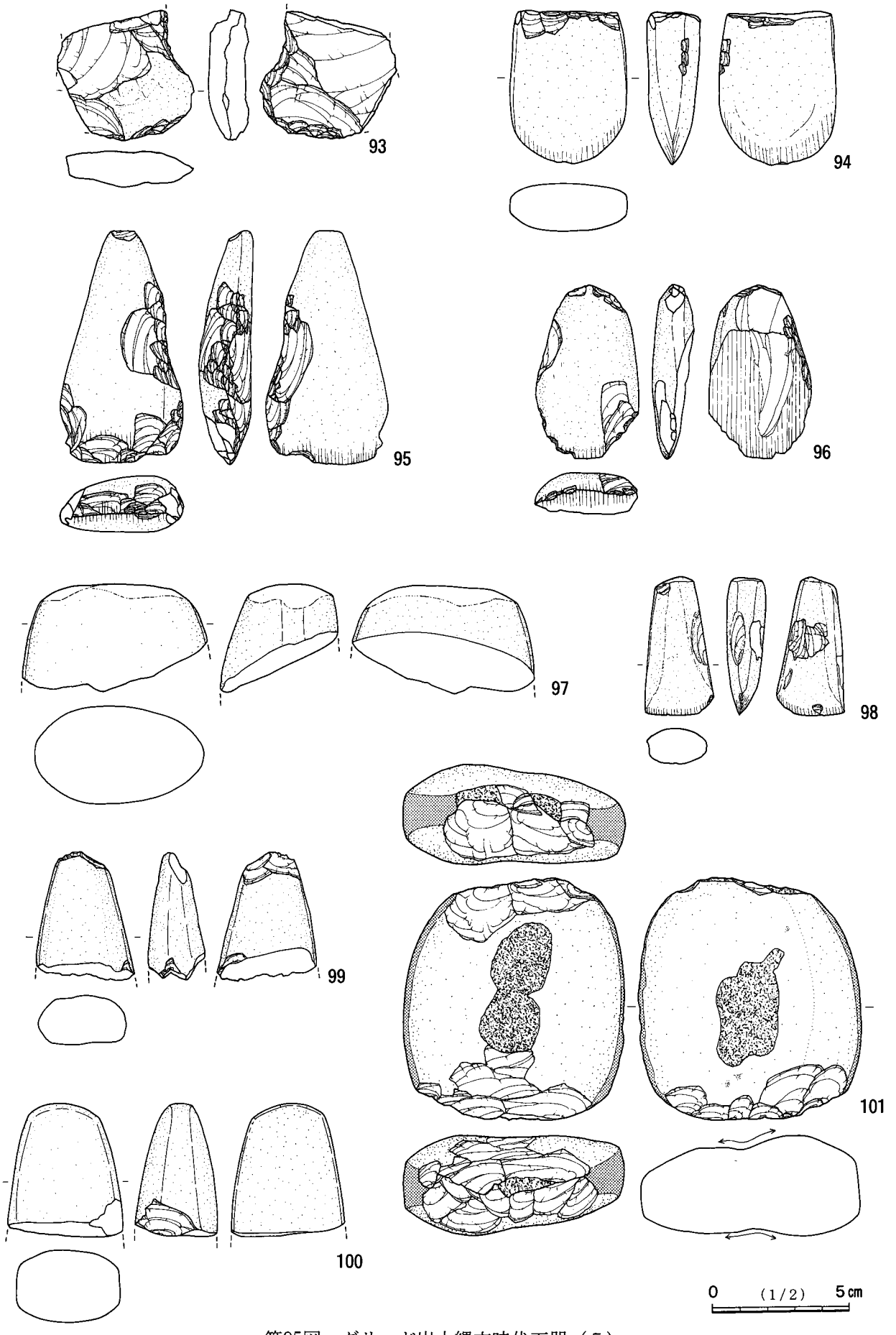
第92図　グリッド出土縄文時代石器（2）



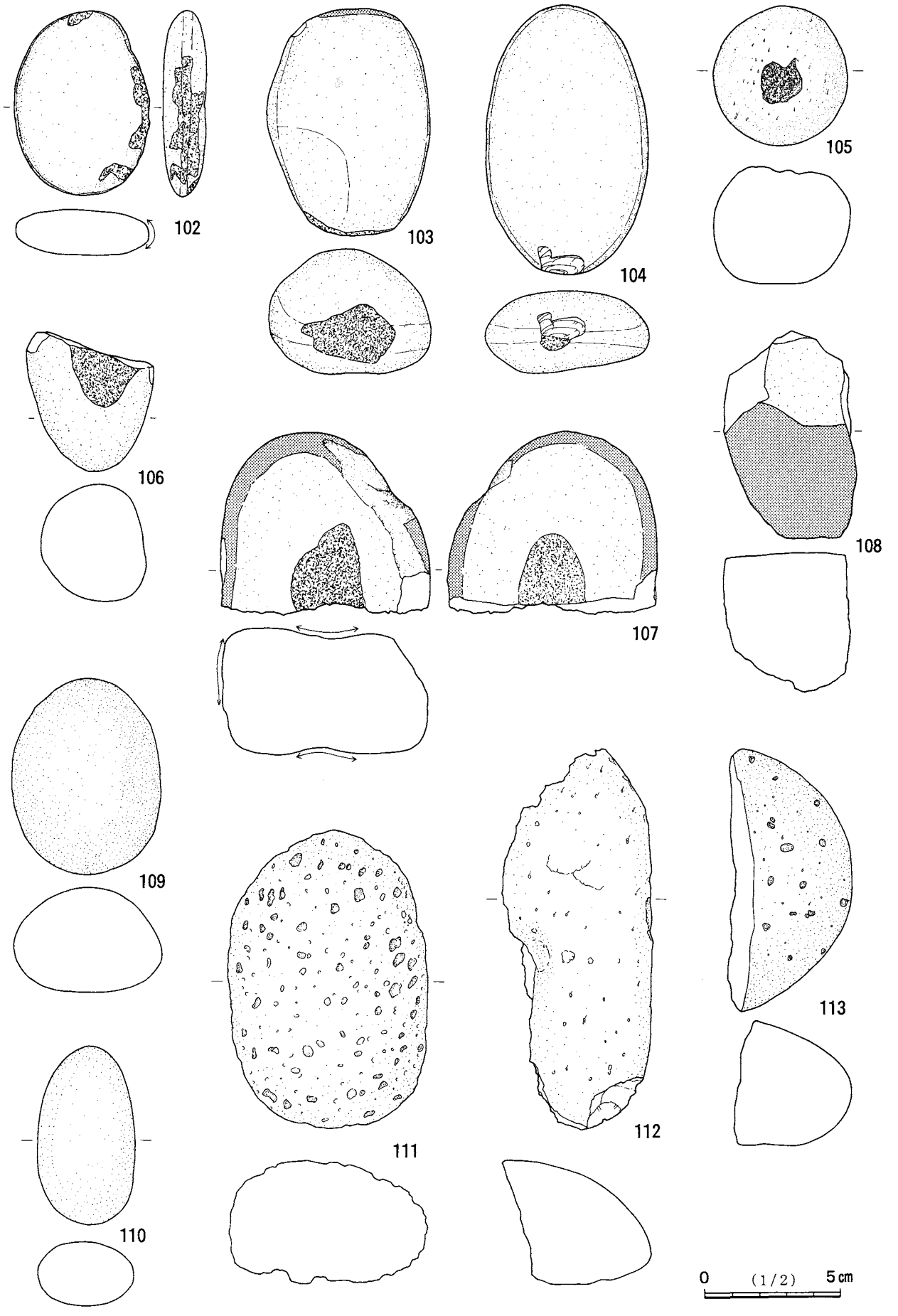
第93図　グリッド出土縄文時代石器（3）



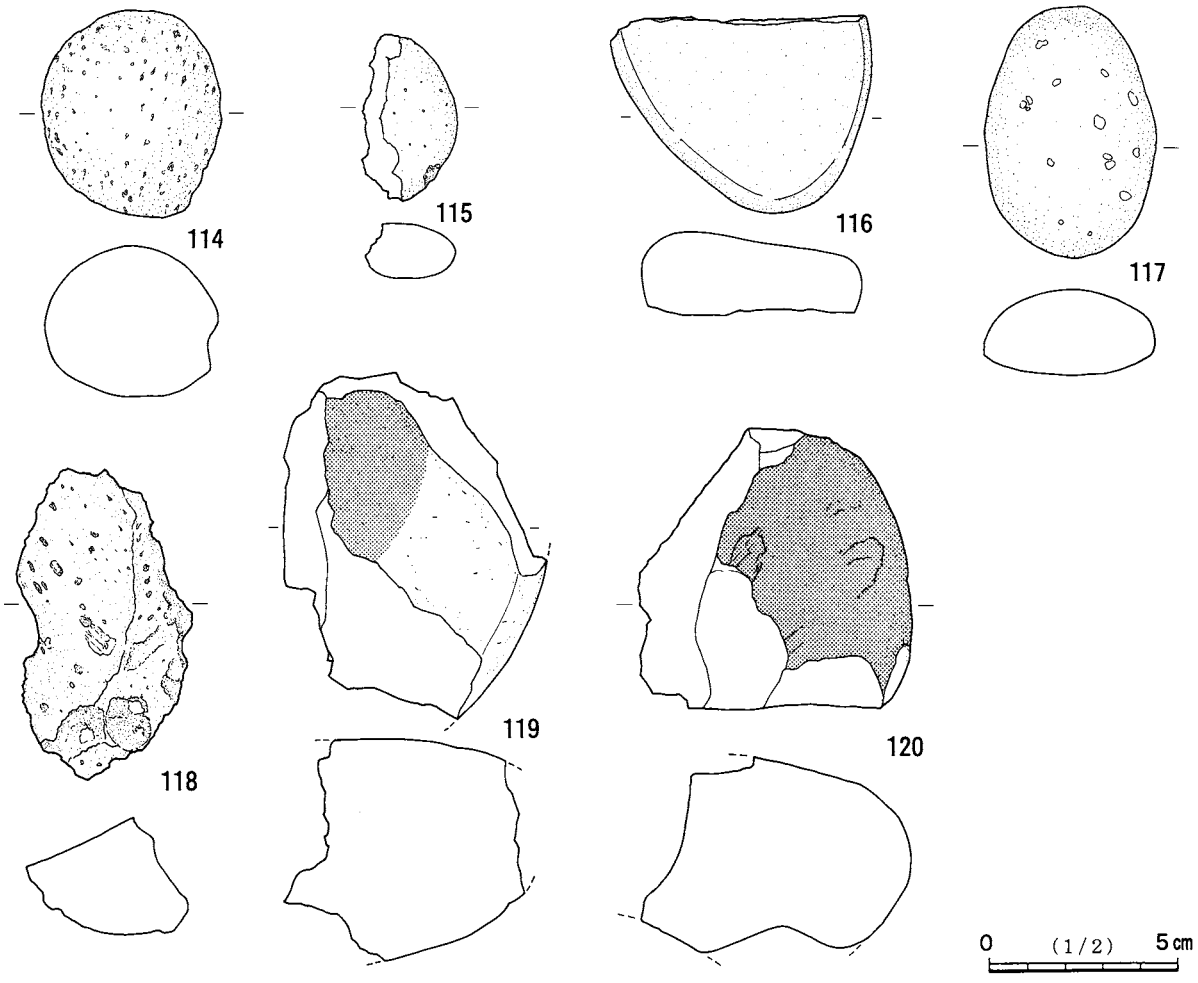
第94図　グリッド出土縄文時代石器（4）



第95図　グリッド出土縄文時代石器（5）



第96図　グリッド出土縄文時代石器（6）



第97図　グリッド出土縄文時代石器（7）

（3）石器（第91～97図）

グリッド及び後世の遺構からは縄文時代の石器が多数出土しているが、紙数の関係から詳述は省略する。なお、遺構出土のものも含めて、実測したすべての石器の計測値を第17、18表に掲載している。

1～53は石鏃である。1～10は抉りの大きく入ったもの、11～40は抉りの小さいもの、41～48は抉りがないもの、49は有茎鏃、50、51は三又になるもの、52、53は破片である。ただし、51、52は石錐の可能性もある。54～79は石鏃未成品であるが、57は石錐の可能性がある。80～83は楔形石器である。石鏃制作のための素材である可能性が強い。84～87は石錐である。いずれも先端部が破損している。88～90は二次加工のある剥片、91、92は火打ち石である。93～100は石斧およびその未成品である。93は打製石斧、94、97～100は磨製石斧、95、96は磨製石斧未成品である。101～104は敲石である。101は凹石としても使用されている。105～107は凹石、108は砥石、109～117は磨石である。107は側面にも凹みが観察される。118は軽石、119は石皿の破片と考えられるものである。120は不明であるが、破損面以外は全面研磨痕が観察されるため、摩石もしくは石皿である可能性が強い。

第17表　縄文時代石器計測表（1）

No.	遺物番号	器種	挿図番号	石材	最大長（mm）	×	最大幅（mm）	×	最大厚（mm）	重量（g）
1	D-002-501	敲石	第38図39	硬砂岩	45.5	×	49.0	×	44.0	104.1
2	D-004-432	石鏃	第41図35	チャート	11.8	×	9.9	×	2.4	0.3
3	D-004-224	石鏃	第41図36	黒曜石	13.1	×	13.8	×	2.3	0.3
4	D-004-371	石鏃	第41図37	チャート	12.0	×	8.0	×	2.5	0.2
5	D-007-168	石鏃	第44図14	黒曜石	15.1	×	13.8	×	2.9	0.6
6	D-007-266	石棒	第45図15	緑泥片岩	292.0	×	120.0	×	93.5	4,600.0
7	D-007-282	石鏃	第45図16	雲母片岩	80.2	×	62.0	×	25.6	145.1
8	D-029-18	磨石	第51図1	花崗岩	131.0	×	74.0	×	47.0	446.6
9	P-026-6	磨石	第81図204	硬砂岩	60.0	×	46.4	×	26.3	107.7
10	P-033-11	石鏃未成品	第80図190	安山岩	36.9	×	26.1	×	7.6	6.9
11	P-033-5	R剥片	第80図196	安山岩	21.4	×	14.3	×	2.9	1.1
12	P-039-37	石鏃	第80図189	安山岩	18.9	×	22.2	×	3.1	1.3
13	P-121	石鏃	第80図188	黒曜石	17.5	×	16.0	×	4.0	0.9
14	P-328-2	楔形石器	第80図193	安山岩	32.7	×	25.2	×	8.0	8.4
15	P-336-4	楔形石器	第80図194	安山岩	36.8	×	18.0	×	8.3	8.7
16	P-356-4区	楔形石器	第80図197	安山岩	19.8	×	17.4	×	6.8	3.3
17	P-371-1	磨製石斧	第81図200	緑泥片岩	28.4	×	17.9	×	7.3	6.7
18	P-431-3	石鏃未成品	第80図192	凝灰岩	32.8	×	23.6	×	10.5	5.2
19	P-457-2	石鏃	第80図187	黒曜石	28.0	×	19.7	×	3.1	1.3
20	P-459-4	石鏃未成品	第80図191	チャート	40.4	×	33.4	×	12.5	13.7
21	P-459-2	R剥片	第80図198	黒曜石	21.9	×	6.8	×	3.1	0.5
22	P-491-11	楔形石器	第80図195	チャート	22.8	×	23.5	×	8.6	4.2
23	P-567-340	砥石？	第81図203	軽石	72.6	×	60.5	×	21.8	13.8
24	P-622-1	砥石？	第81図202	軽石	48.2	×	41.9	×	20.3	6.5
25	P-764-1	砥石？	第81図201	軽石	47.5	×	44.8	×	35.5	28.8
26	J16-59-0	石鏃	第91図1	チャート	31.1	×	21.8	×	3.7	2.2
27	J17-04-214	石鏃	第91図2	安山岩	29.6	×	17.8	×	3.4	1.5
28	J18-18-1	石鏃	第91図3	黒曜石	25.1	×	20.4	×	4.5	1.7
29	K16-90	石鏃	第91図4	安山岩	23.6	×	14.6	×	3.8	1.0
30	D-015-30	石鏃	第91図5	黒曜石	24.5	×	18.5	×	4.3	1.2
31	K17-38-1	石鏃	第91図6	安山岩	25.3	×	12.2	×	4.2	1.0
32	L17-76	石鏃	第91図7	安山岩	20.4	×	18.3	×	5.0	1.3
33	K17-20-5	石鏃	第91図8	安山岩	31.0	×	18.2	×	4.9	2.1
34	L18-92	石鏃	第91図9	黒曜石	23.2	×	10.7	×	3.6	0.7
35	P-047-387	石鏃	第91図10	黒曜石	19.2	×	15.0	×	5.0	1.0
36	J17-16-1	石鏃	第91図11	安山岩	17.5	×	17.1	×	3.4	0.8
37	K17-01-96	石鏃	第91図12	安山岩	20.6	×	19.3	×	4.4	1.4
38	J17-18-17	石鏃	第91図13	チャート	15.2	×	16.9	×	2.9	0.7
39	I16-99	石鏃	第91図14	チャート	21.0	×	14.0	×	4.8	1.1
40	L18-71	石鏃	第91図15	チャート	25.5	×	19.3	×	5.2	2.0
41	D-003-804	石鏃	第91図16	安山岩	18.4	×	17.0	×	5.0	1.6
42	J16-85-38	石鏃	第91図17	安山岩	26.7	×	14.5	×	4.5	1.5
43	L17-68	石鏃	第91図18	黒曜石	21.5	×	13.2	×	5.6	1.2
44	J17-28-1	石鏃	第91図19	安山岩	23.6	×	16.9	×	3.6	1.2
45	K19-26	石鏃	第91図20	黒曜石	19.7	×	14.8	×	5.5	1.6
46	K17-01-439	石鏃	第91図21	安山岩	25.5	×	19.9	×	3.6	2.2
47	K17-01-91	石鏃	第91図22	安山岩	16.1	×	13.3	×	2.9	0.6
48	K17-60一括	石鏃	第91図23	安山岩	15.4	×	11.6	×	4.8	0.7
49	J17-55一括	石鏃	第91図24	安山岩	18.9	×	19.6	×	5.3	1.9
50	J16-79-1	石鏃	第91図25	チャート	18.0	×	15.2	×	4.2	0.9
51	D-024-96	石鏃？	第91図26	安山岩	27.8	×	20.9	×	3.6	1.9
52	J17-17-10	石鏃？	第91図27	安山岩	27.8	×	22.0	×	3.6	1.7
53	J17-24-176	石鏃	第91図28	チャート	15.6	×	14.7	×	3.1	0.5
54	J16-79-5	石鏃	第91図29	珪質頁岩	19.5	×	12.0	×	4.2	0.9
55	P-047-810	石鏃	第91図30	安山岩	16.8	×	14.6	×	4.0	1.0
56	P-047-471	石鏃	第91図31	黒曜石	15.0	×	13.6	×	3.2	0.7
57	P-344-115	石鏃？	第91図32	黒曜石	13.0	×	9.6	×	2.6	0.4
58	L18-72	石鏃	第92図33	黒曜石	12.9	×	9.9	×	3.0	0.3
59	P-344-113	石鏃	第92図34	安山岩	16.0	×	17.2	×	3.8	0.8
60	K17-01-273	石鏃	第92図35	安山岩	19.7	×	21.6	×	4.5	1.7
61	K17-45一括	石鏃	第92図36	安山岩	17.9	×	16.0	×	3.8	0.6
62	J17-10-0	石鏃	第92図37	安山岩	22.9	×	22.0	×	6.7	3.0
63	I17-77一括	石鏃	第92図38	安山岩	23.2	×	22.2	×	6.2	2.2
64	J17-68-25	石鏃	第92図39	流紋岩	14.2	×	13.8	×	3.6	0.6
65	K18-57表土層	石鏃	第92図40	チャート	17.2	×	13.9	×	4.4	0.8
66	J18-17-1	石鏃	第92図41	チャート	31.2	×	25.2	×	8.3	6.0
67	J17-53一括	石鏃	第92図42	チャート	19.5	×	15.4	×	5.6	1.4
68	K18-45一括	石鏃	第92図43	黒曜石	23.6	×	16.3	×	4.7	1.4
69	K17-10-40	石鏃	第92図44	チャート	21.9	×	15.5	×	5.0	1.4
70	D-022-30	石鏃	第92図45	黒曜石	20.1	×	15.5	×	5.6	1.7
71	L18-84	石鏃	第92図46	黒曜石	22.0	×	20.1	×	7.8	2.8
72	J17-68-1	石鏃	第92図47	安山岩	17.8	×	17.2	×	4.0	1.1
73	J17-17-38	石鏃	第92図48	石英	14.0	×	21.8	×	6.9	2.0

第18表　縄文時代石器計測表（2）

No.	遺物番号	器種	挿図番号	石材	最大長(mm)	×	最大幅(mm)	×	最大厚(mm)	重量(g)
74	K18-03 一括	石鏃	第92図49	チャート	15.2	×	13.6	×	4.2	0.8
75	J18-06 一括	石鏃	第92図50	チャート	21.6	×	18.6	×	3.2	1.0
76	J17-06-70	石鏃	第92図51	安山岩	30.7	×	22.0	×	5.5	2.1
77	L18-92-3	石鏃	第92図52	黒曜石	11.2	×	7.3	×	4.0	0.3
78	N14-72	石鏃	第92図53	珪質頁岩	16.0	×	9.8	×	3.0	0.5
79	K17-00-19	石鏃未成品	第92図54	黒曜石	17.0	×	11.9	×	5.7	0.8
80	M17-01 一括	石鏃未成品	第92図55	黒曜石	19.1	×	13.2	×	6.1	1.1
81	J17-54 一括	石鏃未成品	第92図56	チャート	21.0	×	17.7	×	4.1	1.6
82	P-047-266	石鏃未成品	第92図57	黒曜石	25.6	×	16.0	×	6.6	1.9
83	J17-14-40	石鏃未成品	第92図58	珪質頁岩	23.0	×	17.6	×	5.0	1.5
84	K17-60 一括	石鏃未成品	第92図59	チャート	18.9	×	16.0	×	5.0	1.3
85	M15-N15 一括	石鏃未成品	第92図60	黒曜石	20.0	×	19.0	×	8.0	1.9
86	K18-04 一括	石鏃未成品	第92図61	安山岩	27.2	×	15.0	×	5.9	2.0
87	P-047-635	石鏃未成品	第92図62	メノウ	21.4	×	13.0	×	2.6	0.9
88	P-047	石鏃未成品	第92図63	安山岩	21.0	×	16.8	×	4.4	1.2
89	J17-17-14	石鏃未成品	第92図64	黒曜石	20.0	×	16.3	×	7.4	1.9
90	D-021-14	石鏃未成品	第93図65	珪質頁岩	24.1	×	16.0	×	6.1	2.5
91	P-370-5	石鏃未成品	第93図66	チャート	24.2	×	23.8	×	8.6	4.5
92	J18-08b	石鏃未成品	第93図67	流紋岩	30.0	×	19.2	×	9.3	4.4
93	P-376-16	石鏃未成品	第93図68	安山岩	40.0	×	21.2	×	6.6	6.0
94	P-752-1	石鏃未成品	第93図69	安山岩	35.4	×	22.8	×	7.6	4.6
95	P-047-654	石鏃未成品	第93図70	安山岩	27.4	×	22.2	×	6.8	3.1
96	P-047	石鏃未成品	第93図71	安山岩	34.6	×	22.2	×	7.4	6.1
97	P-047-358	石鏃未成品	第93図72	安山岩	31.6	×	25.6	×	3.8	4.9
98	P-047-336	石鏃未成品	第93図73	チャート	35.8	×	26.2	×	10.4	8.2
99	J17-04-17	石鏃未成品	第93図74	ホルンフェルス	18.1	×	27.0	×	8.5	3.4
100	P-483-3	石鏃未成品	第93図75	安山岩	36.8	×	28.0	×	7.4	8.3
101	K17-01-111	石鏃未成品	第93図76	チャート	30.9	×	25.2	×	8.3	5.6
102	J17-15-16	石鏃未成品	第93図77	頁岩	50.6	×	29.0	×	11.0	13.9
103	K17-65 一括	石鏃未成品	第93図78	安山岩	31.9	×	18.6	×	9.0	5.7
104	D-020-300	石鏃未成品	第93図79	黒曜石	35.2	×	28.0	×	8.2	6.1
105	J18-05 一括 a	楔形石器	第93図80	メノウ	31.5	×	26.7	×	12.1	9.9
106	K18-10 一括 a	楔形石器	第93図81	安山岩	24.0	×	23.0	×	5.8	3.6
107	D-019	楔形石器	第93図82	珪質頁岩	38.2	×	17.8	×	5.5	3.5
108	K17-64 一括	楔形石器	第94図83	チャート	28.4	×	33.2	×	9.2	8.4
109	P-047-418	石錐	第94図84	安山岩	22.5	×	20.3	×	6.5	2.0
110	J17-67-31	石錐	第94図85	流紋岩	22.2	×	22.6	×	5.8	2.0
111	J17-68-2	石錐	第94図86	安山岩	22.4	×	29.6	×	6.4	3.7
112	P-047-365	石錐	第94図87	安山岩	24.6	×	19.6	×	5.6	2.6
113	P-047-454	R剥片	第94図88	黒曜石	19.8	×	18.0	×	8.4	3.1
114	D-020-1	R剥片	第94図89	チャート	35.4	×	23.0	×	11.0	8.7
115	K17-45 一括 c	R剥片	第94図90	安山岩	47.0	×	41.2	×	18.8	41.8
116	J18-05 一括 d	火打ち石	第94図91	石英	19.0	×	17.6	×	13.0	5.4
117	D-015-2	火打ち石	第94図92	石英	12.0	×	15.0	×	12.0	3.2
118	K19-18	打製石斧	第95図93	砂岩	47.7	×	50.2	×	14.0	37.5
119	P-091-2	磨製石斧	第95図94	緑色凝灰岩	56.7	×	43.0	×	20.0	84.4
120	L15-38	磨製石斧	第95図95	凝灰岩	84.2	×	45.4	×	19.0	87.9
121	D-020-1	磨製石斧	第95図96	緑泥片岩	62.6	×	38.0	×	14.0	45.5
122	J17-16-18	磨製石斧	第95図97	砂岩	39.2	×	68.0	×	38.8	110.1
123	L19-16	磨製石斧	第95図98	硬砂岩	49.9	×	24.9	×	14.5	26.5
124	D-015-2	磨製石斧	第95図99	緑泥片岩	46.4	×	36.6	×	20.8	42.5
125	P-178-1	磨製石斧	第95図100	砂岩	48.0	×	42.2	×	30.4	83.7
126	表面採集	凹石(敲石)	第95図101	砂岩	87.1	×	81.6	×	36.3	383.2
127	L20-40	磨石(敲石)	第96図102	砂岩	68.9	×	50.0	×	15.9	77.7
128	D-015-24	磨石(敲石)	第96図103	砂岩	84.4	×	60.6	×	45.2	324.8
129	P-174-1	磨石(敲石)	第96図104	砂岩	100.0	×	60.0	×	31.0	269.0
130	D-016 3区1層	凹石	第96図105	凝灰岩	52.0	×	49.8	×	43.3	160.4
131	K17-18-1a	凹石	第96図106	砂岩	51.0	×	47.0	×	43.0	120.4
132	表面採集	凹石	第96図107	砂岩	66.7	×	77.5	×	46.2	369.1
133	L19-91	磨石	第96図108	砂岩	76.0	×	49.2	×	50.8	219.6
134	L17-52	磨石	第96図109	砂岩	71.4	×	55.2	×	38.2	205.8
135	J16-60-1	磨石	第96図110	安山岩	64.8	×	36.2	×	22.1	77.2
136	P-348-142	磨石	第96図111	凝灰岩	108.7	×	74.2	×	44.9	432.0
137	J16-94-1	磨石	第96図112	流紋岩	138.5	×	56.0	×	44.8	369.9
138	J16-98-1	磨石	第96図113	安山岩	95.8	×	46.0	×	45.0	251.7
139	L16-68	磨石	第97図114	安山岩	53.9	×	46.2	×	39.2	119.1
140	J17-89 一括	磨石	第97図115	安山岩？	44.4	×	25.2	×	14.8	19.8
141	P-174-1	磨石	第97図116	安山岩	54.0	×	69.0	×	25.0	103.9
142	D-015-58	磨石	第97図117	凝灰岩	67.2	×	45.6	×	22.6	94.5
143	P-047-259	軽石	第97図118	軽石	80.4	×	46.2	×	30.4	22.4
144	P-091	石皿片	第97図119	砂岩	90.0	×	69.0	×	59.0	355.9
145	J18-17 一括	石皿片？	第97図120	砂岩	72.9	×	72.3	×	52.7	322.6

第98図　B地区（古墳時代遺構配置図）

第99図　C地区、D地区古墳時代遺構配置図

第３節　古墳時代

１　竪穴住居跡と出土遺物

古宿上谷遺跡から検出された古墳時代の竪穴住居跡は14軒を数える。そのうちＢ地区から10軒、Ｃ地区から１軒、Ｄ地区から３軒検出されている。縄文時代の遺構が集中的に検出されたＡ地区からは、全く検出されなかった。

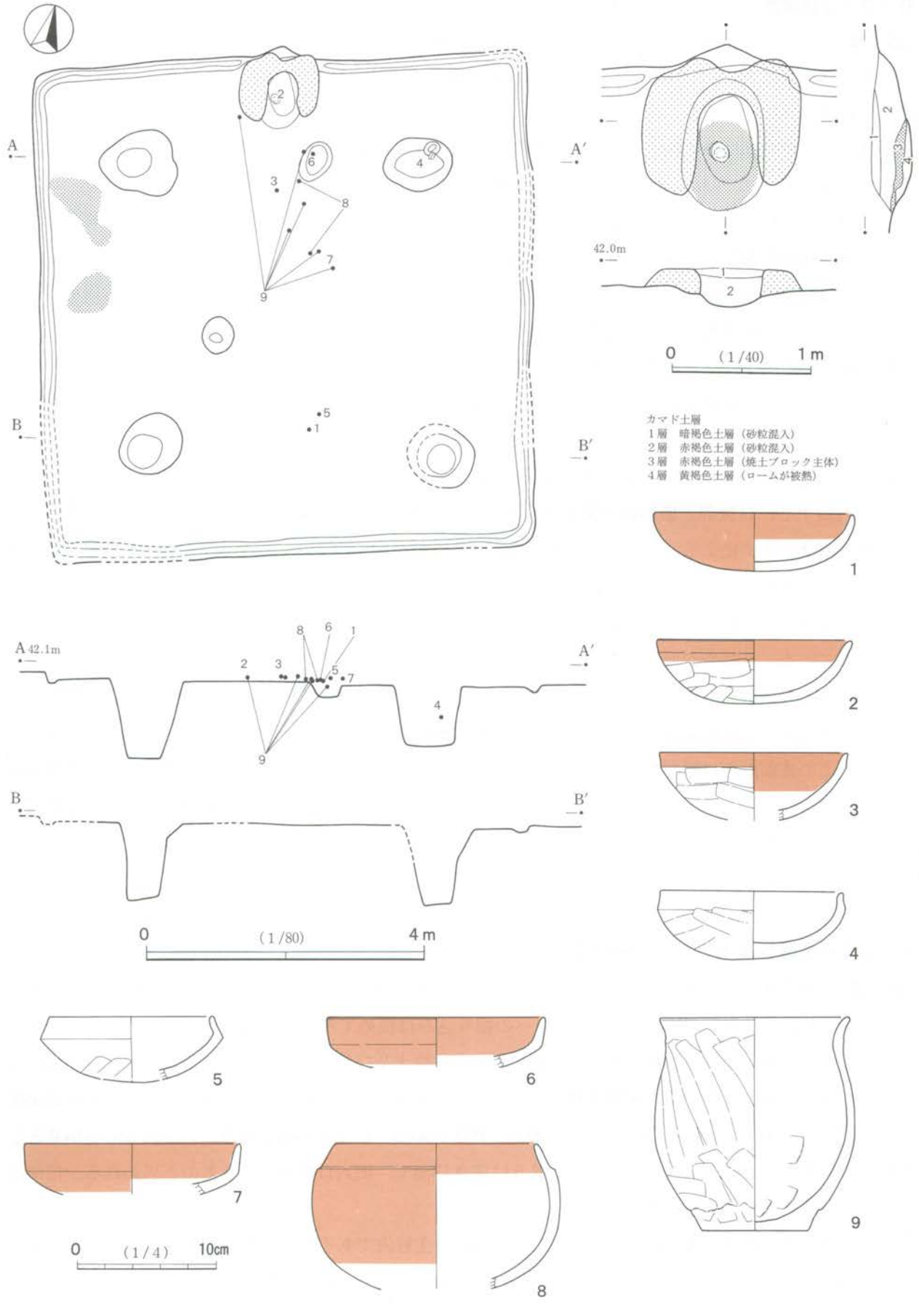
Ｄ－０１１住居跡(第100図、図版19・70)

(遺　構) 南側に突出する台地の基部付近にあたるＬ18区に所在する。平面形は正方形を呈し、7.0ｍ×7.1ｍの規模を有する。主軸方位はＮ－14°－Ｗである。付近は中世のものと思われる掘立柱建物跡、土壙、ピット等が混在し、当住居跡の床面、壁等も一部が破壊されている。このため遺構検出面であるローム面も削平を受け、残存する壁高は本来よりも減じている。主柱穴は４本で、住居の対角線上に位置している。いずれも90cm～100cmの上場径を有し、深さは80cm～90cmを測る。カマド前方と床面中央付近にも小ピットを検出したが、深さはいずれも15cm程度である。周溝はカマド部分を除き一周する。貯蔵穴や出入口ピットは検出されていない。

カマドは北壁中央に設けられている。壁面への掘り込みはわずかである。上部を削平されてはいるが、遺存状態は比較的良く、煙道部が確認されている。火床部には強い熱を受けたとみられる硬化した焼土の堆積が残存していた。

(遺　物) 土師器のみで量的には多くないが、床面又はカマド内から出土している。

１～７は、杯である。１は浅い丸底の底部から口縁部がやや内湾して立ち上がる器形の杯で、口縁部の約1/4を欠くが、口径14.4cm、高さ4.1cmである。外面の全面と内面口縁部に赤彩が施される。２は丸底で口唇部付近がわずかに外反する。完形で口径14.1cm、高さ4.6cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ、内面全面にナデ、外面はヘラケズリである。内外面共に口縁部に赤彩が施される。３は強いヨコナデにより口唇部がわずかに外傾し、口端が尖り気味となる。30%程の遺存で、推定口径13.6cmを測る。外面口縁部から内面上半まで赤彩が施される。４は口径13.2cm、高さ4.8cmを測るほぼ完形の杯である。口縁部のヨコナデにより、体部との境に極めて弱い稜を有する。内面のナデは丁寧であるが、全体に整形が甘く、歪みも大きい。底部外面には黒斑を認める。５は全体の1/4程の遺存である。推定口径12.0cmを測り、口縁部は内傾して立ち上がる。調整は口縁部がヨコナデ後、横位のミガキで、外面体底部はヘラケズリである。内外面共に黒色処理が施される。６・７の底部は浅い丸底を呈するものと思われ、口縁部がわずかに開いて直線的に立ち上がる。６の遺存は口縁部の約1/3で、推定口径15.8cmを測る。内外面共に調整はナデによる。外面全面と底部を除く内面に赤彩が施される。７は全体の1/4以下の遺存で、推定口径15.6cmを測る。やはり内外面共にナデによる調整がなされる。赤色塗彩の範囲も同様である。８は全体の約1/3が遺存する鉢である。推定口径14.5cm、現存高10.5cmを測る。口縁部に弱い稜を有し、体部から口縁部まで内湾して立ち上がる器形を呈する。底部を除く外面と、内面口縁部付近に赤彩が施される。９は推定口径13.7cm、高さ15.3cm、底径7.6cmを測る小型の甕である。遺存は約50%である。調整は口縁部のヨコナデ後、外面に斜位のヘラケズリを施す。内面は全面ナデである。外底面には木葉痕が認められるが、半欠するため図示しなかった。



第100図　D-011住居・出土遺物

D－０１３住居跡(第101図、図版19・70)

(遺　構) 調査区最南端付近のK20区に所在する。平面形は台形を呈し、長軸(主軸)長5.2m、カマドの位置する北壁長4.9m、カマド対面の南壁長5.7mを測る。主軸方位はN－34°－Wである。壁は垂直近くに掘り込まれ堅緻であるが、斜面に位置するため、壁高は東側で約50cm、西側で約20cmを測る。床面は凹凸が激しく、中央部は特に硬く踏み締められている。主柱穴は４本が検出されているが、東側の２本は住居の対角線上からは外れている。いずれも上場径約40cmで、深さはＰ１＝62cm、Ｐ２＝75cm、Ｐ３＝46cm、Ｐ４＝60cmである。貯蔵穴は南壁中央付近に位置する。上場規模85cm×70cm、下場規模50cm×40cm、深さ70cmを測る。周溝は南壁際にのみ検出された。

カマドは北壁中央に設けられている。壁面への掘り込みはほとんどない。火床部は径60cmの円形の掘り込みで、深さは10cm程度である。火床部にはわずかな量の焼土が残存したのみである。

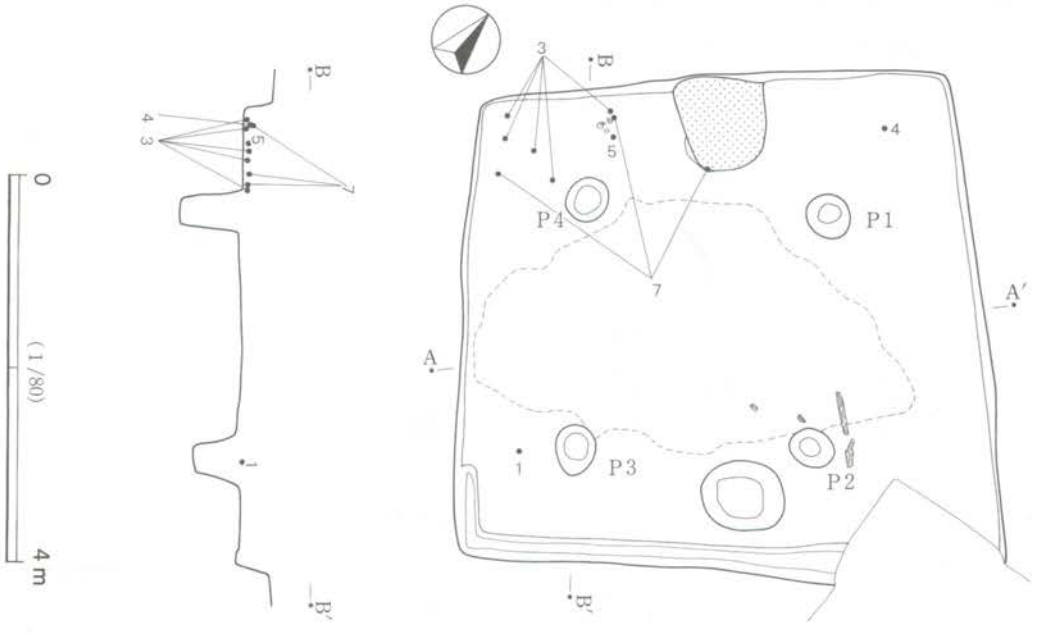
(遺　物) 比較的少なく、炭化材も含め全て床面より５cm前後浮いた状態で出土している。

１～４は須恵器杯身模倣杯である。１・２は口縁部と体部の境に稜を有し、口縁部が短く立ち上がる器形を呈するものである。体部は浅めの作りとなる。口径はいずれも推定で１が12.4cm、遺存度は50%、２が13.0cm、遺存度40%である。２の口縁部内外面に赤彩が施されている。３は丸底の底部で、口縁部が屈曲して内傾する。口縁部と底部の一部を欠くが、遺存は90%である。口径14.1cm、高さ4.9cmを測る。調整は内外面共にナデによる。口縁部の内外面を中心に赤彩が施されている。４はやや偏平な作りで、口縁部が屈曲して内傾するものである。遺存は約70%で、口径14.6cm、高さ4.9cmを測る。口縁部のヨコナデ、内面のなでは、いずれも丁寧に調整される。外面体底部はヘラケズリである。やはり口縁部を中心に赤彩が施されている。５はやや偏平な底部から弱い稜を境に、口縁部がわずかに開いて立ち上がる器形の杯である。全体の1/3程の遺存で、推定口径15.7cmである。胎土中には細粒砂のみ含まれるが、焼成は脆弱である。外面全面と内面口縁部に赤彩が施される。６は90%の遺存である。口径13.2cm、高さ5.0cmを測る。器形は丸底の底部から口縁部が直立気味に立ち上がる。全体に厚みがあり、体底部の整形にはやや歪みがある。調整は口縁部にヨコナデ、体底部内外面共にヘラケズリであるが、やや雑である。７は底径7.7cmの土師器甕底部である。胴下部の開きが大きいことから、胴部は球胴となるかもしれない。外面は縦位のヘラケズリが施される。

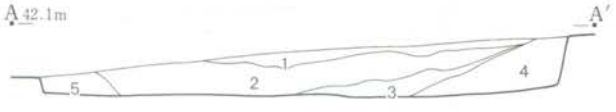
D－０１４住居跡(第102図、図版20・70)

(遺　構) 調査区の最南端に近いL20区に所在する。平面形は正方形を呈し、4.2m×4.2mの規模を有する。主軸方位はN－31°－Wである。ロームへの掘り込みは極めて浅く、10cm程度である。床面は全体によく踏み締められ、硬質な状態である。床面付近からは焼土及び炭化材が検出されており、火災住居の様相を呈する。ピットは５か所に検出されている。Ｐ１～Ｐ４までが主柱穴で、４本共にほぼ住居の対角線上に位置する。深さはＰ１＝73cm、Ｐ２＝50cm、Ｐ３＝60cm、Ｐ４＝60cmを測り、いずれもしっかりとした掘り方である。南壁中央付近に位置するＰ５は深さ13cmで、出入口施設に伴うものと思われる。周溝は全周し、５cm前後の深さを測る。

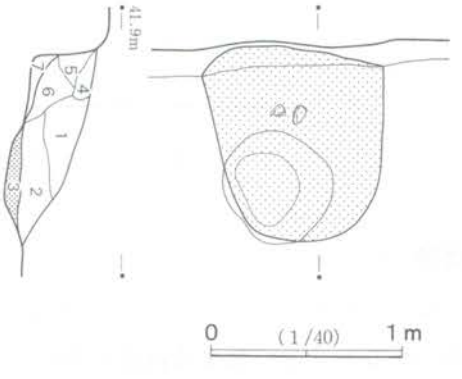
炉は住居中央と北壁中央の中間付近であると同時に、主柱穴であるＰ１とＰ４の中間に位置する。床面を浅く掘り窪めただけのものである。焼土の堆積は薄く、底面に強い熱を受けた様子は観察されなかった。

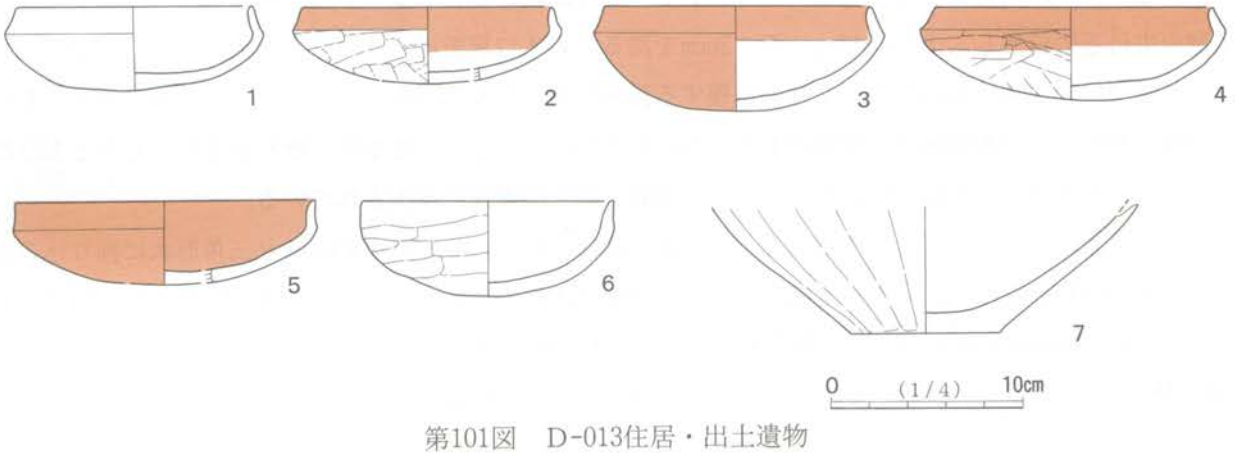


覆土土層
1層　灰褐色土層（砂粒多量混入）
2層　黒色土層（砂粒少量混入）
3層　黒褐色土層（砂粒・ローム粒少量混入）
4層　明褐色土層（ローム粒多量混入）
5層　明褐色土層（ローム粒多量混入）



カマド土層
1層　褐色土層（砂粒多量混入）
2層　暗褐色土層（砂量少量混入）
3層　明褐色土層（焼土粒少量混入）
4層　黒褐色土層（砂粒少量混入）
5層　明褐色土層（砂粒少量混入）
6層　暗褐色土層（砂粒少量混入）
7層　褐色土層（ローム粒多量混入）

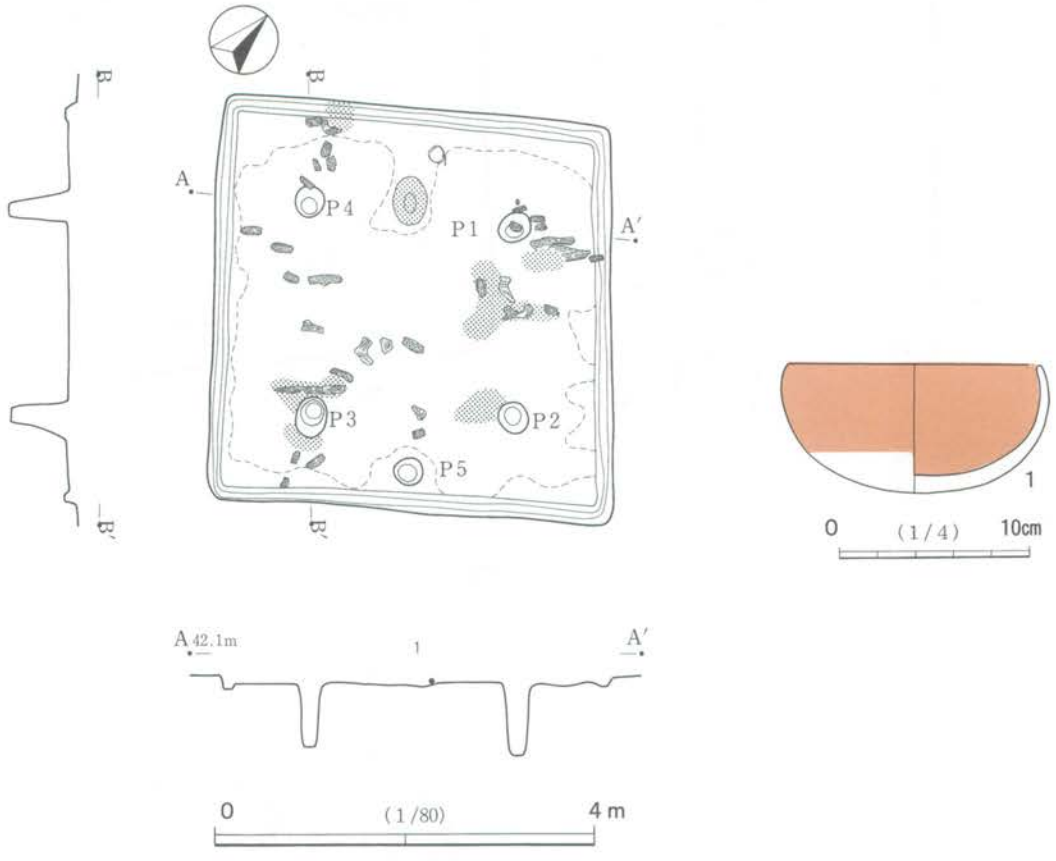




第101図　D-013住居・出土遺物

（遺　物） 炉の北側の床面から杯が１点出土している。

1は丸底で口縁部が大きく内湾する形態の杯である。口縁部の一部を欠き、約80%の遺存度である。口径13.3cm、高さ6.7cmを測る。体部は内外面共に丁寧なナデにより調整される。内面の全面と底部を除く外面に赤彩が施される。



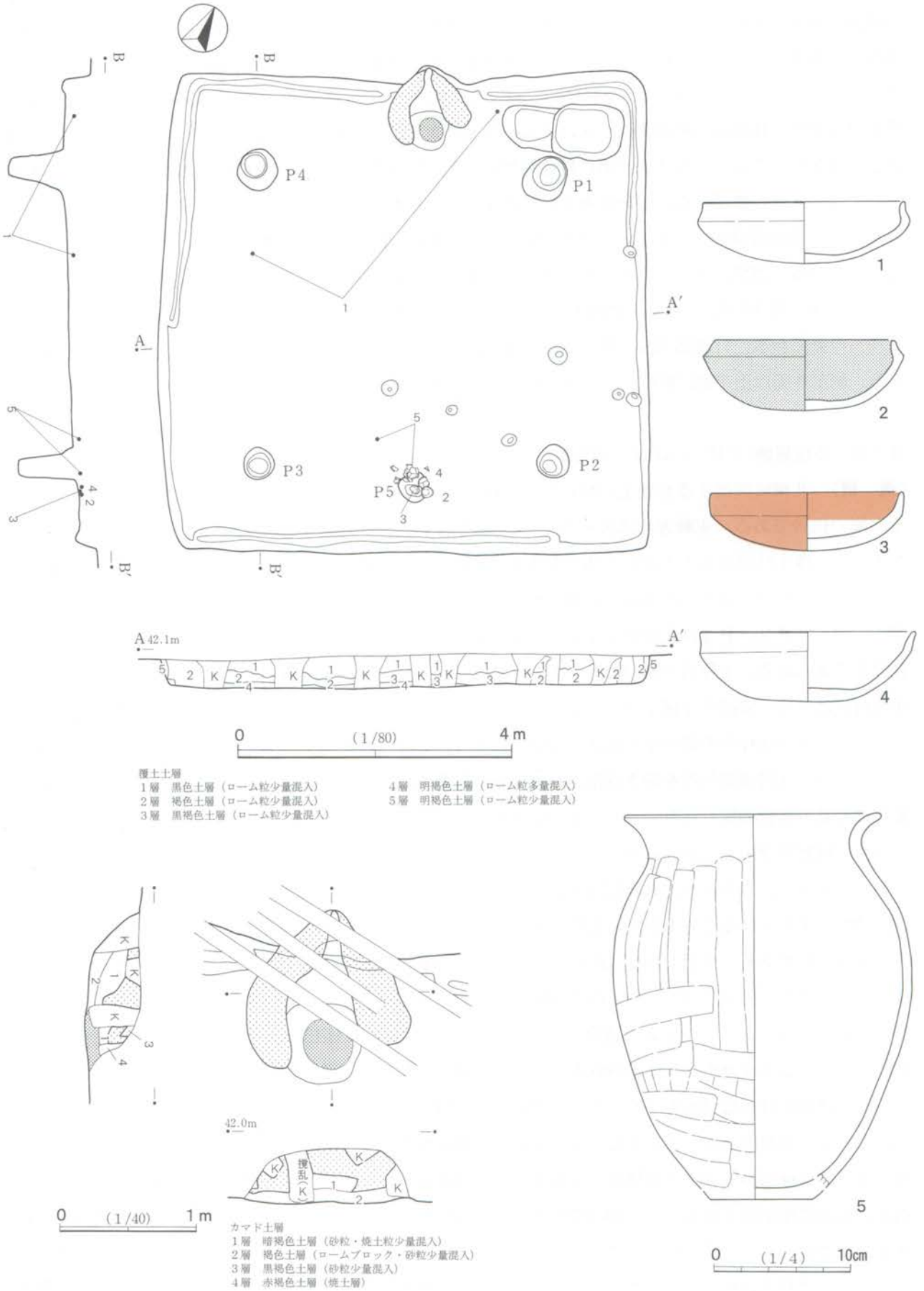
第102図　D-014住居・出土遺物

Ｄ－０１５住居跡（第103図、図版20・70・71）

（遺　構） Ｄ－０１４住居跡の北約30ｍのＬ19区に位置する。平面形は正方形を呈し、一辺約7.0ｍを測る。床面は耕作のトレンチャーによる撹乱が著しい。主軸方位はＮ－34°－Ｗである。ロームへの掘り込みは40cmを測り、床面は全体にやや軟質で、凹凸に富んでいる。主柱穴は４本で、ほぼ住居の対角線上に位置する。深さは対角線でそれぞれ対応し、Ｐ１・Ｐ３が約90cm、Ｐ２・Ｐ４が約80cmである。Ｐ５は東南壁中央付近に位置し、上場径40cm、深さ20cmを測る。出入口施設に伴うピットと思われる。貯蔵穴はカマドの脇で住居北隅に位置する。２基の重複する長方形状の掘り方が検出されている。深さは東側のものが56cm、西側のものが40cmで、東側のものの方が規模的にも大きく、拡張的に掘り直されたものと思われる。周溝はカマド部分を除く住居の北半分と、東隅を除く南東壁に検出されている。

カマドは北西壁中央よりもやや東に寄った位置に設けられている。壁を40cmほど三角形状に掘り込み煙道とする。撹乱を受けてはいるが、構造としての残りは比較的良好である。火床部は住居壁から約30cm離れて位置し、径60cmの円形状に浅く掘られている。比較的強い被熱の痕跡が認められた。

（遺　物） 出入口ピット付近に集中して出土している。全て土師器である。



第103図　D-015住居・出土遺物

１・２は須恵器杯身模倣の杯である。いずれも体部との境に稜を有し、底部はわずかに偏平となる。１は体部の作りがやや浅く、口縁部は短く直立する。遺存は約30％で、推定口径14.8cm、高さ4.4cmを測る。調整は口縁部がヨコナデ、体部外面がヘラケズリ後ナデ、内面がナデ後部分的なミガキが施されている。２はやや深い作りで、口縁部は内傾気味となる。ほぼ完形で、口径13.1cm、高さ5.0cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ、体底部内外面共にナデによる。内面は底部にヘラケズリが残るがミガキが加えられ、全体には丁寧な作りである。内外面全面に黒色処理が施されている。３・４は蓋模倣の杯と思われる。いずれもやや浅い丸底の底部から、弱い稜を有して口縁部がそのまま立ち上がる器形を呈する。３は口縁部の一部を欠き、遺存度は80％である。口径14.0cm、高さ4.1cmを測る。赤彩が外面全面と内面の口縁部下まで施されている。調整は全面に丁寧なナデを施す。４はやはり口縁部の一部を欠き、遺存度は90％である。口径15.7cm、高さ5.0cmを測る。内面のナデはやや弱くヘラケズリ痕が残る。５は底部付近を欠き、遺存度70％の甕である。口径18.9cm、現存高26.9cmを測る。最大径は胴の中位よりもやや上にあり、22.0cmである。胴部外面は上半部に縦位、下半部に横位のヘラケズリが施される。

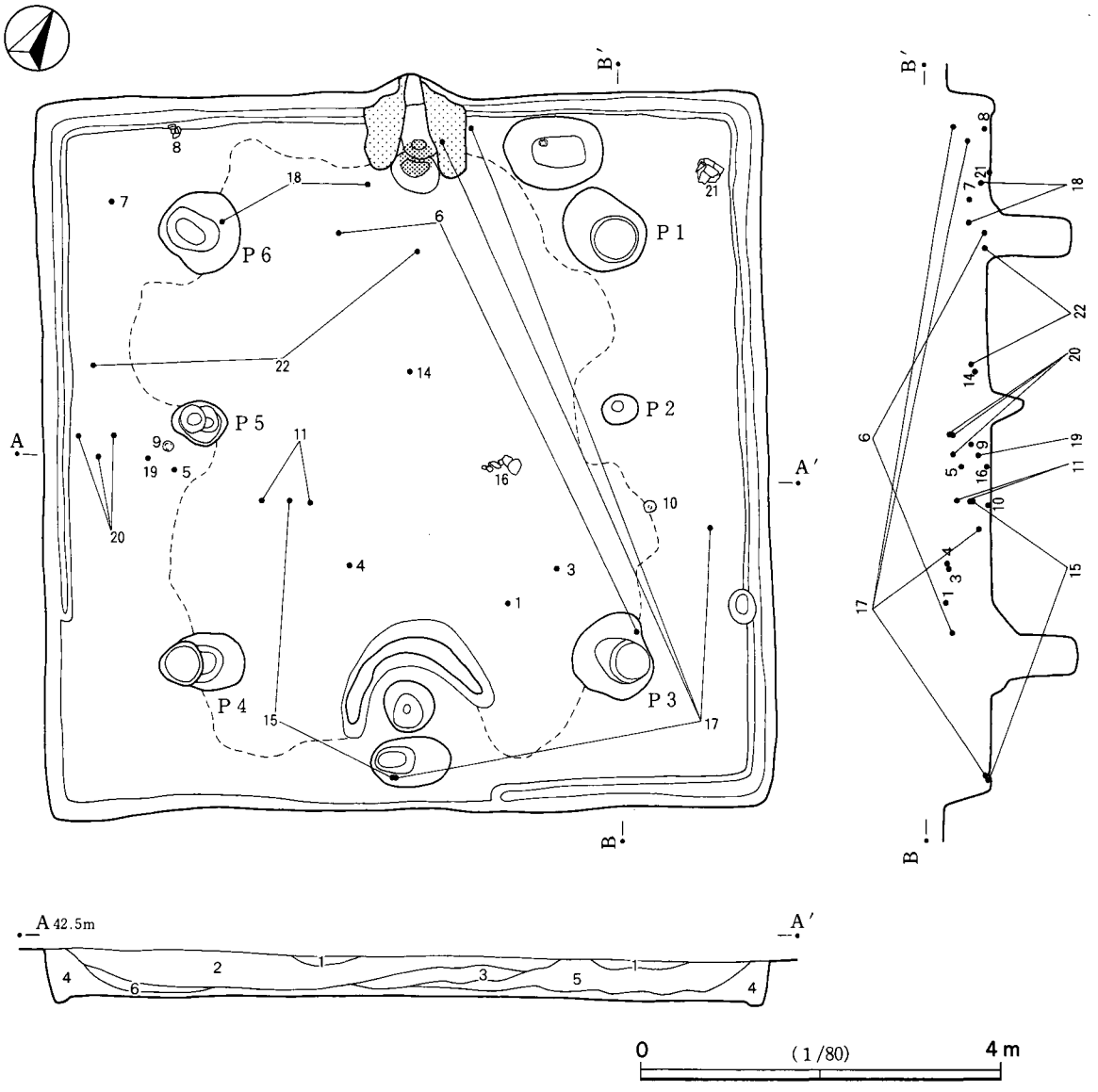
Ｄ－０１６住居跡(第104～106図、図版21・71・72)

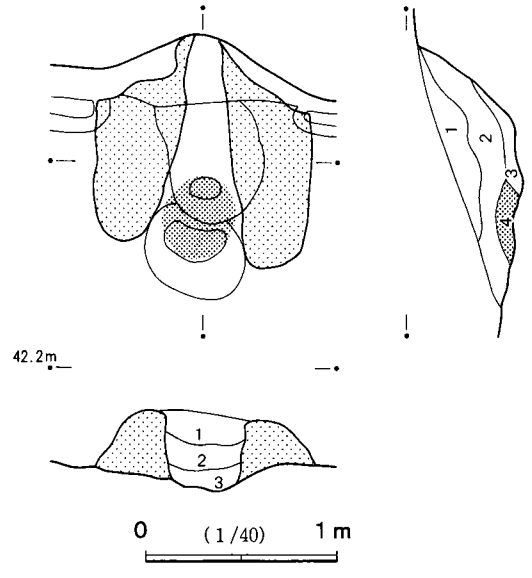
(遺　構) 北東に突出する台地上のM14区に所在する。平面形は正方形を呈し、一辺8.0ｍの規模を有する大型の住居である。主軸方位はＮ－23°－Ｗである。ロームへの掘り込みは50cmで、壁は垂直近くに立ち上がる。覆土は暗色系の土層が主体であるが、全体にローム粒子やロームブロックが混入している。床面は比較的平坦で、柱穴の内側部分に硬質面が認められた。柱穴と思われるピットは６本が検出されている。このうちＰ２、Ｐ４は上場径が小さく、深さもそれぞれ37cm、50cmと他の４本よりは浅いことから副柱穴と考えられる。主柱穴と思われる４本のピットは、どれも深さ90cm以上を測る。出入口施設は南壁の中央付近にあり、特徴的な構造を有している。２か所にピットが掘られ、このピットを馬蹄形状に取り巻くように高さ５cm程の突堤が削り出されている。ピットの深さは壁際が28cm、他方が36cmである。周溝はカマド部分と住居南隅付近を除き掘削されている。貯蔵穴はカマドの東側にあり、1.1ｍ×0.8ｍの規模を測る隅丸長方形状の掘り込みである。深さ60cmを測り、底面は平坦である。

カマドは北西壁中央に設けられている。壁面への掘り込みはわずかである。袖の残存は比較的良好で、壁面から80cmの長さがある。火床部は手前で、ブロック化していない焼土の堆積が認められた。

(遺　物) 床面又は覆土の上層から比較的多く出土している。全て土師器で、杯、鉢、甕、甑等がある。

１～11は杯である。１は1/4程の遺存で推定口径13.5cmを測る。器形は体部との境に弱い稜を有し、口縁部は直立する。赤彩が外面全面と内面口縁部下まで施される。２～４は口縁部が屈曲し内傾して立ち上がる器形のものである。いずれも遺存は1/4程である。２は推定口径13.6cmを測る。体部との境の稜は比較的鋭い。口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデにより調整される。内面全面と外面口縁部に赤彩が施されている。３は推定口径12.4cmを測る。胎土は緻密で混入物は少ない。内面全面と外面口縁部に黒色処理が施されている。調整は全てナデによる。４は推定口径13.2cmを測る。体底部の器壁は薄く、作りは丁寧である。調整は口縁部がヨコナデ後横位のミガキ、体底部外面がヘラケズリ、同内面がナデ後ミガキである。内面に黒色処理が施される。５～10は蓋模倣の杯と思われる。５～７は体部との境に明瞭な稜を有し、口縁部がわずかに外反するか直立して立ち上がる器形のものである。５の底部は偏平となり、厚みのある作りである。遺存度は約50％で、推定口径13.3cm、高さ3.8cmを測る。調整は内外面共に丁寧なミガキを施

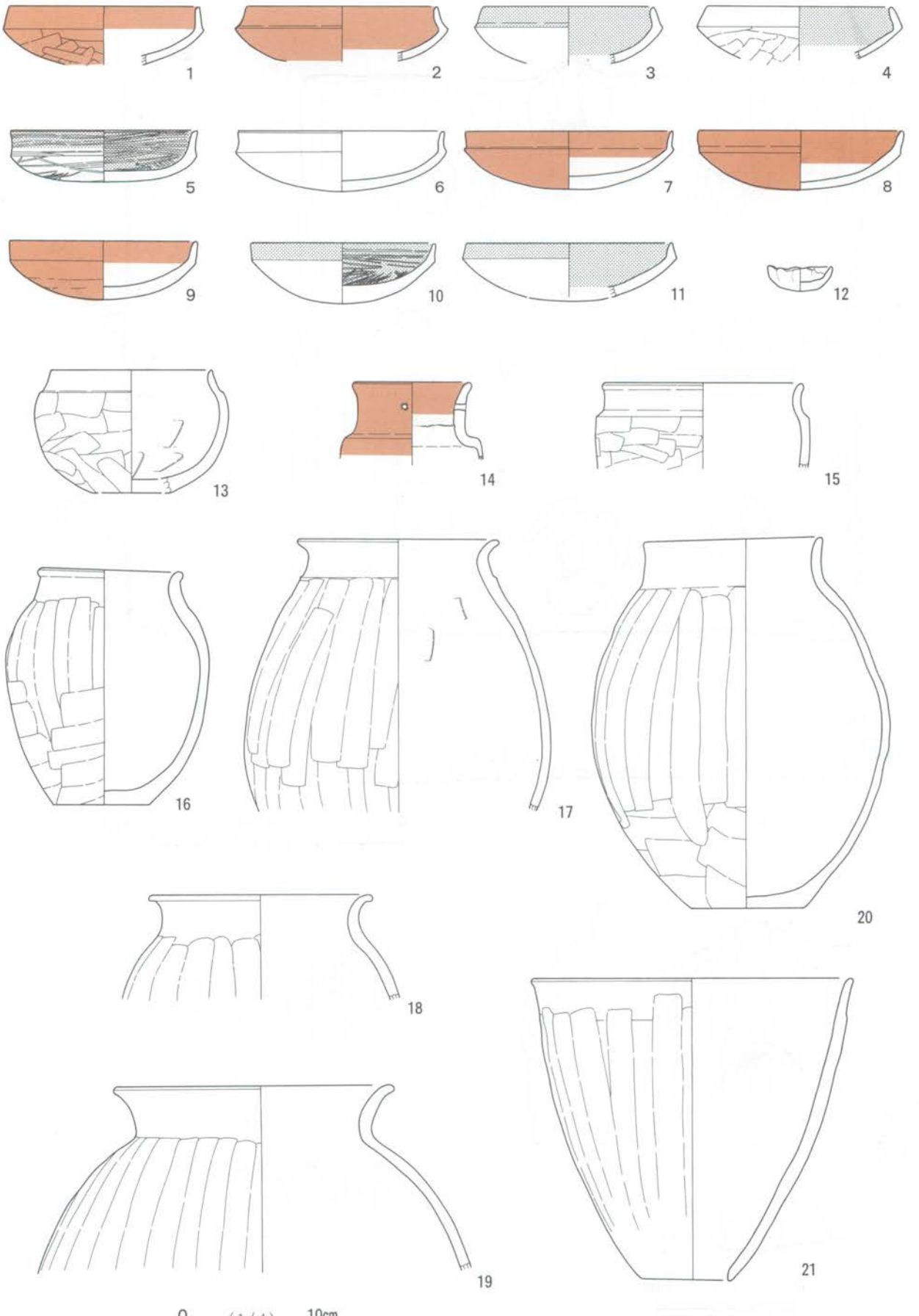




覆土土層
1層　暗褐色土層（ローム粒少量混入）
2層　黒褐色土層（ロームブロック少量混入）
3層　暗褐色土層（ロームブロック少量混入）
4層　暗褐色土層（ロームブロック少量混入）
5層　黒色土層（ローム粒少量混入）
6層　明褐色土層（ロームブロック多量混入）

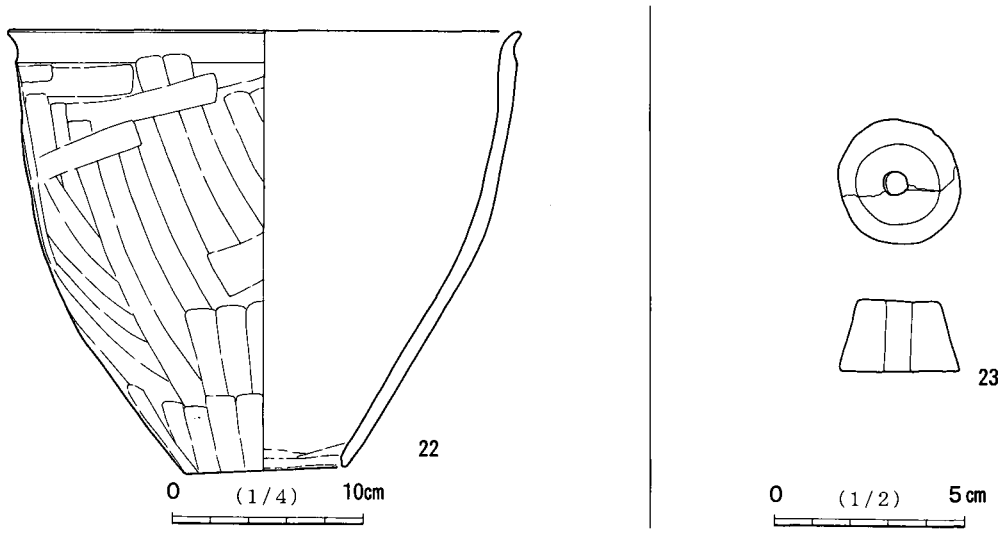
カマド土層
1層　暗灰色砂層（ロームブロック混入）
2層　暗赤褐色砂層（焼砂粒混入）
3層　暗灰色砂層（焼土粒混入）
4層　赤褐色砂層（焼土粒混入）

第104図　D-016住居



第105図　D-016住居出土遺物（1）

す。退色が著しいが、外面口縁部と内面全面に黒色処理が施されている。６は浅い丸底を呈する。遺存度は60%で、口径14.7cm、高さ3.6を測る。胎土への混入物は少なく、わずかに石英粒を認める。調整は口縁部がヨコナデ、体底部が比較的丁寧なナデである。７は遺存度25%で、推定口径15.0cm、高さ4.3cmを測る。浅い作りで、底部には厚みがある。口縁部にヨコナデ、体底部は内外面共により調整される。内面の口縁部から口縁下部付近に赤彩が施されている。８～10は丸底の底部から口縁部がそのまま立ち上がるものである。８はほぼ完形で、口径14.7cm、高さ4.4cmを測る。調整は口縁部がヨコナデ、体底部外面がナデ、同内面がナデ及びヘラナデである。内面の底部を除く全面に赤色塗彩が施されている。９は口端部を約50%欠くが、全体としては80%以上の遺存度である。口径13.3cm、高さ4.2cmである。胎土中には白色砂粒等を多く含んでいる。調整は口縁部がヨコナデ、体底部は内外面共にナデによる。赤彩が口縁部の内外面に認められる。器面が荒れているために不明瞭であるが、赤彩は体底部にも施されていた可能性がある。10は底部の作りが厚いもので、ほぼ完形である。口径13.2cm、高さ4.3cmを測る。調整は口縁部がヨコナデ後ミガキ、体底部外面がヘラケズリ後やや粗いミガキ、内面がナデ後丁寧なミガキである。内面の全面と外面口縁部に黒色処理の痕跡が残る。11は口縁部が短く内傾する器形を呈し、杯身模倣の杯と思われる。遺存は1/4程で、推定口径14.9cmを測る。胎土中には白色鉱物、スコリア等を含んでいる。口縁部外面と内面全面に黒色処理が施されている。12は手捏ね土器である。遺存は60%で、口径4.6cm、高さ1.7cmを測る。内面は指ナデにより調整される。13は推定口径11.5cm、現存高8.7cmを測る鉢である。1/4程度の遺存で、体部に丸みを持ち、口縁部がそのまま内傾気味に立ち上がる。内面は口縁部のヨコナデ後、全てナデにより調整される。体部外面は横位のヘラケズリによる。14は推定口径8.4cmを測る壷の口縁部である。焼成前に径４㎜程の孔が穿たれている。残存部位から考えて、孔は単孔又は１対と思われる。器形は肩部に稜を有し口縁部は直立する。口縁部内面には輪積痕が残る。口縁部内面から外面胴部まで赤彩が施される。15・16は比較的小型の甕である。15の胴部は直線的に立ち上がるものであろう。遺存は口縁部付近の1/3で、推定口径14.4cmを測る。胎土に砂粒等を少量含む。焼成は堅緻である。16はほぼ完形である。口径10.2cm、平均高16.6cm、底径6.9cmを測る。外面の調整は、口縁部ヨコナデ後上半を縦位のヘラケズリ、後下半を横位のヘラケズリが施される。全体に厚手の作りで、胎土中には砂粒を多く含んでいる。17～20は甕である。17は口縁部が短く外側に屈曲するもので、遺存度は約40%である。推定口径14.5cmで、最大径は胴中位付近にある。調整は胴部に縦位のヘラケズリを施した後、口縁部のヨコナデが行われる。内面は丁寧なナデにより調整される。18は口縁部付近の遺存が50%で、全体としては20%足らずとなる。推定口径16.0cmを測る。19は上半部の1/2程度が残存する。推定口径20.0cmを測る。胴の張りが強く、球胴を呈するものとなろう。胴部は内外面共に器面が荒れているが、外面には縦位のヘラケズリが施される。色調は黄褐色を呈す。20は口径12.8cm、高さ26.1cm、底径8.1cmを測り、遺存度は70%である。最大径は胴中位にあり、21.2cmである。胴部にヘラケズリ後、口縁部ヨコナデが施される。内面はヘラナデにより調整される。21・22は甑である。いずれも胴部から直線的に開く器形を呈している。21は90%の遺存で、口径23.0cm、高さ21.3cm、底径6.2cmである。胴部の調整は外面が縦位のヘラケズリ、内面が縦位の粗いミガキである。22は70%の遺存で、口径27.1cm、高さ23.2cm、底径8.4cmを測る。口縁部のヨコナデは強く幅が狭い。胴部の調整は外面がヘラケズリ、内面が縦位の粗いミガキである。23は滑石製の紡錘車である。検出時は中央で２分されていた。上面(図の下側)の径3.2cm、下面の径2.3cm、高さ1.8cmを測り、孔径は７㎜であるが、下面の孔は真円形ではなく、やや横長である。重さは30.5ｇである。



第106図　D-016住居出土遺物（２）

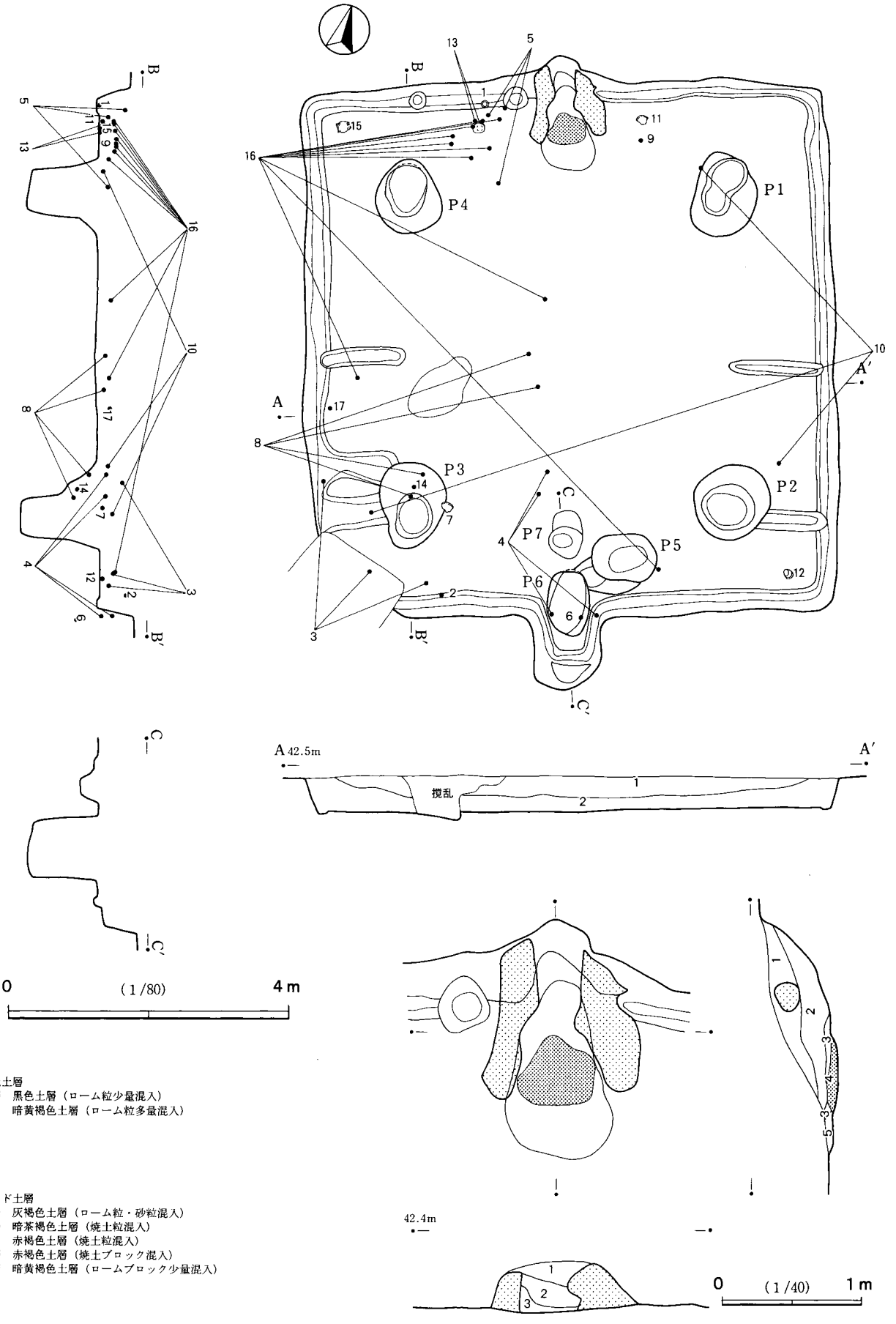
Ｄ－０１７住居跡(第107・108図、図版21・72・73)

(遺　構)　Ｄ－０１６住居跡の南２ｍに隣接して所在する。平面形は正方形で、7.6m×7.6mの規模を有する。主軸方位はＮ－16°－Ｗである。ロームへの掘り込みは50cmである。覆土は基本的に２層に分層される。ローム粒子等をやや多く含んでいるが、ほぼ自然堆積と思われる。床面は平坦で、全体に硬質である。柱穴は４本で、住居の対角線上に位置している。全体に上場径が大きく、１ｍないし、それ以上となる。Ｐ１については、下場が瓢箪形であることから柱穴の掘り直しが行われていると考えられる。深さはどれも95cm以上を測るが、南側のＰ２、Ｐ４はさらに深く、110cm余を測る。南壁中央は外側に１ｍの張り出しを設け、深さ25cmのＰ７を伴い出入口施設としている。張り出し部分には深さ100cmのＰ６が掘られる。隣で深さ85cmを測るＰ５と共に貯蔵穴として使用されたものと考えられる。周溝はカマド部分を除き一周し、主柱穴であるＰ２、Ｐ４に向かってと、その北側にいわゆる間仕切り溝が掘られている。

カマドは北壁中央を三角形状に掘り込んで設けられている。残存する両袖間の間口70cm、火床部手前から最奥の壁面まで1.3ｍを測る。火床部は広く浅い掘り方であるが、底面は赤褐色に焼け締まっている。

(遺　物)　カマド西側の壁付近床面から土師器の杯、鉢、甕等が出土している。

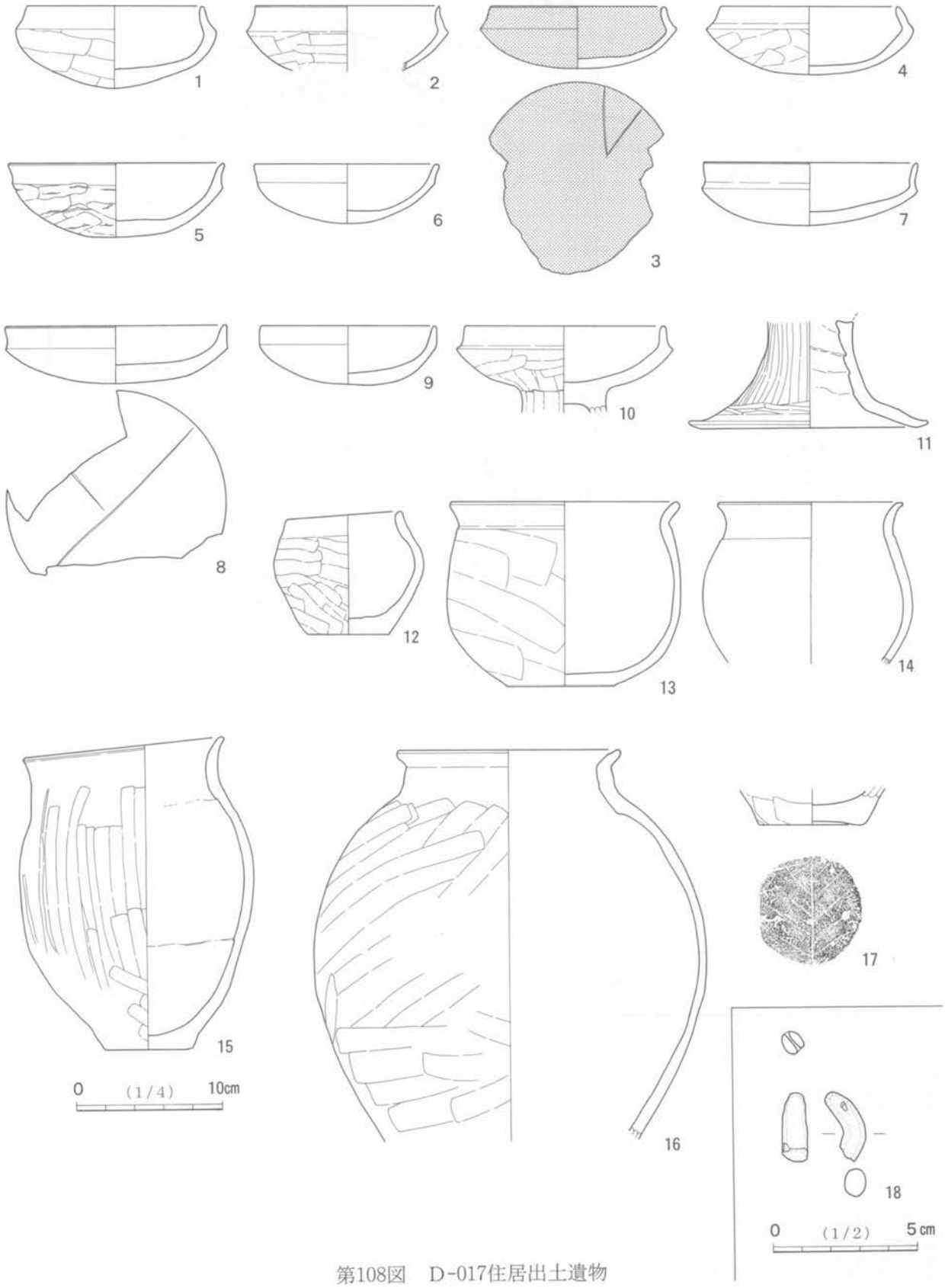
１～４は須恵器杯身模倣の杯で、口縁部が内傾して立ち上がるものである。１は口端部の一部を欠くが、ほぼ完形のものである。体部との境の稜は丸みがあり、口縁部はわずかに内傾して立ち上がる。口径12.0cm、高さ5.8cmを測る。体底部の調整は、内面が丁寧なナデ、外面がやはり丁寧なヘラケズリである。外面底部に黒斑が残る。２・３は体部との境に鋭い稜を有している。２は底部を欠き、遺存は全体で30%程であるが、３よりも体部の作りが深い。口径は推定で12.8cmを測る。口縁部両面と体底部内面にはミガキによる調整が施されている。退色しているが、外面口縁部から内面全面に黒色処理が施されていた可能性がある。３は底部はほとんど残るが、口縁部の遺存が1/3程である。推定口径12.0cm、高さ4.4cmを測る。胎土中には極めて微量の雲母が含まれる。調整は、口縁部がヨコナデ後横位のミガキ、底部内面がやはり横位のミガキ、体底部は粗いミガキである。体部にはＶ字状の線刻が残されている。４は口縁の一部を欠損し、遺存度は90%である。口径12.3cm、高さ4.7cmを測る。全体に厚い作りで重量感がある。体底部内面はナデにより丁寧に調整されている。５・６は蓋模倣の杯である。いずれも丸底の底部から口縁部



覆土土層
1層　黒色土層（ローム粒少量混入）
2層　暗黄褐色土層（ローム粒多量混入）

カマド土層
1層　灰褐色土層（ローム粒・砂粒混入）
2層　暗茶褐色土層（焼土粒混入）
3層　赤褐色土層（焼土粒混入）
4層　赤褐色土層（焼土ブロック混入）
5層　暗黄褐色土層（ロームブロック少量混入）

第107図　D-017住居

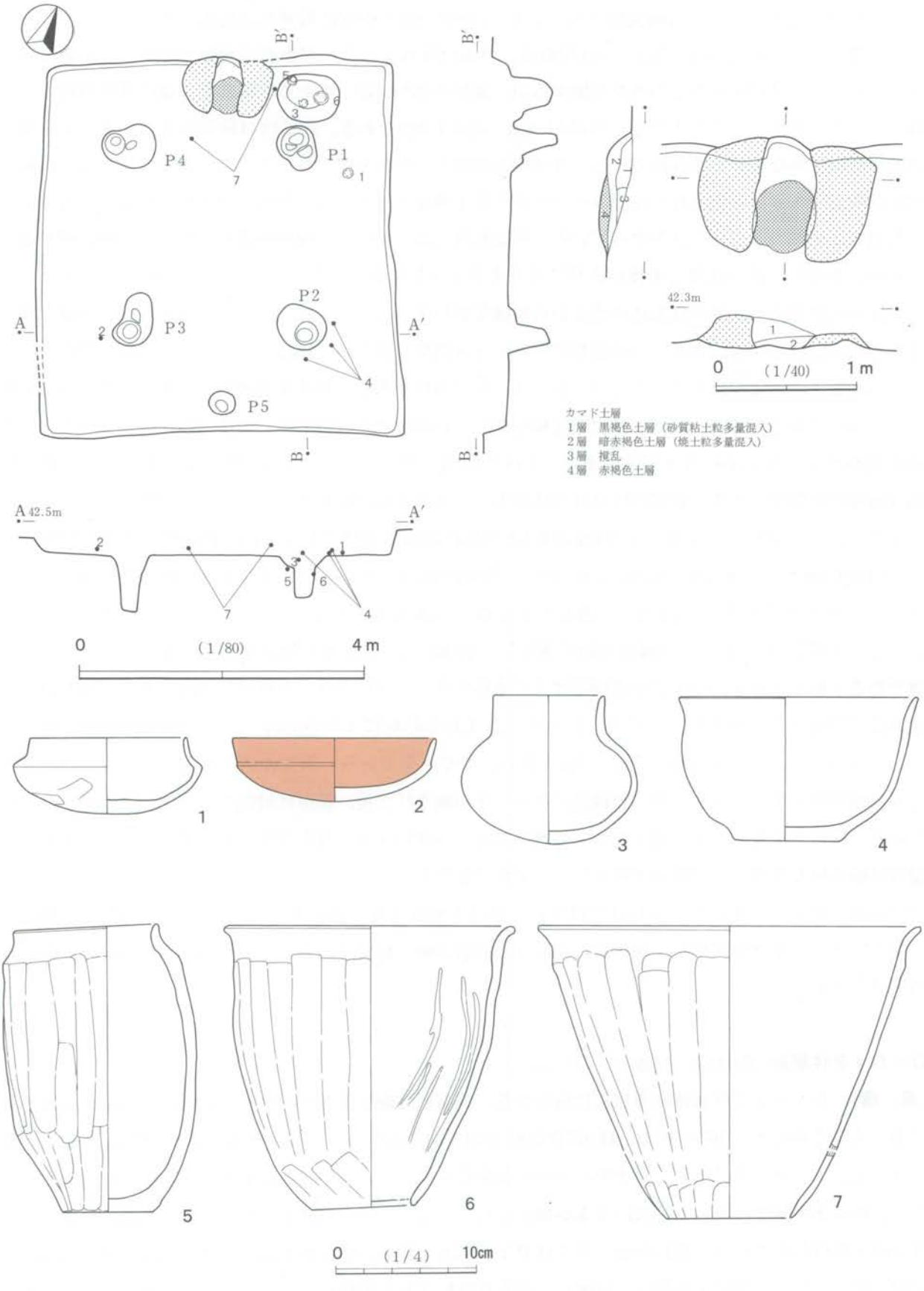


第108図　D-017住居出土遺物

がやや開いて立ち上がる。５は60%の遺存で、口径14.8cm、高さ5.1cmを測る。内面のナデは比較的丁寧に施されているが、外面には輪積痕を残し、底部は径8.5cmの円形に周囲とは色調が異なっている。６も60%の遺存で、口径12.8cm、高さ4.1cmを測る。外面は荒れており一部表面が剥離している。色調は茶褐色を呈する。７は口縁部の２か所を欠損するが、遺存度は80%以上である。体部との境の稜は明瞭で、口縁はわずかに外反して立ち上がる。口径14.8cm、高さ4.3cmである。調整は口縁部がヨコナデ、体底部は内外面共に丁寧なナデが施されている。８は器高が低く、底部も偏平な作りの杯である。調整は口縁部と体底部内面にミガキが施され、外面はヘラケズリ後丁寧なナデである。外面には砂粒の移動痕が残るが、内外面共に光沢のある仕上げとなっている。外面底部にはヘラによる線刻が認められる。線刻は杯底部のほぼ中心を通り、円の直径と半径が直角に接合するような位置にある。９は口径12.0cm、高さ4.0cmのやや小振りな杯である。器形は丸底の底部から口縁部がわずかに内湾気味に立ち上がるもので、明瞭な稜は持たない。遺存は80%である。内外面共にナデにより調整されるが、焼成は甘く、内面はひび割れが生じている。胎土中には砂粒を多く含んでいる。10・11は高坏である。10は杯部の50%が遺存する。口径は推定で14.0cmである。体部との境には明瞭な稜を有し、口縁は短く直立する。調整は口縁部がヨコナデ、体部内面がナデ、外面がヘラケズリである。わずかに残る脚部は太く、推定径5.8cmである。11は裾部径16.7cmを測る脚部である。脚部の作りはやはり太い。脚部外面は縦位のヘラケズリ、裾底部外面(上面)はヨコナデにより調整されるが、下面(接地面)と脚部内面は無調整である。12・13は鉢である。12は完形で、口径8.0cm、高さ8.1cm、底径5.7cmを測る。体部外面は丁寧なヘラケズリが施されるが、成形はやや拙く、手捏ね的である。13は70%の遺存があるが、二次焼成のためか脆弱である。口径16.0cm、高さ12.5cm、底径7.5cmを測る。口縁部が短く外反し、全体には寸詰まりの甕のような形態である。14は小型甕である。胴下半部を欠損するが口縁部は全て遺存する。口径12.7cm、現存高11.0cmである。調整は内外面共に丁寧なナデが施されているが、胎土中に含まれる砂粒により器面はザラつく。15は完形の甕である。口径13.8cm、高さ20.6cm、底径5.7cmを測り、やや小型である。胴部の張りは弱く、口縁部は直立するが口端部はわずかに外屈する。口縁部にヨコナデが施された後、胴部に縦位のヘラケズリ調整がなされている。16は下半部を欠き、遺存度50%の甕である。口径15.6cm、現存高26.5cm、最大径27.3cmを測る。器形は胴の張りが強く、口縁部は断面がコの字状に屈曲する。胎土中には石英粒をはじめ白色鉱物を含んでいるが、目立って多いというわけではない。17は木葉痕が残る底部である。底径7.2cmを測る。18は土製勾玉である。尾部を欠損し、現存長2.3cm、最大幅7.5mm、最大厚8.5mmである。孔径は2.5mm×2.0mmで、両側穿孔である。

D－０１８住居跡(第109図、図版21・73・74)

(遺　構)　D－０１７住居跡の西14mに所在する。平面形は縦位長方形を呈し、5.2m×5.0mの規模を有する。主軸方位はN－16°－Wで、D-017住居跡と同方向である。ロームへの掘り込みは35cmを測り、覆土は暗褐色土の単一層に近い。覆土中には少量ながらロームブロック等が含まれている。床面は凹凸があり、それほど硬質ではない。柱穴は４本が検出されている。このうちＰ１、Ｐ４は下場を２か所に有し、掘り直しが行われたものと思われる。深さはＰ１が68cmと25cm、Ｐ２が50cm、Ｐ３が75cm、Ｐ４が70cmと25cmを測る。Ｐ５は南壁中央付近に位置し、出入り口ピットと思われる。深さは10cm程度である。貯蔵穴はカマドの東側に掘られている。90cm×70cmの規模の楕円形を呈し、深さは60cm近くを測る。貯蔵穴内か



第109図　D-018住居・出土遺物

らはほぼ完形の小型壷、甕、甑が出土している。周溝は確認されていない。

カマドは北壁中央をわずかに掘り込んで設けられている。カマド袖は壁面から70cm、片側の幅40cmを測る。火床部の掘り込みはほとんどないが、赤褐色に硬化して焼けた面が検出された。

（遺　物） 全て土師器で、量的には多くない。１は口径11.0cm、高さ5.2cmを測り、ほぼ完形の杯である。体部との境の稜は大きく張り出すが、なだらかで丸みがある。口縁部にヨコナデ、体底部は内外面共にヘラケズリ後ナデにより調整される。胎土には砂粒を含んでいる。２はやや浅い丸底の底部から弱い稜を境に口縁部がわずかに開いて立ち上がる器形のもので、須恵器蓋の模倣と思われる。遺存は70%で、推定口径14.4cm、高さ4.3cmである。体底部は内外面共に丁寧なナデが施される。内外面の全面に赤彩が施されている。３は口径7.8cm、高さ10.4cmを測るほぼ完形の壷である。底部は丸底である。胴部は球胴状に張り出し、口縁部は筒状に直立する。調整は内外面共にミガキが加えられている。４は70%遺存の鉢で、口径16.9cm、高さ10.0cm、底径6.8cmを測る。口縁部の成形はやや不良で、楕円形に歪んでいる。胎土中には砂粒や白色鉱物を含んでいる。５は完形の甕である。胴部は直線的立ち上がり、口縁部はヨコナデにより調整されると同時に整形されている。口径10.0cm、高さ19.7cm、底径6.3cmを測る。６・７は甑である。６は完形で、口径20.6cm、高さ19.4cm、底径6.0cmを測る。胴部はわずかに内湾して立ち上がり、口縁部が短く外屈する。内面には粗いミガキが施されている。７は上半部70%、底部付近10%程の遺存である。計測値はいずれも推定で、口径27.1cm、高さ20.2cm、底径8.6cmである。口縁部がわずかに外反するが、胴部は直線的に開いて立ち上がる器形を呈し、いわゆるバケツ状となる。

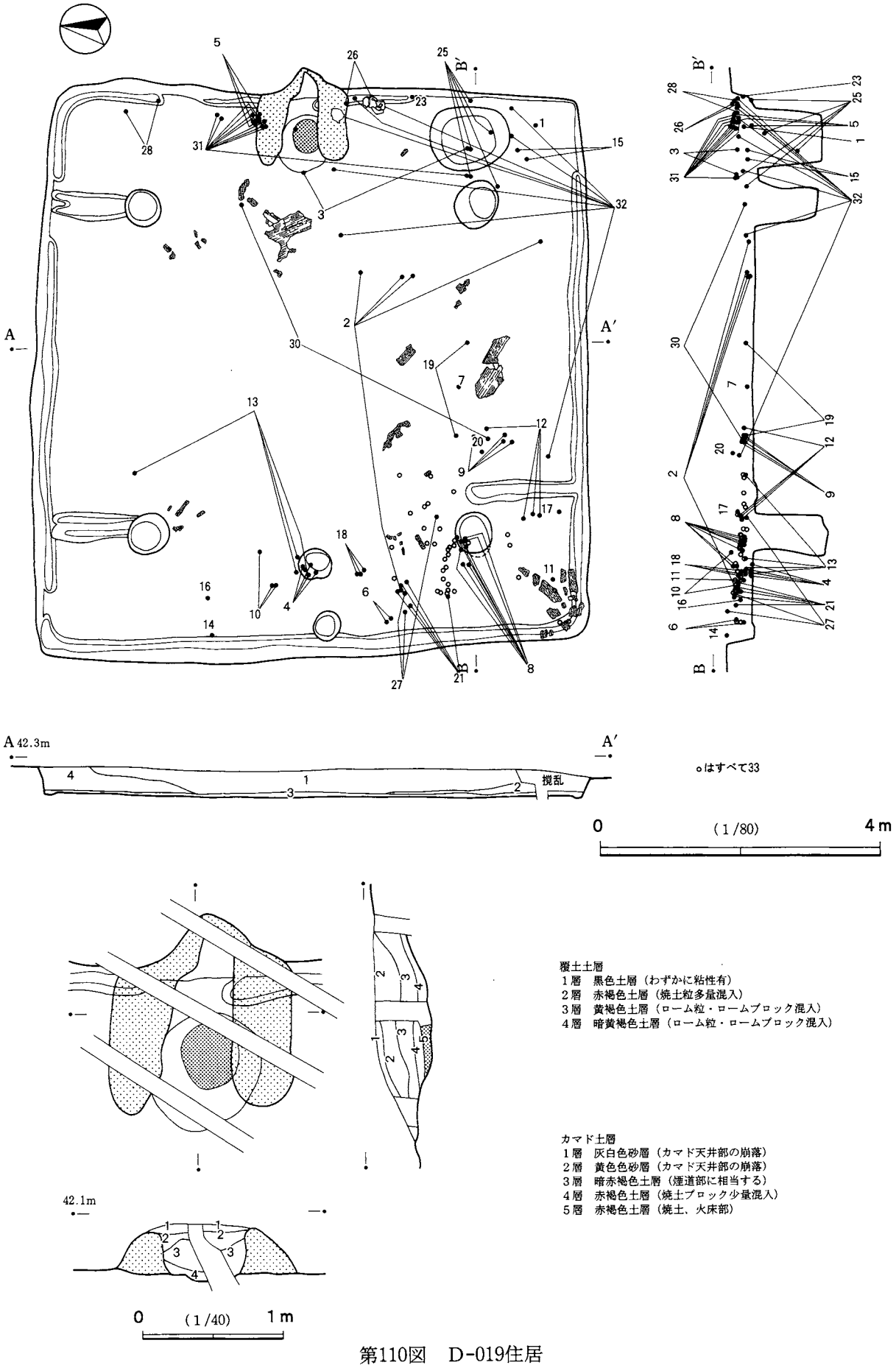
Ｄ－０１９住居跡（第110～112図、図版22・74～76）

（遺　構） Ｄ－０１６～Ｄ０１８住居跡の一群とはやや東側に離れたＮ15区に所在する。平面形は正方形に近く、8.1ｍ×8.0ｍの規模を有する。カマドは東壁にあり、カマドを通る主軸方位はＮ－84°－Ｅである。ロームへの掘り込みは40cmを測り、覆土は黒色土層が主体となるが、西側と北側にはロームブロックを混入する暗黄褐色土が堆積する。おそらく部分的に埋め戻しが行われているものと思われる。柱穴は４本主柱穴で、配置はほぼ住居の対角線上である。柱穴の深さは、カマド寄りの東側に位置する２本が90cm前後、西側の２本が100cm前後を測る。南壁中央付近には出入口ピットと思われる２本のピットが検出され照り羽検出されている。深さは壁際が20cm、内側が40cmである。貯蔵穴はカマドの南である。方角は違うが、他の住居跡と同じようにカマドに向かって右側の位置である。1.1ｍ×1.0ｍの上場規模を有し、深さは１ｍに近い。周溝はカマド部分と貯蔵穴付近の他、北壁の一部で途切れている。間仕切り溝は、貯蔵穴に最も近い柱穴を除く３本の柱穴に向かって壁から掘られている。

カマドは、東壁のほぼ中央に設けられている。壁面を三角形状に30cmほど掘り込み煙道としている。火床部は径70cm、深さ５cmほどの掘り方を持つ。底面の直上にはブロック化した焼土の堆積が認められた。

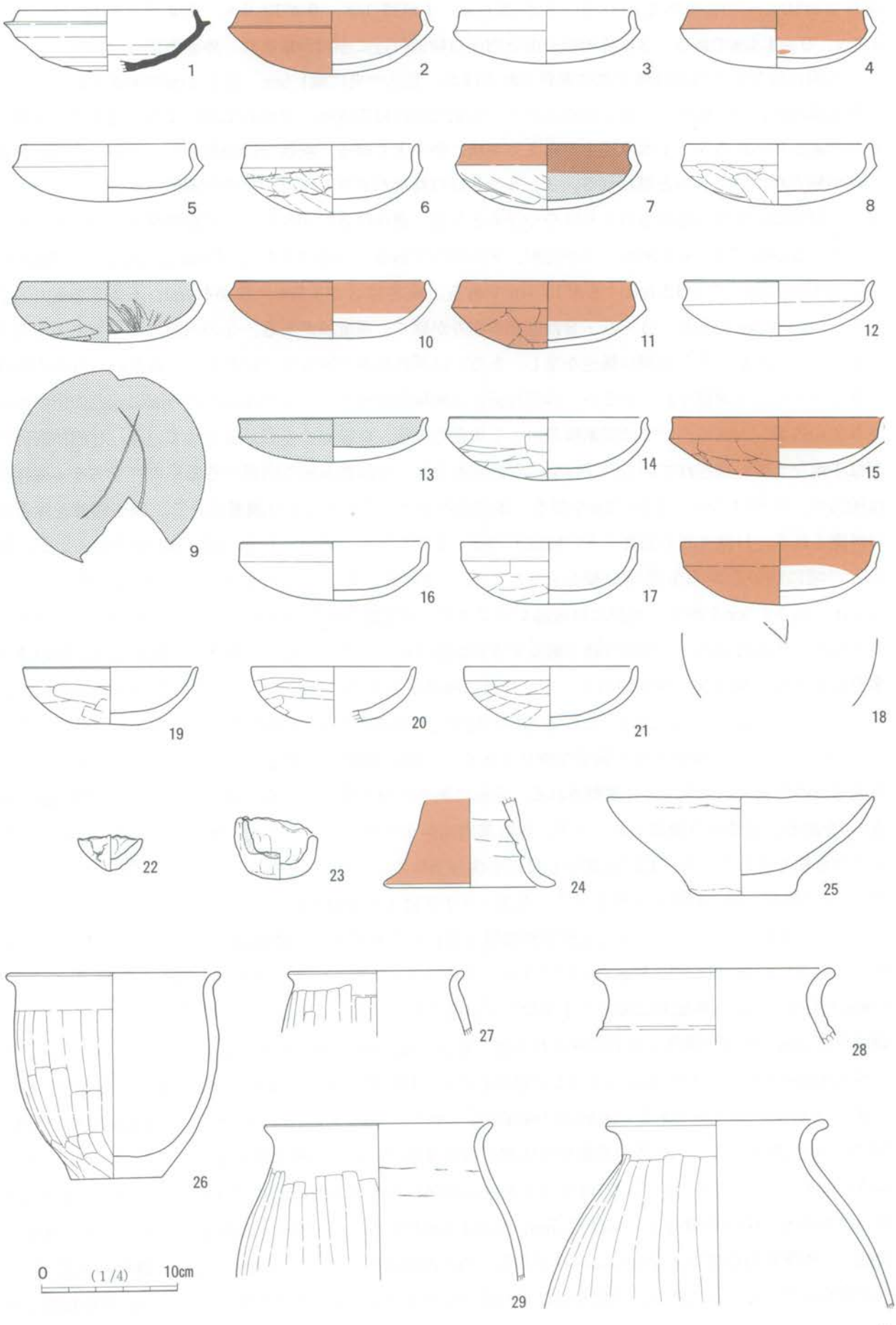
（遺　物） 床面付近から炭化材等が検出されたほか、土器等は床面よりやや浮いた状態で比較的多量に出土している。

１は須恵器杯身である。40%程の遺存で、推定口径13.1cm、推定受部径15.0cm、高さ4.5cmを測る。底部の調整は幅1.7cm程度の回転ヘラケズリにより施される。色調は暗緑褐色であるが、断面は暗灰褐色を呈す。陶邑ＴＫ43号併行期のものと思われる。２～21は土師器の杯である。そのうち11までは須恵器杯身模倣の杯である。２・４・９は体部との境の稜から口縁部が内径気味に立ち上がるものである。いずれも

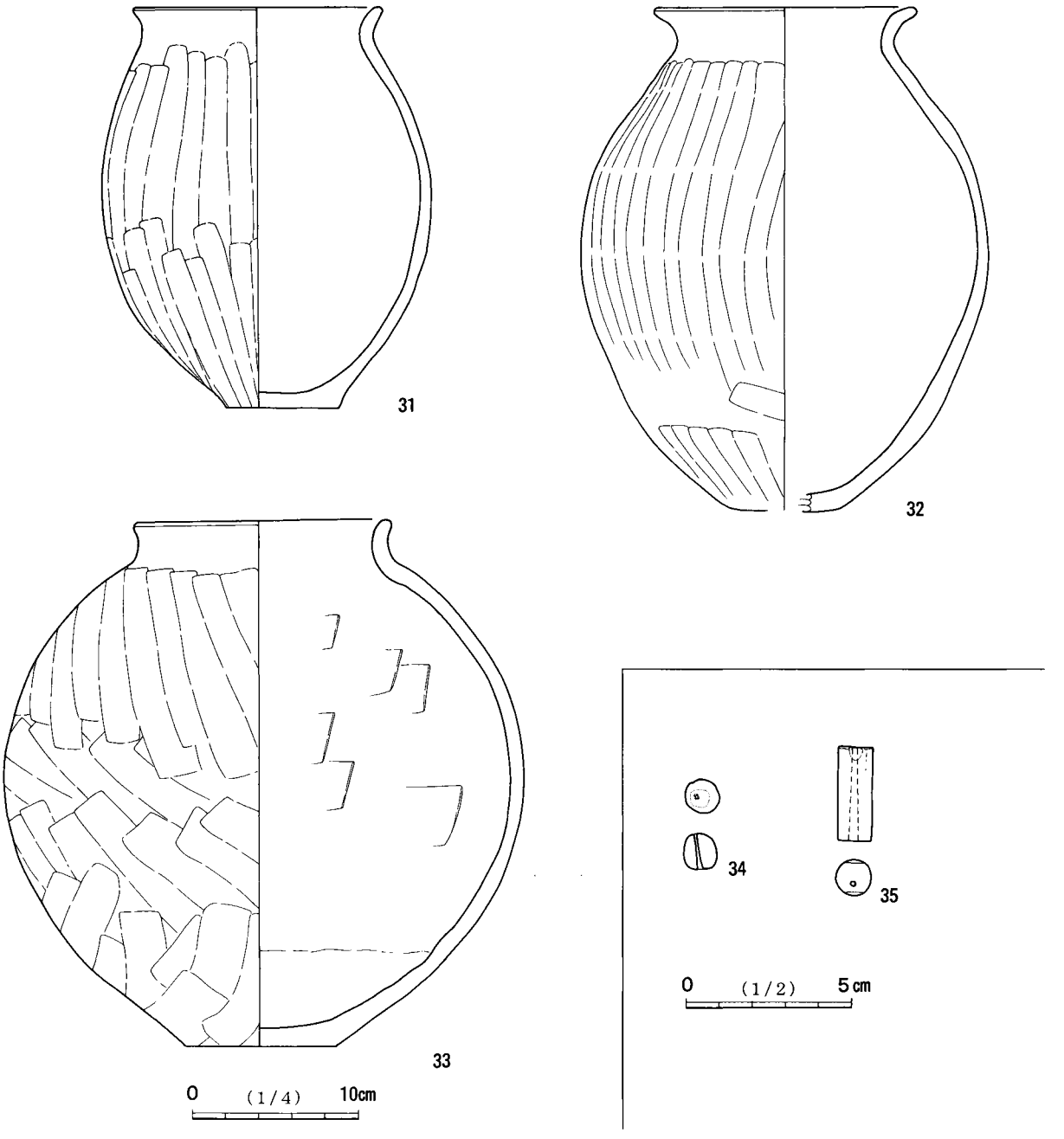


第110図　D-019住居

遺存度は60%～70%である。口径は２が13.6cm、４が13.1cm、９が12.6cm、高さは２が4.7cm、４が4.3cm、９が4.4cmである。２は外面の全面と内面口縁部付近に赤彩が施され、外面底部には黒斑がある。４は外面口縁部から内面口縁下部に赤彩されるほか、見込中央に幅1.5cm、長さ４cmの朱筆を認める。９の体底部内面には放射状のミガキが施される。外面底部には焼成後ヘラ状の工具により、交差する２本の線刻状線が見られるが、１本は途中からミガキ状にやや太くなる。現状では退色しているが、全面に黒色処理が施されていたものと思われる。３・５～８は口縁部が直立して立ち上がる器形のもので、このうち６・７は体部の作りが他のものよりはやや深めとなる。遺存は３が70%だが、口縁部は８割以上を欠損している。５が60%強、６が80%、７が完形、８が90%である。口径は３が(13.0)cm(推定値)、５が(12.6)cm、６が12.7cm、７が12.6cm、８が13.7cmである。高さは３が3.9cm、５が4.4cm、６が5.2cm、７が4.9cm、８が4.5cmである。３・６・８は底部の作りが厚く、重量感がある。３の内面はミガキによる調整が施され、光沢がある。色調は褐色を呈し、あるいは黒色処理が施されていたかもしれない。６の内面は丁寧なナデにより調整されているが、体部外面には輪積痕が残る。７は口縁部の内外面に赤色の塗彩がなされているが、内面については炭素吸着による黒色処理後、口縁部の赤彩が施されている。８の体底部内面は丁寧なナデが施されている。10は偏平な底部を有し、口縁部が短く内屈する器形の杯である。遺存度は80%で、口径14.3cm、高さ4.2cmを測る。体底部内面はヘラナデにより調整される。両面底部を除き赤彩が施される。11は丸底の底部から口縁部が内傾して立ち上がる器形である。図ではわかりにくいが、体部との境に弱いながらも明瞭な稜を有している。口端部を部分的に欠損するが遺存は良好で、口径12.6cm、高さ4.9cmを測る。調整は口縁部がヨコナデ、体底部内面がヘラナデ、外面が幅の広いヘラケズリである。外面口縁部から内面口縁下部まで赤彩が施されている。また、口縁部の一部から体底部のほぼ半分にわたり、油煙状の黒斑がある。12～15は口縁部がわずかに外反して短く立ち上がる器形の杯である。14を除き体部の作りは浅い。12は底部中心付近と口縁部の1/4を欠損する。口径13.9cm、高さは推定で4.0cmを測る。13は極めて浅く偏平な作りである。1/3程の遺存で、推定口径14.0cm、高さ3.2cmを測る。体底部は内外面共にナデにより調整される。全面に黒色処理を施している。14は完形で、口径14.6cm、高さ4.6を測る。調整は口縁部がヨコナデ、体底部内面がナデ及びヘラナデ、外面がヘラケズリである。胎土には砂粒を含んでいる。15は底部中心付近を含む全体の1/3以上を欠損する。口径15.7cm、高さは推定で4.3cmである。体底部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデにより調整される。外面の全面と内面口縁下部まで赤彩が施されている。16～18は須恵器蓋模倣と思われる杯である。遺存は16が90%、17が40%、18が60%である。口径は16が13.9cm、17が13.1cm、18が14.5cmである。高さは16が4.3cm、17が4.5cm、18が4.6cmである。16は内外面共に極めて丁寧なナデが施されている。17の胎土には石英粒、砂粒を多く含む。18は外面全面と内面口縁部に赤彩が施される他、見込中央に幅0.6cm、長さ3.5cmの朱筆が認められる。また外面底部中心付近にＶ字状のヘラによる線刻がある。19の底部はやや偏平となる。60%の遺存で、推定口径12.8cm、高さ4.1cmである。調整は口縁部がヨコナデ、体底部外面がヘラケズリ、内面がナデである。20は1/4程の遺存である。丸底の底部から体部が内湾気味に立ち上がる器形を呈する。推定口径12.2cm、高さ4.0cmでやや小振りである。21はやはり丸底の底部から体部が内湾気味に立ち上がるが、口縁下には弱い稜がある。60%の遺存で、口径12.7cm、高さ4.3cmを測る。22・23は手捏ね土器である。22の成形は稚拙で、内側から指押さえを施したのみである。23の内面は指ナデにより調整される。器壁の一部はＵ字状に削がれているようであり、天地を逆にすればカマドをイメージさせる形態となる。24は高杯脚部であ



第111図　D-019住居出土遺物（1）



第112図　D-019住居出土遺物（２）

る。図示した部分では一周する。裾底部径12.3cmを測る。内面は底面から３cm程の高さまでヨコナデが施される。外面は赤彩されている。25は1/2の遺存で、口径19.6cm、高さ7.1cmの鉢である。甕底部の二次的な使用かと思われたが、口縁部は焼成前に整形されている。底部は柱状となり、底面には木葉痕が残る。26・27は小型の甕である。いずれも口縁部は短く外屈する器形を呈している。26は部分的に欠損し全体としては70%程だが、口縁部から底部まで遺存している。口径15.7cm、高さ14.8cm、底径6.8cmを測る。口縁部のヨコナデは胴部外面のヘラケズリ後行われている。27は口縁部の2/3弱が遺存し、推定口径13.0cmを測る。28～33は甕である。28は口縁部の2/3が遺存する。推定口径17.6cmである。29は上半部60%の遺存で、口径17.0cmを測る。内面はナデにより調整されるが、丁寧ではなく輪積痕の一部が残る。胎土には砂粒を多く含んでいる。30は上半部70%の遺存で、口径16.3cmを測る。焼成は甘く、脆弱である。31は胴

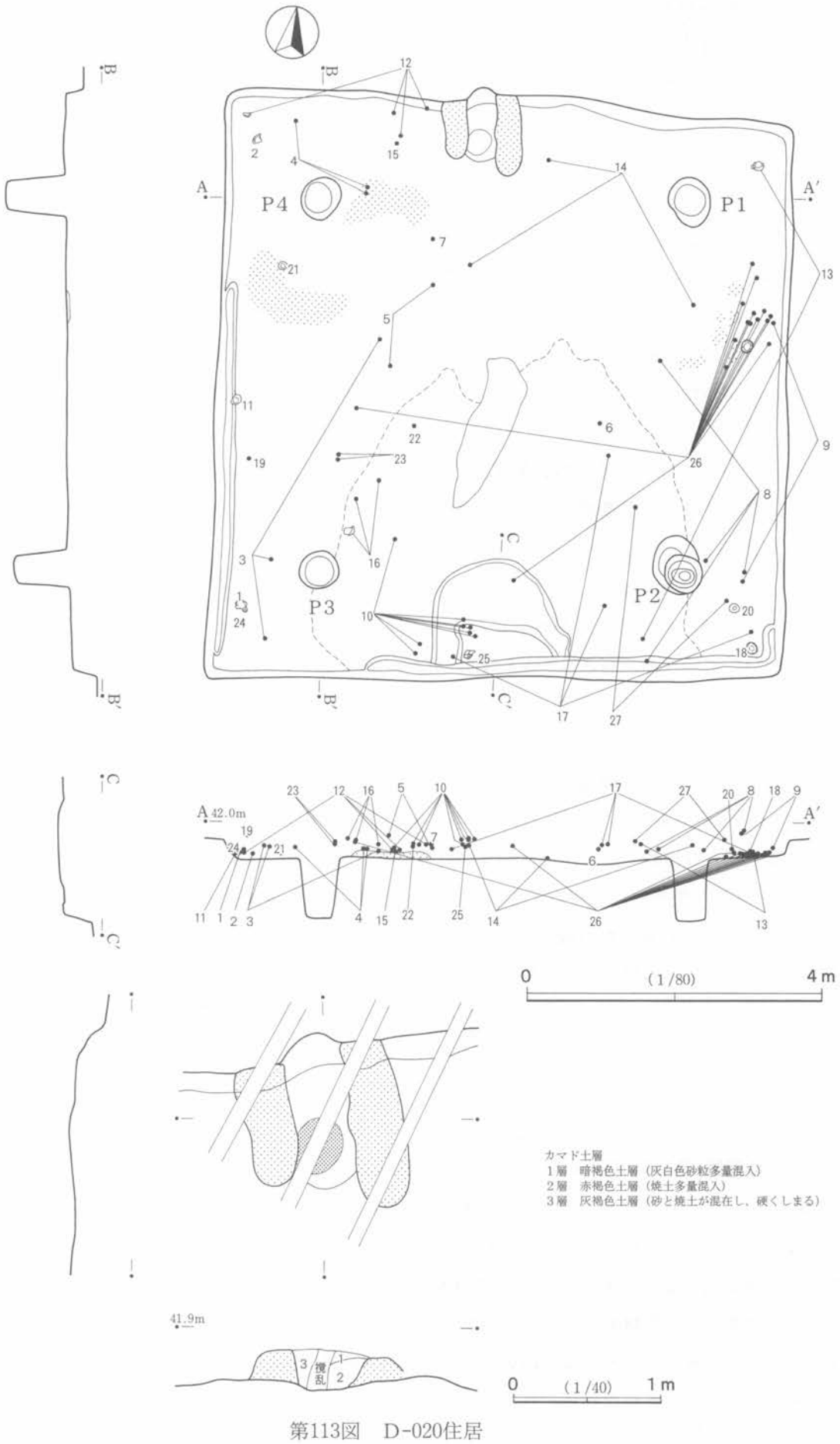
部を部分的に欠損するが70%程の遺存がある。胴部の張りは弱く、口縁部は短く外屈する。口径15.1cm、高さ23.3cm、底径6.7cmを測る。内面のヘラナデ、外面のヘラケズリは比較的丁寧である。32は70%程の遺存がある。推定口径15.8cm、高さ30.5cm、推定底径6.0cmを測る。胎土中には石英及び砂粒が多く含まれ、器面はザラついている。33は口縁部が短く立ち上がる球胴の甕である。整形、調整共に丁寧で、外面のヘラケズリは平滑である。34は径1.0cmの土製丸玉である。厚さは1.1cm、孔径は1～2mmである。重さは1.15gである。35は暗緑褐色を呈す滑石製の管玉である。長さ2.8cm、中央部の径1.0cmを測る。孔は両側共に中心から少しずれた位置に穿たれる。孔径は図の上面で1.0mm、下面で3.0mmを測り、片側が大きい。図の上方から見ると、端部の側面上下が擦られており、見た目が円形とならない。重さは6.13gである。

D－020住居跡(第113・114図、図版22・76・77・79)

(遺　構) D－019住居跡の東11mに所在する。平面形はわずかに縦位の長方形状を呈し、7.8m×8.0mの規模を有する。主軸方位はN－6°－Wである。付近は耕作による撹乱が著しい。ロームへの掘り込みは40cmを測り、覆土はローム粒子を混入する暗黄褐色土のほぼ単一層である。床面はやや凹凸がある。北西の柱穴付近と住居東側中央付近に粘土の堆積が見られた。柱穴は4本主柱穴で、住居の対角線上に配置される。南西のものが95cmと最も深く、他はいずれも80cm前後である。周溝は西壁の南半分以上と南壁の東半分以上に掘られているのみである。住居の南壁中央付近には出入口施設と思われる深さ5cmほどの逆U字形の掘り込みがある。これを中心に主柱穴P2とP3の内側で床面中央付近までが踏み締められて特に硬質になっている。カマドは北壁中央よりも若干西に寄った位置に設けられている。向かって右側の袖の方が長く、壁面から1.2mを測る。火床部の掘り込みは極めて浅く、焼土はむしろ煙道部分に相当する土層から多量に検出されている。

(遺　物) 床面から浮いた状態で出土したものの方が多い。

1～21は土師器杯である。1は口縁部の一部を欠損するが、90%以上の遺存である。体部に深さがあり、弱い稜から口縁部が短く立ち上がる。口径12.0cm、高さ6.1cmを測る。体底部内面はヘラの当たりが残る。胎土中には砂粒及び白色鉱物等が含まれ、体底部外面には黒斑を認める。2～4は丸底の底部から口縁部が内傾して立ち上がる器形の杯である。4のみ口縁部がやや長い。遺存は2が完形、3・4が70%である。口径は2が11.8cm、3が13.2cm、4が11.9cmである。高さは2が4.9cm、3が5.1cm、4が4.9cmである。調整はいずれも口縁部ヨコナデ、体底部外面ヘラケズリにより行われ、内面は4がナデ、2・3はヘラナデである。3点共に内外面の口縁部付近を中心に赤彩が施されている。5はやや偏平な底部から口縁部がわずかに外反して立ち上がるものである。30%の遺存で、推定口径13.8cm、推定高4.2cmである。6～9はやや偏平な底部から口縁部が直立気味に立ち上がる器形のもので、須恵器杯身模倣の杯と思われる。遺存は6・7が40%、8は底部の大部分を欠損するが口縁部は一周する。9は30%である。口径は6が(13.4)cm、7が12.8cm、8が13.3cm、9が(12.5)cmである。高さは6が(4.0)cm、9が(3.6)cmである。6・7の調整はいずれも丁寧で、口縁部に横位のミガキ、体底部内面に放射状のミガキ(6)が認められる。8は胎土に砂粒を多く含み、外面口縁部から内面口縁下部まで赤彩が施されている。9の調整は口縁部及び体底部の内外面共に横位のミガキが施されている。また、全面に黒色処理が施される。胎土は緻密である。10～13は体部との境に明瞭な稜を有し、口縁部がわずかに開き気味に立ち上がる器形を呈する。

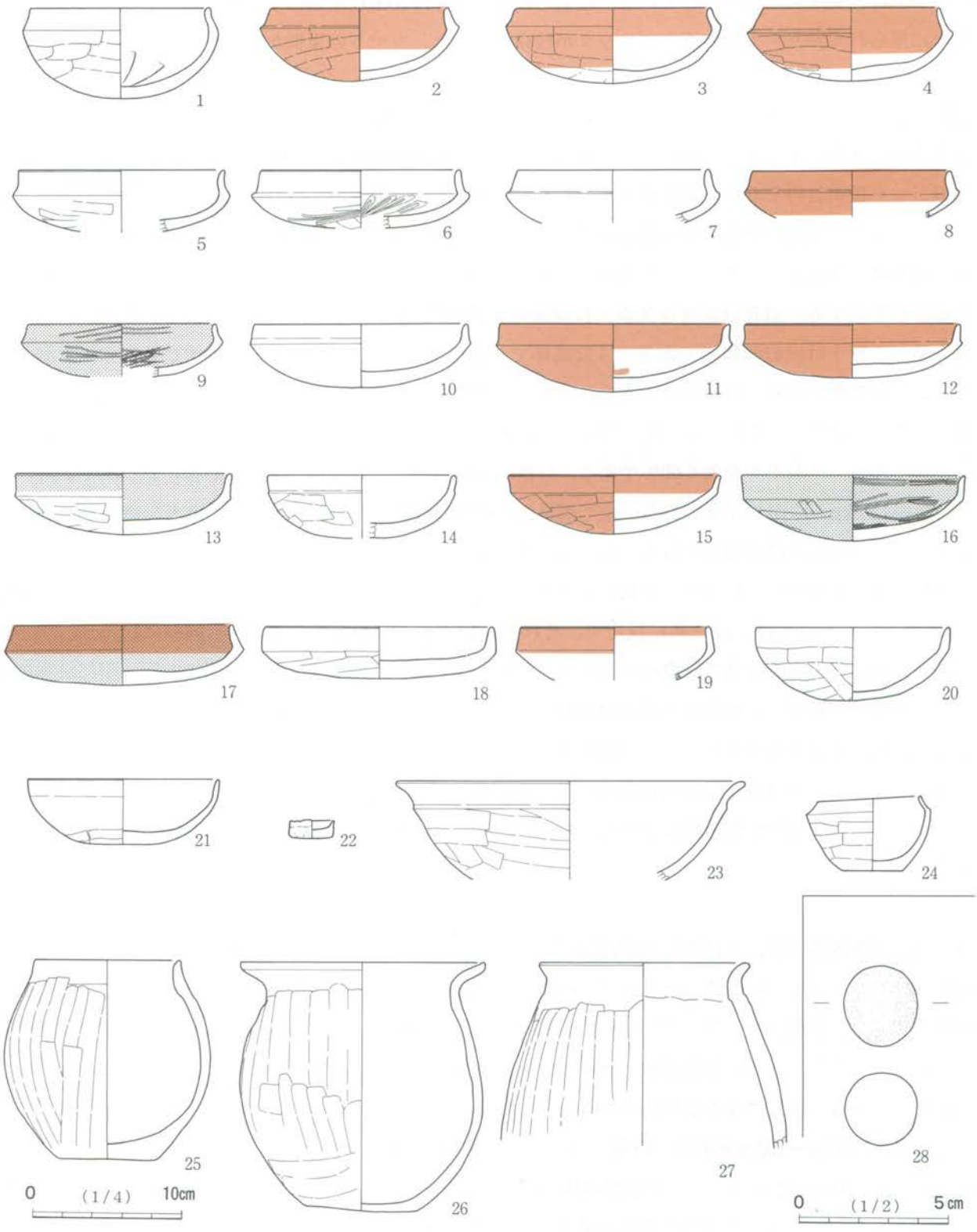


第113図　D-020住居

須恵器蓋の模倣と思われるが明確ではない。遺存は10が70%、11がほぼ完形、12が90%、13が90%である。口径は10が14.3cm、11が15.3cm、12が14.4cm、13が14.5cmである。高さは10が4.3cm、11が4.6cm、12が3.6cm、13が4.0cmである。10・13の口縁部及び体底部内面には横位のミガキが施されている。13は口縁部外面から内面の全面に黒色処理が施されており、あるいは10にも黒色処理が施されていた可能性がある。11・12はいずれも外面の全面と内面口縁下部付近まで赤彩が施されており、調整は口縁部ヨコナデ、体底部内外面共にナデである。また、いずれにも見込中央付近に長さ4cm、幅1cmの「一」状の朱筆がある。14～16も口縁部の立ち上がりはやや開き気味となる。体部との境の稜は弱い。須恵器蓋模倣の杯と思われる。遺存は14が50%、15が25%、16が75%である。口径は14が推定12.6cm、15が推定14.2cm、16が15.0cmである。高さは14が4.1cm、15が3.9cm、16が4.3cmである。14・15の体底部内面にはヘラナデ調整の際のヘラの当たりが観察できる。16の体底部内面は横位のミガキにより調整される。15の赤色塗彩は外面の全面と内面の口縁下部付近まで施され、16は内外面全面に黒色処理が施される。17は偏平な底部から口縁部が内屈する。遺存は80%で、口径14.5cm、高さ4.0cmを測る。内外面全面の黒色処理の後、口縁部内外面に赤彩が施されている。17は偏平の底部からほとんど体部を持たずに口縁部が直立するものである。全体に器壁は厚く、重量感がある。口縁部ヨコナデ、底部内面ヘラナデ、外面ヘラケズリにより調整されている。19は丸底の底部から口縁部がやや内傾して立ち上がるものである。遺存は底部を欠く口縁部の50%で、口径12.8cmを測る。20・21はやや深さのある丸底の底部を有する。いずれも底面はヘラケズリの調整により、わずかではあるが平らになる。20はほぼ完形で、21は約50%の遺存である。口径は20が13.0cm、21が推定12.8cm、高さは20が4.8cm、21が4.4cmを測り、内面はいずれも丁寧なナデにより調整される。21の胎土には砂粒がやや多く含まれる。22は口径3.0cm、高さ1.2cmを測る小型の手捏ね土器である。指押さえにより器壁を盛り上がらせている。23は鉢又は高杯と思われる。遺存は口縁部の1/4程度で、推定口径23.4cmである。口縁部はヨコナデにより調整され、体部との境に稜を形成する。24は80%の遺存で、口径7.0cm、高さ4.7cm、底径4.0cmの小型の鉢である。作りは丁寧で、体部内面はミガキにより調整されている。25～27は甕である。25は60%の遺存であるが、口縁部は一周する。口径9.8cm、高さ13.2cm、底径6.2cmを測る。整形はやや稚拙で歪みがある。胎土中には砂粒が多く含まれ、器面はザラつく。26は70%の遺存である。寸胴だが口縁部が大きく開く器形を呈する。口径16.4cm、高さ16.2cm、底径7.4cmを測る。外面は被熱し、赤褐色及び黒褐色の部分があるが、内面は黄褐色に近い色調である。27は下半部を欠損し、口径14.2cmを測る。内面の調整は幅の狭いヘラナデによるが、あまり丁寧ではなく輪積の痕跡を残している。28は20.27gを測る丸石である。石材は石英ハン岩が用いられており、径2.5cmである。用途は不明である。

D－021住居跡(第115・116図、図版22・23・77～79)

(遺　構) D－020住居跡の東7.5mのO15区に所在する。平面形は縦位長方形に近く、6.2m×6.0mの規模を有する。主軸方位はN－25°－Wである。ロームへの掘り込みは30cm～40cmを測る。住居内には多量の炭化材が遺存していた。検出された炭化材の方向には住居の対角線に沿うような傾向が認められる。また、中央付近に萱材も多く観察されている。明らかに火災住居である。柱穴は4本主柱穴で、配列はほぼ住居の対角線上である。深さはいずれも85cm～90cmを測る。貯蔵穴は住居北西隅付近に掘られている。90cm×65cmのやや不整な楕円形状を呈し、深さ60cm以上を測る。周溝はカマド部分と西壁の一部を除



第114図　D-020住居出土遺物

き一周する。

カマドは北壁中央に設けられている。壁面への掘り込みは20cm程度とわずかである。火床部は深さ５cmほどに掘られており、多量の焼土ブロックが残存していた。カマドの東側からは土師器の杯、甕、甑等がまとまって出土している。

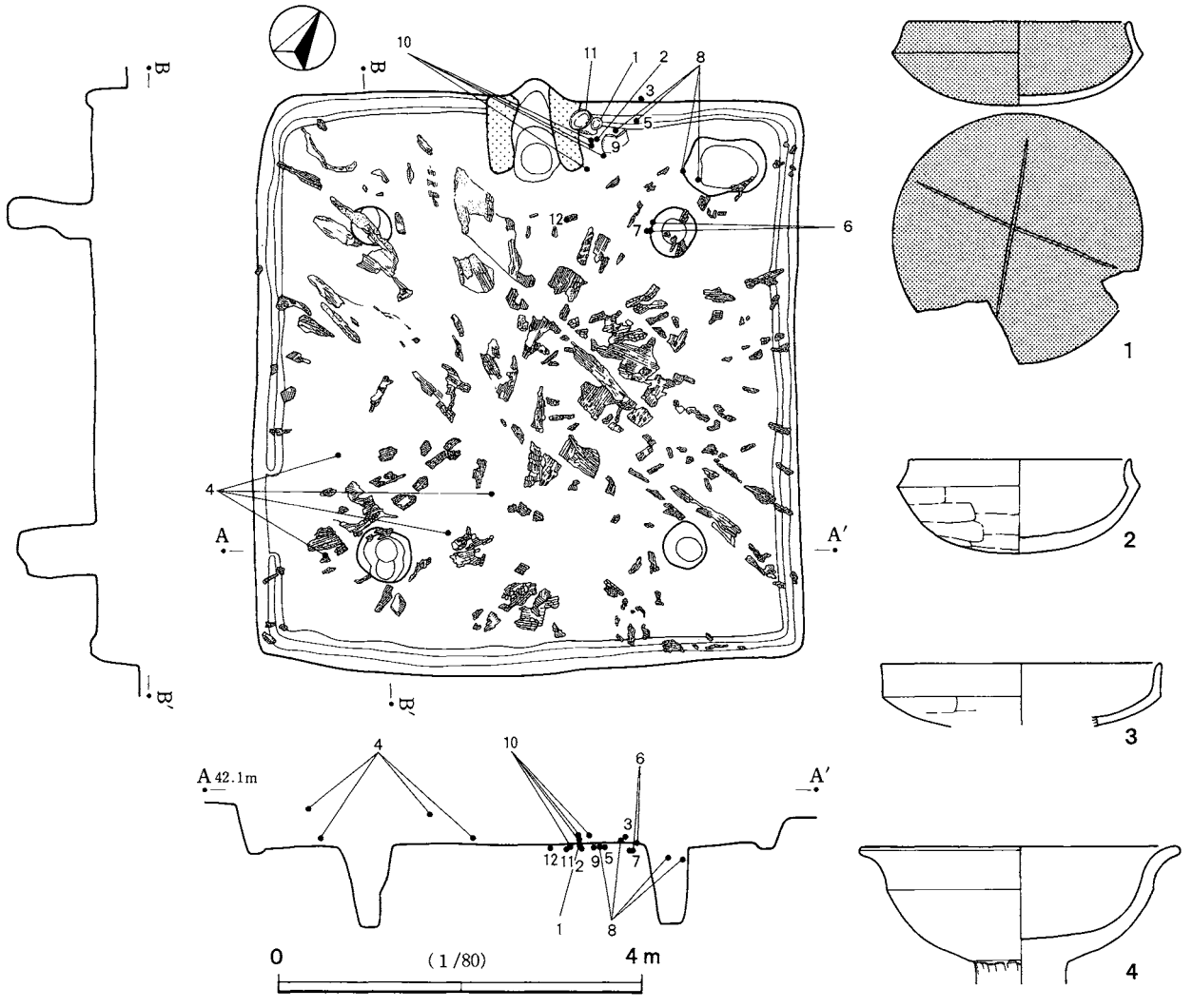
（遺　物） １・２は体部との境に稜を有し、丸底の底部から口縁部が内傾又は直立して立ち上がる器形を呈する杯である。１の遺存は80％で、口径12.3cm、高さ4.7cmを測る。調整は口縁部がヨコナデ、体底部内面がナデ後横位のミガキ、外面がナデである。外面底部には焼成前にヘラにより「十」状の線刻が施されている。また、全面に黒色処理が施される。２はほぼ完形である。口径12.2cm、高さ5.2cmを測る。体底部の調整は、外面がヘラケズリ、内面がヘラナデである。３は浅い作りの底部から口縁部がやや長く直立する器形を呈する。遺存は底部を欠き、口縁部の1/3程度である。推定口径は15.2cmである。色調は暗褐色を呈し、胎土は比較的緻密である。４は高杯で、遺存は杯部の1/3程である。推定口径17.8cmを測る。杯体部には丸みがあり、口縁部は大きく外反する。内外面共に調整は丁寧なナデによる。５～７は小型の甕である。口縁部の形態は、５が短く外屈し、６・７はわずかに外反して開く。遺存は５が95％、６が底部を欠く70％、７が半身を欠く60％である。口径は５が14.0cm、６が14.8cm、７が推定13.3cmである。高さは５が12.2cm、７が14.0cmである。全て調整は口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデによるが、７の内面には輪積痕が残る。８～10は甕である。いずれも口縁部は直立し、口端部付近でわずかに外屈する。断面形がいわゆるコ字状となるものである。９のみ完形で、口径12.8cm、高さ22.1cm、底径7.3cmを測る。８は口径、高さ共に推定で、それぞれ12.9cm、21.0cmである。10も同様に14.5cm、30.5cmを測る。胴部外面上位は全て縦位のヘラケズリが施されている。11はほぼ完形の甑である。胴部から口縁部まで直線的に開き、口縁部がわずかに外反する器形を呈する。口径26.2cm、高さ24.2cm、底径7.2cmを測る。調整は口縁部のヨコナデ後、胴部外面は縦位のヘラケズリ、内面は縦位のミガキが施されている。12は支脚である。半身を欠くが円柱状を呈し、現存長14.0cm、推定径6.0cmである。胎土中に繊維等の混入は少ない。13は凝灰岩製の砥石である。表裏面共に平滑に使用されている。長さ3.9cm、重さ10.15ｇである。

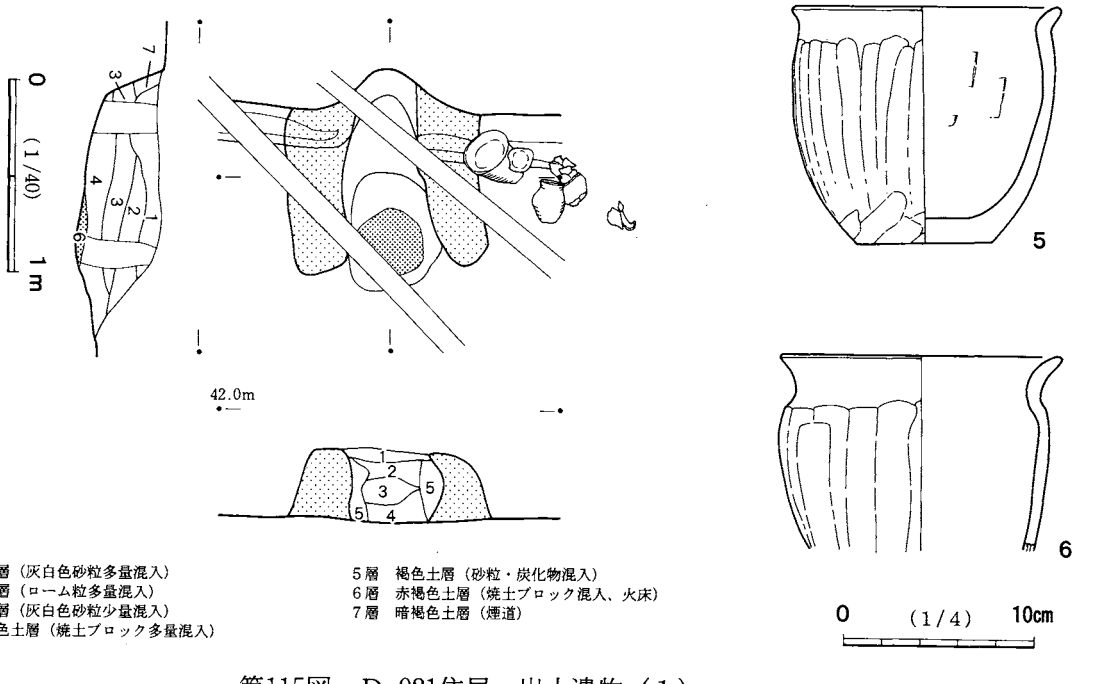
Ｄ－０２２住居跡（第117・118図、図版23・79）

（遺　構） Ｄ－０２１住居跡の南２ｍに所在する。平面形はわずかに横位長方形を呈し、7.0ｍ×7.2ｍの規模を有する。主軸方位はＮ－22°－Ｗである。ロームへの掘り込みは50cm～60cmを測る。覆土は基本的に２層に分層でき、上層は黒色土層、下層はローム粒子等が含まれ、明るい色調となっている。床面は硬く締まっている。柱穴は４本が検出されている。配列は住居の対角線上である。いずれも上場径は80cm以上で、深さは90cm～100cmを測る。貯蔵穴はカマドの東側に位置する。隅丸長方形状の掘り方で、1.0ｍ×0.7ｍ、深さは60cmに近い。出入口施設はD-016住居跡にも見られたように突堤を伴うものである。突堤は高さ５cmほどで、南壁中央から約80cm内側に掘られた深さ25cmのピットの回りを逆Ｕ字状に囲んでいる。突堤は壁のある南側に開口するが、ここでの間口は突堤の内側で1.6ｍを測る。周溝は全周している。

カマドは周溝の掘り込み後構築されている。北壁中央に位置し、ほとんど壁面への掘り込みを持たない。火床部は床面から10cm程の深さである。多量の焼土ブロックの堆積が認められた。

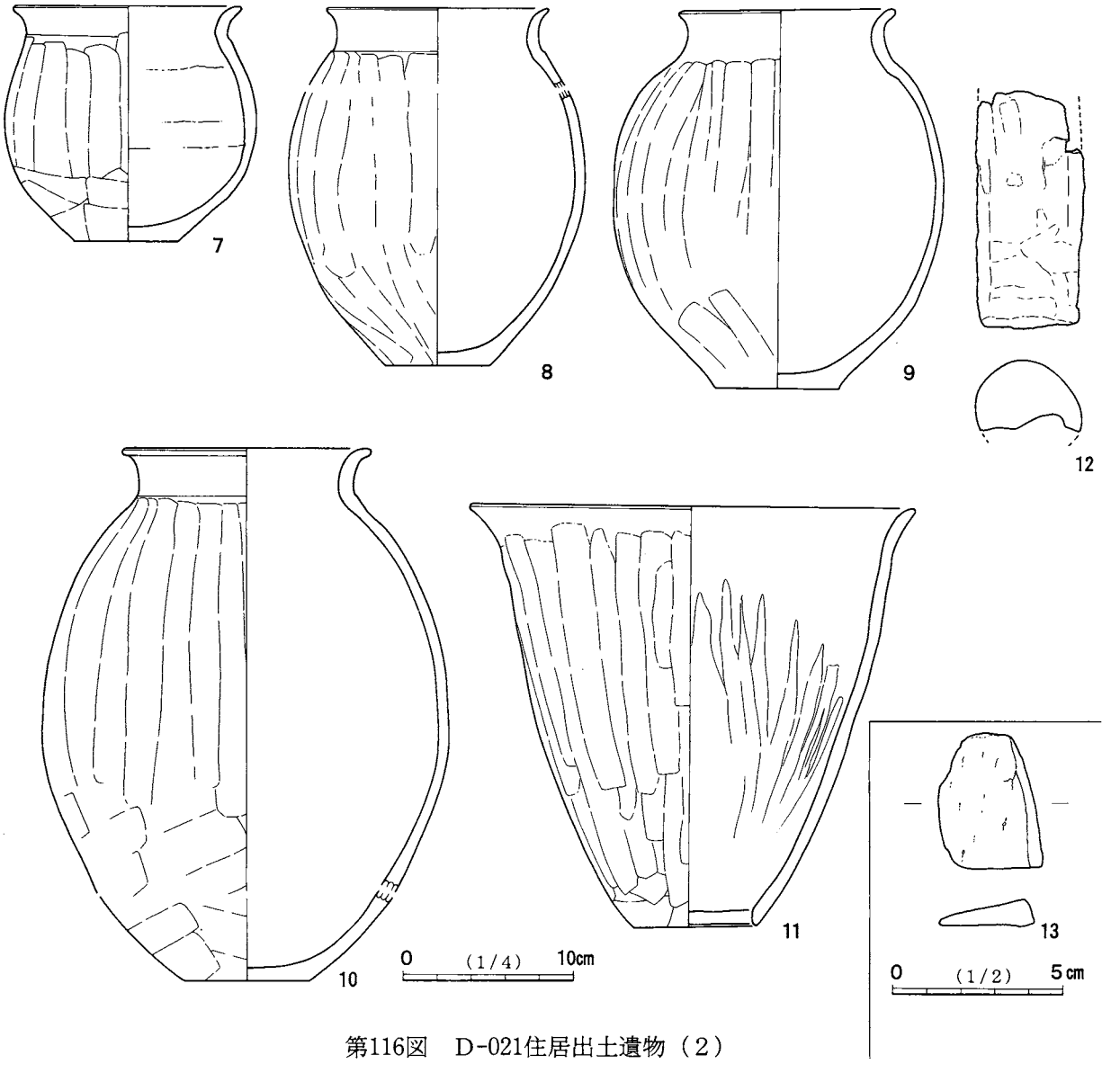
（遺　物） 比較的少ない。出土状態には、床面付近と覆土の上層付近の２つのパターンがある。





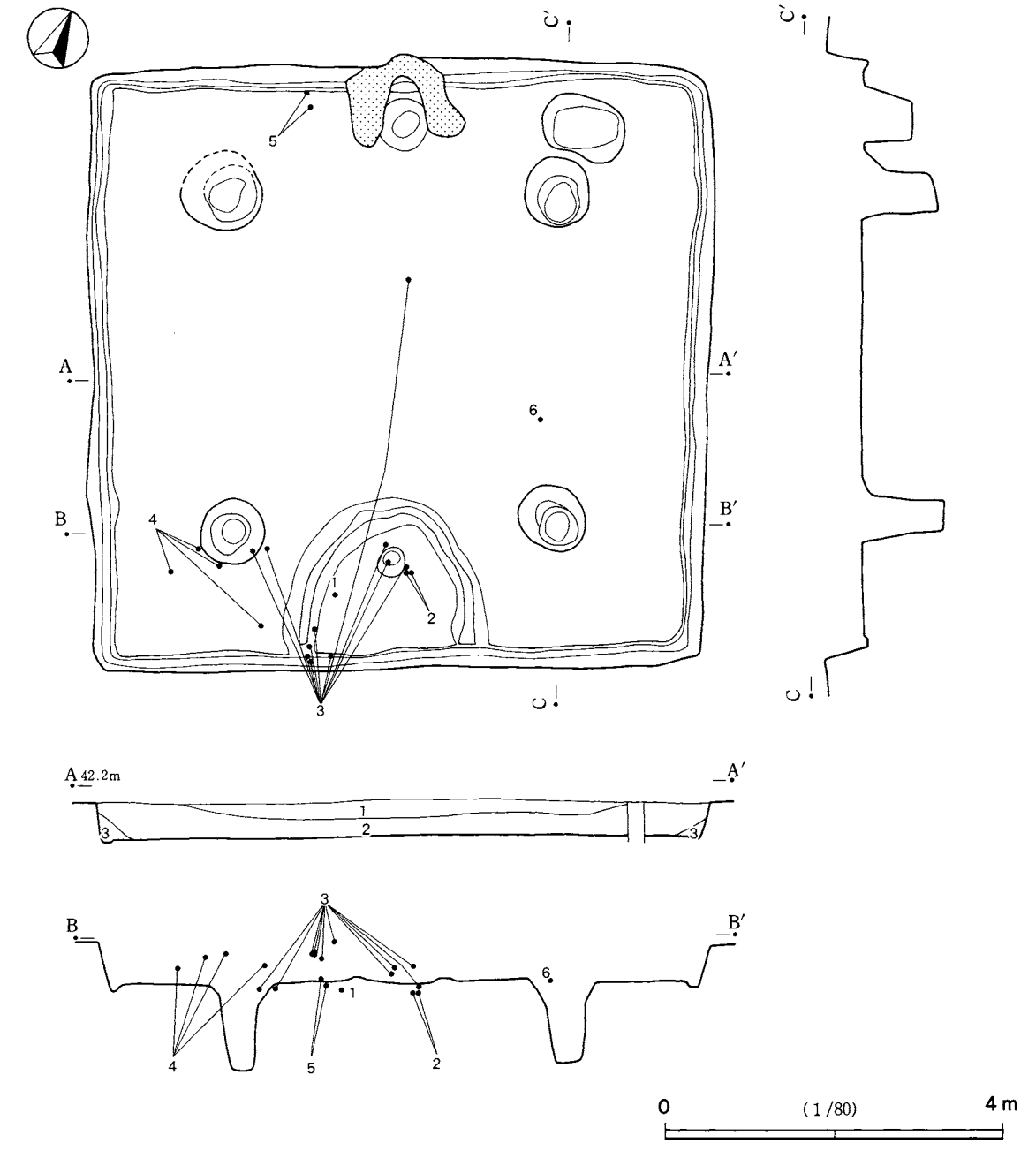
カマド土層
1層　褐色土層（灰白色砂粒多量混入）
2層　褐色土層（ローム粒多量混入）
3層　褐色土層（灰白色砂粒少量混入）
4層　淡赤褐色土層（焼土ブロック多量混入）
5層　褐色土層（砂粒・炭化物混入）
6層　赤褐色土層（焼土ブロック混入、火床）
7層　暗褐色土層（煙道）

第115図　D-021住居・出土遺物（1）

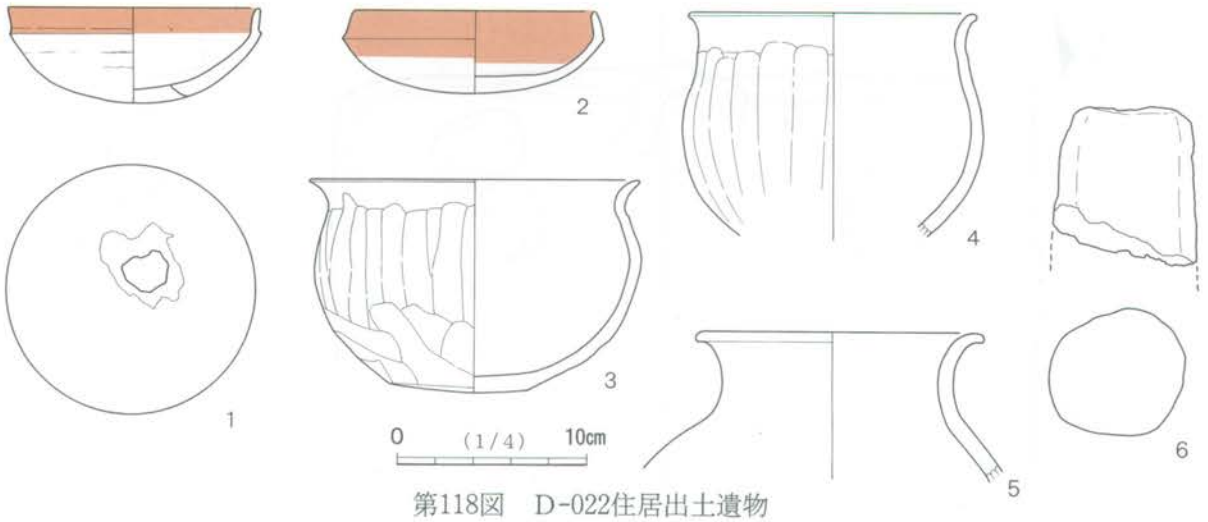


第116図　D-021住居出土遺物（2）

1・2は土師器杯である。いずれも遺存は90%以上である。1は丸底の底部から口縁部がわずかに開いて立ち上がる器形のもので、須恵器蓋の模倣と思われる。口径13.2cm、高さ5.1cmである。体底部は内外面共に丁寧なナデにより調整されるが、外面体部には輪積痕が見える。底部には外面側から穿孔されたと思われる孔がある。内外面の口縁部に赤彩が認められるが、退色が進んでいる。2は須恵器杯身の模倣杯である。口径12.8cm、高さ4.5cmである。内外面体底部のナデによる調整は比較的丁寧で、内外面口縁部を中心に赤彩が施される。3は90%が遺存する鉢である。口径17.4cm、高さ11.2cm、底径7.3cmを測る。外面のヘラケズリは上半部を縦位に調整した後、下半部を横位に調整している。胎土中には砂粒及び白色鉱物等を含んでいる。4は底部付近と口縁部の2/3を欠損する甕である。推定口径15.2cmである。5は口縁部付近のみの遺存だが、口縁部は一周している。口径15.2cmである。口縁部は口端部付近で外屈し、断面がコ字状となる。胎土中には少量の砂粒等が混入する。6は支脚である。半分以上を欠損している。径約3.5cmの円柱状を呈し、現存長は4.3cmである。



第117図　D-022住居



第118図　D-022住居出土遺物

D－０２３住居跡(第119図、図版24・79)

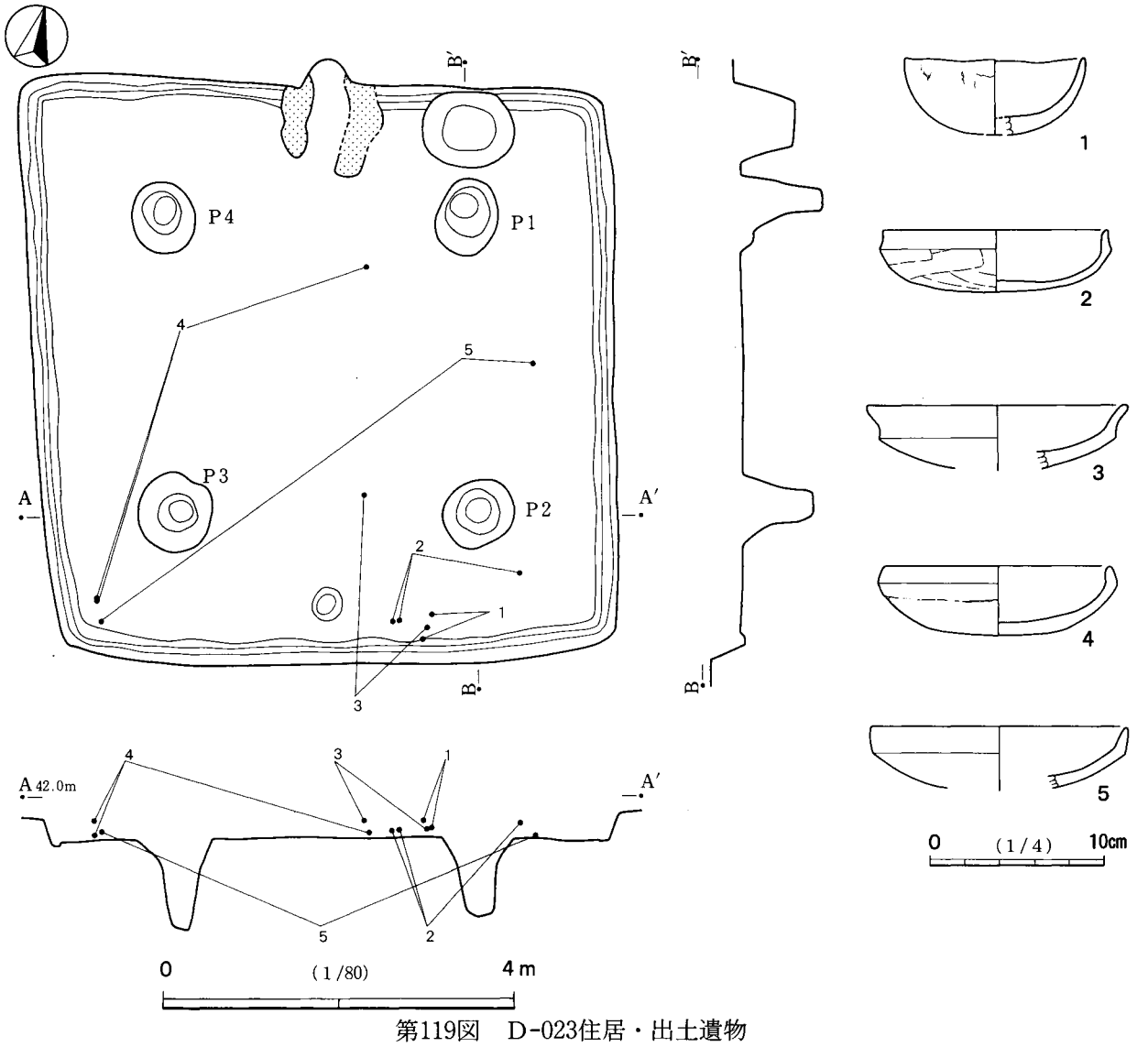
(遺　構)　D－０２２住居跡の東12mに所在する。平面形は正方形を呈し、6.7m×6.7mの規模を有する。主軸方位はN－12°－Wである。ロームへの掘り込みは30cm～35cmを測る。覆土は基本的に上下２層に分層でき、上層に暗褐色土、下層に黄褐色土が堆積している。下層には多量のロームブロックが混入している。柱穴は４本主柱穴である。Ｐ１、Ｐ２、Ｐ４は住居の対角線上に位置するが、Ｐ３はわずかに北西側にずれている。４本共に上場径80cm～90cmを測るが、深さ50cm付近から掘り方が細くなる。底面まではいずれも90cm～100cmである。出入口ピットは南壁のほぼ中央付近で、壁面から30cm内側に位置する。上場径40cm、深さ15cmとやや小さい。貯蔵穴はカマドの東側で、北壁に接するように掘られている。このため、貯蔵穴が一部の周溝を切っている。径1.0mの円形状の掘り方で、深さは65cmを測る。周溝は、上記のように貯蔵穴に一部切られるが、カマド部分を除いて一周する。

カマドは北壁中央に設けられている。袖の長さ約1.0mを測るものだが、撹乱が激しく詳細は不明である。

(遺　物)　量的には少量で、図示できたのは全て土師器杯である。１は丸底で半球形状を呈する器形の杯である。遺存は40%程で、推定口径10.3cm、高さ4.3cmである。整形は稚拙で手捏ね風である。２はやや偏平な底部から口縁部が直立する器形の杯である。体部との境の稜は弱いが、明瞭である。全体の約2/3が遺存し、推定口径12.9cm、高さ3.5cmである。調整は外面がヘラケズリ、内面がナデにより比較的丁寧に施されているが、成形は底部付近に歪みがある。３は浅い丸底の底部から口縁部が直線的に大きく開く。50%の遺存で、推定口径15.0cmを測る。４は60%の遺存で、推定口径13.0cm、高さ3.9cmである。底部はわずかに偏平となり、口縁部は内側に短く屈曲する。体底部の調整は内面ナデ、外面ヘラケズリ後ナデによるが、外面口縁部下には輪積痕が残る。５は1/4以下の遺存である。推定口径は14.7cmである。口縁部は直線的にやや開く。

D－０２４住居跡(第120・121図、図版24・79・80)

(遺　構)　D－０２３住居跡の南2.5mに所在する。平面形は正方形に近く、南北5.8m、東西5.7mの規模を有する。主軸方位はN－14°－Wである。ロームへの掘り込みは45cm～50cmで、壁はやや傾斜する。

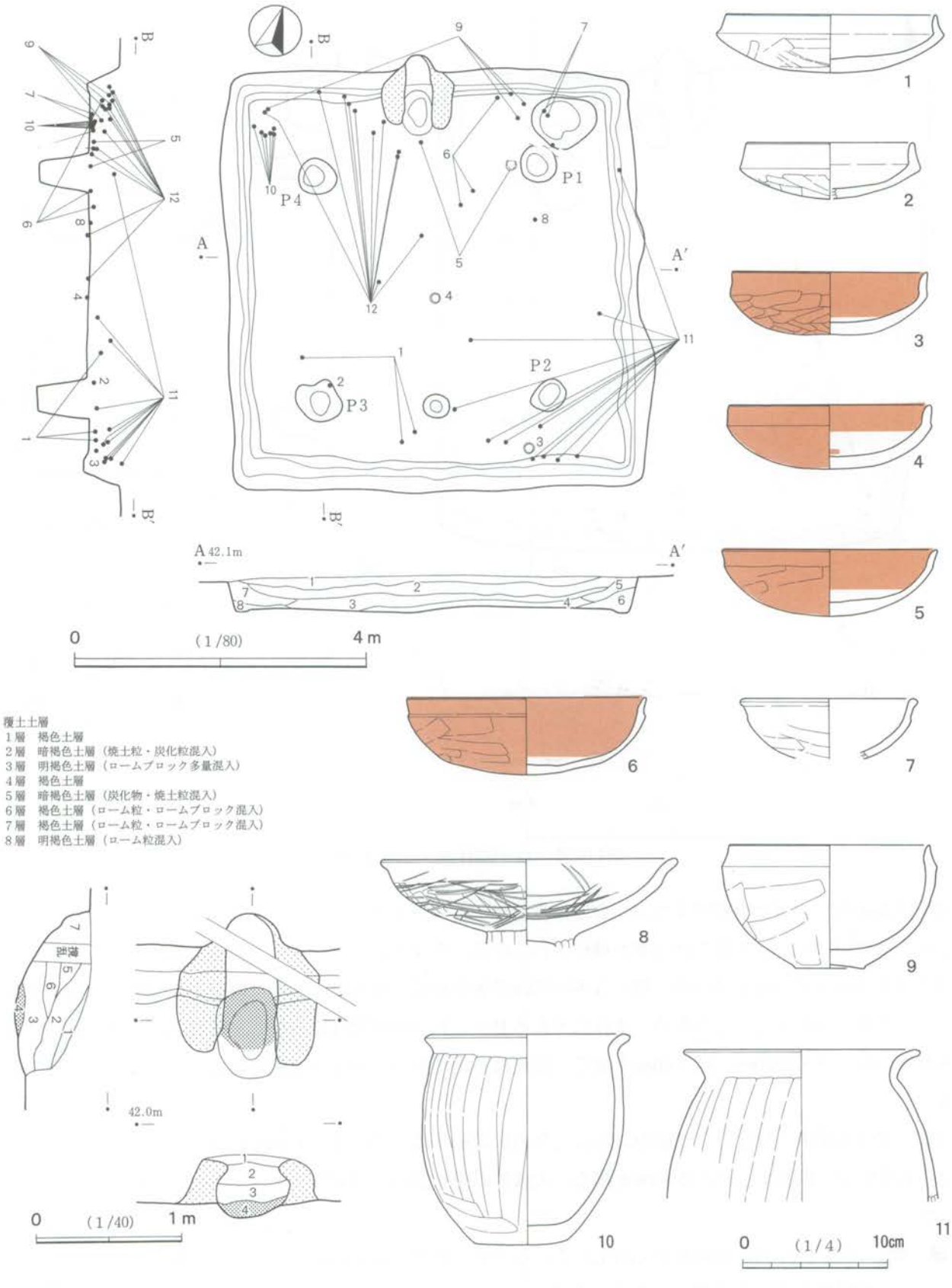


第119図　D-023住居・出土遺物

覆土は基本的に４層に分層できたが、各層に焼土粒子、ロームブロック等の混入が認められ、自然な堆積状況とは言いにくい。主柱穴は４本が検出されている。Ｐ４を除き、住居の対角線上に位置する。柱穴の深さはＰ３のみが25cmと浅いが、他の３本は70cm前後を測る。出入口ピットは南壁中央付近で、壁面よりも80cm内側に位置する。このため、主柱穴であるＰ２、Ｐ４の中間付近となる。貯蔵穴は住居北東隅に掘られている。下場径50cm、深さ60cmを測る。底面は平坦である。周溝は比較的幅広のもので、全周している。

カマドは北壁中央付近で、壁面を20cmほど半円状に掘り込んでいる。天井は崩落していたが袖の残りは比較的良好で、壁面からの長さ80cmを測る。火床部の掘り込みは10cmで、ブロック化した焼土の堆積が見られた。

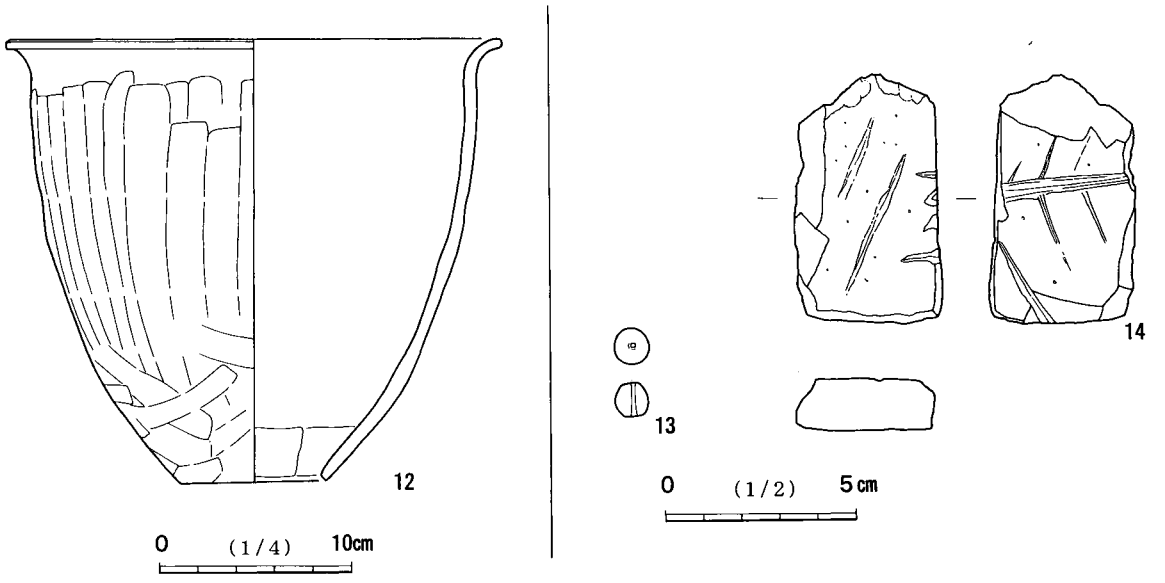
（遺　物） 床面付近から比較的多く出土している。１～７は土師器の杯である。１は浅い丸底を呈し、鋭い稜から口縁部が直立する器形のものである。60％の遺存で、推定口径14.5cm、高さ4.1cmである。体底部内面のナデは、底部の径約４cm部分を除き円を描くように施されている。２も浅い丸底を呈し、口縁部は直立する。40％の遺存で、推定口径11.8cm、高さ3.9cmである。口縁部がヨコナデ、体底部外面がヘラ



覆土土層
1層　褐色土層
2層　暗褐色土層（焼土粒・炭化粒混入）
3層　明褐色土層（ロームブロック多量混入）
4層　褐色土層
5層　暗褐色土層（炭化物・焼土粒混入）
6層　褐色土層（ローム粒・ロームブロック混入）
7層　褐色土層（ローム粒・ロームブロック混入）
8層　明褐色土層（ローム粒混入）

カマド土層
1層　黄褐色砂質土層（砂粒・焼土粒少量混入）
2層　黄褐色砂質土層
3層　赤褐色砂質土層（砂粒・焼土ブロック混入）
4層　赤褐色土層（硬質）
5層　黄白色砂質土層（灰白色砂多量混入）
6層　褐色土層
7層　赤褐色砂質土層

第120図　D-024住居・出土遺物（1）



第121図　D-024住居出土遺物（２）

ケズリ、内面がナデにより調整される。３・４は体部との境に弱い稜を有し、口縁部が直立又はわずかに外反気味に立ち上がる器形を呈する。いずれも完形で赤彩が施されており、３・４共に外面は全面、内面は３が口縁部から体部、４が口縁下部まで塗彩される。両者共に器面の調整は丁寧で、４は体底部内外面ナデ、３は外面がヘラケズリである。５・６は浅い丸底の底部から口縁部がそのまま開き気味に立ち上がる器形の杯である。遺存は５が1/3強、６がほぼ完形である。口径は５が推定で14.8cm、６が16.7cmである。高さは５が4.5cm、６が5.3cmである。いずれも内面底部を除き赤彩が施されているが、５は退色が進んでいる。また５・６共に胎土には砂粒がやや多く含まれる。７は丸底を呈し、口縁部はそのまま立ち上がる器形の杯だが、口端部は若干肥厚する。40%程の遺存で、推定口径12.2cm、高さ(4.0)cmとやや小振りである。焼成は甘く、器面の一部に剥離が目立つ。胎土は白色砂粒の他には混入物は見られない。８は高杯で、杯部の70%が遺存する。杯部は作りが浅く、口縁部は外反して開く器形を呈する。口径は19.5cmを測る。口縁部にヨコナデが施される他、内外面共に丁寧なミガキが加えられる。特に外面は念入りで、一部光沢がある。焼成は極めて良好である。９は約50%が遺存する鉢である。口径13.9cm、高さ8.5cm、底径は推定で4.8cmを測る。体部外面はやや粗いヘラケズリ、内面はナデにより調整される。10は80%が遺存する小型甕である。口径14.3cm、高さ14.3cm、底径6.5cmを測る。調整は口縁部のヨコナデ後、胴部外面が縦位のヘラケズリ、内面がやや粗いヘラナデを施している。11は推定口径16.4cmを測る甕である。口縁部はくの字に近く外屈する。胴部の器壁は比較的薄く、胎土中には砂粒を含む。胴部内面のナデ調整はやや粗い。12は全体の約60%が遺存する甑である。推定口径26.0cm、高さ23.3cm、底径7.7cmを測る。胴部は少し丸みがあり、口縁部は大きく外反する器形を呈する。胎土中には白色砂粒等が含まれる。13は土製丸玉である。径、厚さ共に９mm、孔径２mm～３mmを測る。重さは0.82ｇである。14は凝灰岩製の砥石である。現存長6.6cm、幅3.7cm、厚さ1.4cmである。表裏面に溝状の研磨痕が残る。

Ｄ－０２５住居跡(第122・123図、図版24・80・81)

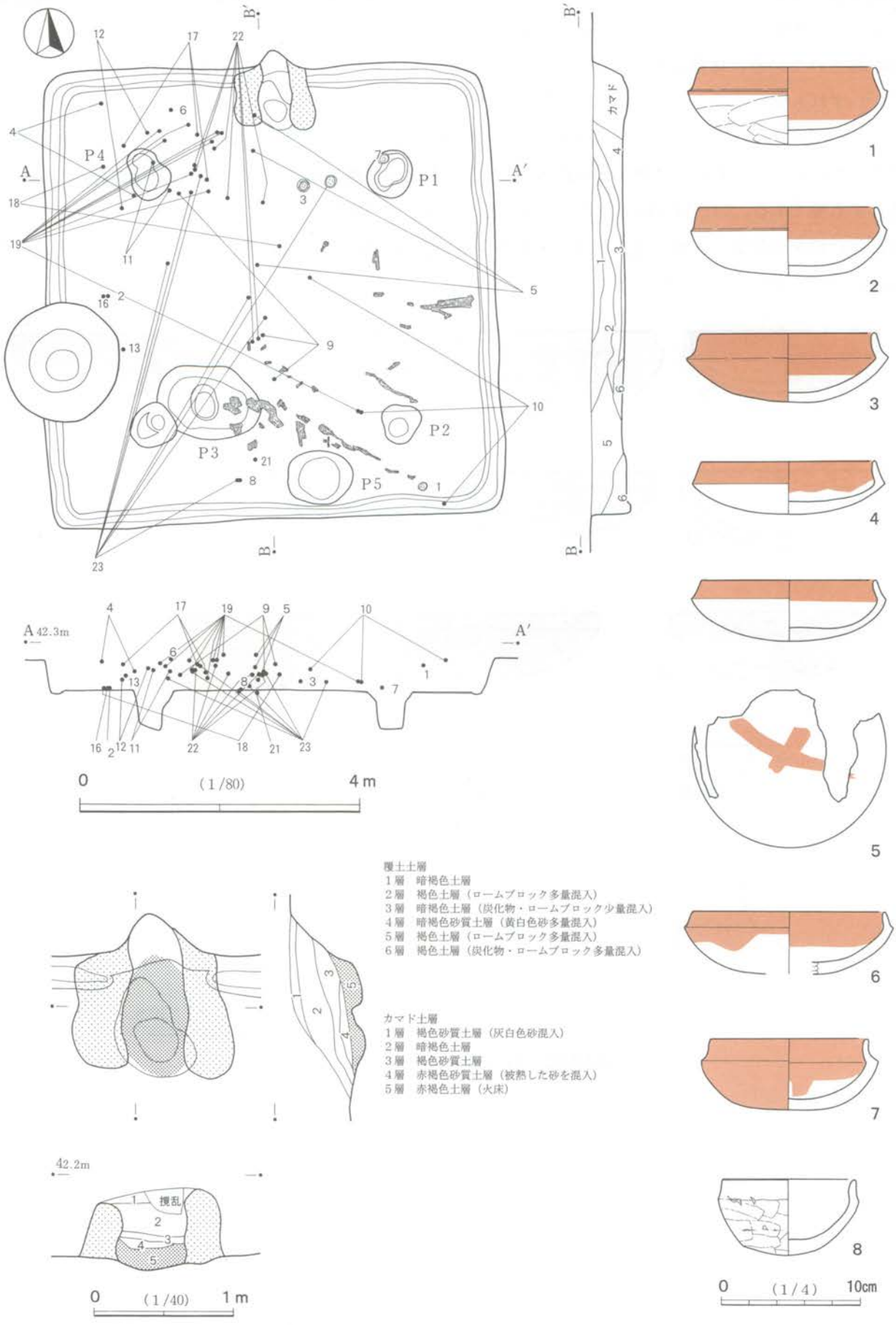
（遺　構）　Ｄ－０２２住居跡の南９ｍに所在する。平面形は正方形を呈し、6.5ｍ×6.5ｍの規模を有す

る。主軸方位はほぼ真北のN－1°－Wである。ロームへの掘り込みは50cm～60cmを測る。覆土は6層に分層できた。各層共にロームブロック、砂粒等を顕著に混入しており、自然な堆積状況とは言いがたい。柱穴は4本が検出されている。いずれも住居の対角線上に位置するが、それぞれ下場は2か所ずつを有している。方向的にも全て対角線上であることから、柱穴間の拡張又は縮小による掘り直しが行われたものと考えられる。柱穴深度は外側でP1＝51cm、P2＝72cm、P3＝60cm、P4＝52cm、内側でP1＝40cm、P2＝53cm、P3＝70cm、P4＝52cmである。貯蔵穴は南壁中央よりもやや東寄りに掘られている。上場で90cm×75cmの規模を測り、深さは60cmである。周溝はカマド部分を除き一周する。

カマドは北壁中央に設けられている。天井は崩落しているが遺存状態は良好で、袖長90cm、袖残存高55cmを測る。火床部底面は手前と奥の2か所にあり、いずれも多量の焼土が残存していた。

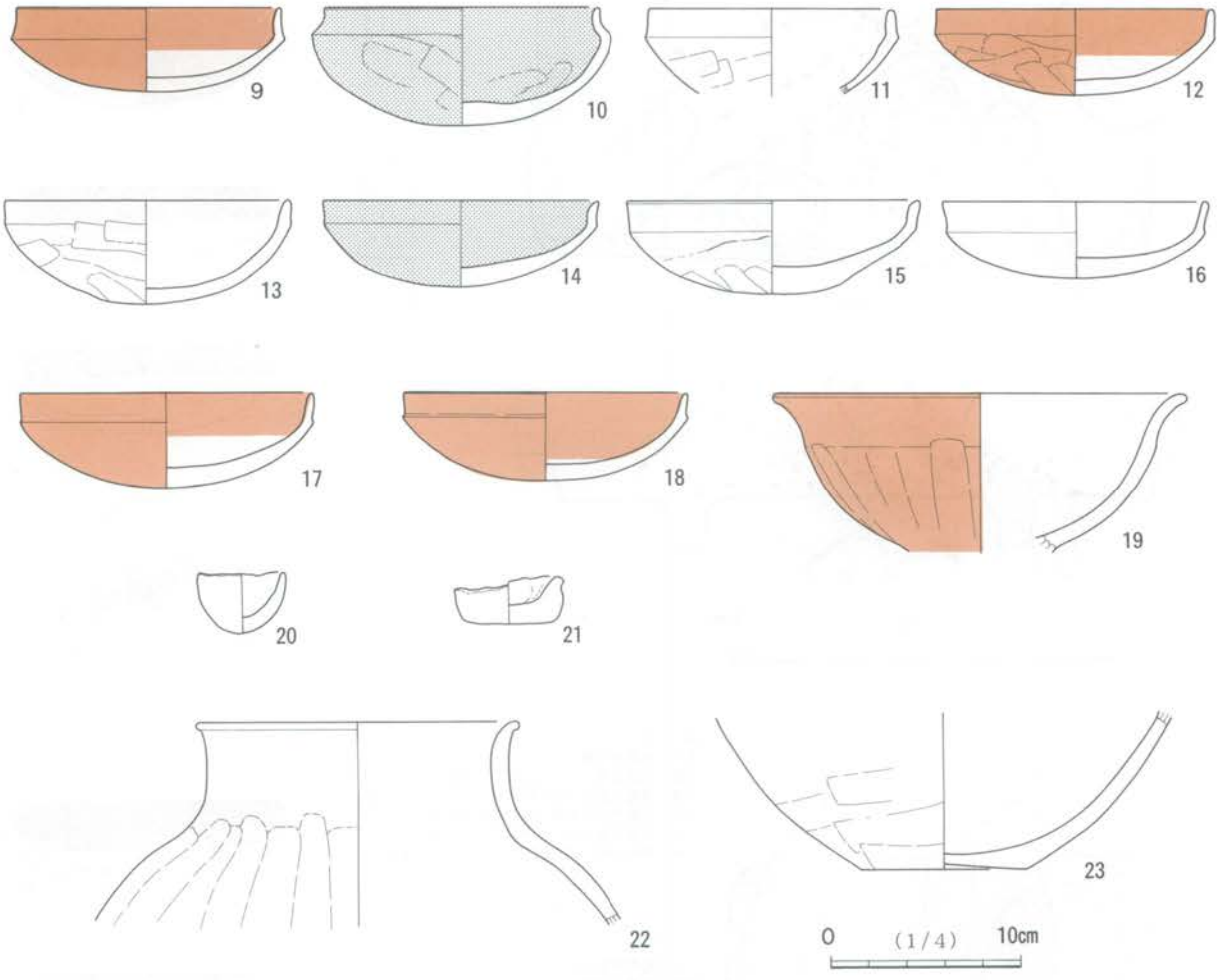
（遺　物） 土師器杯が多く、床面と床面から浮いた状態で出土したが、割合的には浮いた状態が多い。

1～18は杯で、7までは須恵器杯身模倣の杯と思われる。1～6は体部との境に明瞭な稜を有し、口縁部がやや内傾して立ち上がるものである。3・4の口縁部は他よりもわずかに肥厚する。遺存は1が全体の40%、2が80%、3が100%、4が30%、5が70%、6が30%以下である。口径は1が(12.6)cm、2が12.8cm、3が12.5cm、4が(12.4)cm、5が(12.5)cm、6が(13.7)cmである。高さは1が5.7cm、2が4.9cm、3が4.8cm、4が3.8cm、5が4.4cm、6が(4.4)cmである。6点共に口縁部の内外面を中心に赤彩が施されているが、5の見込部分には図の右から左へと、上から下の方向に交差する朱筆が見られる。7は口端部の一部を欠損するが、ほぼ完形の杯である。口径11.3cm、高さ5.1cmである。体部の作りは比較的深いが、底部はわずかに偏平となる。口縁部は直立している。全体に器壁が厚く、重量感がある。外面の全面と内面の口縁下部まで赤彩が施されている。調整は丁寧で、口縁部がヨコナデ、体底部内面ナデ、外面ヘラケズリ後ナデである。8は60%の遺存で、推定口径9.5cm、高さ4.4cmを測る。小型で深い作りのもので、椀といえるかもしれない。体部外面はヘラケズリによって調整されているが、口縁下部付近に輪積痕が残っている。色調は明褐色を呈す。9は浅い丸底の底部を有し、口縁部がわずかに外反して直立する器形の杯である。外面の全面と内面口縁下部まで赤彩が施されている。10は30%程の遺存である。推定口径14.4cm、高さ6.2cmである。体部との境の稜は弱いが肩のように張り出し、口縁部は直立する。体底部の調整は内外面共に粗く、内面はヘラナデ、外面はヘラケズリが施される。また、全面に黒色処理が施されている。11・12は弱い稜を有し、口縁部が直立する器形の杯である。11は1/4以下の遺存で、体部の作りはやや深い。推定口径は12.7cmである。12は30%の遺存で、推定口径14.6cmである。体底部内面はヘラナデ、外面はヘラケズリにより調整される。外面全面と内面の口縁下部まで赤彩が施される。胎土には砂粒を多く含んでおり、器面はザラつく。13～18は丸底の底部からそのまま口縁部が立ち上がる器形を呈し、須恵器蓋の模倣杯と思われる。遺存は13が60%、14が70%、15が100%、16が40%、17が40%、18が30%である。口径は13が14.8cm、14が14.5cm、15が15.4cm、16が(13.8)cm、17が(15.3)cm、18が(15.1)cmである。高さは13が5.5cm、14が4.5cm、15が4.9cm、16が4.0cm、17が5.0cm、18が4.6cmである。13の内面はヘラケズリ後ナデにより調整されるが、ヘラケズリ痕を整形しきれていない。14は内外面共にヘラケズリ後ナデにより調整される。胎土には砂粒を多く含み、全面に黒色処理が施されている。15は全体に器壁が厚いが、底部は特に厚い作りである。体底部内面の調整は比較的丁寧なナデによるが、外面のヘラケズリは粗く、輪積痕上をなぞるように沈線状の調整痕が残る。また成形も上方から見ると、やや楕円形を呈するように歪んでいる。16の底部内面はヘラナデにより調整される。17・18はいずれも外面全面と内面の



第122図　D-025住居・出土遺物（1）

口縁下部付近まで赤彩が施されている。体底部外面はヘラケズリ後ナデにより調整される。胎土・焼成共によく似た土器である。19は推定口径21.9cmを測る大型の高杯である。遺存は杯部の60%で、外面には赤彩が施されている。体部に若干丸みがあり、口縁部が外反する器形を呈する。20・21は手捏ね土器である。いずれも完形に近く、口径は20が4.5cm、21が5.8cmである。高さは20が3.0cm、21が2.2cmである。20の作りは丁寧で、外面ヘラナデ、内面指ナデにより調整される。21の内面は指押さえ状の痕跡が残るが、外面は整形もよく、あるいは甕などの底部として作られた可能性が考えられる。22は口縁部付近の60%が遺存する甕である。口径17.0cmを測る。胴部の張りが強く、口縁部は直立し口端部が外屈する。胎土中には白色砂粒を含むが、大粒は見られない。黄褐色系の色調を呈する。23は底径8.8cmの甕底部である。外面底部にも丁寧なヘラケズリが施されている。

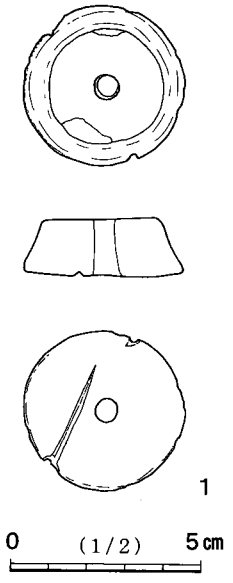


第123図　D-025住居出土遺物（2）

2　グリッド出土遺物

表面採集遺物(第124図、図版81)

1は滑石製の紡錘車である。上面(図の下側)の径4.2cm、下面の径3.0cm、高さ1.6cmを測り、孔径は6mmである。上面にかなり大きな傷跡が観察されるが、故意につけられたものかどうかは不明である。重さは39.8gである。



第124図　表面採集遺物

第４節　中近世

１　遺　　構

（１）中近世の遺構の概要

古宿・上谷遺跡の中近世遺構は大きくＡ地区、Ｂ地区北、Ｂ地区南、Ｃ地区、Ｄ地区の計５地区に分布する。

Ａ地区は東、北、南の各方向から谷が進入し、台地上の平坦面には縄文時代の遺構が密集するが、縁辺部では逆に中近世の遺構が圧倒的に多くなる。特に、この地区の南端には谷に向かって17世紀から18世紀代の掘立柱建物跡（Ｈ－10・11）を中心とする屋敷遺構が存在する。

Ｂ地区北ではほとんどの遺構が17世紀から18世紀代の近世に属する。そこには掘立柱建物跡、井戸、土坑など近世初期の屋敷を構成する遺構群が認められる。また、南端には中世の地下式坑が規則的に谷部に向かって開口して並んでいる。

Ｂ地区南には中世後期から近世初頭の土坑墓群で構成される区画が存在する。この区画はほぼ南北に３等分できる。これを北から順にａ地点、ｂ地点、ｃ地点と呼称する。Ｂ地区南は東側から谷が入り込み南東側に緩やかに傾斜する地形で、最も高い北西隅で、標高41.6m、最も低い南東隅で標高39.2m以下となる。この地区はｂ地点以南になるとロームの堆積が非常に薄くなり、東端では確認面から10cm下がると粘土質の地山となる。土坑墓の埋土は分層することはほとんどできず、また土坑墓間の切り合い関係もまったくわからない。実際の遺構は図面で見る以上に複雑である。ｂ地点、ｃ地点は傾斜面を方形に区画して、南東に開けた平坦面を造り出している。しかもその区画は方位に対して整然としている。ただ、この場合区画に沿った溝などはまったく検出しておらず、県内で多く見られる溝を伴う台地整形区画とはやや様相が異なる。一方ａ地点は最も標高が高い地点となるが、特に平坦面を造り出しているとは言えない。また、地下式坑について言えばａ地点とｂ地点との境界に１基存在するだけで、極端に少ない。

まずａ地点は方形または不整形の遺構が傾斜に沿って階段状に検出された。これらはいずれも底面が平坦で、特に中央のものは方形の竪穴状を呈する。南端の方形の土坑墓はｂ地点から派生したものととらえることができよう。

ｂ地点は方形または円形の土坑墓が非常に多く、遺構数の大半を占め、墓域の中心となる地点にあたる。Ｐ－298以東には遺構は検出されていない。最東端の最も標高の低い地点に井戸遺構（Ｐ－221・213Ｂ）が存在する。その井戸には上位より自然に水が流れ込むように浅い溝が併設されていた。この井戸が墓域に降った雨水を溜めるものであることがわかる。また、柱穴状の小ピットが並ぶ所があるが、一つの並びのみで他の方向の並びのピットが確認できない。南東部には小形のピットが並び、掘立柱建物の柱穴の組み合わせになるものがありそうだが、確実なものはない。

ｃ地点は明瞭な方形の土坑墓は少なく、対照的に小型のピットが多い。そのうちの直線的に等間隔に並ぶものは小規模な掘立柱建物跡と考えられるが、ｂ地点同様四方向完全にはまわらない。

Ｂ地区南から南南西の方向100mに位置するＣ地区にはＢ地区南とは全く別の中世の墓域がある。この地点は東側から谷が入り込み、その谷の先端部で標高41mを測る。墓域は東西40m、南北60m以上で、本調査範囲外にまで展開すると考えられるが、本調査区の遺構の密度から見て、この地点が主体となることは明瞭である。この地区はやや東側に傾斜しているものの平坦に近く、特に墓域として台地を区画整形し

てはいない。遺構の分布状況を見ると火葬施設(火葬墓)が方形の小形の土坑群を取り囲むように周縁に配置されている。その内側には粘土貼土坑が散在し、土坑群と切り合っている。地下式坑は墓域の東、北、西側に展開するが、入口部分の方向は不規則である。また、墓域の西端に方形土坑を伴う掘立柱建物跡が1軒以上存在する。墓とは直接関係ない方形の大形の竪穴状遺構は墓域の外縁よりも更に外側に展開するように見受けられる。

D地区はC地区の南側に隣接するが遺構は希薄で、北側に不整形の土坑が1基、南端には土坑が3基、溝が2条見られるのみである。南端の近世土坑墓(P－129)からは人骨と寛永通寶が6点出土した。

以上5地区の中近世に属する遺構は掘立柱建物跡12棟以上、地下式坑17基、井戸8基、粘土貼土坑11基、火葬施設(火葬墓)8基、土坑313基以上、溝30条を数える。地区ごとに分類すると下の表のようになる。

第19表　中近世遺構数

地区	掘立柱建物跡	地下式坑	井戸	粘土貼土坑	火葬施設	土坑(墓)	溝
A	4		1			90以上	5
B北	6	7	1	3		40以上	17
B南	2？	1	4	1		120以上	
C	2以上	9	2	7	8	60以上(62)	6
D						3	2
合計	12以上	17	8	11	8	313以上	30

(2)掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は「H－」の記号を先頭に付加している。B地区南の2様については柱穴状の集合が2か所に見られるが土坑墓と切り合っているため組合せは、はっきりしない。

H－01(第128図)

B地区北M14－82グリッドに位置する。規模は梁行3間(4.1m)×桁行3間(4.3m)のほぼ正方形である。長軸方位はN－94°－Eで面積は17.63㎡になる。北側桁行の柱間寸法は1.3m～1.6m、西側梁行の柱間寸法は1.4mを測る。柱穴は平面形態が正円で、断面形態は逆台形となる。一見してH－02からH－13の柱穴形態と異なり、場合によっては竪穴住居と同じ古墳時代後期に属するものかもしれない。

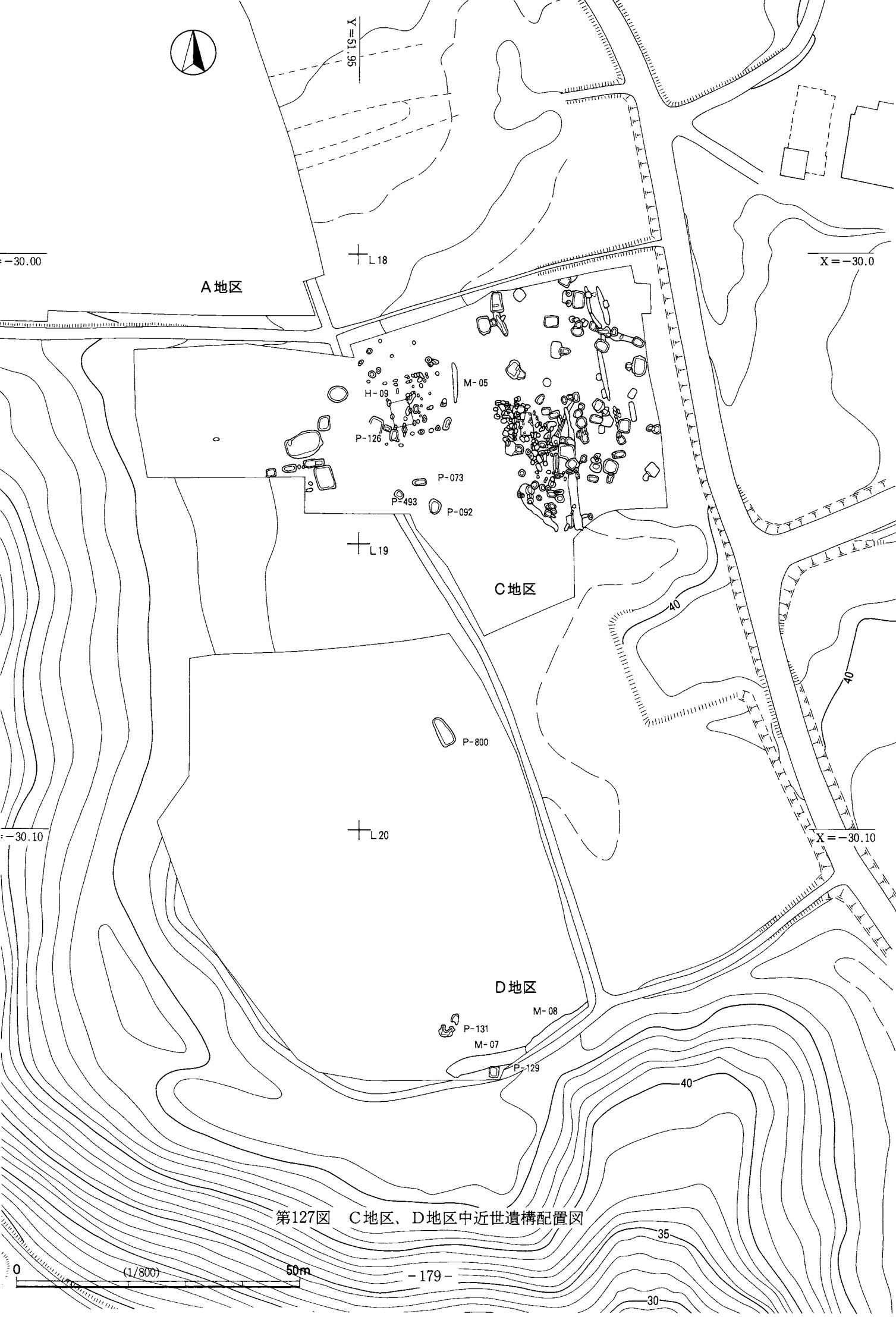
H－02(第128・173図)

B地区北M15－17グリッドに位置する。すぐ北側にP－173・174があり、これらと関連する遺構である。掘立柱建物跡を構成する主柱穴の他に内部に数基のピットがあるが、これを組み合わせて、総柱式の掘立柱建物跡と考えるのにはやや難がある。規模は梁行2間(1.7m)×桁行3間(3.6m)である。長軸方位はN－101°－Eで、面積は6.12㎡になる。北側桁行の柱間寸法は1.1m～1.4m、東側梁行の柱間寸法は0.7m～0.9mを測る。柱穴は浅い円筒形又は擂鉢状を呈しているが、掘方に余り規則性が見られない。簡易な建物であった可能性が高い。

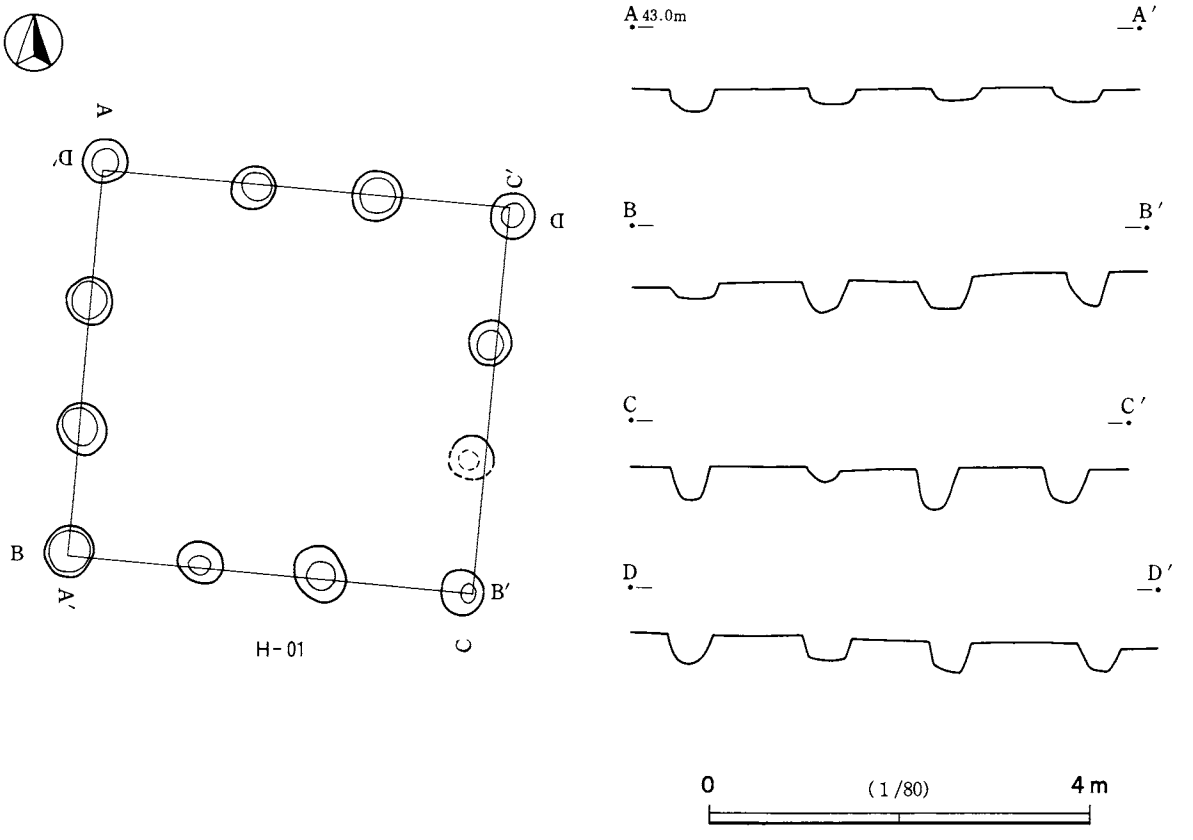
H－03(第129・173図、図版27)

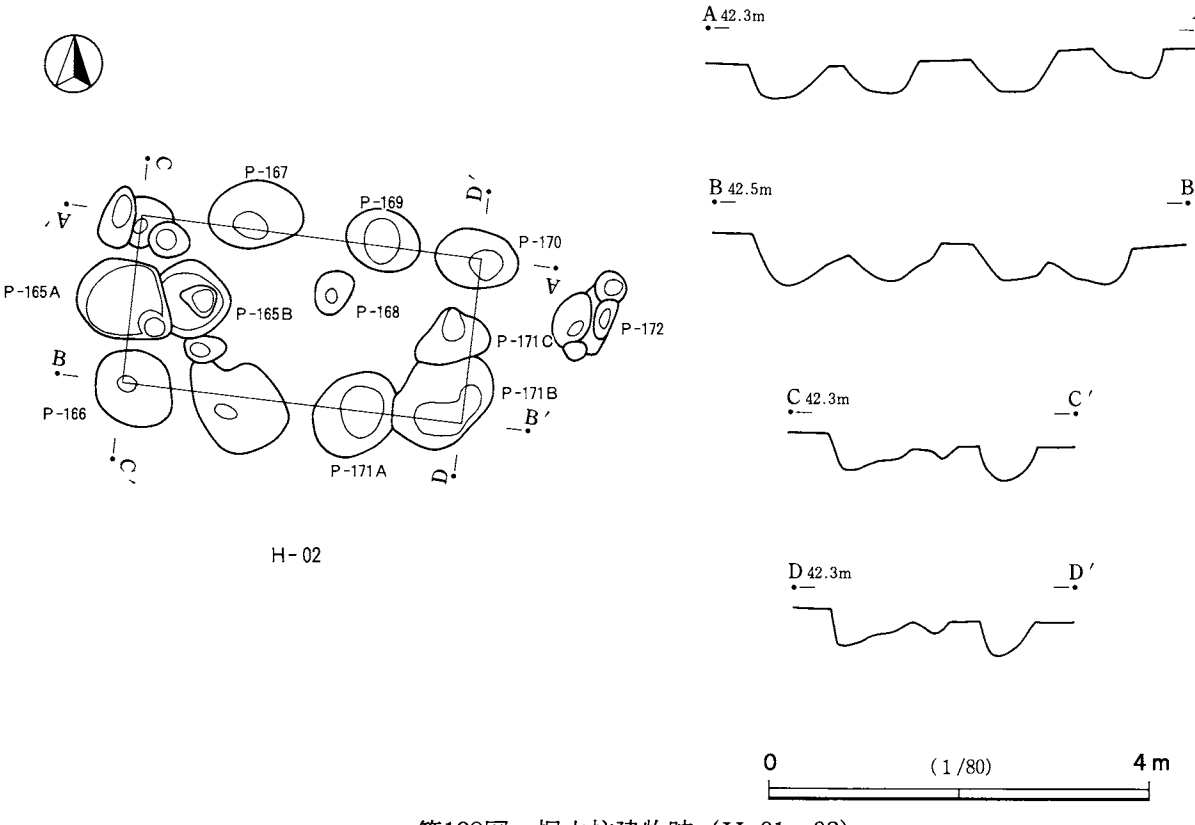
第125図　A地区中近世遺構配置図

第126図　B地区中近世遺構配置図

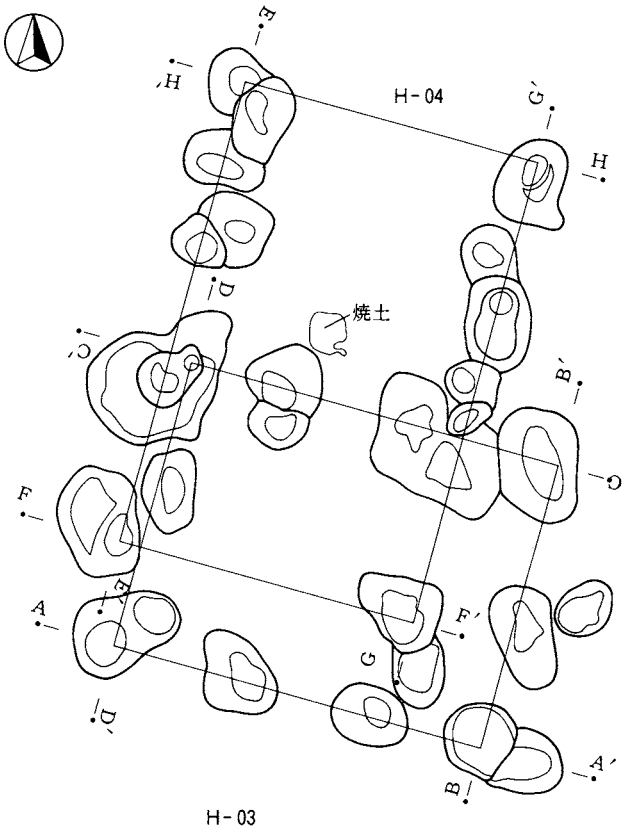


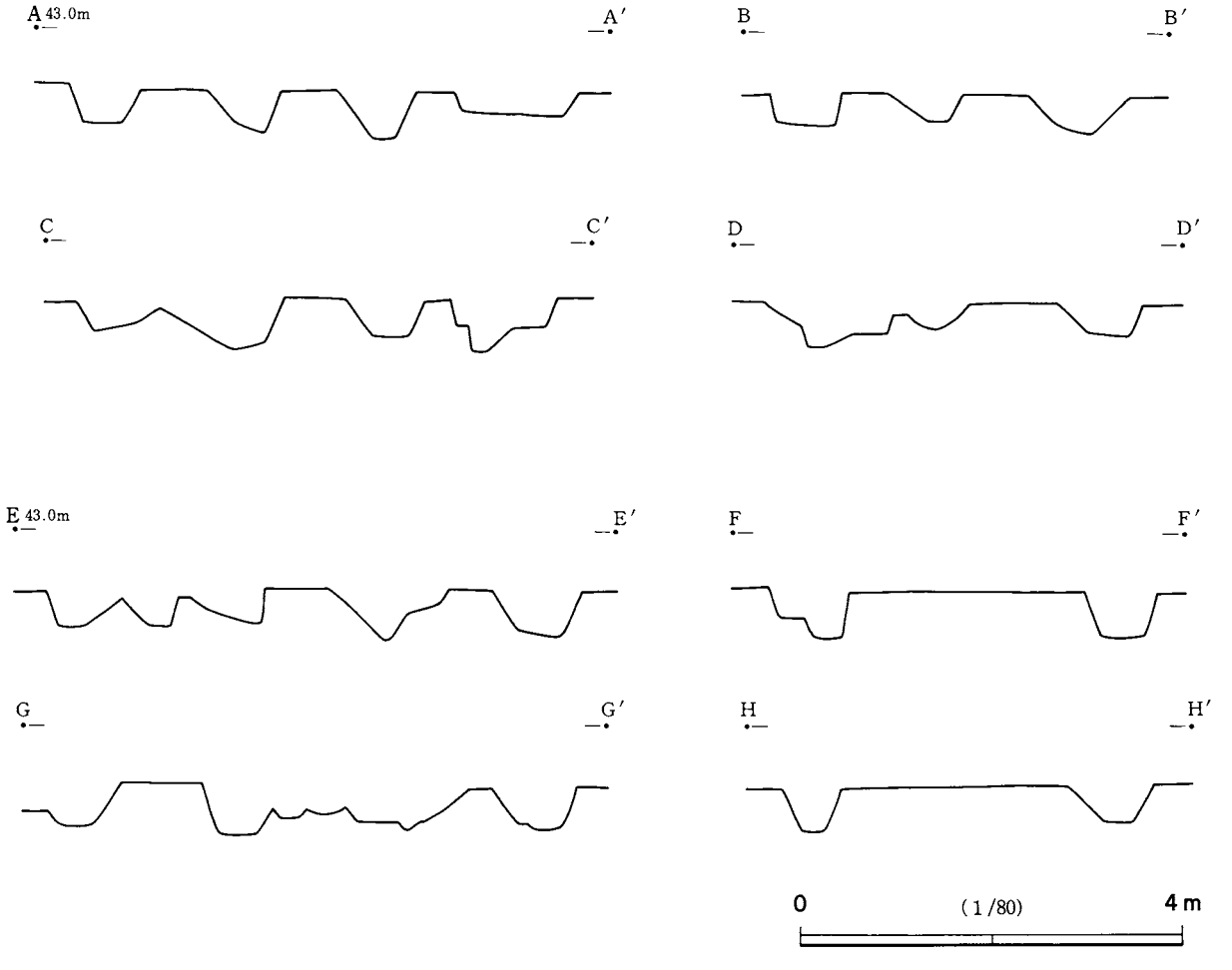
第127図　C地区、D地区中近世遺構配置図





第128図　掘立柱建物跡（H-01・02）





第129図　掘立柱建物跡（H-03・04）

B地区北M15－05グリッドに位置する。H－04とほぼ主軸が直交し、なおかつ重複するが、新旧関係は不明である。規模は梁行２間(3.0m)×桁行３間(4.0m)である。長軸方位はN－105°－Eで、面積は12.0㎡になる。北側桁行の柱間寸法は1.2m～1.6m、東側梁行の柱間寸法は1.3mを測る。柱穴の掘方は底面が楕円形もしくは不整形であるが、上端は朝顔状に開いた形状になる。

H－04(第129・173図、図版27)

B地区北M15－05グリッドに位置する。H－03とほぼ主軸が直交し、なおかつ重複するが、新旧関係は不明である。規模は梁行１間(3.2m)×桁行３間(5.0m)である。長軸方位はN－15°－Eで、面積は16.0㎡になる。東側桁行の柱間寸法は1.5m～1.7mを測る。柱穴の掘方はH－03同様底面が楕円形もしくは不整形であるが、上端は朝顔状に開いた形状になる。

H－05(第130・173図、図版27)

B地区北M14－87グリッドに位置する。H－06・07と重複する。遺構間の新旧関係は不明である。西端でP－801と重複するが、P－801が埋没してから、その覆土中に柱穴が掘り込まれていることから、H－05が新しいことがわかる。規模は梁行１間(4.0m)×桁行３間(7.4m)である。長軸方位はN－101°－Eで、面積は29.6㎡になる。北側桁行の柱間寸法は2.2m～2.6mを測る。柱穴の掘方は東西方向に細長い長方形で、東側または西側に１段の段差を有する。H－06・07を含めて遺構群の中心となる施設である。

H－06(第130・131・173図、図版27)

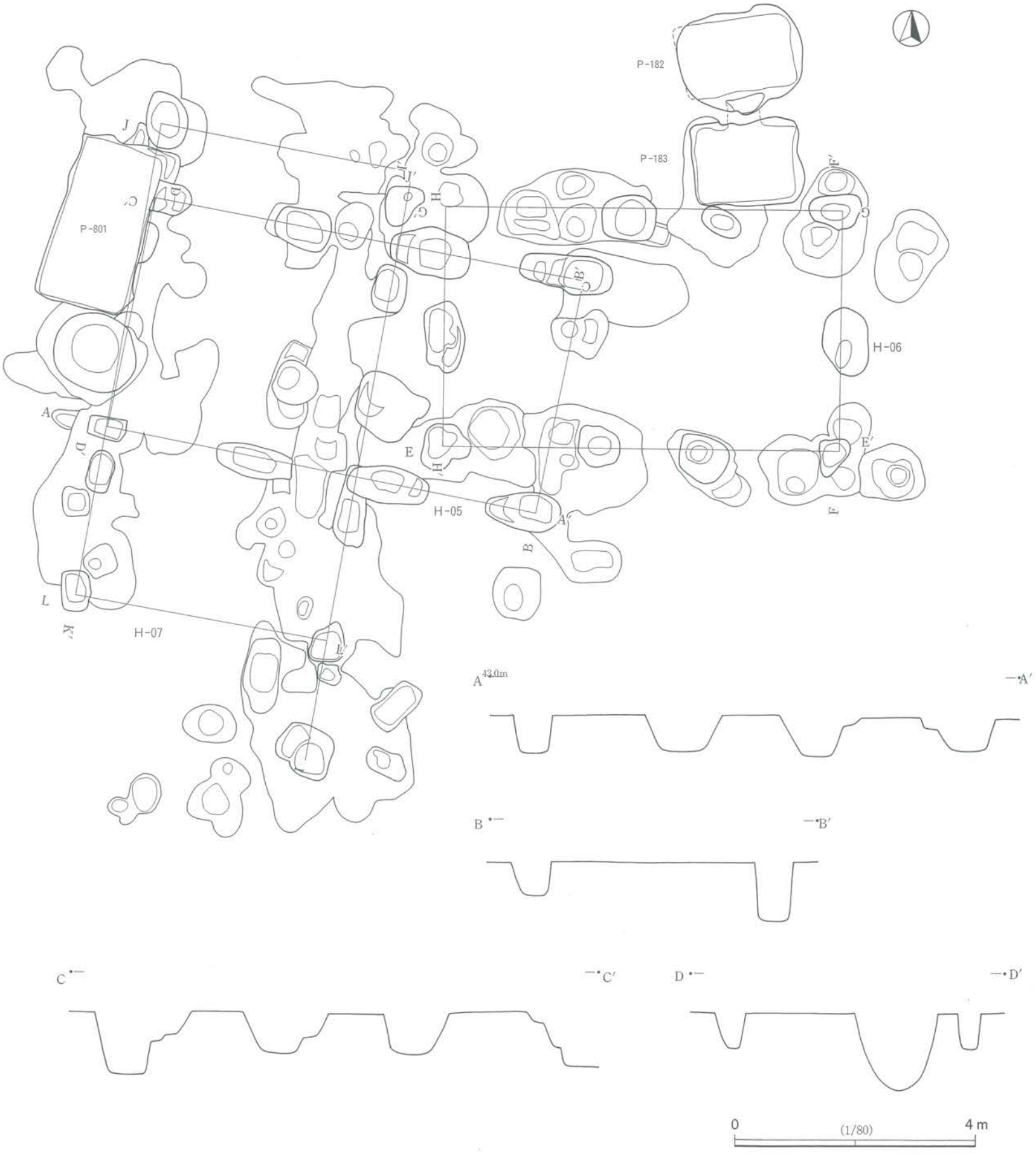
B地区北M14－98グリッドに位置する。H－05・07と重複する。規模は梁行２間(4.0m)×桁行３間(6.6m)である。長軸方位はN－91°－Eで、面積は26.4㎡になる。東側桁行の柱間寸法は1.6m～2.2m、南側梁行の柱間寸法は1.6m～2.7mを測る。柱穴の掘方は底面が楕円形もしくは隅丸方形であるが、上端は朝顔状に開いた形状になる。H－05・07を含めて遺構群の中心となる施設である。また、地下式坑P－182・183が埋没した後、その覆土を切って柱穴が掘られているので、その上限を17世紀半ば以降すなわち、17世紀末頃のものと推定される。

H－07(第130・131・173図、図版27)

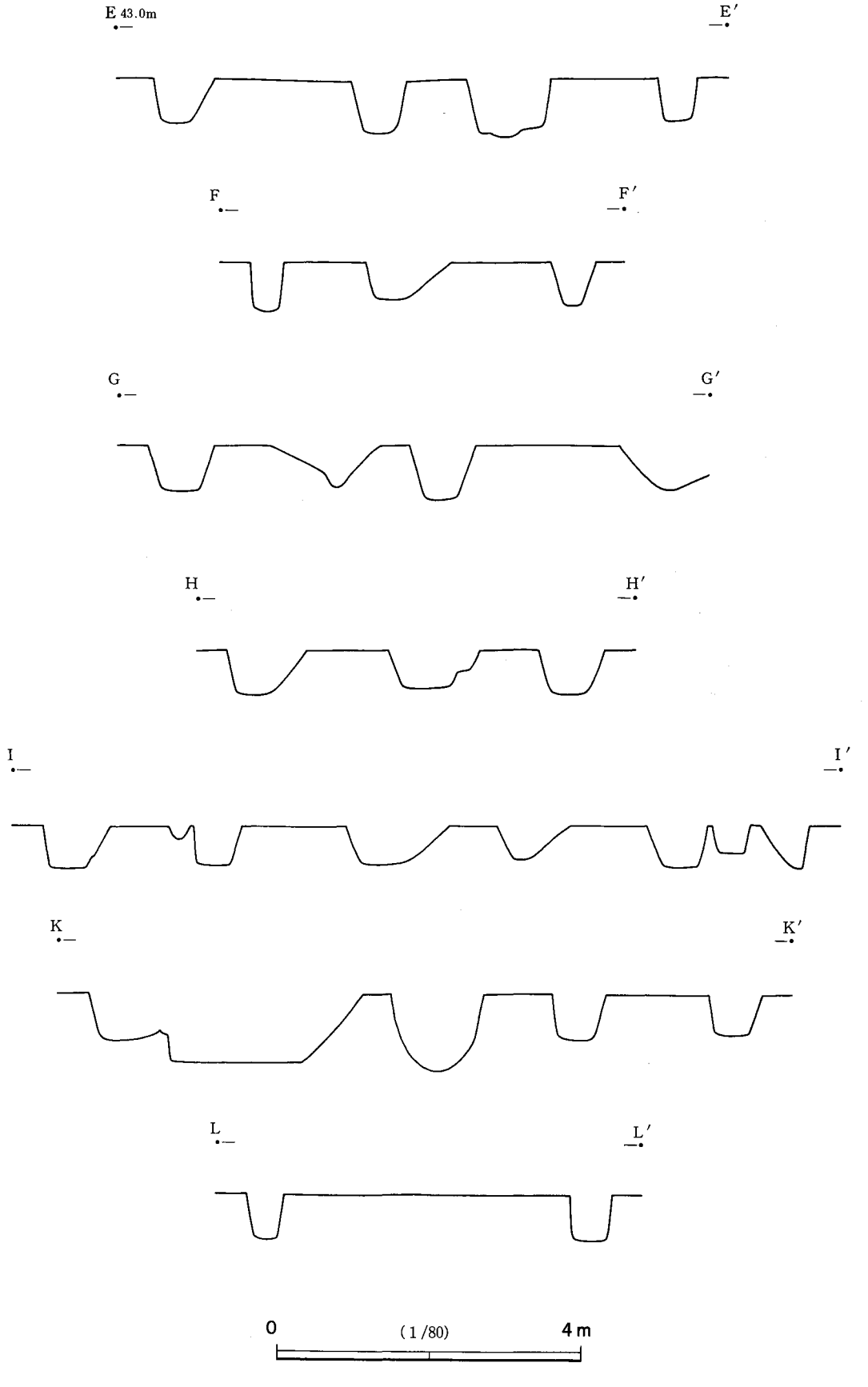
B地区北M14－87グリッドに位置する。H－05・06と重複する。規模は梁行１間(4.2m)×桁行３間(8.0m)である。長軸方位はN－10°－Eで、面積は33.6㎡になる。東側梁行の柱間寸法は2.0mを測る。柱穴の掘方は南北方向にやや細長い長方形である。H－05・06を含めて遺構群の中心となる施設で、その中でも最も面積が大きい。南東端の柱穴から南側に集中する柱穴群のうち１基はH－07の延長線上にあり、関連する遺構と考えられる。

H－08(第132・172図)

C地区L18－55グリッドに位置する。東側で方形の竪穴状遺構と重複するが、新旧関係ははっきりしない。周辺には多くの柱穴があるが、組み合わせが推定できるのはH－08のみである。規模は梁行１間(2.2



第130図　掘立柱建物跡（H-05・06・07）



第131図　掘立柱建物跡（H-06・07）

m)×桁行３間(4.9m)であったと考えられる。長軸方位はＮ－97°－Ｅで、面積は10.78㎡になる。北側桁行の柱間寸法は1.3m、西側梁行の柱間寸法は2.2mを測る。柱穴の掘方は東西方向に細長い楕円形を呈する。この掘立柱建物跡と交差するように南北方向に柱穴が列をなす。この方向の桁をもつ掘立柱建物跡が存在した可能性がある。

Ｈ－０９(第133図、図版29)

Ｃ地区Ｌ18－51グリッドに位置する。規模は梁行１間(3.4m)×桁行２間(4.5m)である。長軸方位はＮ－165°－Ｅで、面積は15.3㎡になる。西側桁行の柱間寸法は２m～2.5mを測る。柱穴の掘方は底面が楕円形もしくは不整形であるが、上端はやや開いた形状になる。このＨ－09と斜めに交差するように柱穴の列が確認できるが、対応する柱穴列が存在しない。周辺の柱穴を取り込んで、より大きな規模の掘立柱建物跡になる可能性がある。

Ｈ－１０(第134図、図版25)

Ａ地区Ｊ18－06グリッドに位置する。すぐ南側には谷が迫る南側に緩やかに傾斜した地点である。掘立柱建物を建築するに当たって地山を平坦に整形している。柱穴が規則的に並びかつかなり集中しているが、組み合わせがはっきりしたものはＨ－11を含み２軒のみである。Ｈ－11と重複し、梁の方向がほぼ直交する。規模は梁行１間(3.3m)×桁行３間(5.8m)である。長軸方位はＮ－94°－Ｅで、面積は19.14㎡になる。北側桁行の柱間寸法は1.8m～2.1mを測る。柱穴の掘方は底面が楕円形もしくは不整形であるが、上端は朝顔状に大きく開いた形状になる。この掘立柱建物の北、東端の柱穴(Ｐ－483)から寛永通寶２点が出土した。１点はいわゆる古寛永(1639～1659)で、他は文銭と呼ばれる新寛永(1668～1683)である。その結果掘立柱建物の建築は17世紀後半になると考えられる。

Ｈ－１１(第134・135図、図版25)

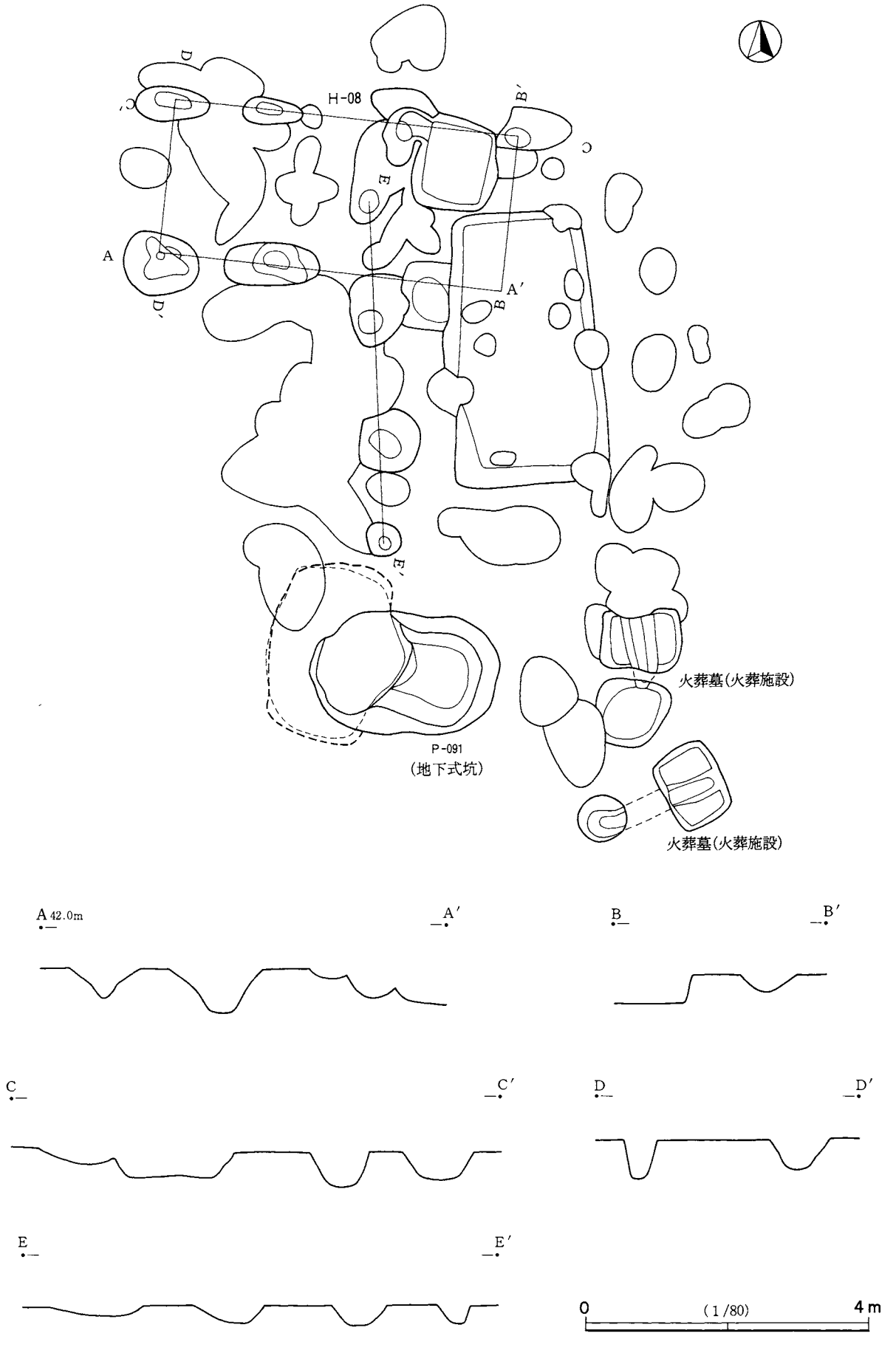
Ａ地区Ｊ18－06グリッドに位置する。Ｈ－10と梁の方向がほぼ直交し、傾斜の方向に長くなる。南側は斜面のため完全には調査していないが、規模は梁行１間(2.8m)×桁行３間と考えられる。長軸方位はＮ－３°－Ｅで、面積は推定11.2㎡になる。東側桁行の柱間寸法は2.0mを測る。柱穴の掘方は底面が円形もしくは不整形であるが、上端は朝顔状に大きく開いた形状になる。

Ｈ－１２(第136図、図版29)

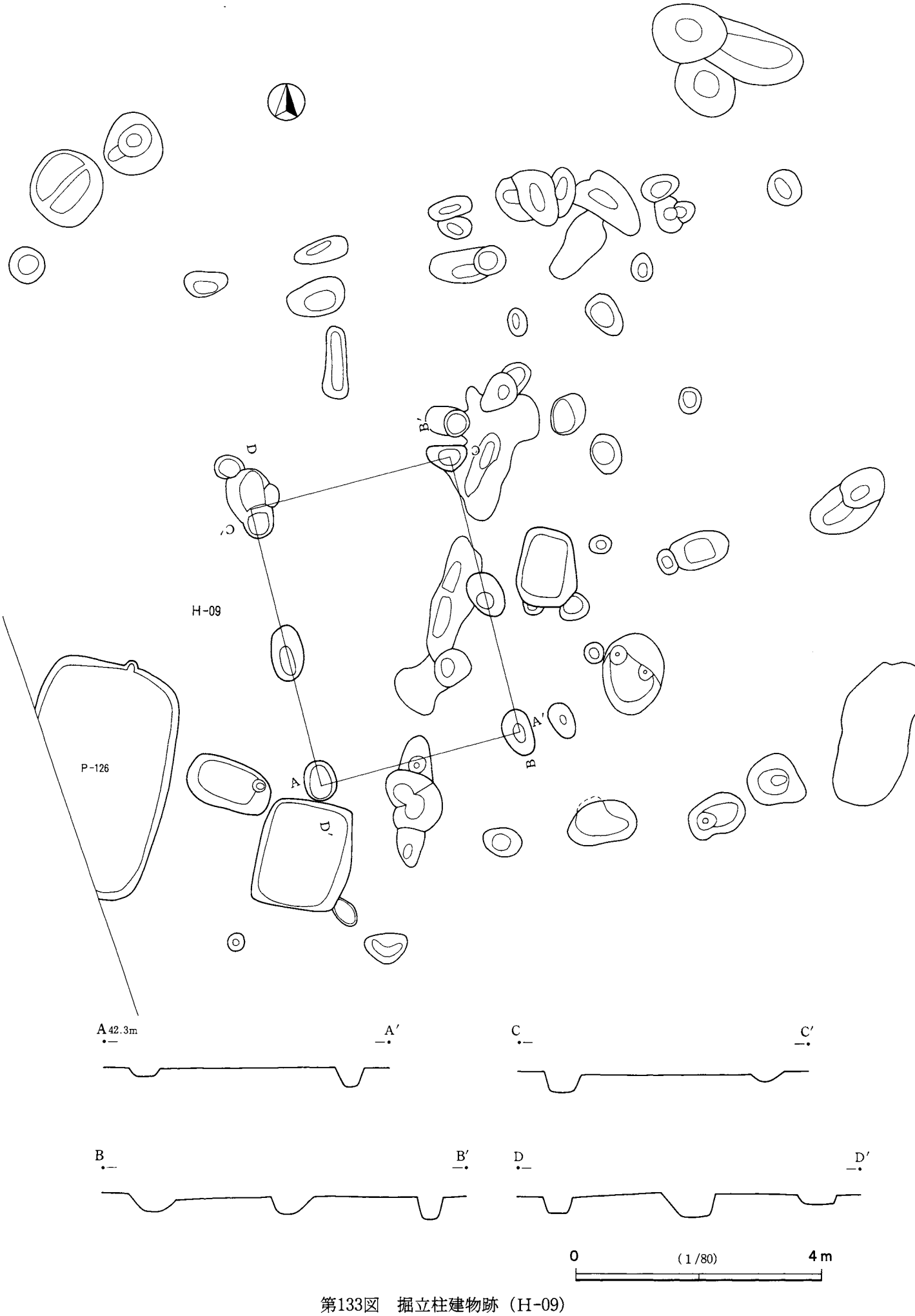
Ａ地区Ｋ17－63グリッドに位置する。すぐ南側には井戸遺構(Ｐ－396)があり、周辺のピットを含めて一つの遺構群となる。規模は梁行１間(3.4m)×桁行２間(5.0m)である。長軸方位はＮ－14°－Ｗで、面積は17.0㎡になる。東側桁行の柱間寸法は2.5mを測る。柱穴の掘方は楕円形である。小規模なので作業小屋のような施設であったろう。

Ｈ－１３(第136図)

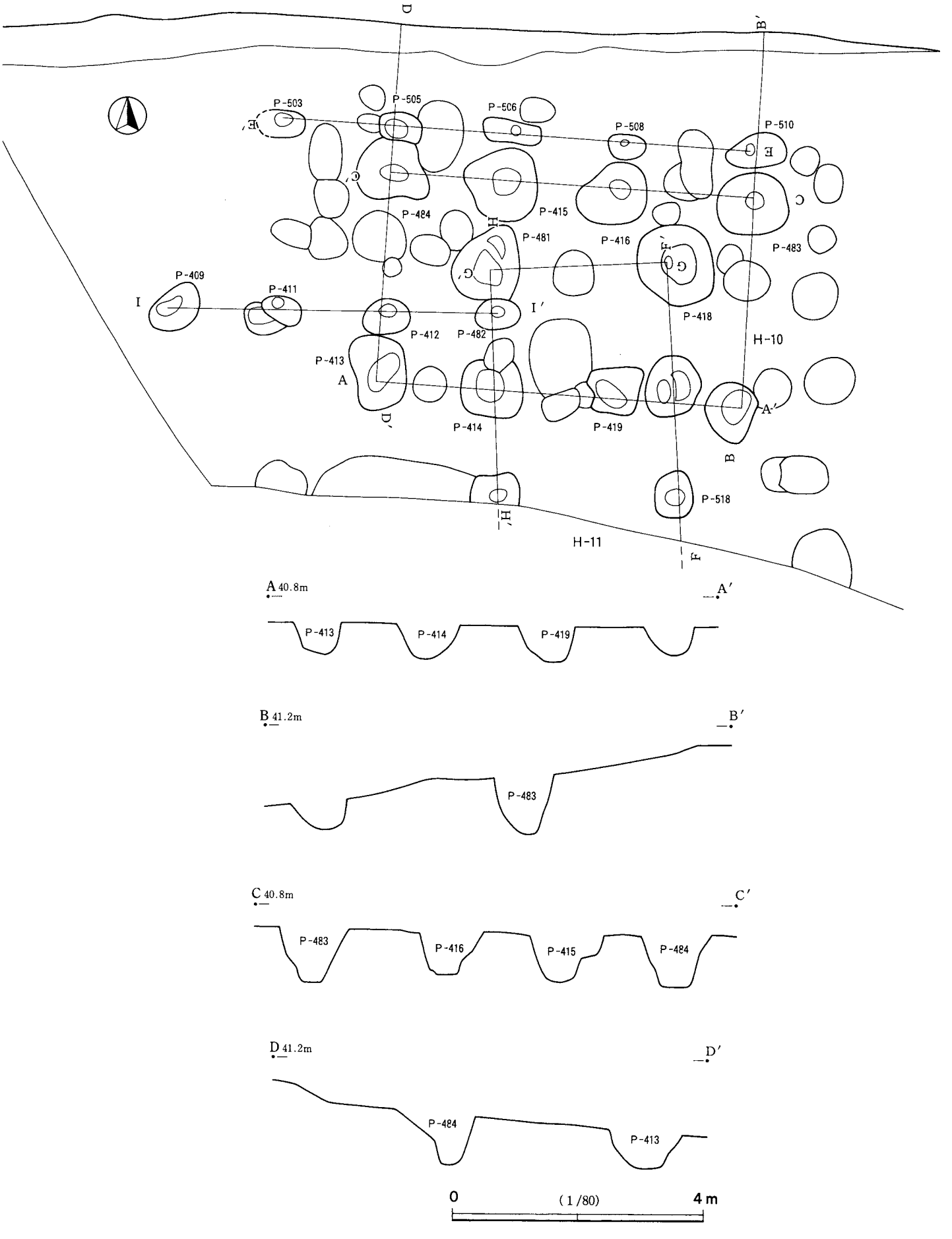
Ａ地区規模は梁行１間(1.8m)×桁行１間(1.8m)である。軸方位はＮ－５°－Ｗで、面積は3.24㎡になる。柱穴の掘方は円形で、深さは0.8mと比較的深い。小規模なのでＨ－12同様作業小屋のような施設で



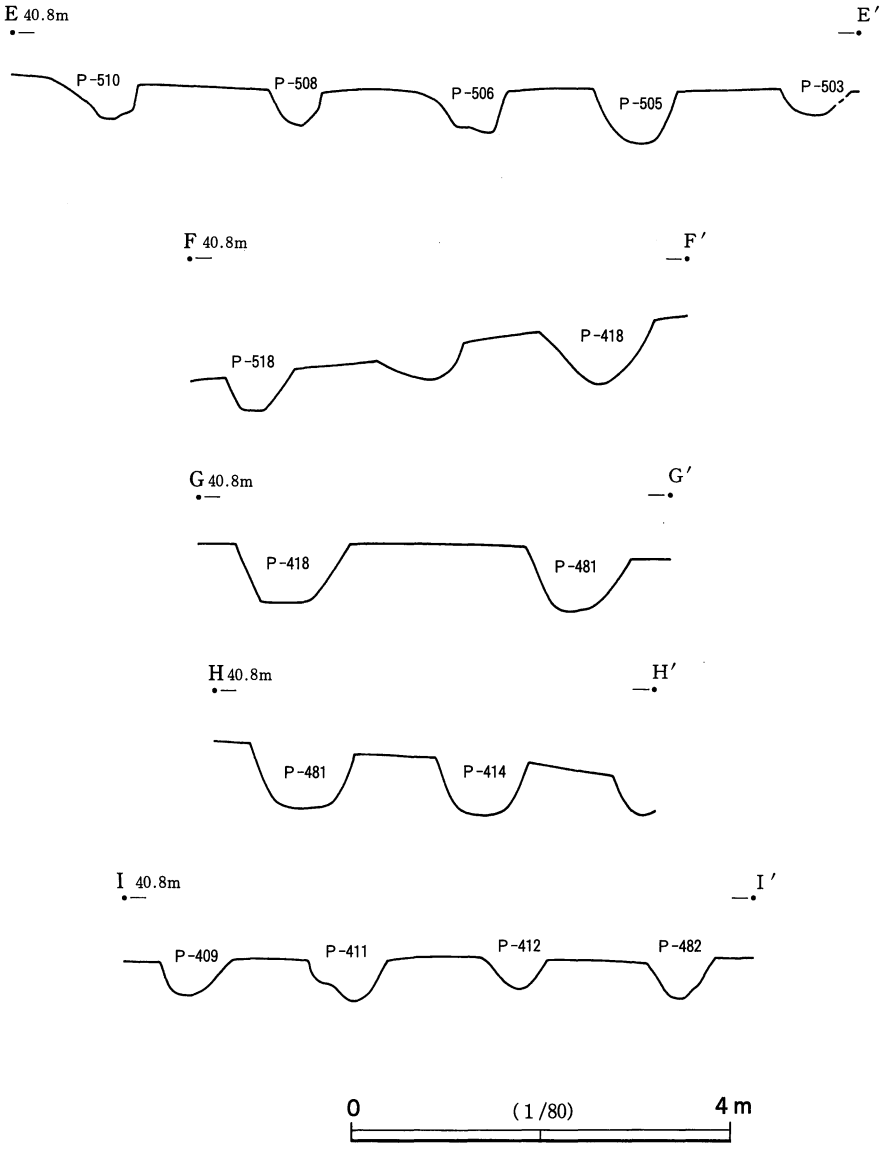
第132図　掘立柱建物跡（H-08）



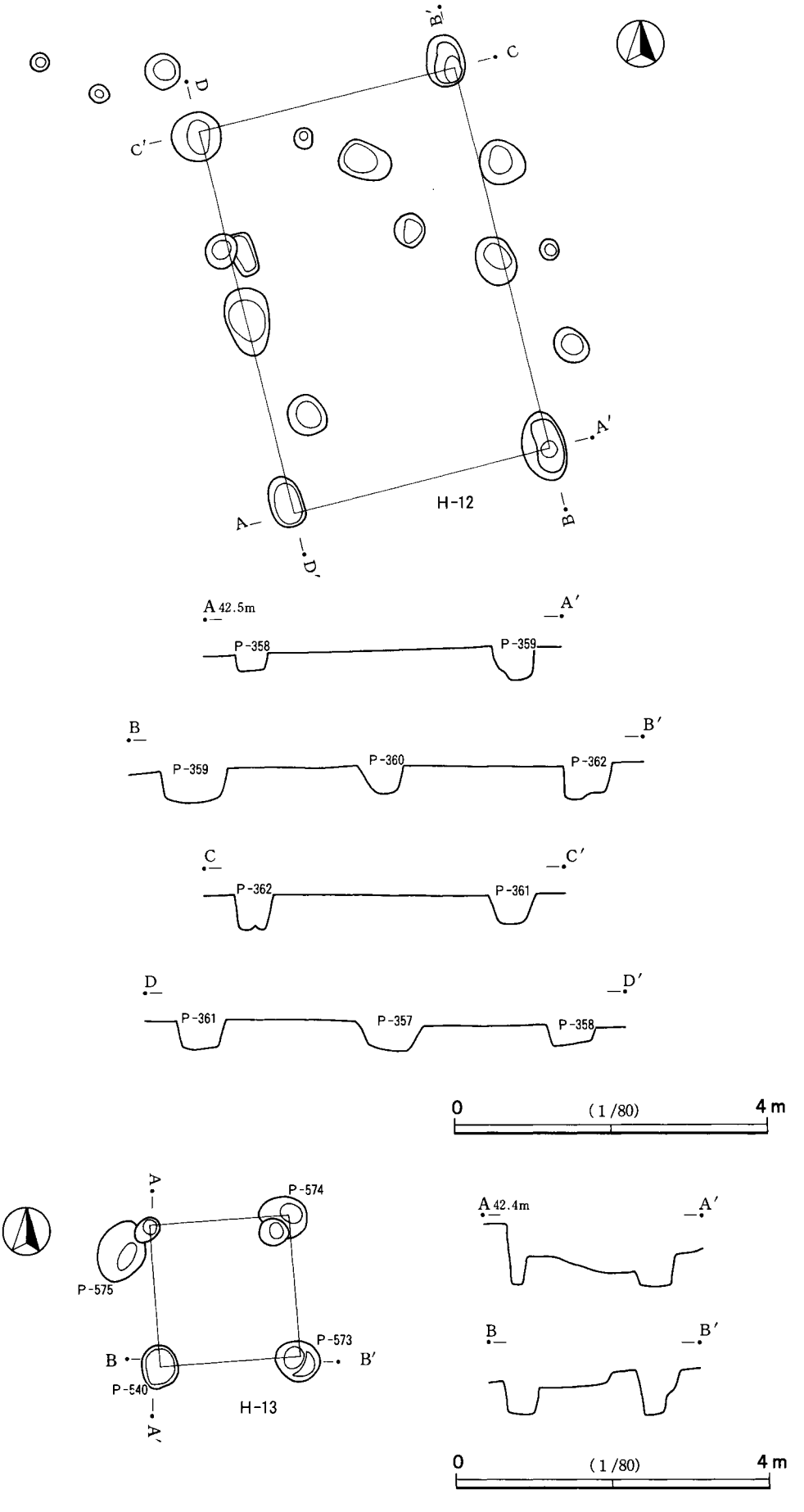
第133図　掘立柱建物跡（H-09）



第134図　掘立柱建物跡（H-10・11）



第135図　掘立柱建物跡（H-11）



第136図　掘立柱建物跡（H-12・13）

あったろう。

(3)地下式坑

地下式坑は地表から垂直に竪坑を掘り、そこを出入口とし、底から横に部屋を構築する遺構をさしており、一般に中世の墓の一形態と考えられている。それと同形態のものが当調査区域ではB地区北から7基、B地区南から1基、C地区から9基の合計17基検出された。しかし、墓と断定する積極的根拠となる遺物がほとんどないことから、ここでは、墓の一形態とは断定せず、その形態から客観的に判断して連続する2つの土坑からなり、天井部を持たない小型の土坑の方を出入口部とし、天井部のある(一部天井部の存在の確認できないものもある)大きい方の主体となる土坑を主室とし、全体として地下式坑という名称はそのまま使用して以下に説明する。なお、出入口部を起点とし、出入口部から主室を通る線を地下式坑の主軸とする。土坑と同様に「P-」の記号を付している。

P-061(第137・172図、図版30)

C地区L18-39グリッドに位置する。地下式坑の主軸はN-92°-Eである。覆土の状態が図面上から判明できないので天井部があったかは不明である。出入口部は奥行き1.3m、幅1.2m、深さ1.0mの楕円形プランで、主室は主軸と直交する方向に長く、奥行き3.5m、幅2.5m、深さ1.5mの長方形プランである。出入口部と主室の比高差は0.5mで、主室に向かって緩やかに傾斜している。出土遺物はない。

P-062(第137・172図、図版30)

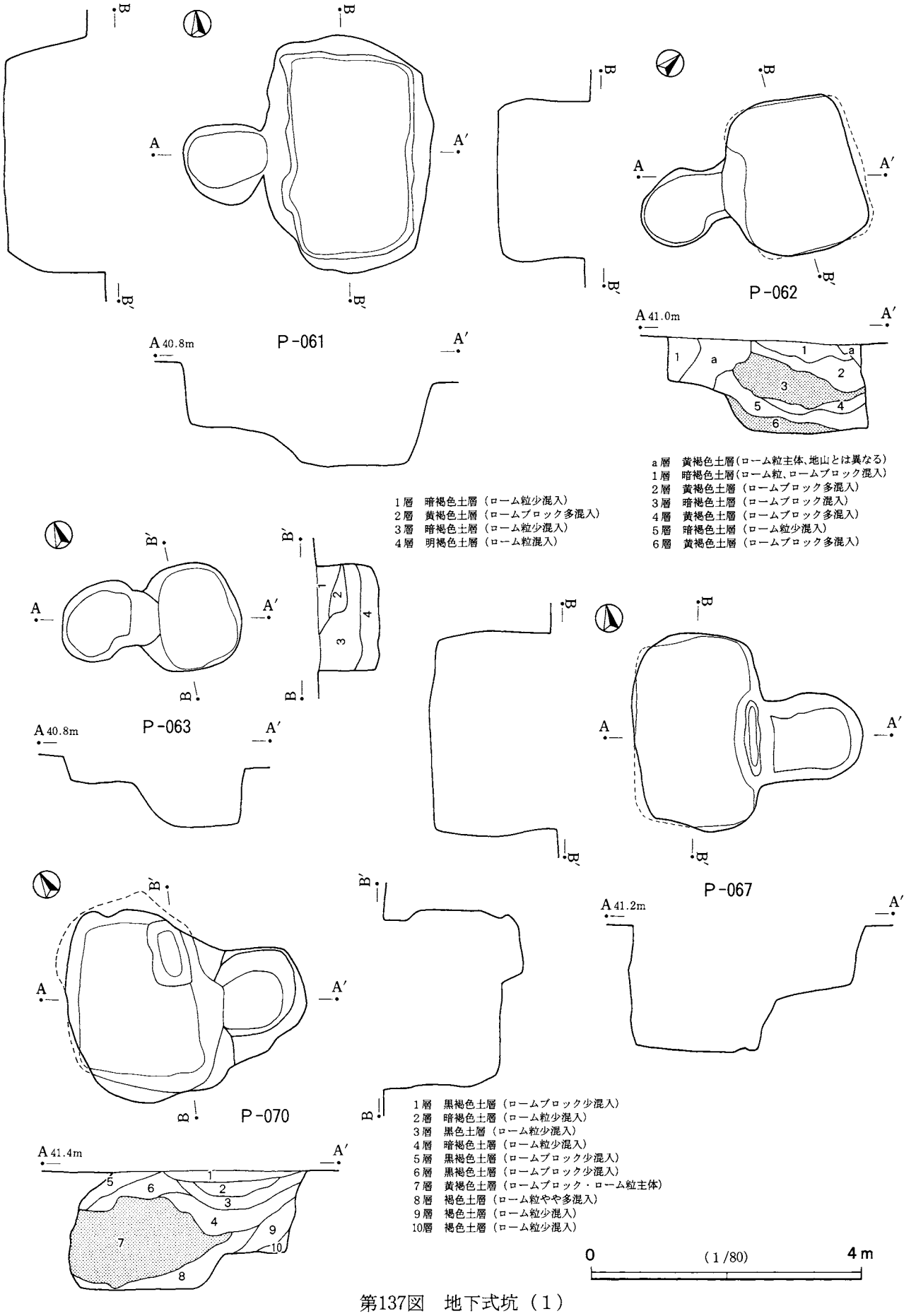
C地区M18-70グリッドに位置する。地下式坑の主軸はN-42°-Eである。出入口部は先端がやや膨らみをもった直径1.1mの円形に近いプランで、主室は幅2.3m、奥行き1.9m、残存する深さが1.3mである。主室覆土底面と中位面に天井部の崩落と考えられる多量のロームブロックを主体とする層があるので、主室に関してはローム地山の天井部があったものと判断できる。奥壁立ち上がりから約1.0mの所から壁面がオーバーハングしているのでこの地点からローム天井部が造られていたのであろう。また、天井部の形態は横穴墓のようにアールを描き主室中央部で最も高くなるドーム状であったと推定できる。天井部までの高さは最も高い主室中央部で推定1.4m～1.5m程と考えられる。覆土断面観察では地下式坑を掘ってから余り時間をあけずに壁の一部が崩落し、その後出入口部から主室に外部の土砂が流れ込み、ある程度主室が埋まってから、一気に天井部が崩壊していることがわかる。出土遺物はない。

P-063(第137・172図、図版30)

C地区M18-50グリッドに位置する。地下式坑の主軸はN-105°-Eである。出入口部、主室ともに円形プランである。主室が他の地下式坑形態に比べ極端に小さく、地下式坑かどうかは疑問が残る。出入口部は直径1.1m、深さ0.4m、主室は直径1.5m、深さ0.9mを測る。覆土断面観察では削り込みのローム天井部は確認できない。出土遺物はない。

P-067(第137・172図、図版31)

C地区L18-37グリッドに位置する。地下式坑の主軸はN-85°-Wである。出入口部は先端面が円形で、長軸1.3m、短軸1.2m、深さ1.1mを測る。主室は幅2.8m、奥行き2.1m、深さ1.8mで出入口部直下


P-061
A 40.8m
P-062
A 41.0m
1層　暗褐色土層（ローム粒少混入）
2層　黄褐色土層（ロームブロック多混入）
3層　暗褐色土層（ローム粒少混入）
4層　明褐色土層（ローム粒混入）
a層　黄褐色土層（ローム粒主体、地山とは異なる）
1層　暗褐色土層（ローム粒、ロームブロック混入）
2層　黄褐色土層（ロームブロック多混入）
3層　暗褐色土層（ロームブロック混入）
4層　黄褐色土層（ロームブロック多混入）
5層　暗褐色土層（ローム粒少混入）
6層　黄褐色土層（ロームブロック多混入）
P-063
A 40.8m
P-067
A 41.2m
P-070
A 41.4m
1層　黒褐色土層（ロームブロック少混入）
2層　暗褐色土層（ローム粒少混入）
3層　黒色土層（ローム粒少混入）
4層　暗褐色土層（ローム粒少混入）
5層　黒褐色土層（ロームブロック少混入）
6層　黒褐色土層（ロームブロック少混入）
7層　黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒主体）
8層　褐色土層（ローム粒やや多混入）
9層　褐色土層（ローム粒少混入）
10層　褐色土層（ローム粒少混入）
0
(1/80)
4m

第137図　地下式坑（1）

に幅20cm、深さ５cmの溝状の掘り込みを有する。ちょうど内部を外部と遮蔽するためかあるいは壁の崩落を防ぐための板状の構造物があったと考えられる。出入口部と主室の比高差は0.7mを測る。覆土観察が不明なので推定するしかないが、奥壁が底面より1.1mの高さの地点からオーバーハングするようなので、この地点から上部に地山を削り込んだ天井部があったものと考えられる。出土遺物はない。

Ｐ－０７０(第137・172図、図版31)

Ｃ地区Ｌ18－35グリッドに位置する。地下式坑の主軸はＮ－50°－Ｗである。出入口部は不定形で奥行き1.3m、幅1.5m、深さ1.2mを測る。主室は幅2.7m、奥行き2.3m、深さ1.7mを測る。主室底面東隅に平面の大きさが1.0m×0.5m、深さ0.3mの長方形の土坑が更に掘られている。覆土断面観察から出入口部から土砂が流れ込みその後一気に天井部が崩落したことがうかがえる。また、天井部が落ち込んだ後形成された土坑(落ち込み)内には自然に土砂が堆積している。天井部は奥壁のオーバーハングが底面から1.1mの所ではじまっているので、この地点からドーム状に造られていたものと判断される。出入口部と主室の比高差は0.5mで段差は明瞭である。出土遺物はない。

Ｐ－０７２(第138・172図、図版31)

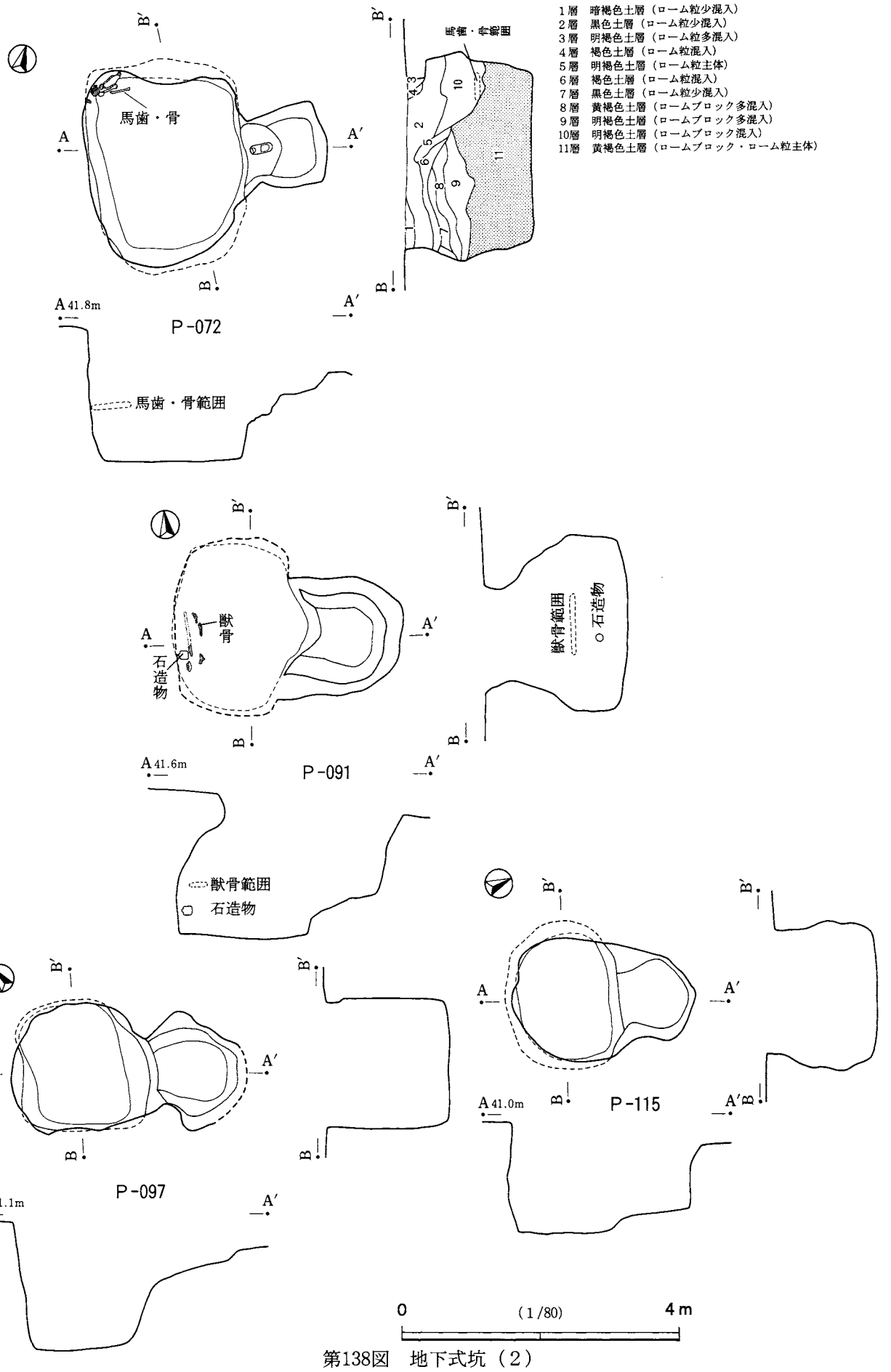
Ｃ地区Ｌ18－24グリッドに位置する。地下式坑の主軸はＮ－108°－Ｗである。出入口部は方形プランで先端部がやや幅広となる。奥行き1.2m、幅1.2m、深さ0.3mを測る。入口部の最奥部は更に一段下がっており、平坦面は形成しておらず、ピット状になる。主室は幅3.1m、奥行き2.2m、深さ2.0mを測る。覆土断面観察では、底面に周辺からの流れ込みに伴う土砂は確認されておらず、地下式坑造成後、ほとんど時を経ずに、一気に天井部が崩落したことがわかる。この地下式坑は天井部崩落後埋没し、その後北側側壁を袋状に掘り込み、馬の埋葬坑(墓坑)に再利用されており、ここからは馬の歯や骨などが出土している。たぶん馬を埋葬する段階では崩落した地下式坑が完全には埋まりきっていなかったのであろう。すなわち、馬の骨と地下式坑は本来全く関係のないもので、地下式坑の方が袋状土坑よりも古いことになる。

Ｐ－０９１(第138・172図、図版32)

Ｃ地区Ｌ18－65グリッドに位置する。すぐ北側には掘立柱建物Ｈ－08があり、その一部の柱穴が重複している。新旧関係は掘立柱建物の方が、Ｐ－091の覆土を切っているので新しい。主軸はＮ－85°－Ｗである。出入口部は不整形で、出入口手前は円形をなす。出入口部は幅1.7mで、比較的大きいのに比べ、主室は幅2.5m、奥行き2.1mを測り小形である。主室断面は主軸方向で、床面から0.7mの所から大きくアールを描きはじめる。また、長軸方向の断面を見ると、やはり壁が直立するのは床面より0.6mの高さまでで、それより上は大きくすぼまる。覆土観察はなされていないので、天井部の落ち込みの堆積状況ははっきりわからないが、奥壁近くから石造物や馬の骨が検出されている。前者は床面から25cmの高さ、後者は床面から70cmの高さの位置にあり、おそらく獣骨は天井部が落ち込んでからその落ち込みを利用して埋葬されたものであろう。石造物については出入口部から流れ込んだ可能性が高い。

Ｐ－０９７(第138・172図、図版32)

Ｃ地区Ｌ18－58グリッドに位置し、出入口部がＰ－110Bと重複する。主軸はＮ－47°－Ｗである。出入


1層　暗褐色土層（ローム粒少混入）
2層　黒色土層（ローム粒少混入）
3層　明褐色土層（ローム粒多混入）
4層　褐色土層（ローム粒混入）
5層　明褐色土層（ローム粒主体）
6層　褐色土層（ローム粒混入）
7層　黒色土層（ローム粒少混入）
8層　黄褐色土層（ロームブロック多混入）
9層　明褐色土層（ロームブロック多混入）
10層　明褐色土層（ロームブロック混入）
11層　黄褐色土層（ロームブロック・ローム粒主体）
馬歯・骨
馬歯・骨範囲
A 41.8m
P-072
馬歯・骨範囲
獣骨
石造物
A 41.6m
P-091
獣骨範囲
石造物
P-097
A 41.1m
P-115
A 41.0m
0
(1/80)
4m

第138図　地下式坑（2）

口部と主室の比高差は0.8mと段差が大きい。出入口部の形態は不整形で最大幅1.4m以上を測る。主室は小型の箱形で主軸に沿って奥行き1.9m、幅1.8mを測る。覆土の断面観察がなされていないのではっきりわからないが、平面図を見るとオーバーハングしている部分が観察されるのでたぶん天井部があったものと思われる。左右の壁面は底面から1.5mの高さまでほぼ直立する。出土遺物はない。

P－115（第138・172図）

C地区L18－27グリッドに位置し、出入口部で他の土坑と重複する。主軸はN－163°－Wである。出入口部は円形に近く、奥行き1.1m、幅1.2mを測る。主室はP－097同様小形で、出入口部に向かって奥行き1.5m、幅2.1m、深さ1.5mを測る。出入口部と主室の段差は0.2mで、余り段差がない。主室の断面は袋状で緩やかにオーバーハングする。

P－163（第139図、図版32）

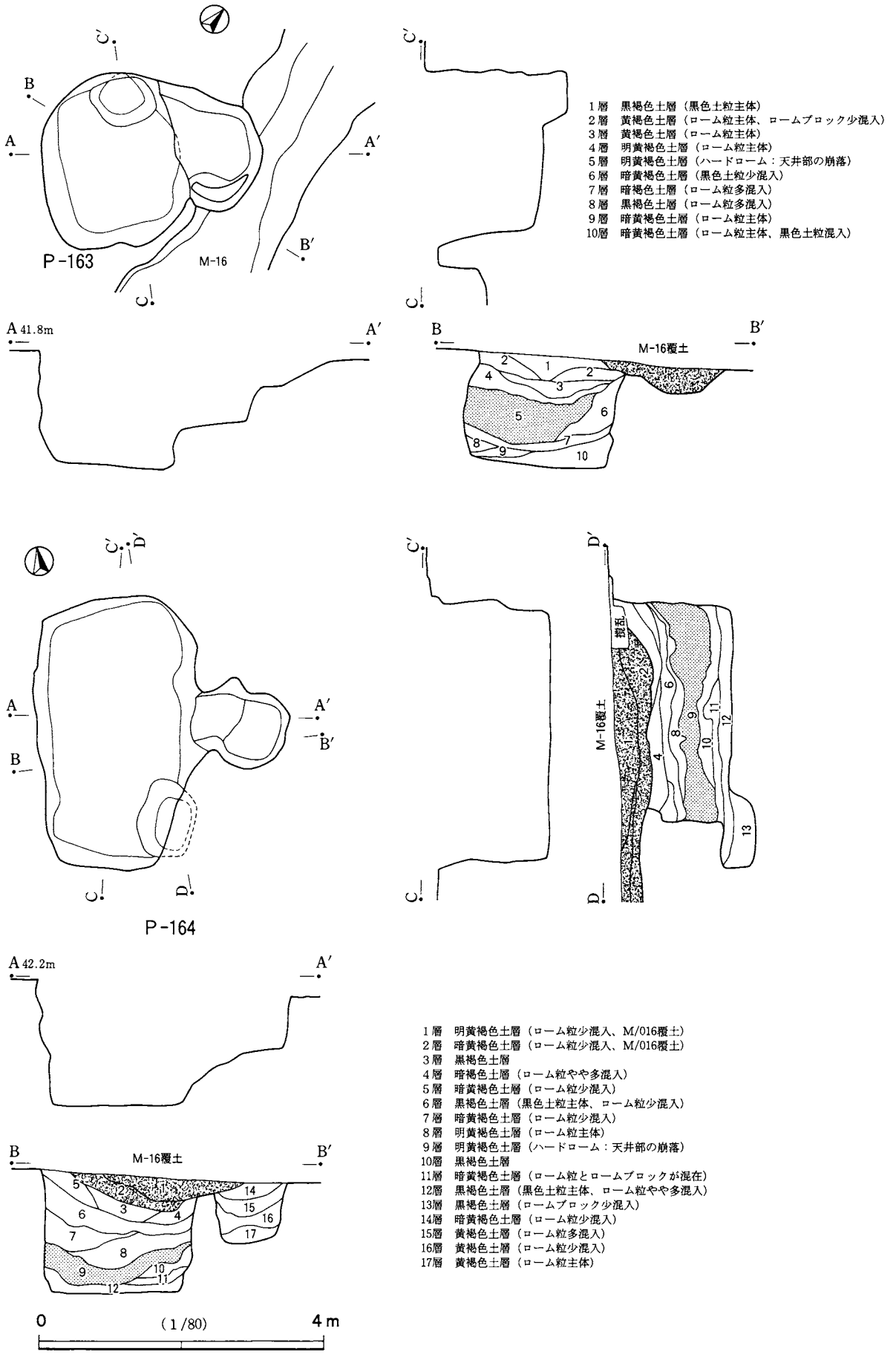
B地区北M15－56グリッドに位置する。出入口部でM－16と重複する。両者の新旧関係はP－163の出入口部の覆土を切ってM－16が造られていることから、M－16の方が新しいことが言える。主軸はN－127°－Wである。出入口部の形態は不整形で、幅は1.5m、深さは0.5mを測る。主室との段差は0.6mである。主室は奥行きは1.9m、幅が2.4m、深さは1.6mである。主室の覆土断面観察ではまず、出入口部から土砂が流れ込み、その後一気に天井部が崩落したことがわかる。地山の観察がされていないのではっきりとしたことは言えないが、天井部があったとすれば、天井部の位置はかなり高い位置と考えなければならず、遺構確認面より上面にあったと推定される。したがって、このP－163造成時の地山は本来確認面より高い位置にあり、埋没後現レベルまで削平されたものと考えられる。主室底面には北隅に地下式坑に伴う0.8m×0.8m、深さ0.4mの小型のピットがある。

P－164（第139図）

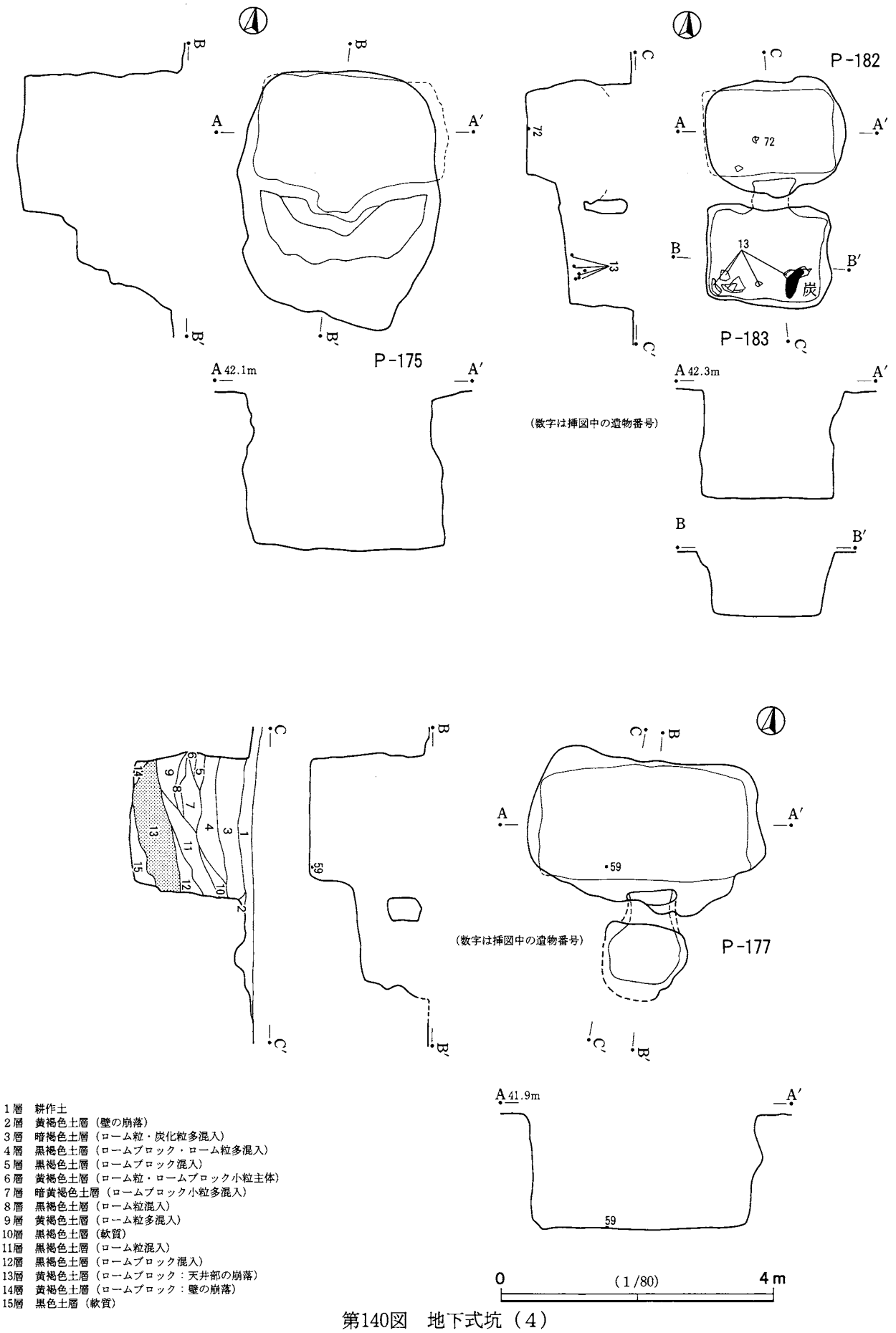
B地区北M15－35グリッドに位置する。出入口部でM－16と重複する。両者の新旧関係はP－164の出入口部の覆土を切ってM－16が造られていることから、M－16の方が新しいことが言える。主軸はN－75°－Wである。出入口部の形態は小形の不整形で、幅は1.1m、深さは0.7mを測る。主室へ緩やかに傾斜してゆく。主室は奥行き2.2m、幅3.8m、深さは1.7mである。主室の覆土断面観察ではまず、入口部から土砂が流れ込み、その後一気に天井部が崩落したことがわかる。地山の観察がされていないのではっきりとしたことは言えないが、天井部があったとすれば、天井部の位置はかなり高い位置と考えなければならず、現状の遺構確認面レベルより上面にあったと推定される。したがって、このP－164造成時の地山は本来確認面より高い位置にあり、埋没後現レベルまで削平されたものと考えられる。主室底面には南隅に地下式坑に伴う長軸1.0m、短軸0.8m、深さ0.4mの小型のピットがあり、壁の中に0.6m掘り込まれている。

P－175（第140・173図、図版33）

B地区北M15－28グリッドに位置する。地下式坑の主軸はN－4°－Wである。出入口部は主室並の幅を持ち奥行きは最大2.0m、深さ1.4mを測る。主室は奥行き1.7m、幅3.0m、深さ2.3mを測る。出入口


P-163
M-16
A 41.8m
M-16覆土
1層　黒褐色土層（黒色土粒主体）
2層　黄褐色土層（ローム粒主体、ロームブロック少混入）
3層　黄褐色土層（ローム粒主体）
4層　明黄褐色土層（ローム粒主体）
5層　明黄褐色土層（ハードローム：天井部の崩落）
6層　暗黄褐色土層（黒色土粒少混入）
7層　暗褐色土層（ローム粒多混入）
8層　黒褐色土層（ローム粒多混入）
9層　暗黄褐色土層（ローム粒主体）
10層　暗黄褐色土層（ローム粒主体、黒色土粒混入）
P-164
A 42.2m
M-16覆土
1層　明黄褐色土層（ローム粒少混入、M/016覆土）
2層　暗黄褐色土層（ローム粒少混入、M/016覆土）
3層　黒褐色土層
4層　暗褐色土層（ローム粒やや多混入）
5層　暗黄褐色土層（ローム粒少混入）
6層　黒褐色土層（黒色土粒主体、ローム粒少混入）
7層　暗黄褐色土層（ローム粒少混入）
8層　明黄褐色土層（ローム粒主体）
9層　明黄褐色土層（ハードローム：天井部の崩落）
10層　黒褐色土層
11層　暗黄褐色土層（ローム粒とロームブロックが混在）
12層　黒褐色土層（黒色土粒主体、ローム粒やや多混入）
13層　黒褐色土層（ロームブロック少混入）
14層　暗黄褐色土層（ローム粒少混入）
15層　黄褐色土層（ローム粒多混入）
16層　黄褐色土層（ローム粒少混入）
17層　黄褐色土層（ローム粒主体）
0
(1/80)
4m

第139図　地下式坑（3）



1層　耕作土
2層　黄褐色土層（壁の崩落）
3層　暗褐色土層（ローム粒・炭化粒多混入）
4層　黒褐色土層（ロームブロック・ローム粒多混入）
5層　黒褐色土層（ロームブロック混入）
6層　黄褐色土層（ローム粒・ロームブロック小粒主体）
7層　暗黄褐色土層（ロームブロック小粒多混入）
8層　黒褐色土層（ローム粒混入）
9層　黄褐色土層（ローム粒多混入）
10層　黒褐色土層（軟質）
11層　黒褐色土層（ローム粒混入）
12層　黒褐色土層（ロームブロック混入）
13層　黄褐色土層（ロームブロック：天井部の崩落）
14層　黄褐色土層（ロームブロック：壁の崩落）
15層　黒色土層（軟質）

第140図　地下式坑（4）

部と主室の比高差は0.8mを測る。主室の出入口部が中心で方形に抉れている。覆土観察が不明なので推定するしかないが、壁が底面より1.4mの高さの地点からオーバーハングするようなので、この地点から上位に削り込んだ天井部があったものと考えられる。出土遺物はない。

Ｐ－１８２・１８３(第140・173図、図版34)

Ｂ地区北M14－88グリッドに位置する。当初異なる別個の遺構番号を付けていたが、単一の遺構であることがわかった。Ｐ－183の覆土を切ってＨ－06の柱穴が掘られている。すなわちＨ－06よりＰ－183の方が古い。出入口部(Ｐ－183)と主室(Ｐ－182)が方形でほぼ同じ平面規模を持つ。主軸はＮ－６°－Ｗである。出入口部は奥行き1.4m、幅1.8m、深さ1.0mを測る。主室は奥行き1.4m、幅2.1m、深さ1.5mを測る。出入口部と主室との間には進入口が良好に残存していた。これは高さ35cm、幅50cmと極めて小さく、人が這ってやっと通れるほどのものである。主室には底面より高さ1.1mの地点からオーバーハングが始まるのでここより上位にローム天井部があったことが考えられる。覆土の断面観察では出入口部からこの狭い開口部を通って主室に土砂が流れ込んでいるのを確認している。主室内にはこの土砂に混ざって美濃３・４小期の天目茶碗が流れ込んでいる。また、ほぼ同じ時期の出入口部の流れ込み土砂中に土師質の火鉢と炭が廃棄されているのが確認されている。この火鉢は使用中または使用直後にこの出入口部に廃棄されたものである。時期は供伴の天目茶碗から17世紀半ば頃と推定される。したがって、この地下式坑の上限は17世紀半ばと推定される。

Ｐ－１７７(第140・173図、図版33)

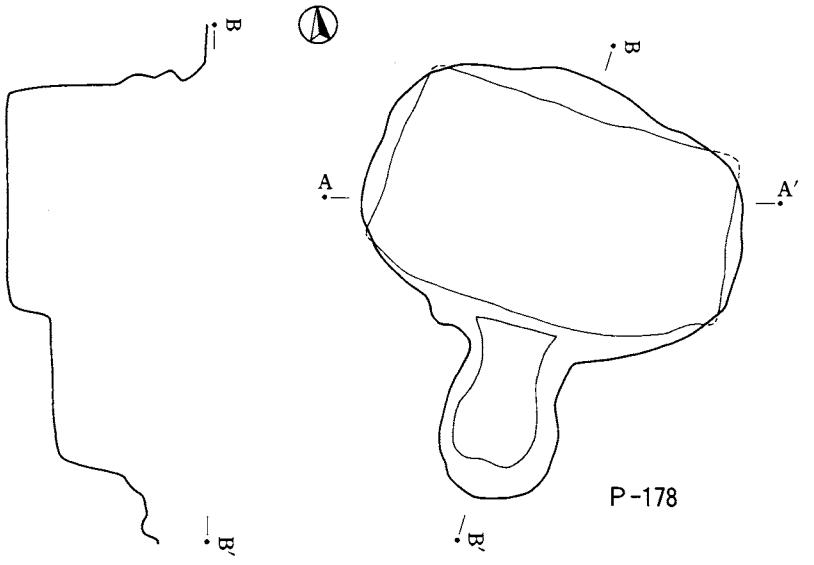
Ｂ地区北M15－29グリッドに位置する。主軸はＮ－９°－Ｗである。出入口部は平面が方形プランで、幅1.2m、奥行き1.1m、深さ1.0mを測る。主室は奥行き2.0m、幅3.4m、深さ1.7mを測る。出入口部と主室の比高差は0.7mである。出入口部と主室との間には進入口が良好に残存していた。これは高さ50cm,幅60cmと極めて小さく、人が這ってやっと通れるほどのものである。主室の覆土断面観察では主室内に黒色土がまず流れ込みその後すぐに天井部が崩落し、その上部に自然に土砂が堆積していったことが伺える。底面床直上から渥美産甕の胴部破片が出土している。

Ｐ－１７８(第141・173図、図版33)

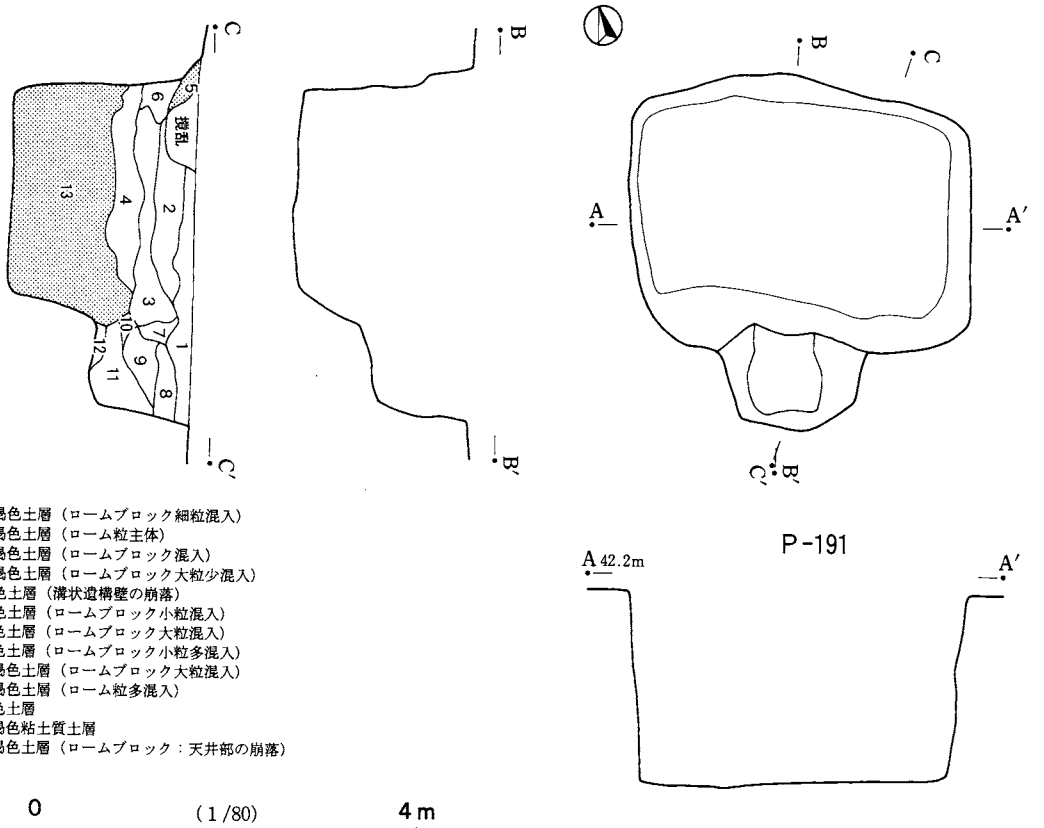
Ｂ地区北N15－11グリッドに位置する。主軸はＮ－45°－Ｅである。出入口部覆土をM－16によって切られる。出入口部は幅1.3m、奥行き1.8m、深さ1.2mを測る。主室は奥行き2.4m、幅3.8m、深さ2.1mでかなり大型のものである。出入口部との段差は0.4mである。主室覆土断面観察では出入口部からの外部の土砂の流れ込みは確認されておらず、床面に0.6m～0.9mの厚さでロームの堆積が見られることから地下式坑造営後極めて短期間の内に天井部が崩落したものと考えられる。出土遺物は主室床面近くから常滑産甕の肩部片が出土している。

Ｐ－１９１(第141・173図、図版34)

Ｂ地区北N15－45グリッドに位置する。主軸はＮ－13°－Ｅである。出入口部覆土がM－20によって切られる。出入口部は最大幅1.5m、奥行き1.0m、深さ1.0mを測る。主室は奥行き2.4m、幅3.5m、深さ



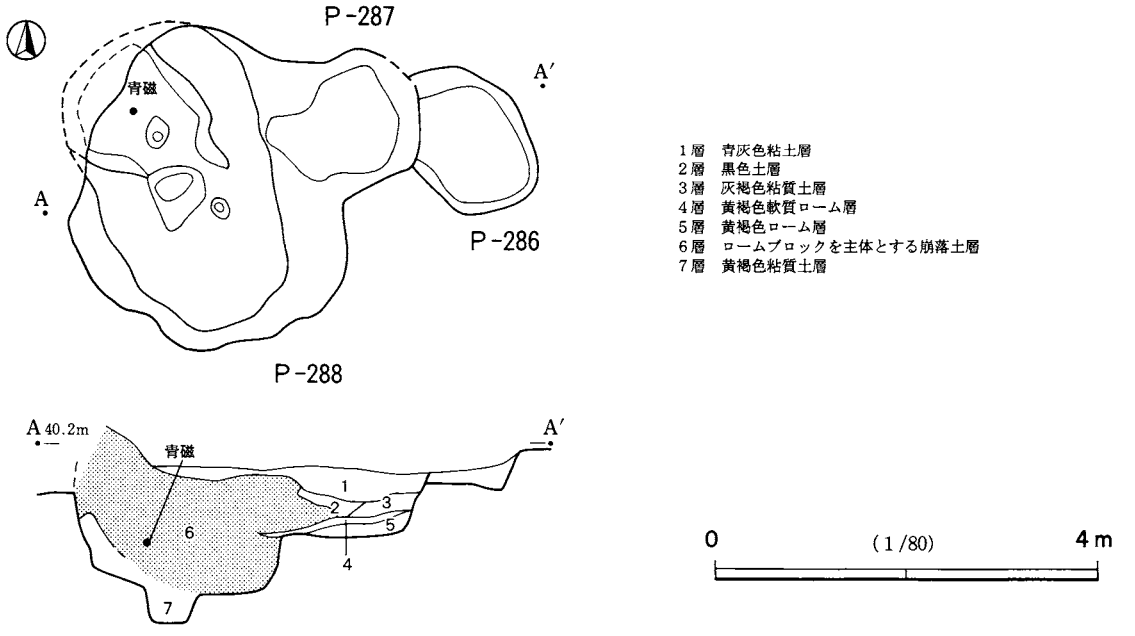
1層　黒褐色土層（ローム粒少混入）
2層　暗褐色土層（ローム粒少混入）
3層　黒褐色土層（ローム粒小粒・ローム粒混入）
4層　黒褐色土層（ローム粒小粒・ローム粒混入）
5層　黒色土層（軟質）
6層　黒褐色土層（ローム粒少混入）
7層　黄褐色土層（ローム粒主体）
8層　黄褐色土層（ハードローム：天井部の崩落）
9層　黒色土層（砂質）
10層　黄褐色土層（ロームブロック大粒混入）
11層　黄褐色土層（ロームブロック：壁の崩落）
12層　黒褐色土層（ロームブロック・ローム粒混入）



1層　暗褐色土層（ロームブロック細粒混入）
2層　黄褐色土層（ローム粒主体）
3層　暗褐色土層（ロームブロック混入）
4層　暗褐色土層（ロームブロック大粒少混入）
5層　褐色土層（溝状遺構壁の崩落）
6層　褐色土層（ロームブロック小粒混入）
7層　褐色土層（ロームブロック大粒混入）
8層　褐色土層（ロームブロック小粒多混入）
9層　暗褐色土層（ロームブロック大粒混入）
10層　黄褐色土層（ローム粒多混入）
11層　褐色土層
12層　灰褐色粘土質土層
13層　黄褐色土層（ロームブロック：天井部の崩落）

0　(1/80)　4m

第141図　地下式坑（5）



第142図　地下式坑（6）

2.0mでかなり大型のものである。出入口部との段差は0.7mである。主室覆土断面観察では出入口部からの外部の土砂の流れ込みは確認されておらず、床面に1.1mの厚さでロームの堆積が見られることから地下式坑造営後極めて短期間の内に天井部が崩落したものと考えられる。遺物なし。

P－288・287(第142図)

B地区南M16－42グリッドに位置する。主軸はN－114°－Wである。中世土坑墓群中にあり土坑墓と重複している。そのため調査時には別個の遺構と考えていたが、整理段階で一つの地下式坑の組み合わせと判断した。出入口部は幅1.4m、奥行き1.5m、深さ0.7mを測る。主室は奥行き2.1m、幅3.5m、深さ1.0mでかなり大形のものである。出入口部との段差は0.6mである。主室覆土断面観察では床面直上にロームの厚い堆積が見られることから地下式坑造営後、極めて短期間の内に天井部が崩落したものと考えられる。天井部の一部が北側壁に残存していて、ここでややオーバーハングしている。主室床面に土坑状の掘り込みやピットが3か所見られる。龍泉窯系青磁碗の破片(第155-45、図版84)が天井部崩落土(ローム塊)直下から出土している。

(4)土坑墓

人骨を埋葬した土坑墓はA地区で1基、B地区北で1基、B地区南で1基、C地区で1基、D地区で1基、馬の骨が埋葬されていた土坑墓はB地区北で1基、C地区で2基検出されている。C地区の2基は地下式坑の落ち込みを墓坑に再利用したものである。

P－112(第146・172図、図版36)

C地区L18－76グリッドに位置する。周辺には火葬施設(火葬墓)や粘土貼土坑等が密集する。土坑は長軸1.5m、短軸0.9m、深さ0.9mの楕円形プランで、床面からやや浮いた位置から横臥屈葬の人骨が1体出土した。人骨の頭位は北西位である。副葬品はない。

Ｐ－１２９(第146図、図版36)

Ｄ地区Ｌ20－84グリッド、遺跡の最南端の台地縁辺部に単独で存在する。掘方上端で長軸1.1m、短軸1.0mの長方形で、深さは0.4mを測る。人骨は覆土中位面から出土している。副葬品には開元通寶１点、至道元寶１点、洪武元寶２点、熙寧通寶１点、元宝通寶１点を伴う中世の土坑墓である。

Ｐ－１６１(第149図)

Ｂ地区北M15－26グリッドに位置する。Ｍ－15と重複し、東側ではＰ－162(近世井戸)に隣接している。Ｍ－15がＰ－161の覆土を切って造られているので、Ｍ－15の方が新しい。馬の骨では歯とその周辺が残っているだけである。それらは土坑覆土の中位層から出土している。覆土観察から見ると土坑は底面より0.7mの深さまで一端埋まってから、その後馬を埋葬したのではなかろうか。とすれば、このＰ－161は本来馬を埋葬するために造られたものではないことになる。

Ｐ－２１２(第150図)

Ｂ地区南M16－52グリッドに位置する。長軸1.9m、短軸1.5m、深さ0.5mのやや大形の長方形プランの土坑である。覆土上位より銭貨が出土している。銭貨の出土位置がやや高いので、この遺構の副葬品であるかどうかははっきりしない。

Ｐ－５９２(第153図、図版38)

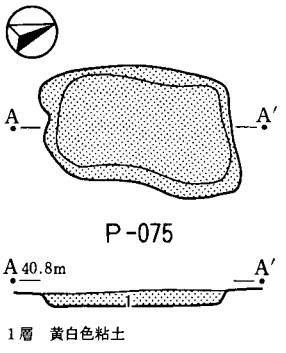
Ａ地区Ｊ16－74グリッドに位置する。掘方上端で長軸1.0m、短軸0.9mの楕円形態で、深さは0.8mを測る。人骨は平坦な底面近くに検出され頭骨、腰骨、大腿骨などが明瞭に識別でき比較的残りがよい。おそらく円形木棺に入れられて埋葬されたものであろう。副葬品には古銭を伴うが、資料の確認はできていない。おそらく寛永通寶であろう。

(５)火葬施設(火葬墓)（第132図、図版38)

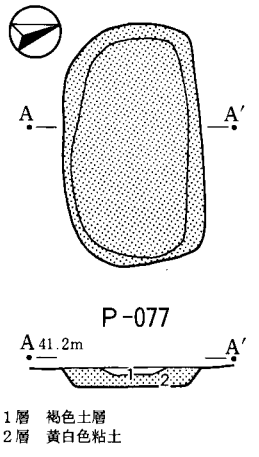
Ｃ地区においてのみ火葬施設(火葬墓)と考えられる遺構が８基検出されている。いずれもＣ地区の墓域の南西側縁辺部に沿って点在する。図面上からは形態が不明確であるが、図版38で見るように、２つの土坑をトンネルまたは溝によって繋いだ特異な形態を持つ。遺構は遺体を焼くための燃焼部、空気を送る通風口、両者を結ぶ通気孔(トンネル)から構成されている。燃焼坑には焼土、焼骨、炭等が残っているものもあるが、詳細は全くわからないので、ここではただ火葬するための施設で、骨は他に埋葬する火葬施設と火葬から埋葬まで１つの土坑でまかなう火葬墓の両者の可能性があることを記すに止める。

(６)粘土貼土坑

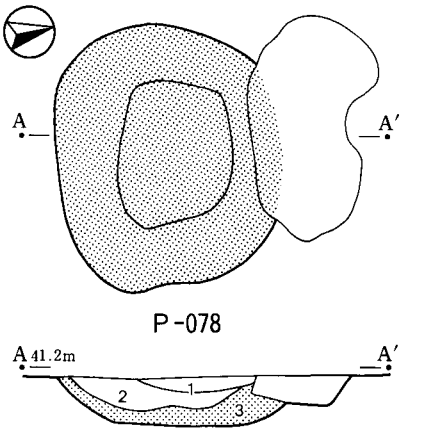
粘土貼土坑とは土坑の掘方の底面や側面に、下総台地を構成する成田層中から採集される白色または黄色の粘土を貼り付けた土坑である。中世の墓地に伴って確認されることが多く、当期の土坑墓の一種と考えられているが、粘土が不透水性のものであることから、周辺から検出される井戸と関連付けて水を溜めておく施設と見る考え方もある。



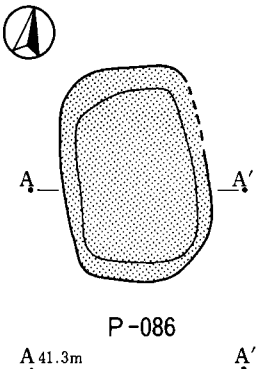
1層　黄白色粘土



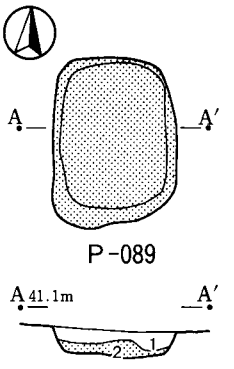
1層　褐色土層
2層　黄白色粘土



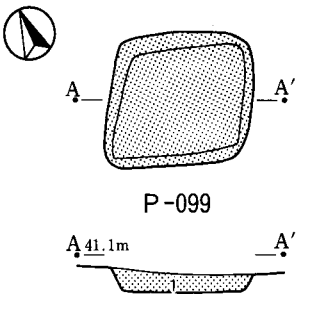
1層　暗褐色土層（ロームブロック少混入）
2層　褐色土層（ロームブロック少混入）
3層　黄白色粘土



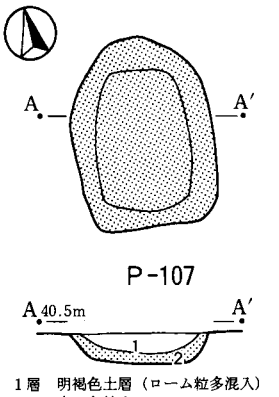
1層　暗褐色土層
2層　白色粘土



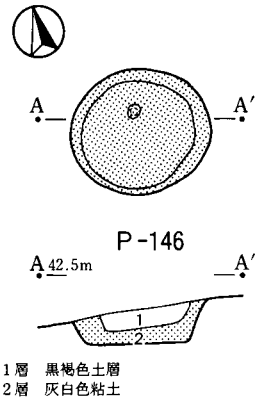
1層　暗褐色土層（ローム粒混入）
2層　白色粘土



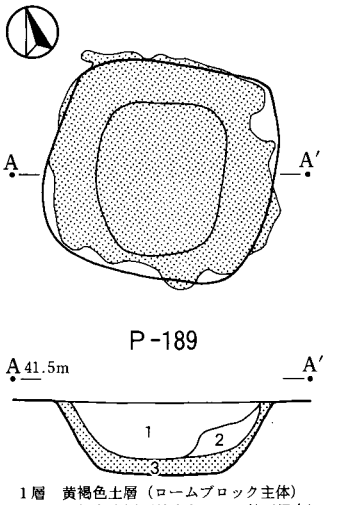
1層　白色粘土



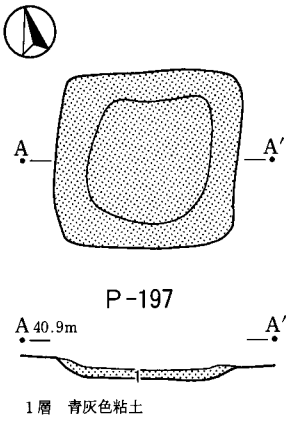
1層　明褐色土層（ローム粒多混入）
2層　青灰色粘土



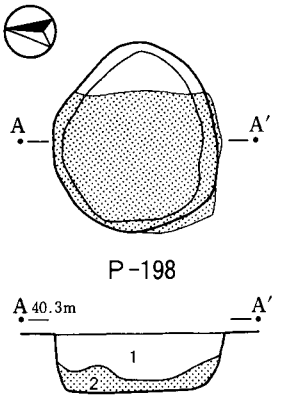
1層　黒褐色土層
2層　灰白色粘土



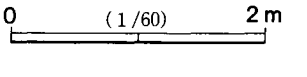
1層　黄褐色土層（ロームブロック主体）
2層　明褐色土層（粘土とローム粒が混在）
3層　灰白色粘土



1層　青灰色粘土



1層　褐色土層（ロームブロック混入）
2層　青灰色粘土



第143図　粘土貼土坑

Ｐ－０７５（第143・172図、図版35）

Ｃ地区Ｌ18－78グリッドに位置する。掘方は長軸1.5m、短軸1.0m、深さ0.1mを測り、壁は底面から斜めに明瞭に立ち上がる。粘土は黄白色で、掘方面までが浅いためほぼ覆土全体に見られた。遺物なし。

Ｐ－０７７（第143・172図、図版35）

Ｃ地区Ｌ18－78グリッドに位置する。掘方は長軸2.0m、短軸1.1m、深さ0.2mの長楕円形のプランで、底面は平坦で壁は斜めに明瞭に立ち上がる。粘土は黄白色で、底面での厚さ10cm、壁面では厚さ20cm以上を測る。粘土の表面は底面から緩やかに立ち上がる。覆土には褐色土が含まれるが、自然堆積ではない。遺物なし。

Ｐ－０７８（第143・172図、図版35）

Ｃ地区Ｌ18－78グリッドに位置する。掘方は長軸2.1m、短軸1.8m、深さ0.4mの円形に近い方形プランで、壁はは緩やかに立ち上がる。粘土は黄白色で、厚さは10cmから30cmである。粘土の表面は底面から緩やかに立ち上がる。覆土には暗褐色土や褐色土が含まれる。遺物なし。

Ｐ－０８６（第143・172図、図版35）

Ｃ地区Ｌ18－47グリッドに位置する。掘方は長軸1.7m、短軸1.1m、深さ0.2mの長方形である。粘土は白色で、厚さは底面で５cmで、粘土表面は底面から緩やかに立ち上がる。遺物なし。

Ｐ－０８９（第143・172図）

Ｃ地区Ｌ18－58グリッドに位置する。掘方は長軸1.3m、短軸1.0m、深さ0.2mの長方形である。粘土は白色で貼っているのは底面だけで、やや凹凸が見られる。その厚さは10cm前後である。遺物なし。

Ｐ－０９９（第143・172図、図版36）

Ｃ地区Ｌ18－66グリッドに位置する。掘方は長軸1.1m、短軸1.0m、深さ0.2mの平行四辺形に近い。粘土は白色で、掘方が浅いため粘土貼り付け部のみの検出である。粘土の厚さは残存しているだけでも約20cmになる。

Ｐ－１０７（第143・172図、図版36）

Ｃ地区Ｌ18－29グリッドに位置する。掘方は長軸1.5m、短軸1.1m、深さ0.3mの一方向が円形に広がった不整形である。粘土は青灰色で、厚さは10cm足らずと比較的薄い。覆土はローム粒を多量に含む明褐色土で、遺物はない。粘土表面の立ち上がりは非常になだらかである。

Ｐ－１４３（第146図）

Ｂ地区北M14－61グリッドに位置する。

Ｐ－１４６（第143図、図版37）

B地区北L14－69グリッドに位置する。掘方は直径1.0mを測る。深さ0.3mの筒形である。掘方は底面が平坦で立ち上がりが明瞭である。粘土は灰白色で、厚さは10cmを測る。粘土の表面は底面で平坦で、立ち上がりは明瞭である。覆土は黒褐色土で覆土中から瀬戸８小期の小中碗が出土している。

Ｐ－１８９（第143図、図版37）

B地区北N15－40グリッドに位置する。掘方は長軸1.7m、短軸1.6m、深さ0.5mの底面が平坦な隅丸方形である。粘土は掘方全体を覆うことなく、壁面の一部には貼り付けていないところもある。粘土の厚さは最大10cmで、表面の立ち上がりはなだらかである。覆土中にはロームブロックを含む褐色土が入る。遺物なし。

Ｐ－１９７（第143図）

B地区北N15－64グリッドに位置する。掘方は長軸1.4m、短軸1.4m、深さ0.1mの底面が平坦な隅丸方形プランである。粘土は青灰色である。

Ｐ－１９８（第143図）

B地区南M16－83グリッドに位置する。掘方は一辺1.3m、深さ0.5mの円形プランである。底面は平坦で全体として円筒形を呈する。粘土は青灰色で、西側から粘土を流し込んだように西側壁には粘土があるものの、反対の東側壁には底面を含めて粘土がない。粘土の厚さは底面中央で10cm～20cmである。覆土にはロームブロックを含む褐色土が入る。遺物なし。

（7）井戸

井戸または井戸状遺構はA地区に１基，B地区北に１基、B地区南に４基、C地区に２基確認された。形態は大きく２種類に分類できる。すなわち地下１ｍ～２ｍで地表面に向かって擂鉢状に大きく開くものと、地表面から直径がほとんど変化なく細長く円筒形に掘ったものである。

Ｐ－０６９（第144・172図）

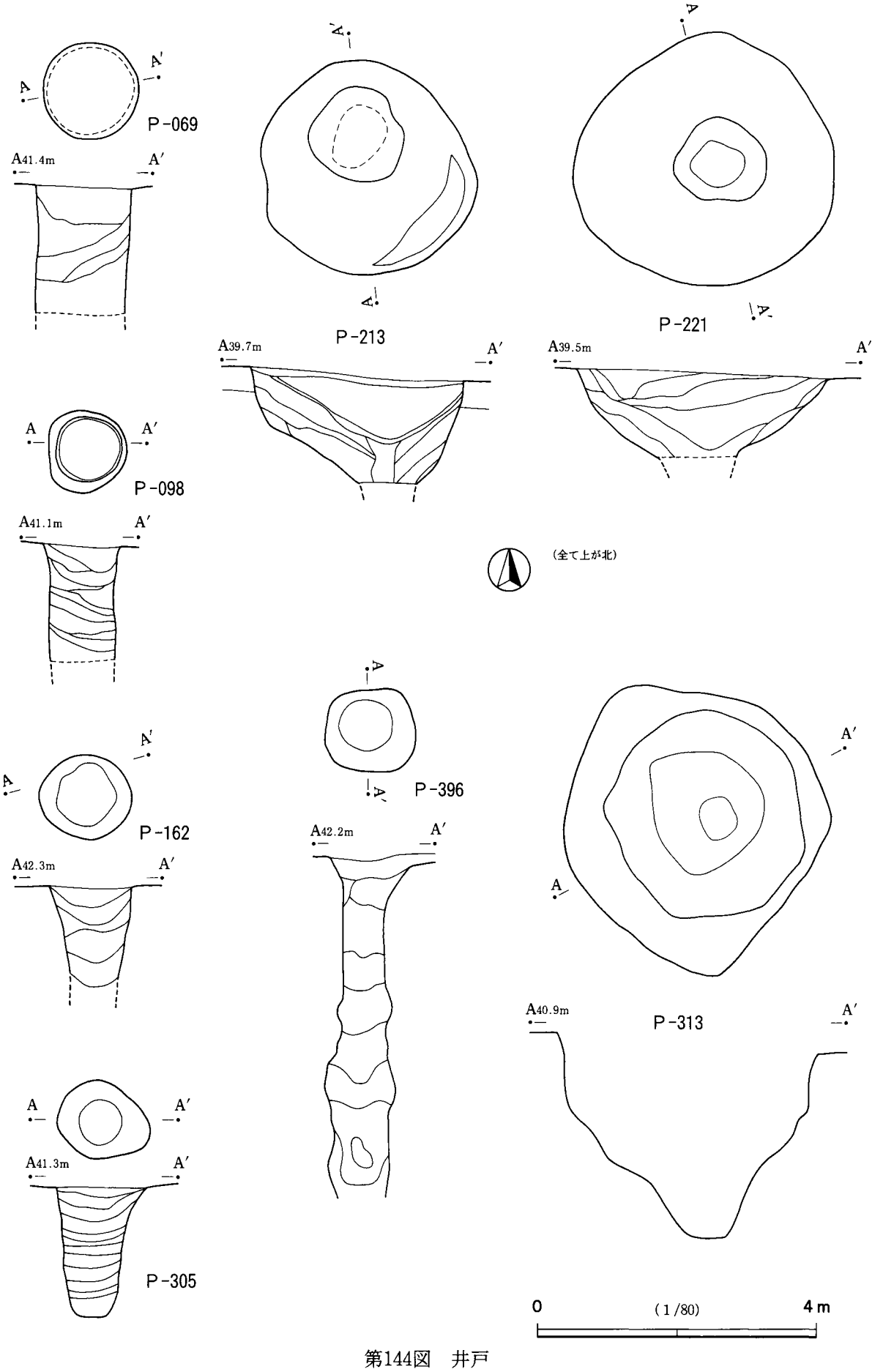
C地区L18－46グリッドに位置する。直径1.4mの極めて規格性をもった円筒形の井戸である。確認面から1.8m以下は調査していないが、かなり深くなるものと予想される。

Ｐ－０９８（第144・172図）

C地区L18－75グリッドに位置する。Ｐ－069に比べるとやや歪みを持つが、同様な規格性をもった井戸である。直径0.9m、深さ1.7m以上である。

Ｐ－１６２（第144・172図）

B地区北M15－26グリッドに位置する。北側には近世掘立柱建物遺構群があり、これらと時期的に一致するのではなかろうか。地下1.2mの地点で直径0.7mで、地上面に近づくにつれてやや開き気味になり、地上面では直径1.3mを測る。深さは1.2m以上ある。


P-069
A41.4m
P-213
A39.7m
P-221
A39.5m
P-098
A41.1m
(全て上が北)
P-396
A42.2m
P-162
A42.3m
P-313
A40.9m
P-305
A41.3m
0
(1/80)
4m

第144図　井戸

Ｐ－２１３(第144図)

Ｂ地区南の中世土坑墓群の南東端、M16－84グリッドに位置する。地下1.6ｍの地点から急激に開き、地上面では直径3.1ｍを測る擂鉢状形態である。覆土断面観察では、一度全体が埋まった後、中心部だけを細く円筒状に新たに掘ったような土層の堆積状態を示す。遺物は常滑産小壺、志野丸皿などが出土している。

Ｐ－２２１(第144図、図版37)

Ｂ地区南の中世土坑墓群の東端、M16－64グリッドに位置する。レベル的に見て最も低いところにある。したがって、土坑墓群に降った雨水が自然に流入する。Ｐ－213同様の擂鉢状に大きく開く形態であるが、新たな筒状の掘り込みは見られない。調査時点では、地下1.2ｍで冠水した。

Ｐ－３０５(第144図)

Ｂ地区南Ｌ16－89グリッドに位置する。確認面でやや開き気味であるが、底面での直径0.6ｍで、深さは1.8ｍと、井戸としては極めて浅い。遺構は人為的に埋められている。中世の土坑墓を区画する整形部内ではなく、その西側外に位置する。

Ｐ－３１３(第144図、図版37)

Ｂ地区南M16－12グリッドに位置する。中世土坑墓群の北端に位置する。レベル的には土坑墓よりもやや高い位置にある。上端の直径3.7m、底面の直径0.5m、深さは2.9ｍでさほど深いとは言えないが、底面から大きく擂鉢状に開く。

Ｐ－３９６(第144図)

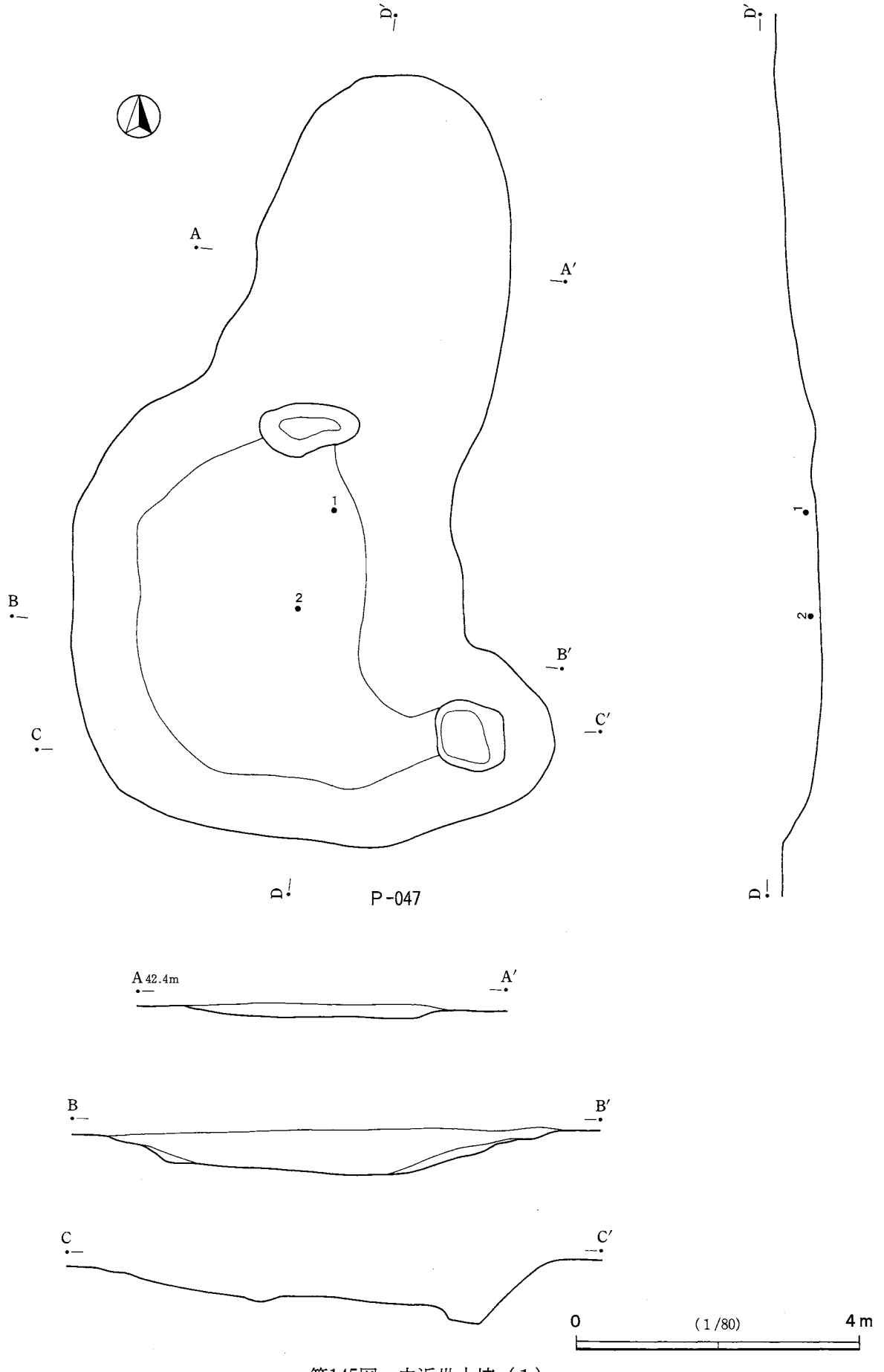
Ａ地区Ｋ17－83グリッドに位置する。周辺には中近世の土坑やピットがあり、すぐ北に掘立柱建物Ｈ－12があり、この遺構と時期的に一致するものであろう。形態は細長い円筒形であり、直径0.6m、深さは4.8m以上で、それ以下の調査は危険であり実施していない。確認面から深さ２ｍ以下で、砂層があるためか壁面が崩れたように広がっている。

(８)土坑

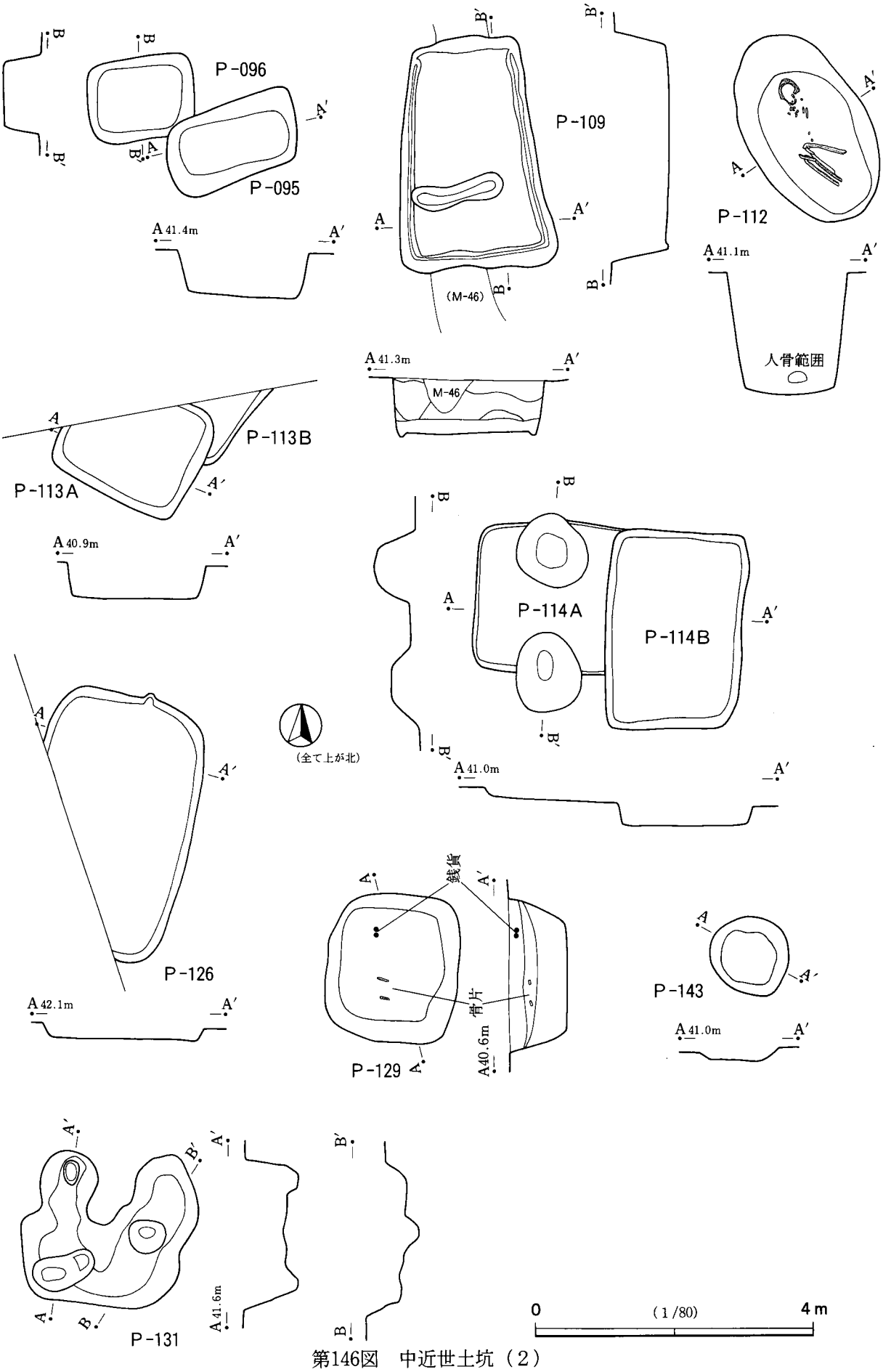
中近世の主要土坑については第12表に一覧表としてまとめた。ここでは、それらのうち、良好な遺物を出土したり遺構の形態に特徴ある遺構のみを取り上げた。なお、一覧表にした以外にも多数の中近世土坑があることを断っておく。

Ｐ－０４７(第145図、図版25)

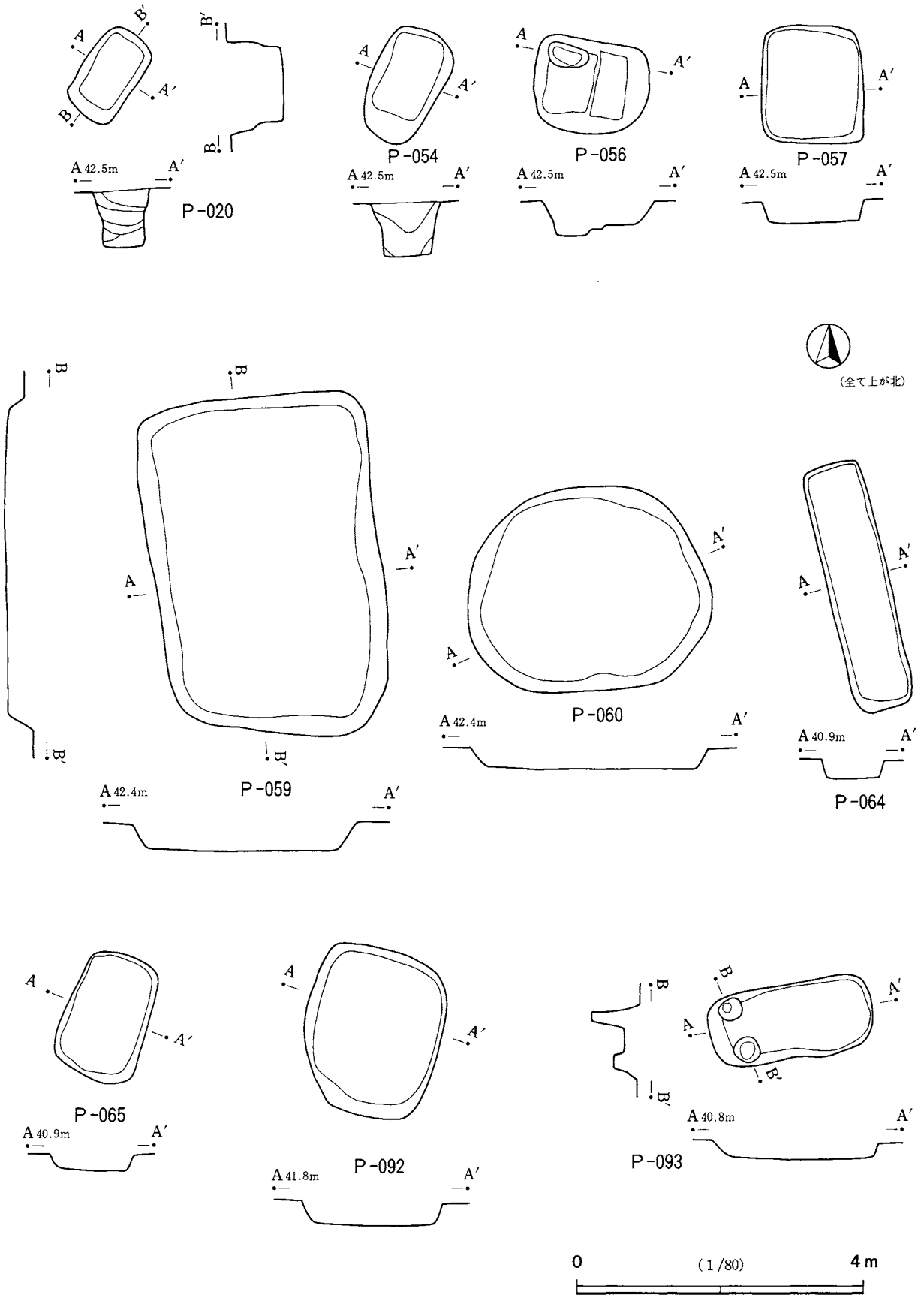
Ａ地区Ｊ17－09を中心とする位置にある。掘方上端の平面は不定形で長軸10.7m、短軸5.6ｍを測る。底面形態も不定形で、北及び東の端でさらにピット状の掘り込みを持つ。底面の深さは最も深いところで１ｍとなるが、底面からの立ち上がりは不明瞭で、だらだらとした傾斜である。底面および斜面は余り凸凹しておらず、しっかりした掘方で、ある期間生活の場となっていたことが想定される。覆土は黒褐色の砂質の軟らかい単一層で、周辺を縄文の遺構に囲まれているため多量の縄文土器を含む。その中で２点



第145図　中近世土坑（1）



第146図　中近世土坑（2）



第147図　中近世土坑（3）

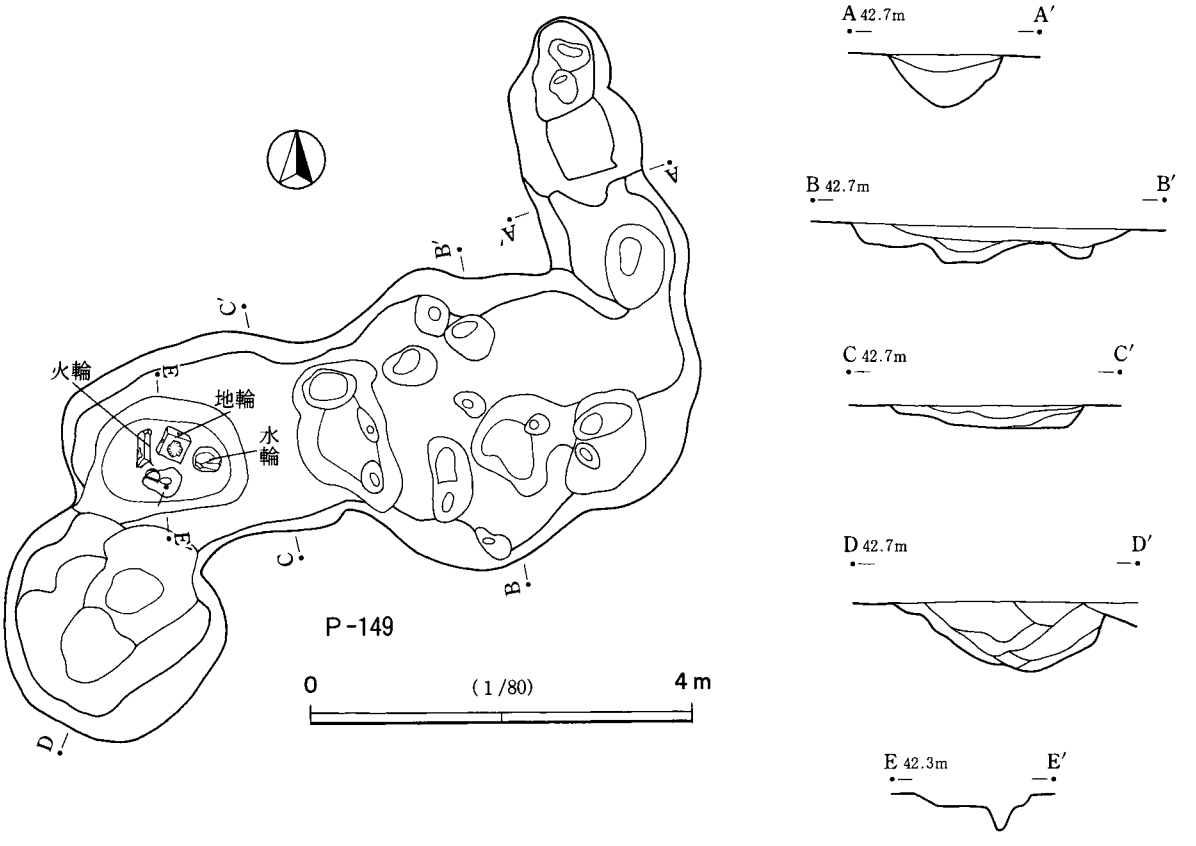
の、ほぼ完形に近いカワラケ(土師質土器)を床面よりやや高い位置で検出している。１が口径11.9cm、底径4.7cm、器高3.9cm、２が直径11.5cm、底径4.7cm、器高3.4cmを測る。口径対底径の比が大きく、体部が比較的長い形態は、酒々井町長勝寺脇館跡出土のカワラケに似ており、典型的な16世紀代のカワラケと言える。この遺構は断定はできないが作業場的遺構と考えられる。

Ｐ－１０９(第146図、図版36)

Ｃ地区の北端Ｌ18－14グリッドに位置する。南側壁幅2.2m、北側壁幅1.6m、南北の長さ3.4mの台形プランで、東、西、南各壁面際掘方には周溝状の溝が掘られている。覆土断面観察では床面から厚さ20cmの黄褐色の貼床を確認している。住居の貼床ほど硬質ではないが平坦である。ただ、周溝は貼床によって完全に埋没しており、この掘り込みがどのような意味を持つのかわからない。また、床面中央やや南よりに長さ1.3m、幅30cm、深さ10cmの溝が掘られているが、この溝の性格も不明である。この遺構は貼床の存在から中世の方形竪穴状遺構に見られるように、作業場的なものであった可能性がある。覆土がＭ－6によって切られる。出土遺物はない。

Ｐ－１３１(第146図、図版36)

Ｄ地区の南端Ｌ20－73グリッドに位置する。全体を見ると北側に開口部をもつ馬蹄形の不定形な形態である。東西2.3m、南北2.2mの大きさになる。馬蹄形の掘り込み中にさらにピット状の掘り込みが３か所見られる。遺構の性格は不明であるが、中世のカワラケが２点(第３、４図)出土している。



第148図　廃棄土坑

Ｐ－１４９（第148図）

Ｂ地区北M15－11グリッドに位置する。複数の不整形な掘り込みの重複が見られるが、おおよそ４基の土坑の集合と考えられる。そのうち西側２基はしっかりした掘り込みであるが、東側２基については掘り込みが不明瞭である。全体の平面の面積は22.4㎡で、掘り込みは深いところで70cmで極端に深いものではない。五輪塔の火輪、地輪、水輪がそれぞれ隣接して一つの小土坑から出土している。これらは床面からやや浮いており、投棄されたようである。空輪、風輪は出土していない。

Ｐ－１７３・１７４（第149・173図、図版26）

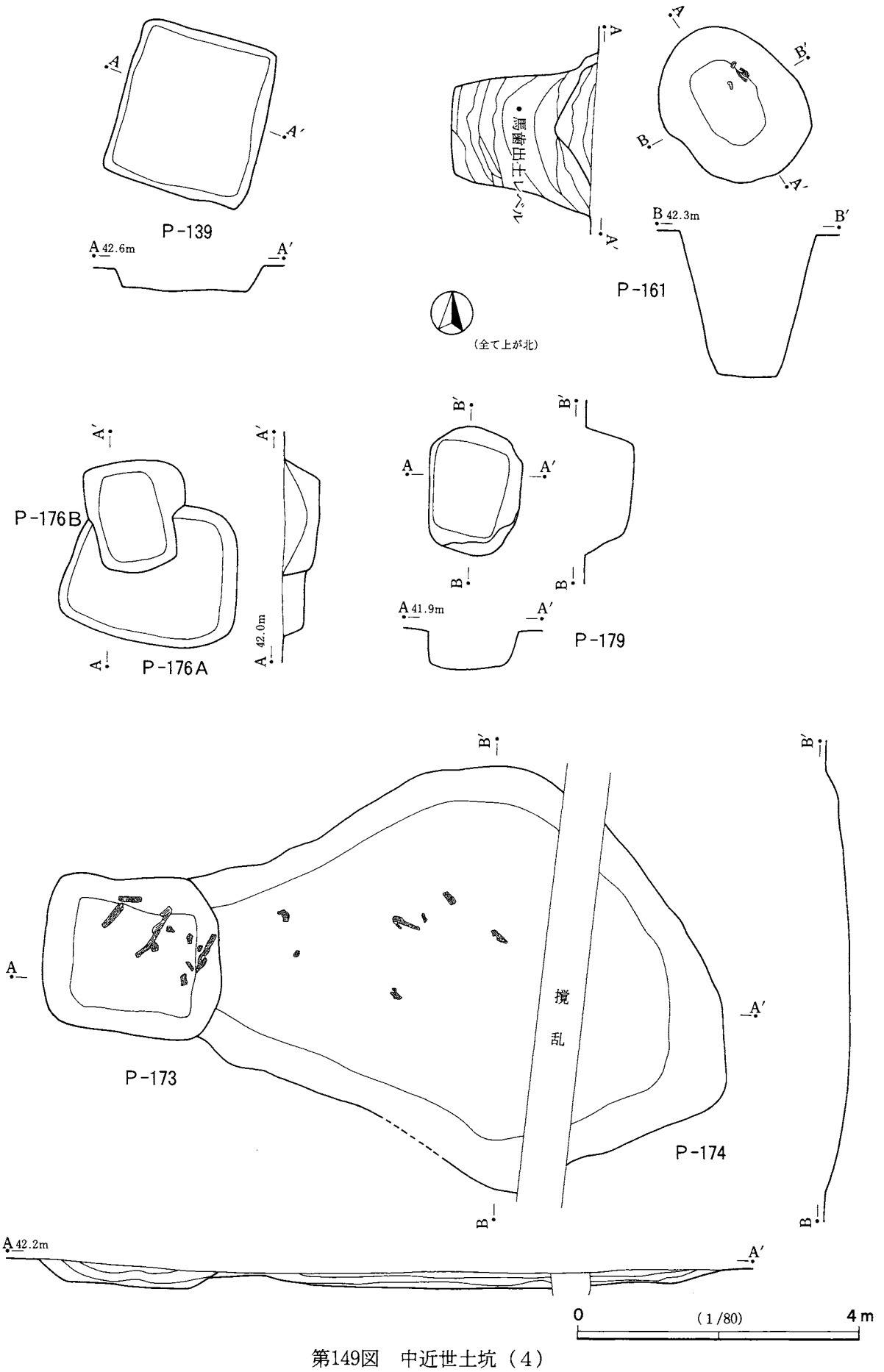
Ｂ地区北M15－17・18グリッドに位置する。Ｐ－173は東西2.5m、南北2.2mの隅丸方形で、深さは30cm面積は5.2㎡を測る。一方、Ｐ－173の東側に接するＰ－174は東西7.8m、南北６m、深さ20cm、面積は31.1㎡の不整形の形態の土坑である。調査時には、別遺構と考えて、別個の遺構番号を付したが、覆土中より検出した木材の分布状況を見ると、両遺構にまたがって検出している。土層断面の観察からは調査時点で両者に新旧関係があることを想定したが、木材の分布状況から見る限り、同時期に存在していたと考えるのが妥当であろう。さて、この木材であるが、材質は不明であるものの、加工を施していない丸太状のものであったことから、この遺構か近接する遺構の柱などの簡易な構造材であった可能性もある。土坑はいずれも底面が平坦で、粘土は貼っていなかったものの非常に硬く締まっており、鉄分の沈着も見られた。木材が朽ち果てずに残っていたのも覆土に適度に水分を保持していたからだと考えられる。遺物では近世の陶磁器が比較的まとまって出土している。63は天目茶碗の体部から口縁にかけての破片で瀬戸５小期、80の鉄絵皿は美濃２小期、87の摺絵皿は美濃６小期、75の丸碗、100の磁器小杯は肥前産で17世紀末～18世紀はじめ、108の磁器碗は18世紀後半頃のもので、総じて17世紀前半から18世紀後半の遺物を含む。主体となるのは17世紀後半から18世紀はじめのものである。

Ｐ－１９３（第150図、図版37）

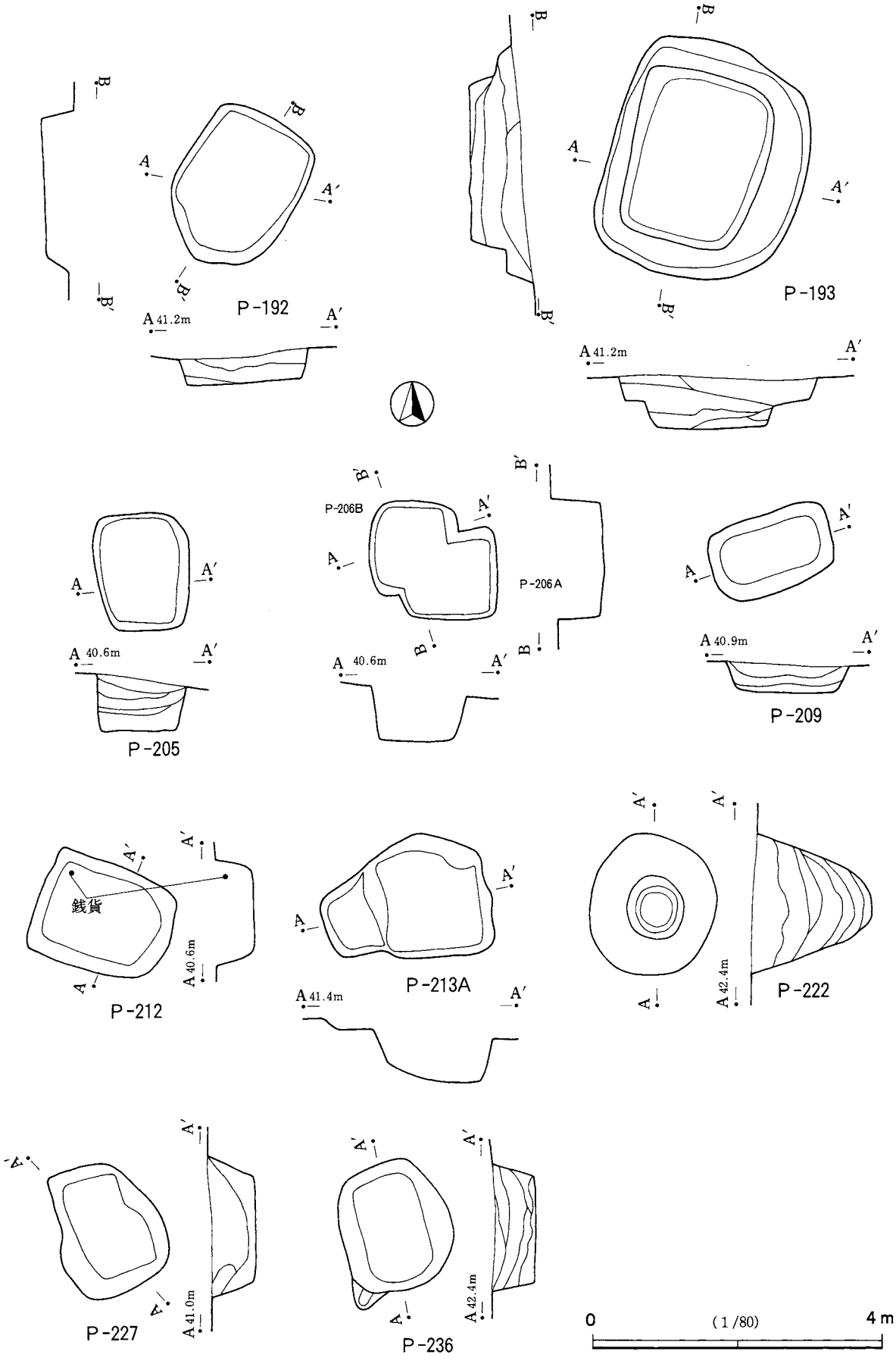
Ｂ地区北でも南端の南に緩やかに傾斜したN15－76グリッドに位置する。長軸3.0m、短軸2.6mの長方形プランの土坑の内側に更に一段一回り小さい方形土坑を掘り込んだ２段からなる土坑である。内側の小形の土坑は長軸2.4m、短軸1.9m、深さ0.4m～0.5mを測る。覆土断面観察では２つの重なる土坑に時期差はなく、埋没段階では明らかに２段であったことがわかる。遺物なし。

Ｐ－２１６（第151図）

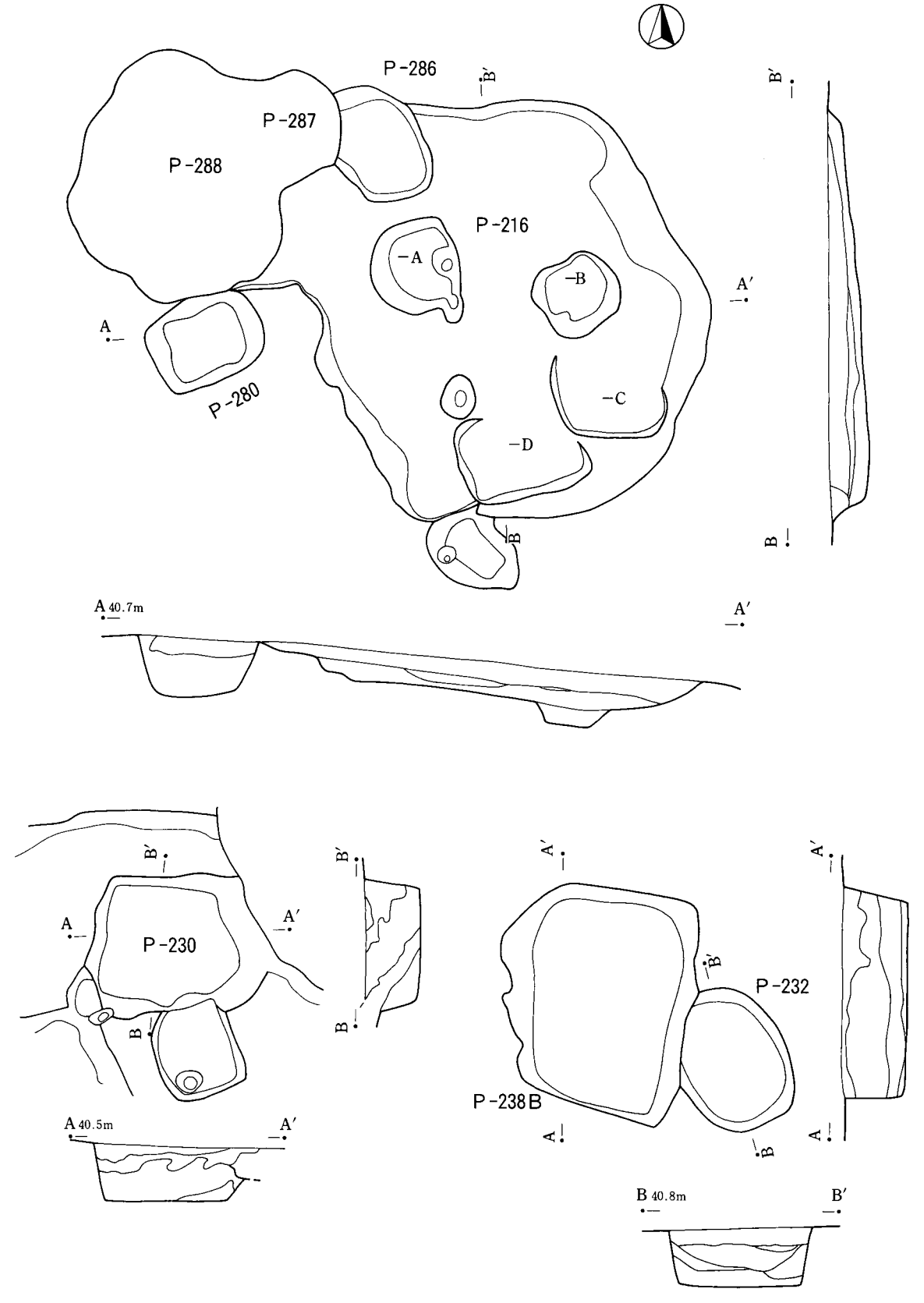
Ｂ地区南の土坑墓群を構成する土坑である。北西側で地下式坑Ｐ－287、288と重複する。また、周囲にはいくつもの土坑墓が存在する。Ｐ－216は東西6.5m、南北5.6mの範囲に大きな浅い掘り込みを持ち、さらにその中に土坑が４基存在するように見える。その４基をＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄとしたが、覆土観察では個々の土坑墓が埋没した後、この大きな平坦面を造り出しており、個々の土坑墓の方がより古いことがわかる。さらに、この広い平坦面には約20cmほどの厚さで暗褐色土の硬く締まりのある貼床状の面が確認でき、この範囲を生活面として使用していたようである。出土遺物には縁釉小皿、平碗、直縁大皿が見られる。



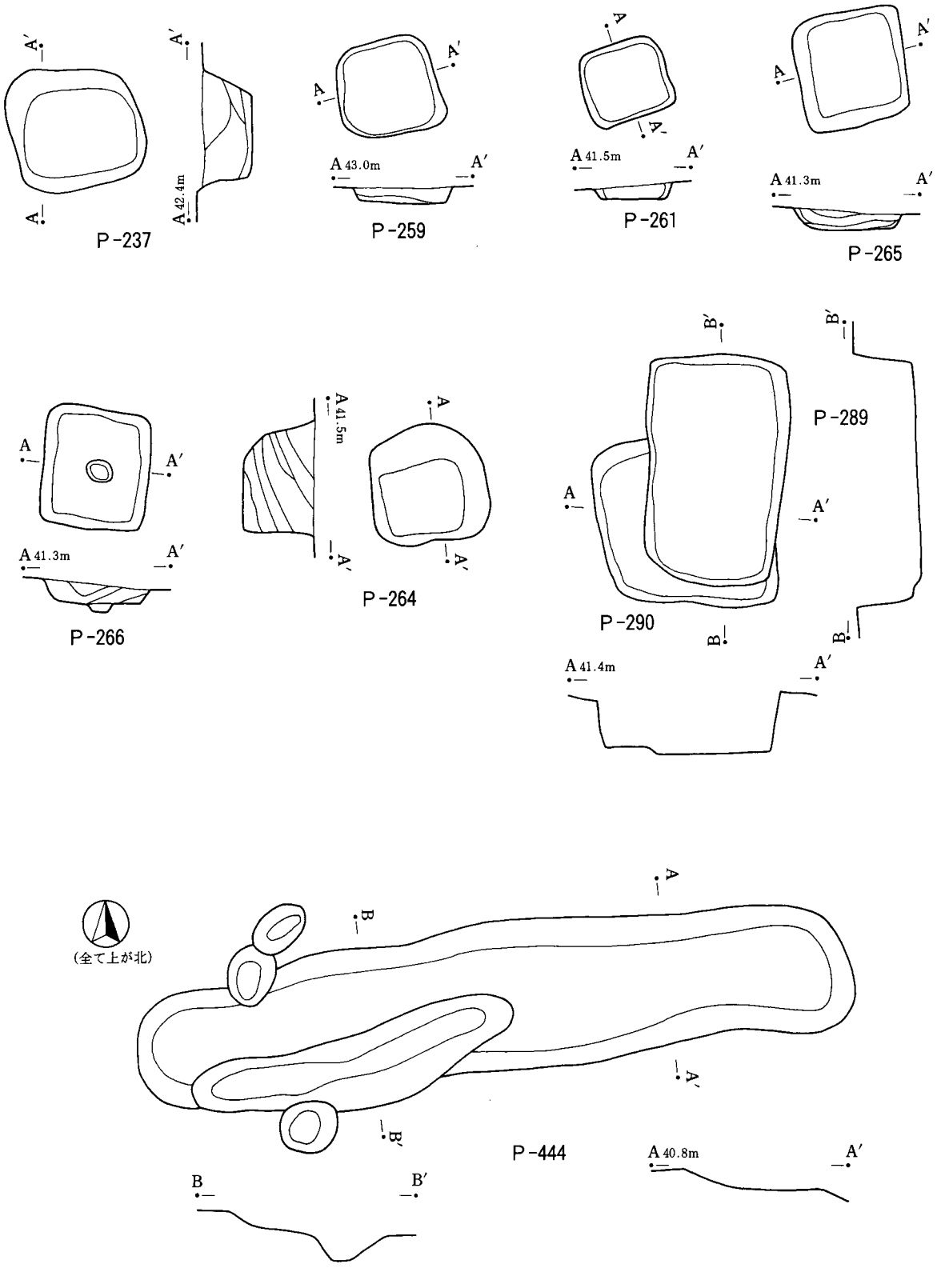
第149図　中近世土坑（4）



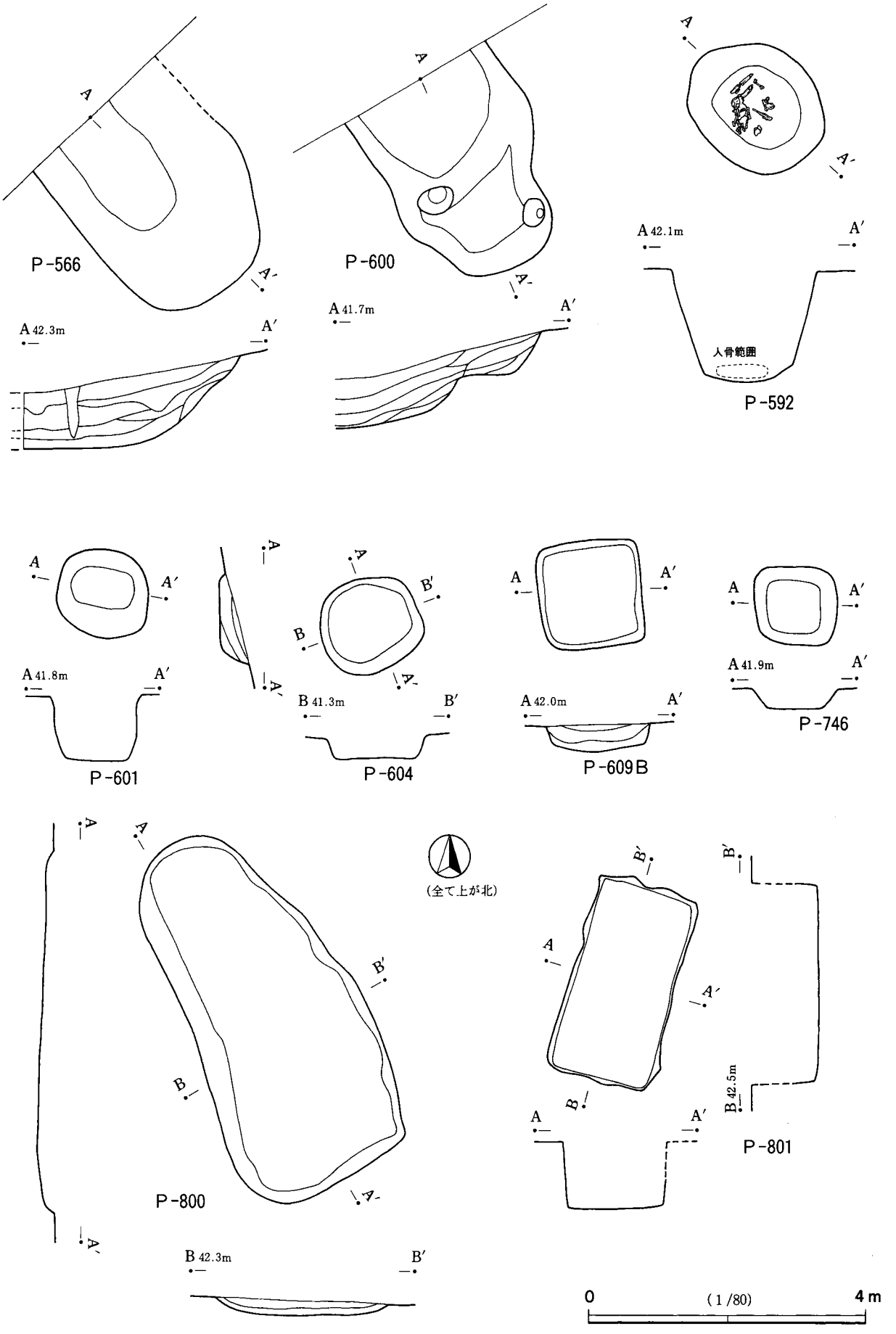
第150図　中近世土坑（5）



第151図　中近世土坑（6）



第152図　中近世土坑（7）



第153図　中近世土坑（8）

Ｐ－８０１(第153・173図)

Ｂ地区北M14－86グリッドに位置し、近世掘立柱建物跡(Ｈ－05・07)と重複する。掘立柱建物跡の柱穴が、Ｐ－801の覆土を切っているので、土坑の方が古いことがわかる。長軸の方向はＮ－15°－Ｅで、掘立柱建物跡の主軸と微妙にずれる。長軸2.9m、短軸1.5m、深さ1.0mを測り、底面及び壁面がいずれも平滑であり、四隅も角がはっきりしているのが大きな特徴である。これは地下式坑(Ｐ－182・183)の掘方と共通しており近世のものと思われる。したがって掘立柱建物跡と余り時期差はないと考えられる。作業場としては狭いので、貯蔵施設と考えられる。

(９)溝状遺構

Ａ地区で５条、Ｂ地区北で17条、Ｃ地区で６条、Ｄ地区で２条検出している。いずれも近世以降のものと考えられる。ここでは特徴ある溝のみ説明する。

Ｍ－１６(第121・139・170・173)

Ｂ地区北の南端に位置し、地下式坑(Ｐ－163・164・175・177・178・191)を切るように谷に向かって開いたコの字状に回る。断面はなだらかで浅く、幅0.7m～2.5m、総延長45mを測る。地下式坑が埋没した後、各地下式坑の覆土を切るように造られている。Ｐ－179以東でプランが確認できなくなるが、おそらくＭ－20に続くと考えられる。一方で、西の方に目を向けてみると、Ｍ－14に続くように見える。

Ｍ－１９(第121・173図)

Ｂ地区北Ｐ－173・174から派生するように東側に延び、現道の下に入り東進するようである。一方で、西方向に目を向けると、Ｍ－15・13へと続くように見える。Ｐ－173・174と時期差はあまりない遺構と考えられる。断面は深さ0.15m、幅１m前後で立ち上がりはあまりはっきりせず、総延長15mを測る。

Ｍ－２１(第121・173図)

Ｂ地区北の東側に位置し、ほぼ南北方向に延びる。すぐ東側をＭ－24が平行している。Ｍ－21は断面で、幅0.7m、深さ0.25mの半球形をなし、総延長16m程にのぼる。底面にはさらに細長い土坑状の掘り込みが規則的に並ぶ。古墳時代竪穴住居(Ｄ－019)以南で痕跡がなくなる。

２　遺　　物

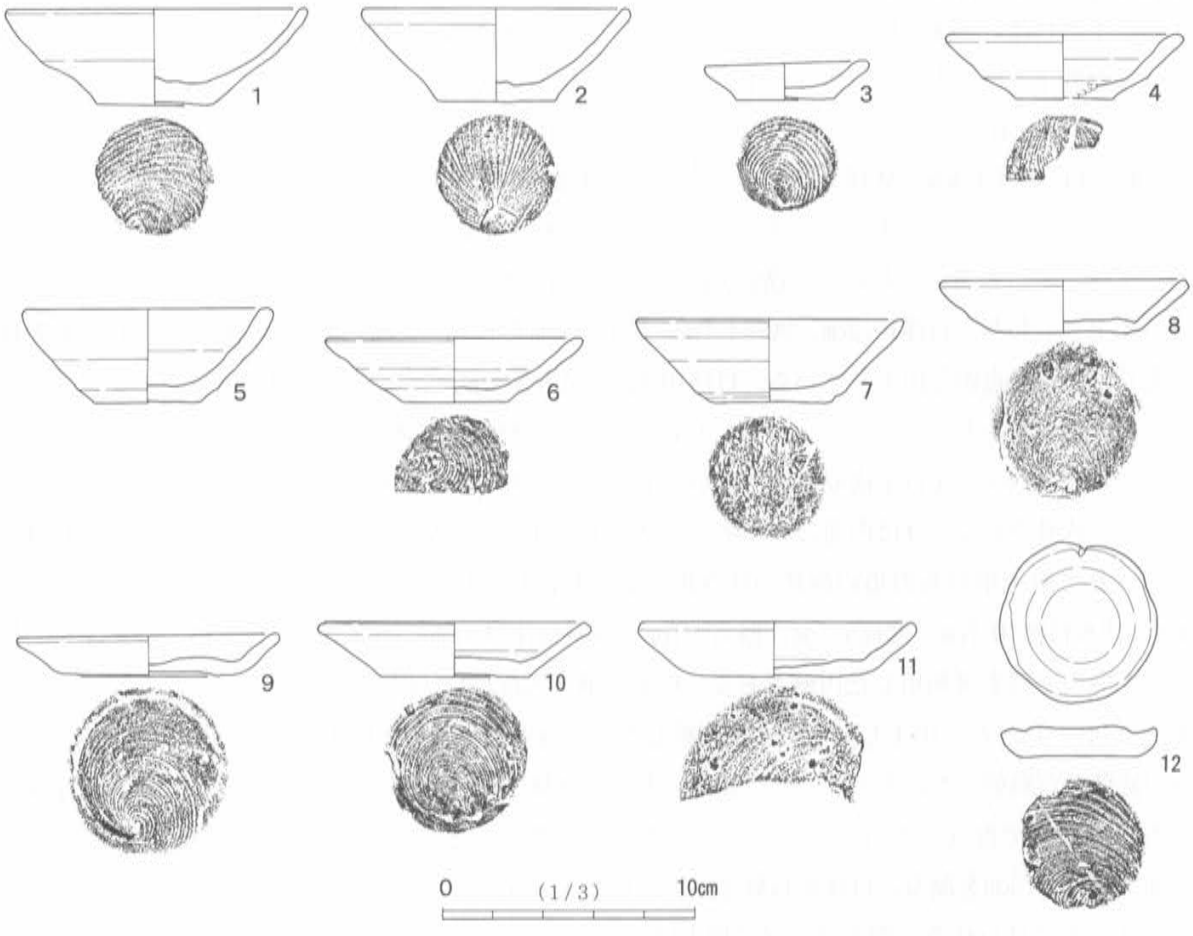
中近世の遺物には土器・陶磁器・石製品・金属製品・鉄滓などがあげられる。

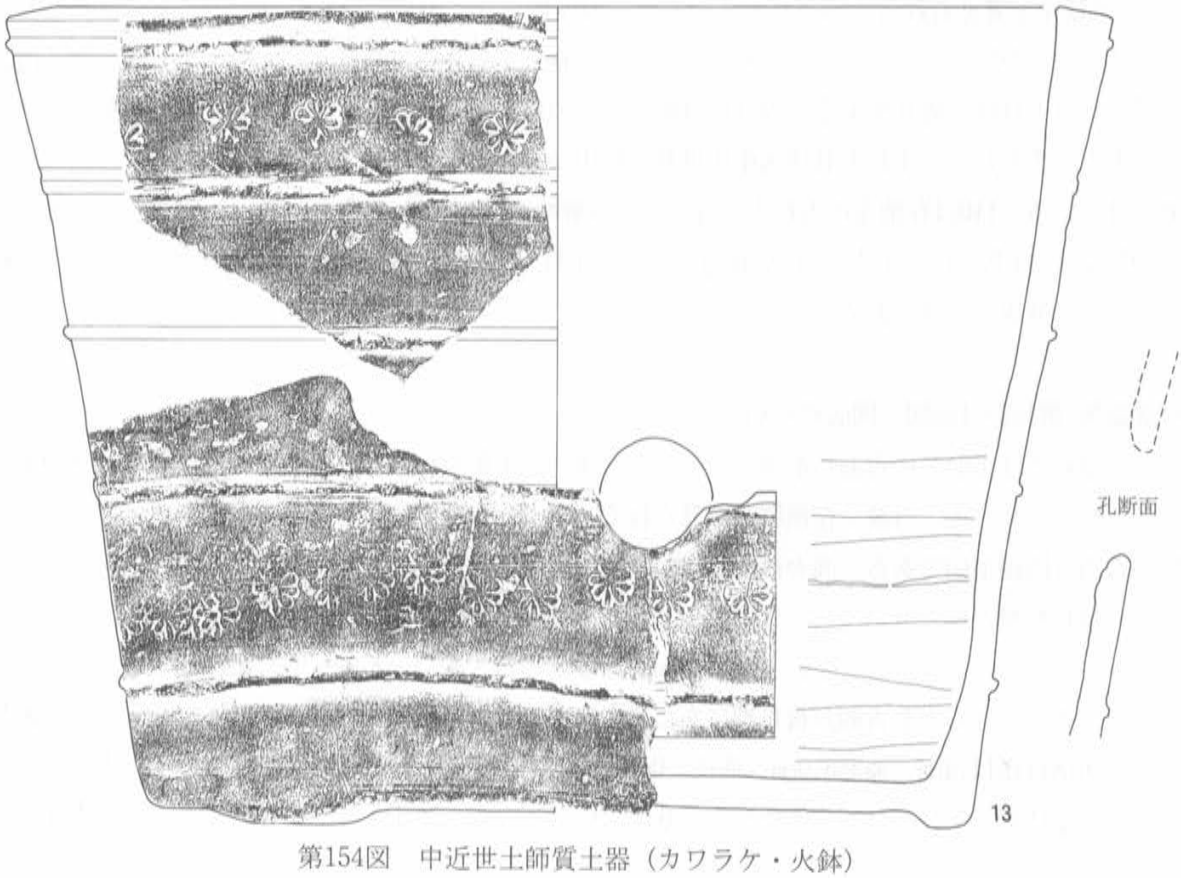
中世の遺物は遺構が複雑に切り合うＢ地区南土坑墓群に集中している。一方、近世の遺物はＢ地区北から多く出土しているが、Ｂ地区南では中世土坑墓群の南端から近世初頭(17世紀中葉)の遺物が複数個体出土しており、遺跡の中世から近世への移行を知る上で重要である。他のＡ、Ｃ、Ｄ地区からの中近世遺物の出土量は極めて少ない。

第25表に地点別の土器・陶磁器出土量を、また、第21表に陶磁器についてはすべての破片を、土器についてはその一部をまとめた。

(１)土器(第154・156・158図、図版82・83)

褐色に焼けた素焼きの土器の中で、最も多いのが土師質小皿のいわゆるカワラケである。総破片数は86





第154図　中近世土師質土器（カワラケ・火鉢）

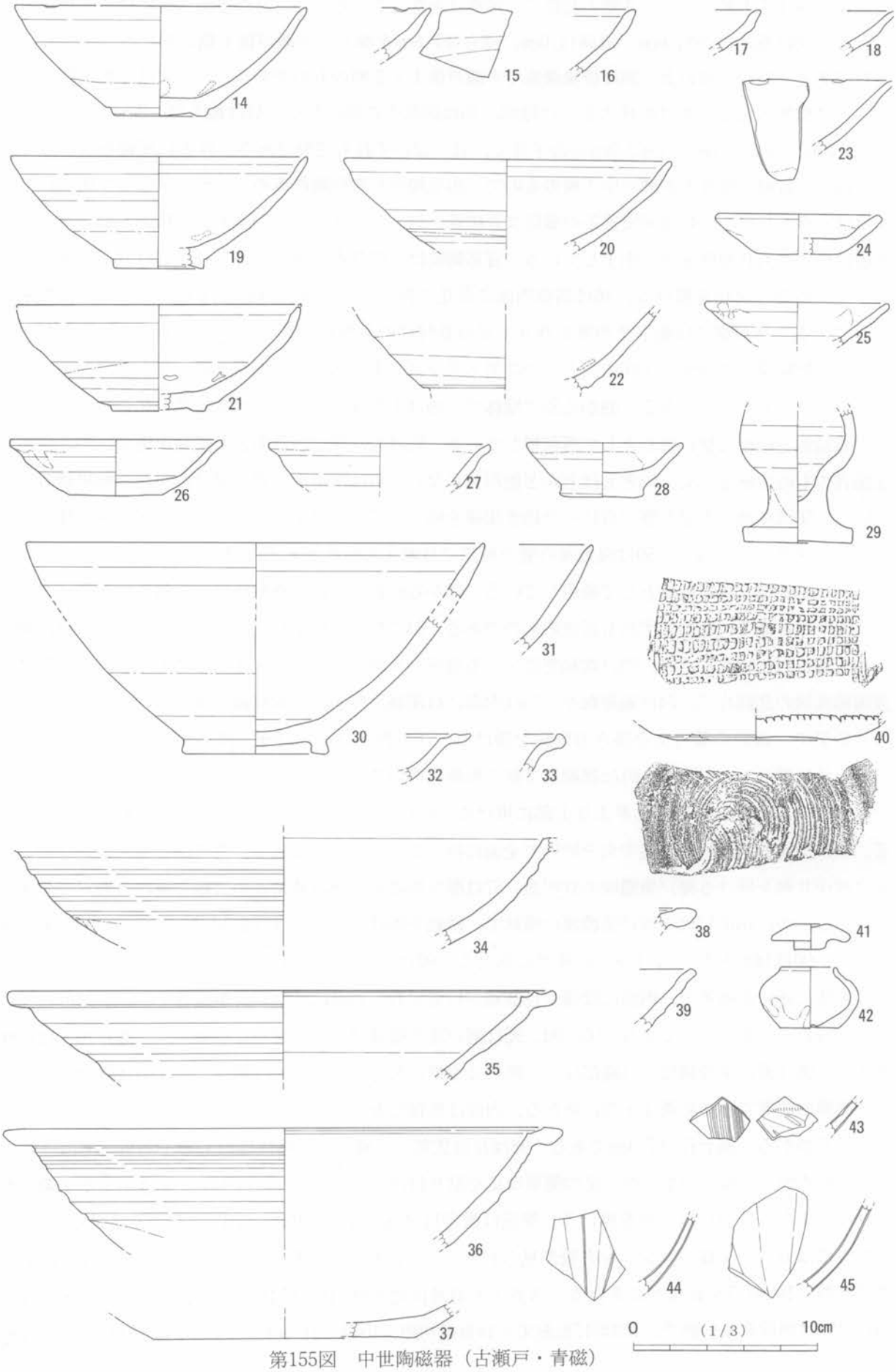
点を数える。１から11はそれぞれ特徴のある形態である。１、２はＡ地区中世土坑(Ｐ－047)から出土している。１が口径11.9cm、底径4.7cm、器高3.9cm、２が直径11.5cm、底径4.7cm、器高3.4cmを測る。いずれも口径対底径の比が大きく、体部が比較的長いので16世紀代のものと考えられる。３、４はＤ地区土坑(Ｐ－131)から出土している。大小２形態あるが、いずれも小型である。３は口径6.5cm、底径3.8cm、器高1.5cm、４は口径9.4cm、底径3.8cm、器高2.6cmを測る。５はＡ地区土坑(Ｐ－499)から出土している。１、２に比べ口径は狭いが体部の器厚は厚く直線的に口縁まで延びる。極めて中世的な形態で、14世紀から15世紀代のものと考えられる。口径9.9cm、底径4.2cm、器高3.6cmを測る。６はＡ地区Ｋ16－70グリッドから出土しており、口径10.2cm、底径4.1cm、器高2.4cmを測る。７はＣ地区掘立柱建物(Ｈ－08)の柱穴が密集している地点から出土している。口径10.6cm、底径5.4cm、器高3.2cmを測る。８はＢ地区北の北端地点から一括資料として取り上げている。口径9.8cm、底径5.3cm、器高2.0cmを測る。９から11はＢ地区北掘立柱建物(Ｈ－05・07)を構成する柱穴から出土している。８を含め扁平で内面立ち上がり部がくぼむのが大きな特徴である。９は内面にカーボンやタールが付着し、真っ黒に変色している。また、11は高熱にさらされて胎土中からの黒い泡状の吹き出しが無数に見られる。９が口径10.4cm、底径5.5cm、器高1.6cm、10が口径10.7cm、底径5.7cm、器高2.1cm、11が口径11.0cm、底径5.7cm、器高2.1cmを測る。12は土師質土器の底部を再利用した円盤である。Ｃ地区地下式坑(Ｐ－061)から出土している。13はＢ地区北地下式坑(Ｐ－182)から出土した木製の桶を模した土師質火鉢である。出土状況から見て１個体と考えられるが底部から胴部にかけての部分と口縁部に大きく分割され、接合できない。この図は器面の厚さから推定し、図面上で復元したもので、タガが５本入り、外面を５分割している。推定口径43.5cm、器高31.6cm、底径32.5cmを測る。口縁から数えて１面目と４面目に草花の連続押印文が入り、器面と一体化した足が３か所に見られる。内面はヘラで横方向にナデられている。また、上から４本目のタガには直径4.5cmの通気孔と考えられる穴が穿たれているが、内面側にはこの孔に沿って粘土の剥離痕が見られるので、ここに空気を取り入れるための筒形に成形された粘土が取り付けられていたようである。60、61、62は土師質焙烙の口縁部破片である。内耳には細い紐状の粘土を貼り付けている。粘土紐接合部では体部が外面に大きく膨らむ。いずれもＢ地区南中世墓坑群中からの出土で、胎土には雲母粒を含み外面は使用のため煤けている。110は在地産の近世土師質のカマド敷輪の小片である。111、112は土鈴で、111がＢ地区北近世地下式坑(Ｐ－183)から、112がＢ地区北近世土坑(Ｐ－174)から出土している。胎土は白色で精選されており、焼成も良好である。

(２)陶磁器(第155～158図、図版83～89)

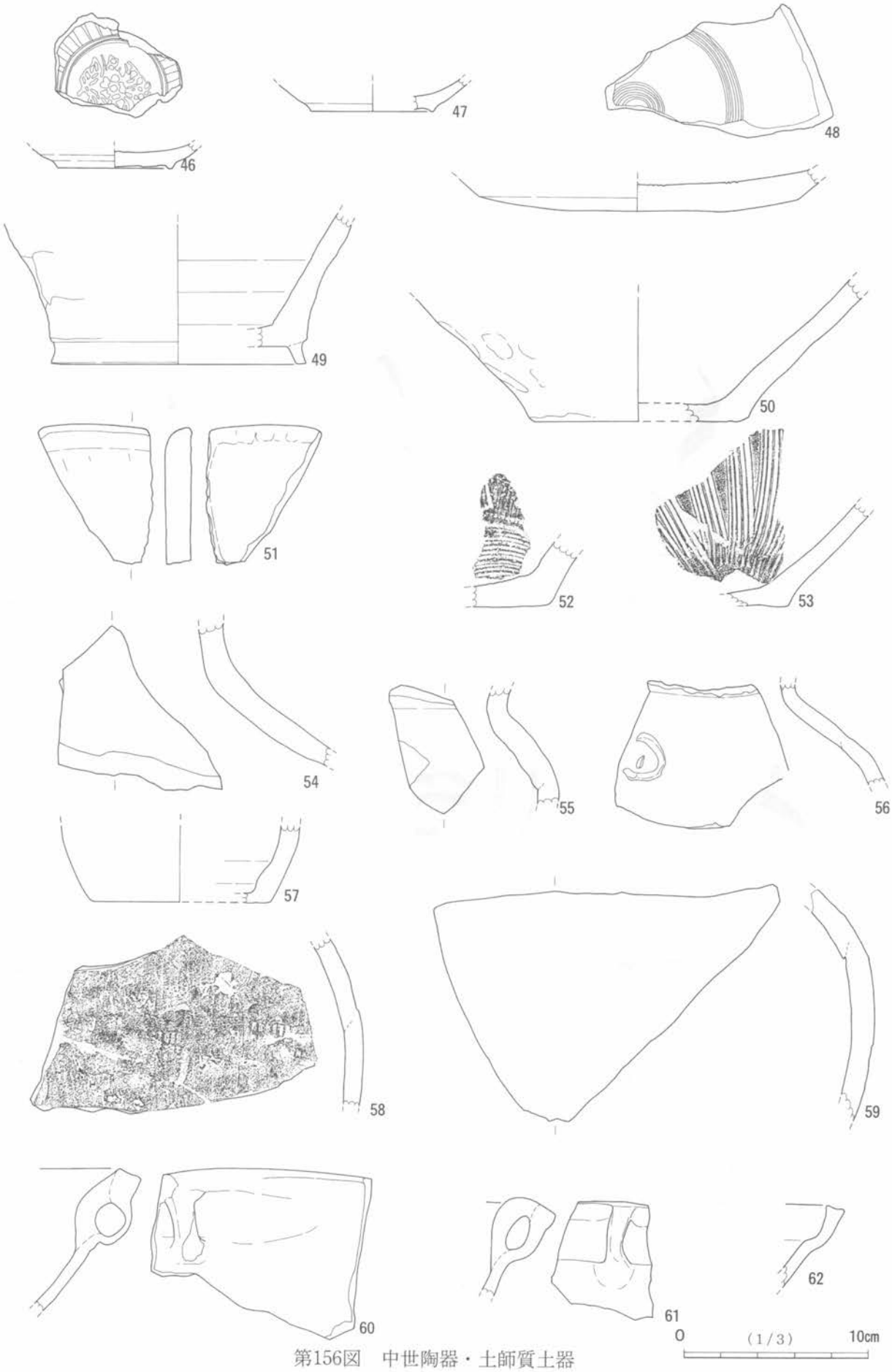
中世陶磁器には圧倒的に古瀬戸が多く、その他常滑、渥美製品が見られる。近世陶磁器には瀬戸美濃や肥前製品をはじめ、堺、丹波、在地製品が見られる。そのうち磁器はすべて肥前産である。

14から23は灰釉平碗である。高台は削り出し高台で内面には焼成時のハリ支え痕が残るものが多い。特に14、15は口縁端が輪花状になっている特殊なものである。14はＣ地区中世地下式坑(Ｐ－091)から出土しており、口径15.9cm、器高6.0cm、底径4.9cmを測る。15が古瀬戸後Ⅰ期、21が古瀬戸後Ⅳ期、23が古瀬戸後Ⅱ期以外はほとんどが古瀬戸後Ⅲ期にあたる。24から27は縁釉皿で、24が灰釉を、それ以外は鉄釉を掛ける。26は口径11.4cm、器高3.0cm、底径5.0cmを測る。いずれも古瀬戸後Ⅲ期にあたる。28は口縁端に鉄釉を掛ける仏供で、底部は回転糸切り痕を残す。焼成不良で、胎土も軟らかく、鉄釉も発色が鈍い。29

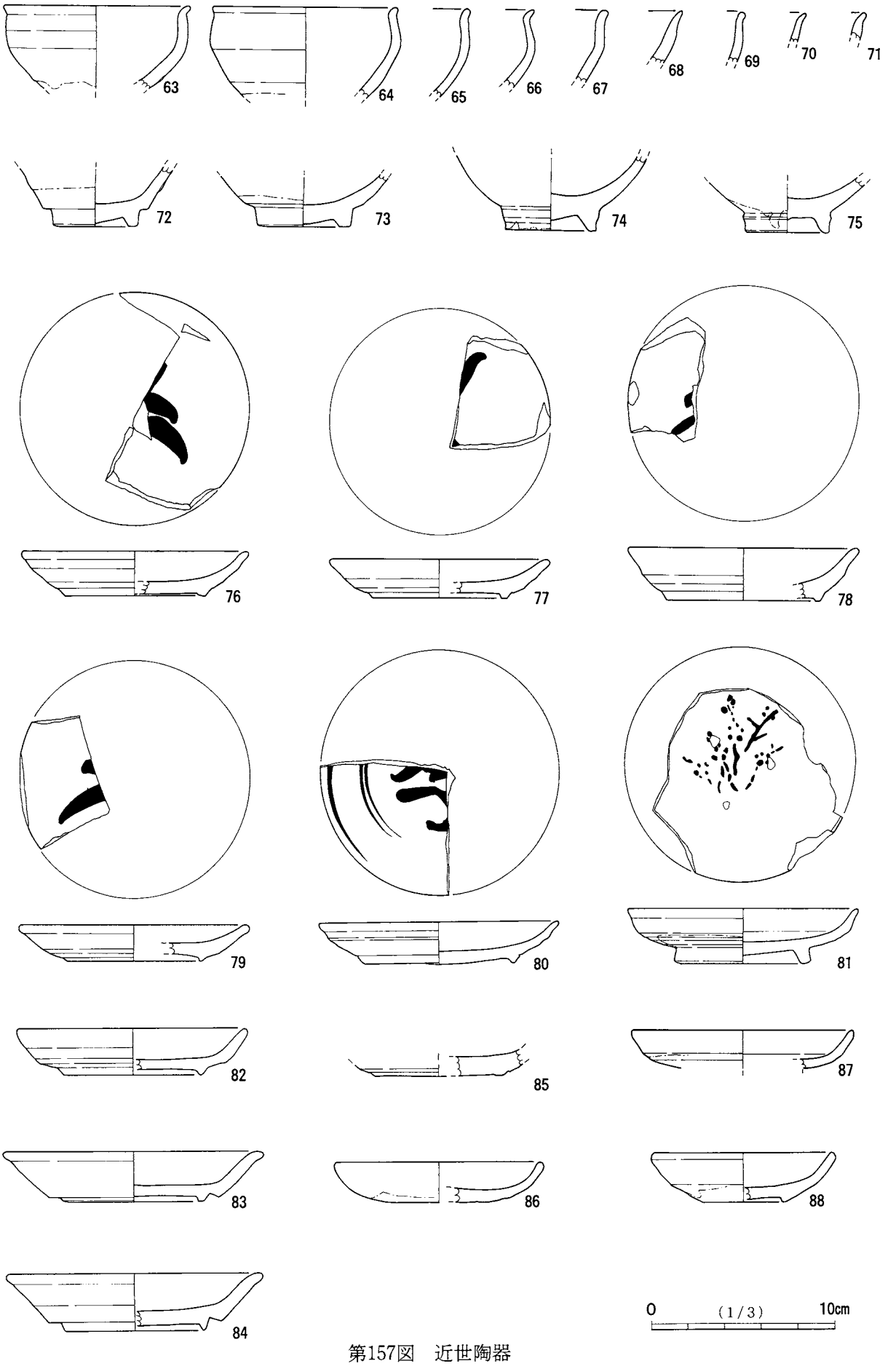
は灰釉を掛ける古瀬戸中Ⅰ・Ⅱ期の花瓶で、釉薬は剥落している。30、31は古瀬戸碗型鉢で灰釉を漬け掛けする。30は推定口径24.6cm、器高11.0cm、高台径7.8cmを測り、古瀬戸後Ⅰ期にあたる。32、33は折縁中皿である。34から36および38は折縁深皿で古瀬戸後Ⅰ・Ⅱ期のものである。35の口径は推定29.6cmになる。37は盤類の底部、39は直縁大皿の口縁部、40は卸皿の底部になる。41は最大径4.2cmの合子蓋、42は胴径5.3cm、器高3.2cm、口径2.9cmの合子身で、41、42いずれも完形である。外面に灰釉を掛ける。前者が古瀬戸中Ⅲ期、後者が古瀬戸中Ⅰ期のもので、出土地点もやや離れるので、セットとして使われていたかははっきりしない。43は同安窯系の櫛描文青磁碗、44、45は龍泉窯系の連弁文青磁碗の胴部片である。青磁はいずれもＢ地区北から出土している。貿易陶磁はこの３点のみである。46、47は丸皿か端反皿の底部片で、外面に灰釉を掛ける。46は底部内面に草花の押印文を、体部内面には丸ノミ削ぎで花弁をあしらっている。高台裏には輪ドチの痕が残り、高台畳付けのみ無釉である。大窯第１・２段階のものである。48は折縁深皿で内面に４筋の同心円の陰刻スタンプを中心部と立ち上がり部の２か所に押印する。古瀬戸中Ⅰ・Ⅱ期のものである。49から53は擂鉢で、49は山茶碗系、50、51は常滑産の炻器質のもので、51は口縁端部を砥面に使い砥石として再利用している。52は瀬戸産で内外面とも錆釉を施す。53は在地産の土師質のものである。52、53ともほとんど使用痕がない。54は常滑産の甕、55は同小壺で転用砥石となっている。56は在地産の壺か甕で肩にヘラ描き沈線を描く。57は常滑産の壺底部、58は常滑産の甕で肩部に格子状のタタキ目を残す。59は渥美産の甕の肩部でＢ地区北中世地下式坑(Ｐ－177)から出土している。55、59は断面部を転用砥石として使用している。63から68および72は鉄釉を施す天目茶碗の破片で、68のみ古瀬戸中Ⅳ期で、他はいずれも近世のものである。63で口径は推定10.0cmになる。69、70、71は瀬戸産の端反碗で、鉄釉を掛ける。73は鉄釉を掛ける美濃産の丸碗で、美濃３・４小期にあたる。74、75は肥前産陶器丸碗の底部片で、74は銅緑釉を、75は内面に白濁釉、外面には銅緑釉を掛け分けている。76から80は鉄絵皿で、鉄絵の蘭竹文を描き志野釉を掛ける。76で推定口径12.3cm、器高2.3cm、高台径7.5cmを測る。近世初期のものである。81は摺絵皿で鉄で梅樹を描いている。内面には三又トチン痕を残す。高台は付け高台で灰釉は外面体部上半より上部に掛ける。82は志野丸皿、83は反皿で、高台裏に輪ドチ痕が残る。84は反皿で灰釉は高台裏中央を除いて全面に掛ける。85は志野丸皿で、内外面とも志野釉を掛ける。86は御深井釉を掛ける瀬戸美濃産の灯明皿、87は瀬戸摺絵皿、88は碁笥底の灰釉を掛ける瀬戸美濃産灯明皿である。89は18世紀代の瀬戸美濃産の擂鉢で、錆釉を掛ける。口径は推定30.4cmになる。90、91は堺産擂鉢で、90は18世紀代、91は18世紀後半にあたる。92は丹波産の擂鉢で胎土中に多量の石英、長石を含む。全体に薄い茶褐色で、内面には薄く自然釉が付着する。外面はロクロ目が顕著で、ユビ圧痕は見られない。17世紀中葉のものである。93、94、95は瀬戸産の擂鉢で、93が瀬戸４小期、94は瀬戸10・11小期にあたる。96は瀬戸産煙硝擂の口縁部片で、瀬戸４小期にあたる。93、96は錆釉、94、95は鉄釉を施す。97は煙硝擂の底部で瀬戸美濃４小期にあたる。内面は無釉でカーボンがしみ込んでいて黒色を呈し、外面には鉄釉が掛かる。高台径は7.3cmである。98は片口底部で、瀬戸８小期以降のものである。99は瀬戸美濃産半筒形香炉で、指でつまんだ三足の簡単な足を貼り付けている。外面には丸ノミ削ぎによる半菊文が見られる。また、外面には灰釉を掛ける。筒径は推定11.4cmになる。100から102は肥前系染付小杯で、100の外面にはカエデ文様のコンニャク版が見られる。胎土はやや青灰色がかっている。100が17世紀末～18世紀初頭、102が17世紀後半にあたる。３点ともＢ地区北土坑(Ｐ－174)から出土している。103～105、107、108は肥前産染付碗で、103が17世紀末～18世紀初頭、104が18世紀代、107が18世紀代、108が17世紀



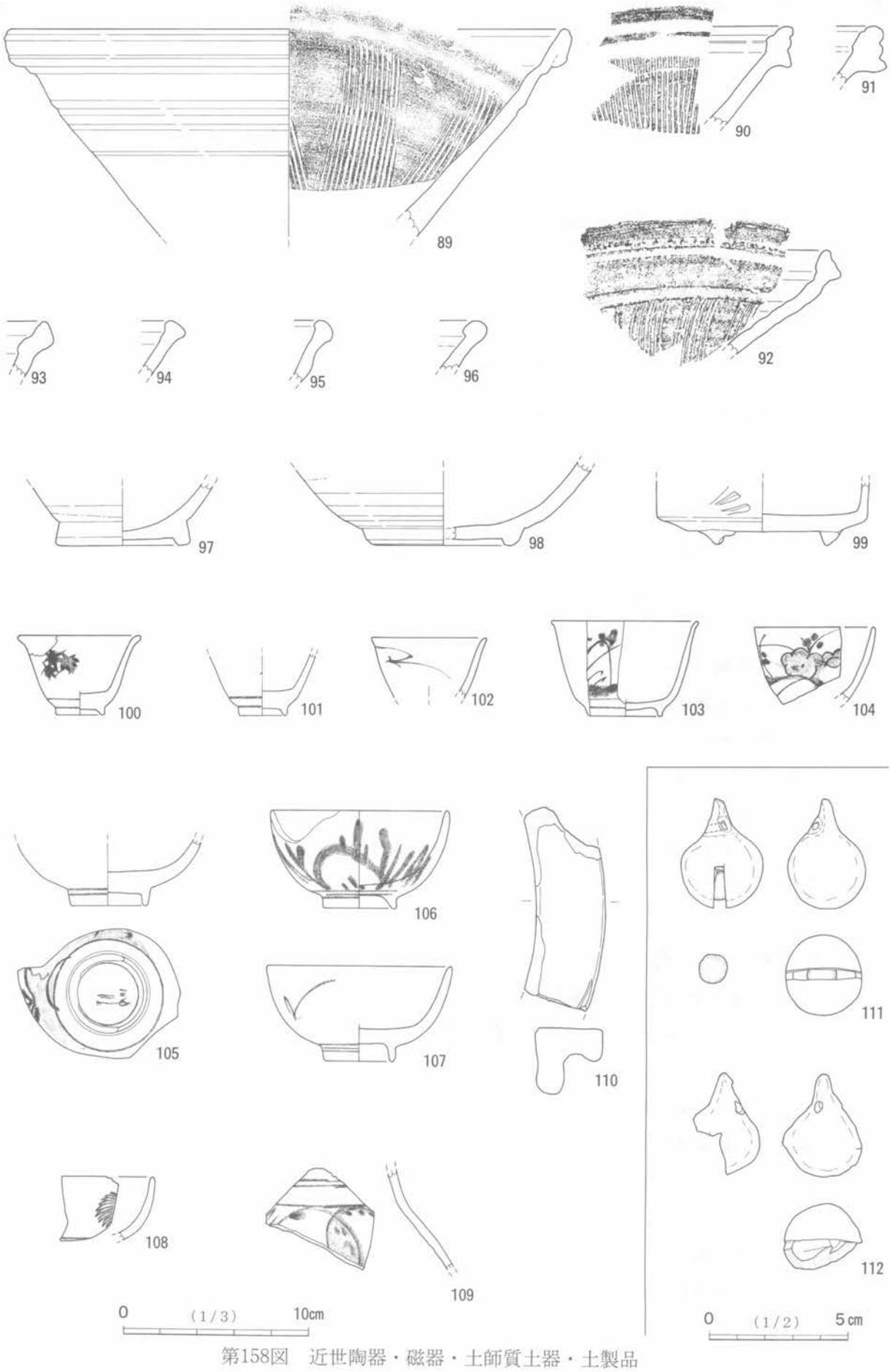
第155図　中世陶磁器（古瀬戸・青磁）



第156図　中世陶器・土師質土器


63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
85
87
83
86
88
84
0
(1/3)
10cm

第157図　近世陶器



第158図　近世陶器・磁器・土師質土器・土製品

末～18世紀初頭にあたる。103、104、108はＢ地区北土坑（Ｐ－174）から出土している。106は瀬戸美濃産の陶胎染付碗で、厚く透明釉薬を掛ける。貫入が著しい。口径9.7cm、高台径4.0、器高5.1cmを測る。109は肥前系染付瓶の肩部片で、17世紀後半のものである。

（３）石製品

①砥石（第159～163図、図版91・92）

石製品では圧倒的に砥石が多い。砥石48点中11点には櫛歯状工具痕があり、これらはいずれも確実に近世のものである。断面が未使用状態では方形で、使用により側面形態が山形になるものが多く認められる。これらのは用途は鎌砥で手に持って使う提砥であろう。41は上部から約２cmのところに抉りが入り、ここに紐を結んでいたのであろう。携帯用の砥石と考えられる。砂岩質のものは鎌砥とは異なり、先端が鋭利なものを研いだと考えられる細い筋状の擦痕が残るものが多い。砥石については第22表にまとめたが、石材から見ると大半は凝灰岩質である。

②五輪塔（第164図、図版90）

１～３はＣ地区地下式坑（Ｐ－091）から一括して出土している。１は五輪塔の空輪（宝珠）で、風輪（受花）と一体であったが風輪は欠損している。最大径13.5cm、残存高12.4cmを測る。２は石棒形であり、中世の石造物にはない形態であるが、周囲に縄文時代の遺構がないので、偶然の流れ込みとは考えにくく、この時期のものとして取り扱った。下部が欠損しており、その割れ口が少し磨滅している。３は五輪塔の火輪（笠石）の破片で、コーナーをごく一部残すのみである。４はＢ地区北地下式坑（Ｐ－175）から出土した小形五輪塔の水輪（塔身）で、1/4ほど欠損している。上下面には工具痕（ノミ痕）が筋状に明瞭に残っている。６～８は、Ｂ地区北土坑（Ｐ－141）より一括して廃棄された状態で出土した五輪塔火輪・水輪・地輪である。空輪・風輪は出土していない。６の火輪は笠部が一辺35.0cm～35.6cm、高さが15.5cmで、頂部に直径6.3cm、深さ6.0cmの円形の孔がある。また底部は抉れている。笠には四方に「 」「 」「 」「 」の梵字がノミで彫られている。７の水輪は上面推定直径21.0cm、下面推定18.4cm、高さ推定20.0cm、最大径28.7cmを測る。約1/3ほどが欠損している。上面には直径推定9.0cm、深さ4.0cmの円形の孔がある。側面には「 」「 」の梵字がノミで彫られているが、かなり磨滅して読みづらい。６の地輪は平面形が一辺26.2cmの方形で、高さ22.4cmを測る。上面は平坦であるが、下面はノミによって球状に抉られている。側面には「 」「 」「 」「 」の梵字がノミで彫られている。６～８とも四方に五輪種子を彫刻しており、出土位置もＰ－141一括なので、本来同一のセット関係にあったものと考えられる。このことから五つの部品がすべてそろっていれば、それぞれに「 」「 」「 」「 」「 」の五大を表示し、さらにこれに修業点、菩提点、涅槃点を付して四周に彫り出していたものと思われる[1]。７点とも砂岩質である。

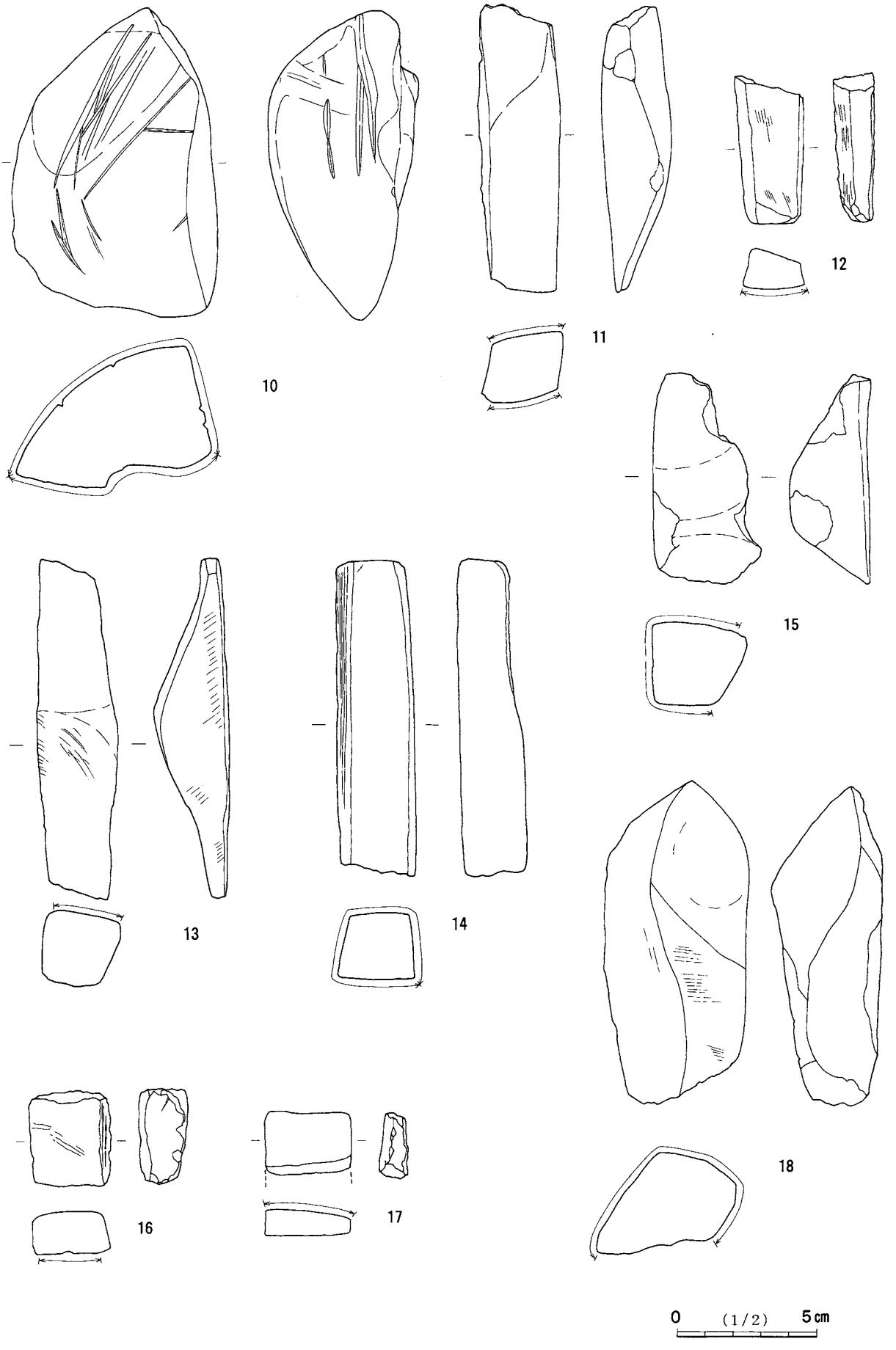
③宝篋印塔（第164図、図版90）

５は宝篋印塔の相輪部の破片のように見えるが、九輪の彫刻が入っていないので断定できない。砂岩製で下部が欠けて、少々磨滅しており、被熱し赤褐色に変色している。中世墓坑群Ｂ地区南土坑（Ｐ－213）から出土している。

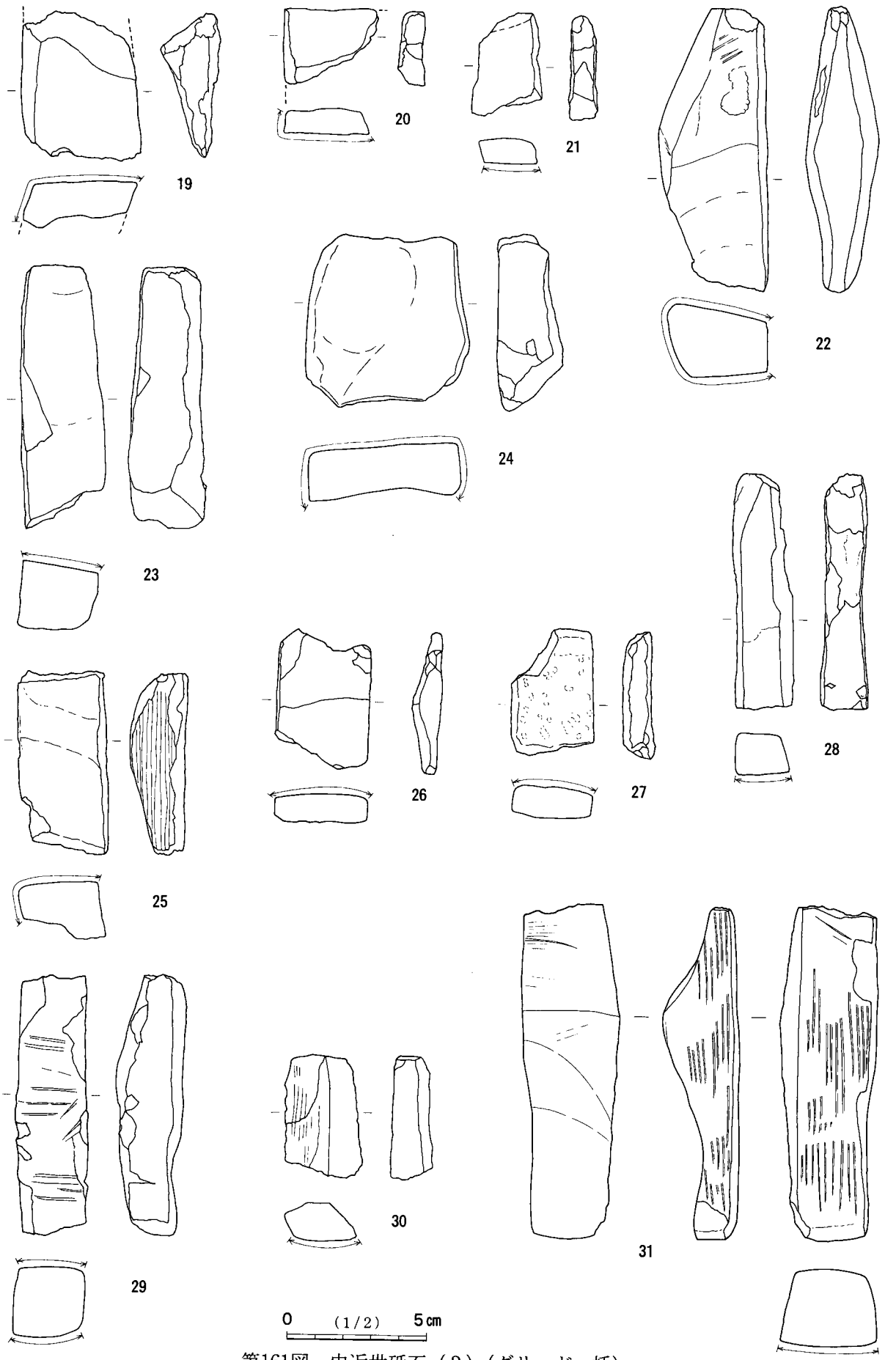
④臼（第164図、図版90）

９はＢ地区南中世墓坑群の土坑（Ｐ－292）から出土している茶臼下臼の破片[2]である。全体の４分の１が残存している。砂岩製で、臼面直径19.0cm、受皿直径35.4cm、下臼高11.1cm、軸穴直径3.7cm、ふくみ

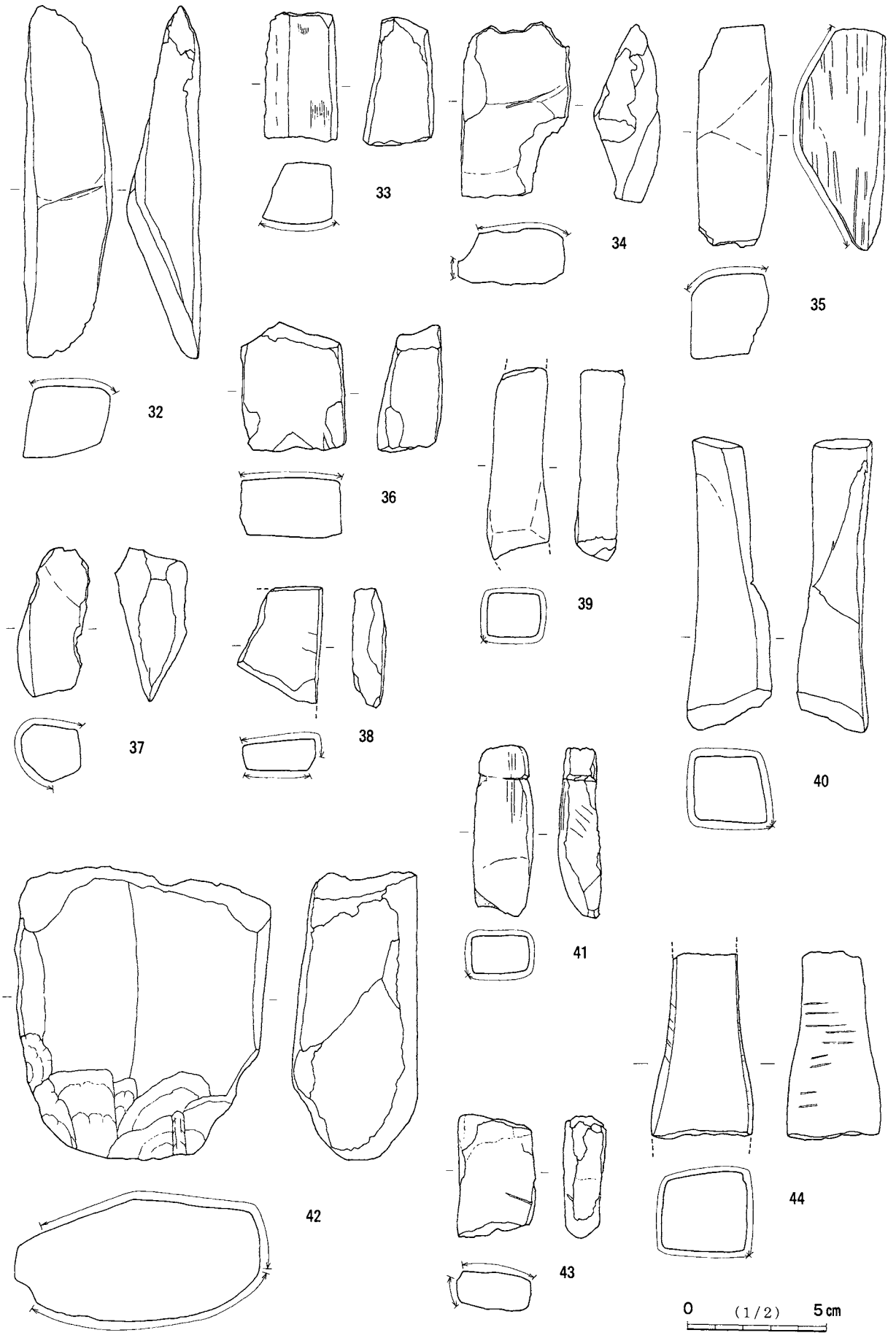
第159図　中近世砥石（1）（遺構内出土）



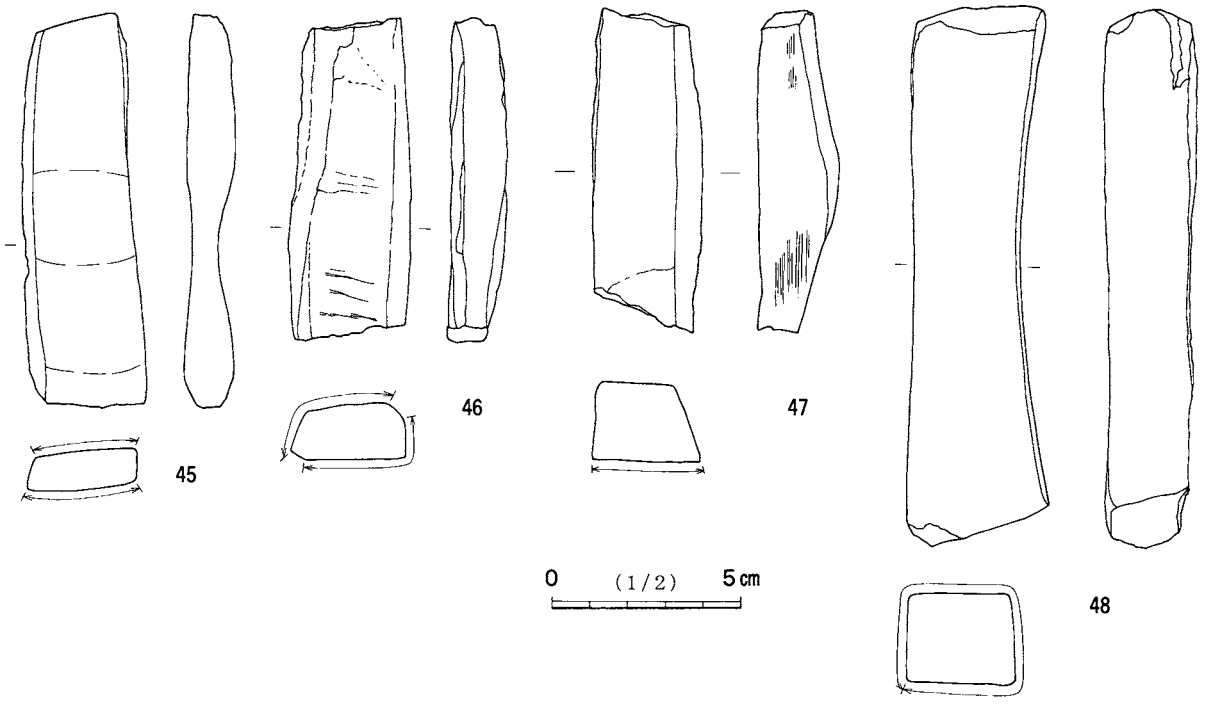
第160図　中近世砥石（２）（遺構内・表採・グリッド一括）



第161図　中近世砥石（3）（グリッド一括）



第162図　中近世砥石（4）（グリッド一括）



第163図　中近世砥石（５）（グリッド一括）

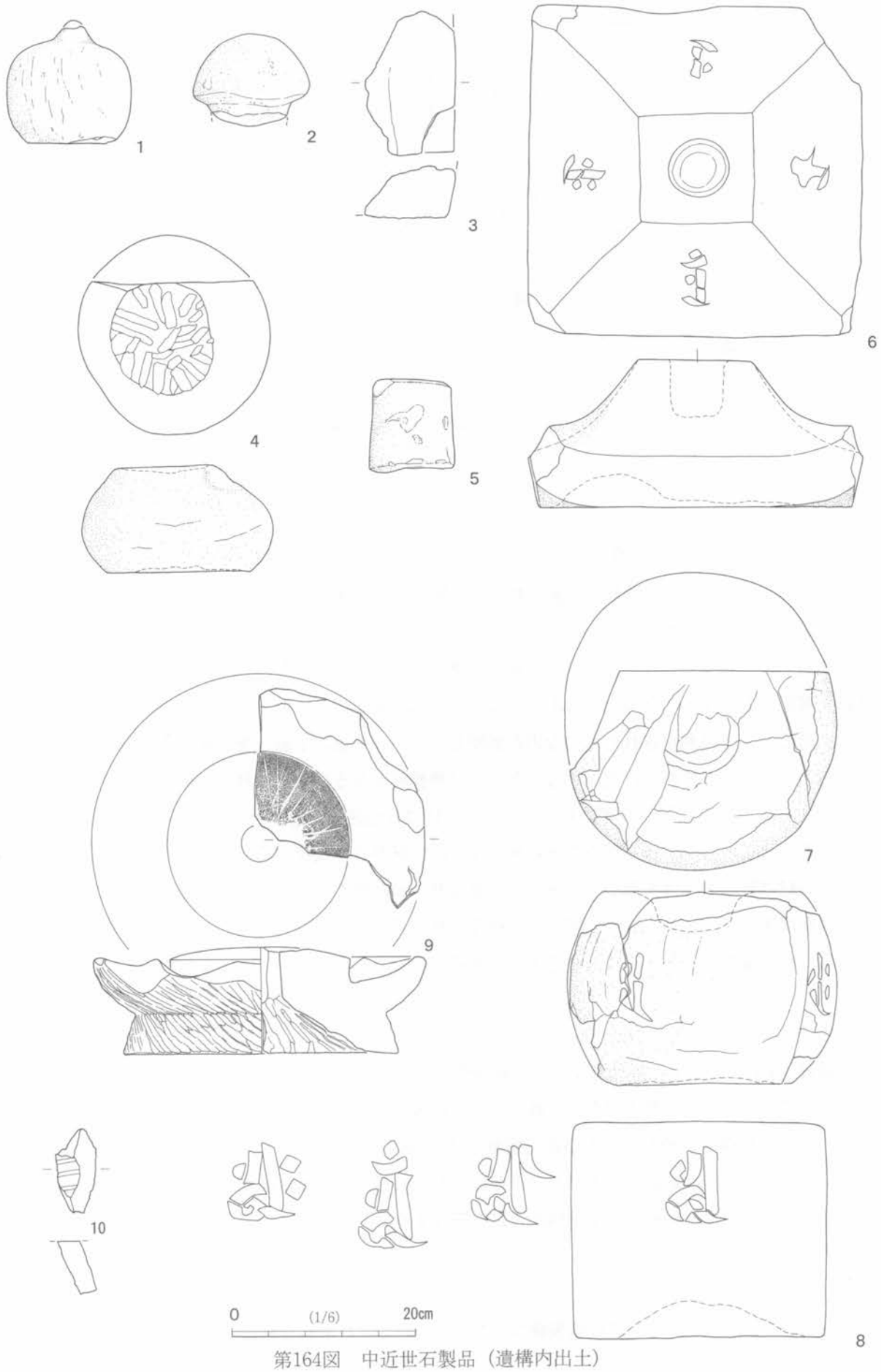
1.2cmを測る。臼面には断面Ｖ字形の溝が中心から放射状に延びるが、本来等間隔に規則正しく目(溝)が彫られていなければならないにもかかわらず、この目は不規則で長さ・幅・方向とも一定しない。臼面は中心部が最も高く、周辺に行くほど低い球面状に磨滅している。目がつぶれるまで使い込んだ臼に再度目を入れて茶臼として使用したものか、あるいは目が他の砂岩製砥石に見られるような筋状の痕跡にも見えるので、砥石として再利用されたものなのか判断しづらい。上皿の上面と受皿面とも研磨され極めてなめらかである。底面及び外面には規則的な工具(ノミ)調整痕が残る。時期はＢ地区南から出土する天目茶碗から古瀬戸中Ⅳ期～大窯第２段階のものであろう。10はＢ地区北近世土坑(Ｐ－174)から出土した石臼の破片である。平行する幅５㎜、深さ１㎜に満たない浅い目が３本残存する。臼面はなめらかにはなってはいない。石材は砂岩系ではあるが９の茶臼とは異なり、目が粗くかなりザラザラしていて硬質である。被熱し表面が黒褐色に変色している。同一の石材片がＰ－174から多数出土している。時期はＰ－174の供伴遺物から17世紀後半から18世紀はじめを中心とするものであろう。

(４)銭貨(第165・168図、図版93～96)

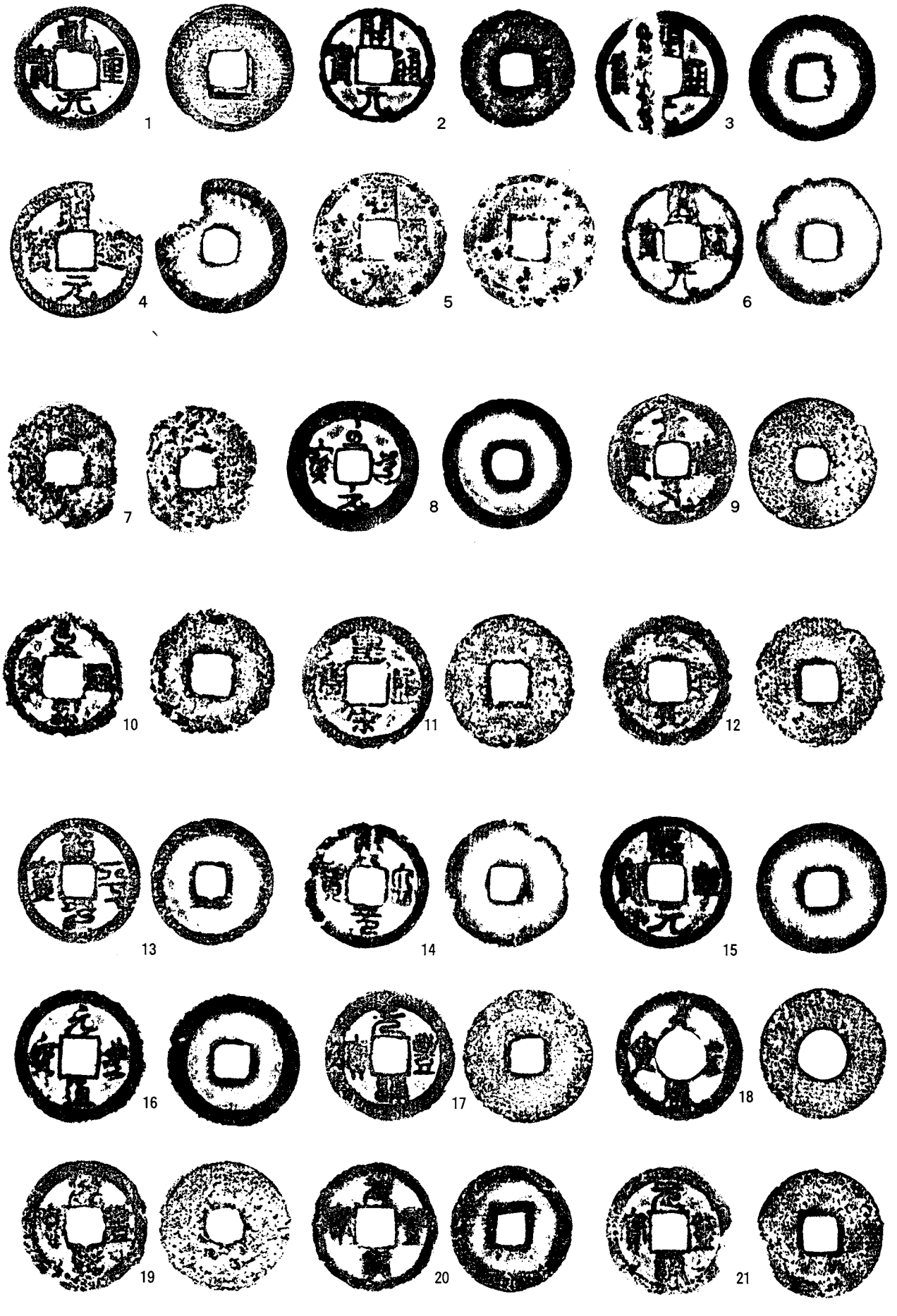
出土銭貨[3]は第23表にまとめたように、総数80点で、内訳は唐銭７点、北宋銭20点、明銭６点、その他の渡来銭12点、いわゆる古寛永12点、文銭５点、新寛永14点、波銭１点、鉄銭１点、雁首銭１点、天保通寶１点である。初鋳年が最も古いのが乾元重寶(758)で最も新しいのが天保通寶である。渡来銭はＢ地区南の墓坑群内からの出土量が45点中24点と半分以上を占める。逆に寛永通寶はＢ地区北の占める割合が大きくなる。これは土器・陶磁器の出土傾向と良く符合する。

(５)金属製品

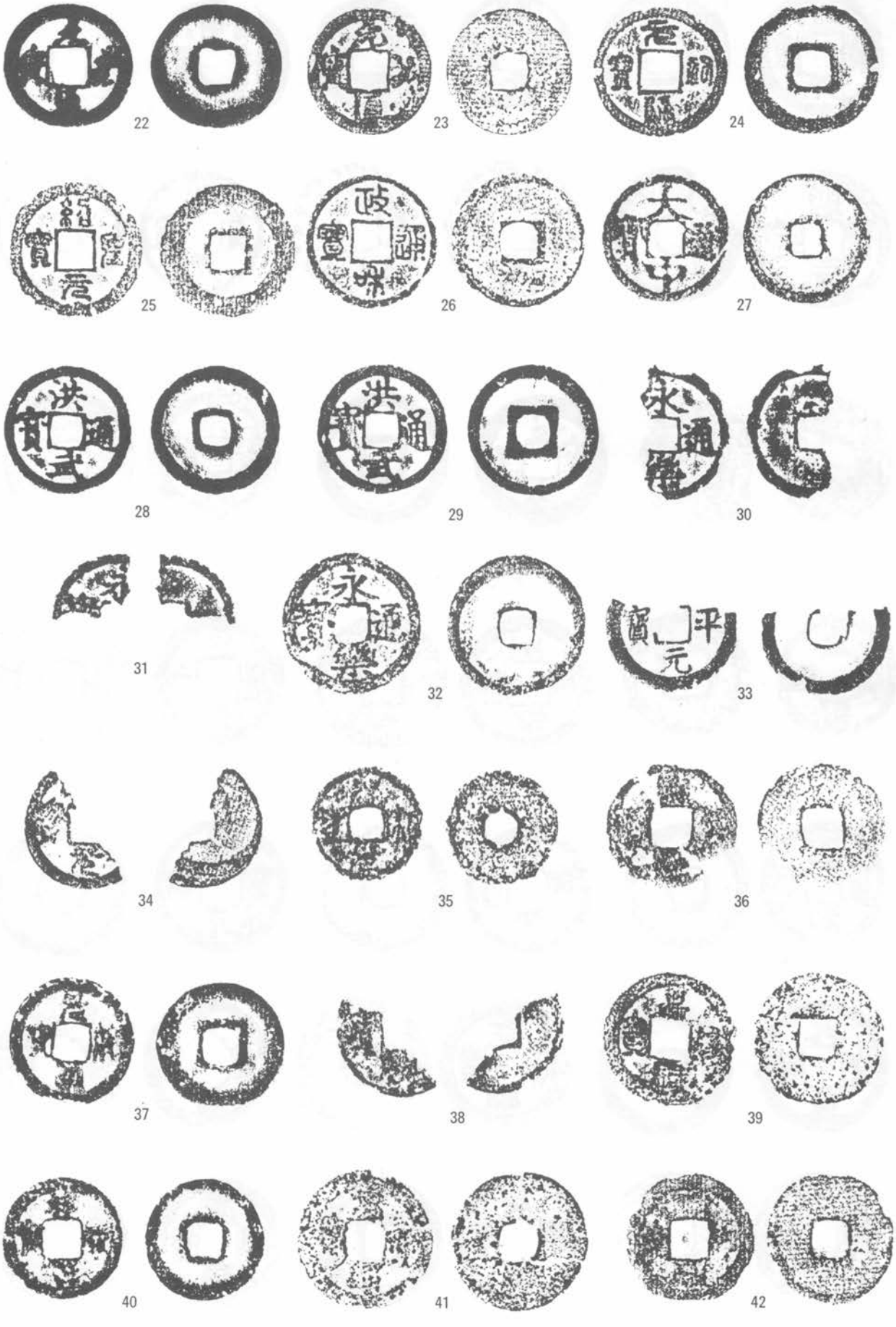
金属製品には判別できるものには鉄製鎌などがあるが、いずれも残存状況が悪く、図化・写真撮影に耐



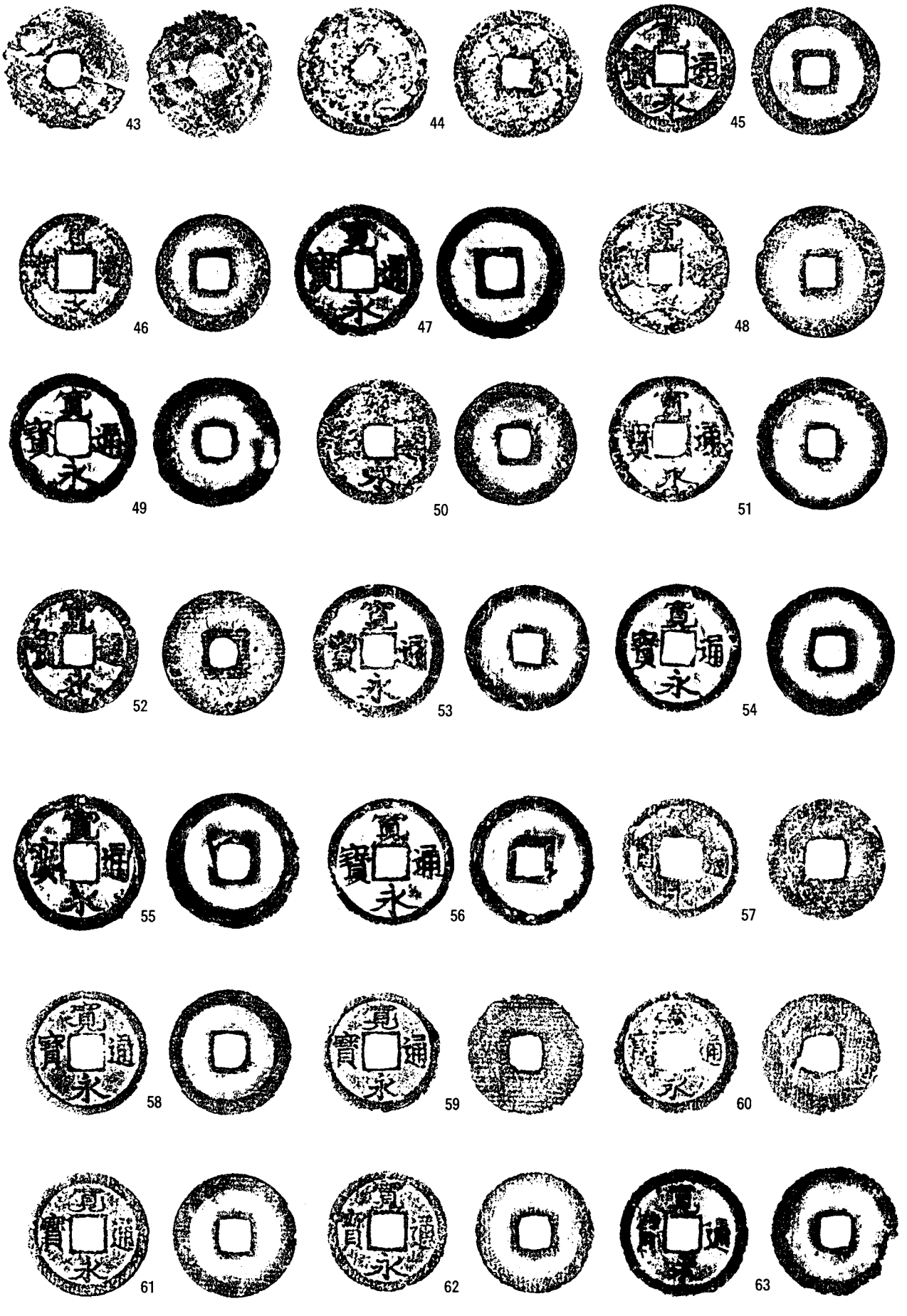
第164図　中近世石製品（遺構内出土）



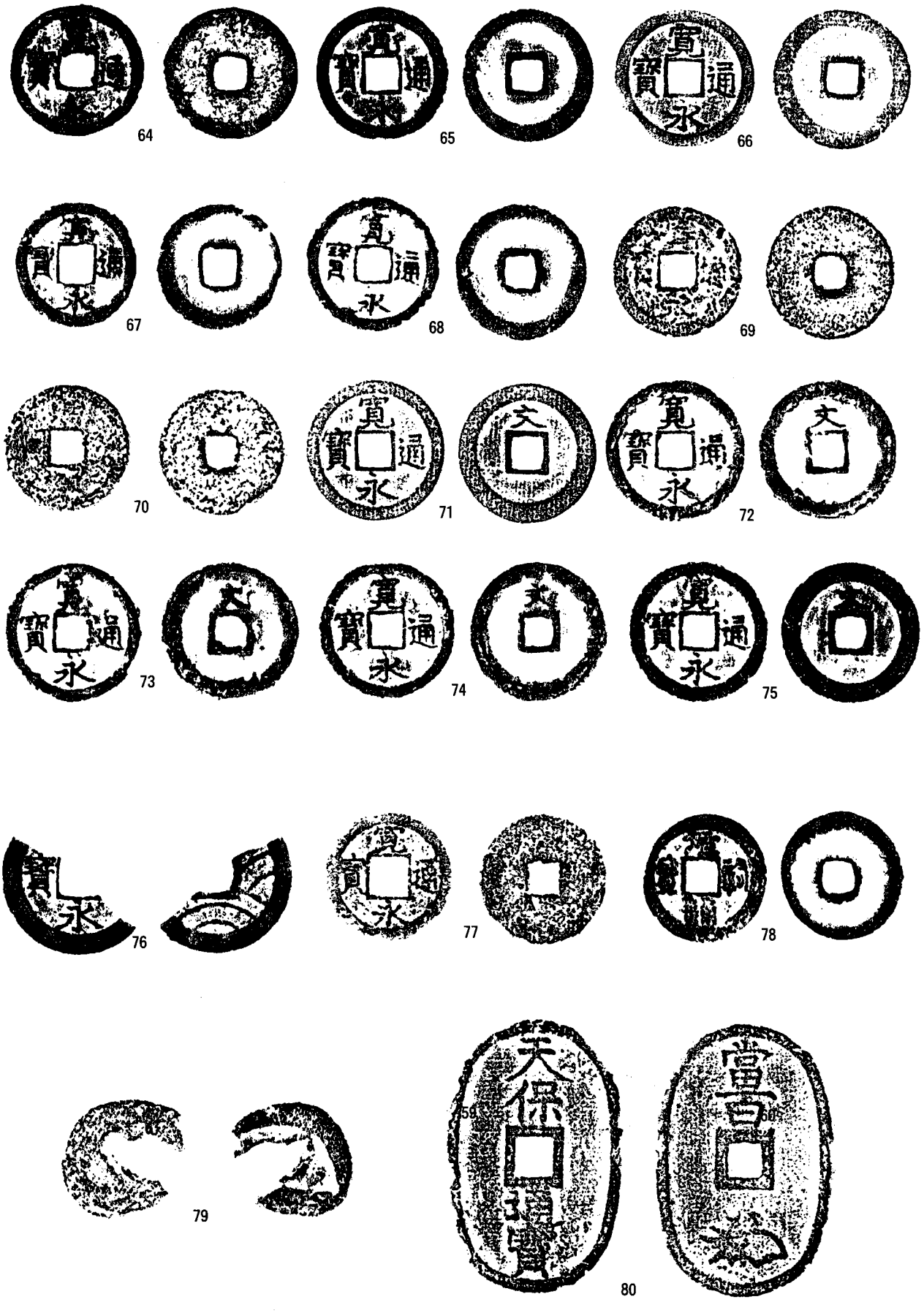
第165図　銭貨拓影図（1）



第166図　銭貨拓影図（2）



第167図　銭貨拓影図（３）



第168図　銭貨拓影図（4）

えられない。ここでは出土したことを記すにとどめる。

(6)鉄滓

鉄滓については第24表に示した。

注1　梵字の判読については以下の文献を参考にした。

中村瑞隆・石村喜英・三友健容『梵字事典』 1977　雄山閣

注2　茶臼については以下の文献を参考にした。

桐山秀穂「日本における茶臼の研究」『古代學研究所研究紀要』第6輯　1996　財団法人古代學協会

注3　中世の出土銭の分類は以下の文献を参考にした。

永井久美男編『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』 1994　兵庫県埋蔵銭調査会

第20表　主要中近世土坑一覧(地下式坑、火葬施設を除く)

遺構番号	地区	時期	平面形態	規模(短軸×長軸×深さ)	性　格	出土遺物	備　考
P－020	A	中世	長方形	0.8×1.3×0.8m			
P－047	A	中世	不整形	5.6×10.7×1.0m	作業場か？	カワラケ	16世紀
P－054	A	中世	長方形	1.0×1.6×0.7m			
P－056	A	中世	方形(階段状)	1.3×1.6×0.5m			２基の土坑の重複か？
P－057	A	中世	方形	1.5×1.7×0.3m			
P－059	A	中世	長方形	3.2×4.6×0.3m	竪穴状遺構		床面凹凸あり
P－060	A	中世	楕円形	2.8×3.4×0.3m	竪穴状遺構		床面凹凸あり
P－064	C	近世	長方形	0.9×3.5×0.3m			
P－065	C	中世	長方形	1.2×1.8×0.2m			
P－069	C	近世	円形	1.4×1.4×1.8m以上	井戸、円筒形		
P－075	C	中世	長方形	1.0×1.5×0.1m	粘土貼土坑		
P－077	C	中世	長方形	1.1×2.0×0.2m	粘土貼土坑		
P－078	C	中世	円形	1.8×2.1×0.4m	粘土貼土坑		
P－086	C	中世	長方形	1.1×1.7×0.2m	粘土貼土坑		
P－089	C	中世	長方形	1.0×1.3×0.2m	粘土貼土坑		
P－092	C	中世	隅丸方形	2.0×2.3×0.4m	不明		
P－093	C	中世	長方形	1.0×2.3×0.2m ピット深さ0.2m,0.5m			２つのピットを伴う
P－095	C	中世	長方形	1.1×2.0×0.6m	土坑墓？		
P－096	C	中世	長方形	1.2×1.5×0.5m	土坑墓？		
P－098	C	近世	円形	0.9×0.9×1.7m以上	井戸、円筒形		
P－099	C	中世	方形	1.0×1.1×0.2m	粘土貼土坑		
P－107	C	中世	方形	1.1×1.5×0.3m	粘土貼土坑		
P－109	C	中世	長方形	1.6～2.3×3.4×0.8m	竪穴状遺構		壁溝あり
P－112	C	中世	楕円形	0.9×1.5×0.9m	土坑墓	人骨	
P－113A	C	中世	長方形	1.7×2.0×0.5m	竪穴状遺構		２基の竪穴状遺構の重複
P－113B	C	中世	長方形	不明	竪穴状遺構		２基の竪穴状遺構の重複
P－114A	C	中世	長方形	2.8×?×0.2m	竪穴状遺構		２基の竪穴状遺構の重複と２基の柱穴の重複
P－114B	C	中世	長方形	2.0×2.8×0.3m	竪穴状遺構		AがBより古い
P－126	C	中世	長方形	2.4×3.7×0.2m	竪穴状遺構		
P－129	D	中世	方形	1.0×1.1×0.4m	土坑墓	銭貨６、人骨	北頭位屈葬？
P－131	D	中世	不整形	2.2×2.3×0.8m		カワラケ	
P－139	B北	中世	長方形	2.1×2.4×0.3m	竪穴状遺構		床面多少凹凸あり
P－143	B北	近世	円形	1.1×1.2×0.1m		陶器	
P－146	B北	中世	円形	1.0×1.0×0.3m	粘土貼土坑	土器	

遺構番号	地区	時期	平面形態	規　　模	性　格	出土遺物	備　　考
P－149	B北	中世	不整形		廃棄土坑	五輪塔(火輪、地輪、水輪)	
P－154	B北	中世		1.5×1.0×0.9m			
P－161	B北	中世	楕円形	2.4×1.9×2.0m	家畜埋葬	獣骨(馬歯)	M－15と重複
P－162	B北	近世	円形	0.9×0.9×1.4m以上	井戸、円筒形		
P－173	B北	近世	長方形	2.2×2.5×0.3m	作業場か	木材、陶磁器	上屋があった？
P－174	B北	近世	不整形	6.0×7.8以上×0.2m	作業場か	木材、陶磁器	上屋があった？
P－176A	B北	中世	長方形	1.7×2.2×0.3m			Bより古い
P－176B	B北	中世	長方形	0.9×1.2×0.5m			
P－179	B北	中世	長方形	1.8×1.3×0.6m			
P－189	B北	中世	方形	1.6×1.7×0.5m	粘土貼土坑		
P－192	B北	中世	長方形	1.5×1.9×0.4m	土坑	あり	
P－193	B北	中世	長方形	2.6×3.0×0.8m	土坑	あり	二段
P－197	B北	中世	方形	1.4×1.4×0.1m	粘土貼土坑		
P－198	B南	中世	円形	1.3×1.5×0.5m	粘土貼土坑		
P－205	B南	中世	長方形	1.2×1.6×0.8m	土坑墓		
P－206A	B南	中世	長方形	1.0×1.1×0.7m	土坑墓		重複関係不明
P－206B	B南	中世	長方形	1.0×1.2×0.7m	土坑墓		重複関係不明
P－209	B南	中世	長方形	1.0×1.7×0.4m	土坑墓		
P－212	B南	中世	長方形	1.5×1.9×0.5m	土坑墓	銭貨	
P－213A	B南	中世	長方形	1.7×1.7×0.6m	土坑墓		２基の土坑の重複
P－213B	B南	中世	円形	3.1×3.1×1.6m以上	井戸、擂鉢状		番号の重複
P－216B	B南	中世	方形	0.7×0.8×0.3m			
P－216C	B南	中世	方形	1.2×1.4×?m	土坑墓	あり	
P－216D	B南	中世	長方形	1.0×1.5×?m	土坑墓	あり	
P－221	B南	中世	円形	3.6×3.8×1.2m以上	井戸、擂鉢状		
P－222	B北	中近世	円形	2.0×2.0×1.7m			住居と重複
P－227	B南	中世	長方形	1.0×1.4×0.6m	土坑墓		
P－230	B南	中世	不整形	1.6×1.9×0.8m			ハードロームブロック塊の堆積見られる
P－232	B南	中世	楕円形	1.3×1.7×0.8m			
P－236	B南	中世	長方形	1.6×1.8×0.6m	土坑墓	骨粉	
P－237	B南	中世	長方形	1.9×1.5×0.6m	土坑墓		
P－238B	B南	中世	長方形	1.9×2.7×0.9m	竪穴状遺構		
P－259	B北	中世	方形	1.2×1.4×0.2m	火葬墓	磁器、石	焼土、炭化材あり
P－261	B北	近世	方形	1.0×1.1×0.2m			焼土、炭化材あり

遺構番号	地区	時期	平面形態	規　　模	性　　格	出土遺物	備　　考
P－264	B北	近世	方形	1.5×1.5×0.9m			南側はきれいに整形した壁面
P－265	B北	近世	方形	1.5×1.5×0.3m			焼土、炭化材あり
P－266	A	近世	方形	1.4×1.5×0.3m			焼土、炭化材あり、床に小ピットあり
P－280	B南	中世	長方形	0.9×1.1×0.8m	土坑墓	あり	
P－286	B南	中世	長方形	1.0×1.3×0.4m	土坑		地下式坑287、288によって削られる
P－289	B南	中世	長方形	1.6×3.0×0.7m	竪穴状遺構		
P－290	B南	中世	方形	2.4×2.1×0.7m	竪穴状遺構		P－289と切り合う
P－305	B南	近世	円形	0.6×0.6×1.9m	井戸、円筒形		
P－313	B南	中世	不整円形	3.6×4.3×2.9m	井戸、擂鉢状		3段の掘り込み
P－396	A	近世	円形	0.8×0.8×4.7m以上	井戸、円筒形		
P－404	A	中世	長方形	0.9×2.6×0.4m			
P－444	A	中世	不整形	2.1×9.5×0.6m		砥石	長方形の溝状土坑と土坑4基の重複か
P－566	A	近世	不整形	2.6×3.2以上×1.3m	不明		一部地区外、斜面上
P－592	A	近世	楕円形	0.9×1.0×0.8m	土坑墓	人骨、銭貨	
P－600	A	近世	不整形	3.0×2.5以上×1.3m	不明		一部地区外、2基の土坑の重複
P－601	A	中世	楕円形	1.3×1.3×0.9m			
P－604	A	中世	楕円形	1.3×1.5×0.4m			斜面上
P－609B	A	近世	方形	1.5×1.5×0.4m	炭窯		炭化材、炭化粒含む
P－746	A	中世	方形	1.1×1.2×0.3m	不明		
P－800	C	中世	不整形	2.6×5.4×0.2m	不整形の竪穴状遺構か		
P－801	B北	近世以前	長方形	2.9×1.5×1.0m	竪穴状遺構		掘立柱建物跡と重複

第21表　中近世陶磁器・土器一覧表(磁器については磁器と明記した)

挿図番号	器　種	産地・時期	地区	出土位置および遺物番号	釉薬	備考	年代	分類番号	実測
1	土師質皿	在地	A	P－047－701				47	○
2	土師質皿	在地	A	P－047－788				48	○
3	土師質皿	在地	D	P－131－1				55	○
4	土師質皿	在地	D	P－131－1				56	○
5	土師質皿	在地	A	P－499－5,6,7,9				59	○
6	土師質皿	在地	A	K16－70				51	○
7	土師質皿	在地	C	L18－55				50	○
8	土師質皿	在地	B北	M13－79一括				49	○
9	土師質皿	在地	B北	P－155－3				52	○
10	土師質皿	在地	B北	P－155－1				53	○
11	土師質皿	在地	B北	P－155－2				54	○
12	土製円板	在地・カワラケ転用	C	P－61－1		6.2g		58	○
13	土師質火鉢	在地	B北	P－183	土師質	草花文押印		68	○
14	平碗	古瀬戸後Ⅲ期	C	P－91	灰釉		15世紀前葉	4	○
15	平碗	古瀬戸後Ⅰ期	B南	P－216一括	灰釉		14世紀後葉	10	○
16	平碗	古瀬戸後Ⅲ期	B南	M16－64一括,P－216一括,P－329一括	灰釉		15世紀前葉	90	○
17	平碗	古瀬戸後Ⅲ期	B南	P－280－3	灰釉		15世紀前葉	8	○
18	平碗	古瀬戸後Ⅲ期	B南	P－217－4	灰釉		15世紀前葉	9	○
19	平碗	古瀬戸後Ⅲ期	B南	M16－62表採一括	灰釉		15世紀前葉	3	○
20	平碗	古瀬戸後ⅡかⅢ期	B南	D－217－10(Pの誤りか)	灰釉	輪花	15世紀前半	5	○
21	平碗	古瀬戸後Ⅳ期(古)	B南	M16－72,P－216一括,P－280?－2	灰釉		15世紀半ば	75	○
22	平碗	古瀬戸	B南	P－392－2				64	○
23	平碗	古瀬戸後Ⅱ期	B南	P－217覆土中一括	灰釉		1400年前後	11	○
24	縁釉小皿	古瀬戸後Ⅲ期	B南	P－216一括	灰釉		15世紀前葉	19	○
25	縁釉小皿	古瀬戸後Ⅲ期	B南	P－216一括	鉄釉		15世紀前葉	35	○
26	縁釉小皿	古瀬戸後Ⅲ期	B南	M16－75,M16－54	鉄釉		15世紀前葉	76	○
27	縁釉小皿	古瀬戸後Ⅲ期	B南	P－216一括	鉄釉		15世紀前葉	36	○
28	仏供	古瀬戸後Ⅲ期	B南	P－313－1	鉄釉		15世紀前葉	57	○
29	花瓶	古瀬戸中Ⅰ・Ⅱ期	B南	M16－54	灰釉		13世紀末～14世紀前葉	69	○
30	碗形鉢	古瀬戸後Ⅰ期	B南	M16－72,P－217－6,M16－64,M16－71	灰釉		14世紀後葉	74	○
31	碗形鉢	古瀬戸後Ⅰ期	B南	M16－54	灰釉		14世紀後葉	83	○
32	折縁中皿	古瀬戸後Ⅰ期	B南	P－115	灰釉		14世紀後葉	14	○
33	折縁中皿	古瀬戸後Ⅲ期	B南	P－216一括	灰釉		15世紀前葉	15	○
34	折縁深皿	古瀬戸後Ⅰ・Ⅱ期	B南	M16－72一括,M16－54	灰釉		14世紀末～15世紀初頭	91	○
35	折縁深皿	古瀬戸後Ⅱ期	B南	M16－51,M16－50,M16－54	灰釉		1400年前後	72	○
36	折縁深皿	古瀬戸後Ⅰ期	B南	P－205－2	灰釉	13と同一個体か	14世紀後葉	6	○
37	盤類	古瀬戸後ⅡかⅢ期	B南	P－281一括	灰釉		15世紀前半	7	○
38	折縁深皿	古瀬戸後Ⅰ期	B南	P－217－14	灰釉	6と同一個体か	14世紀後葉	13	○
39	直縁大皿	古瀬戸後Ⅲ期	B南	P－21一括	灰釉		15世紀前葉	12	○
40	卸皿	古瀬戸前Ⅲ～中Ⅱ期	B南	M16－72	灰釉		13世紀後半～14世紀前葉	70	○
41	合子(蓋)	古瀬戸中Ⅲ期	B南	M16－72一括	灰釉		14世紀前葉	18	○
42	合子(身)	古瀬戸中Ⅰ期	B南	P－281－2	灰釉		1300年前後	18	○
43	青磁	同安窯系	B南	M16－72一括		櫛描		139	○
44	青磁	龍泉窯系	B南	M16－71一括		蓮弁文		140	○
45	青磁	龍泉窯系	B南	P－288－001		蓮弁文		141	○
46	丸皿か端反皿	大窯1・2期	B南	M16－54	灰釉	草花文	15世紀末～16世紀前葉	71	○
47	丸皿か端反皿	大窯1・2期	B南	M16－50	灰釉		15世紀末～16世紀前葉	71	○
48	折縁深皿	古瀬戸中Ⅰ・Ⅱ期	B南	P－221－1とP－281一括	灰釉		13世紀末～14世紀前葉	40	○

挿図番号	器　種	産地・時期	地区	出土位置および遺物番号	釉薬	備考	年代	分類番号	実測
49	擂鉢		B南	P－217－9		山茶碗系		2	○
50	擂鉢	常滑	B南	P－281				63	○
51	擂鉢	常滑	B南	P－261				66	○
52	擂鉢	古瀬戸？	B南	P－213一括	錆釉			37	○
53	擂鉢	在地	B北	P－175－1				38	○
54	甕	常滑，７～９型式	B北	P－178－1				67	○
55	小壺	常滑	B南	P－213一括		転用砥石		21	○
56	壺・甕	在地	B北	P－162－1		肩にヘラ書き		46	○
57	壺？							65	○
58	甕	常滑	C	P－72		格子状タタキ目		20	○
59	甕	渥美	B北	P－177－2		転用砥石		22	○
60	内耳土鍋	在地	B南	P－281一括				62	○
61	内耳土鍋	在地		P－327－3				61	○
62	土鍋	在地	B南	P－281一括				60	○
63	天目茶碗	瀬戸５小期	B北	P－174－1	鉄釉			32	○
64	天目茶碗	瀬戸６小期	B北	J17－97，P－175－1，M15－16－1	鉄釉			81	○
65	天目茶碗	瀬戸４小期	B北	M14－51	鉄釉			123-1	
66	天目茶碗	瀬戸７小期	B北	M15－18	鉄釉			86	○
67	天目茶碗	美濃２小期	B南	M17－01一括	鉄釉			87	○
68	天目茶碗	古瀬戸中Ⅳ期	B南	M16－72	鉄釉		14世紀半ば	80	○
69 70 71	端反碗	瀬戸	B南	M16－82一括，N14－80，M15－16	鉄釉 錆釉			123－2	
72	天目茶碗	美濃３・４小期	B北	P－182－3	鉄釉			30	○
73	丸碗	美濃３・４小期	B北	P－162－1	鉄釉			31	○
74	丸碗	肥前	B北	M15－17－1	銅緑釉		17世紀末～18世紀はじめ	130	○
75	丸碗	肥前	B北	P－174－1	内面白濁釉 外面銅緑釉		17世紀後半～18世紀はじめ	45	○
76	鉄絵皿	瀬戸美濃３小期	B南	M17－01一括	志野 藺竹文			25	○
77	鉄絵皿	瀬戸美濃３小期	B南	M17－01一括	志野 藺竹文			26	○
78	鉄絵皿	瀬戸美濃３小期	B南	M17－01一括	志野 藺竹文			29	○
79	鉄絵皿	美濃３小期	B南	M17－01一括	志野 藺竹文			28	○
80	鉄絵皿	美濃２小期	B北	P－174－1	志野			23	○
81	鉄絵皿	瀬戸	B北	P－143－2	灰釉		18世紀代	39	○
82	志野丸皿	美濃２小期	B南	P－213－1	志野			24	○
83	反皿	美濃３小期	B北	L15－38	灰釉		17世紀中葉	17	○
84	反皿	美濃３小期	B北	P－174－1	灰釉		17世紀中葉	16	○
85	志野丸皿	美濃２・３小期	B南	M17－01一括	志野			27	○
86	灯明皿		B北	P－174－1	御深井釉		17世紀末	133	○
87	摺絵皿	美濃６小期	B北	P－174－1	透明釉			88	○
88	灯明皿	美濃７小期	B北	M14－51	灰釉			89	○
89	擂鉢		B北	P－143－1	錆釉		18世紀	1	○
90	擂鉢	堺	B北	P－139			18世紀	131	○
91	擂鉢	堺	B北	M15～N15一括			18世紀後半	132	○
92	擂鉢	丹波	B北	M14－51			17世紀中葉	124	○
93	擂鉢	瀬戸４小期	B北	M14－98	鉄釉			78	○

挿図番号	器　種	産地・時期	地区	出土位置および遺物番号	釉薬	備考	年代	分類番号	実測
94	擂鉢	瀬戸10・11小期		J17－58	鉄釉			79	○
95	擂鉢	瀬戸			鉄釉			136	
96	煙硝擂	瀬戸４小期		J17－58	錆釉			85	○
97	煙硝擂	瀬戸美濃４小期	B北	P－174－1	鉄釉			33	○
98	片口	瀬戸８～？小期		M14－66	灰釉			82	○
99	香炉	瀬戸美濃	B北	P－162－1	灰釉		18世紀代	41	○
100	磁器小杯	肥前	B北	P－174－1	染付			44	○
101	磁器小杯	肥前	B北	P－174－1	染付			44	○
102	磁器小杯			M15－18	染付		18世紀前葉	127	○
103	磁器小杯		B北	P－174－1	染付		18世紀前葉	126	○
104	磁器碗		B北	P－174－1	染付		18世紀後半	128	○
105	磁器丸碗	肥前	B北	P－174－1	染付			43	○
106	小中碗	瀬戸８小期		P－146－1	染付			42	○
107	磁器碗			P－259－1	染付		18世紀後半	125	○
108	磁器碗		B北	P－174－1	染付	こんにゃく版	18世紀後半	129	○
109	磁器瓶(徳利)		B北	P－143	染付		18世紀前葉	134	○
110	カマド敷輪	在地			土師質		近世	135	○
111	土鈴	在地	B北	P－183			近世	142	○
112	土鈴	在地	B北	P－174			近世	143	○
	須恵器			P－91		転用砥石		34	
	擂鉢	瀬戸５小期	B北	M14－60	錆釉			73	
	卸皿	古瀬戸中期	B南	M16－72	灰釉		13世紀末～14世紀半ば	77	
	尊式花瓶	古瀬戸後Ⅰ・Ⅱ期	B南	M16－71	灰釉		14世紀末～15世紀初頭	84	
	縁釉小皿	古瀬戸後Ⅲ期		P－216,L19－70,表採	鉄釉		15世紀前葉	92	
	縁釉小皿	古瀬戸後Ⅲ・(Ⅳ古)	B南	M16－64,M16－32,M16－72,M16－20,表採	灰釉		15世紀前葉～15世紀半ば	93	
	天目茶碗	古瀬戸中Ⅲ期		L19－68	鉄釉		14世紀前半	94	
	直縁大皿	古瀬戸後Ⅲ期	B南	M16－72	灰釉		15世紀前葉	95	
	盤類	古瀬戸後Ⅰ・Ⅱ期	B南	M16－72	灰釉		14世紀末～15世紀初頭	96	
	盤類	古瀬戸後Ⅲ期	B南	M16－72,M－16－51,P－216,L19－36	灰釉		15世紀前葉	97	
	平碗	古瀬戸後Ⅱ期	B南	M16－62	灰釉		1400年前後	98	
	平碗	古瀬戸後Ⅲ・(Ⅳ古)	B南	表採,M16－72,P－216,M16－62	灰釉		15世紀前葉～15世紀半ば	99	
	折縁小皿	古瀬戸中Ⅲ・Ⅳ期	B南	M16－51	灰釉		14世紀前葉～14世紀半ば	100	
	天目茶碗	古瀬戸か	B南	M16－72,L19－36,M14－00～29	鉄釉			101	
	尊式花瓶か	古瀬戸後Ⅲ期	B南	M16－71	灰釉		15世紀前葉	102	
	擂鉢	古瀬戸後Ⅳ(新)か大窯１期		J17－68	錆釉		15世紀後葉～15世紀初頭	103	
	皿	古瀬戸	B南	M16－51	灰釉			104	
	不明	古瀬戸	B北、B南	P－149,M16－51	灰釉			105	
	不明	不明		K18－44,P－216,J17－97	鉄釉			106	
	天目茶碗	大窯１期	B南	M16－72	鉄釉		1500年前後	107	
	稜皿	大窯３期	B南	M16－91,不明	鉄釉			108	
	擂鉢	瀬戸		K17－26,J17－07－15,J17－08－12	鉄釉		近世	109	
	反皿	美濃３小期		M15－18	灰釉			110	
	鉄絵皿	瀬戸美濃３小期	B南	すべてM17－01か？	志野釉			111	
	天目茶碗	瀬戸１・２小期		M17－2	鉄釉			112	
	天目茶碗	瀬戸５小期		M15～N15	鉄釉			113	
	天目茶碗	瀬戸５・６小期		M14－60,J17－08,M16－?	鉄釉			114	

挿図番号	器　種	産地・時期	地区	出土位置および遺物番号	釉薬	備考	年代	分類番号	実測
	片口	美濃９・10期		K17－54一括	灰釉			115	
	盤	瀬戸７・８小期		M16－55一括	灰釉			116	
	天目茶碗	瀬戸		K16－94	鉄釉			117	
	不明	瀬戸		不明	内面鉄釉			118	
	不明	美濃		K18－66, K17－55, M17－01, M16－55, P－396－69, L20－20, P－174－1, P－216, M16－72				119	
	不明	瀬戸美濃	B北、B南	M17－01, P－216, M16－82, M16－71, P－174－1, M16－94				120	
	天目茶碗	大窯１期	B南	P－216－12	鉄釉		1500年前後	121	
	天目茶碗	大窯２期	B南	P－216一括	鉄釉		16世紀前葉	122	
	碗			M15－17－1			17世紀後半～18世紀はじめ	138	

第22表　砥石一覧

番号	遺構・グリッド	石材	備　考
1	P－147－1	凝灰岩	
2	P－173－1	凝灰岩	櫛歯状工具痕
3	P－174－1	凝灰岩	櫛歯状工具痕
4	P－174－1	砂岩	
5	P－182－2	砂岩	
6	P－174－1	砂岩	
7	P－213－1	硬砂岩	
8	P－217－11	凝灰岩	
9	P－186－1	凝灰岩	櫛歯状工具痕
10	P－281一括	砂岩	
11	P－295－2	凝灰岩	
12	P－416－1	凝灰岩	櫛歯状工具痕
13	P－419－2	凝灰岩	
14	P－419－6	凝灰岩	櫛歯状工具痕
15	P－444－24	凝灰岩	
16	K17－82	凝灰岩	
17	K16－98	凝灰岩	
18	K16－70－1	砂岩	
19	J17－68－28		
20	J17－74一括	凝灰岩	
21	J18－05一括	凝灰岩	
22	J18－05一括	凝灰岩	
23	J18－06一括	砂岩	
24	J18－06一括	凝灰岩	

番号	遺構・グリッド	石材	備　考
25	M13－79一括	凝灰岩	櫛歯状工具痕
26	M14－51	凝灰岩	
27	M14－66	凝灰岩	被熱
28	J18－06一括	凝灰岩	
29	M14－60	凝灰岩	
30	M14－60	凝灰岩	櫛歯状工具痕
31	M14－51	凝灰岩	櫛歯状工具痕
32	M15－61－1	凝灰岩	被熱
33	M15－71－1	凝灰岩	櫛歯状工具痕
34	M15－22	凝灰岩	
35	M15～N15一括	凝灰岩	
36	M15～N15一括	凝灰岩	
37	M16－63表採一括	凝灰岩	被熱
38	M16－72一括	粘板岩	
39	M16－51一括	凝灰岩	
40	M16－51一括	凝灰岩	
41	M16－72一括	凝灰岩	
42	M16－62一括	硬砂岩	
43	M16－82	凝灰岩	
44	M16－72一括	凝灰岩	
45	M16－91一括	凝灰岩	
46	M16－91一括	凝灰岩	
47	N15－15一括	凝灰岩	櫛歯状工具痕
48	N15－15一括		

第23表　銭貨一覧(直径・重量は小数点以下２桁を四捨五入)

挿図番号	出　土　地　点　(遺構)	国・王朝名	銭貨名	初鋳年	直径(cm)	重量(g)
1	B地区南	乾元重寶	唐	758	2.4	1.7
2	D地区(K19－34)	開元通寶	唐	815	2.2	1.9
3	D地区(P－129)	開元通寶	唐	815	2.4	3.1
4	(不明)	開元通寶	唐	815	2.5	2.0
5	表採	開元通寶	唐	815	2.6	3.0
6	B地区南	開元通寶	唐	815	2.3	2.1
7	B地区南	開元通寶	唐	815	2.4	2.0
8	D地区(P－219)	至道通寶	北宋	995	2.5	3.0
9	B地区南	景徳元寶	北宋	1004	2.4	2.1
10	(不明)	皇宋通寶	北宋	1038	2.4	1.8
11	B地区南(M16－23)	皇宋通寶	北宋	1038	2.5	3.4
12	B地区南	至和元寶	北宋	1054	2.5	3.0
13	B地区南	北宋	治平元寶	1064	2.4	3.3
14	B地区南	北宋	熙寧元寶	1068	2.4	2.8
15	D地区(P－219)	北宋	熙寧元寶	1068	2.5	4.1
16	A地区(P－057)	北宋	元豊通寶	1078	2.5	3.4
17	B地区南	元豊通寶	北宋	1078	2.5	2.8
18	C地区(L18－56)	元豊通寶	北宋	1078	2.4	2.7
19	B地区南	元豊通寶	北宋	1078	2.4	2.9
20	B地区南	元豊通寶	北宋	1078	2.5	3.4
21	B地区南	元豊通寶	北宋	1078	2.4	2.2
22	D地区(P－129)	元豊通寶	北宋	1078	2.4	3.6
23	B地区北(M13－79)	元祐通寶	北宋	1086	2.4	2.4
24	(不明)	元祐通寶	北宋	1086	2.5	3.3
25	B地区北(P－192)	紹聖元寶	北宋	1094	2.5	3.2
26	B地区南	政和通寶	北宋	1111	2.5	2.8
27	B地区南	大中通寶	明	1361	3.5	3.6
28	D地区(P－129)	洪武通寶	明	1368	2.4	2.5
29	D地区(P－129)	洪武通寶	明	1368	2.4	3.0
30	C地区(P－091)	永楽通寶	明	1408		1.2
31	A地区(P－456)	永楽通寶	明	1408		0.8
32	B地区南	永楽通寶	明	1408	2.6	3.9
33	表採	○平元寶	(渡来銭)			1.4
34	B地区北(M13－79)	○○元寶	(渡来銭)			1.5
35	B地区南	○和元寶	(渡来銭)		2.0	1.2
36	B地区南	○○○寶	(渡来銭)		2.4	2.2
37	B地区南	元○通寶	(渡来銭)		2.4	2.2
38	B地区南	○○元寶	(渡来銭)			1.0
39	B地区南(P－237)	不明	(渡来銭)		2.4	2.0
40	B地区南	不明	(渡来銭)		2.2	2.0
41	B地区南(M16－33)	不明	(渡来銭)		2.5	2.4
42	B地区南	不明	(渡来銭)		2.4	1.8
43	B地区北(M13－79)	不明	(渡来銭)			1.9
44	B地区南(M16－81)	不明	(渡来銭)		2.5	3.6

銭貨一覧

挿図番号	出　土　地　点　(遺構)	銭貨名	種類	鋳造期	直径(cm)	重量(g)
45	B地区北	寛永通寶	古寛永	1636～1667	2.4	3.0
46	B地区北	寛永通寶	古寛永	1636～1667	2.2	1.8
47	A地区(P－483)	寛永通寶	古寛永	1636～1667	2.5	2.8
48	B地区南(M16－81)	寛永通寶	古寛永	1636～1667	2.5	3.2
49	A地区(J18－19)	寛永通寶	古寛永	1636～1667	2.4	2.6
50	B地区南	寛永通寶	古寛永	1636～1667	2.3	2.7
51	B地区南	寛永通寶	古寛永	1636～1667	2.4	3.2
52	B地区南	寛永通寶	古寛永	1636～1667	2.3	2.3
53	B地区南	寛永通寶	古寛永	1636～1667	2.5	3.2
54	表採	寛永通寶	古寛永	1636～1667	2.4	2.6
55	表採	寛永通寶	古寛永	1636～1667	2.6	3.3
56	表採	寛永通寶	古寛永	1636～1667	2.4	3.4
57	B地区北	寛永通寶	新寛永	1697以降	2.3	2.0
58	B地区北	寛永通寶	新寛永	1697以降	3.0	2.4
59	B地区北	寛永通寶	新寛永	1697以降	2.3	1.7
60	B地区北	寛永通寶	新寛永	1697以降	2.3	1.9
61	B地区北	寛永通寶	新寛永	1697以降	2.3	2.3
62	B地区北	寛永通寶	新寛永	1697以降	2.3	2.6
63	B地区北(N14－60)	寛永通寶	新寛永	1697以降	2.4	3.0
64	A地区(J17－09)	寛永通寶	新寛永	1697以降	2.5	3.0
65	B地区北(P－184)	寛永通寶	新寛永	1697以降	2.5	3.3
66	B地区南	寛永通寶	新寛永	1697以降	2.5	3.2
67	表採	寛永通寶	新寛永	1697以降	2.3	1.8
68	表採	寛永通寶	新寛永	1697以降	2.5	2.6
69	B地区北	寛永通寶	新寛永	1697以降	2.4	2.7
70	B地区北	寛永通寶	新寛永	1697以降	2.3	2.1
71	B地区北	寛永通寶	文銭	1668～1696	2.5	3.1
72	表採	寛永通寶	文銭	1668～1696	2.6	2.5
73	表採	寛永通寶	文銭	1668～1696	2.6	2.9
74	表採	寛永通寶	文銭	1668～1696	2.6	2.8
75	A地区(P－483)	寛永通寶	文銭	1668～1696	2.6	3.0
76	A地区(J17－95)	寛永通寶	波銭			2.4
77	B地区北	寛永通寶	鉄銭	1739以降	2.4	3.5
78	A地区(K16－70)	元祐通寶	(1086)	(北宋)	2.3	2.4
79	A地区北(M13－79)	雁首銭				2.1
80	B地区南	天保通寶			3.3×4.9	19.3

第24表　鉄滓計測表(遺構・グリッドごとの総量)

番号	遺構・グリッド	重量(g)	番号	遺構・グリッド	重量(g)	番号	遺構・グリッド	重量(g)
1	?	54.6	16	K17−18	28.8	31	P059	42.8
2	J16−45	107.2	17	K17−26	31.9	32	P126	22.4
3	J16−58	33.2	18	K18−46	91.4	33	P155	17.7
4	J16−79	35.5	19	K18−67	27.9	34	P162	320.2
5	J16−97	53.4	20	K19−26	26.4	35	P174	347.6
6	J17−04	6.5	21	N14−60	32.0	36	P178	67.7
7	J17−06	77.1	22	N15−08	45.1	37	P216	12.1
8	J17−23	28.0	23	N15−16	17.3	38	P348	102.8
9	J17−67	70.2	24	N15−28	359.2	39	P429	32.7
10	J17−68	69.9	25	O15−10	80.2	40	P444	137.0
11	J17−75	45.0	26	O15−18	11.8	41	P499	5.2
12	K16−70	13.1	27	O15−22	51.0	42	P694	115.2
13	K16−78	25.6	28	O15−26	39.5	43	P764	27.4
14	K16−91	15.4	29	O15−54	51.4	44	P770	41.6
15	K17−06	12.2	30	P047	53.8	45	P791	60.0

第3章　まとめ

1　縄文時代

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡14軒、炉跡２基、陥穴17基、土坑140基余りが検出されている。竪穴住居跡はＤ－027を除いてすべて中期末に属するものである。炉跡はいわゆる炉穴ではなく、竪穴住居跡の炉が残存したものであろう。また、陥穴は類似例から早期に属する可能性が強く、竪穴住居跡群とは時期が大きく隔たっている。ここでは竪穴住居跡群と円形土坑群を中心に、古宿・上谷遺跡の縄文時代について、簡単にまとめたい。

遺跡は高谷川の最上流部に位置する。北側には新東京国際空港事業地内の遺跡群が存在するが、ほとんどが前期以前であり、中期の遺構はもちろん遺物も数少ない。その北側の根木名川流域部には、長田雉ヶ原遺跡のような規模の大きい集落が現れるが、直線距離にして約８km離れている。一方で高谷川下流方面には境貝塚、中台貝塚など、ある程度拠点的な集落となりうる遺跡が３km～４kmおきに点在する。したがって中期後半には、この古宿・上谷遺跡が太平洋側に向かう水系の最奥部に位置していたと考えられる。

検出された遺構は中期末の短い時期に集中しており、おおむね次の四時期に区分できる[1)]（第164図）。

Ⅰ期

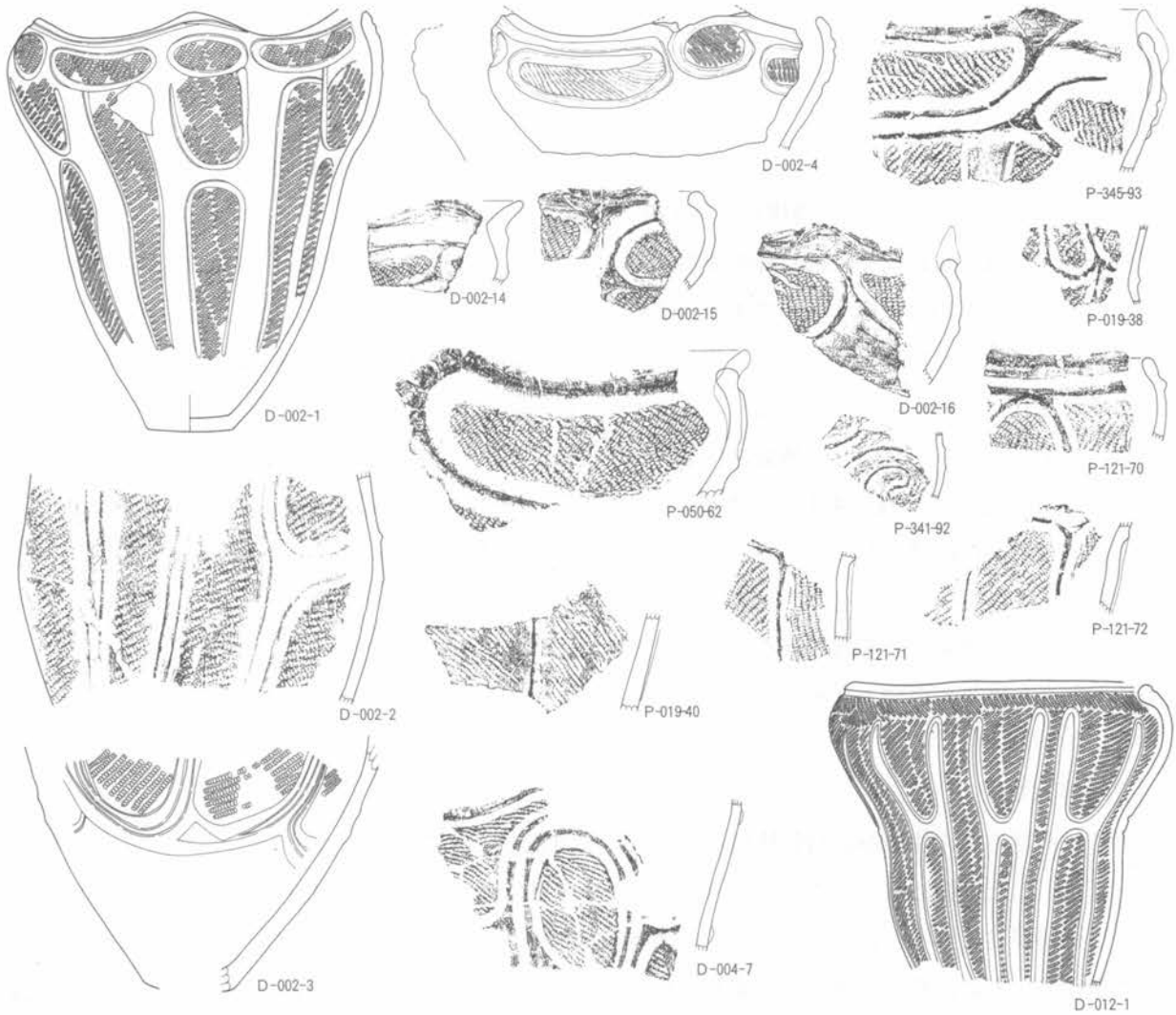
加曽利Ｅ式を特徴づけるキャリパー形土器の終末段階に位置づけられる。Ｄ－002の１、４やＰ－345の93などは、口縁部文様帯と胴部文様帯が区別されてはいるが、すでに融合の兆しが見えている。キャリパー形をとらない深鉢では、胴部は１本もしくは２本一組の隆帯あるいは微隆起線による曲線文が施され、隆帯間はナゾリ状の無文帯となる（Ｐ－019の38、40、Ｐ－121の70～72、Ｄ－002の２、３、Ｄ－004の７）。また、いわゆる横位連繋弧線文に類似するものとして、Ｄ－012の１のような資料がある。位置づけは難しいが、口縁部の横一次区画文と胴部の磨消縄文帯との間に横位の縄文施文が観察されること、先述したＤ－002の１の胴部文様に類似する施文が見られることから、この時期に含まれると考えられる。加曽利ＥⅢ式の古い段階に比定されるもので、Ｄ－002、Ｄ－004、Ｄ－005、Ｄ－012、Ｄ－030、Ｐ－003、Ｐ－019、Ｐ－050、Ｐ－121、Ｐ－345、Ｐ－733などが該当する。ただしＤ－004の１については他の遺物とは時期差があり、流れ込みの可能性が強い。

Ⅱ期

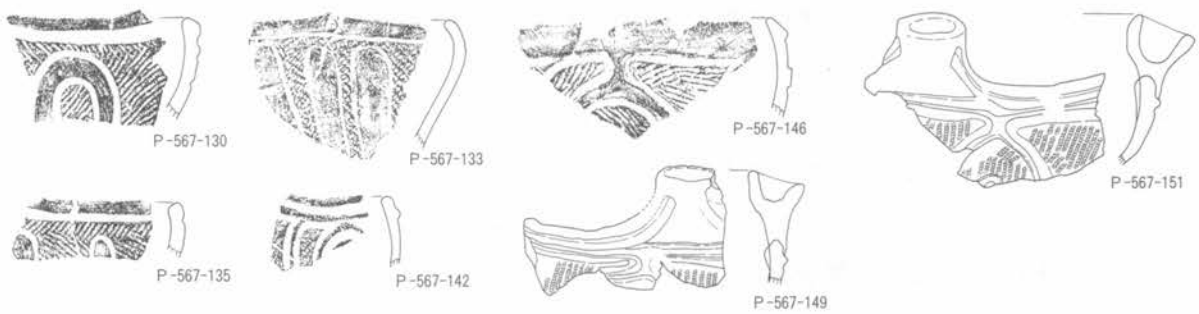
キャリパー形土器が消滅し、口縁部文様帯と胴部文様帯が事実上一体化するものの、横位の連携が残されている段階である。明確にこの時期に属すると考えられる遺物は少ないが、Ｐ－567からはまとまった遺物が出土している。Ｐ－567の130、133、135は横位連繋弧線文であるが、横一次区画文の下に縄文の横位施文が施され、かろうじて横位の連携が残されている。しかし146や151など、横一次区画文と胴部文様とが融合しつつあり、主文様の単位文化が始まっているとみられる。加曽利ＥⅢ式の新しい段階に比定されるが、過渡的な様相が強い。遺構としては、Ｐ－567以外にはっきりしたものは見つかっていない。

Ⅲ期

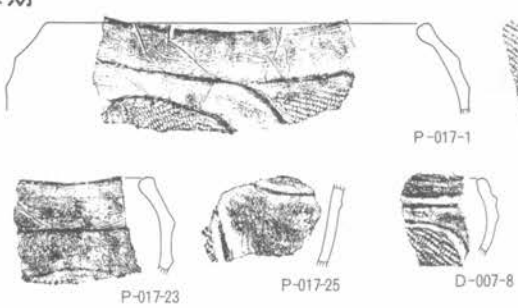
Ⅰ期



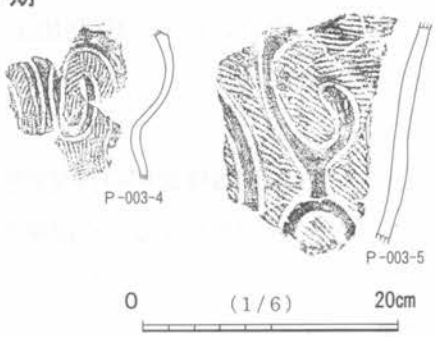
Ⅱ期



Ⅲ期



Ⅳ期



第169図　縄文時代遺構出土土器

口縁部の横一次区画文と、それに付属する単位文化された胴部文様により構成されるものである。P－017の１や23、25、26は全体はうかがえないものの、主文様が球状文、副文様がU字文を呈すると考えられる。加曽利EⅣ式に属するもので、D－007、P－017、P－385、P－465が該当する。

Ⅳ期

胴部に縦位の磨消縄文が配されるもので、特徴的なJ字状を呈する。後期初頭の称名寺Ⅰ式に属するもので、P－003などが該当する。遺構群の終末期に位置づけられる。

グリッドからはこれ以前やこれ以降の遺物も出土しているが、遺構群としてはこれらの時期に収束すると考えられ、時期不明な遺構も含めて主体的時期になるのはⅠ期と考えられる。また、隣接区からは縄文時代の遺構は検出されなかったため、集落跡としてもこの範囲で収束すると考えられる。遺構群は台地の西側に構築され、西側の谷に面するように位置する。住居跡は北西から南東にかけて並ぶように構築される一群と、南西部にやや集中して構築される一群とに分けられる。前者に属する住居跡は、直径５m～７mの円形プランを呈し、柱穴もしっかり確認されているのに対し、後者に属する住居跡は直径３m前後で、内部も炉跡しか確認されないものが多い。出土遺物からは明白な時期差が認められないため、機能差を想定するべきであろう。土坑群の配列は、大きく北西から南東に長い楕円形を呈するが、細かく見ると北西部、南西部、南東部にそれぞれ小さく環状に構築されている。集落全体が一つの集団としてのまとまりを持ち、さらにその中でより小さな組織をもとにした活動が営まれた痕跡と捉えられよう。

2　古墳時代

古墳時代後期の竪穴住居が計14軒検出されたが、本調査面積36,000㎡余りに比べて遺構密度は極めて低いと言える。出土遺物には非常に多くの赤彩土師器杯や黒色処理の土師器が見られる。上総地区の調査事例から当遺跡が含まれる山武郡北部地域の古墳時代後期の土器編年が小沢氏により提示されている[2)]。また、渡邊氏により芝山町内の調査出土遺物の検討から、より地域を限定した編年も示されている[3)]。それらに拠れば、当地域の古墳時代の土器の特徴として、５世紀末から６世紀前葉をピークに赤彩される土師器杯が主体を占め、６世紀後葉に黒色処理、漆仕上げ土器が出現するとこれらや無彩の杯に赤彩の杯が凌駕され、６世紀いっぱいで赤彩の杯はほとんど消滅する。また、土師器杯の形態変化から見た場合、須恵器模倣杯の出現の前段階として丸底半球形で口縁端が内湾する杯があり、須恵器模倣杯が出現すると後者が前者を凌駕するようになる。また、須恵器模倣杯の口縁部高は高いものから低いものへと変化し、杯の大きさも全体に縮小化してゆく傾向が見られる。このような研究成果に基づき当遺跡の出土遺物、特に土師器杯から各遺構の変遷と年代観を次の４期に分類した。

Ⅰ期

カマドを持たないD－014住居出土の土師器半球形杯は口縁端が内傾するもので、全面を赤彩している。これが当遺跡では最も古いタイプの杯である。この住居は出土遺物が少ないので、須恵器模倣の土師器杯が伴うかどうかははっきりしないが、須恵器模倣杯の出現する前段階の時期と考えられる。D－018住居出土土師器は須恵器模倣杯の初現形態で、口縁高の高い土師器杯や短頸壺等があり、供膳形態から見た場合かなり古い様相を呈する。小沢編年の０期～１期に相当すると考えられるが、甑などの煮沸形態は逆にかなり新しい様相を呈する。D－014住居出土遺物に比べやや新しい傾向が見られる。

Ⅱ期

D－011住居出土遺物には扁平な椀形杯と須恵器模倣杯が混在し、また赤彩される杯が多い。D－013住居出土遺物には赤彩される杯が多く、器形で言えば須恵器模倣杯が主体を占める。D－011よりはやや後出的である。D－025住居出土遺物中の土師器杯は須恵器模倣杯で占められ、口縁部内外面を赤彩される杯が多い。同様の遺構にはD－022・024があげられる。小沢編年の２～３期に該当すると考えられる。

Ⅲ期

D－019住居出土遺物にはＴＫ43段階併行と考えられる須恵器杯と赤彩土師器杯・黒色処理杯が伴う。また、杯の口縁高が器高の１/２～１/３を占める。これらの特徴からこの住居出土遺物は小沢編年の４～５期に相当すると考えられるが、甕類は胴部がかなり張り出す球胴形を主体としており、杯類に比べやや古い様相を示す。D－020住居出土遺物中には極端に扁平な土師器杯が存在する。特に第109図17は赤彩及び黒色処理が同一個体に施される杯である。D－016住居出土遺物は黒色処理の杯が多くなり、D－020に近い供膳形態の特徴を持つ。D－015住居出土遺物は須恵器模倣杯が主体を占め、赤彩・黒色処理それぞれの土師器が存在する。口縁高は器高の１/３前後を測り、この期の中でもやや後出的である。

Ⅳ期

D－021出土遺物については赤彩土器が全く含まれないかどうか、また須恵器の出土量についてもはっきりしないが、杯形態は口縁部の高さが器高の１/２～１/３を占める。D－017・023住居出土遺物についても同様であり、一応赤彩土師器の衰退する時期のものとして設定した。小沢編年の６期に該当すると考えられる。

以上の各期の絶対年代を小沢編年等から想定すると、Ⅰ期は５世紀末を中心とした時期、Ⅱ期は６世紀前半、Ⅲ期は６世紀後半、Ⅳ期は６世紀末から７世紀初頭を中心とする時期に相当すると考えられる。

この結果から、すでに第１章第２節「遺跡の位置と環境」でも述べたように、高谷川上流部やその支流域には古墳時代後期の大規模な集落は展開しておらず、今回の調査でもその傾向を裏付けている。

３　中 近 世

（１）　中世土器・陶磁器の特徴

本調査の範囲から遺跡を大きく５地点（Ａ地区・Ｂ地区北・Ｂ地区南・Ｃ地区・Ｄ地区）に分割したが、それぞれ出土土器・陶磁器に大きな特徴を持つ。また、生産地で見ると特に瀬戸・美濃製品の多さが目を引く。

出土地点ごとの土器・陶磁器量については第25表のようにして、器種ごとに細分し数量分析をした。概観するとＢ地区南では平碗・折縁皿・合子などの中世遺跡からの出土例の多い典型的な古瀬戸製品を出土し、Ｂ地区北では堺・丹波・肥前磁器・瀬戸美濃陶器などの、やはり出土例の多い典型的な近世陶磁器を出土している。Ｃ地区はＢ地区南に器種構成が似通っているが、出土量が圧倒的に少ない。Ａ地区はＣ地区より更に少なく、Ｄ地区になるとわずかに７点のみである。

中世陶磁器について、特に出土量の最も多かった中世墓域のＢ地区南出土遺物を更に時期別・器種別に細かく分析したものが第26表である。最も古い段階の古瀬戸前Ⅲ期～中Ⅳ期の製品は花瓶・折縁深皿・卸皿・合子・天目茶碗の計８点で花瓶や合子などの宗教的意味合いを持つ遺物を含む特徴がある。つづく後Ⅰ期～後Ⅳ期は平碗・縁釉小皿・碗形鉢・折縁中皿・折縁深皿・盤類・直縁大皿の計51点で、これは古瀬戸製品総計62点の中で82％を占める。特に後Ⅲ期のものが31点と古瀬戸全体の50％を占め最も多い。この

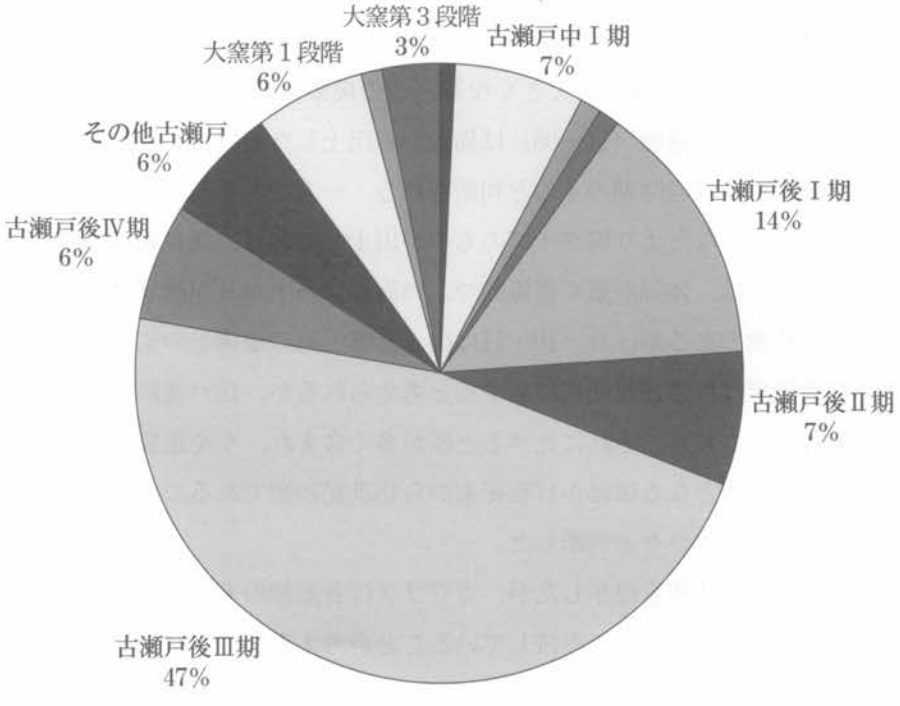
第25表　地点別土器・陶磁器出土量(破片数)

種類	器種		出土地点						合計
			A地区	B地区北	B地区南	C地区	D地区	その他	
土師質土器	カワラケ(皿)		5	17	52	7	5		86
	土鍋		1	6	38	1	1	5	52
	焙烙			1					1
	擂鉢			1					1
	火鉢			25	1			2	28
	その他		2	1	4				7
陶器	碗類	瀬戸美濃碗類	1	16	3			1	21
		肥前碗類		7					7
		京焼風碗類	1						1
		平碗			27	3		1	31
	皿類	縁釉皿			14	1			15
		直縁大皿			7				7
		折縁深皿			10				10
		折縁中皿			1	1			2
		折縁小皿			1				1
		卸皿			2				2
		稜皿			2				2
		反皿		3		1			4
		鉄絵皿		1	17				18
		志野丸皿			3				3
		その他皿類		4	3				7
	擂鉢類	常滑擂鉢		2	15				17
		瀬戸美濃擂鉢	4	18	7	1		5	35
		堺擂鉢		5	3	1			9
		丹波擂鉢		6					6
		その他擂鉢(在地)	1			1			2
	鉢類	片口鉢	1	3					4
		その他鉢類	2	11	4			5	22
	盤類				10	1			11
	甕		1	13	35	9		12	70
	壺		1	19	2	1			23
	徳利			5		2			7
	天目茶碗		3	13	7	1	1		25
	香炉		1	5					6
	灯明皿			14	2			3	19
	花瓶				4				4
	仏具				1				1
	合子				1				1
	合子蓋				1				1
	その他			1					1
国産磁器	肥前碗類			3	1				4
	肥前皿類				3				3
	肥前鉢類				2				2
	小杯			8	1				9
	徳利			3					3
	その他				1				1
貿易陶磁	青磁				3				3
合計			24	211	288	31	7	34	595

第26表　B地区南瀬戸製品分類表

瀬戸各段階	平碗		縁釉小皿		碗型鉢		折縁中皿		折縁深皿		盤類		直縁大皿		花瓶		卸皿		合子		天目茶碗		擂鉢	丸皿か端反皿	稜皿	合計
古瀬戸前Ⅰ期																										0
古瀬戸前Ⅱ期																										0
古瀬戸前Ⅲ期																	1									1
古瀬戸前Ⅳ期																										0
古瀬戸中Ⅰ期										1					2			1	1							5
古瀬戸中Ⅱ期																										0
古瀬戸中Ⅲ期																			1							1
古瀬戸中Ⅳ期																					1					1
古瀬戸後Ⅰ期					5		1		2	2																10
古瀬戸後Ⅱ期	2	1										2														5
古瀬戸後Ⅲ期	10		11		1		1		3		4		2													32
古瀬戸後Ⅳ期	3																						1			4
その他古瀬戸		1																				3				4
小計	15	2	11	0	6	0	2	0	5	3	4	2	2	0	2	0	0	2	2	0	1	3	1			63
古瀬戸合計	17		11		6		2		8		6		2		2		2		2		4		1			63
大窯第１段階																					2			2		4
大窯第２段階																					1					1
大窯第３段階																									2	2
大窯小計																					3			2	2	7
古瀬戸大窯合計	17		11		6		2		8		6		2		2		2		2		7		1	2	2	70

注）器種欄の左側の欄は各段階に時期が特定できるもの、右側の欄は該当する時期を中心として、いくつかの時期にまたがるものをそれぞれ破片数で示している。



時期の製品には美術陶磁や特に仏教関係に限定される遺物はほとんどない。更につづく大窯期のものは（古瀬戸後Ⅳ期の新しい段階か）大窯第１段階に属する擂鉢が１点、第１段階の天目茶碗３点、第１段階または第２段階の丸皿か端反皿が２点、第３段階では稜皿が２点のみで、４段階のものが見あたらない。

以上の結果から出土遺物、特に最も多く見られる（古）瀬戸製品から見た場合、この地点が中世について言えば13世紀後葉から16世紀後半頃にかけての遺物から構成され、最盛期が15世紀前葉頃（1420～1440）にあることが認識できた。

また、貿易陶磁については、いずれもＢ地区南から小破片３点が出土しているのみで極めて少ないのも特徴の一つである。これらはいずれも13世紀後半から14世紀前半にかけてのもので、伝世していた可能性が極めて強く、遺跡の年代決定の基準とはなり得ない。

大窯第３段階以後、空白期間を置いて、Ｂ地区南の墓域南端から志野釉を掛ける蘭竹文鉄絵皿が数個体出土している。藤澤氏に拠れば、これらは瀬戸美濃３小期（17世紀半ば頃）に当たるということである。したがって、中世遺物中最も新しい縁釉小皿との間に約１世紀ほどの断絶期間を設定せざるを得ない。また、Ｂ地区南からは寛永通寶のうちいわゆる古寛永（1634初鋳）と呼ばれるものが５点出土しており、他地区に比べて比較的多い。これは蘭竹文鉄絵皿の年代観と誤差が余りないように思われる。

中世陶磁器と量的には遜色ない遺物として、土師質土器が見られる。当遺跡からは総量は少ないものの、様々な形態の土師質小皿、いわゆるカワラケが出土している。特に当遺跡が中世から近世への過渡期の遺跡であることを考慮すると一段と重要性を増し、この時期のカワラケ編年（主体となる器形）がある程度わかってくると考えられる。

１の口径対底径比は2.53、２は１ほど極端ではないが2.45を測る。一方、５は2.35、７は1.96となり、１・２が５・７に比べて口径対底径比が大きくなる。この現象は双方の時期差からくるものと考えられる。７を出土したＣ地区堀立柱建物（Ｈ－08）は周辺から出土した遺物から14世紀～15世紀前葉に時期を設定でき、このカワラケもほぼ当時期のものと判断される。一方で、１及び２は前述したように、酒々井町本佐倉城跡や長勝寺脇館跡などより同タイプのものが出土しており、16世紀代の典型的なタイプと考えられる。８から11については、体部が短く直線的で、内面の立ち上がりが溝状に窪む。これは近世カワラケに見られる典型的な特徴であるが、９・10・11は出土遺構と他の遺構との切り合い関係や、それらの出土遺物から大きく17世紀半ば以降18世紀代に属すると考えられるが、江戸遺跡や県内の18世紀頃のカワラケの胎土はかなり精選されており、それに比べると砂が多く含まれ、やや粗質で、中世的な胎土を持つ。また、この地点の遺物の主体となる磁器が17世紀末から18世紀初頭であることを考慮して、９・10・11は17世紀末から18世紀初頭のカワラケと判断した。

以上のようにカワラケの年代観を提示したが、カワラケは各形態のものが、それぞれ時期を互いにオーバーラップさせながら、長期にわたって存続していることが考えられ、１個や数個の個体から遺構の時期を判断することは、極めて危険と言わざるを得ない。

13は土師質の火鉢であるが、同一遺構内から出土した美濃産天目茶碗の年代観から美濃３・４小期（17世紀半ば）頃のものと認識できた。従来、外面にスタンプ文を押すものカワラケと同様な胎土を持つ火鉢については、いずれも中世のものと判断していたが、この資料によって近世に入っても少なくとも17世紀半ばまでは中世形態が存続していることが判明した。土師質小皿いわゆるカワラケが近世形態に移行する時期と、火鉢の形態変化がどのように重なるのか、今後の資料の増加に期待したい。

（2）地下式坑と粘土貼土坑について

地下式坑については、墓としての機能に限定されて論ぜられているが、今回の発掘調査では、地下式坑からは人骨は全く発見されていない。馬の骨・歯についてはすべて地下式坑の天井部が落ち込んでからその落ち込みを墓坑として再利用したものであり、やはり、地下式坑が人間を埋葬した墓とする根拠に乏しい。逆に、小型の箱形の地下式坑（Ｐ－182・183）は近世のものであることが判明したし、機能も掘立柱建物との関連で貯蔵施設と考えた方がより妥当であることも認識できた。しかし、大方の地下式坑については墓坑でないとする積極的な根拠もないのが実状である。

ここで、当遺跡の地下式坑について形態の整理をしてみよう。

当遺跡からは計17基の地下式坑が検出された。これを半田分類（1979）[4]の基準に従って分類すると下記のようになる。

有段Ⅰ類（竪坑（出入口）底と主室床面の間に段差があり、その途中に階段状の施設を持たないもの）

Ｐ－061・Ｐ－062・Ｐ－063・Ｐ－067・Ｐ－070・Ｐ－091・Ｐ－097・Ｐ－115・Ｐ－163・Ｐ－164・Ｐ－175・Ｐ－177・Ｐ－178・Ｐ－191・Ｐ－287・288

さらにその中にはＰ－163のようにＢ２類に細分類されるものや、Ｐ－164・Ｐ－177のようにＡ１類に細分類されるものも存在する。またＰ－175などは竪坑（出入口）部が主室とほぼ同じ幅になるもので、他の地下式坑とやや異質である。しかし、大半の地下式坑の天井部は残っていないので、羨道部の有無・位置については、ほとんどがはっきりとは分からない。

有段Ⅱ類（有段１類に類似し、段差の部分に昇降の際の足掛けの施設を持つもの）

Ｐ－072は入口部が２段となり、２段目に小ピットがある。竪穴住居に見られるような階段状の施設を設置していたのではなかろうか。

また、池上分類（1986）[5]に従うとすべてがＴ字有段（玄室（出入口）短軸方向に竪坑部を有する）の範疇に属し、Ｐ－177は更に有羨道になる。

また、池上氏は地下式坑の竪坑部の閉塞について重要視しているが、今回の検出例について言えば、竪坑部周辺には閉塞施設に伴うピットや溝などは全く検出していない。更に、天井部崩落前の竪坑部から主室内の埋土の堆積状態を観測すると、地下式坑全てに言えることであるが、出入口部から主室に向かっての自然な土砂の流れ込みが観察できた。おそらく、出入口の開口部を覆う遮蔽物があったことは否定しないが、あったとしても簡単なもので、地下式坑が使用されなくなると遮蔽物が壊れ（取り除かれ）、出入口から自然に土砂が流れ込んでいったものと判断される。また、粘土やロームなどで出入口を遮蔽していた痕跡もなかった。主室底面に硬質面がないので頻繁とは言わないが、ある程度の人の出入りがあったものと考えられる。

地下式坑の地形的・時間的立地についても考えてみる。

１　地下式坑はＢ地区南においては墓坑群よりも古い段階のものである。

２　地下式坑はＢ地区北においてはいずれも重複する溝より古いものである。

３　Ｂ地区北の地下式坑は谷の方向に向かって出入口部を造っている。

４　Ｃ地区の地下式坑は出入口の方向が一定でない。

１についてはＣ地区に於いても同様のことが言えると思われる。

２についてはＢ地区北の地下式坑の配列（特に、その出入口）と溝の方向とが完全に一致する。しか

し、溝は地下式坑が完全に埋没した後造られていることが調査によって判明した。また、多くの中世遺跡で地下式坑と溝が重複している遺構配置図を目にするが、その重複関係について触れている報告書は少ない。しかし、たいていの場合天井部を掘り残す地下式坑であれば、溝によって天井部の厚さが極めて薄くなり、物理的に天井部を保持できないと考えられる。つまり、多くの場合溝は天井部が崩落し、地下式坑が埋没した後、新たに造られたものと判断するのが妥当であろう。溝でなくとも、地下式坑を境に大きく地山を掘削して、整形する場合も同様と考える。当遺跡では溝を掘る際地下式坑が完全に埋まっていれば、周辺の地形と区別がつかず、その位置が偶然に一致したとは考えにくい。一方で地下式坑は墓域の中にあっては台地整形区画の縁辺部に造られることが様々な調査によって判明してきている。すなわち、地下式坑の配列軸つまり縁辺の境界線とその後造られた溝の方向とが一致することになる。このことから、地下式坑造営に伴い何らかの境界が存在し、その境界上に地下式坑が造られたものと考えられる。そして、地下式坑が埋まった後もこの境界が存続していて、その境界上に、新たに溝や台地整形区画が造られたものと言えるのではなかろうか。この溝の造られた時期ははっきりしないが、少なくともＢ地区北の掘立柱建物跡と同時期かやや古い段階になるであろう。

３、４については明確な時期差が言えないので、どのような理由からこのような配置になったのかは不明であるが、少なくともＢ地区北の規則的な配置は、短期間の内にこれらの地下式坑すべてが機能していたものと理解できよう。Ｂ地区北の斜面に沿うように並ぶ地下式坑群の南側緩斜面（Ｂ地区南墓坑群の東側）は空港開港まで民家があったが、移転の際にかなり地表面下を攪乱しており、そのため本調査は実施されなかった。この地点に存在したであろう遺構との関連が全くわからない現段階では、他の遺構との関連からその機能を推論することはできない。

以上のように地下式坑の配置に何らかの境界線が存在するであろうと考えたが、一方、Ｃ地区の地下式坑の配置は規則的とは言えない。複数の境界を設定することも可能であるが、主となる境界を設定すれば、その線上に並ばない例も存在する。このように、地下式坑の配置は、Ｂ地区北のようにきれいな配置を呈するものばかりでなく、多くの遺跡でアットランダムな配置が見られる。一律に不動の境界を設定できないようである。

地下式坑の配置の条件、地下式坑の性格、地下式坑をどのように地表面と遮蔽していたか、また、地下式坑が周辺の全ての遺構に先立って造営されていることの意義など地下式坑を取り巻く多くの問題点が残されたままとなってしまった。

一方、粘土貼土坑についてはほぼ中世に限定される墓坑群中に見られる。普通、ローム中に掘り込む土坑墓は、土坑を掘りあげた後遺体を埋葬し、すぐに埋め戻すと考えられる。したがって、その覆土には地山のロームがブロック状に混入しており、ほとんど分層できない。つまり粘土貼土坑を土坑墓の一種と見るならば、土坑墓の覆土に見られるような土砂の堆積状況を示すであろう。しかし、当遺跡の粘土貼土坑の覆土の状況を見ると、ロームブロックが混入しているものもあれば、黒褐色土や暗褐色土などを主体とする覆土もあり、すべてが一様に埋没したとは考えにくく、粘土を貼った状態のままで、土砂を埋め戻すこともなく、機能していたのではないかと思われるものも存在する。

結果的に、全く人骨の出土がなかった地下式坑及び粘土貼土坑については墓坑であるのか、また、それとは異なる用途に用いられたのか結論は出なかった。逆にすべての地下式坑形態や粘土貼土坑を墓坑とするのは極めて危険であることは認知できたと思う。今後は、より詳細な発掘調査と綿密な分析によってさ

らに機能分類が可能となるであろう。

（3）　大規模墓域と台地縁辺の墓

すでに述べたように中世の大規模墓域はB地区南とC地区にそれぞれ1か所ずつ存在する。そして、それらは大きく異なった特徴を持つ。その特徴を列挙すると以下の通りである。この場合の地下式坑・粘土貼土坑は墓地を構成する遺構として取り扱った。

B地区南に見られる特徴

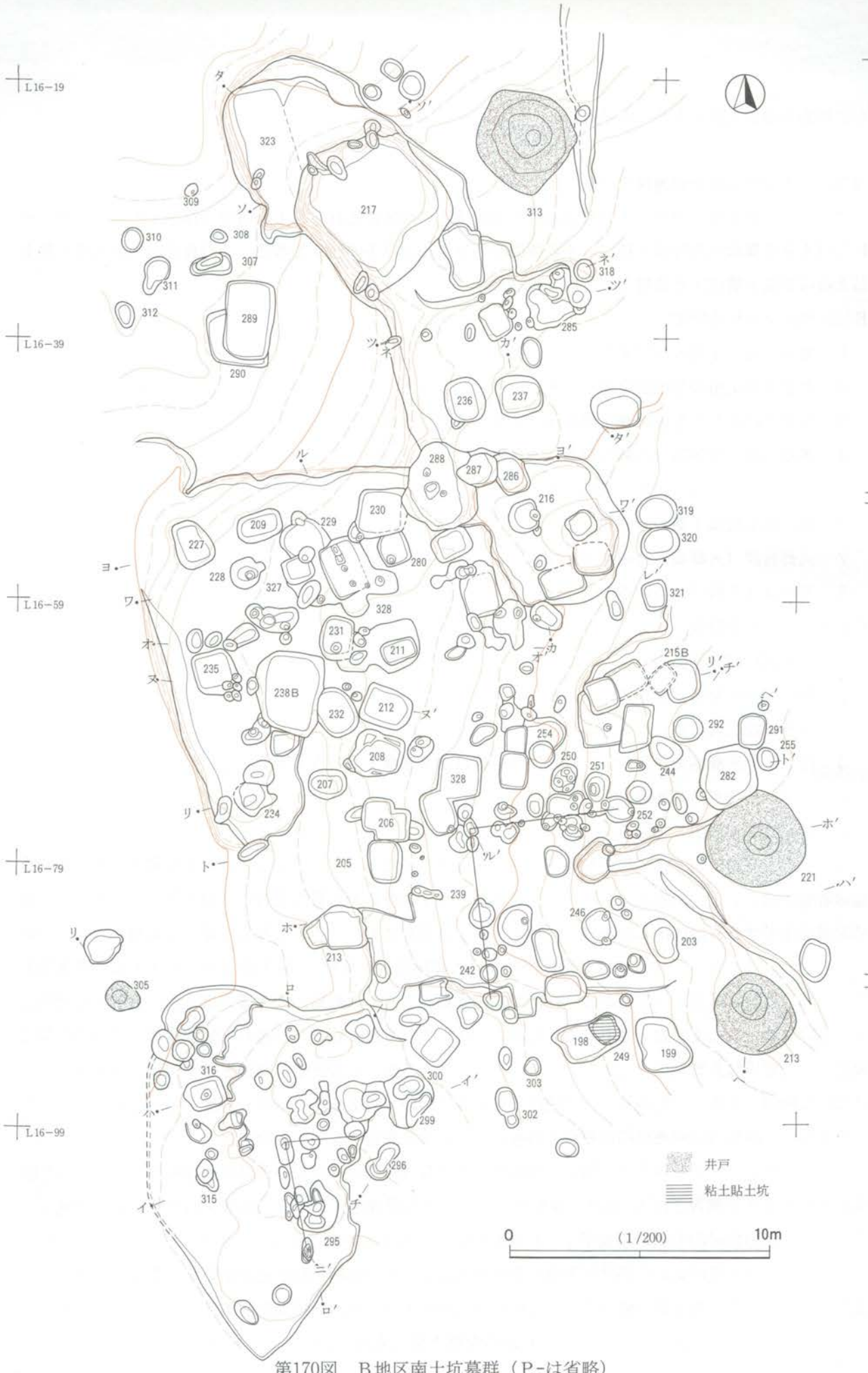
1　地下式坑は1基のみである。
2　大きく3か所の平坦面を造り出す。
3　埋葬法はほとんどが火葬を伴わない土葬と考えられる。
4　多量の瀬戸産陶器（古瀬戸製品）を含む。
5　副葬品として銭貨を多く埋納する。
6　粘土貼土坑は1基のみ確認している。
7　火葬施設（火葬墓）は確認できない。
8　井戸は4基検出している。

C地区に見られる特徴

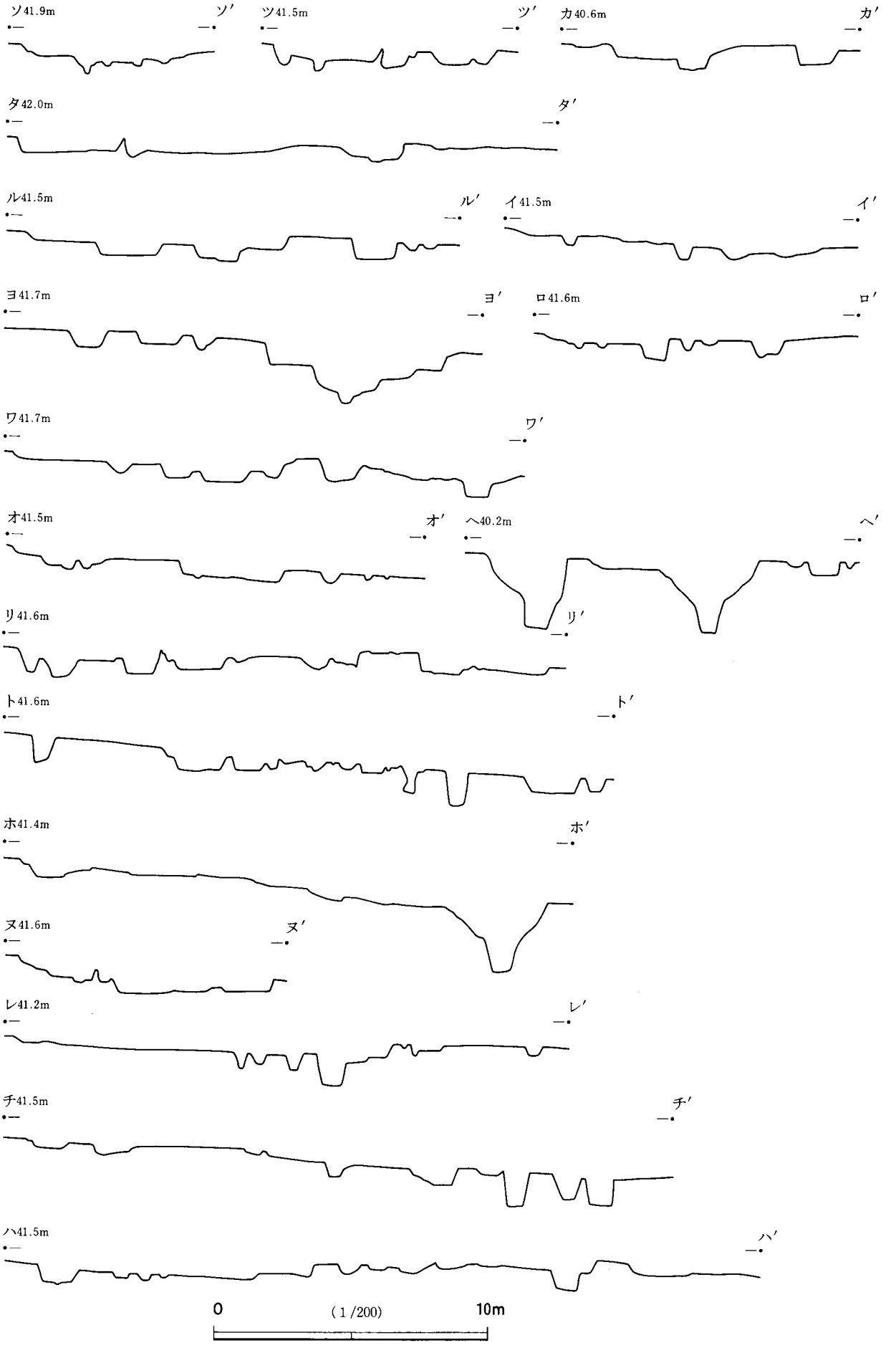
1　地下式坑が9基ある。
2　特に平坦面を造り出していない。
3　火葬施設（火葬墓）が8基ある。
4　ほとんど副葬品を伴わない。特に、渡来銭は永楽通寶1点のみである。
5　粘土貼土坑が7基ある。
6　井戸は2基検出している。

このようなB地区南とC地区の相違点は何に起因するのであろうか。ここでは大きな要因と考えられる被葬者層の違いおよび時期差の2点から見てみる。まず副葬品から見た場合、多量の国産陶器・若干の貿易陶磁を出土するB地区南の被葬者は一般農民層とは考えにくく、それよりも上位の土豪層と考えるのが妥当と思われる。逆にC地区にはB地区南にない火葬施設（火葬墓）・粘土貼土坑が存在する。東海地方では火葬墓には石塔類が伴う例が多く、同時期の土葬墓よりも火葬墓の被葬者のほうが社会的・経済的により高い階層に属していたとされる[6]。火葬については全国的に見て、一部の支配者層の葬法から次第に普及し、大規模な火葬墓地へと移行していったようであるが、一般民衆の葬法として普及したかどうかははなはだ疑問である。したがって、C地区の被葬者についてもある程度の身分者層を考えなければならないであろう。結果的に両地点間の被葬者の階層差はあまり想定できそうもない。

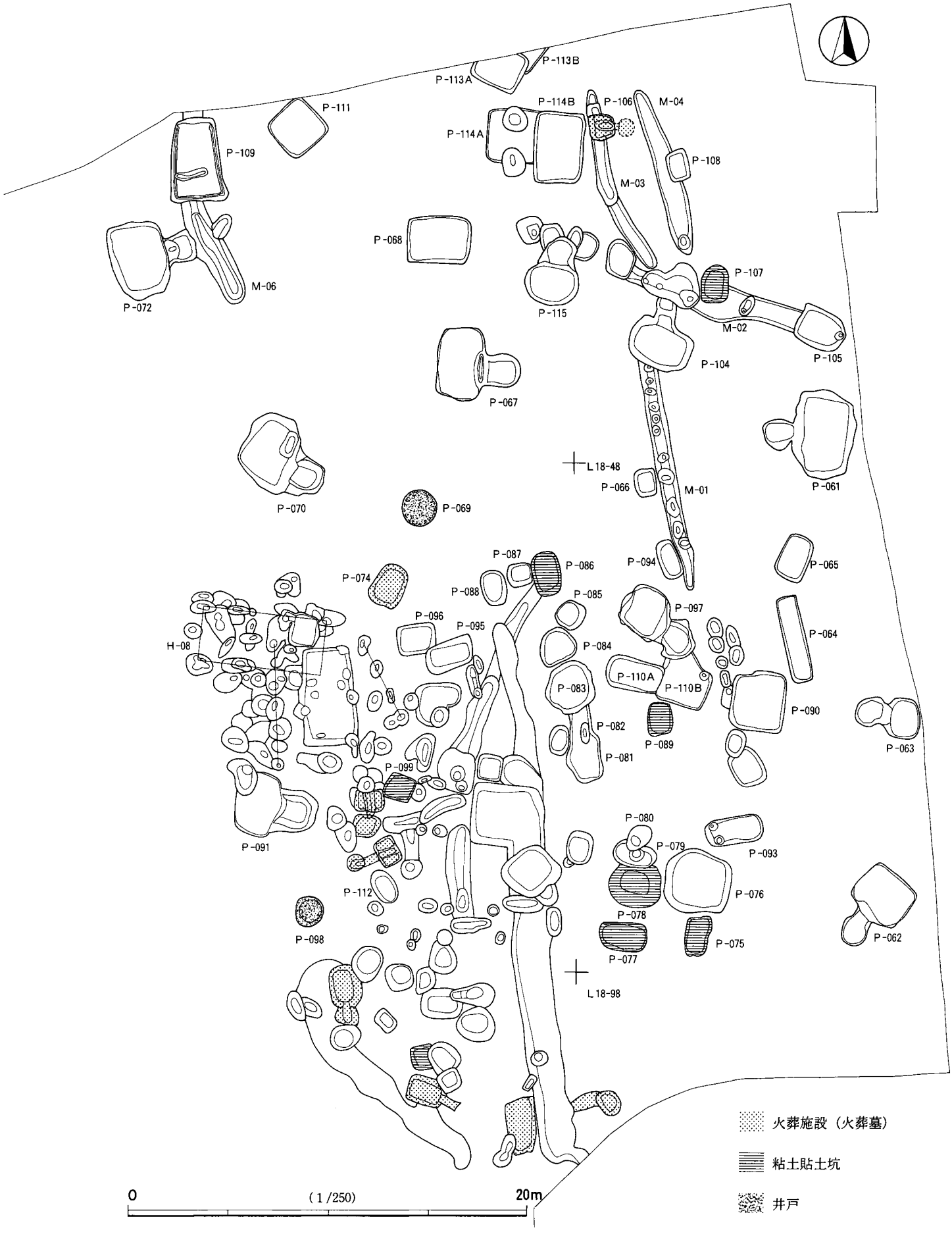
一方、時期差から見てみると、例えば茨城県の屋代B遺跡では15世紀中葉以降火葬墓から土葬墓へと転換して行く事例が報告され[7]、また、静岡県の例では寛永通寶を含まない六道銭を副葬する墓の初現（一定の普及）は15世紀の中頃から後半で、17世紀中頃から後半まで存在するとされる[8]。このような事例からB地区南は13世紀後葉から16世紀中頃の遺物を出土し、その盛期が15世紀前葉頃であることは遺物の項目で述べたところであるが、強いて言えばC地区はそれよりやや古い15世紀前葉以前に盛期を設定できよう。すなわち15世紀前葉以前の段階ではC地区を焼き場（火葬施設）とし、C地区にそのまま埋葬する



第170図　B地区南土坑墓群（P-は省略）



第171図　B地区南土坑墓群エレベーション



第 172 図　C地区中近世遺構配置図

か、Ｂ地区南に陶磁器などの副葬品を伴って埋葬した可能性もあり得る。そして15世紀中葉以降Ｂ地区南が主体的な埋葬の場となり、葬法も火葬から土葬へ大きく転換して行き、副葬品も陶磁器から六道銭を主体とするようになったのであろう。

上述のように大規模墓域の変遷について考えてきたが、その大規模墓域に含まれないあたかも単独で造営されるような墓坑が何基か検出されている。Ｂ地区北の北端の台地縁辺部で、中世渡来銭４点（天祐通寶１・不明３）、近世雁首銭１点、近世カワラケ１点、近世砥石１点が出土している。これらはグリッド一括遺物として取り上げられているが、表採したとは考えにくく、たぶんグリッド周辺の土坑から一括して出土したと考えるのが妥当であろう。したがって、中世のある時期にＢ地区北の北端台地縁辺部に一部とはいえ墓地があったことになる。同様のことがＤ地区南端のＰ－129にも言える。Ｐ－129は方形の土坑墓で中世渡来銭６点（開元通寶１・至道元寶１・熙寧元寶１・元寶通寶１・洪武通寶２）が副葬品として人骨とともに出土している。付近にはそれに伴うような掘立柱建物跡は検出しておらず、この単独の墓坑を屋敷墓と想定する根拠に乏しい。いずれの土坑も周辺の斜面部の調査はいっさいしていないが、斜面部に墓地が存在する可能性は光町笹本城などの調査で確認されている[9]ところであり、当遺跡でも周辺の斜面部に墓地が展開する可能性もある。

（４）中世から近世へ

近世18世紀中頃に行方光広が当時の伝承をまとめた軍記物『総州山室譜伝記』[10,11]によれば、戦国時代岩山地区の土豪層は斎藤・岩沢・麻生・長谷川・置地・愛河・佐久間・作地・小川・小野・手嶋・石井・浅川・平野の計14氏で、そのうち斎藤氏が（岩山）城主とされる。斎藤助四郎清長は山室氏に仕えて岩山城を守備していたが、弘治３年（1557）３月、浅倉山（朝倉）での狩猟中、怒賀家忠の家人のために謀殺されている。以後の岩山城については何の記録もないが、斎藤氏を討った怒賀氏は斎藤氏同様山室氏に仕えて、浅倉砦を守備して「大老職」と称された。浅倉砦は現在朝倉字屋敷台に比定されているが、城の遺構は確認できない。天正18年（1590）12月、怒賀氏は飯櫃城攻防戦の際自害している。当の主君山室常隆は天文元年（1532）に山室城から飯櫃城に移ったとされる。弘治元年（1555）６月12日山室氏勝と牛尾胤仲が対陣、多古城が陥落し牛尾氏が滅亡した。同年10月牛尾氏家老川口壱岐守が飯櫃城を襲撃、激しい攻防戦を展開する。天正18年（1590）12月26日、山室光勝は千葉氏の残臣700余人を糾合、飯櫃城に篭城して保科正光の率いる豊臣軍に対抗、壮絶な攻防戦を展開した。以上が総州山室譜伝記による当地の動向である。これは伝承を集めた軍記ものであり、表現に誇張が多く、内容を総て信頼するには難があるが、ここに登場する斉藤助四郎清長が岩山城主であったかどうかは別として、この時期の岩山城とそこに生活した人々に焦点を当ててみよう。

調査された遺構（墓）が位置的に見て岩山城とそこで生活していた人々と何らかの関係があることは明白である。しかし、調査で発見された遺物から見ると弘治３年（1557）、すなわち16世紀半ば岩山城の城主斎藤氏や土豪・民衆の存在を確認できる資料は非常に少ない。むしろこのころから17世紀初頭の陶磁器資料が非常に乏しくなる。反面、永楽通寶についてはＢ地区南より出土しており、少なからず15世紀後半以降、16世紀代に至っても土器・陶磁器を伴わない埋葬は行われていた可能性がある。また、この時期の墓域が更に別の地点に移動している可能性も考慮しなければならない。飯櫃城の発掘調査では量的なものは別として16世紀後半の遺物が発見されており、地理的に見ても岩山城が同時期に機能していた可能性は

高い。これは岩山城本体を発掘調査することによって解決される問題であり、おそらく、将来発見されるであろう遺構の中には当該期の墓地が存在する可能性も否定できない。

さて、美濃産志野釉皿がＢ地区南中世墓坑群最南端から出土している。先に述べたように中世遺物との間に約半世紀ほどの断絶期間を設定できる。時期的に見ると中世最末期から近世初頭にかけて、いったん何らかの理由で墓地が移動（廃絶）し、この地点に埋葬されなくなった。そして17世紀半ば頃ここに再び埋葬するようになった可能性がある。しかし、長く続かずこの時期のものをもって、その後Ｂ地区南の墓域からは新しい土器・陶磁器は出土しなくなる。すなわち、墓地が完全に廃絶することになる。その原因を考えてみると、一つには、近世初期の徳川幕府による寺請制度政策によるところが大きいと考えられる。

Ｂ地区北では人家（Ｈ－05・06・07）や家畜小屋（Ｈ－02）と想定される掘立柱建物、作業場と考えられる不整形の大型の浅い土坑（Ｐ－173・174）、井戸（Ｐ－162）、貯蔵施設と考えられる地下式坑形態の連続土坑（Ｐ－182・183）とほぼ１軒の屋敷を構成する遺構を検出している。ここから出土した遺物は肥前産の磁器が多くを占めており、17世紀半ばから18世紀後半のもので、主体となるのは17世紀末から18世紀初頭のものである。遺物から見るとＢ地区南の志野釉皿と明瞭な時期差があり、Ｂ地区南がこの掘立柱建物に生活していた人々の墓地があったとは考えにくい。

また、ほぼ同時期にＡ地区台地南端の谷津に面した地点にやはり掘立柱建物（Ｈ－10・11）が建てられた。この周辺からはＢ地区北ほど密集していないが、小規模な小屋や井戸などを確認している。この掘立柱建物の柱穴掘方内から古寛永及び新寛永が伴出している。古銭の年代観及び組み合わせから言えば17世紀後半頃のもので、Ｂ地区北の掘立柱建物の年代観にやや先行するものであるが、ほぼ同時期と考えて大過あるまい。

Ａ地区の西端に隣接する地点や谷を隔てた地点では、最近道路建設に伴う発掘調査が行われ、17世紀初頭や、やや新しい17世紀後葉の屋敷遺構が相次いで発見されている。このように見ていくと、近世初期の屋敷の占地状況が見えてくる。すなわち、17世紀前半から新寛永の出現する17世紀後半にかけて、あたかもほぼ期を同じくするようにして、中世集落とは異なる地点に新しい集落が形成された。それは、谷を見おろすような、台地の縁辺部に、テラス状に台地を整形し、掘立柱建物・井戸・作業場・土坑などを構成要素とした屋敷を一つの単位とし、単独か数軒の屋敷で構成されていた。この時点では、近年見るような集村は確認できない。

近世には佐倉七牧の一つである取香牧が、岩山地区の北側や三里塚地区に設置されおり、ここ岩山地区では捕馬が行われ、幕府役人や牧士が来村して宿泊したり、野馬が野馬除けの土手を乗り越えて麦や野菜を食い荒らしたことなどが酒々井町史に詳しい[12)]。ただこの取香牧の設置がいつ頃までさかのぼるのか、また、牧に付随する施設にはどのような規模のものがあったのか不明な点が多い。直接牧に関わるかはっきりとわからないが、鉄滓はＡ地区、Ｂ地区北、Ｂ地区南、Ｃ地区に分布して見られるが、特にＡ地区に多い。時期的に見るとＢ地区北の竪穴住居覆土出土のものを除いて、Ｐ－162・174などの近世遺構覆土中に多い。したがって、鉄滓は近世陶磁器と同じ時期、すなわち17世紀後半から18世紀末に掛けての時期を設定できそうである。鉄滓については何ら分析しておらず、どのような作業工程でできたものかはっきりしないが、この時期、数軒の屋敷からなる小単位の地区の中で、簡易な鍛冶屋（工房）があって、牧の経営に伴う馬具や農耕具などを生産していた可能性もあろう。斜面近くから検出された炭窯もこの時期のも

のと考えることもできる。

明治初年の陸軍迅速測図を見ると成田空港や工業団地の造成以前の村落の様子が分かる。今回検出された建物跡については当然のことながら記載されておらず、掲載された集落は上宿地区を中心として展開している。

以上のことを再度簡単にまとめてみよう。古宿・上谷遺跡は中世後期には土豪層の墓地として使われていたが、15世紀後半以降の中世岩山城に関連する人々からは、細々と墓地として機能していた可能性もあるが、主とした生活の場とはならなかった。その後17世紀前葉頃再び墓地という生活の場の一部になった。その墓地が機能しなくなる17世紀半ば以降新たに隣接する場所に住居が建てられ、安定した生活の場となっていたようであるが、遅くとも18世紀末までには、再び集落の再編成があり、この地点とは全く別の場所に集落の中心が移転した。これらのことから、従来言われているような古村（どの程度古いかは不明瞭であるが）であっても、その地区の中にあって集落の変遷が予想以上に大きくかつ頻繁に行われていたことがわかった。その岩山地区の集落がいつ頃明治初年のような配置になっていったのかは、現在整理中の上宿遺跡の報告によって明らかにされて行くであろう。

注１　遺物の時期決定にあたっては、主に以下の文献を参考にした。

加納　実「縄文中期後葉について　千葉県」『第３回縄文セミナー　縄文中期の諸問題』　1989　群馬県考古学研究所

上守秀明ほか『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅶ（佐原地区４）』　1992　千葉県文化財センター

２　小沢　洋「上総地域の鬼高式土器」『月刊考古学ジャーナル』１月号　1992

３　渡邊高広『芝山町御田台遺跡・小池新林遺跡』　1992　千葉県文化財センター

４　半田堅三「本邦地下式壙の類型学的研究」『伊知波良』２　1979

５　池上　悟「地下式坑瞥見」『立正史學』第59号　立正大学史学会　1986

６　尾野善弘「中世の火葬－東海地方－」シンポジウム『中世の火葬』資料集　1995　東国歴史考古学研究所、帝京大学山梨文化財研究所

７　桃崎祐輔「関東・甲信地域の様相」シンポジウム『中世の火葬』資料集　1995　東国歴史考古学研究所、帝京大学山梨文化財研究所

８　足立順司「六道銭と墓」静岡県考古学会シンポジウム『静岡県における中世墓』　1997　静岡県考古学会

９　シンポジウム「よみがえる笹本城跡」資料　1995　財団法人東総文化財センター、光町教育委員会

10　『芝山町史　資料集２　中世編』　1994　芝山町

『芝山町史　通史編　上』　1995　芝山町

11　「上総井田文書」平成７年度　横芝町教育委員会

12　「酒々井町史　史料集２（佐倉牧関係１）」1976　酒々井町役場

「酒々井町史　史料集３（佐倉牧関係２）」1979　酒々井町役場

「酒々井町史　史料集４（佐倉牧関係３）」1980　酒々井町役場

参考文献

神山　崇ほか『千葉県山武郡芝山町境遺跡発掘調査報告書－第Ⅰ・Ⅱ地点－』1980　境遺跡発掘調査会

横山　仁ほか「第Ⅱ章　中台貝塚」『主要地方道成田松尾線Ⅴ』　1987　千葉県文化財センター

喜多圭介ほか『千葉県成田市長田雉ヶ原遺跡・長田香花田遺跡』　1989　印旛郡市文化財センター

宮　重行ほか「第２章　宮門遺跡」『主要地方道成田松尾線Ⅵ』　1991　千葉県文化財センター

第173図　B地区北中近世遺構配置図（部分）

写　真　図　版

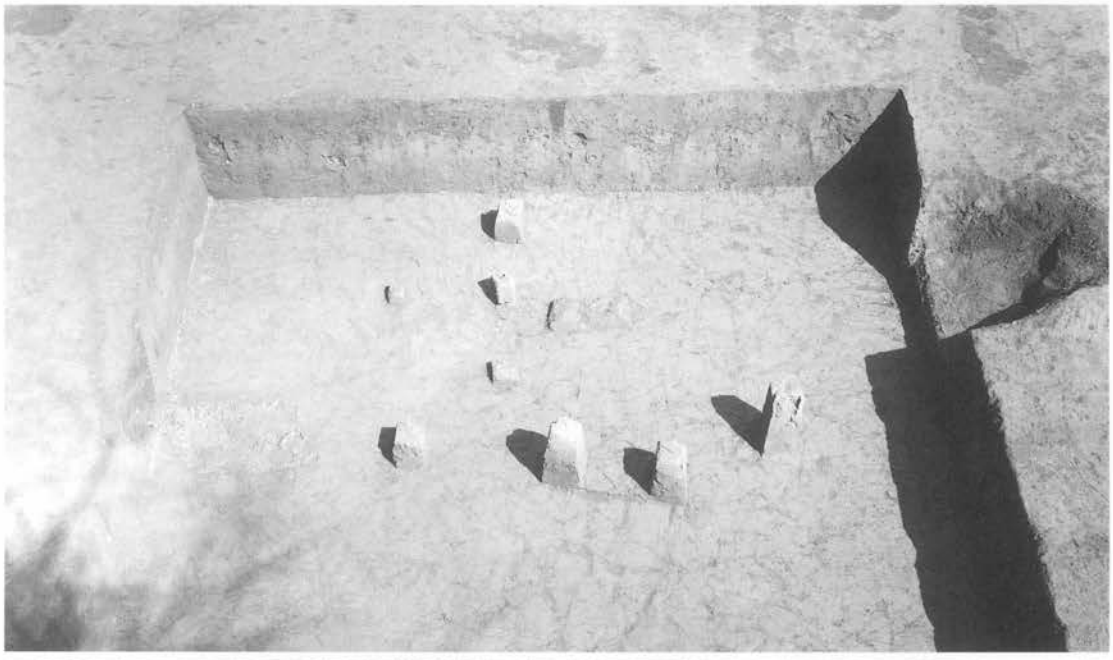
遺跡周辺航空写真（昭和58年撮影、約1／6,500）

図版２

調査前近景

調査前近景

確認調査近景



第１ブロック
遺物出土状況

（同　上）

第１ブロック
土層断面

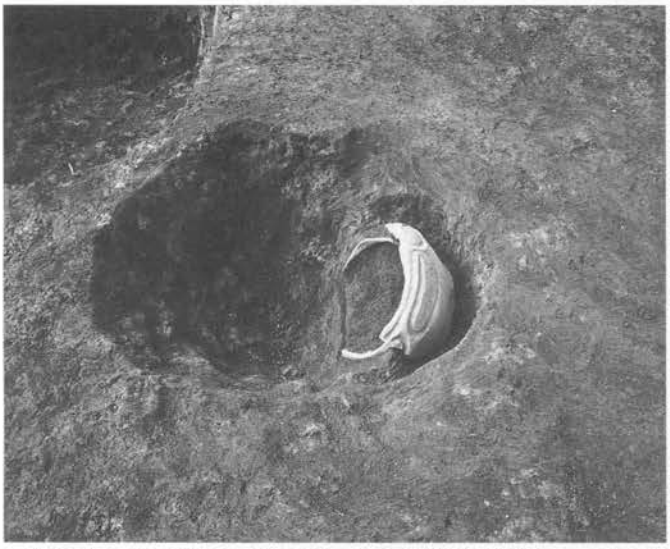
図版4

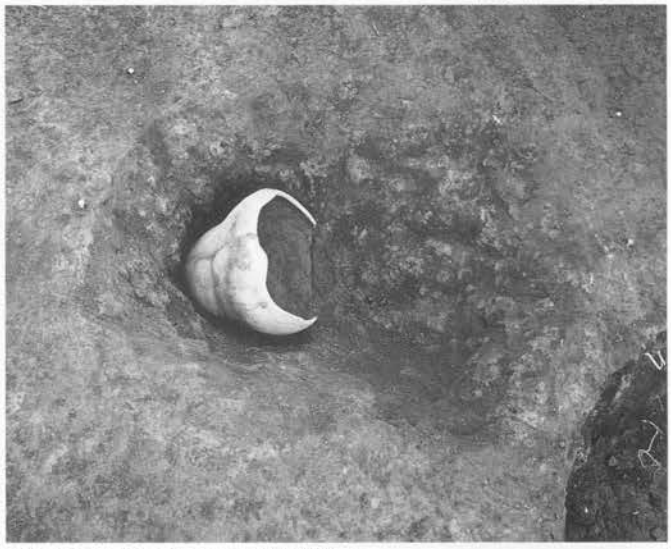
A地区
縄文時代
遺構

D-001

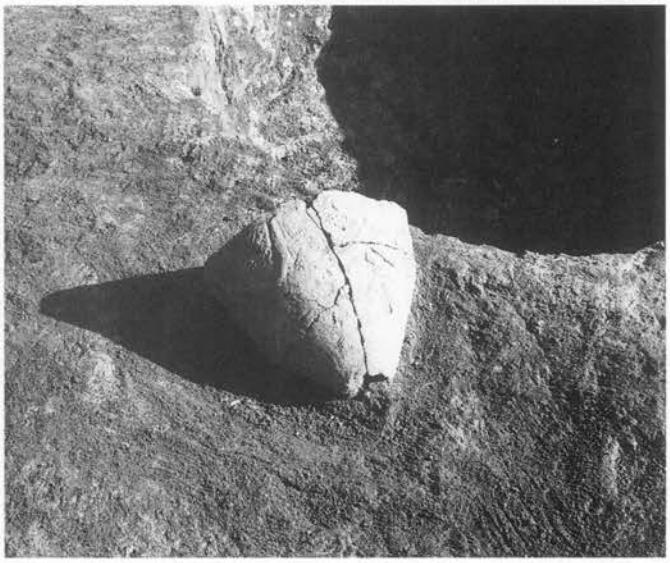
D-001炉跡

D-002





D-002 炉跡

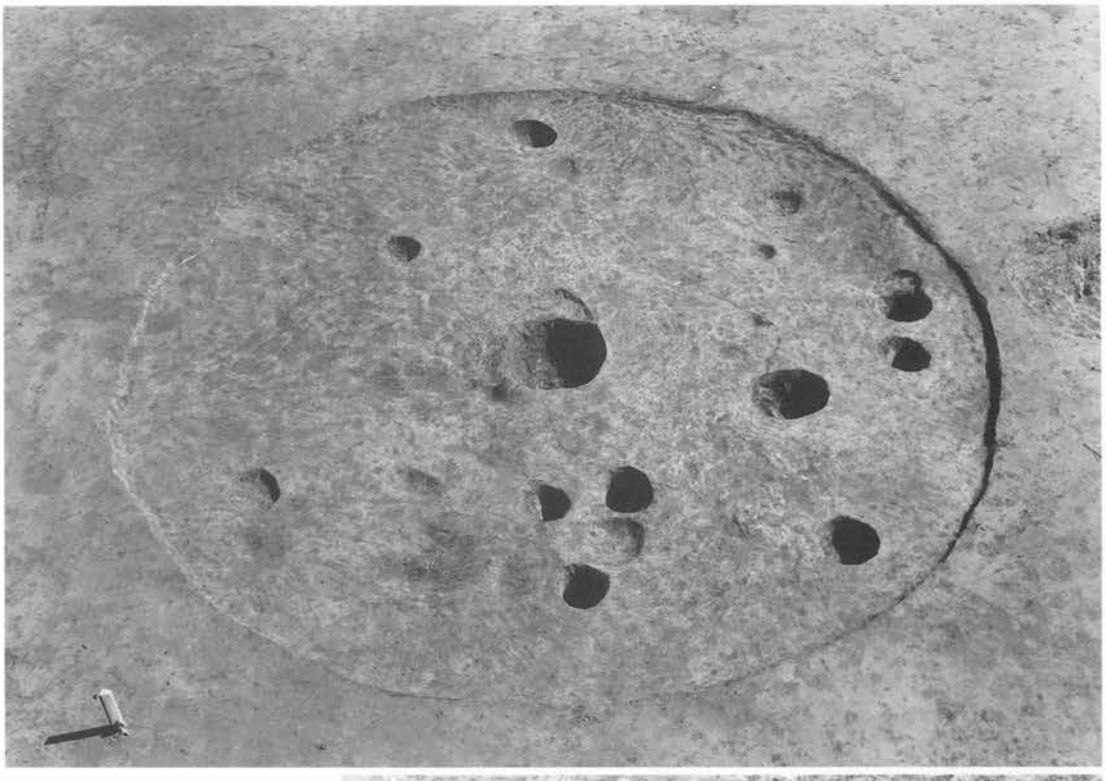


床面出土遺物

D-004

D-004炉跡

D-005
遺物出土状況

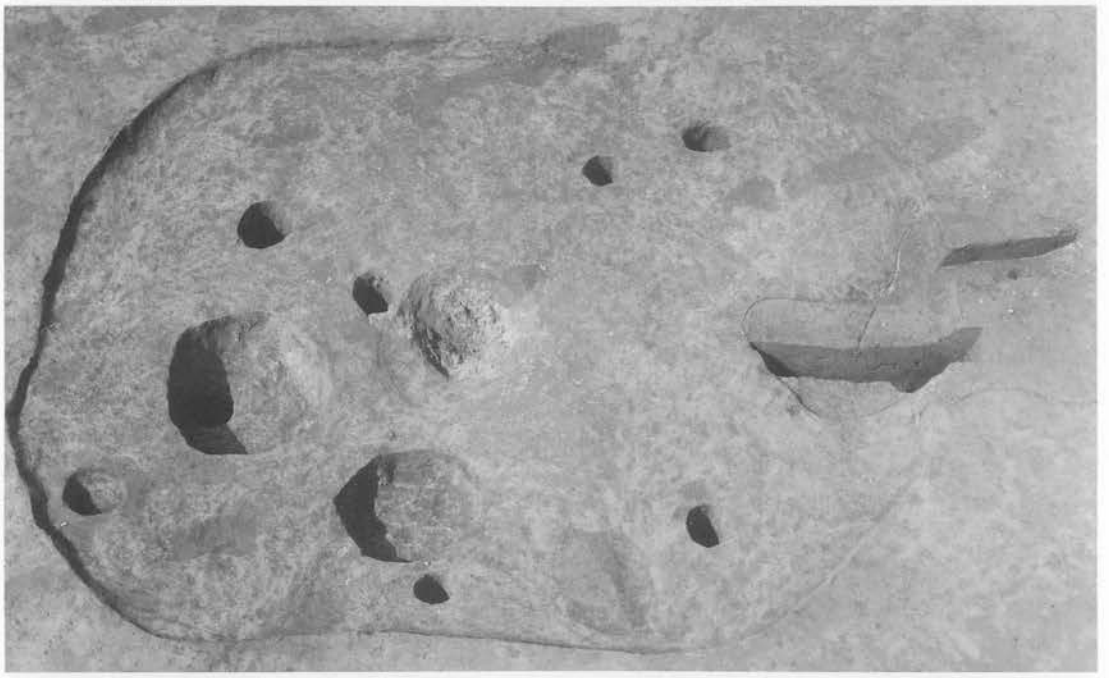


D-005

D-005炉跡

D-006

D-007
遺物出土状況



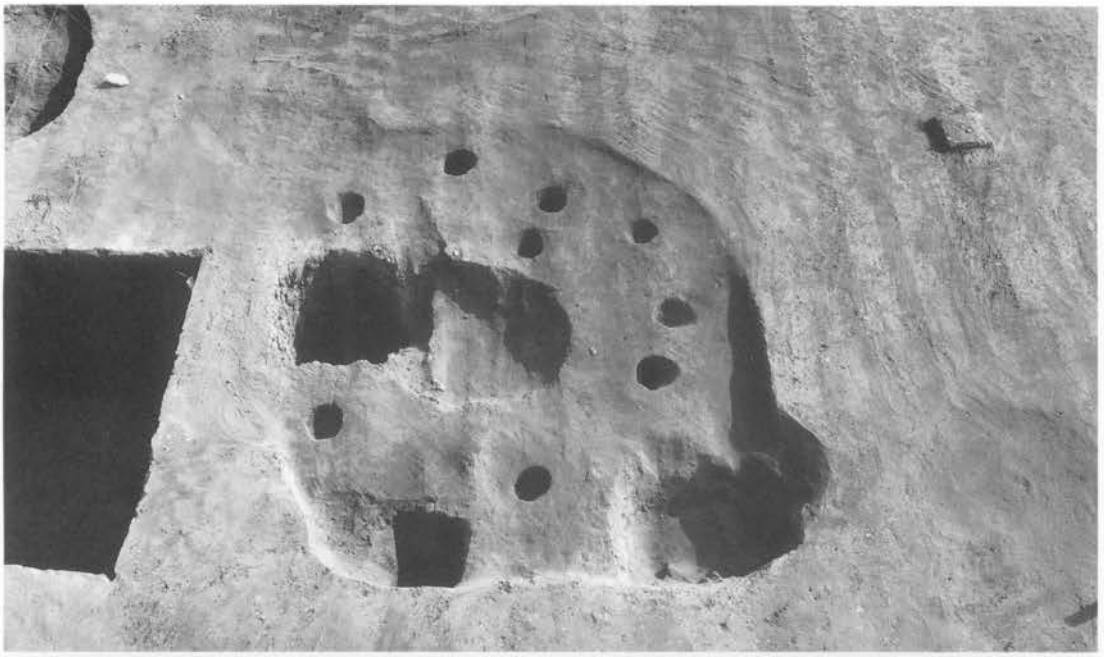
D-007

D-008

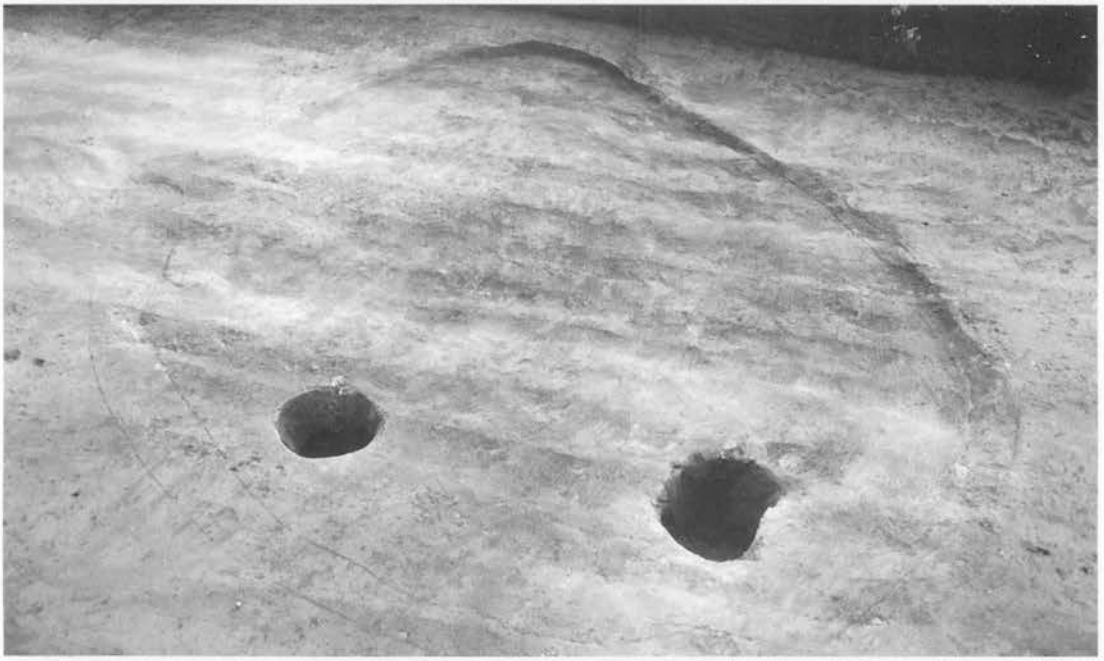
D-012

D-026
土層断面

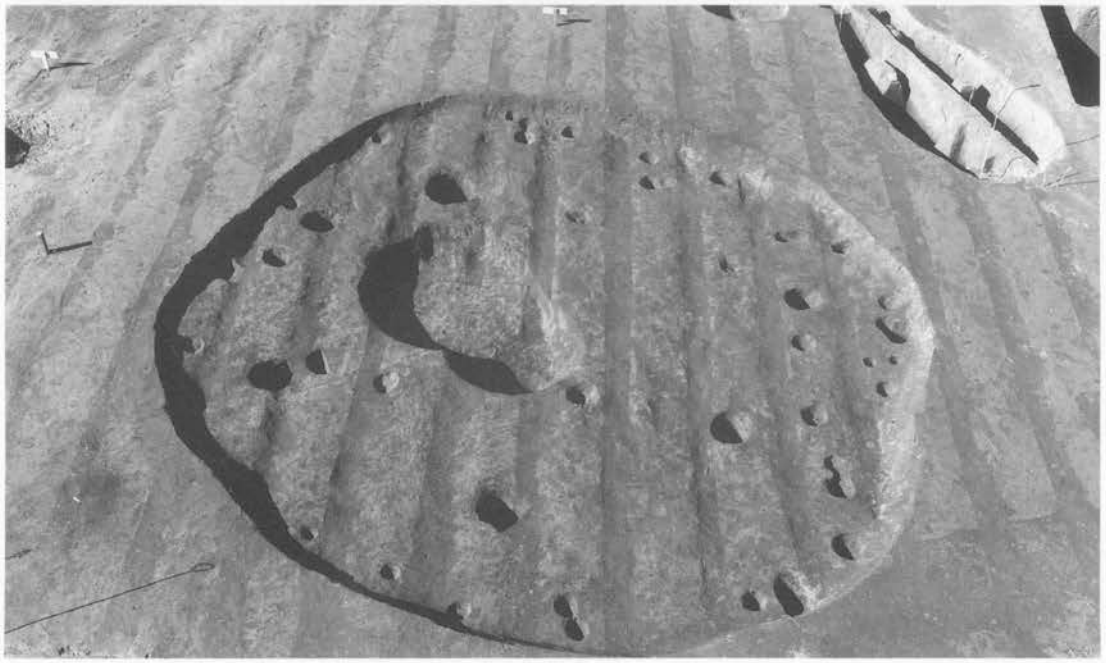
D-026



D-028

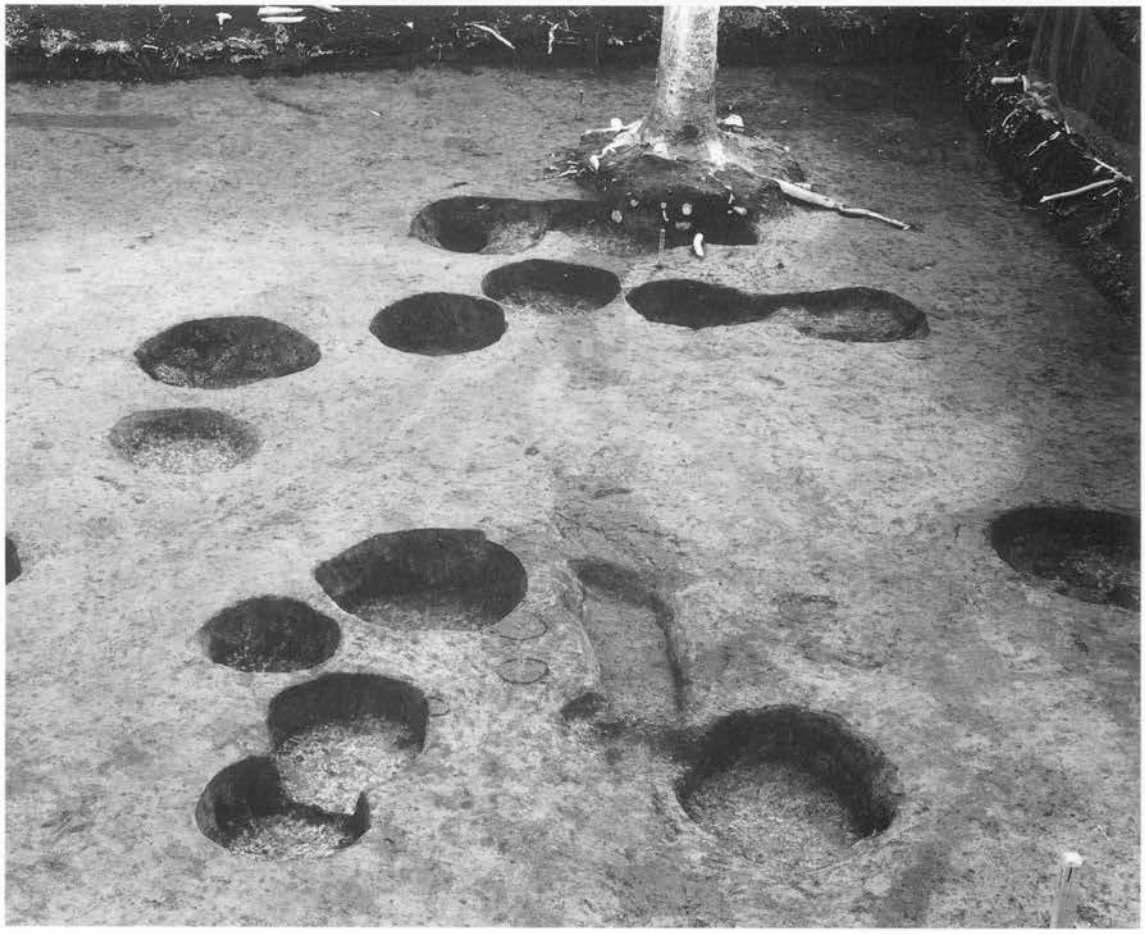


D-029



D-030

K17グリッド
付近土坑群



A地区
土坑群

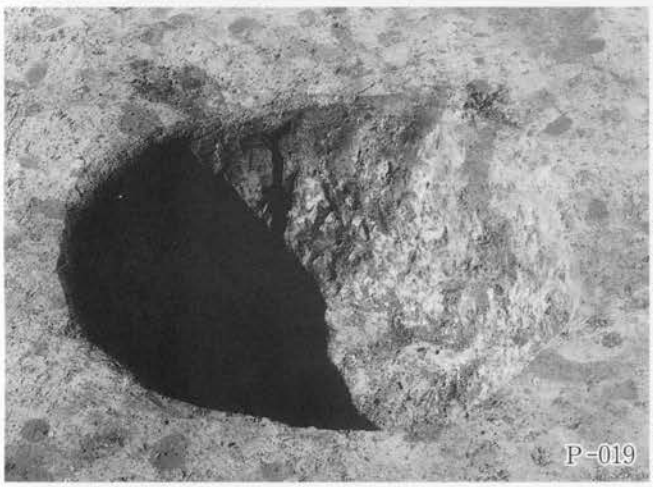
図版12

P-003

P-011

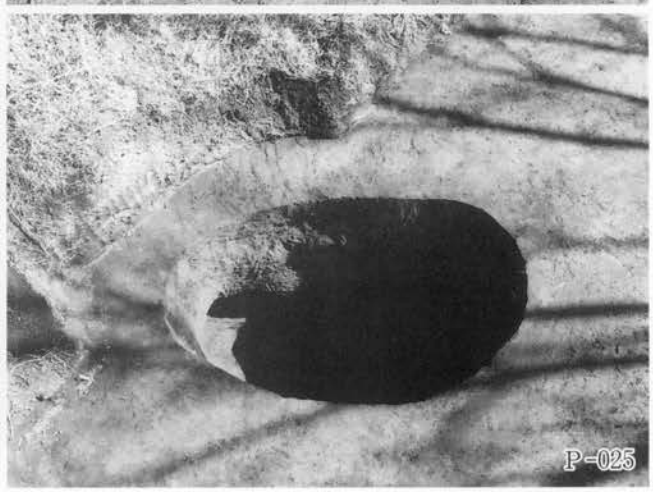
P-012

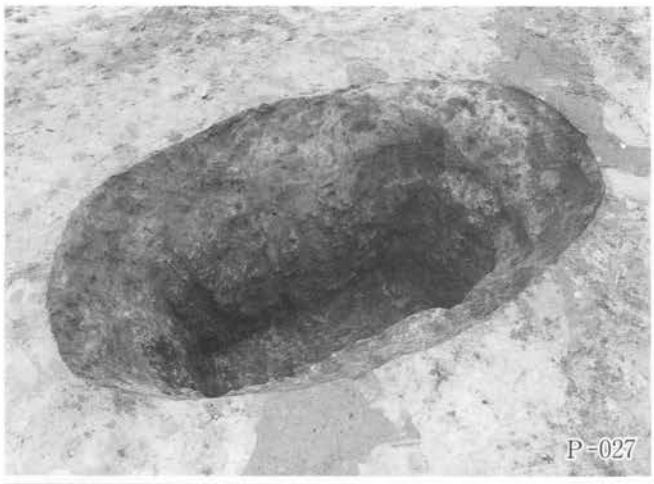
P-017

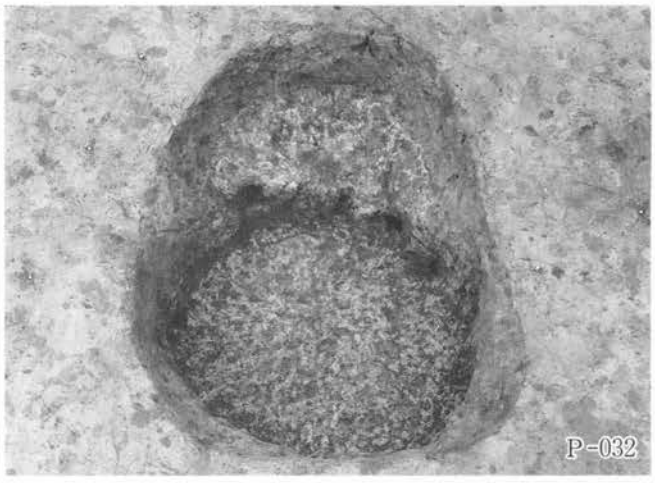

P-019

P-023

P-024


P-025


P-027


P-032

P-034

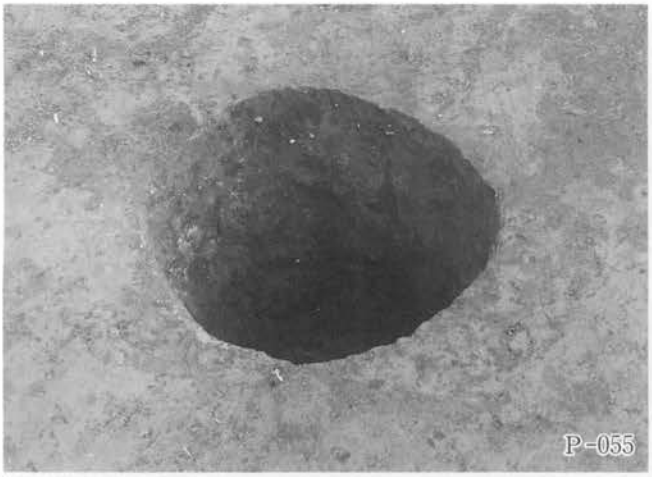
P-040

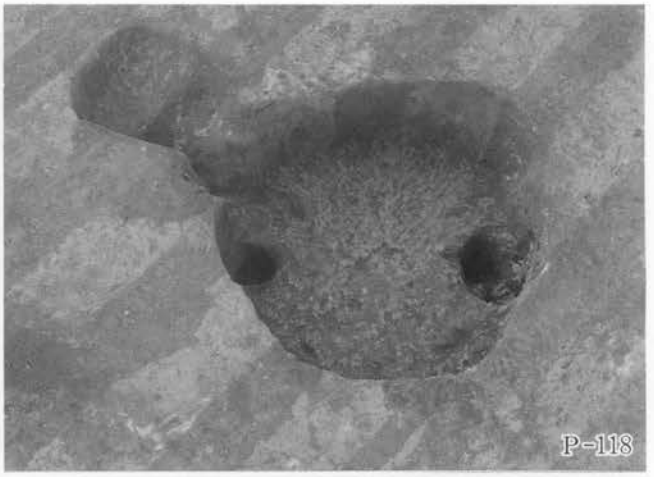
P-048

P-050

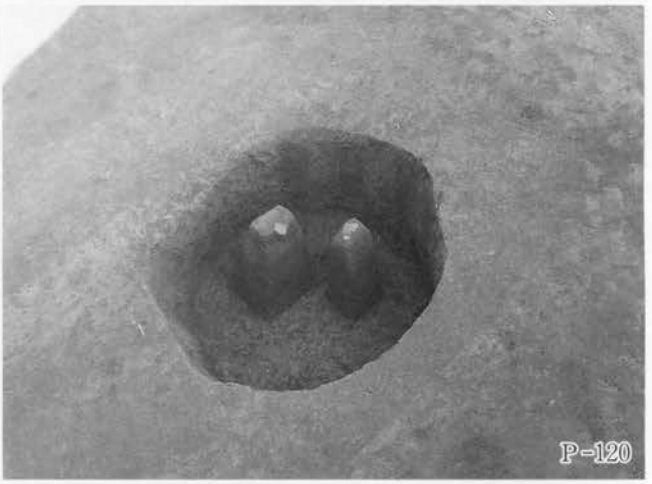
P-052

P-053

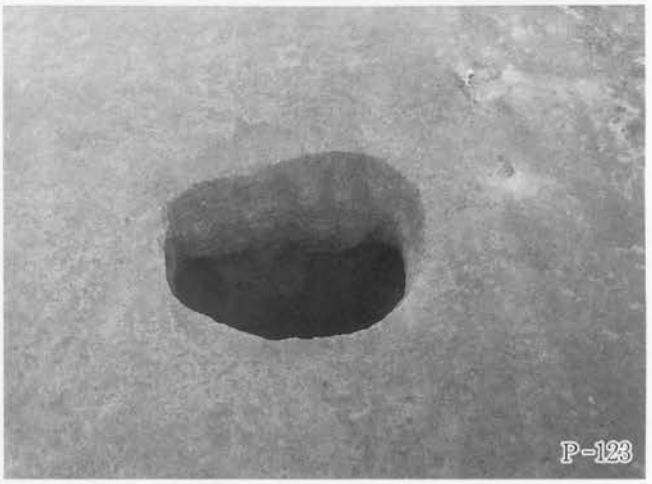

P-055

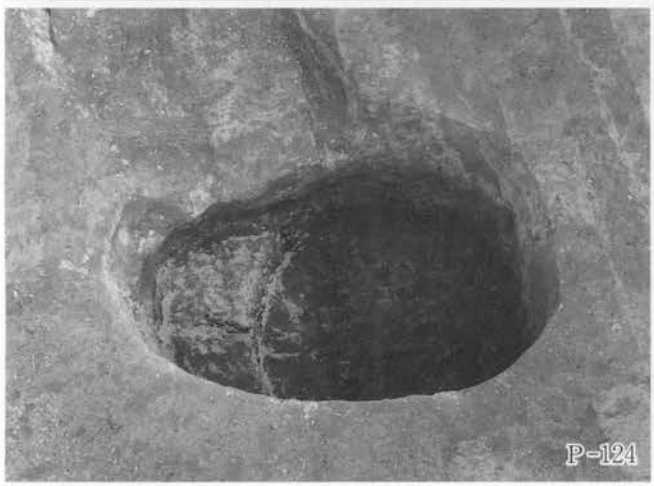

P-118

P-119

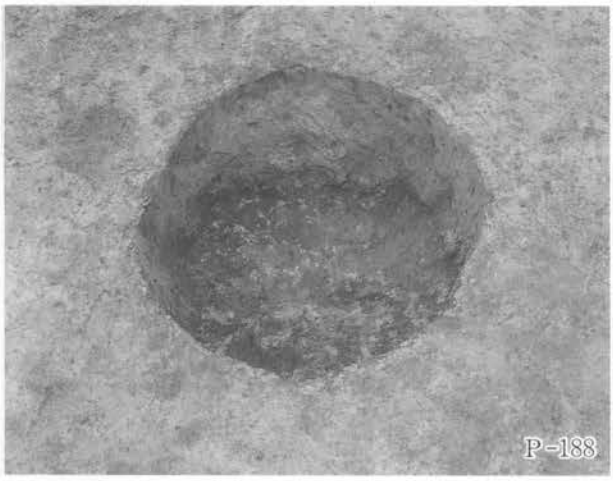

P-120

P-121


P-123


P-124

P-130


P-188

P-331

P-332

P-335

P-336

P-342・343

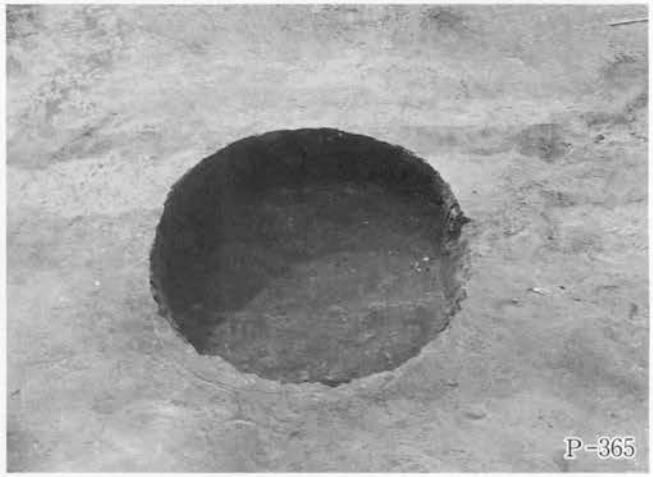
P-345

P-353

P-356

P-363

P-369・364


P-365

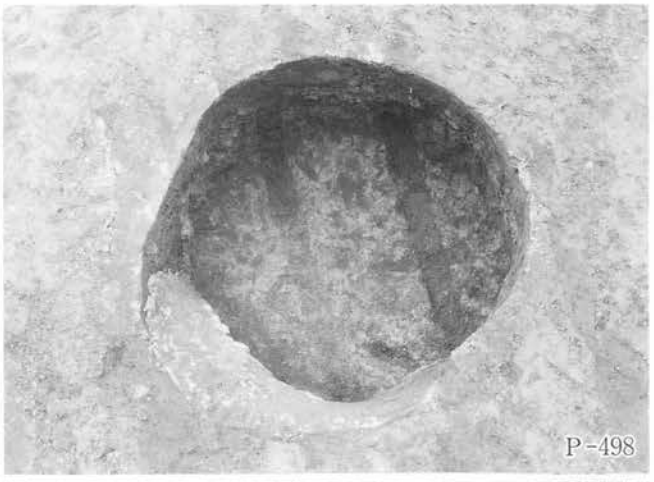
P-375

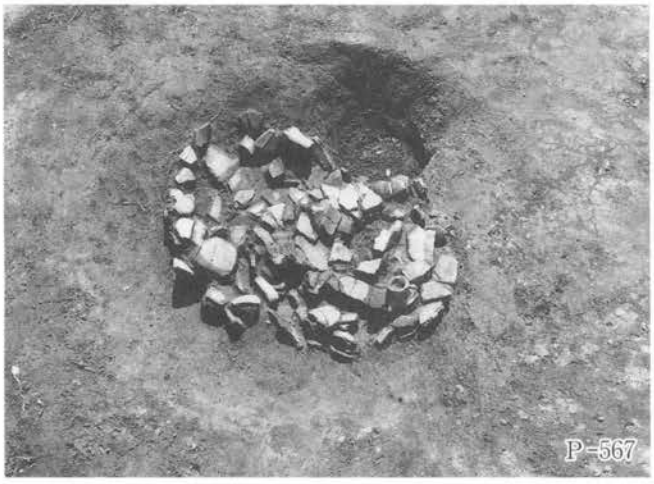
P-379

P-380

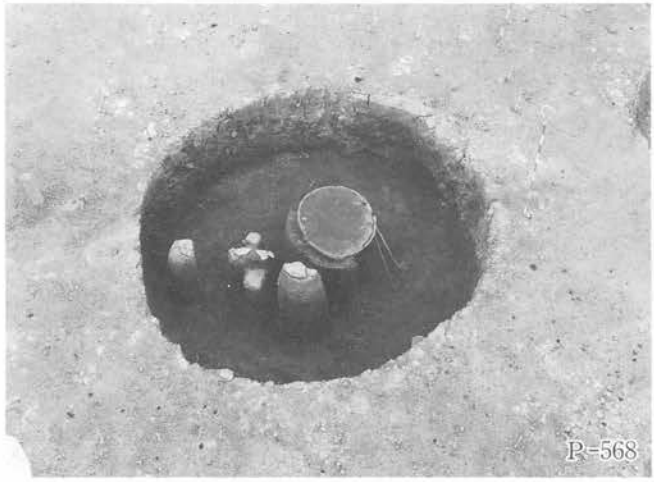
P-382

P-394


P-498

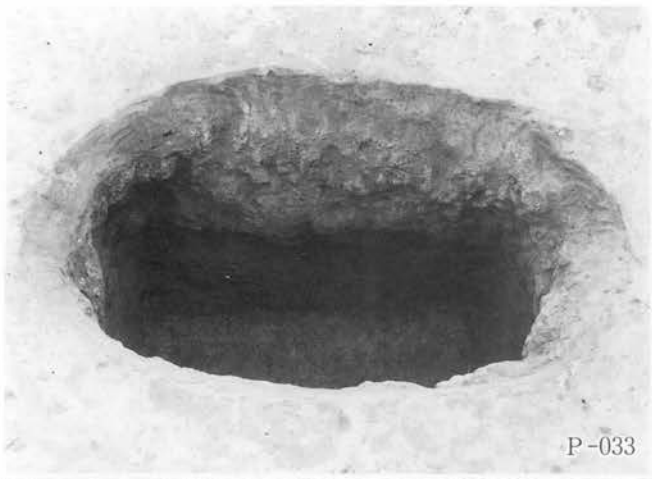

P-567

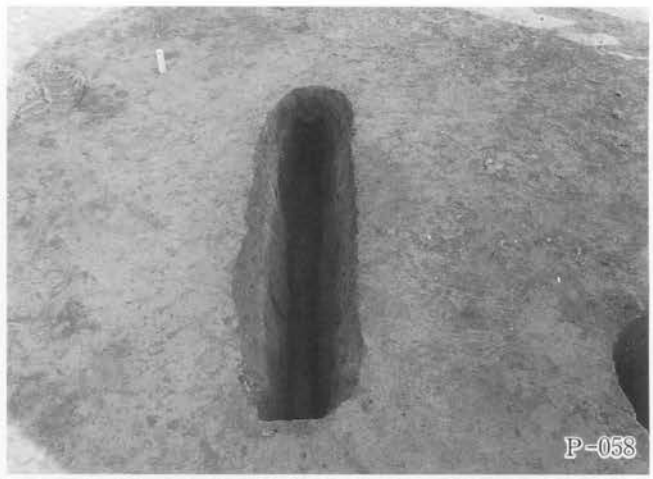
P-567


P-568

P-568

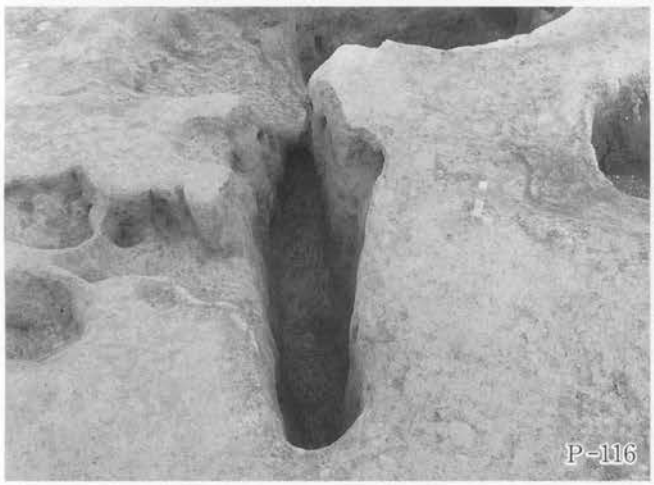
P-733

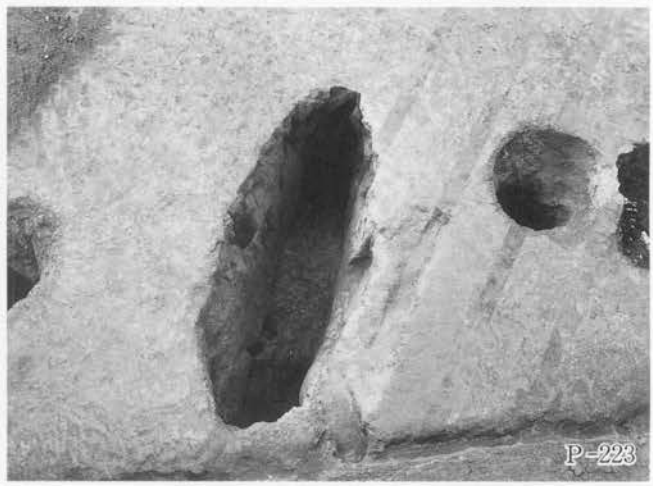

P-033


P-058

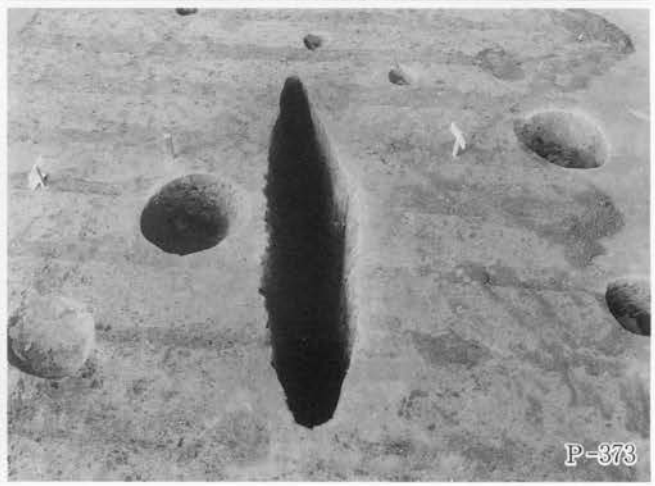
P-071

P-073


P-116

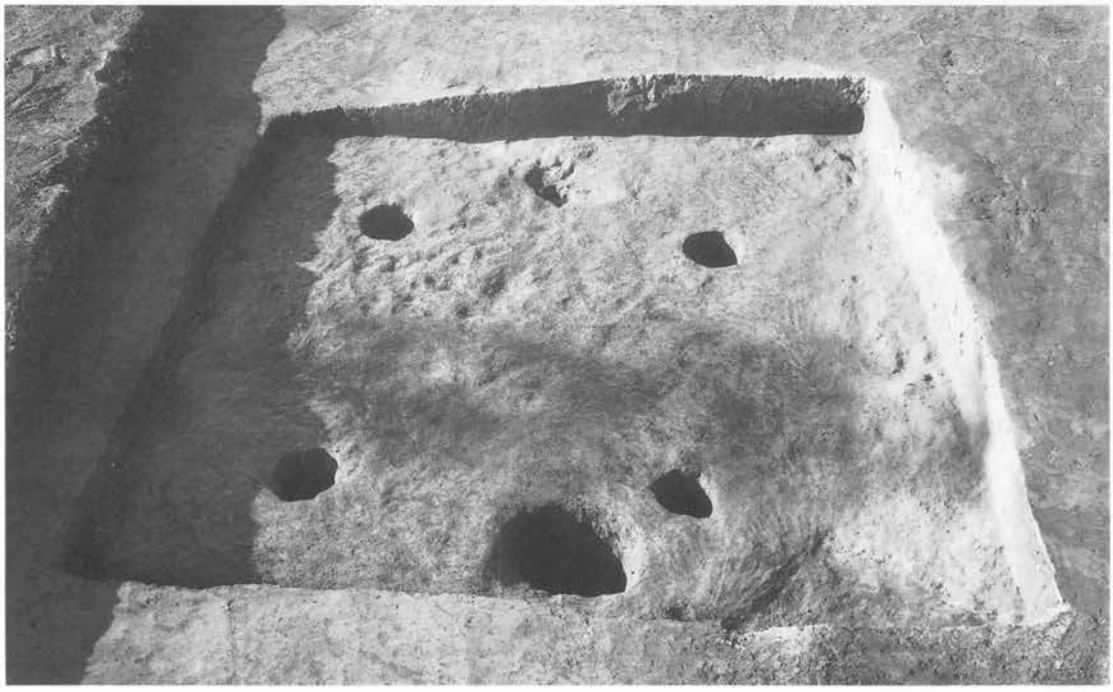

P-223

P-226

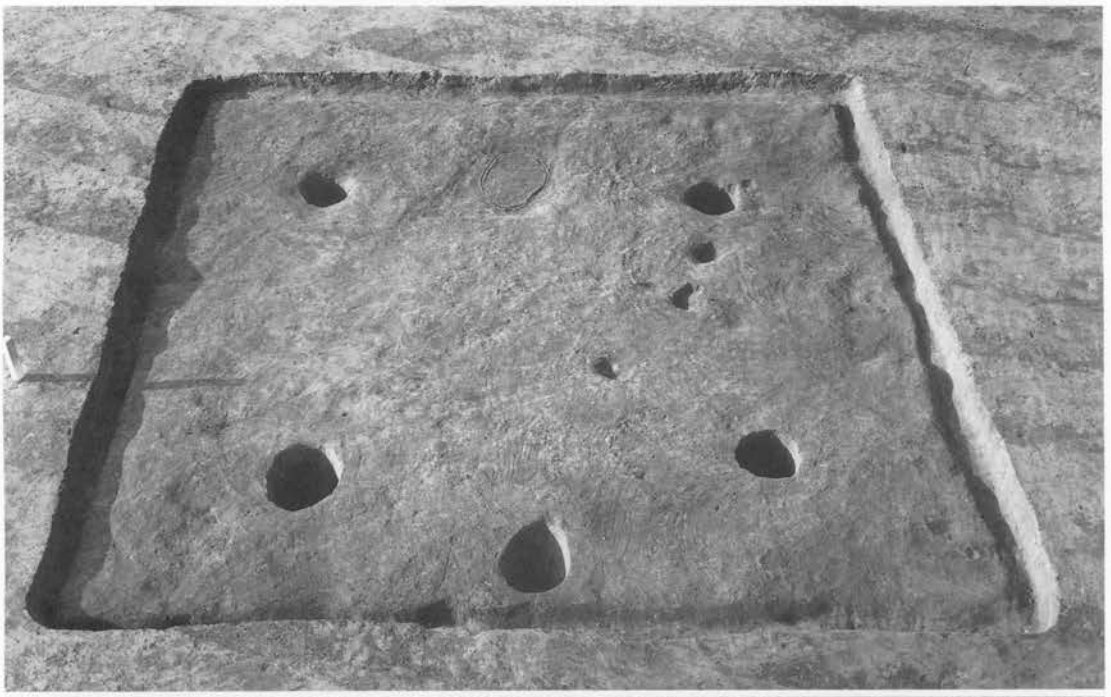

P-373

D-011

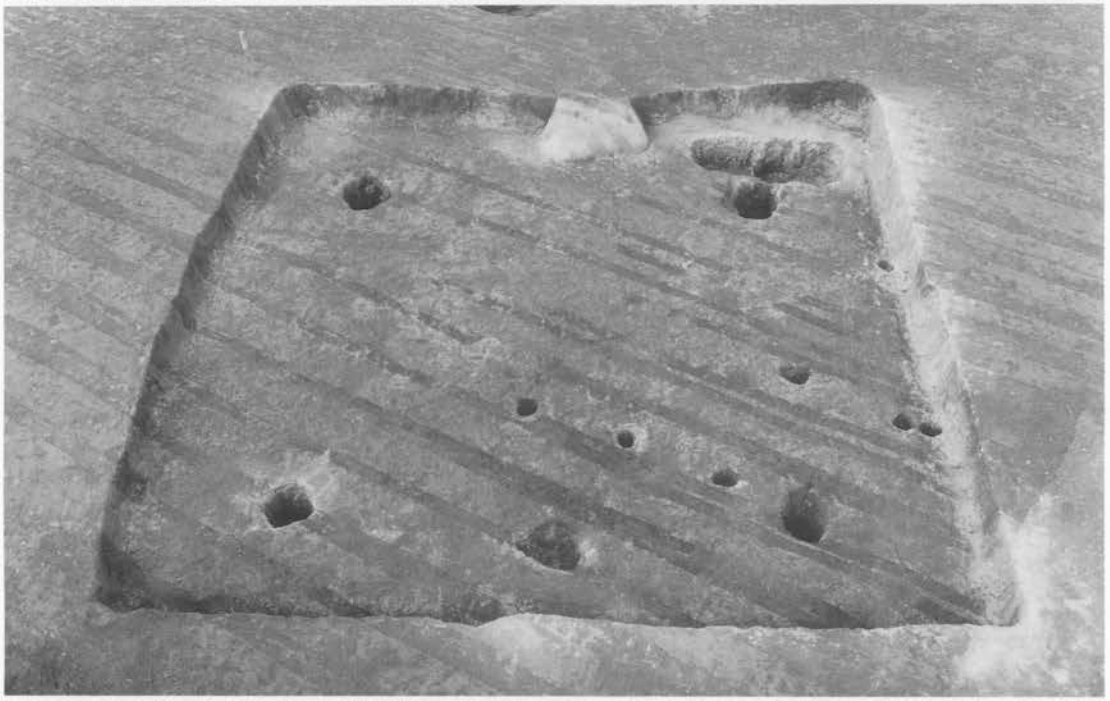
D-011
カマド



D-013

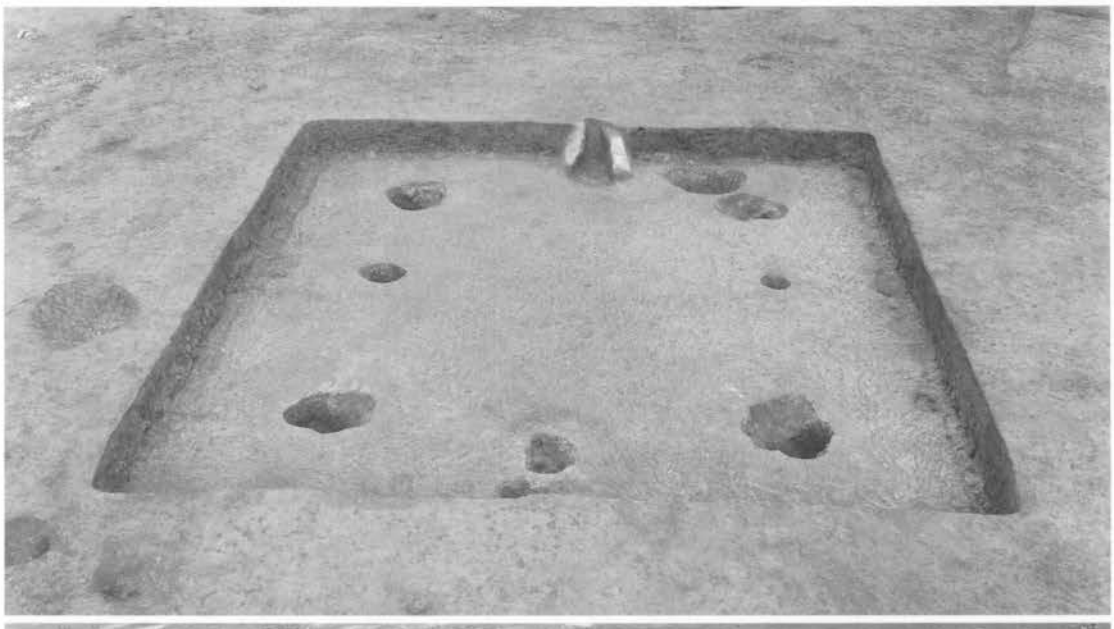


D-014



D-015

D-015
遺物出土状況



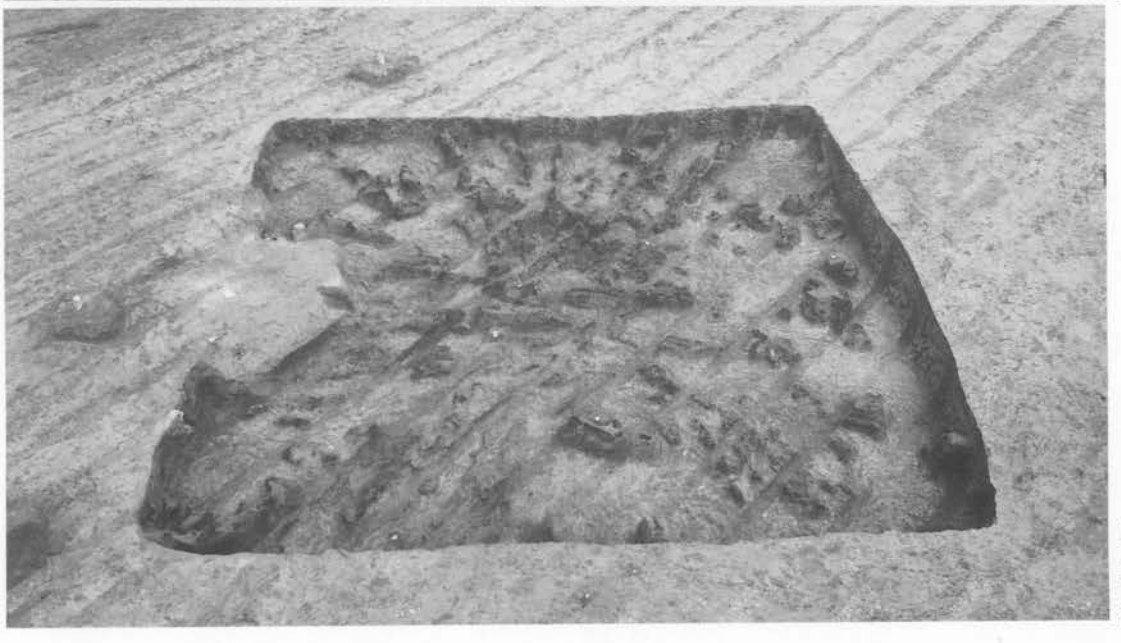
D-016

D-017

D-018

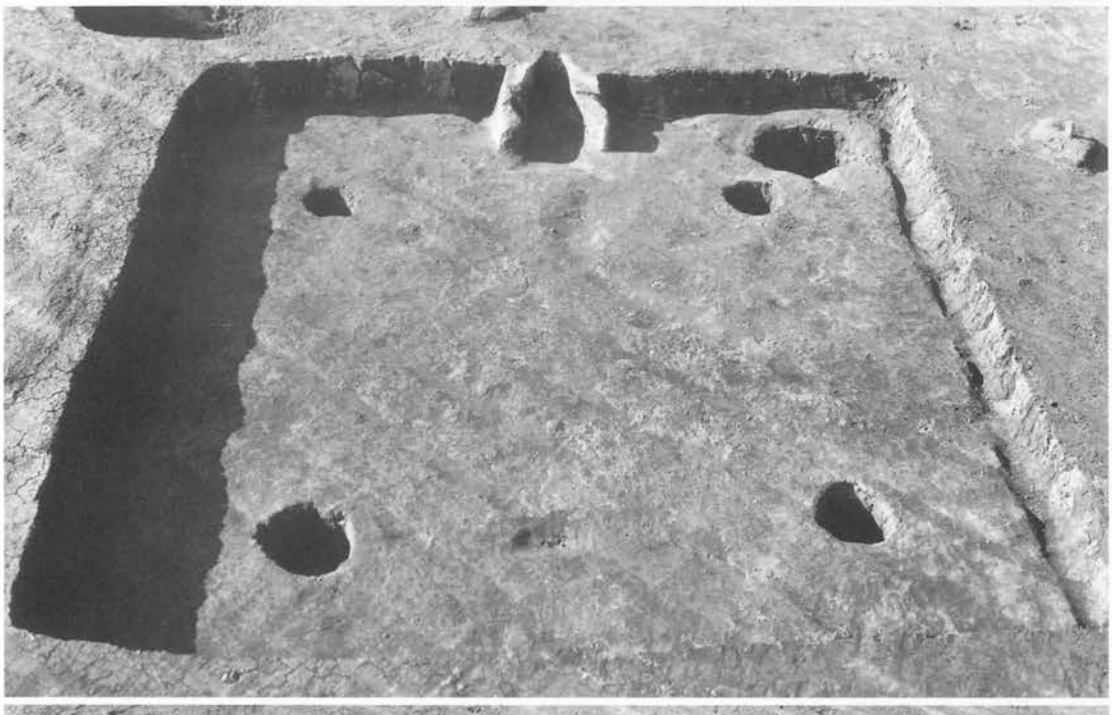
D－019

D－020



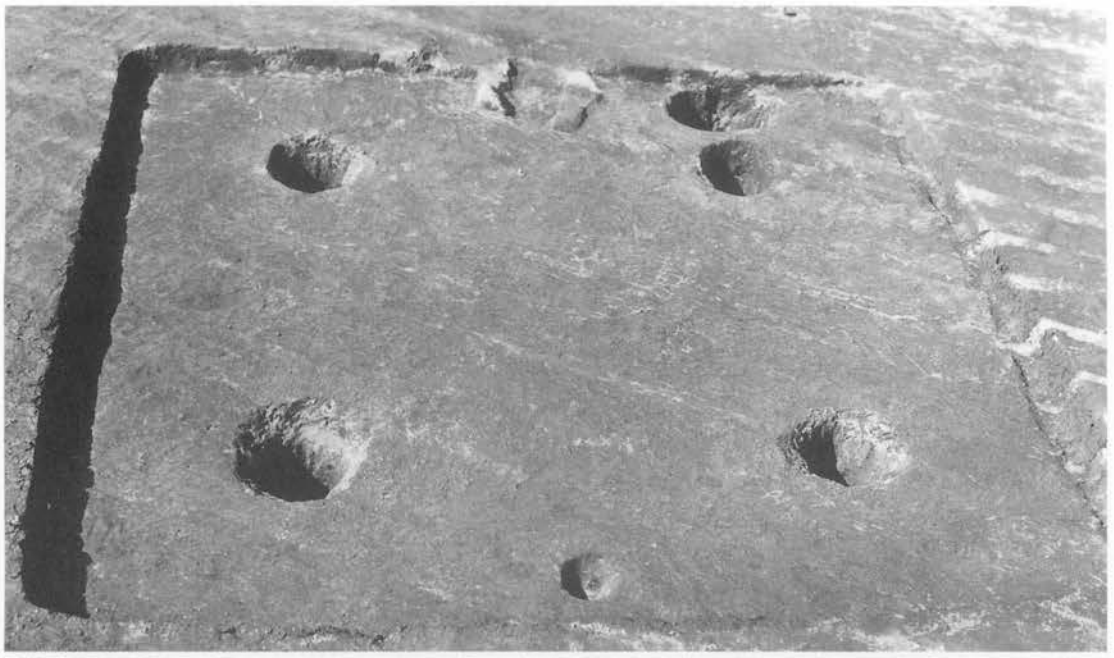
D－021
炭化材
出土状況

D－021
カマド



D－021

D－022



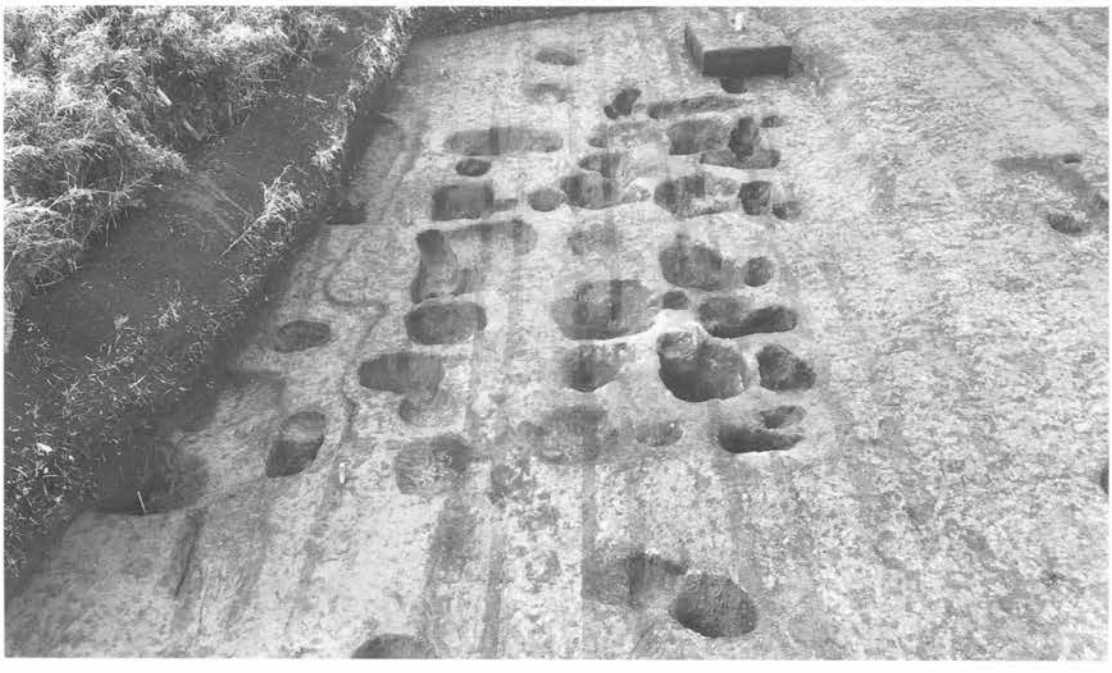
D－023

D－024

D－025

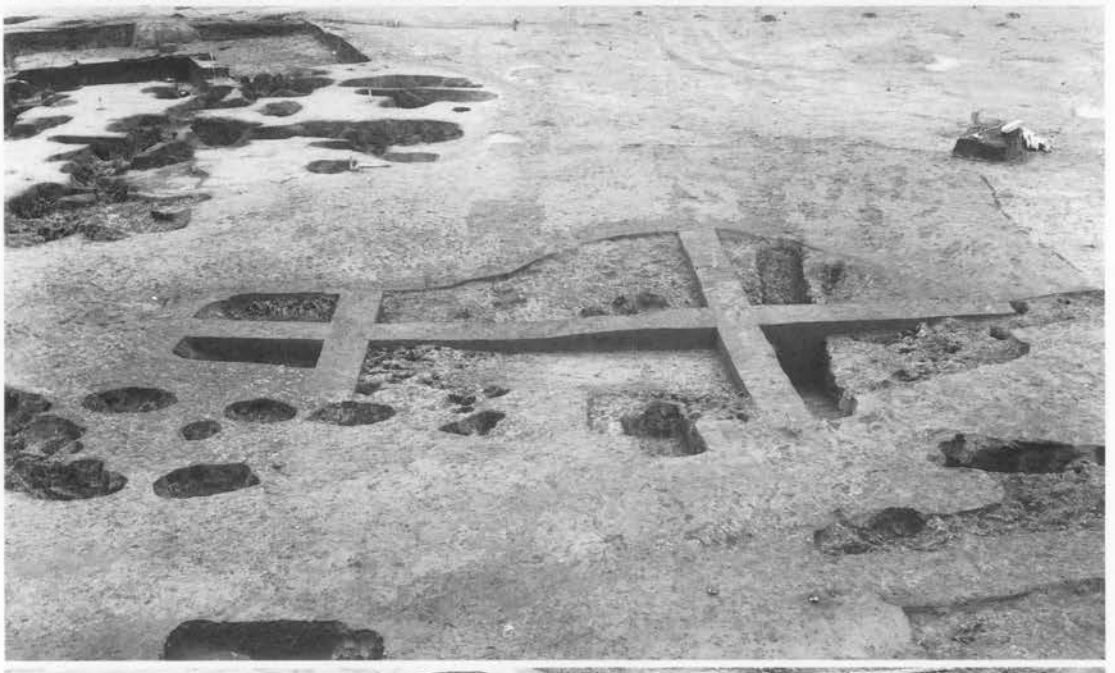
P-047

A地区南端
（東より）



H10・11

廃棄土坑
五輪塔出土状況

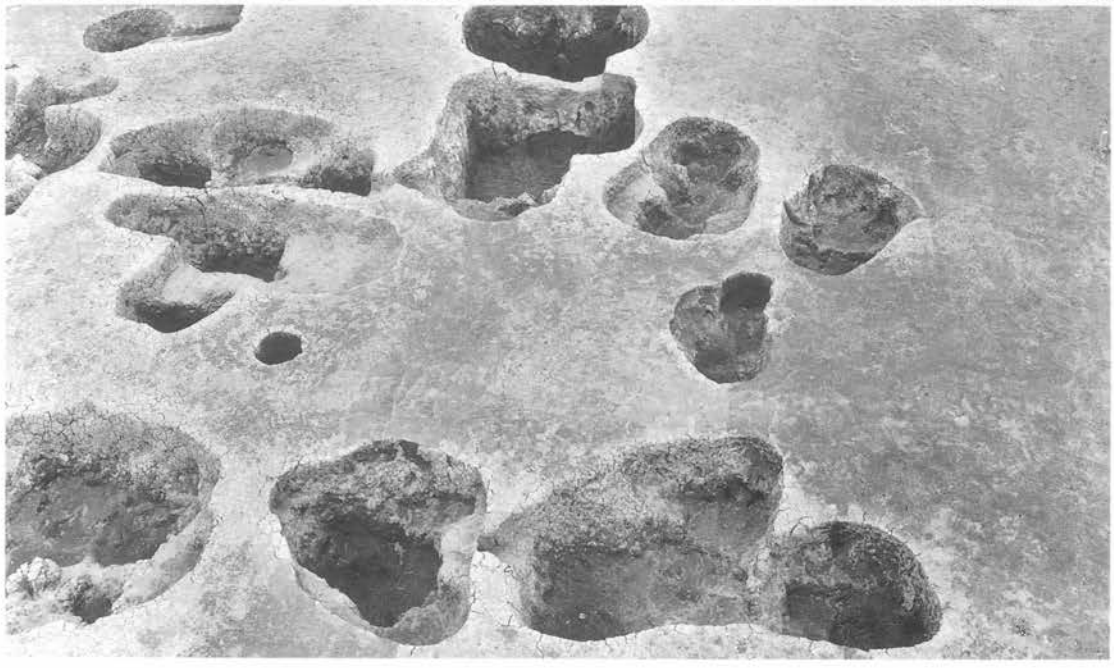


P－173・P－174

P－178
M－19

H-05・H-06
H-07

H-03・H-04



H-06

B地区南
墓坑群
（東より）

B地区南
墓坑群
（北より）

C地区墓域

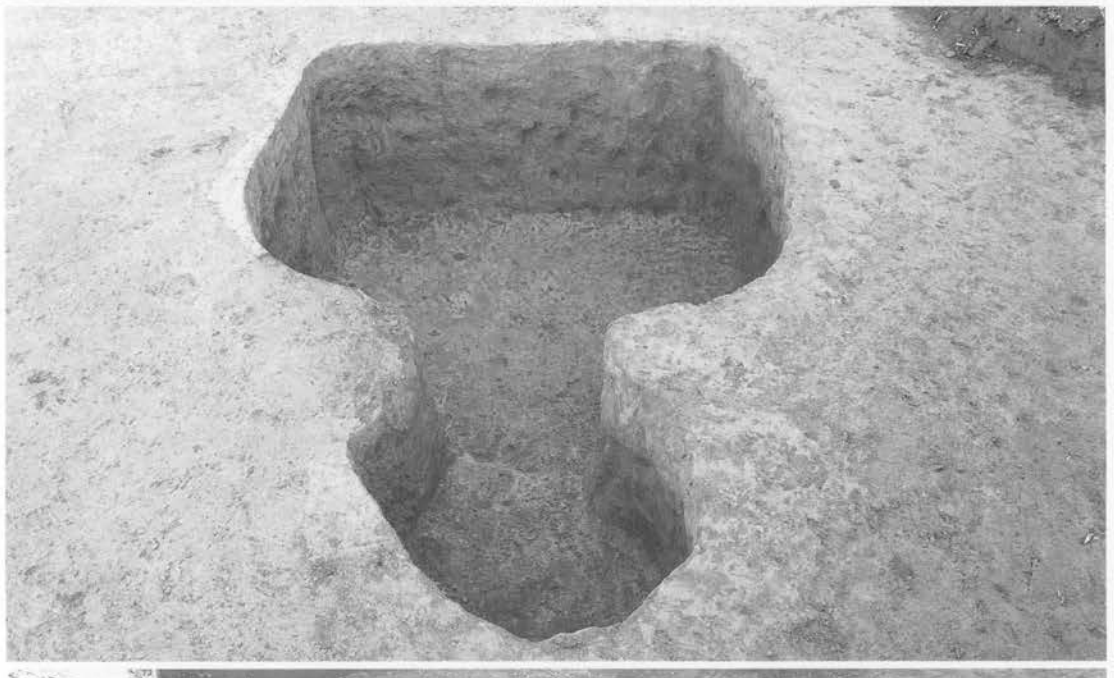
H-01

H-09

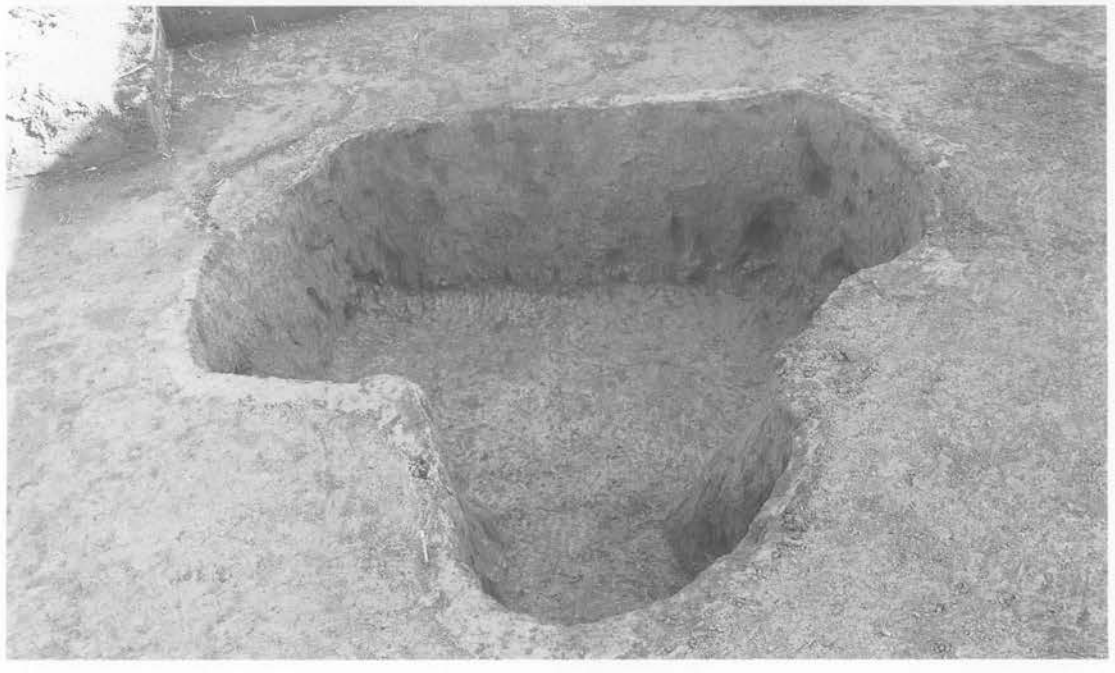
H-12

図版30

P-061



P-062



P-063

P-067

P-070

P-072(右)
P-072
馬骨出土状況(左)

図版32

P-091（左）

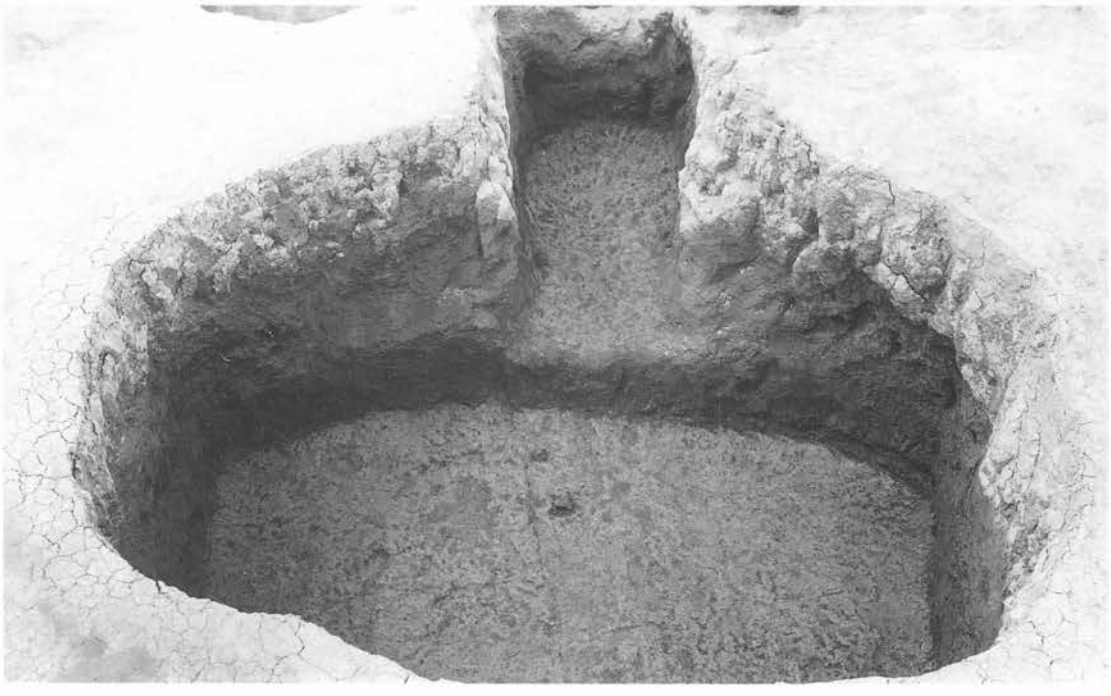
P-091
石造物出土状況（右

P-097

P-163

P-175

P-177

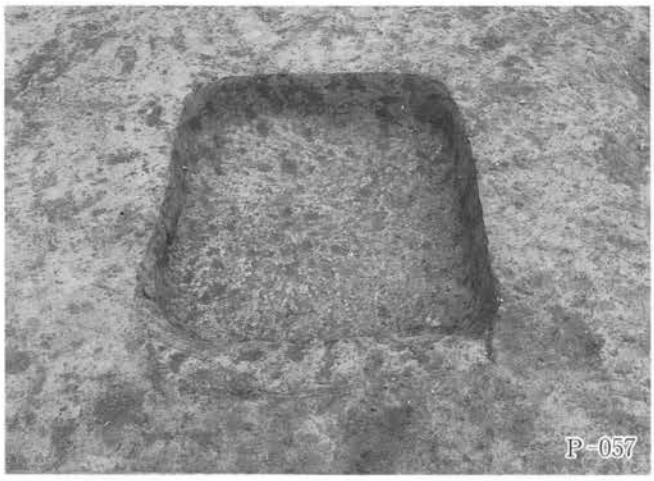


P-178

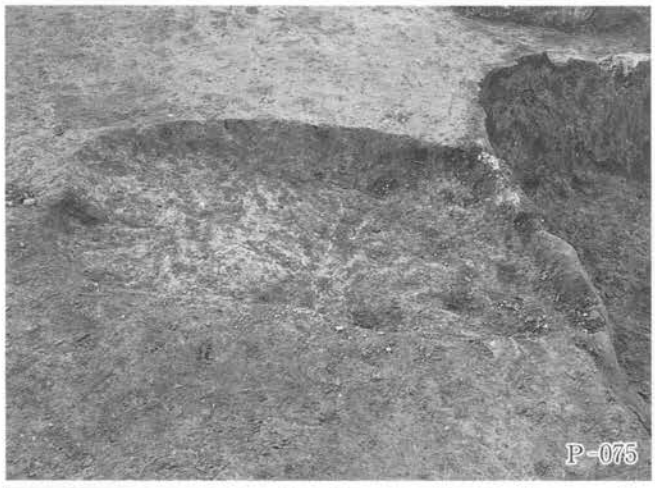
P-182
遺物出土状況

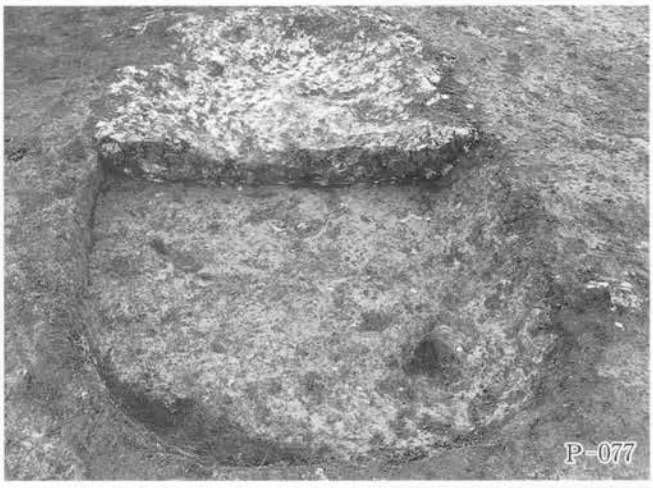
P-182
P-183

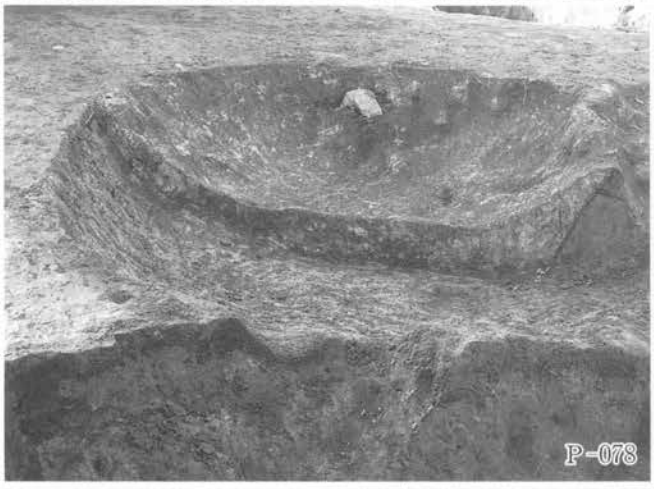
P-191

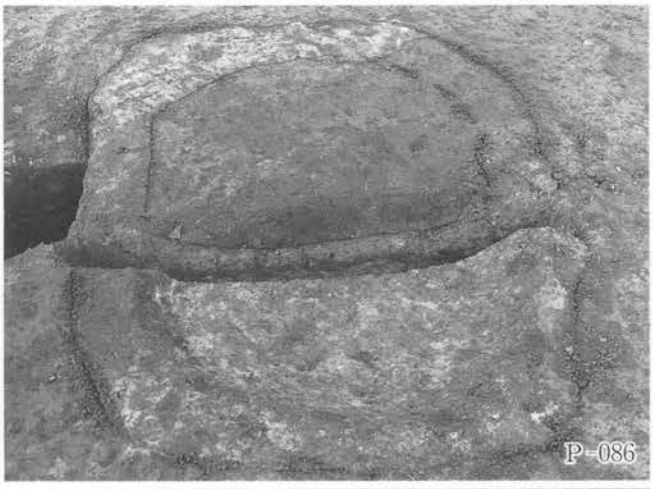

P-057

P-059


P-075


P-077

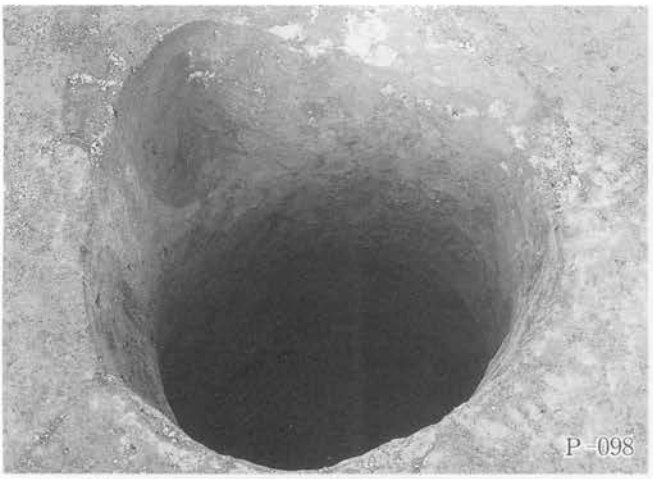

P-078


P-086

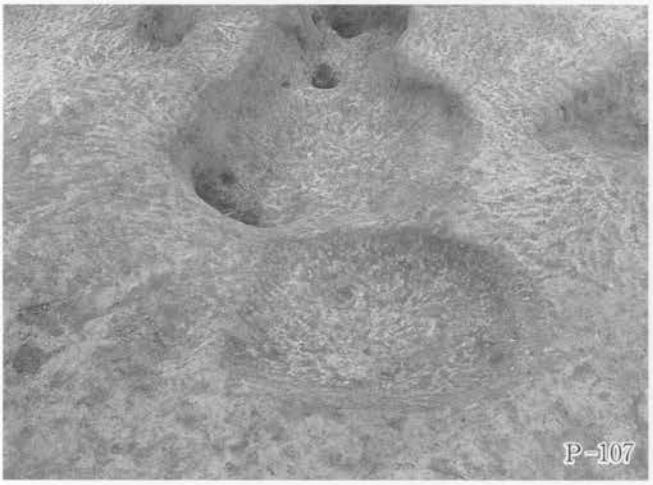
P-093

P-095
P-096

図版36

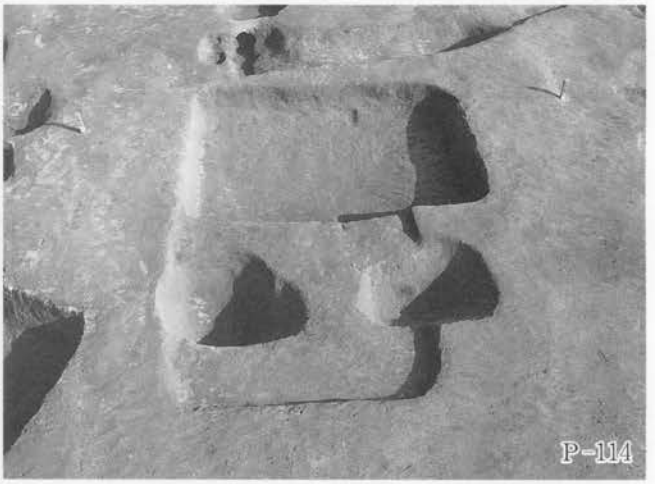

P-098

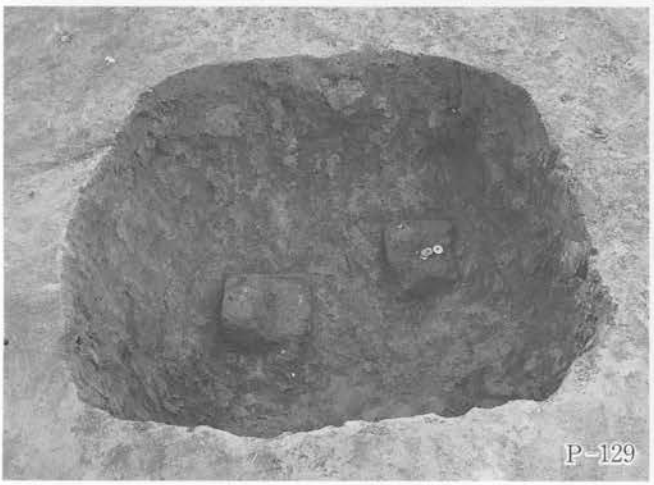
P-099


P-107

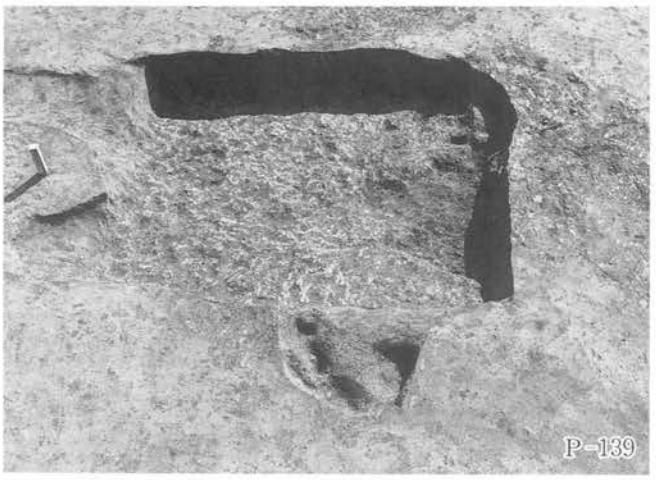
P-109

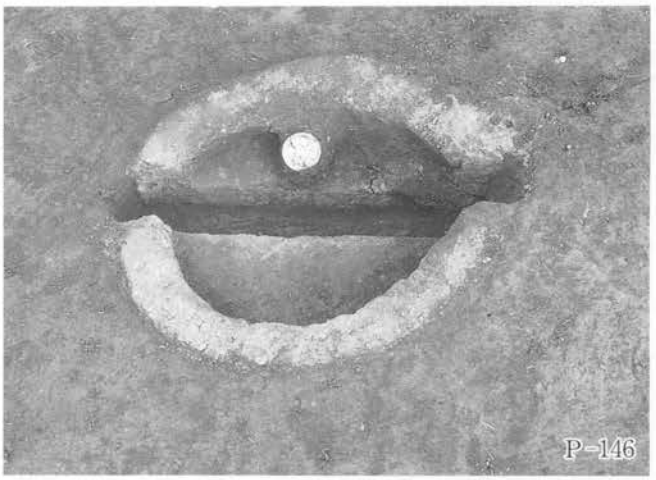
P-112


P-114


P-129

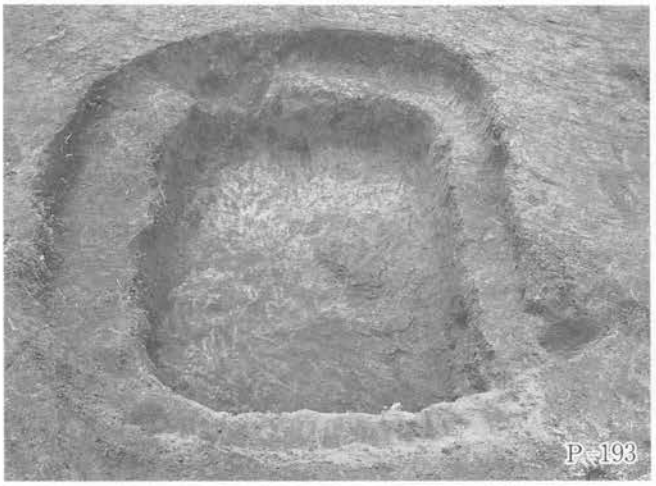
P-131

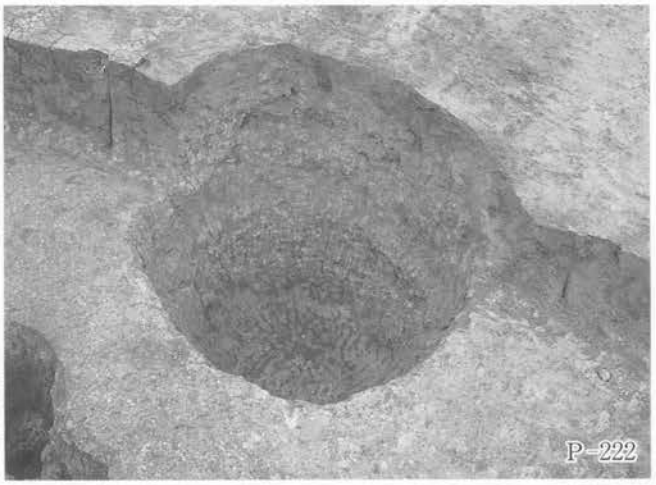

P-139

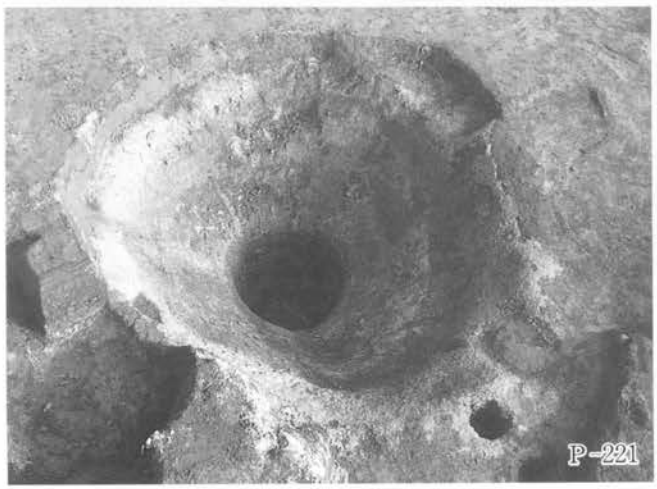

P-146

P-189

P-192


P-193


P-222

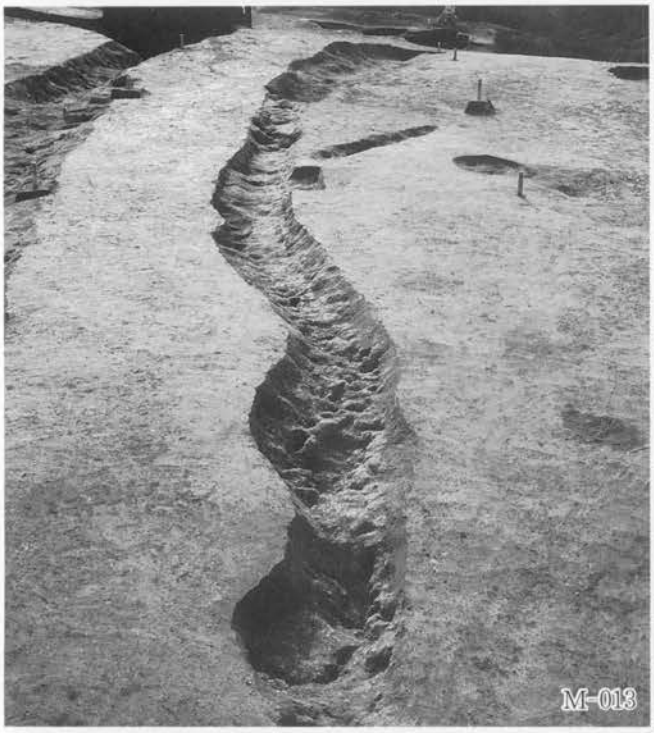

P-221

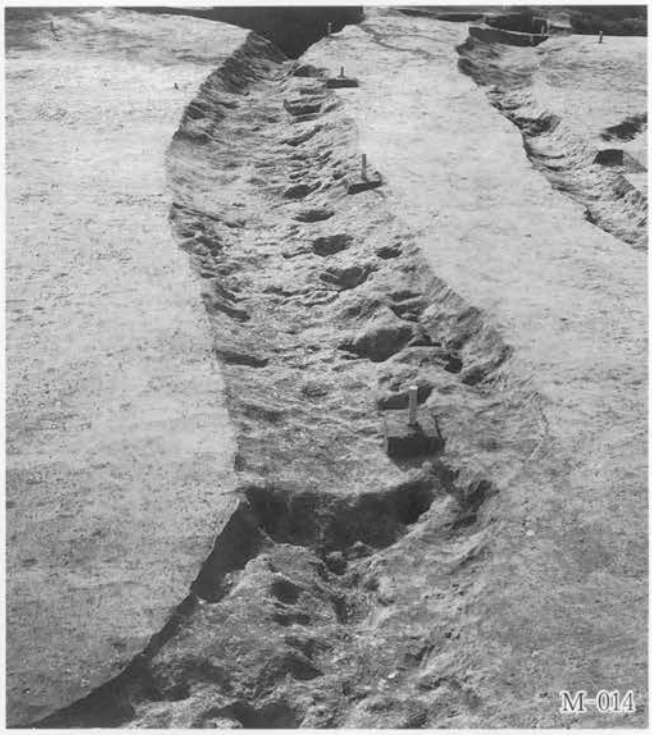
P-313

図版38

P-257・P-258・P-259

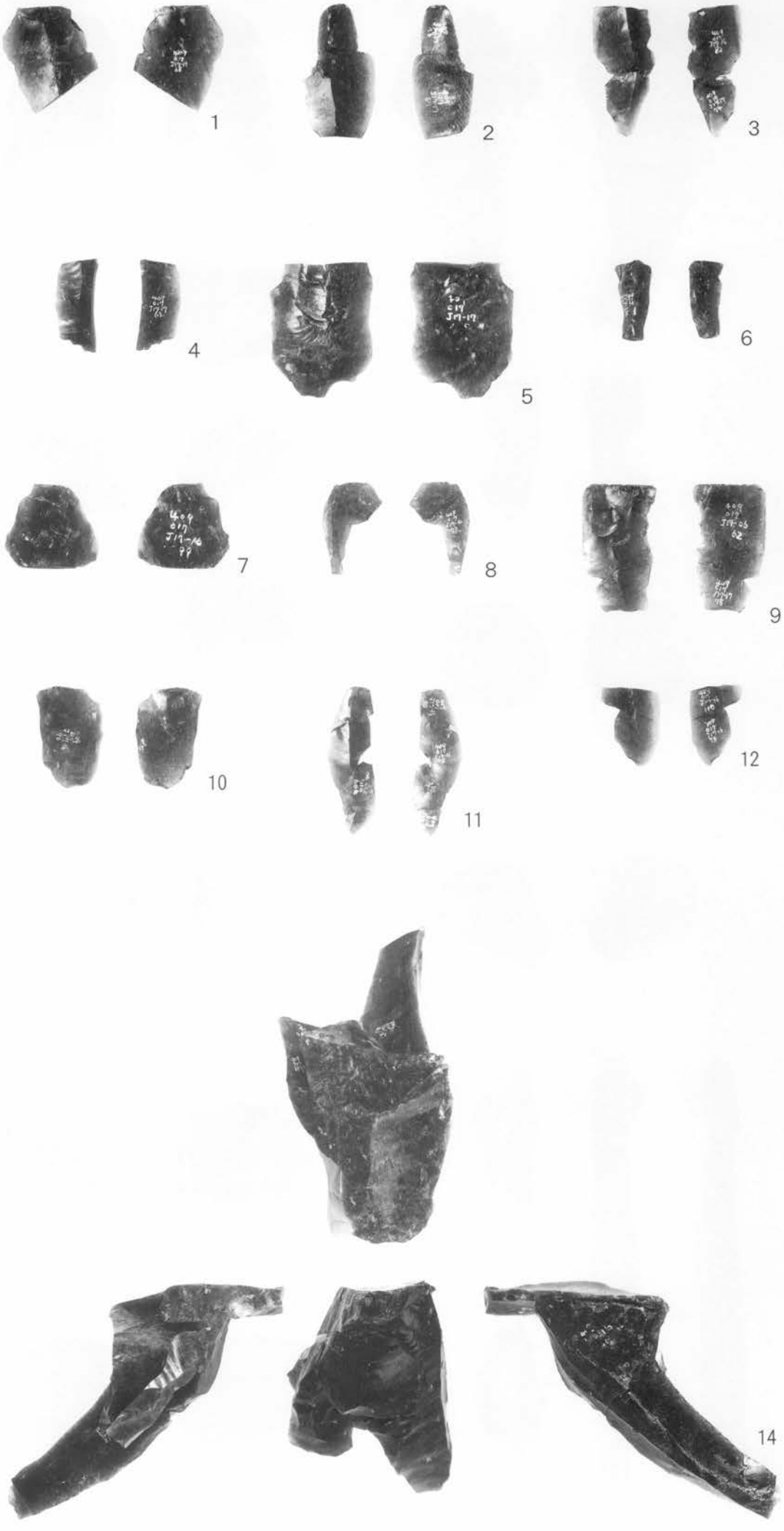
P-592


M-013


M-014

火葬施設

火葬施設



第1ブロック
出土石器(1)

図版40

14a

14b

14c

14d

13

第1ブロック
出土石器（2）

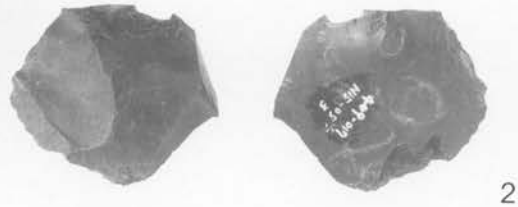
1

2

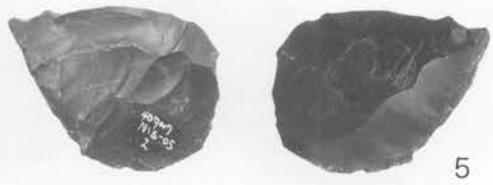
第2ブロック
出土石器

1

3


2

4

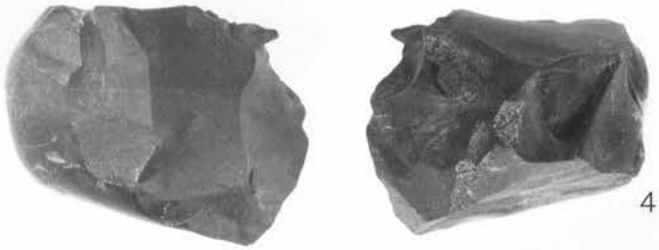

5

第3ブロック
出土石器

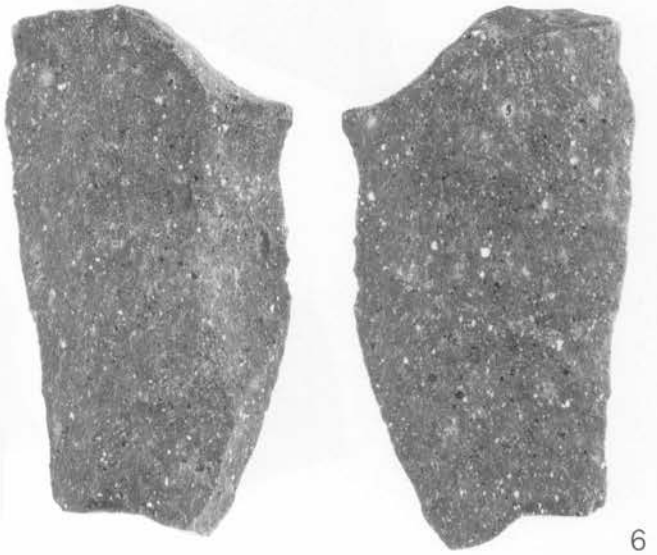
1

2

3

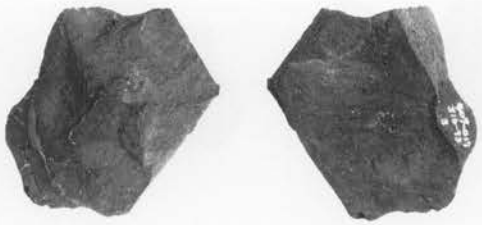

4

5


6

第４ブロック
出土石器（１）

7



8

9

10

11

12

第４ブロック
13　出土石器（２）

14

第４ブロック
出土石器（３）

1

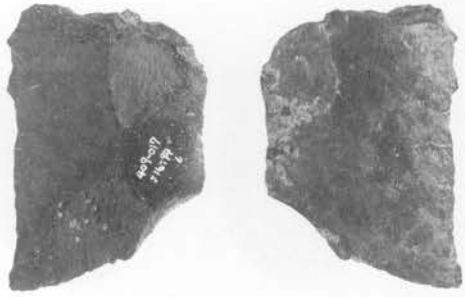
2

3

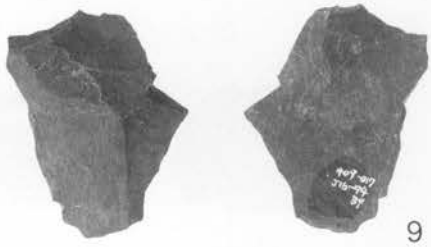
5

4

6

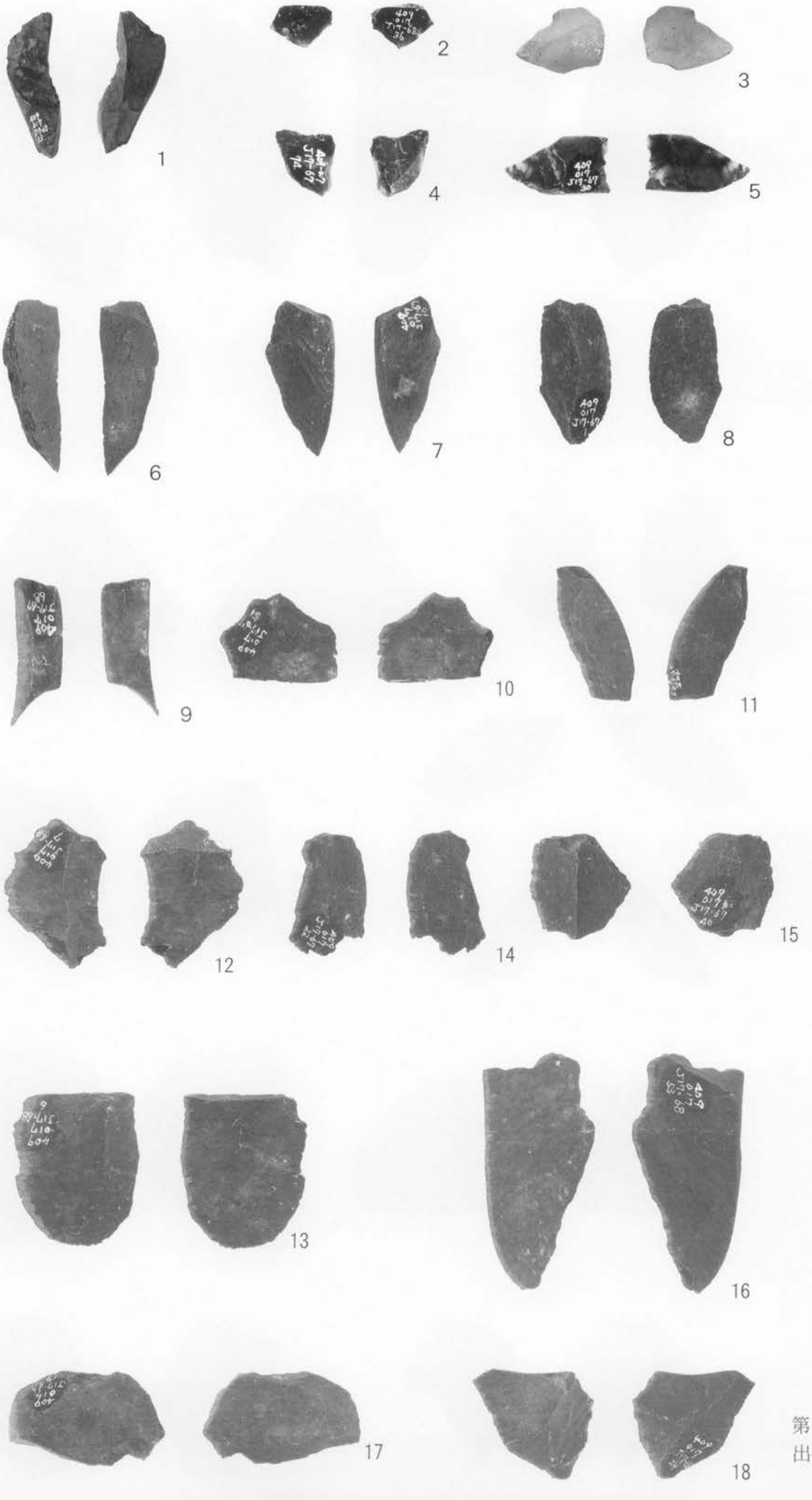

7

8


9

第５ブロック
出土石器

図版44



第6ブロック
出土石器（1）

19

20

21

22 23 24

25

26

28

27

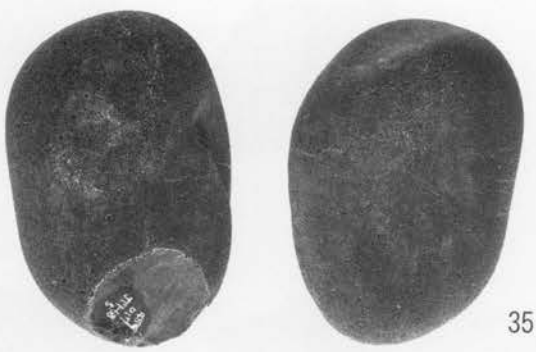
29

第6ブロック
出土石器（2）

30 31 32

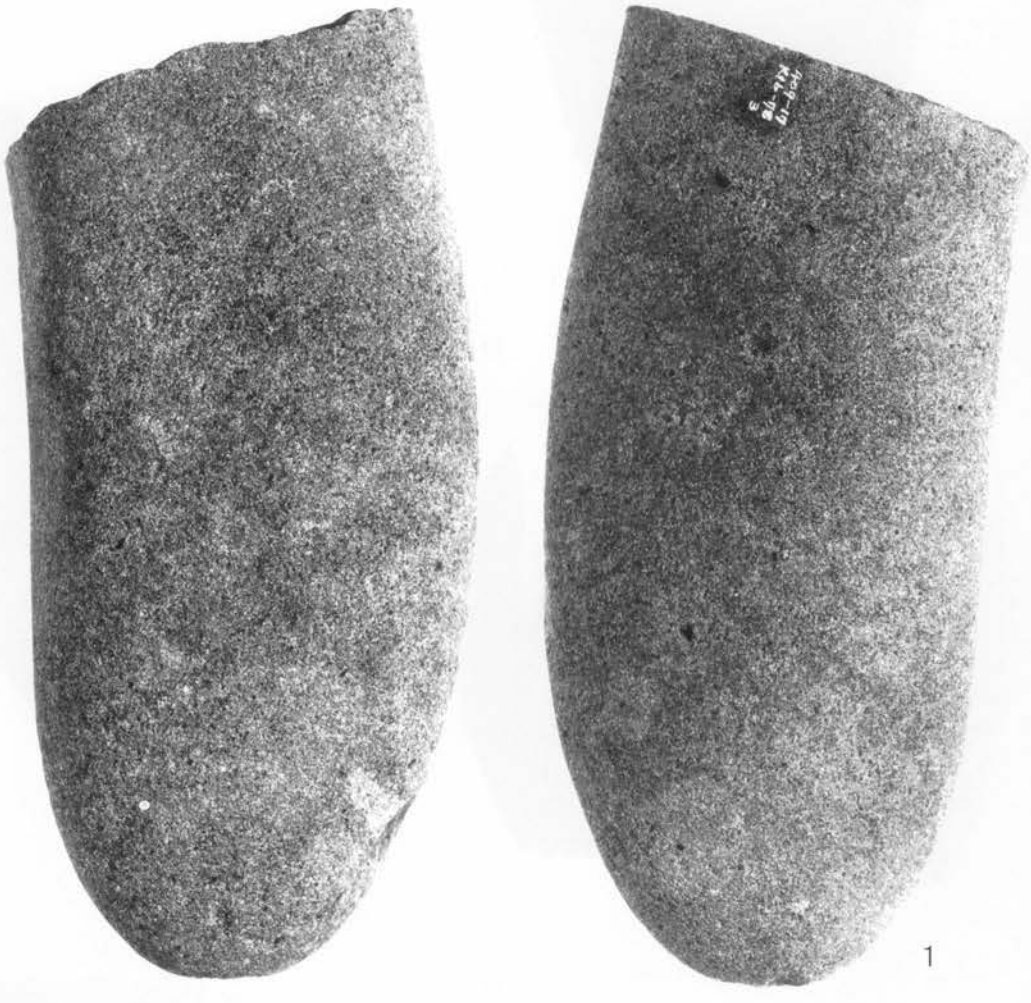
33

34


35

第6ブロック
出土石器（3）

2



1

単独出土石器

1

2

上層遺構出土石器

3

1

D-001

2 3 4 5

D-001

1

D-002

2

D-002

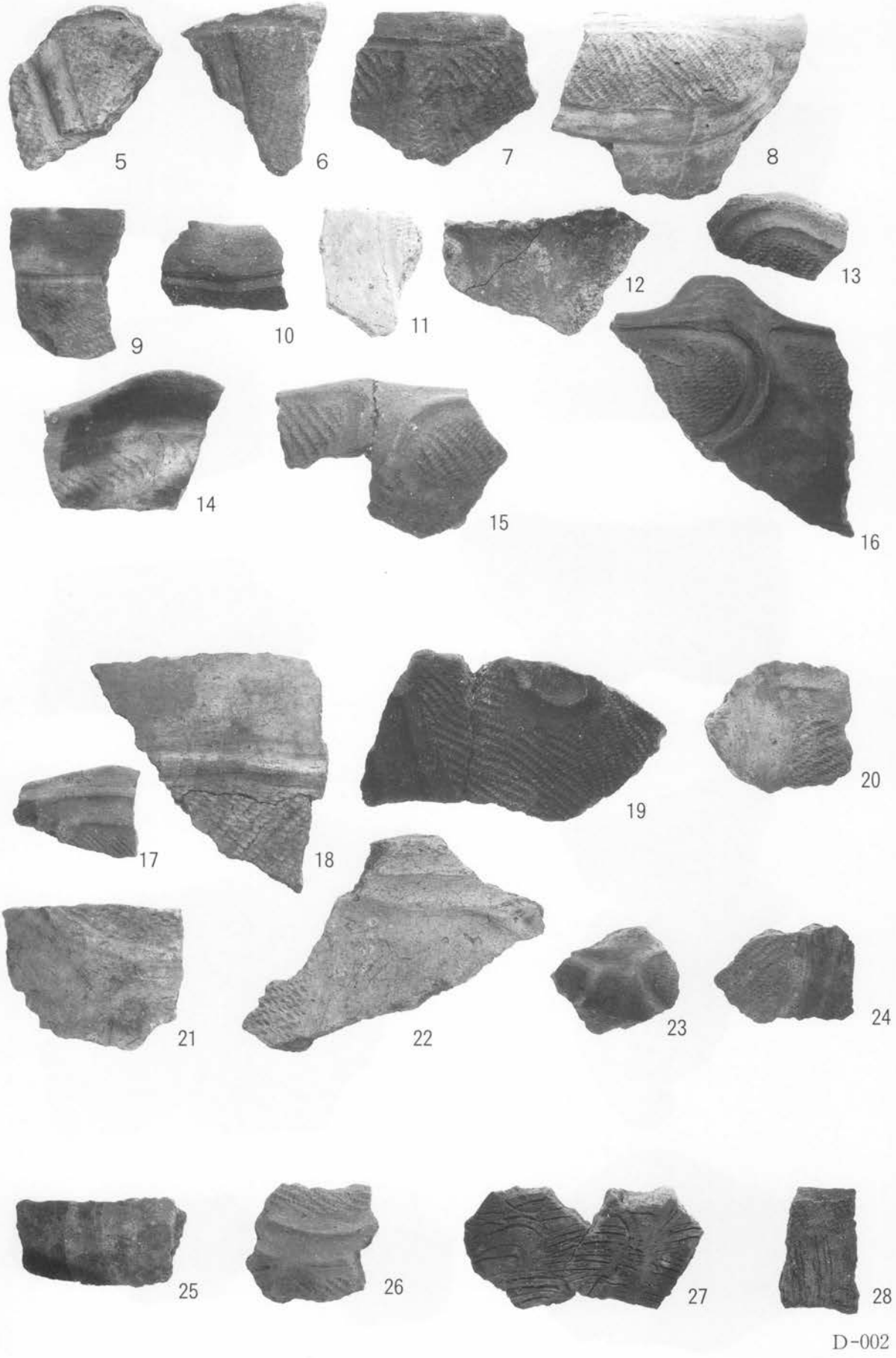
3

D-002

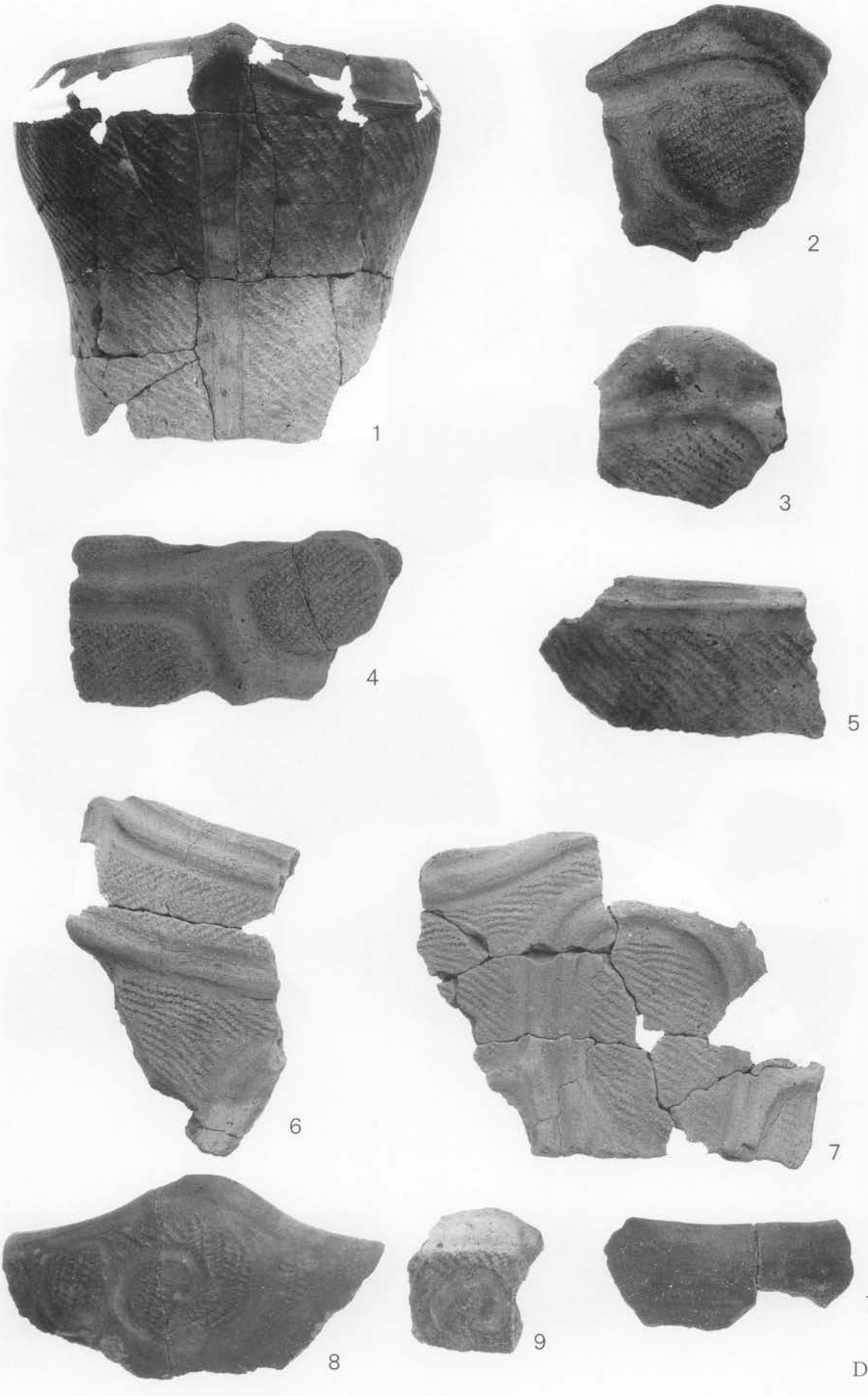
4

D-002

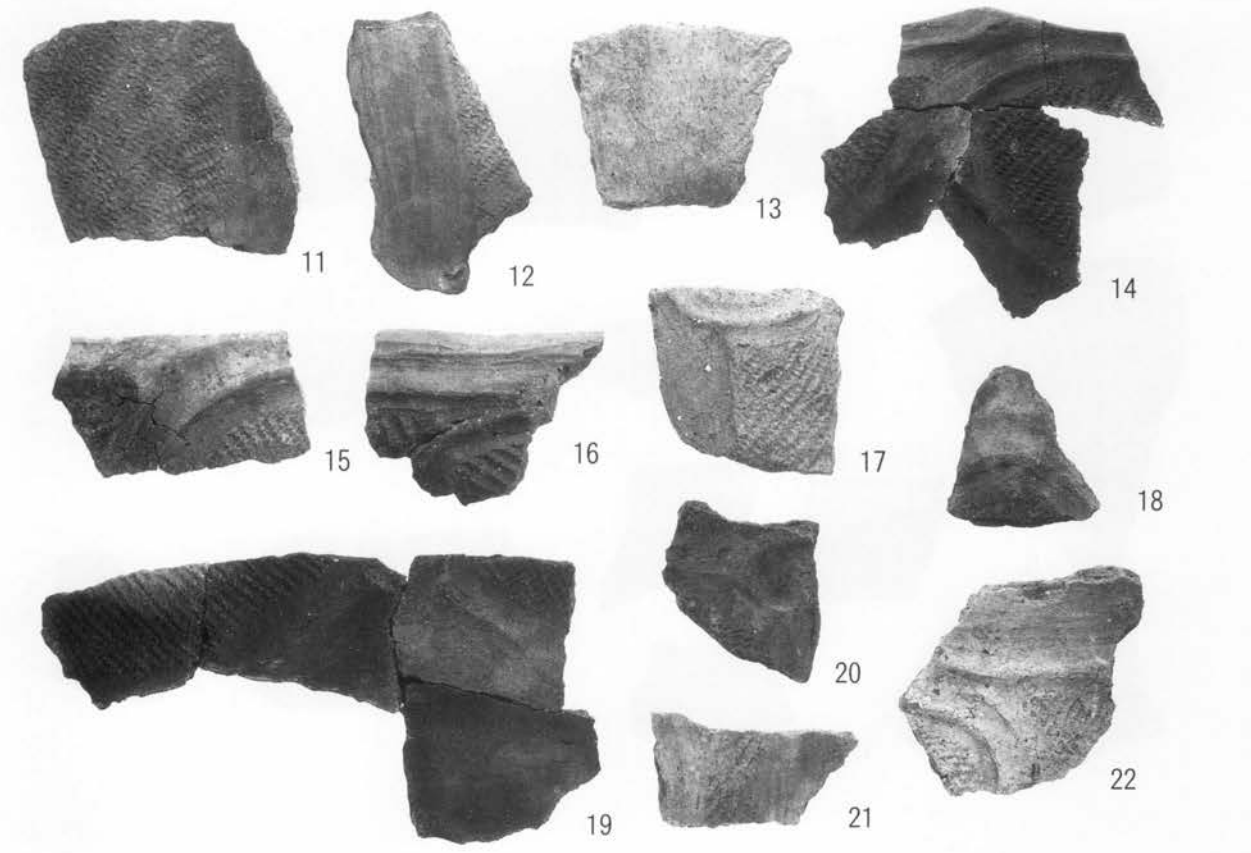
D-001・002住居出土遺物



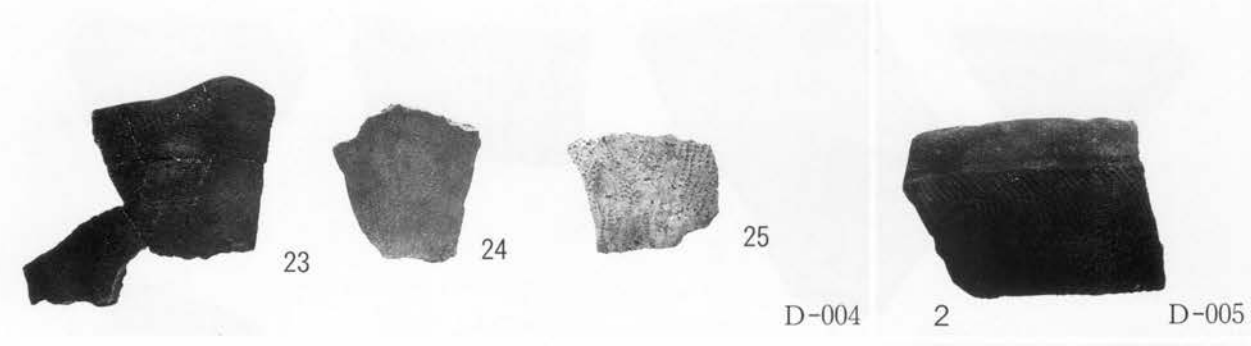
D-002住居出土遺物



D-004住居出土遺物



D-004



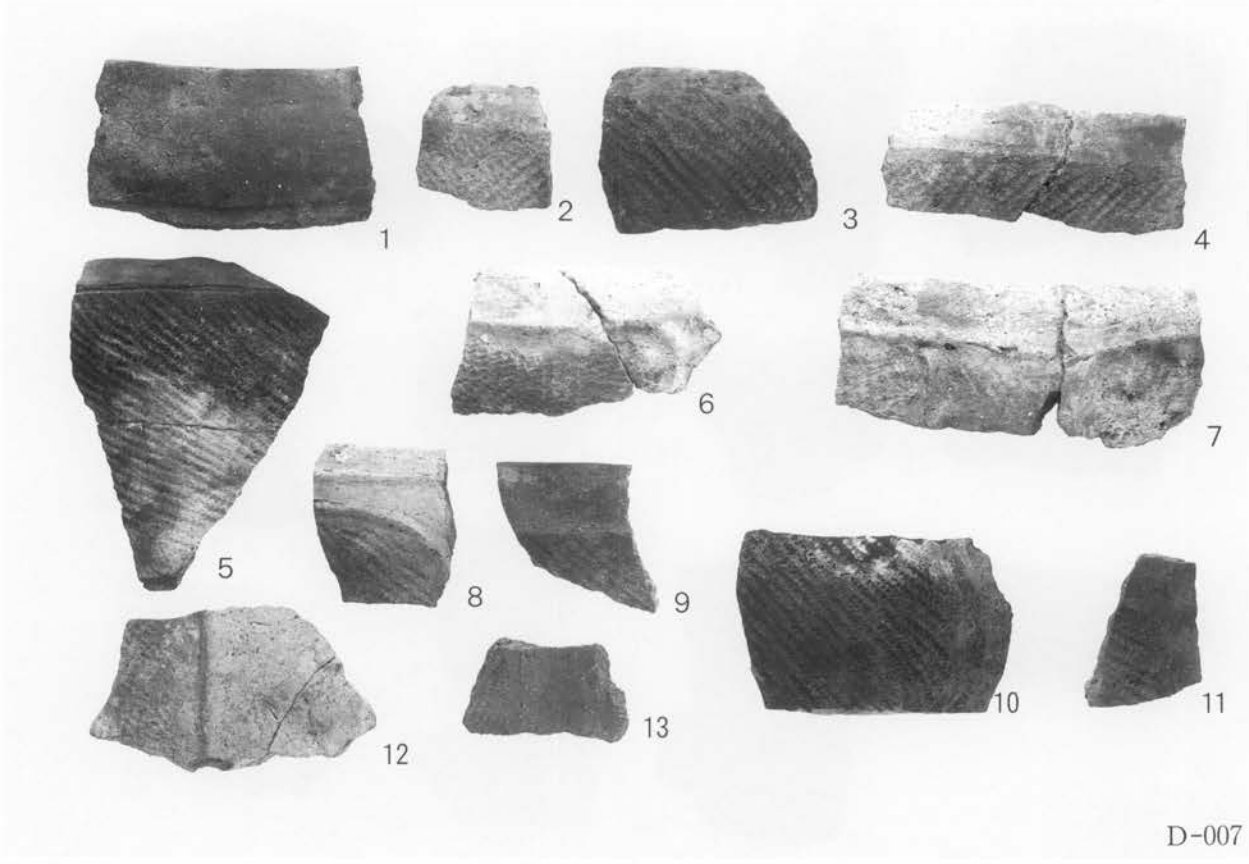
D-004

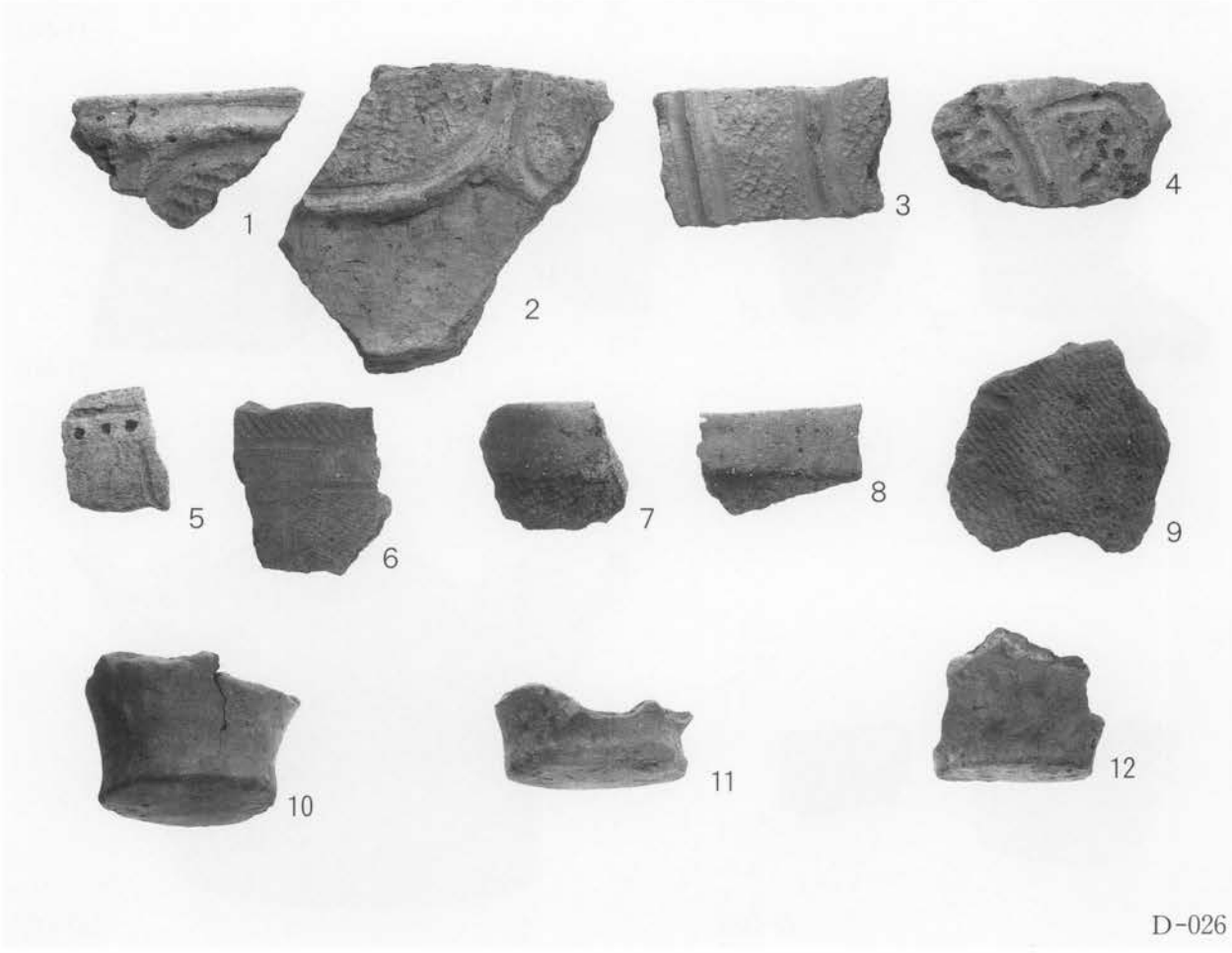
D-005

D-005

D-005

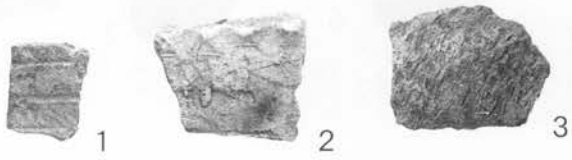
D-004・005住居出土遺物



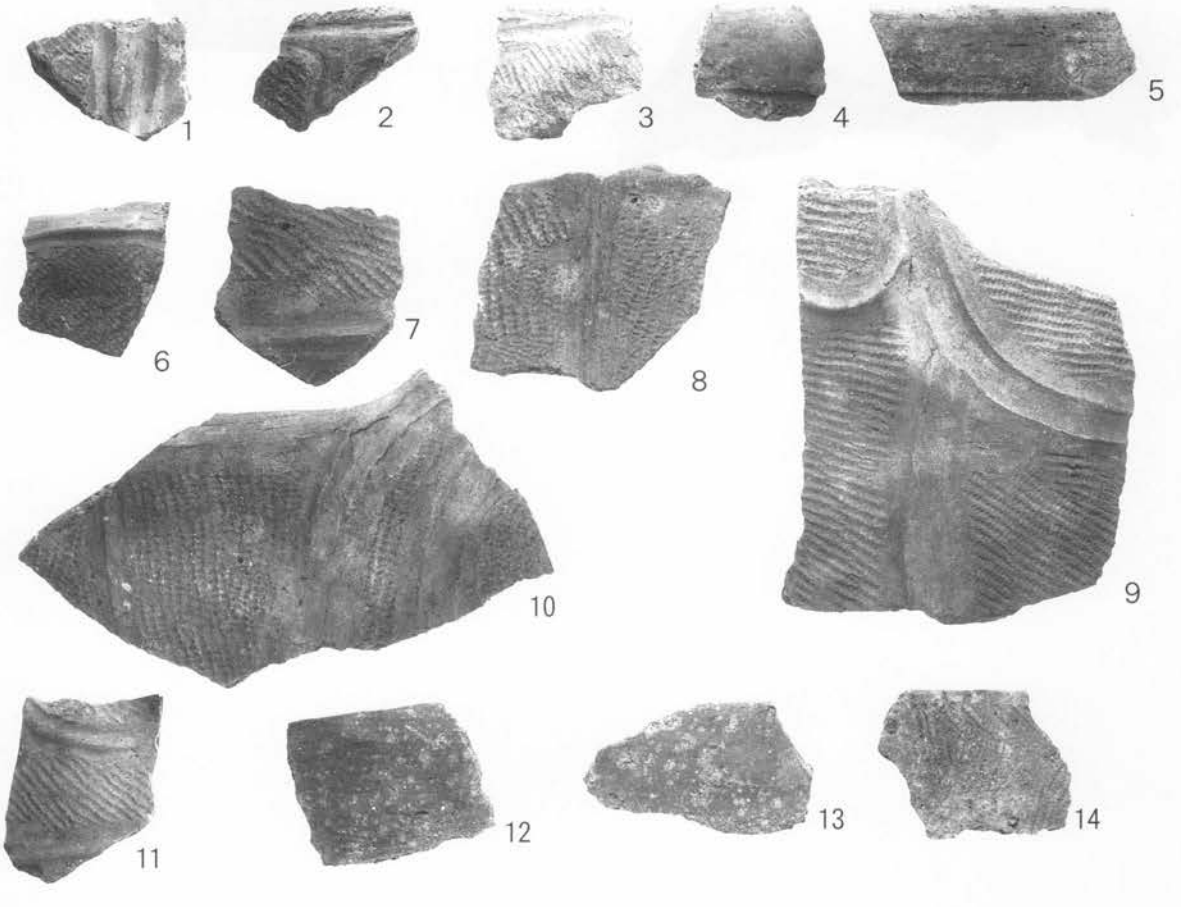


D-007・026住居出土遺物

D-012

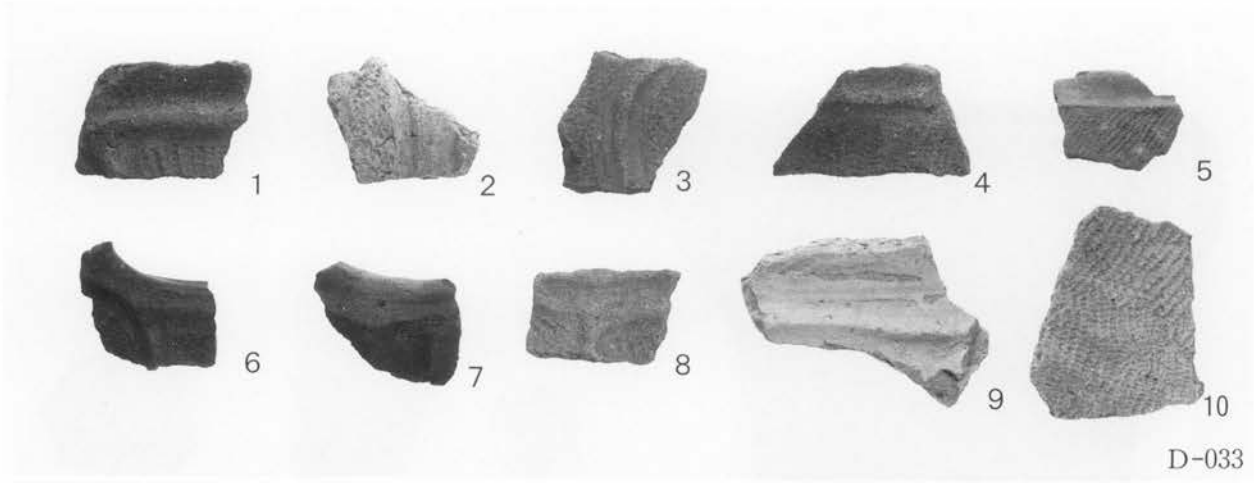


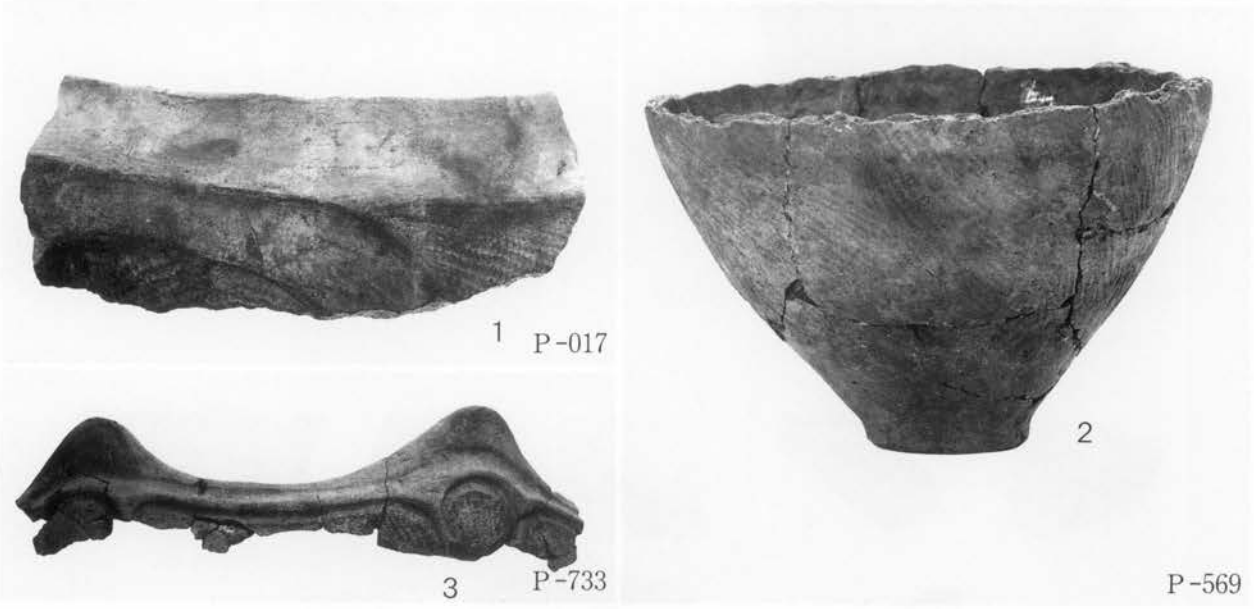
D-027



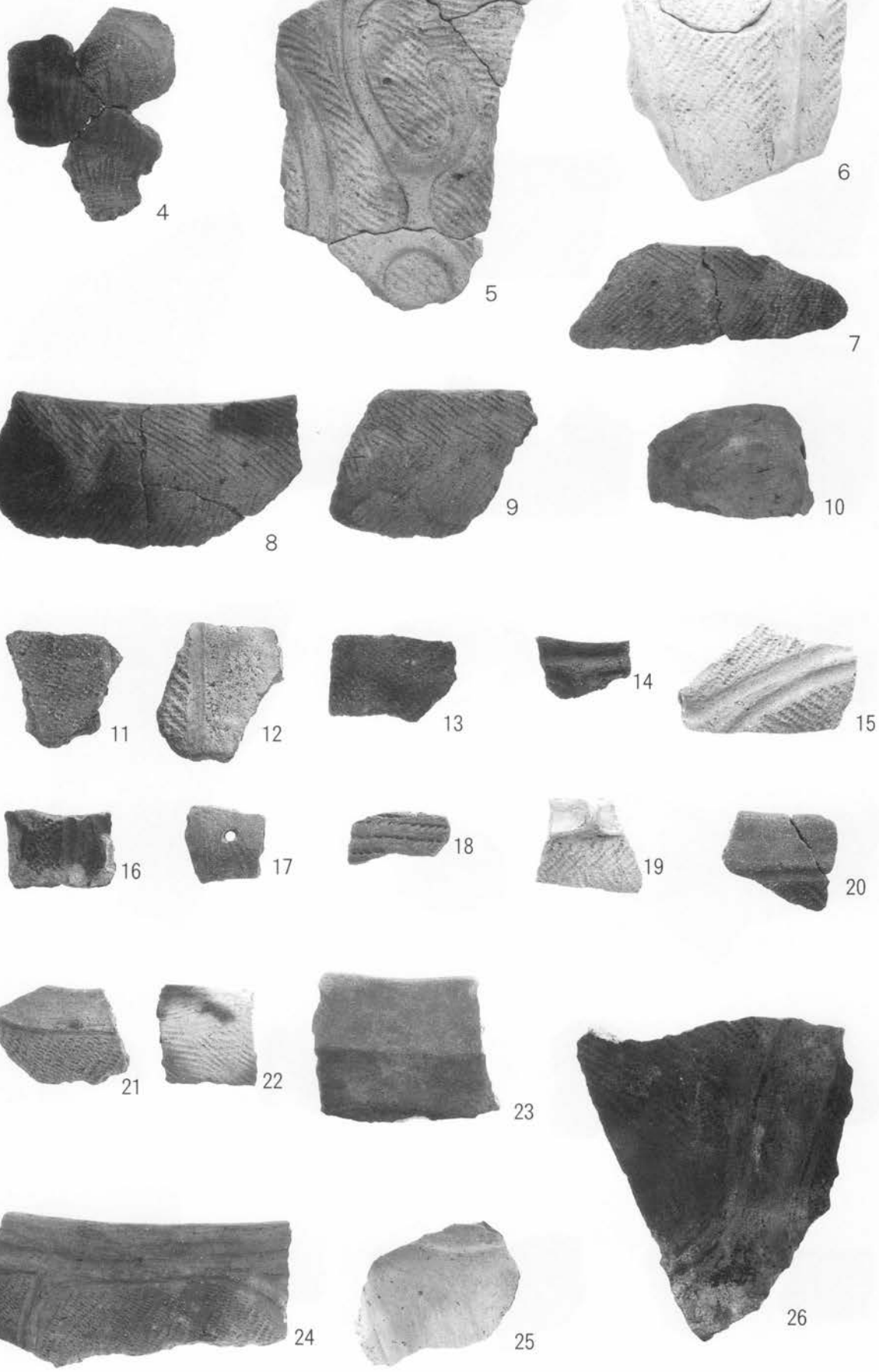
D-030

D-012・027・030住居出土遺物

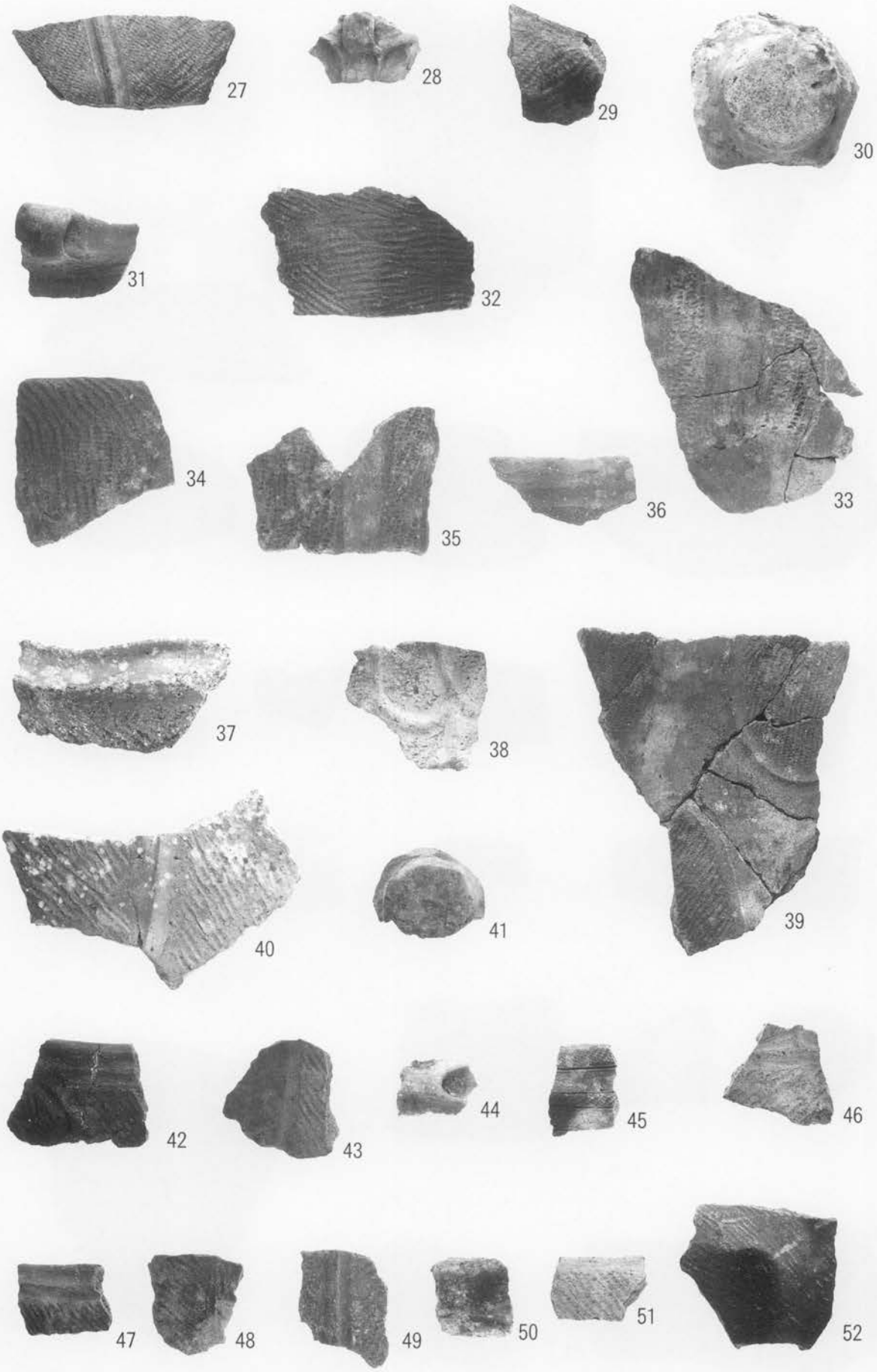




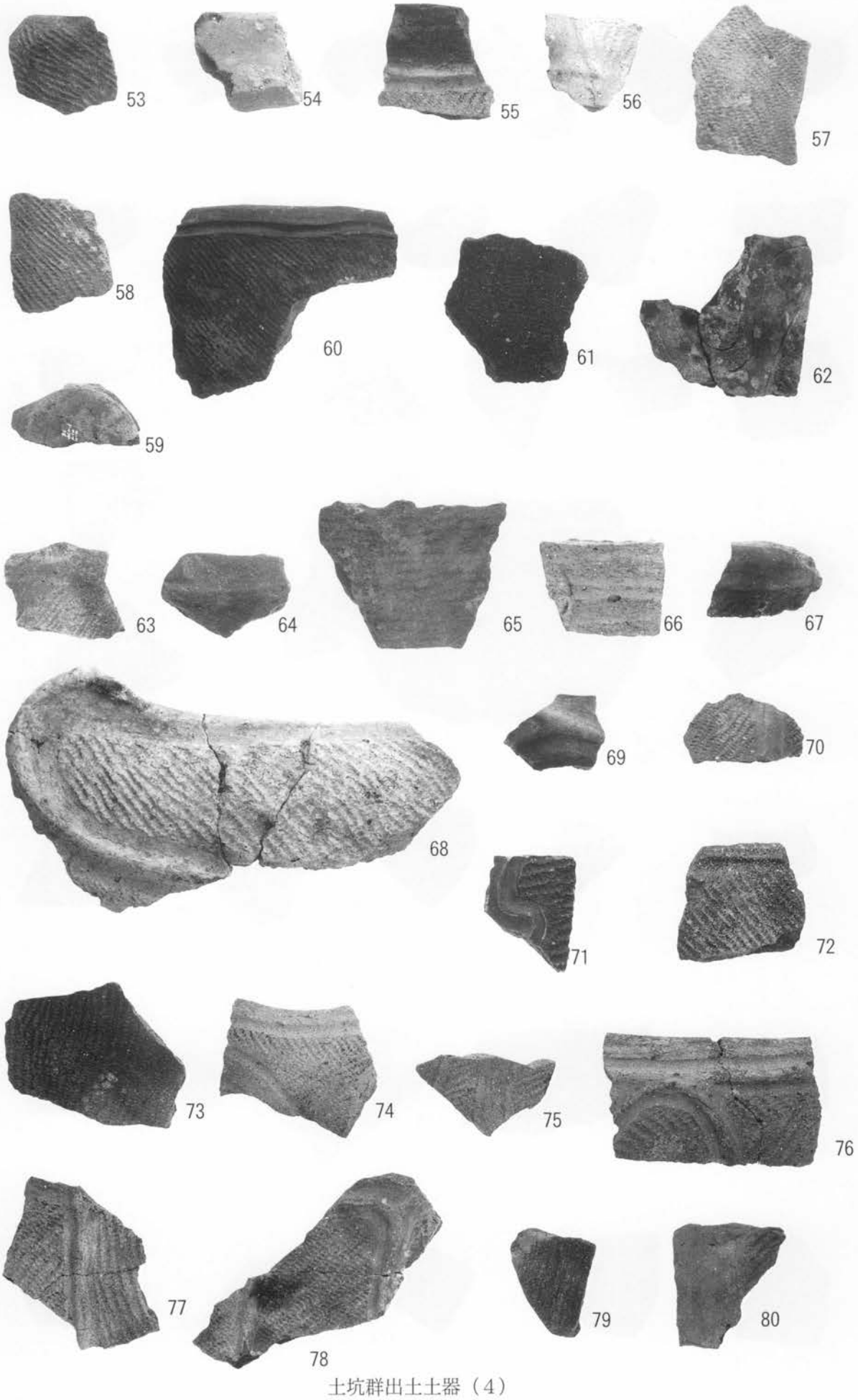
D-033住居出土遺物（上段）
土坑群出土土器（1）（下段）



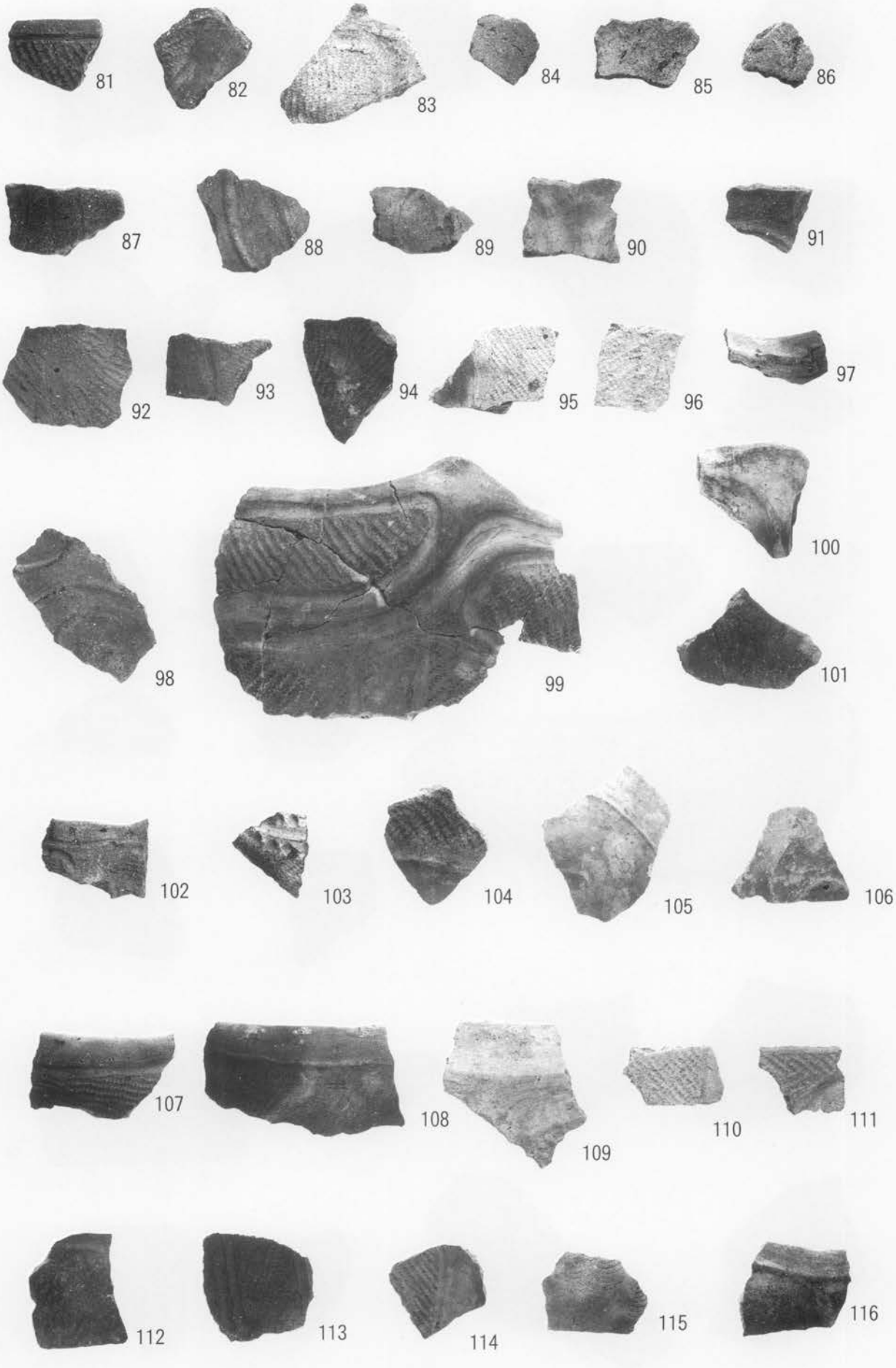
土坑群出土土器（2）


27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52

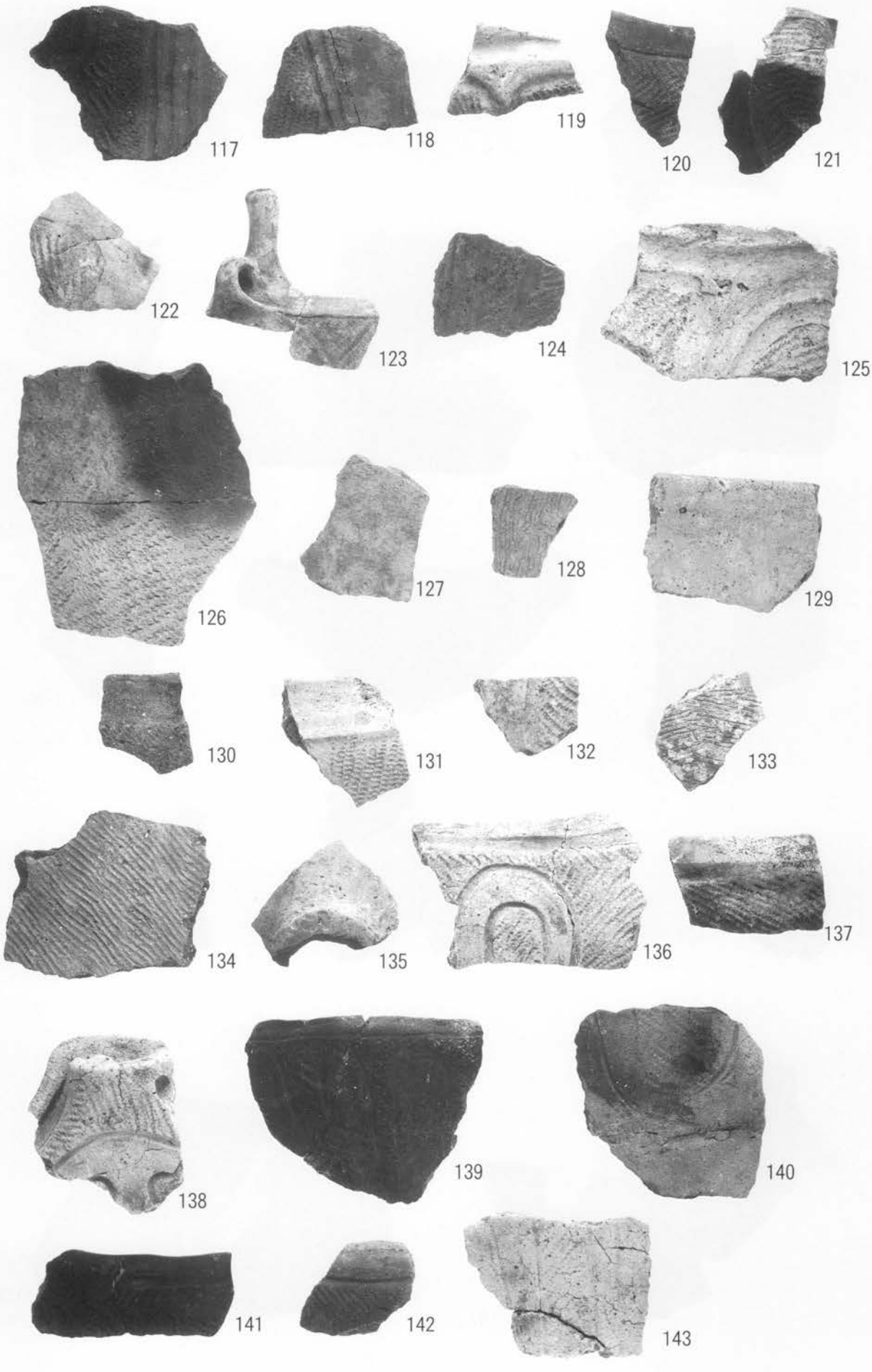
土坑群出土土器（3）


53
54
55
56
57
58
60
61
62
59
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80

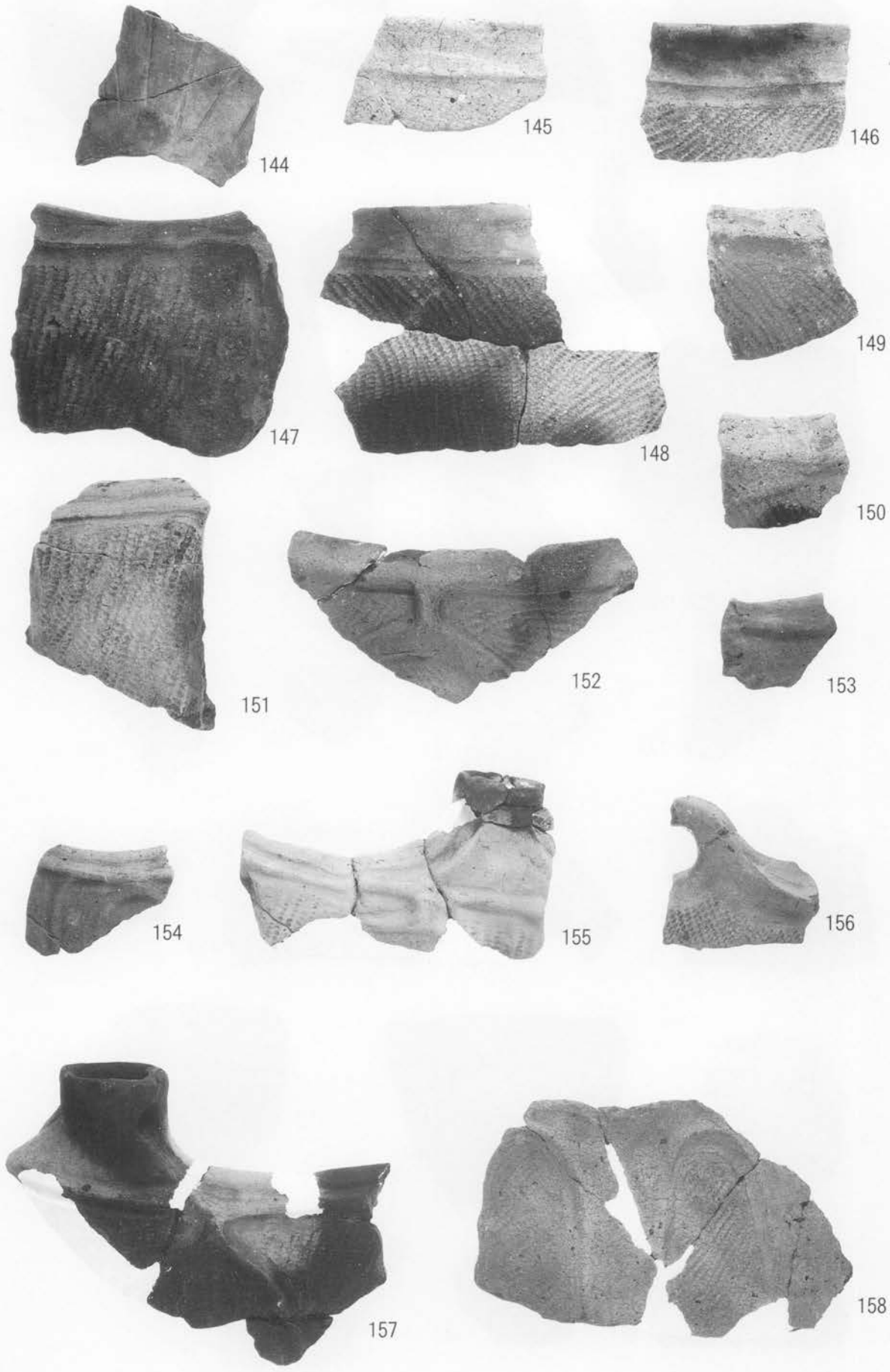
土坑群出土土器（4）


81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116

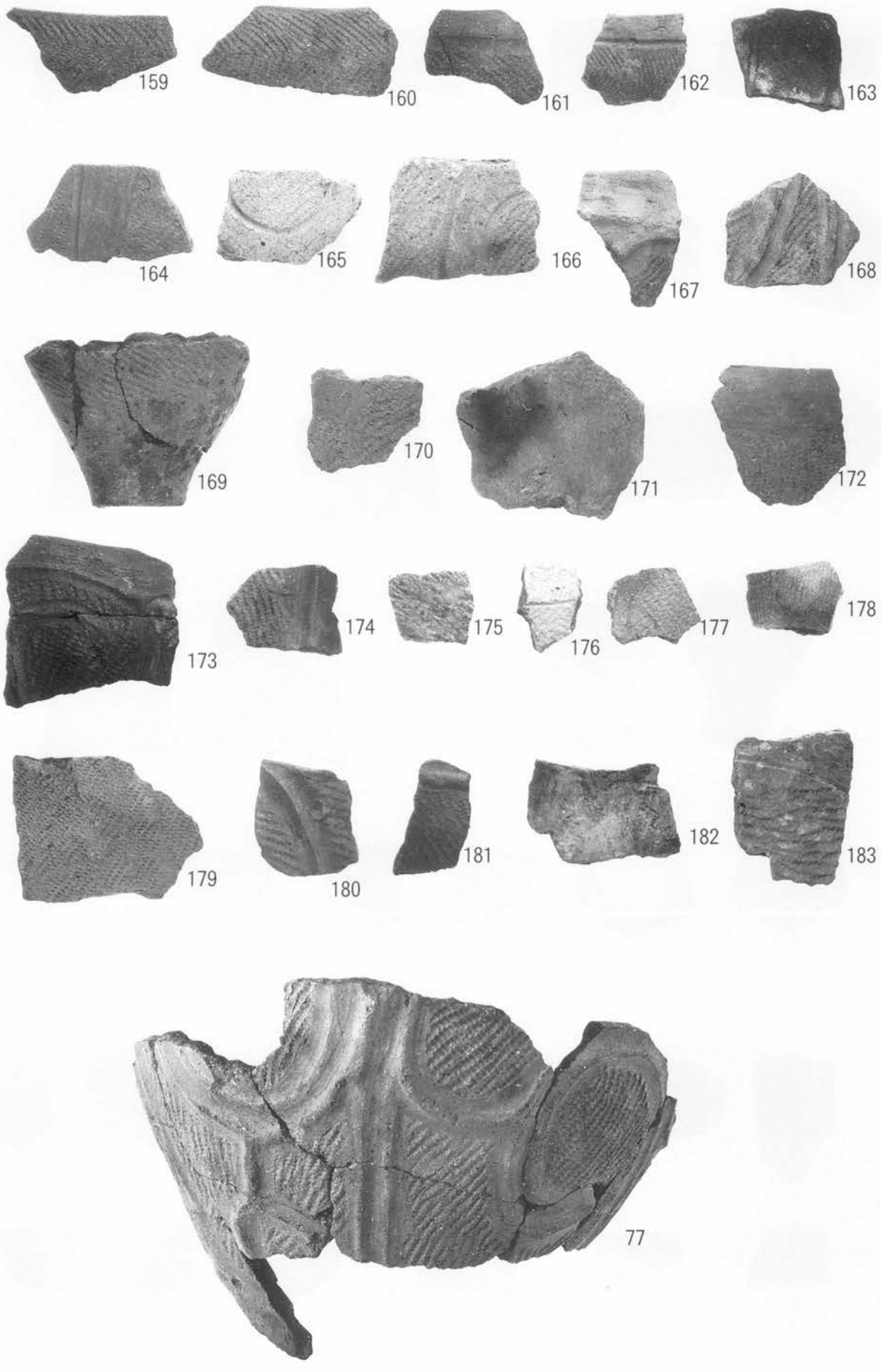
土坑群出土土器（5）


117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143

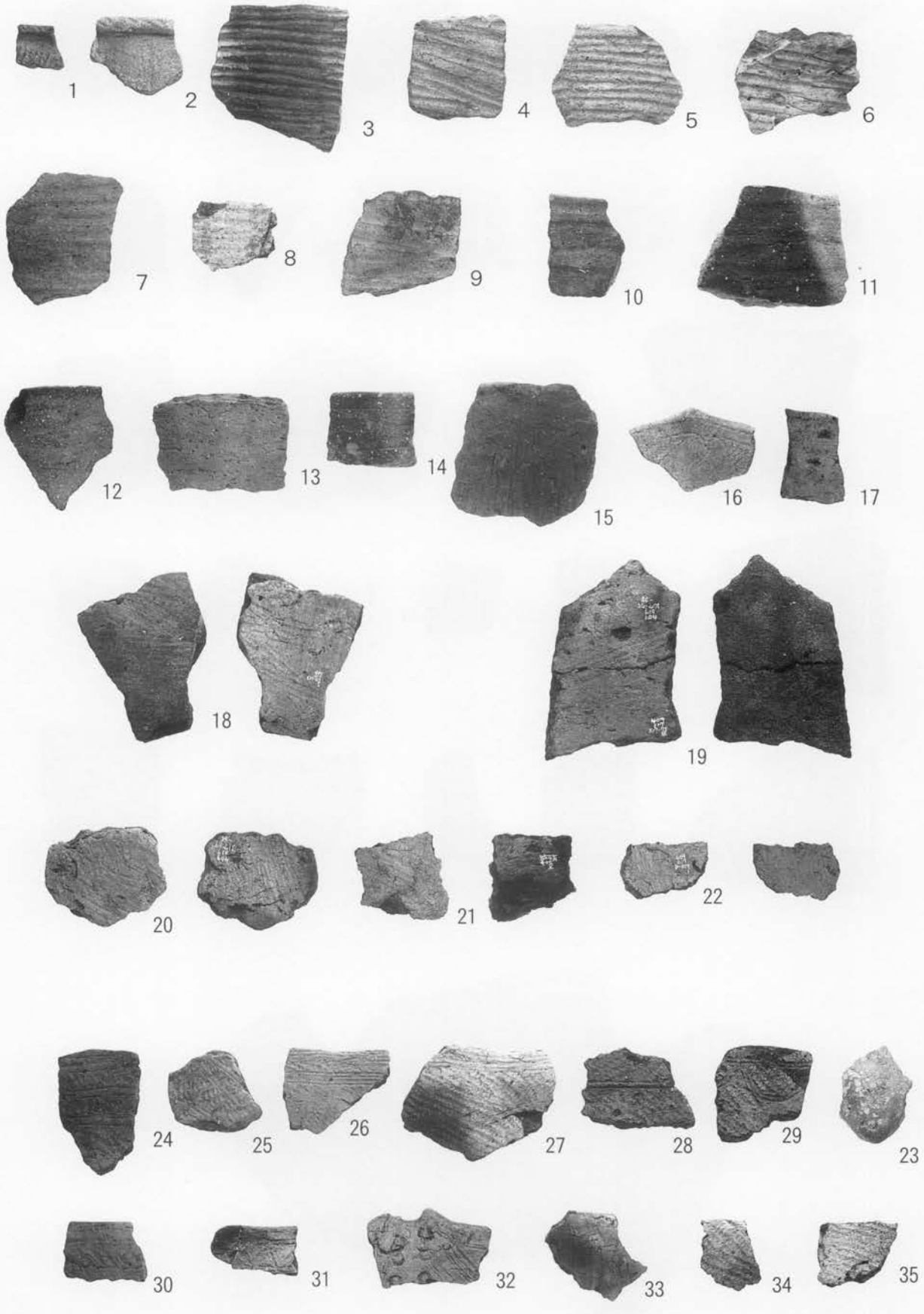
土坑群出土土器（6）



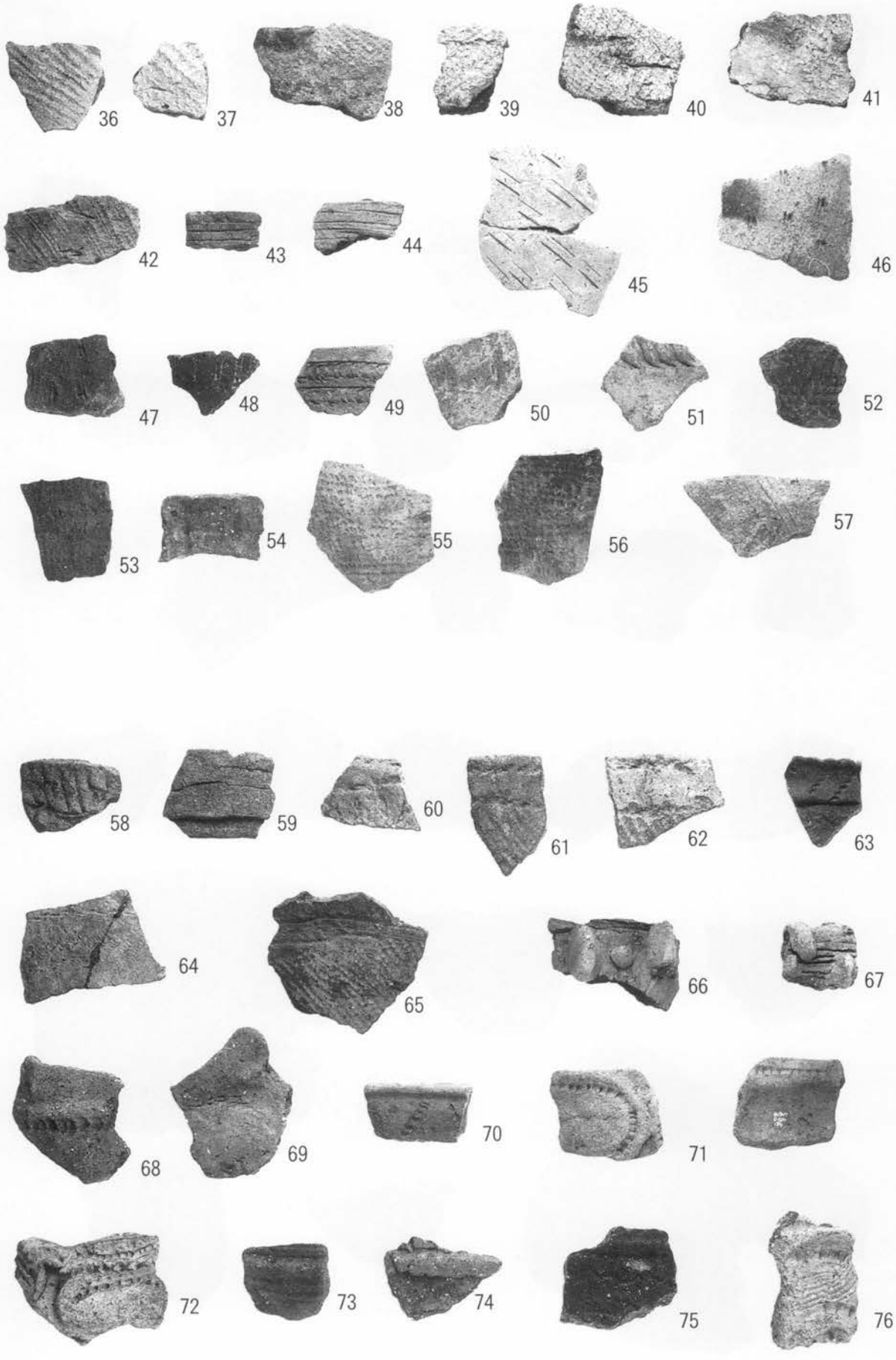
土坑群出土土器（7）



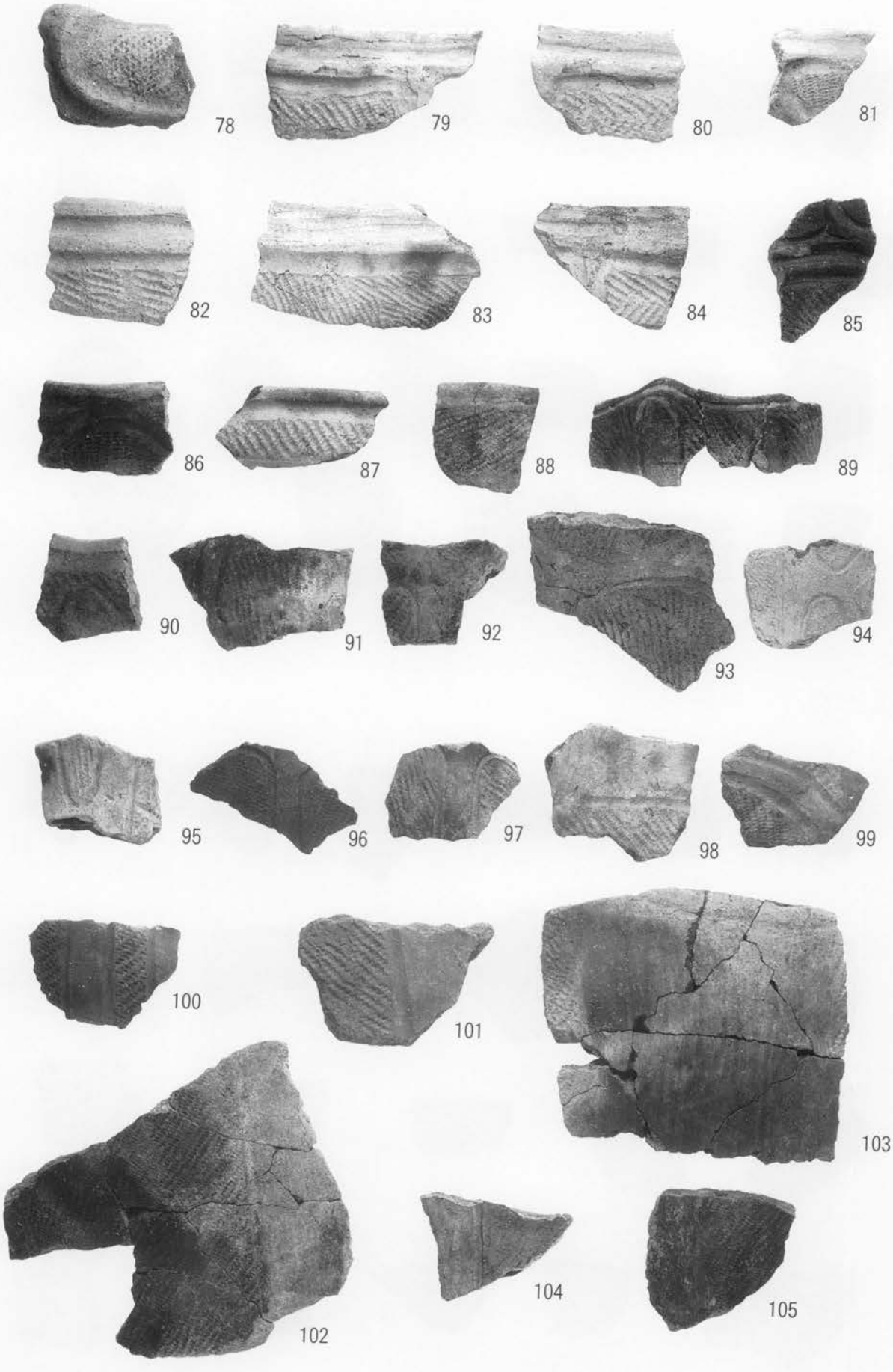
土坑群出土土器（8）（上段）
グリッド出土縄文土器（3）（下段）



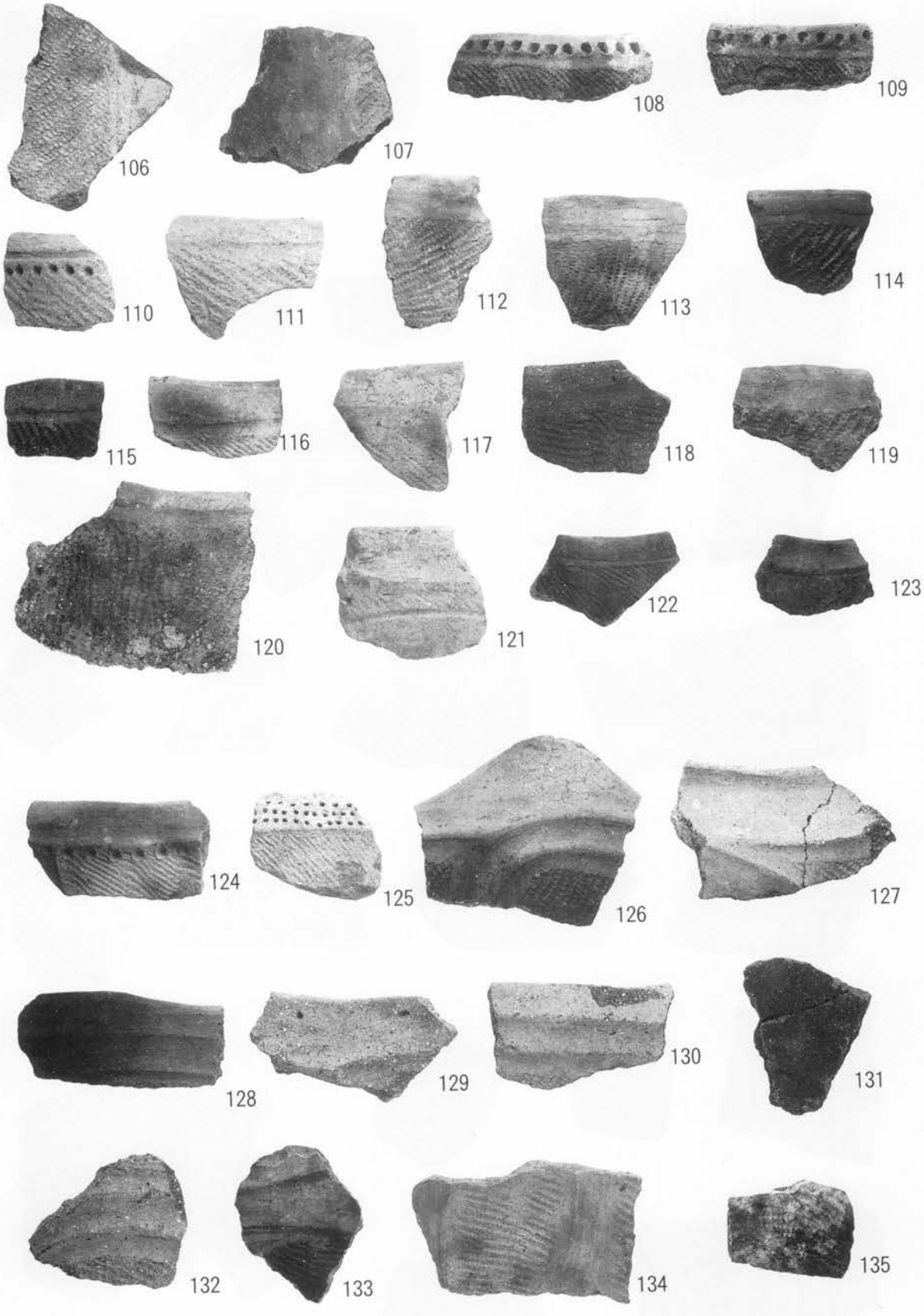
グリッド出土縄文土器（1）



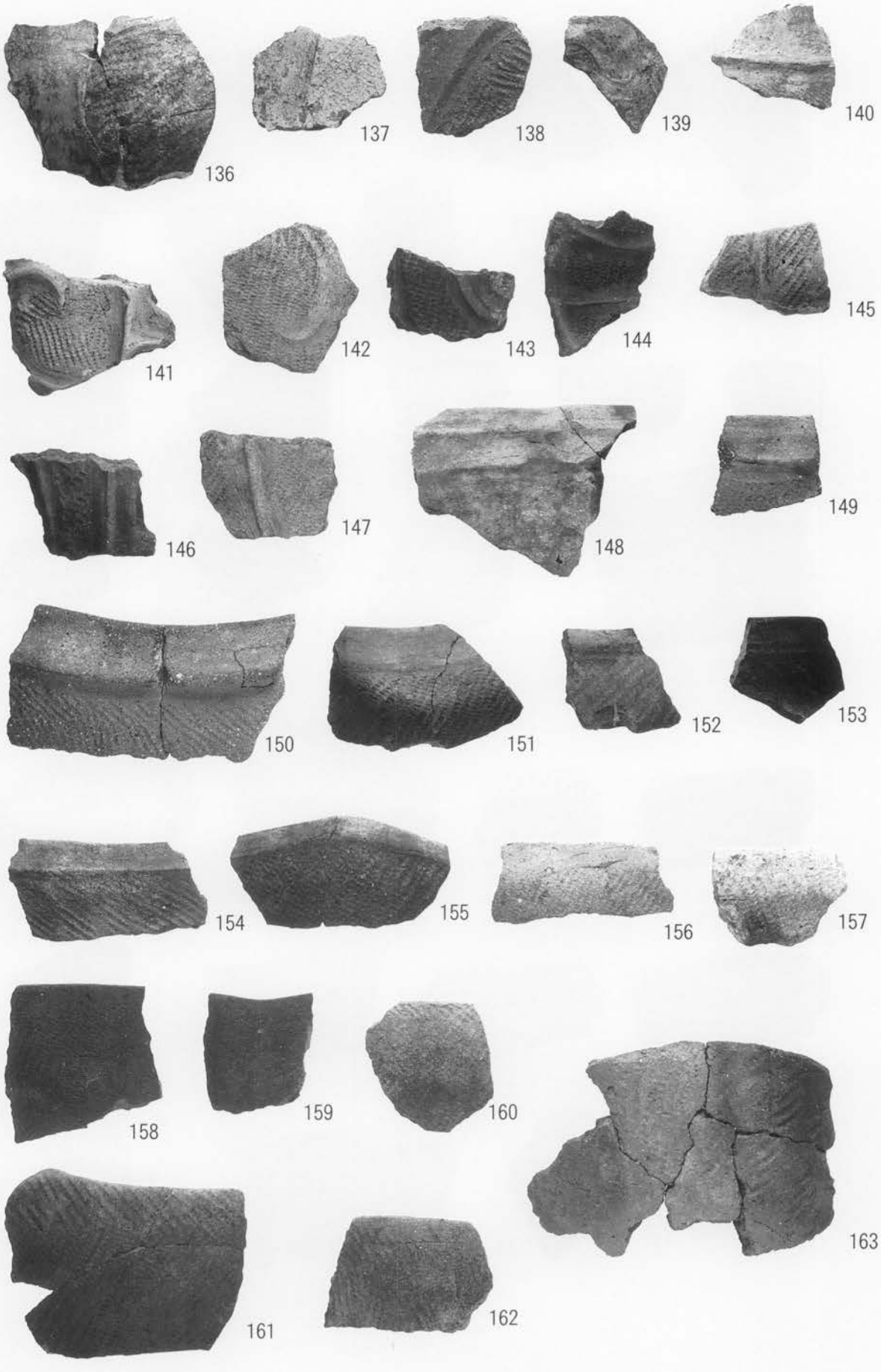
グリッド出土縄文土器（2）



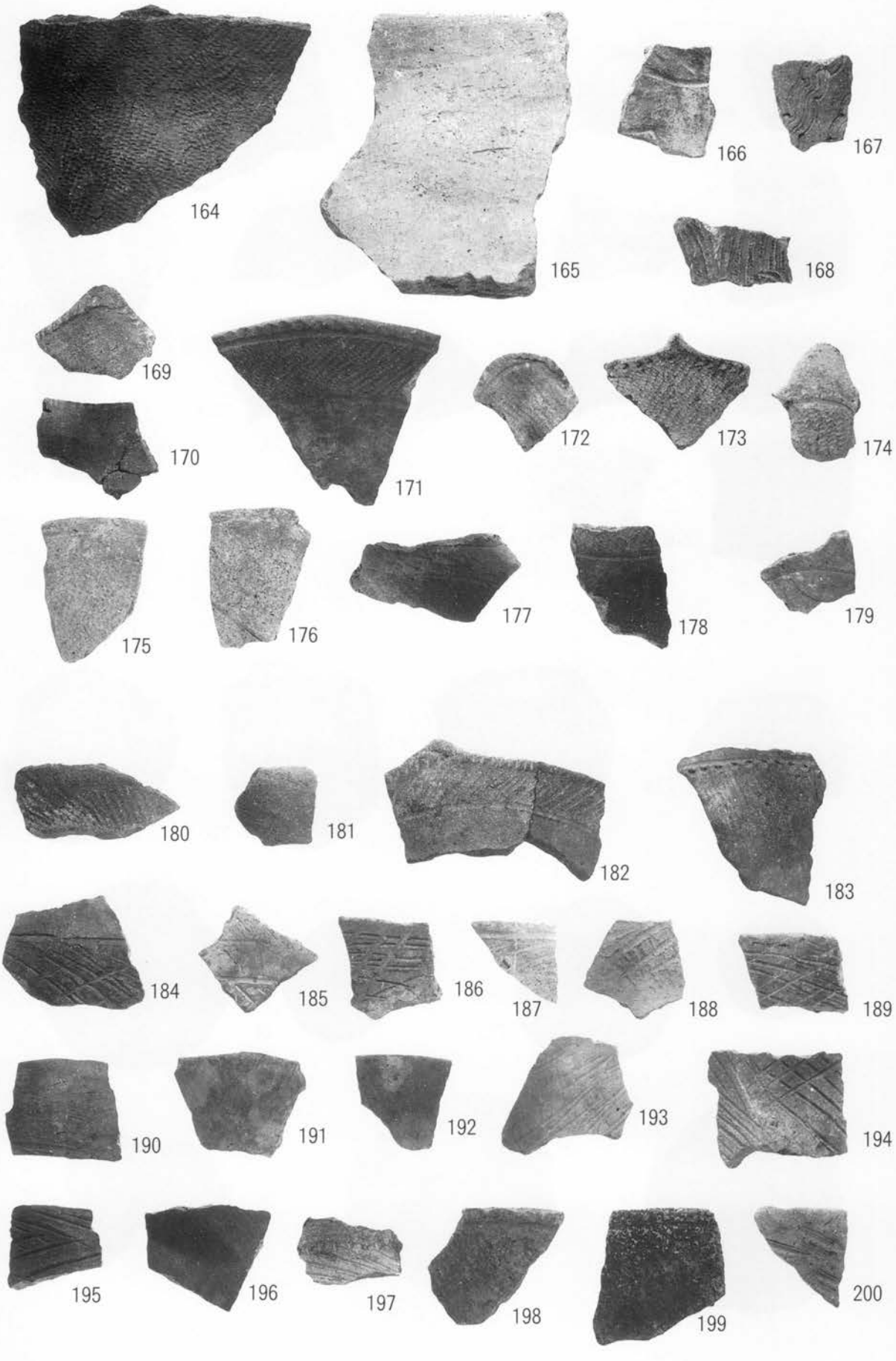
グリッド出土縄文土器（4）



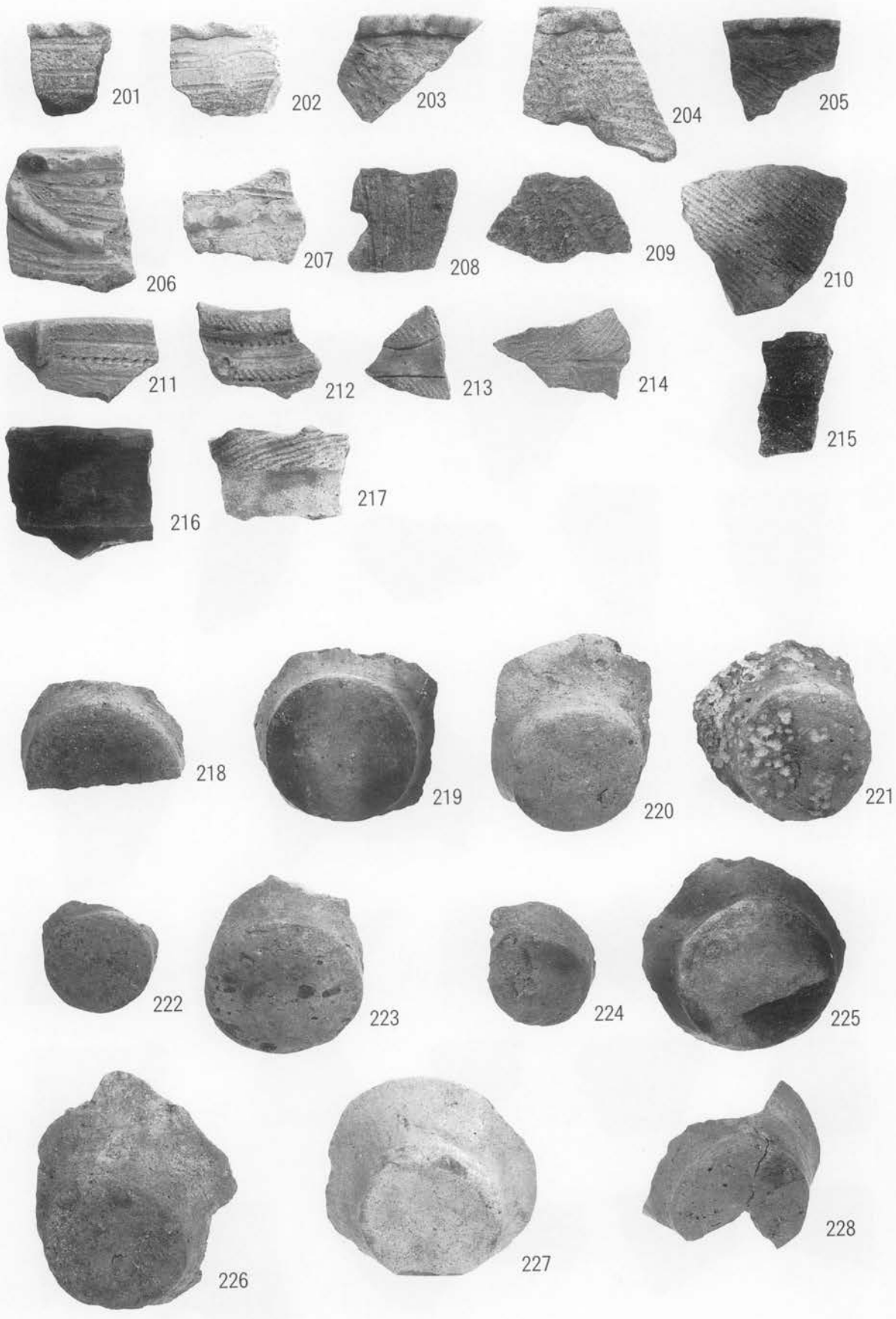
グリッド出土縄文土器（5）



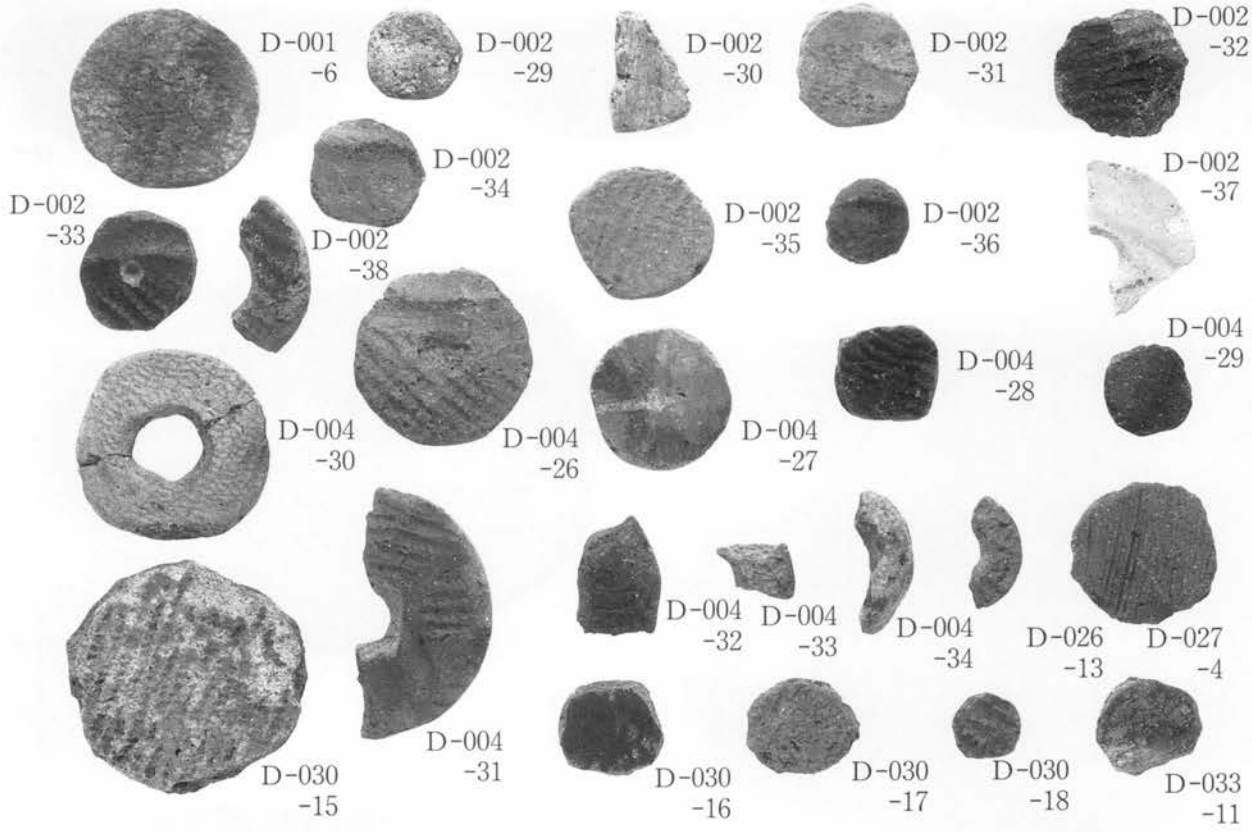
グリッド出土縄文土器（6）



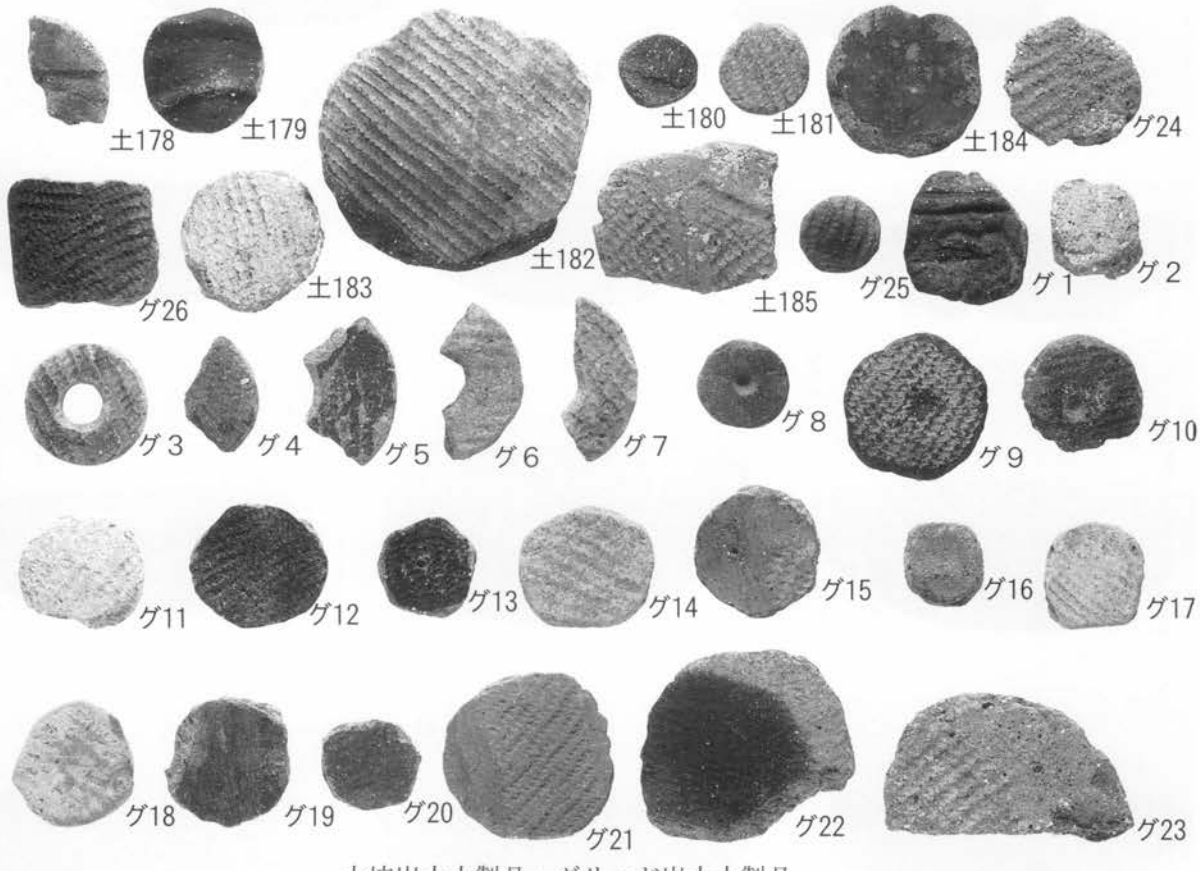
グリッド出土縄文土器（7）



グリッド出土縄文土器（8）



住居出土土製品



土坑出土土製品・グリッド出土土製品

D-011
1

D-011
2

D-011
3

D-011
9

D-011
8

D-013
1

D-013
2

D-013
3

D-013
4

D-013
6

D-014
1

D-015
1

D-015

2

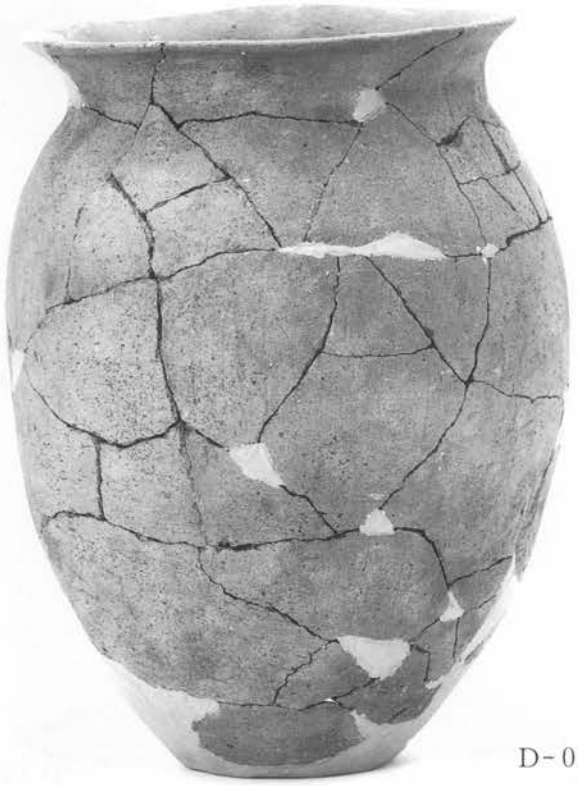
D-015

3

D-015

4

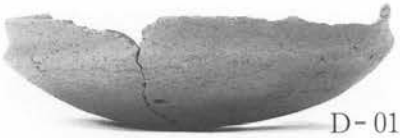
D-011・013・014・015住居出土遺物



D-015
5

D-016
16

D-016
5



D-016
6

D-016 8

D-016 9

D-016
10

D-016 14

D-016
21

D-016
22

D-015・016住居出土遺物

D-016
20

D-016
23

D-017
11

D-017
1

D-017
3

D-017
4

D-017
6

D-017
5

D-017
7

D-017
8

D-017
9

D-017
10

D-017
12

D-016・017住居出土遺物

D-017
13

D-017
14

D-017
15

D-017
16

D-017
17

D-018
1

D-018
2

D-018
3

D-017・018住居出土遺物

D-018
4

D-018
5

D-018
6

D-019
1

D-019
2

D-019 3

D-019 4

D-019 5

D-019

D-019 7

D-019 8

6

D-019 9

D-019 10

D-019
11

D-019
12

D-019
13

D-019
14

D-019
15

D-019
16

D-019 17

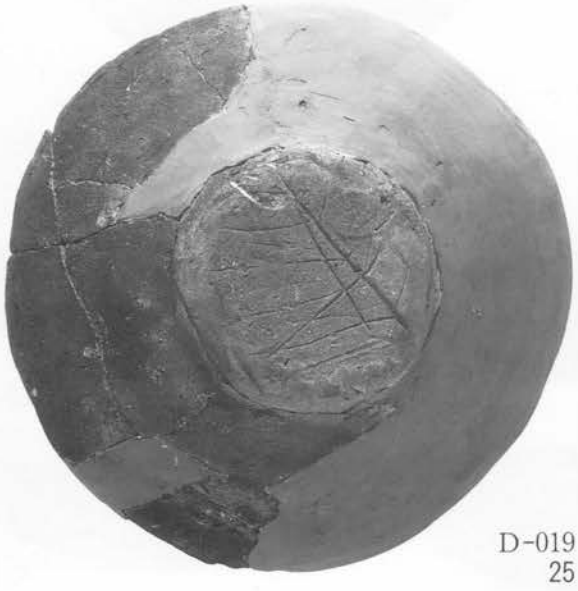
D-019 18

D-019 19

D-019

D-019 21

24


D-019
25

D-019
26

D-019住居出土遺物

D-019 30

D-019
31

D-019
32

D-019
33

D-020 1

D-019
34

D-019
35

D-020 2

D-020 3

D-020 4

D-020 8

D-020 10

D-020 1

D-019・020住居出土遺物

D-020 13

D-020 16

D-020 17

D-020 18

D-020 20

D-020 24

D-020 26

D-020 25

D-021 1

D-020 28

D-020 27

D-021 2

D-020・021住居出土遺物

D-021
5

D-021
6

D-021
7

D-021
8

D-021
10

D-021
11

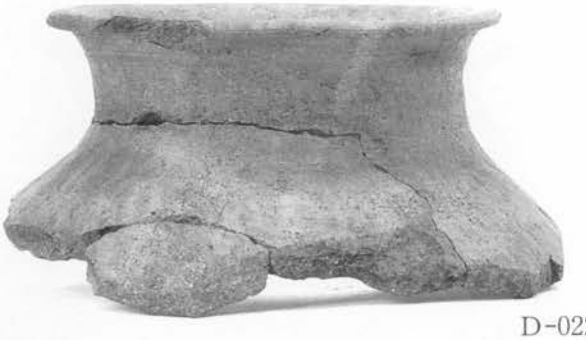
D-021住居出土遺物

D-020 12

D-022
1

D-022
2

D-021
12



D-022
5

D-022
3

D-023
1

D-023
2

D-023
3

D-023
4

D-024
1

D-024
2

D-024
3

D-024
4

D-024
5

D-024
6

D-024
7

D-021
12

D-020～024住居出土遺物

D-024
8

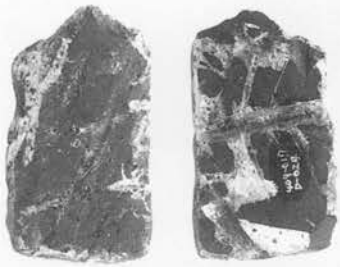
D-024
9

D-024 11

D-024
10

D-024
14

D-024
13



D-025 2

D-025 3

D-024
12

D-025 1

D-025 5

D-025 7

D-024・025住居出土遺物

D-025
8

D-025 9

D-025 10

D-025 12

D-025 13

D-025 14

D-025 16

D-025 17

D-025 15

D-025
18

D-025
19

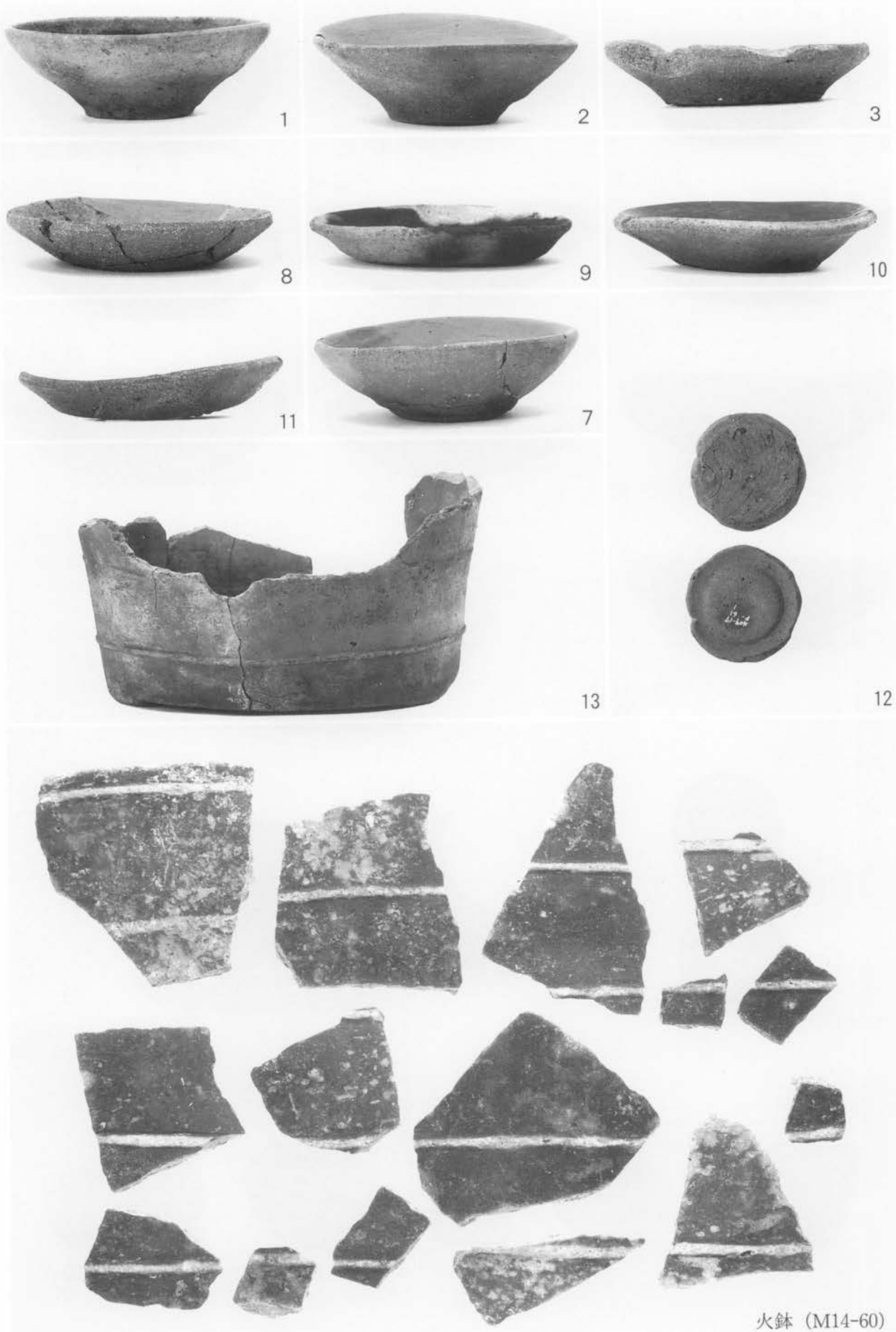
L2-40

D-025
22

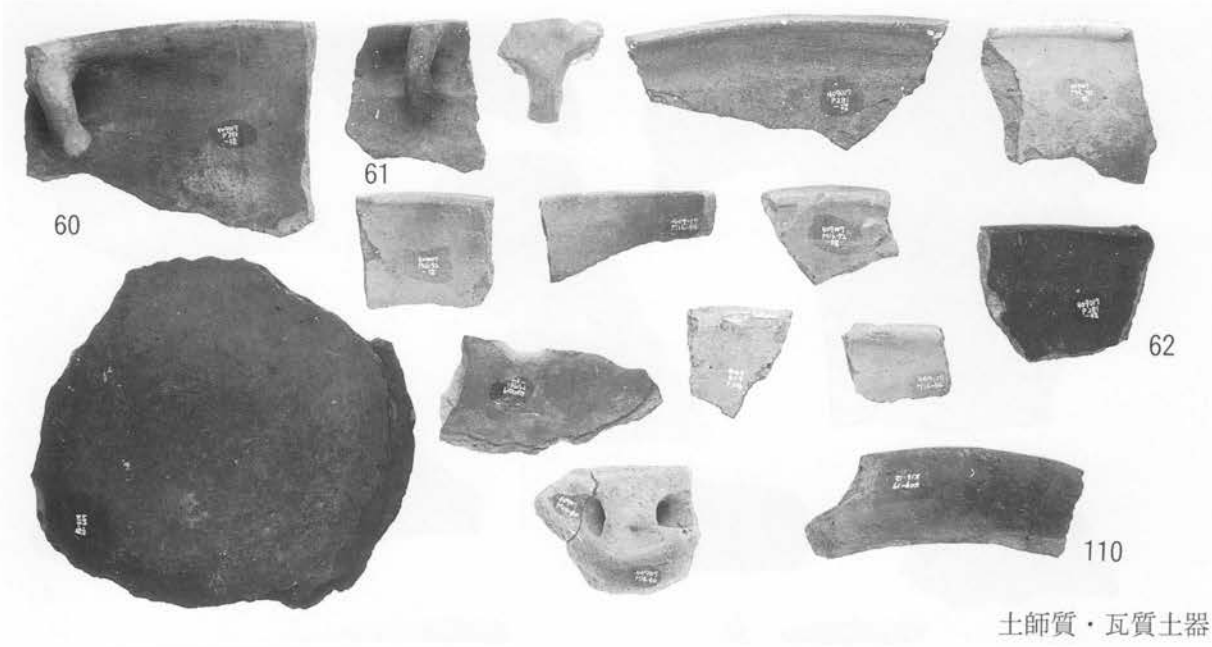
D-025
20

D-025
21

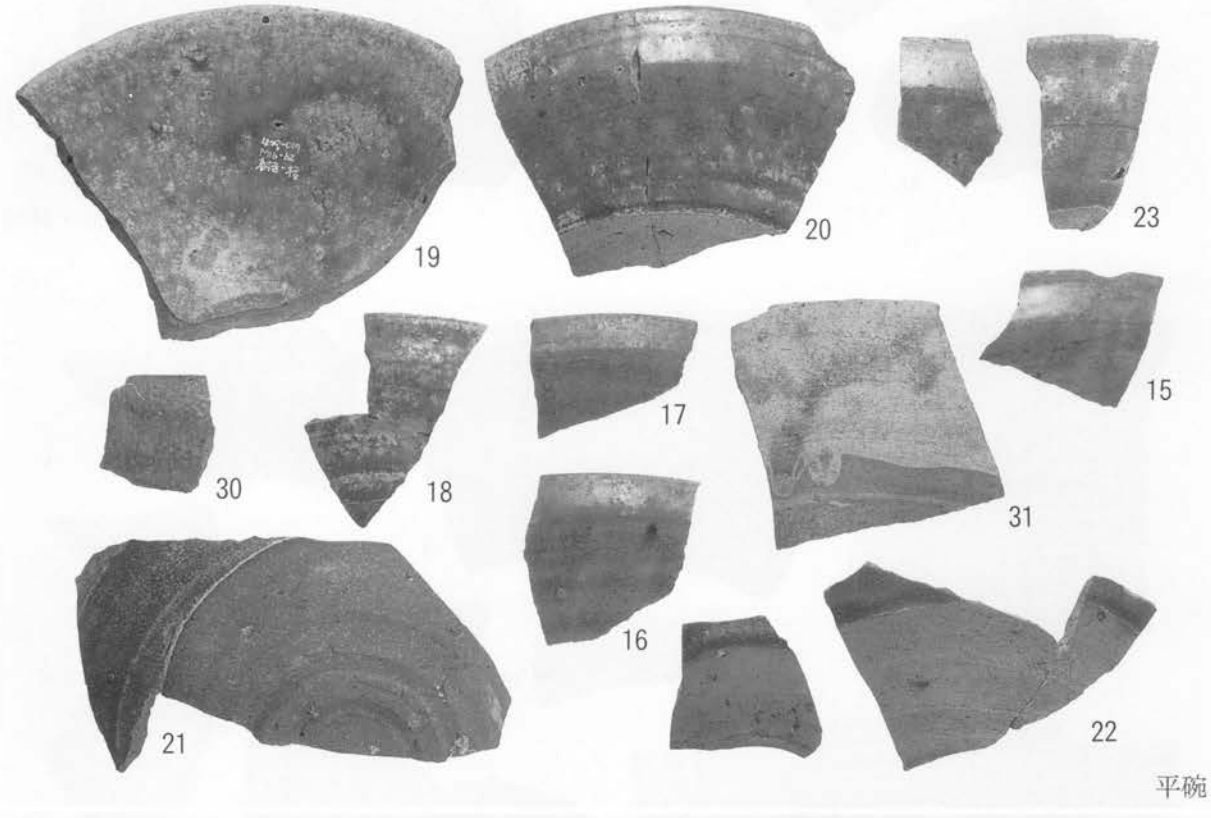
D-025住居出土遺物、表面採集遺物



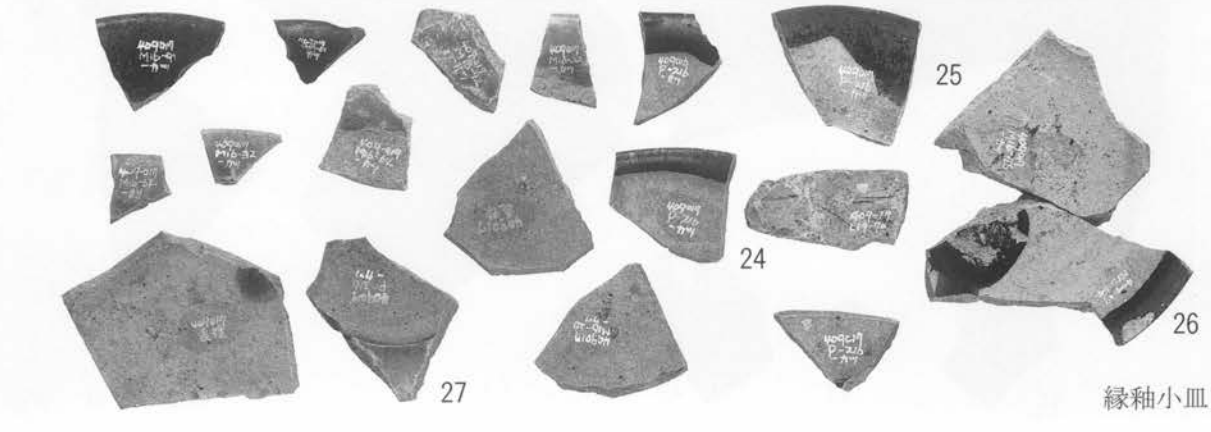
中近世土師質土器（カワラケ、火鉢）



土師質・瓦質土器

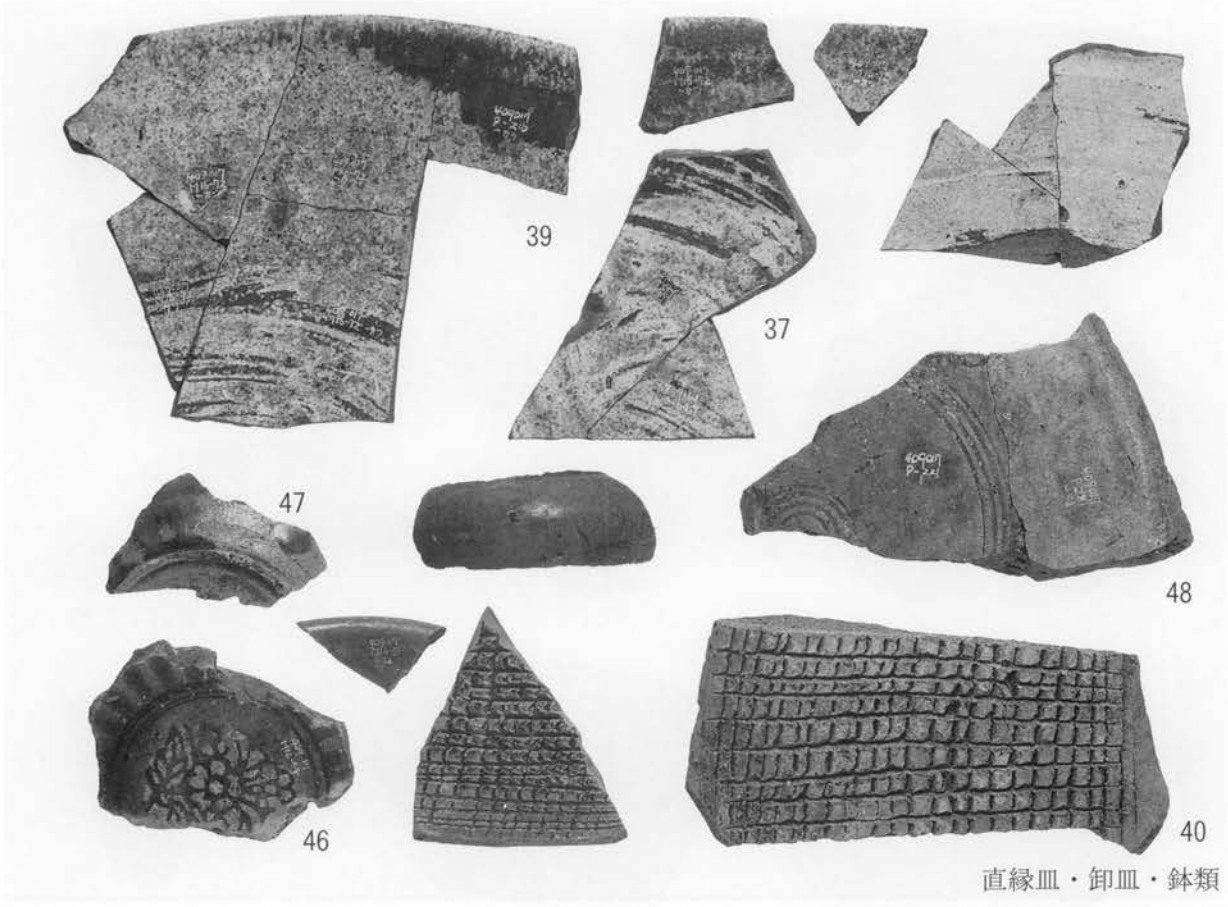


平碗

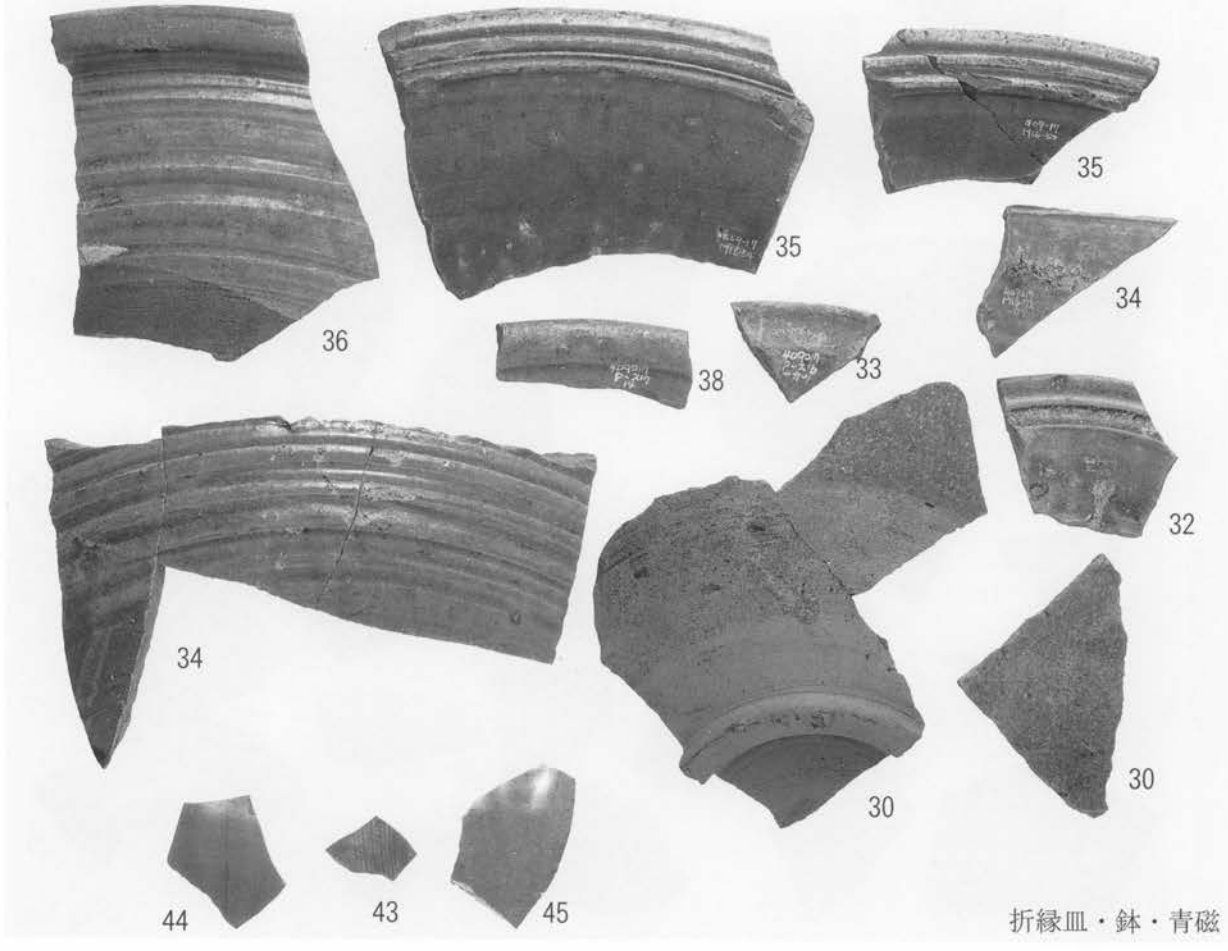


縁釉小皿

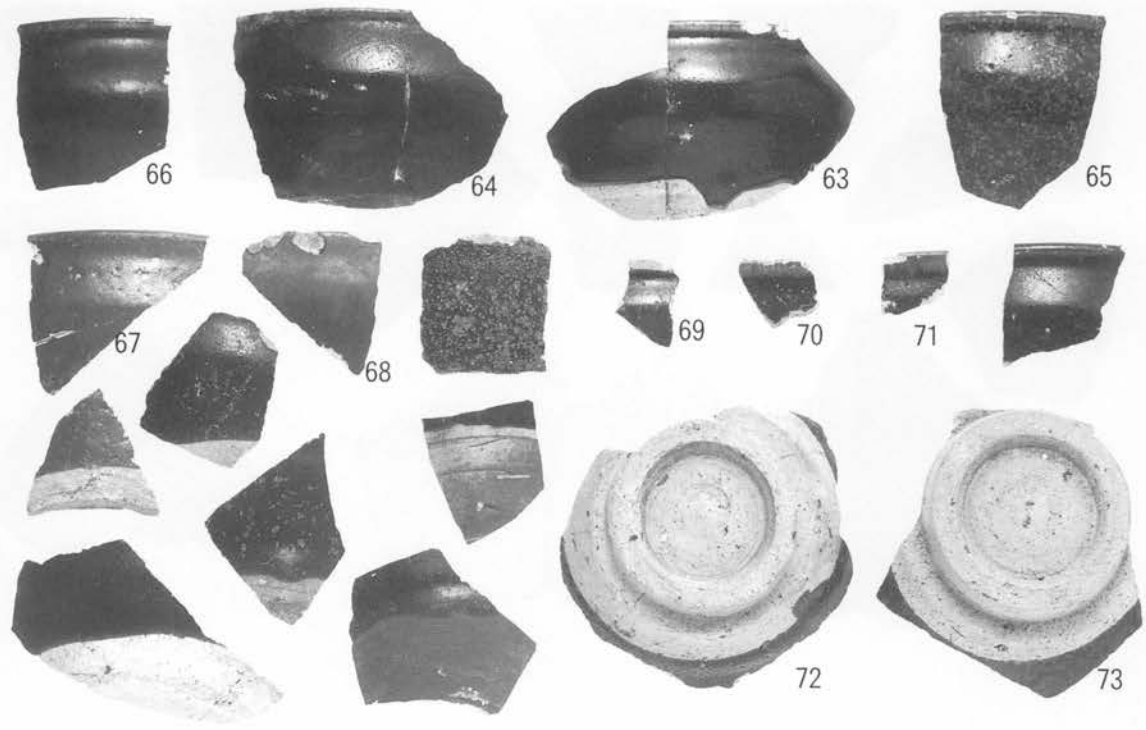
図版84



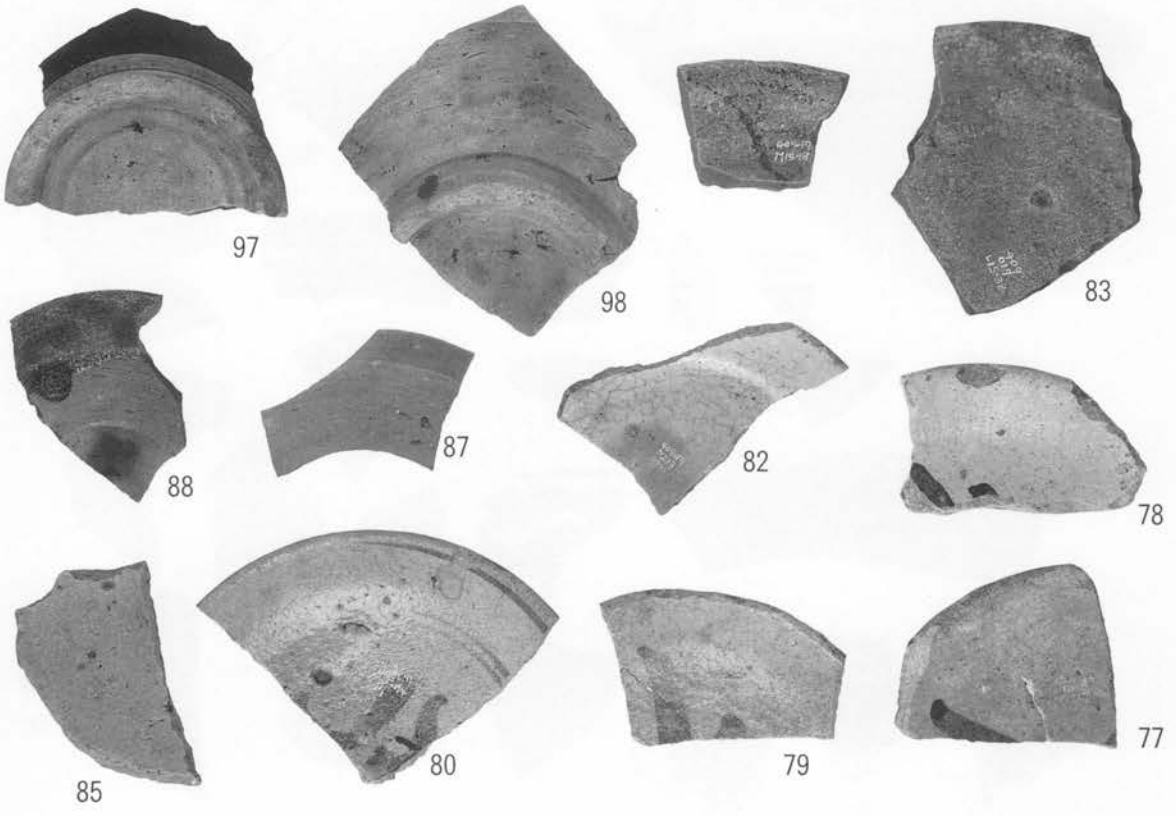
直縁皿・卸皿・鉢類



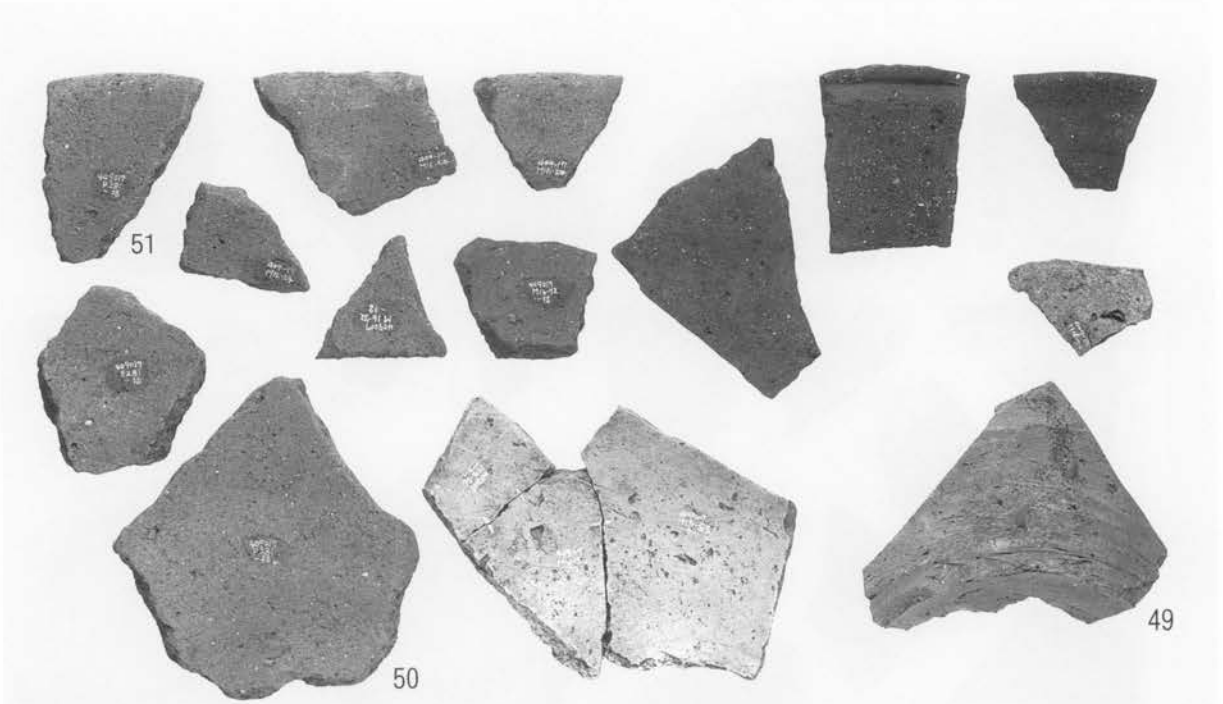
折縁皿・鉢・青磁



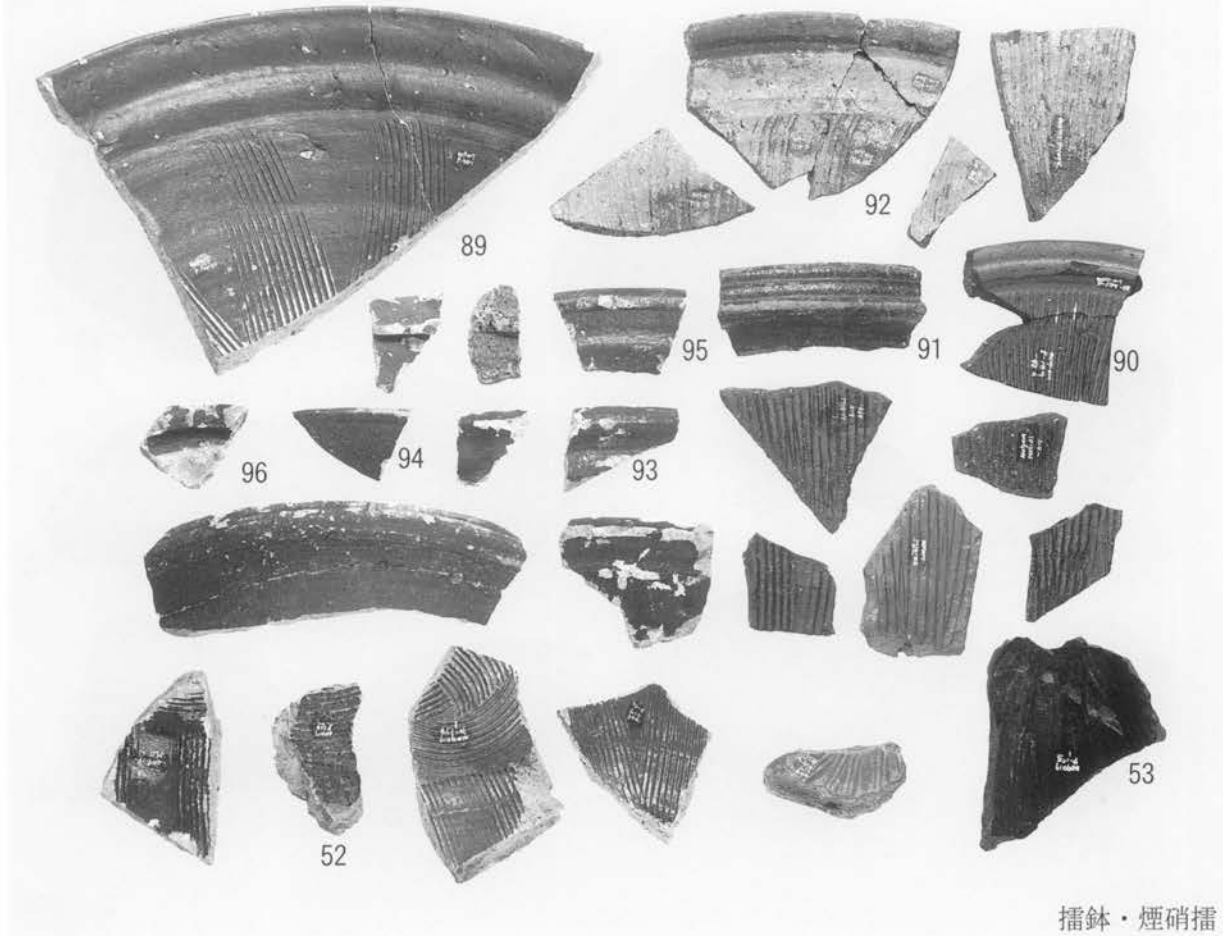
天目茶碗・端反碗



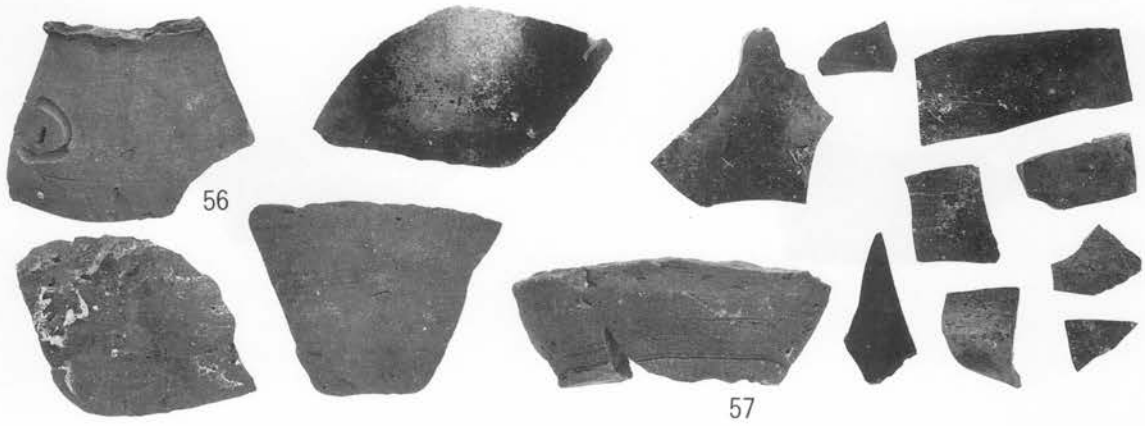
皿・鉢類



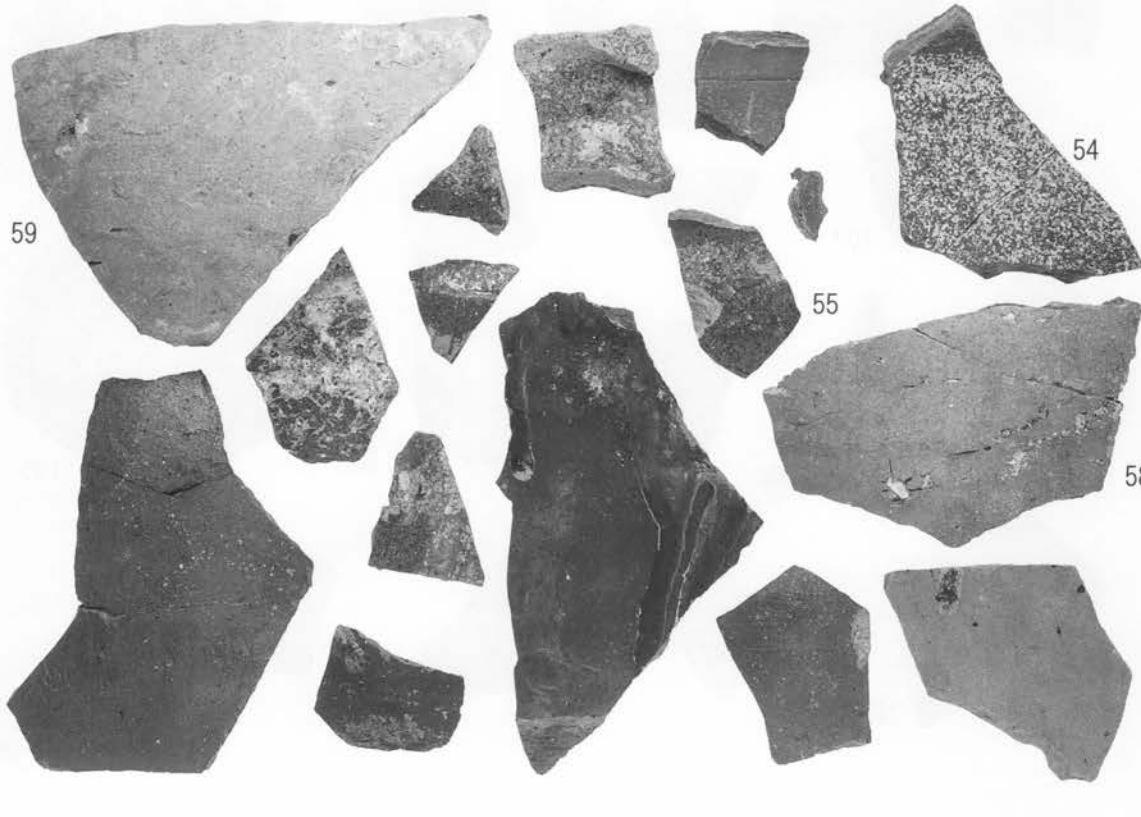
擂鉢



擂鉢・煙硝擂



壷

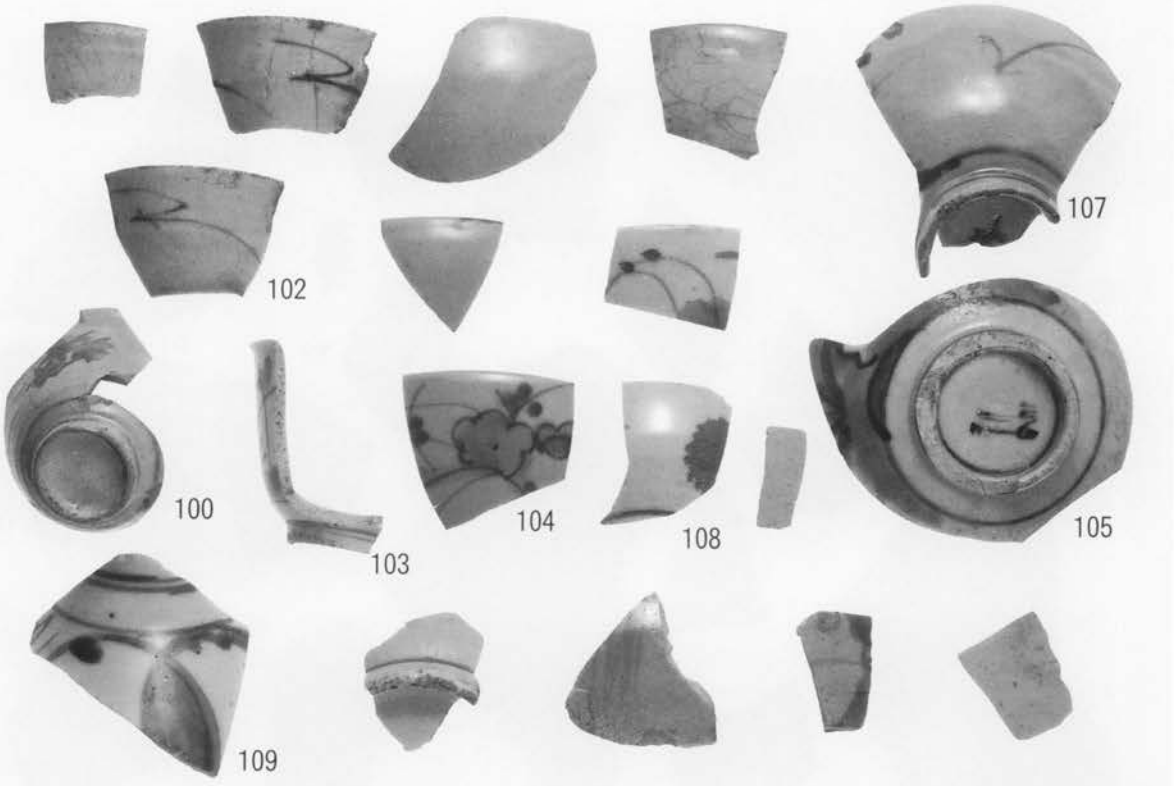


甕

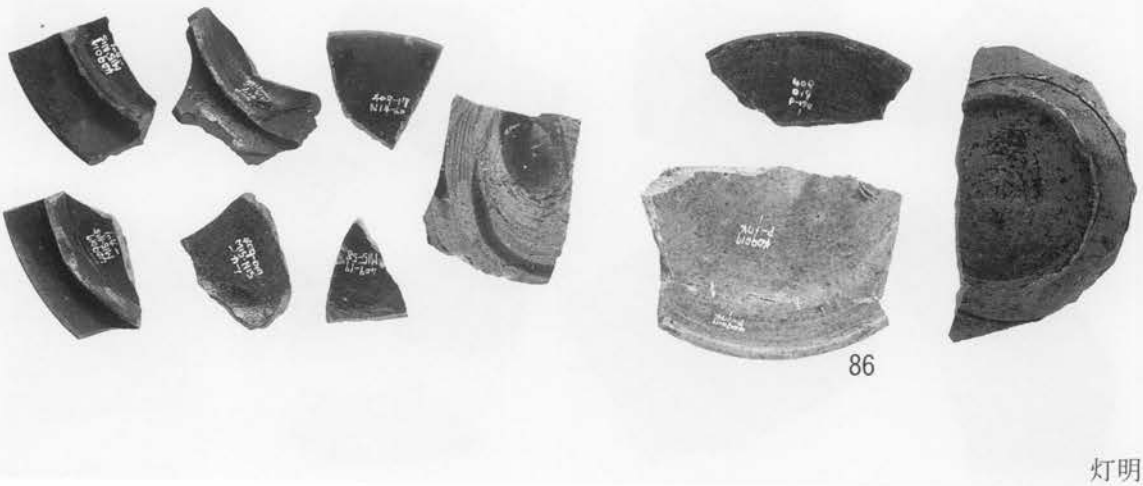
茶碗・徳利・香炉

74

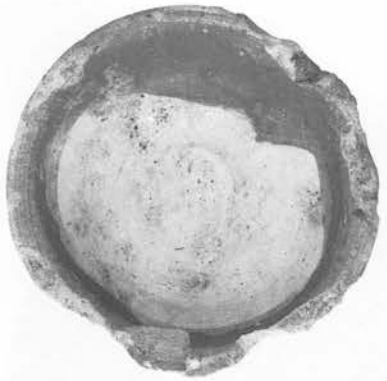
75



碗・小杯・徳利



灯明皿



仏供　28

合子

42

41

平碗　14

皿　81

花瓶　29

皿　84

土鈴

111

土鈴

112

皿　76

碗　106

1

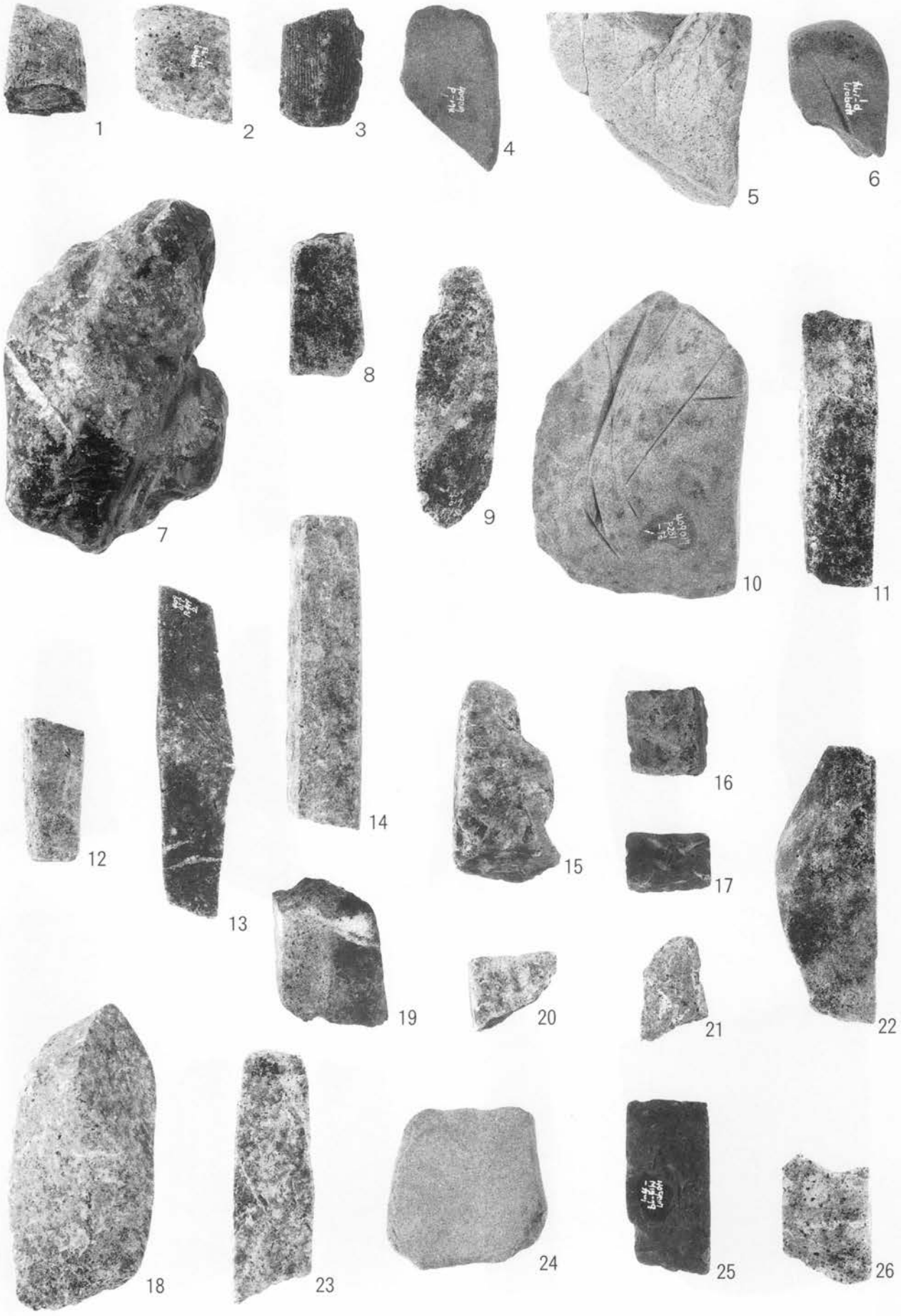
2

4

5

9

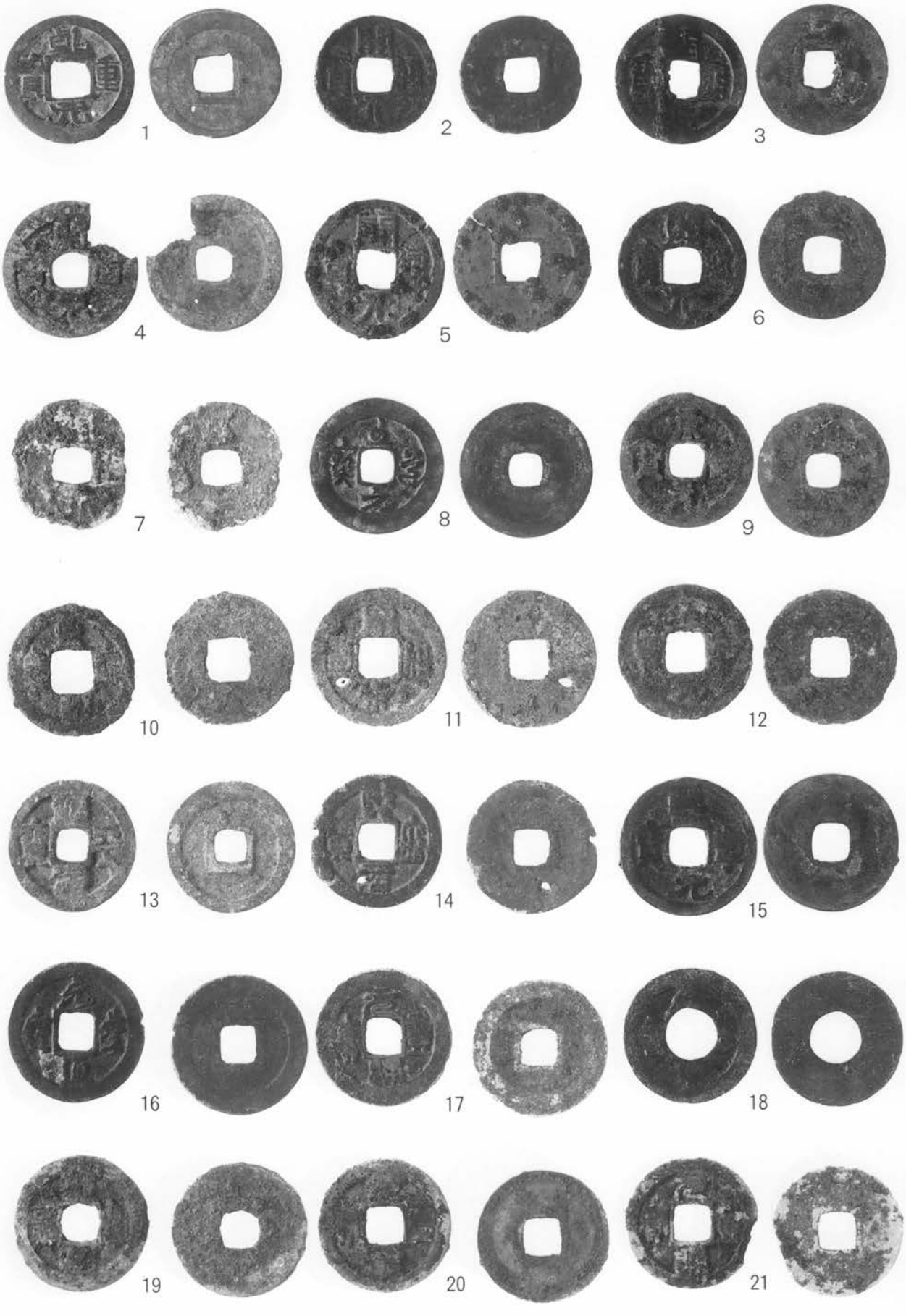
石製品



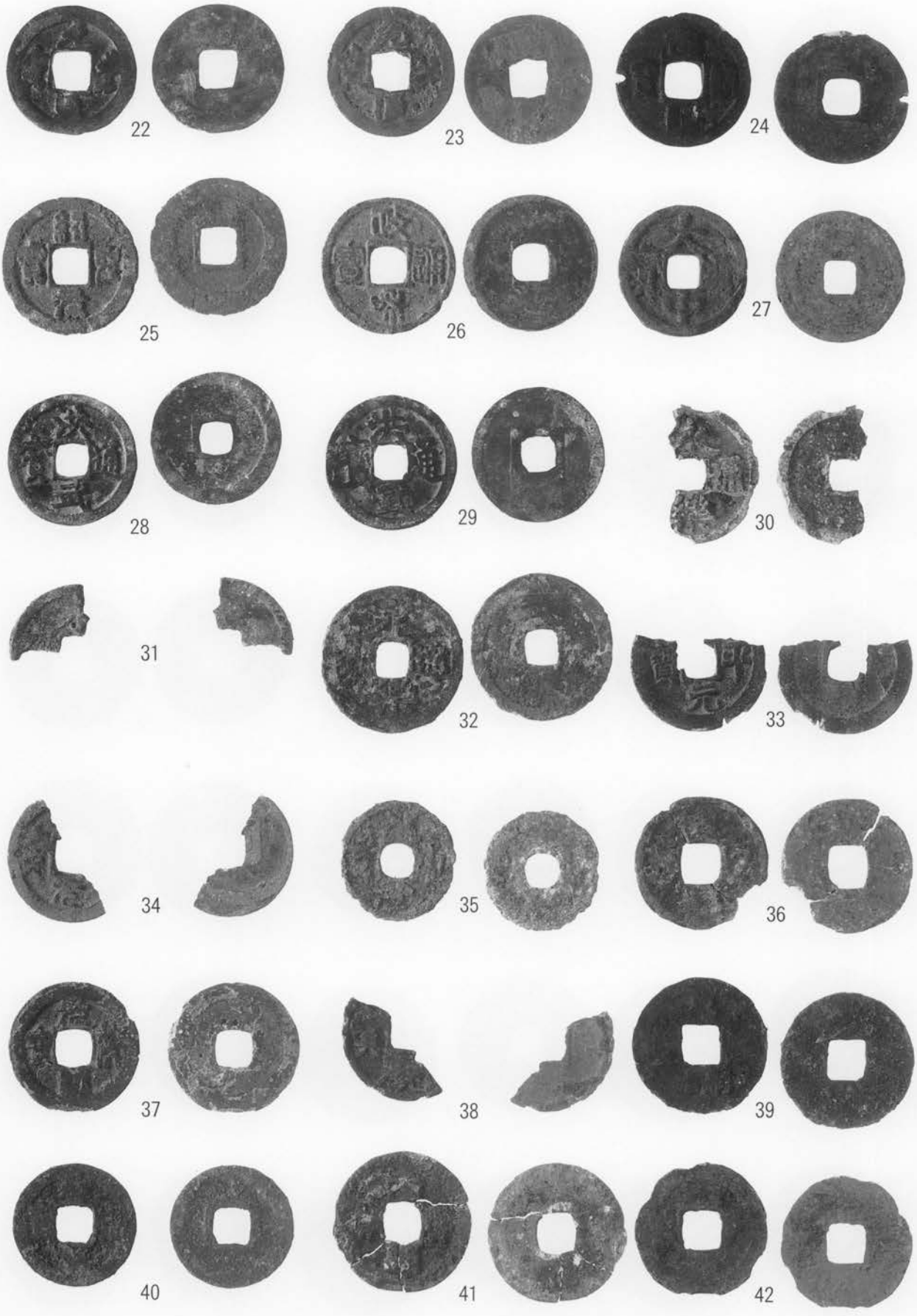
中近世砥石（1）

図版92

中近世砥石（2）

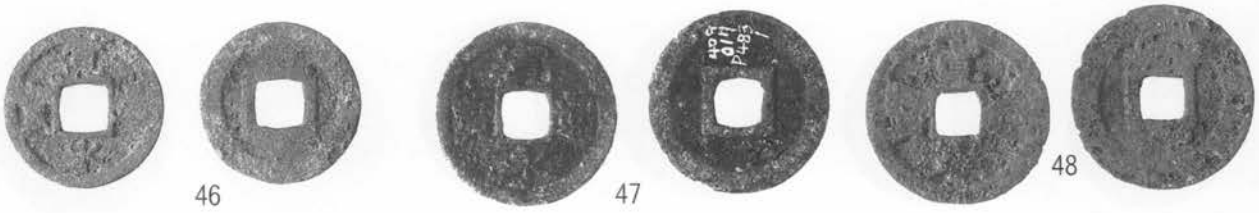


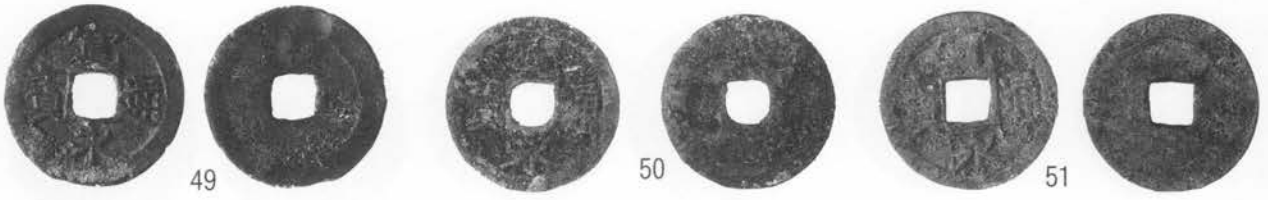
銭貨（1）



銭貨（2）

43 44 45

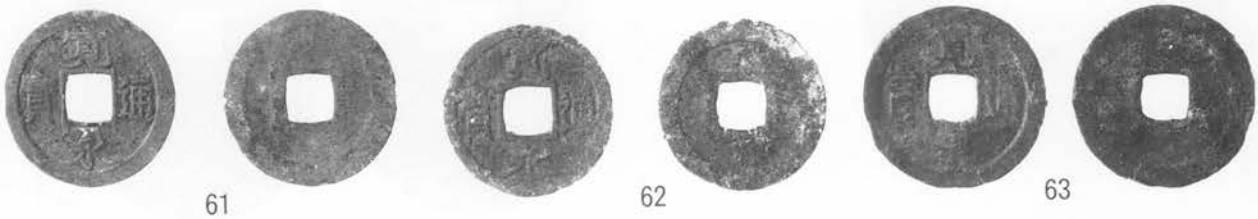

46 47 48

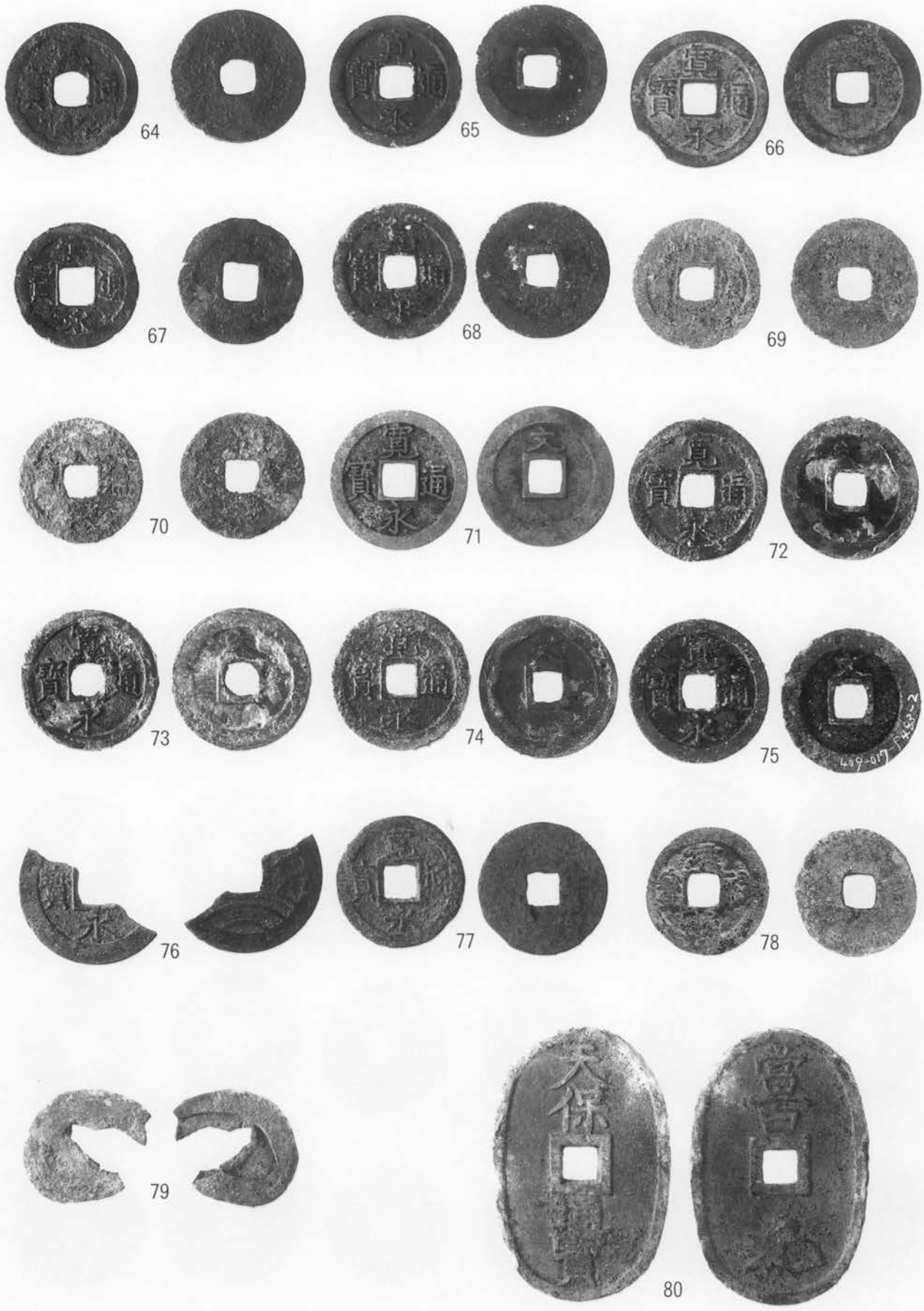

49 50 51

52 53 54

55 56 57

58 59 60


61 62 63


64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80

報告書抄録

ふりがな	くうこうなんぶこうぎょうだんちまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	空港南部工業団地埋蔵文化財調査報告書
副書名	芝山町古宿・上谷遺跡
巻次	1
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	320
編著者名	鳴田浩司、岡田光広
編集機関	財団法人千葉県文化財センター
所在地	〒284-0003　千葉県四街道市鹿渡809番地2　TEL043(422)8811
発行年月日	西暦1998年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
ふるじゅく　かみさく 古宿・上谷	ちばけんさんぶぐんしばやままち 千葉県山武郡芝山町 いわやまあざふるじゅく 岩山字古宿	12409	017	35度 43分 40秒	140度 24分 40秒	19840101～ 19900705	43,108	工業団地造成に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古宿・上谷	包蔵地	旧石器	石器集中地点 ６ブロック	ナイフ形石器、石刃、楔形石器、二次加工のある剥片、微細剥離痕のある剥片、剥片、砕片、石核、敲石、礫、接合資料	文化層は３枚に分かれ、主体はⅦ層上部からⅥ層下部にかけての第２文化層である。
	集落跡	縄文	竪穴住居跡　14軒 陥穴　17基 炉跡　２基 土坑　140基	縄文土器(早・前・中・後・晩期)、耳飾り、有孔円盤、土製円盤、土器片錘、石鏃、石鏃未成品、石錐、R剥片、楔形石器、打製石斧、磨製石斧、敲石、磨石、凹石、石皿、石棒、軽石	中期末の集落遺跡のほぼ全域を調査している。13軒の竪穴住居跡と140基以上の円形土坑群によって構成される。
	集落跡	古墳	竪穴住居跡　14軒	土師器・須恵器(５世紀末から７世紀初頭)、手捏ね土器、紡錘車、勾玉、丸玉、管玉、砥石、支脚	６世紀が主体。集落としては規模が小さい。
	墓域 屋敷跡	中近世	台地整形　１か所 掘立柱建物　12軒 地下式坑　17基 粘土貼土坑　11基 井戸　８基 火葬施設(墓)　８基 土坑(墓)　313基 溝　30条	カワラケ、火鉢、焙烙、カマド敷き、古瀬戸平碗、縁釉小皿、碗型鉢、折縁中皿、折縁深皿、盤類、直縁大皿、花瓶、卸皿、合子、天目茶碗、擂鉢、丸皿、常滑、渥美、青磁、瀬戸美濃陶磁器、肥前陶磁器、堺擂鉢、丹波擂鉢、砥石、五輪塔、宝篋印塔、臼、唐銭、北宋銭、明銭、寛永通寶、天保通寶、鉄滓	中世末期の岩山城に近接する地点の調査。中世末期においては火葬墓と粘土貼土坑を主体とする墓域と土壙墓を主体とし、多量の副葬品を埋納する墓域とが存在する。 近世初頭の掘立柱建物跡と屋敷を構成する小屋、作業場、井戸、土坑がセットとなって検出された。

千葉県文化財センター調査報告書第320集

空港南部工業団地埋蔵文化財調査報告書1

－山武郡芝山町古宿・上谷遺跡－

平成10年3月31日発行

編　　集　　財団法人　千葉県文化財センター

発　　行　　千　葉　県　企　業　庁

千葉市中央区長洲1－9－1

財団法人　千葉県文化財センター

四街道市鹿渡809－2

印　　刷　　株式会社　エリート印刷

千葉市中央区市場町6－8

電話　043－225－5881